

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第208集

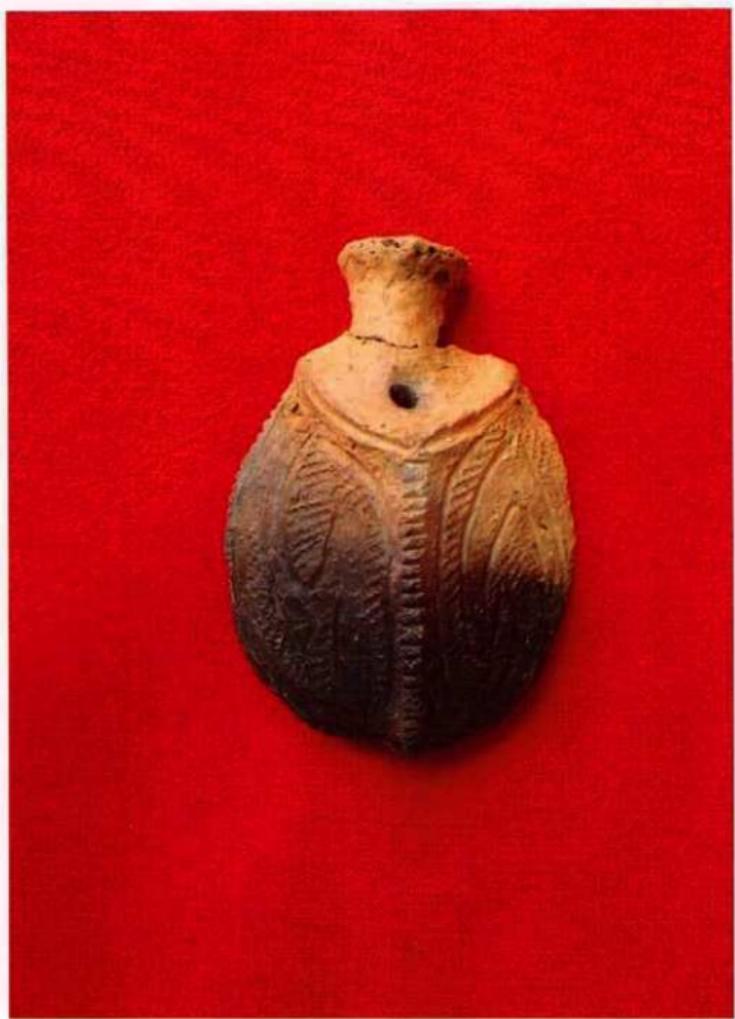
# 黒内VIII・黒内XIII遺跡発掘調査報告書

岩手地区広域農道整備関連遺跡発掘調査

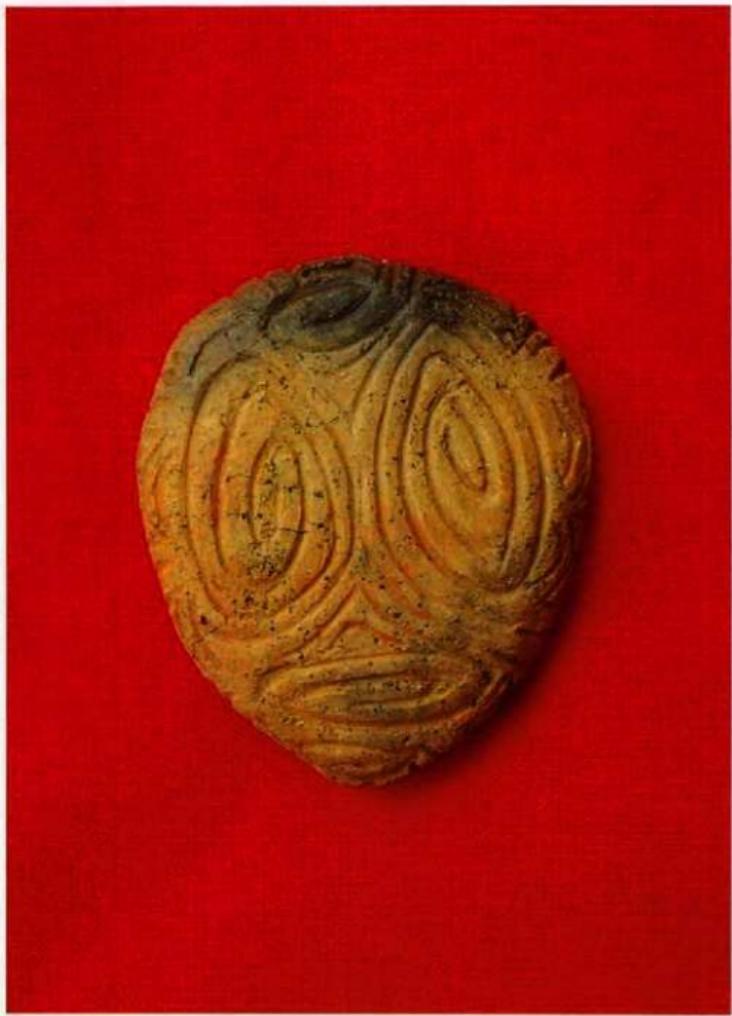
(財) 岩手県文化振興事業団  
埋蔵文化財センター



表カラー① 黒内 XIII 造跡全景(完振西方より空撮)



表カラー② 甲虫状土製品(黒内XIII遺跡MIII竪穴住居跡1号出土)



表カラー③ 人面付土版(黒内 XIII 遺跡 R II 竪穴住居跡 1号出土)



表カラー④ P II 穹穴住居跡1号(東方より)

# **黒内VIII・黒内XIII 遺跡発掘調査報告書**

**岩手地区広域農道整備関連遺跡発掘調査**

## 序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,600箇所に及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発に伴う社会資本の充実も重要な一施策であります。特に幹線道路網の整備は、産業経済開発の大動脈として、多方面から期待されるところであります。

このような埋蔵文化財の保護、保存と開発との調和も今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告の黒内畠・黒内畠遺跡は、七時雨山の山麓丘陵上に立地し、平成4年の発掘調査によって縄文時代の集落跡が発見されました。引き続き出土資料の整理をすすめ、ここに報告書として発刊するはこびとなりました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまで発掘調査及び報告書作成にご協力、ご援助を賜りました岩手北部土地改良事業所、岩手町教育委員会をはじめ関係各位に衷心より謝意を表します。

平成6年3月

財團法人 岩手県文化振興事業団

理事長 工 藤 巍

## 例　　言

- この報告書は、岩手郡岩手町黒内2地割字木谷内9-239ほかに所在する黒内Ⅶ遺跡と同黒内2地割字木谷内4-14ほかに所在する黒内Ⅹ遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
- 本遺跡の発掘調査は、岩手地区広域農道建設に伴う緊急発掘調査である。調査は岩手県盛岡地方振興局岩手北部土地改良事業所と岩手県教育委員会との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化センターが実施した。
- 黒内Ⅶ遺跡と黒内Ⅹ遺跡の岩手県遺跡台帳の遺跡番号と遺跡略号は、次のとおりである。  
黒内Ⅶ遺跡—遺跡番号 KE 06-0214 遺跡略号 KNVII-92  
黒内Ⅹ遺跡—遺跡番号 KE 06-0262 遺跡略号 KNXI-92
- 発掘調査期間および調査面積は次のとおりである。  
黒内Ⅶ遺跡—発掘調査期間 平成4年6月1日～7月31日  
発掘調査面積 700 m<sup>2</sup>  
黒内Ⅹ遺跡—発掘調査期間 平成4年8月1日～11月13日  
発掘調査面積 1300 m<sup>2</sup>
- 黒内Ⅶ遺跡・黒内Ⅹ遺跡の野外調査および室内整理は高橋正之・高橋英樹が担当した。
- 本報告書の執筆は黒内Ⅶ遺跡・黒内Ⅹ遺跡いずれも高橋正之が担当した。
- 分析や鑑定は次の方々に依頼した。  
炭化物分析 木村克則氏（岩手県立博物館）  
石質鑑定 佐藤二郎氏（長内水源工業株式会社）
- 遺跡の基準点測量は、株式会社吉田測量設計に依頼した。
- 野外調査では、次の関係機関や方々の御協力を賜った。  
岩手県盛岡地方振興局岩手北部土地改良事業所  
岩手町教育委員会
- 現地調査では、地元の方々の御協力をいただいた。
- 引用参考文献は巻末に一括してある。
- 本遺跡から出土した遺物及び調査にかかる資料は、岩手県立埋蔵文化財センターが保管している。

## 目 次

口絵

序

例言

### 黒内Ⅶ遺跡

### 〔本文〕

I. 調査に至る経過	3	(3)埋設土器遺構	44
II. 遺跡の位置と環境	3	(4)溝状遺構	48
1. 位置	3	2. 出土遺物	49
2. 地形	3	(1)土器	49
3. 遺跡及び周辺の地形	5	(2)土製品	109
4. 地質	5	(3)石器	111
5. 岩手町の遺物出土地と主な遺跡	15	(4)石製品	118
6. 基本層序	25	V. まとめ	139
III. 調査方法と室内整理	25	1. 遺跡の立地	139
1. グリッド設定	25	2. 遺構	140
2. 粗掘及び精査	27	(1)竪穴状遺構	140
3. 遺構の命名	27	(2)土坑	141
4. 実測図の作成	27	(3)埋設土器遺構	142
5. 写真撮影	27	(4)溝状遺構	142
6. 室内整理	27	3. 出土遺物	143
IV. 検出された遺構及び遺物	29	(1)土器	143
1. 検出遺構	29	(2)土製品	162
(I)竪穴状遺構	29	(3)石器	174
(2)土坑	36		

### 〔図 版〕

第1図 岩手町の立地

第5図 遺跡周辺の水系及び谷密度図

… 11

第2図 遺跡の位置

第6図 遺跡周辺の地形

… 13

第3図 遺跡周辺の標高区分図

第7図 岩手町の地質

… 14

第4図 遺跡周辺の起伏量図

第8図 周辺の遺跡

… 21

第9図 基本層序	26	第39図 造構外出土土器07	86
第10図 造構配置図	28	第40図 造構外出土土器08	87
第11図 CⅡ堅穴状造構1号		第41図 造構外出土土器09	88
DⅢ堅穴状造構1号	30	第42図 造構外出土土器10	89
第12図 FⅢ堅穴状造構	32	第43図 造構外出土土器11	90
第13図 FIV堅穴状造構1号	34	第44図 造構外出土土器12	91
第14図 FIV堅穴状造構2号	35	第45図 造構外出土土器13	92
第15図 BⅢ土坑1号・2号	37	第46図 造構外出土土器14	93
第16図 EⅢ土坑1号		第47図 造構外出土土器15	94
FⅢ土坑1号・2号	39	第48図 造構外出土土器16	95
第17図 FV土坑1号	41	第49図 造構外出土土器17	96
第18図 HVI土坑1号・2号	43	第50図 造構外出土土器18	97
第19図 IVI土坑1号	45	第51図 造構外出土土器19	98
第20図 IVI土坑1号出土遺物	46	第52図 造構外出土土器20	99
第21図 CIV埋設土器造構	47	第53図 土製品	110
第22図 溝状造構	48	第54図 出土石器(1)	119
第23図 造構外出土土器(1)	68	第55図 出土石器(2)	120
第24図 造構外出土土器(2)	69	第56図 出土石器(3)	121
第25図 造構外出土土器(3)	70	第57図 出土石器(4)	122
第26図 造構外出土土器(4)	71	第58図 出土石器(5)	123
第27図 造構外出土土器(5)	72	第59図 出土石器(6)	124
第28図 造構外出土土器(6)	73	第60図 出土石器(7)	125
第29図 造構外出土土器(7)	74	第61図 出土石器(8)	126
第30図 造構外出土土器(8)	75	第62図 出土石器(9)	127
第31図 造構外出土土器(9)	76	第63図 出土石器(10)	128
第32図 造構外出土土器(10)	77	第64図 出土石器(11)	129
第33図 造構外出土土器(11)	78	第65図 出土石器(12)	130
第34図 造構外出土土器(12)	79	第66図 石製品	131
第35図 造構外出土土器(13)	82	第67図 石器計測位置図	133
第36図 造構外出土土器(14)	83	第68図 黒内面遺跡土器	
第37図 造構外出土土器(15)	84	出土分布図	163
第38図 造構外出土土器(16)	85	第69図 土器分布図 1	164

第 70 図 土器分布図 2	165	第 75 図 土器分布図 7	170
第 71 図 土器分布図 3	166	第 76 図 土器分布図 8	171
第 72 図 土器分布図 4	167	第 77 図 土器分布図 9	172
第 73 図 土器分布図 5	168	第 78 図 土器分布図 10	173
第 74 図 土器分布図 6	169		

## 写真図版

写真図版 1 遺跡遺景	183	写真図版 17 遺構外出土土器(1)	199
写真図版 2 完掘全景	184	写真図版 18 遺構外出土土器(2)	200
写真図版 3 粗掘風景	185	写真図版 19 遺構外出土土器(3)	201
写真図版 4 CII 壺穴状遺構 1号		写真図版 20 遺構外出土土器(4)	202
DIII 壺穴状遺構 1号	186	写真図版 21 遺構外出土土器(5)	203
写真図版 5 FIII 壺穴状遺構 1号		写真図版 22 遺構外出土土器(6)	204
FIV 壺穴状遺構 1号		写真図版 23 遺構外出土土器(7)	205
FIV 壺穴状遺構 2号	187	写真図版 24 遺構外出土土器(8)	206
写真図版 6 BIII 土坑1号・2号・EIII 土坑1号		写真図版 25 遺構外出土土器(9)	207
FIII 土坑1号・2号・FV 土坑1号		写真図版 26 遺構外出土土器(10)	208
· I IV 土坑 1号	188	写真図版 27 遺構外出土土器(11)	209
写真図版 7 HVI 土坑 1号・2号	189	写真図版 28 遺構外出土土器(12)	210
写真図版 8 CIV 埋設土器遺構	190	写真図版 29 遺構外出土土器(13)	211
写真図版 9 HVI 滝状遺構	191	写真図版 30 遺構外出土土器(14)	212
写真図版 10 遺構外遺物検出状況	192	写真図版 31 遺構外出土土器(15)	213
写真図版 11 遺構外遺物検出状況	193	写真図版 32 遺構外出土土器(16)	214
写真図版 12 CIV 埋設土器	194	写真図版 33 遺構外出土土器(17)	215
写真図版 13 BIII 土坑 1号・2号		写真図版 34 遺構外出土土器(18)	216
DIII 壺穴状遺構出土遺物	195	写真図版 35 遺構外出土土器(19)	217
写真図版 14 EIII 土坑 1号・FIII 土坑 1号		写真図版 36 遺構外出土土器(20)	218
· 2号・FIV 壺穴状遺構 2号		写真図版 37 遺構外出土土器(21)	219
出土遺物	196	写真図版 38 遺構外出土土器(22)	220
写真図版 15 HVI 土坑 1号		写真図版 39 遺構外出土土器(23)	221
· 2号出土遺物	197	写真図版 40 遺構外出土土器(24)	222
写真図版 16 IVI 土坑 1号出土遺物	198	写真図版 41 遺構外出土土器(25)	223

写真図版 42 造構外出土土器⑥	224	写真図版 52 造構外出土石器(3)	234
写真図版 43 造構外出土土器⑦	225	写真図版 53 造構外出土石器(4)	235
写真図版 44 造構外出土土器⑧	226	写真図版 54 造構外出土石器(5)	236
写真図版 45 造構外出土土器⑨	227	写真図版 55 造構外出土石器(6)	237
写真図版 46 造構外出土土器⑩	228	写真図版 56 造構外出土石器(7)	238
写真図版 47 造構外出土土器⑪	229	写真図版 57 造構外出土石器(8)	239
写真図版 48 造構外出土土器⑫	230	写真図版 58 造構外出土石器(9)	240
写真図版 49 造構外出土土製品	231	写真図版 59 造構外出土石器⑩	241
写真図版 50 造構外出土石器(1)	232	写真図版 60 造構外出土石器⑪	242
写真図版 51 造構外出土石器(2)	233	写真図版 61 造構外出土石製品	243

## 黒内XII遺跡

## 〔本文〕

I. 調査に至る経過	249	VI. まとめ	399
II. 遺跡の位置と環境	249	1. 遺跡の立地	399
III. 調査方法と室内整理	251	2. 造構	399
1. グリッド設定	251	(1) 壊穴住居跡	399
2. 粗掘・精査	251	(2) 壊穴状造構	401
IV. 検出された造構及び遺物	255	(3) 土坑	401
1. 検出造構	255	(4) 積式炉について	403
(1) 壊穴住居跡	255	3. 出土遺物	405
(2) 壊穴状造構	337	(1) 土器	405
(3) 土坑	348	(2) 甲虫を模したと思われる土製品	416
(4) 埋設土器造構	353	(3) 石器	439
V. 造構外出土遺物	365	(附編) 黒内XII遺跡出土遺物の 科学的調査	446
(1) 土器	365		
(2) 石器	394		

## 〔図版〕

第1図 遺跡位置図	247	第11図 KⅢ壊穴住居跡1号出土遺物 土器	265
第2図 周辺の地形	248	第12図 KⅢ壊穴住居跡1号出土遺物 石器	266
第3図 基本層序	250	第13図 KIV壊穴住居跡1号	270
第4図 造構配置図	253	第14図 KIV壊穴住居跡1号出土遺物 土器(1)	271
第5図 JⅡ壊穴住居跡1号	258	第15図 KIV壊穴住居跡1号・2号出土 遺物土器(2)	272
第6図 JⅡ壊穴住居跡1号・JⅢ壊穴住 居跡1号出土遺物土器	259	第16図 KIV壊穴住居跡1号出土遺物石器(1)、 LIV壊穴住居跡1号出土遺物	273
第7図 JⅡ壊穴住居跡1号出土遺物 石器	260	第17図 KIV壊穴住居跡1号出土遺物石 器(2)	274
第8図 JⅢ壊穴住居跡1号	261		
第9図 JⅢ壊穴住居跡1号・JIV壊穴住 居跡1号出土遺物 石器	262		
第10図 KⅢ壊穴住居跡1号	264		

第 18 図 KIV 穹穴住居跡 2 号	276	土器	304
第 19 図 LIV 穹穴住居跡 1 号	278	第 37 図 P II 、 P III 穹穴住居跡 1 号出土 遺物石器	305
第 20 図 M III 穹穴住居跡 1 号・ 2 号	283	第 38 図 P III 穹穴住居跡 1 号 P III 土坑 1 ・ 2 ・ 3 号	308
第 21 図 M III 穹穴住居跡 1 号 出土遺物土器	284	第 39 図 Q IV 穹穴住居跡 1 号 Q IV 土坑 1 ・ 2 号	311
第 22 図 M III 穹穴住居跡 1 号 出土遺物土製器	285	第 40 図 Q IV 穹穴住居跡 1 号出土遺物 土器(1)	312
第 23 図 L IV 穹穴住居跡 1 号、 M III 穹穴住居跡 1 号遺物	286	第 41 図 Q IV 穹穴住居跡 1 号出土遺物 土器(2)	313
第 24 図 M III 穹穴住居跡 2 号出土遺物 土器	287	第 42 図 Q IV 穹穴住居跡 1 号出土遺物 石器(1)	314
第 25 図 M III 穹穴住居跡 2 号出土遺物 土器	288	第 43 図 Q IV 穹穴住居跡 1 号出土遺物 石器(2)	315
第 26 図 M III 穹穴住居跡 1 号 ・ 2 号出土遺物石器	289	第 44 図 Q IV 穹穴住居跡 1 号出土遺物 石器(3)	316
第 27 図 N III 穹穴住居跡 1 号	293	第 45 図 Q IV 穹穴住居跡 1 号出土遺物 石器(4)	317
第 28 図 N III 穹穴住居跡 1 号 ・ 2 号出土遺物土器	294	第 46 図 R II 穹穴住居跡 1 号	320
第 29 図 N III 穹穴住居跡 1 号出土遺物 石器(1)	295	第 47 図 R II 穹穴住居跡 1 号出土遺物 土器	321
第 30 図 N III 穹穴住居跡 1 号出土遺物 石器(2)	296	第 48 図 R II 穹穴住居跡 1 号出土 土版	323
第 31 図 N III 穹穴住居跡 1 号出土遺物 石器(3)	297	第 49 図 R II 穹穴住居跡 1 号出土遺物 石器	325
第 32 図 N III 穹穴住居跡 1 号出土遺物 石器(4)	298	第 50 図 R III 穹穴住居跡 1 号	328
第 33 図 N III 穹穴住居跡 2 号	300	第 51 図 R III 穹穴住居跡 1 号出土遺物 土器	329
第 34 図 N III 穹穴住居跡 2 号出土遺物 土器	301	第 52 図 R III 穹穴住居跡 1 号出土遺物 石器	330
第 35 図 P II 穹穴住居跡 1 号	303	第 53 図 S IV 穹穴住居跡 1 号	333
第 36 図 P II 穹穴住居跡 1 号出土遺物			

第 54 図 SIV 壺穴住居跡 1 号出土遺物 土器 ..... 334	第 72 図 造構外出土遺物土器(8) ..... 380
第 55 図 SIV 壺穴住居跡 1 号出土遺物 土製品 ..... 335	第 73 図 造構外出土遺物土器(9) ..... 381
第 56 図 SIV 壺穴住居跡 1 号出土遺物 石器 ..... 336	第 74 図 造構外出土遺物土器(10) ..... 382
第 57 図 JIV 壺穴状造構 1 号 ..... 338	第 75 図 造構外出土遺物土器(11) ..... 383
第 58 図 JIV 壺穴状造構 1 号出土遺物 土器 ..... 339	第 76 図 造構外出土遺物土器(12) ..... 384
第 59 図 LIII 壺穴状造構 1 号 ..... 341	第 77 図 造構外出土遺物土器(13) ..... 385
第 60 図 UVIV・VIV 壺穴状造構 1 号 ..... 344	第 78 図 造構外出土遺物土器(14) ..... 386
第 61 図 UVIV 壺穴状造構 1 号出土遺物 土器 ..... 345	第 79 図 造構外出土遺物土器(15) ..... 387
第 62 図 UVIV 壺穴状造構 1 号出土遺物 石器(1) ..... 346	第 80 図 造構外出土遺物土器(16) ..... 388
第 63 図 UVIV 壺穴状造構 1 号、 VIV 壺穴状造構 1 号出土遺物 石器(2) ..... 347	第 81 図 造構外出土遺物石器(1) ..... 396
第 64 図 MII 埋設土器造構 ..... 354	第 82 図 造構外出土遺物石器(2) ..... 397
第 65 図 造構外出土遺物土器(1) ..... 373	第 83 図 複式炉模式図 ..... 404
第 66 図 造構外出土遺物土器(2) ..... 374	第 84 図 甲虫を模した土製品 ..... 416
第 67 図 造構外出土遺物土器(3) ..... 375	第 85 図 黒内廻遺跡土器出土分布図 (グリット毎土器分布図) ..... 417
第 68 図 造構外出土遺物土器(4) ..... 376	第 86 図 土器分布図 1 ..... 419
第 69 図 造構外出土遺物土器(5) ..... 377	第 87 図 土器分布図 2 ..... 421
第 70 図 造構外出土遺物土器(6) ..... 378	第 88 図 土器分布図 3 ..... 423
第 71 図 造構外出土遺物土器(7) ..... 379	第 89 図 土器分布図 4 ..... 425
	第 90 図 土器分布図 5 ..... 427
	第 91 図 土器分布図 6 ..... 429
	第 92 図 土器分布図 7 ..... 431
	第 93 図 土器分布図 8 ..... 433
	第 94 図 土器分布図 9 ..... 435
	第 95 図 土器分布図 10 ..... 437

### 〔写真図版〕

写真図版 1 黒内廻遺跡完掘状況空撮 ..... 453	写真図版 4 〈南西方向〉 ..... 455
写真図版 2 調査区遠景(西方向) 近景(南西方向) ..... 454	写真図版 4 JII 壺穴住居跡 1 号、 KIII 壺穴住居跡 1 号 ..... 456
写真図版 3 調査区雜物除去風景	写真図版 5 KIV 壺穴住居跡 1 号 ..... 457

写真図版 6	KIV 竪穴住居跡 2 号、 LIV 竪穴住居跡 1 号 ..... 458	JIII 竪穴住居跡 1 号出土遺物 土器 ..... 476	
写真図版 7	MIII 竪穴住居跡 1 号、 2 号 ..... 459	写真図版 25	KIII 竪穴住居跡 1 号出土遺物 土器 ..... 477
写真図版 8	NIII 竪穴住居跡 1 号 ..... 460	写真図版 26	KIV 竪穴住居跡 1 号出土遺物 土器(1) ..... 478
写真図版 9	PII 竪穴住居跡 1 号(1) ..... 461	写真図版 27	KIV 竪穴住居跡 1 号出土遺物 土器(2) ..... 479
写真図版 10	PII 竪穴住居跡 1 号(2) ..... 462	写真図版 28	KIV 竪穴住居跡 1 号出土遺物 土器(3) ..... 480
写真図版 11	PIII 竪穴住居跡 1 号 ..... 463	写真図版 29	KIV 竪穴住居跡 1 号出土遺物 土器(4) ..... 481
写真図版 12	QIV 竪穴住居跡 1 号 ..... 464	写真図版 30	LIV 竪穴住居跡 1 号出土遺物 土器 ..... 482
写真図版 13	RII 竪穴住居跡 1 号 ..... 465	写真図版 31	MIII 竪穴住居跡 1 号出土遺物 土器 ..... 483
写真図版 14	RIII 竪穴住居跡 1 号 · SIV 竪穴住居跡 1 号 ..... 466	写真図版 32	MIII 住居跡 1 号出土遺物 甲虫状土製品 ..... 484
写真図版 15	SIV 竪穴住居跡 1 号遺物 出土状況 ..... 467	写真図版 33	MIII 竪穴住居跡 2 号出土遺物 土器(1) ..... 485
写真図版 16	VIV 竪穴状遺構 1 号 · JIV 竪穴状遺構 1 号 ..... 468	写真図版 34	MIII 竪穴住居跡 2 号出土遺物 土器(2) ..... 486
写真図版 17	LIII 竪穴状遺構 1 号 · NIII 竪穴住居跡 2 号 ..... 469	写真図版 35	NIII 竪穴住居跡 1 号出土遺物 土器(1) ..... 487
写真図版 18	UVIV 竪穴状遺構 1 号 · 調査区中央住居跡群 ..... 470	写真図版 36	NIII 竪穴住居跡 1 号出土遺物 土器(2) ..... 488
写真図版 19	調査区南東、 東寄り住居跡群 ..... 471	写真図版 37	PII 竪穴住居跡 1 号出土遺物 土器 ..... 489
写真図版 20	LIII 土坑 1 号、PIII 土坑 1 号、2 号、3 号、QIV 土坑 1 号、2 号 ..... 472	写真図版 38	QIV 竪穴住居跡 1 号出土遺物 土器(1) ..... 490
写真図版 21	SIV 土坑 1 号、2 号、 MII 埋設土器遺構 ..... 473	写真図版 39	QIV 竪穴住居跡 1 号出土遺物 土器(2) ..... 491
写真図版 22	PII、QIV、 JII 竪穴住居跡 ..... 474		
写真図版 23	KIII、KIV 1 号、 RII 1 号竪穴住居跡 ..... 475		
写真図版 24	JII 竪穴住居跡 1 号、		

写真図版 40	R II 竪穴住居跡 1 号出土遺物 土器 ..... 492	写真図版 64	遺構外出土遺物 土器00... 516
写真図版 41	R II 竪穴住居跡 1 号出土遺物 土版 ..... 493	写真図版 65	J II. J III 竪穴住居跡 1 号出土 遺物石器 ..... 517
写真図版 42	R III 竪穴住居跡 1 号出土遺物 土器 ..... 494	写真図版 66	J IV 竪穴状遺構 1 号、K III 竪穴住居跡 1 号出土遺物 石器 ..... 518
写真図版 43	S IV 竪穴住居跡 1 号出土遺物 土器(1) ..... 495	写真図版 67	K IV 竪穴住居跡出土遺物 石器(1) ..... 519
写真図版 44	S IV 竪穴住居跡 1 号出土遺物 土器(2) ..... 496	写真図版 68	K IV 竪穴住居跡出土遺物 石器(2) ..... 520
写真図版 45	S IV 竪穴住居跡 1 号出土遺物 土製品 ..... 497	写真図版 69	L IV. M III 竪穴住居 跡 1 号出土遺物石器 ..... 521
写真図版 46	J IV 竪穴状遺構出土遺物 土器 ..... 498	写真図版 70	M III 竪穴住居跡 2 号、 N II 竪穴住居跡 1 号出土遺物 石器(1) ..... 522
写真図版 47	U IV 竪穴状遺構 1 号出土遺物 土器 ..... 499	写真図版 71	N III 竪穴住居跡 1 号出土遺物 石器(2) ..... 523
写真図版 48	M II 埋設土器 ..... 500	写真図版 72	N III 竪穴住居跡 1 号出土遺物 石器(3) ..... 524
写真図版 49	遺構外出土遺物 土器(1)... 501	写真図版 73	P II. P III 竪穴住居跡 1 号出土 遺物石器 ..... 525
写真図版 50	遺構外出土遺物 土器(2)... 502	写真図版 74	Q IV 竪穴住居跡 1 号出土遺物 石器(1) ..... 526
写真図版 51	遺構外出土遺物 土器(3)... 503	写真図版 75	Q IV 竪穴住居跡 1 号出土遺物 石器(2) ..... 527
写真図版 52	遺構外出土遺物 土器(4)... 504	写真図版 76	Q IV 竪穴住居跡 1 号出土遺物 石器(3) ..... 528
写真図版 53	遺構外出土遺物 土器(5)... 505	写真図版 77	R II 竪穴住居跡 1 号、R III 竪穴住居跡 1 号出土遺物 石器 ..... 529
写真図版 54	遺構外出土遺物 土器(6)... 506	写真図版 78	R III. S IV 竪穴住居跡 1 号 出土遺物石器(1) ..... 530
写真図版 55	遺構外出土遺物 土器(7)... 507		
写真図版 56	遺構外出土遺物 土器(8)... 508		
写真図版 57	遺構外出土遺物 土器(9)... 509		
写真図版 58	遺構外出土遺物 土器00... 510		
写真図版 59	遺構外出土遺物 土器01... 511		
写真図版 60	遺構外出土遺物 土器02... 512		
写真図版 61	遺構外出土遺物 土器03... 513		
写真図版 62	遺構外出土遺物 土器04... 514		
写真図版 63	遺構外出土遺物 土器05... 515		

写真図版 79 UIV堅穴状遺構1号出土遺物 石器(1) .....	531	写真図版 85 倍田遺跡を含む黒内Ⅶ 遺跡周辺の地形 .....	537
写真図版 80 UIV堅穴状遺構1号出土遺物 石器(2) .....	532	写真図版 86 黒内Ⅶ遺跡周辺の地形（倍田遺 跡方向より空撮） .....	538
写真図版 81 VIV堅穴状遺構1号、 遺構外出土遺物 石器(1) .....	533	写真図版 87 黒内Ⅷ遺跡周辺の地形 (南東方向より) .....	539
写真図版 82 遺構外出土遺物石器(2).....	534	写真図版 88 木内川周辺の地形 (南東方向より) .....	540
写真図版 83 遺構外出土遺物石器(3).....	535	写真図版 89 黒内Ⅸ遺跡を含む木内川 流域の地形（南西方向 より） .....	541
写真図版 84 黒内Ⅹ遺跡周辺地形 (南東方向より空撮) .....	536		

# 黒内 VIII 遺跡

遺跡台帳番号 K E 06-0214  
調査略号 K NVIII-92  
調査面積 700m<sup>2</sup>  
調査期間 平成4年6月1日～7月31日  
調査担当者 主任文化財専門調査員 高橋 正之  
期限付専門職員 高橋 英樹

## I. 調査に至る経過

岩手町・西根町・松尾村を結ぶ県営岩手地区広域農道整備事業は、農業経営の安定と向上を目的に昭和55年に事業化された。この事業における埋蔵文化財関連遺跡の取扱いについて盛岡地方振興局岩手北部土地改良事務所と県教育委員会事務局文化課との協議が行われ、黒内Ⅶ遺跡・黒内ⅩII遺跡については、岩手県教育委員会の調整のうえ、岩手県文化振興事業団の委託事業とした。これにより、当埋蔵文化財センターは平成4年4月1日付け委託契約にもとづき、調査に着手することとした。

## II. 遺跡の位置と環境

### 1. 位置（第1図）

黒内Ⅶ遺跡は、岩手郡岩手町黒内2地割字木谷内9-239ほかに、黒内ⅩII遺跡は同黒内2地割字木谷内4-14ほかに所在し、東日本旅客鉄道東北本線沼宮内駅の西北西約9.5km、岩手町一方井の中心部から北西約4kmに位置している。地形図上では、国土地理院発刊の5万分1地形図NJ-54-13-13沼宮内（盛岡13号）の図幅に含まれる。

黒内Ⅶ遺跡・黒内ⅩII遺跡の所在する岩手町は、昭和30年7月に沼宮内町を中心にして川口村・一方井村・御堂村の一町三村が合併して出来た町で、岩手郡の北部に位置し、北は西岳を境として馬瀬川流域の二戸郡一戸町に、東は葛巻町に、南は玉山村に、西は西根町に接している。

### 2. 地形（第3・4・5図）

岩手町は岩手郡の北部にあって、東部に北上山地が連なり、北部、西部、南部を東日本火山帯に属する七時雨山、八幡平、岩手山（最高峰は東岩手山の薬師岳2041m）の連峰によって取り巻かれた凹地帯で、この両山系を面して北の西岳山麓の御堂付近に端を発した北上川が横沢川・大坊川・江刈内川・丹藤川・古館川・一方井川・外山川等の町内の諸河川を逐次合流して名実ともに大動脈北上川となって盛岡へ流下している。

地形区を大まかに分類すると、本図幅の北西～南東部の北上山地系は帶状に分布する粘板岩・チャート・砂岩（北部型古生界）及びこれに貫入する花崗岩を切って形成された標高400m～600mの起伏山地及び塙森山（944m）、毛無森（869m）、宇利峰（894m）、笠ヶ岳（828m）の比較的起伏量のある山塊から成り、北部は七時雨山より放射線状に走行する水系によっ



第1図 岩手町の位置

て刻まれた山麓丘陵が主体を占め、起伏量 70 ~ 100 m と南の丘陵と比較して幾分大きくなっている。これに対して一方井川を境に南の丘陵（土川丘陵）はすべて北西～南東方向に、一定の間隔をおいて平行に走る水系をもち、七時雨山からは独立した地形を呈している。この土川丘陵は起伏量 50 ~ 60 m 以下と非常に低起伏で標高 270 ~ 280 m の定高性がみられる。また本図幅の中央部を北から南に流れる北上川とその支流の横沢川・大坊川・江刈内川・丹藤川・古館川・一方井川・外山川等の諸河川流域に形成された細長く平坦な段丘及び氾濫原（谷底平野）そして丘陵間、段丘上に残存的に残る幾つかの山体（送仙山 471 m、高山 430 m、丹谷山 392 m）などから構成されている。

### 3. 連跡及び周辺の地形（第 6 図）

黒内<sup>唯</sup>・黒内<sup>唯</sup>両遺跡は東日本火山帯に属する七時雨山より放射状に走向する水系（木谷内川等の小河川）によって刻まれた山麓丘陵上に立地している。地形的には黒内<sup>唯</sup>・黒内<sup>唯</sup>遺跡いずれも山麓丘陵の先端部平坦面及び東側の緩やかに傾斜する面で構成され、東方向に高山、東南方向に丹谷山、南端方向に送仙山といった残丘的な山体が孤立して崛起している。

調査区域の現況は、黒内<sup>唯</sup>遺跡は調査区域のほとんどが山林原野で標高は 333 m ~ 340 m、黒内<sup>唯</sup>遺跡は西側平坦面が牧草地・東側斜面が山林原野で、標高は 337 m ~ 338 m である。

### 4. 地質（第 7 図）

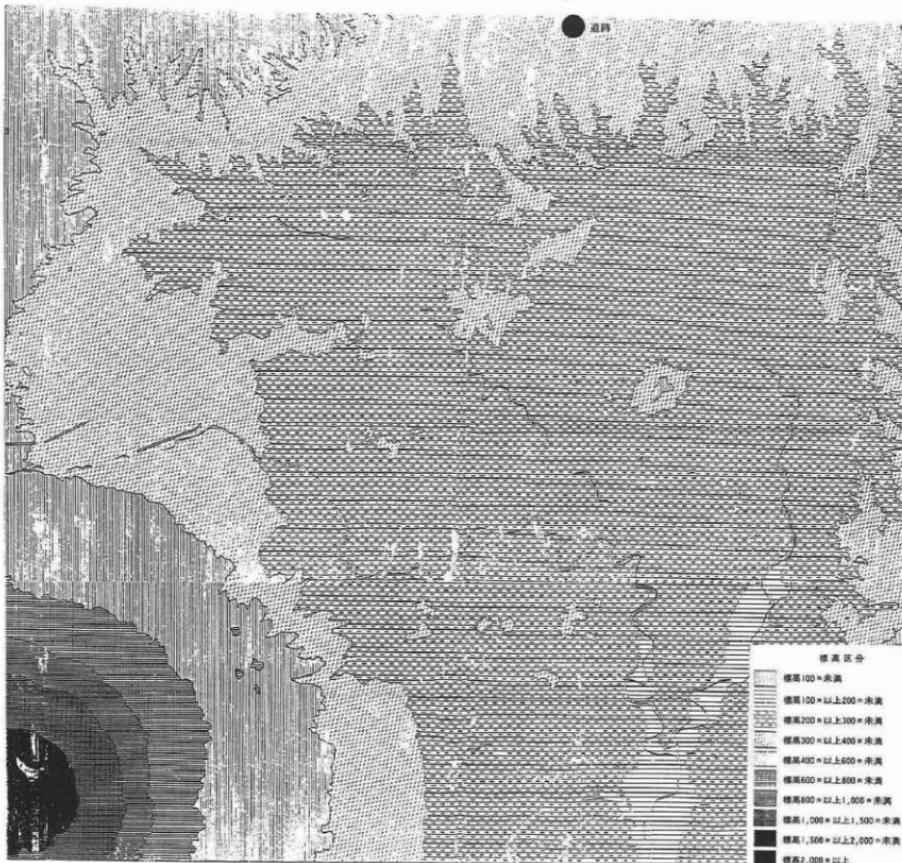
岩手町の地質を構成する主なものは古い方から基盤の古生層・熱変成岩・深成岩（花崗岩、閃緑岩、はんれい岩、輝石を含む）・第三紀層（頁岩、凝灰岩、砂岩、れき岩を含む）・第三紀安山岩類・火山碎屑物・第四紀層の段丘砂礫層・溶結凝灰岩層・火山灰層などであり、以下順をおって概説する。

古生層は粘板岩・チャート・輝緑凝灰岩・砂岩・石灰岩などから成り、御堂付近に端を発する北上川の東側一体の北上山地に広く分布し、沼宮内付近では褶曲によって地層が急傾斜（70° ~ 80°）してその上に水平に近い状態で新第三紀層が重なって不整合関係が観察される。熱変成岩類は接触変成岩とも言われ、本岩の多くは古生層が深成岩類の熱変作用（接触作用）を受けて生成したものである。岩手町では北山形や南山形に広く分布し、とくに粘板岩は黒雲母ホルンフェルスとなり、砂岩・チャート質岩類も黒雲母を生じて片麻岩に似たような岩類にしばしば変化している。

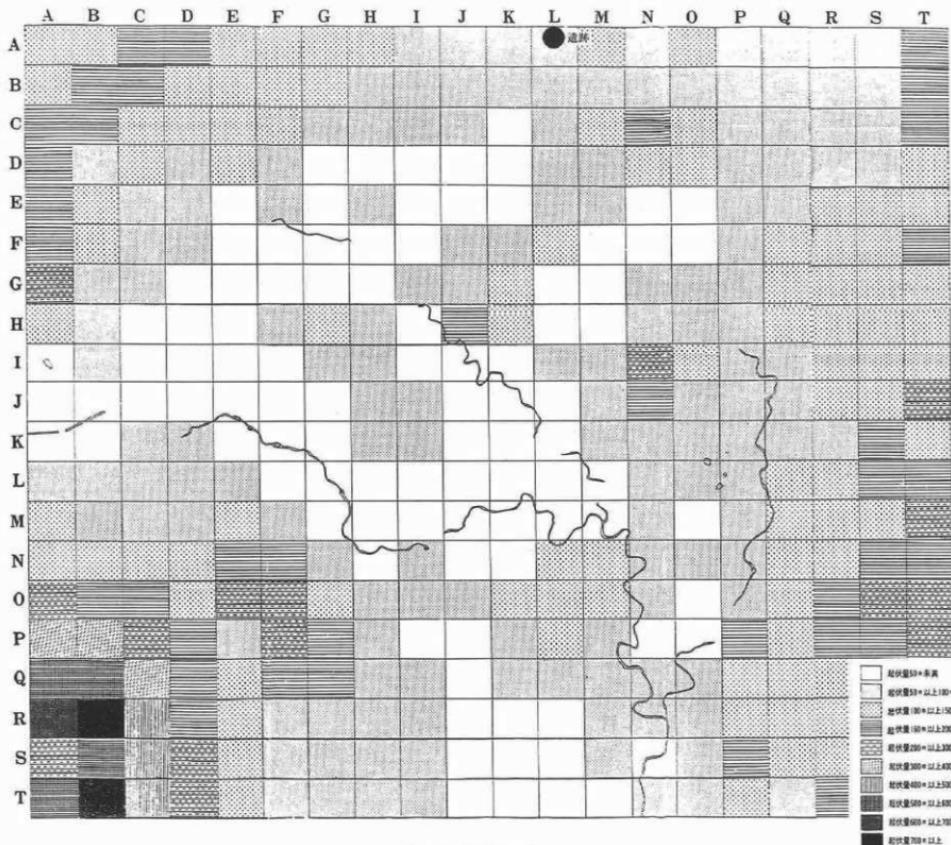
深成岩類のうち、はんれい岩は白糸の北部や一戸町の一部にも分布し、灰色～黒色の粗粒な深成岩いわゆる黒御影と呼ばれる岩類である。花崗岩は岩手町では丹藤川の流域に多く産出されるが、沼宮内の西側や北山形の日神子南部付近では小露出が見られる。



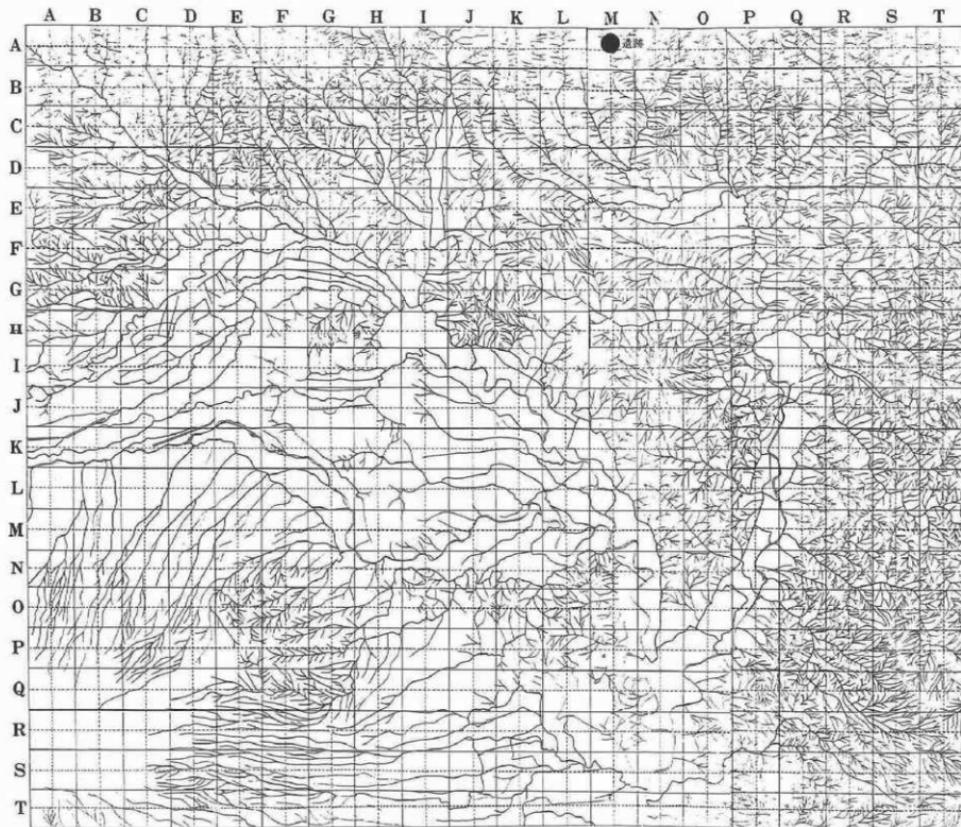
第2図 遺跡の位置



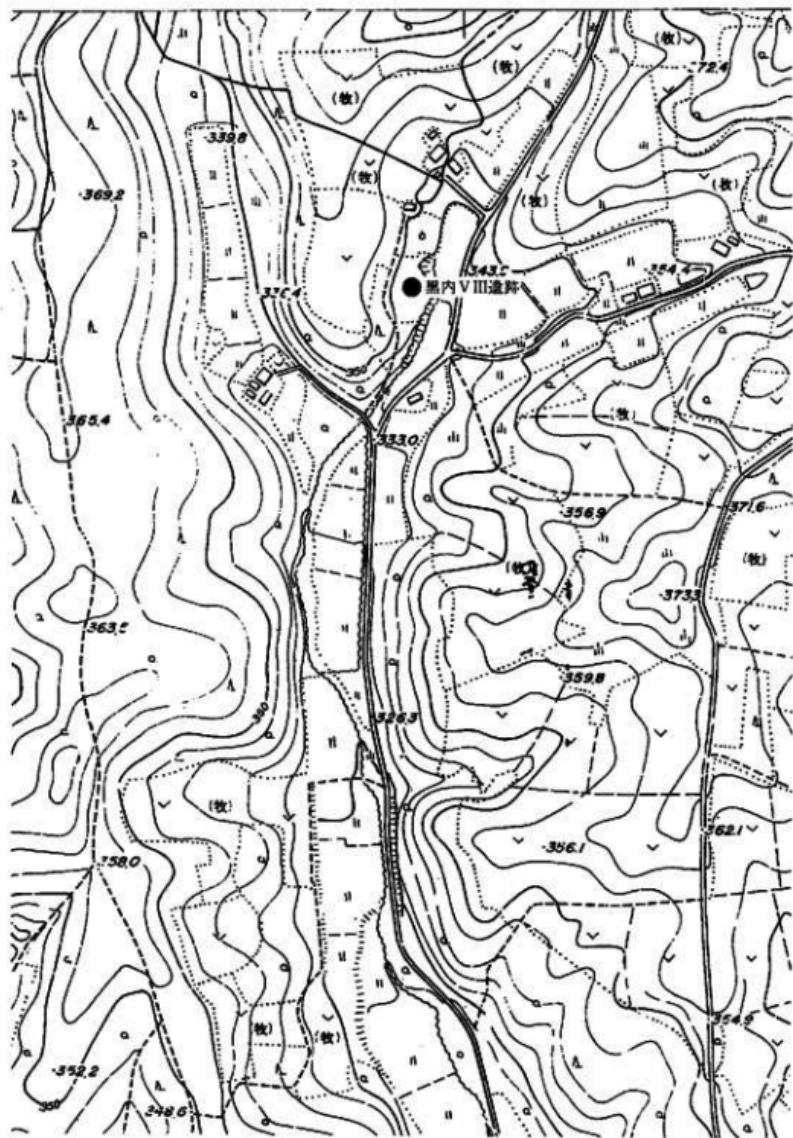
第3図 造鉄周辺の標高区分図



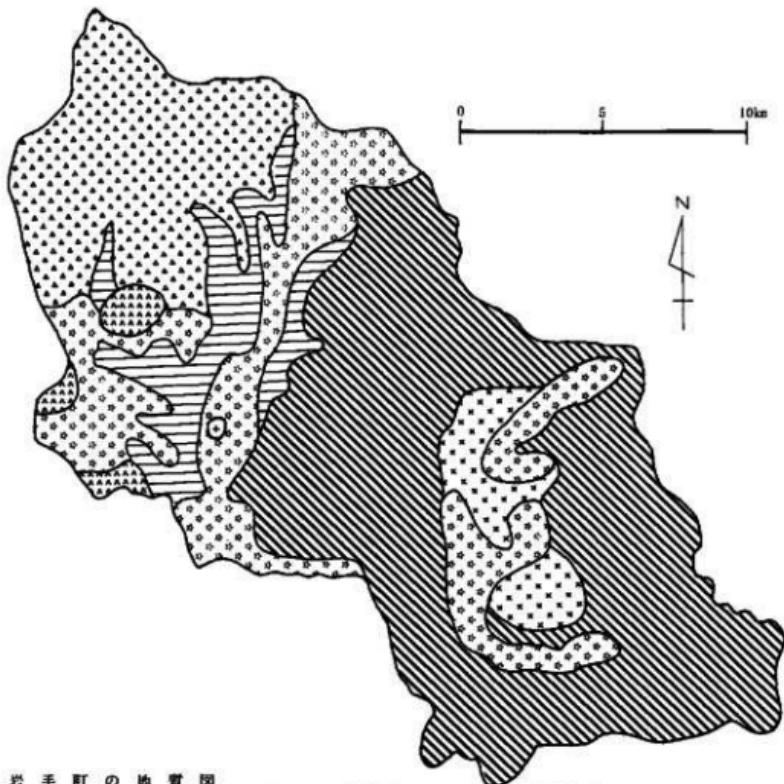
第4図 走跡周辺の起伏量図



第5図 道路周辺の水系及び谷密度図



第8図 遺跡周辺の地形



岩手町の地質図

A……古生層 B……深成岩（花崗閃綠岩・石英閃綠岩・はんれい岩・輝岩を含む）

C……第三紀層（頁岩・凝灰岩・砂岩・礫岩を含む） E……火山碎屑物

F……第四紀層（段丘砂礫層・溶結凝灰岩・火山灰層を含む）



古生層



深成岩



第三紀層



第三紀安山岩類



火山碎屑物



第四紀層

第7図 岩手町の地質

輝石は黒色粗粒の硬質の岩石で、北山形の南部では小露出が観察される。

第三紀層は岩手町では北上川の源流域地帯となっている北部の御堂付近から北上川の流域に沿って南部の川口付近まで帶状に細長く分布し、一方井付近を含めて西部一帯にも存在が確認されている。頁岩・凝灰岩・砂岩・礫岩・のほかに火山岩塊を含む火山噴出物の多い岩類から成り、一部では緑色凝灰岩の岩層も見られる。

第三紀安山岩類は岩手町では北上川の西部一帯に見られ一方井の高山や南部の送仙山を構成しているものである。輝石や角閃石を含み、石英の斑晶も見いだされることもある。

火山碎屑物は岩手町では西部の七時雨山の山麓丘陵を広く被覆し、安山岩・スコリア（岩屑）・軽石火山灰をはさんで丘陵性の山地を残丘上に残しながら埋めて緩やかな丘陵地形をつくりだしている。第四紀層のうち、砂礫層は岩手町では北部の御堂付近から南部の川口の北上川流域には洪積世から沖積世にかけての第四紀に属する砂礫層が見られ、一部は明らかに第三紀系の上に不整合で重なり、新旧の段丘面を構成している。とくに北山形の白樺川や丹藤川の流域に沿う砂礫層では平坦な段丘面を残している。溶結凝灰岩類は沼宮内・川口東部の桑畠付近及び北山形の一部に分布しているが南限は盛岡付近まで及んでいる。本岩類は噴火の際に火山灰が熱雲として火山の斜面を流下堆積して生成したものである。

火山灰層は岩手町では岩手山噴火の際のものと考えられるものが南部の川口近傍に観察され、軽石・スコリア（岩屑）及び火山礫の層が粘土化している火山灰と交互に堆積をくりかえして相当の層厚を有している。

## 5. 岩手町の遺物出土土地と主な遺跡（第8図）

岩手町には原始・古代の遺物出土地は多数存在するが、ここでは北上川とその支流の諸河川丹藤川・古館川・一方井川及び外山川流域を中心に遺跡名、所在地、遺跡の種類、地目、遺跡の時代の順に表としてとりまとめた。

### 〈岩手町の遺跡一覧表〉

#### 北上川流域

番号	遺跡名	所在地	遺跡の種類	地目	遺跡の年代
1	川口松原	子抱	包含地	水田	縄文時代晚期・弥生・土師
2	雪浦	川口	包含地	水田	縄文前期・晚期
3	寺沢	子抱	包含地	畑地	縄文後期
4	子抱	子抱	包含地	畑地	縄文晚期・弥生・須恵器

番号	遺跡名	所在地	遺跡の種類	地目	遺跡の年代
5	岸内	川口	包含地	水・畑	縄文中・後・晚期・弥生
6	嵐山	江刈内	包含地	宅地	縄文後期
7	松原	江刈内	包含地	畠地	縄文晚期
8	乙茂内	"	包含地	田・畠	縄文後期・晚期・弥生
9	一辺沢	"	包含地	畠地	縄文晚期・弥生
10	犬袋	"	包含地	宅地	縄文前期・後期
11	苗代沢	五日市	包含地	宅地畠	縄文早・前・後・晚期・土器
12	久保口	久保	包含地	畠	縄文時代後期
13	石神下	五日市	包含地	畠	縄文時代後期
14	江刈内口	江刈内	包含地	畠宅地	縄文後期・晚期
15	大安良	沼宮内	"	畠	弥生時代
16	大坊	大坊	"	田・畠	縄文後期・弥生時代
17	尾呂部	沼宮内	"	畠	縄文前期・後期・晚期
18	横沢	"	"	畠	縄文中期・後期・晚期
19	上横沢	"	"	畠	縄文時代後期
20	高森	"	"	畠	縄文前期・後期
21	笈ノ口	五日市	"	原野	縄文後期・晚期・弥生時代
22	"町有林	五日市	"	山林	縄文晚期・弥生時代

〈丹藤川・古館川流域〉

23	丹藤瀧	川口	包含地	水田	縄文前期・中期・後期・土器
24	秋浦 A	川口	包含地	田・畠	縄文前期・中期・後期・土器
25	秋浦 B	川口	包含地	田・畠	縄文中期・後期・晚期
26	秋浦 C	川口	包含地	田・畠	縄文後期・晚期
27	秋浦貝塚	川口	包含地	畠・田	縄文時代後期
28	高無	川口	包含地	畠	縄文期・晚期
29	土瀧	川口	包含地	畠	縄文後期・晚期
30	大平	川口	包含層	畠	縄文後期
31	子十	川口	包含地	畠	縄文時代後期

32	大渡	川口	包含地	水田	縄文時代後期
33	細金	川口	包含地	畠	縄文後期・晚期
34	刈宿	川口	包含地	畠	縄文後期・晚期
35	穴沢	川口	包含地	畠	縄文時代後期
36	大金沢	川口	包含地	山林	縄文後期・晚期

〈一方井川流域〉

37	久保	久保	包含地	畠	縄文時代後期
38	内の沢	久保	包含地	山林畠	縄文時代後期
39	沢口	久保	住居跡群	水田畠	土師器
40	仙波堤	久保	住居跡群	山林畠	土師器
41	仙波堤	久保	包含地	畠水田	縄文晚期・弥生時代
42	細沢	久保	包含地	畠水田	縄文前・中・後・晚期
43	豊岡	久保	住居跡	水田畠	縄文時代後期・晚期
44	土川新田	土川	包含地	水田	須恵器
45	ざるくぼ	大坊	包含地	畠	縄文時代晚期
46	小学校裏	一方井	包含地	畠	縄文晚期・土師器・須恵器
47	古い役場	一方井	住居跡	宅地	土師器
48	輪台	一方井	包含地	畠	縄文時代晚期・土師器
49	打越	一方井	包含地	畠	縄文・土師器
50	カンジヤ	一方井	包含地	畠	縄文時代晚期
51	中田口	一方井	包含地	畠	縄文時代晚期
52	四本木	一方井	包含地	畠	縄文早期・晚期・須恵器
53	今松	一方井	住居跡	山林	土師器
54	とくさだて	大森	包含地	山林	縄文時代晚期
55	ぬかづか	大森	包含地	山林	縄文時代晚期
56	とうやもり	大森	包含地	水田	縄文時代中期
57	更の沢	大森	包含地	畠地	縄文時代中期
58	どじの沢	大森	住居跡	山林	縄文中期・後期・晚期
59	どじの沢	大森	堂跡	山林	須恵器
60	妻の神	黒石	包含地	畠山林	縄文時代後期

61	妻の神沢	黒石	包含地	山林	縄文時代後期
62	十二夜	黒石	包含地	畠	縄文時代後期
63	黒石裏師前	黒石	包含地	畠	縄文時代後期
64	上路	黒石	包含地	水田	土師器
65	湯沢	黒石	包含地	山林	縄文時代晚期
66	甘酒	黒石	包含地	山林畠	縄文時代中期・後期
67	岩沢	黒石	包含地	山林	縄文時代晚期
68	道達	黒石	包含地	山林原野	縄文時代後期
69	仏沢	黒石	包含地	畠	縄文時代晚期
70	にかるもち	黒石	包含地	山林畠	縄文時代後期・晚期
71	坊生長根	黒石	包含地	山林畠	縄文時代後期・晚期
72	かんじや	葉木田	包含地	畠	土師器・鉄器
73	山王	葉木田	包含地	畠	縄文時代前期
74	宮沢	葉木田	包含地	畠	縄文時代前期・中期・晚期
75	さんのした	葉木田	包含地	畠	縄文時代中期
76	出張所前	葉木田	包含地	畠	縄文時代晚期・弥生時代
77	倍田	葉木田	包含地	畠	縄文時代中期
78	木谷内沢	黒内	包含地	畠	縄文時代中期
79	木谷内	黒内	包含地	畠	縄文時代中期
80	こなさぎ	黒内	包含地	畠	縄文時代後期
81	あらぎ	黒内	包含地	畠	縄文時代中期・後期
82	黒内開拓	黒内	包含地	畠	縄文時代中期・後期・晚期
83	大股開拓	黒内	包含地	畠	縄文時代中期・晚期・弥生時代
84	笠座	黒内	包含地	畠	縄文時代後期・晚期

〈外山川流域〉

85	おおやもり	土川	住居跡	畠	土師器
86	鳴沢 A	土川	住居跡	畠	土師器
87	鳴沢 B	土川	住居跡	畠	土師器
88	浮島古墳	土川	古墳	山林	土師器・鉄器
89	浮島	土川	住居跡	水田	土師器

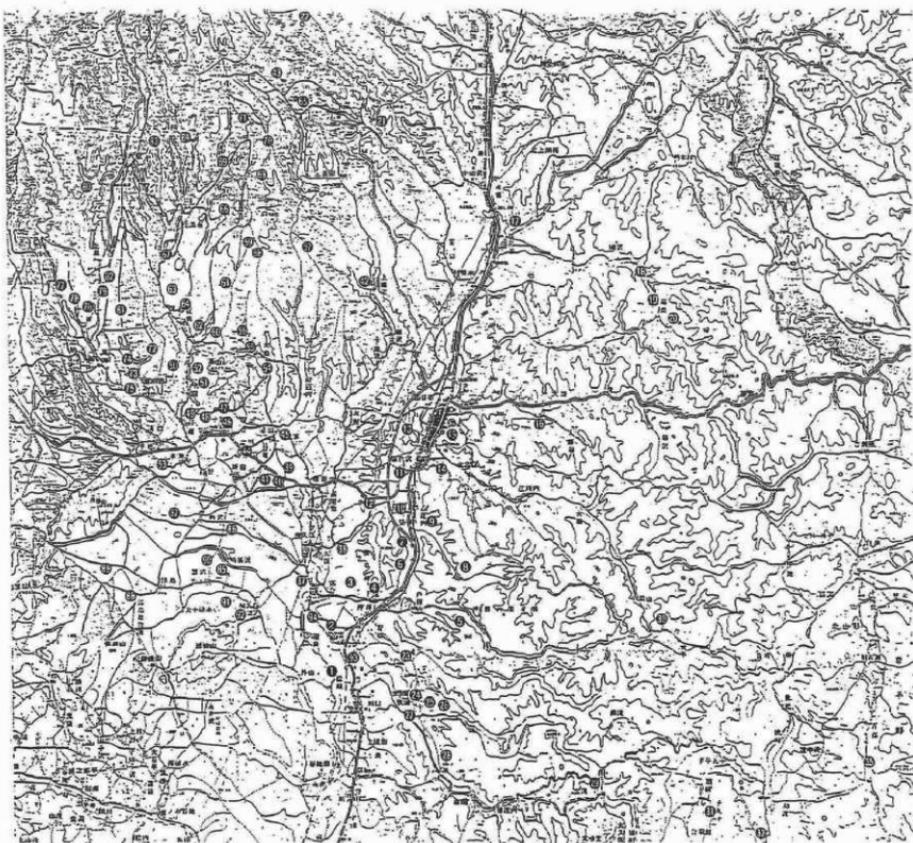
90	蟹沢	土川	包含地	水田	縄文早期・後期・弥生
91	栗場平	土川	包含地	畠	縄文時代晚期
92	桐ヶ久保	土川	包含地	山林畠	縄文時代早期・前期

(岩手町史より)

《岩手町内の整穴所在地表》

番号	町村	大字	地割	字名	地番	地目	反別	所有者	整穴数
1	一方井	葉木田	1	宮沢	2ノ1	山林	町歩 101.0000	御料地	9
2	同	同	2	葉木田	4ノ6	山林	3.2300	千葉健次郎	6
	同	同	2	同	4ノ7	山林	.6217	遠藤要吉	
3	同	一方井	2	十二夜 (一名甘酒)	26ノ1	原野	77.7610	斎藤新吉	6
4	同	同	13	輪台	42	畠	.1027	中村栄吉	3
	同	同	13	同	2ノ内1	山林	2.1920	千葉ミツ	
5	同	同	7	今松	123ノ1	山林	4.5405	今松幸之助	16
6	同	土川	3	鴨沢	2	畠	.0227	辻本竹松	11
			3	同	4	畠	.2502	同人	
			3	同	5	畠	.1227	国技仁太郎	
			3	同	6	畠	.2206	立本竹松	
			3	同	9	畠	.4628	同人	
			2	鴨沢	22	(原野)	(343.5600)	(陸軍用地)	
7	同	同	2	同	22	(原野)	(343.5600)	(陸軍用地)	46
8	御堂	久保	8	沢口	49ノ3	原野	6.3801	田村石松	29
	同	同	8	同	49ノ5	原野	.4951	同人	
9	一方井	土川	4	新田	144ノ2	原野	16.2717	佐々木与四郎 外92名	8
10	同	同	1	浮島	310ノ1ノ2	山林	13.1310	円子百治	3
11	同	同	1	同	153ノ1ノ1	山林	14.7803	斎藤儀兵衛	10
12	同	同	1	同	310ノ1ノ2	山林	13.1310	円子百治 (整穴番号10の 土地の一部)	4

(岩手町史より)



第8図 岩手町の遺跡分布図(岩手町史より)

## 〈岩手町の主要な遺跡〉

### (豊岡遺跡)

豊岡遺跡は、東日本旅客鉄道御室駅から北西方向に約6km程入った標高400mの山間部に位置し、岩手郡と二戸郡の境にある七時雨山と西岳を主峰とする山稜の一端にある。

遺跡は細沢川に沿った平坦地の一部は水田となっているが、大部分は丘陵地で畠地及び牧草地となっており、丘陵の東側斜面の一部が昭和34年発掘調査され、縄文時代晚期の良好な遺跡であることが明らかになった。出土土器は縄文時代晚期の大洞B式から大洞C<sub>1</sub>式のものが大半で、ほかに遮光器土偶・有孔石製品・石鏃・石匙・石鍤などが多く出土している。

### (大森どじの沢遺跡)

大森どじの沢遺跡は、岩手町の西部一方井支所の北側約1.5kmほどの山間部にあり、林道建設の際に発見された遺跡で、昭和35年に岩手町教育委員会で発掘調査が行われている。調査の結果、縄文時代晚期のものと推定される円形プランで石煙炉を有する住居跡の発見に加えて数多くの後期・晚期の土器（時期的には大洞B式から大洞C<sub>1</sub>式、大洞A式に比定される）、や遮光器土偶・土面・装身具など貴重な考古学資料が確認された。

### (仙波堤豎穴住居跡群)

仙波堤豎穴住居跡群は大字久保第八地割字沢口に所在し、一方井の平坦な盆地状地形の南側に連なる小丘陵の東端に位置している。豎穴住居跡は丘陵部からその東側の麓にかけて分布し、これを仙波堤豎穴住居跡群と総称され、昭和43年に岩手県教育委員会と岩手町教育委員会共同の発掘調査が行われている。

調査の結果、平面形は隅丸方形を呈し、内部に粘土と石を利用して作ったカマド、外側に煙り出しのための煙道を有する豎穴住居跡群が検出されている。豎穴住居跡の大きさは一定せず、第1号豎穴住居のように9.2×9mの大きな規模をもつものも発見されている。ほかに第2号豎穴住居跡6.4×6.9m、第3号豎穴住居跡6.3×6.3m、第26号豎穴住居跡8.3×8.3mも発見されている。出土遺物は若干の縄文土器と弥生土器の小破片のほかはロクロを使用しないで作った前期土師器のカメ・壺・壺・鉢などのほかに紡錘車・土製装身具・小玉等が発見されている。

### (今松豎穴住居跡群)

今松豎穴住居跡群は大字一方井第七地割字今松に所在し、一方井の盆地状地形に連なる小丘陵の西側に位置している。土師器や須恵器を伴出する豎穴住居跡はこの丘陵部から麓にかけて分布し、これを今松豎穴住居跡群と呼び、昭和43年度に本格的な発掘調査が行なわれている。

調査の結果、平面が仙波堤豎穴住居跡群と同様隅丸方形を呈し、内部に粘土と石を利用して作ったカマド、外側に煙り出しの煙道を有する豎穴住居跡が検出されている。

堅穴住居跡の大きさは仙波堤堅穴住居跡同様一定しないが、第3号堅穴住居跡で東西に8m、南北に7.7m、第4号堅穴住居跡では東西に8.2m、南北に8.5mと規模の大きいものが確認されている。出土遺物は仙波堤堅穴住居跡と同様でロクロを使用しないで製作したカメ・鉢・壺などのほかに磁石・凝灰岩製の紡錘車などが検出されている。

(沢口遺跡)

沢口遺跡は、仙波堤堅穴住居跡群の分布する丘陵の麓に続く平坦な台地上に所在し、沼宮内駅より一方井方面に向かって約3kmほどの横田橋にほど近い県道の両側の字名沢口に位置している。本遺跡は昭和33年に発掘調査が行なわれ、大部分は開墾時の削平を受けていたが2棟の堅穴住居跡が発見された。検出された堅穴住居跡の規模は第1号堅穴住居跡で一辺3.5m、第2号堅穴住居跡で一辺6.5mを測り、形状はいずれも隅丸方形でカマド・壁外に煙り出しの煙道を有しているものある。

出土遺物は土師器を主体としたカメ・壺・壺のほかに磁石・紡錘車・土製切子玉などが発見されている。

(浮島古墳)

浮島古墳は岩手町大字土川第四地割字浮島に所在し、東南方向に472mの送仙山と西北方向に392mの丹藤山の間に挟まれた台地の西北部の緩やかな斜面に立地している。本古墳群の発掘調査の歴史は古く、大正12年に京都大学梅原末治氏によってその一部が調査され、その成果が「歴史と地理」に大正13年発表されている。昭和32年には岩手県教育委員会と岩手町郷土史研究会が共催してこの古墳群の再調査が実施されている。(発掘調査は第4号墳・第9号墳・第11号墳・第15号墳の4基について行なわれている。)

以下の調査の結果について外形・主体部・副葬品の順に概説する。

第4号墳は径11mの円形で、高さは0.6mを測る。主体部は長さ3.7m、幅1.2m、深さ0.44mの規模を有し、副葬品としては直刀1・鉄鎌・土師器(壺)などが出土している。

第9号墳は11.2×8.9mの楕円形で高さは0.55mを測る。主体部は長さ3m、幅1m、深さ0.22mの規模を有し、副葬品としてはガラス小玉100個出土している。

第11号墳は径11.5mの円形プランで、高さは0.75mを測る。主体部は長さ4.5m、幅1.4m、深さ0.23mの規模を有し、副葬品としてはガラス小玉100・黒玉5・小銅環1・鉄輪2・刀子・鉄鎌などが検出されている。

第15号墳は径9mほどの円形プランで、高さは0.35mを測る。主体部の長さは3.5m、幅0.85m、深さ0.30mの規模を有している。4基の古墳のうち本号だけは副葬品を伴出していない。

各古墳の外形から浮島古墳の小群集墳は古墳終末期の群集墳で、その副葬品などから県内の小群集墳と同一時期で、奈良時代から平安時代初頭にかけて造営されたものと考えられる。

## 6. 基本層序（第9図）

黒内Ⅶ遺跡の基本層序を概説すると以下のとおりである。なお本文や表等に記載している遺物の出土層位や検出面などはそれぞれの層序と対応している。

- I層 黒褐色土 10 YR 2 / 3。表土層。草木根の混入が顕著で北西端の旧畠地では若干の遺物（縄文土器・剣片等）が認められる。層厚は 30 ~ 40 cm 程である。
- II層 黒褐色土 10 YR 3 / 2。暗褐色シルトが少量混入し、粘性・しまりともにある。層厚 10 ~ 20 cm。
- III層 暗褐色土 10 YR 3 / 3。シルト質で少量遺物を包含している。粘性・しまりともにややあり。層厚 10 ~ 20 cm。
- IV層 暗褐色土 10 YR 3 / 4。黒褐色、褐色の粘土質シルトが上面、下位面に少量混入し、小礫や遺物を包含。層厚 10 ~ 15 cm。
- V層 褐色土 10 YR 4 / 6。粘土質シルト。若干しまりがあり、層厚は 20 ~ 30 cm を測る。縄文時代遺構の検出面である。
- VI層 黄褐色土 10 YR 5 / 6。砂礫層。若干粘性・しまりあり。遺構・遺物は存在しない。

## III. 調査方法と室内整理

### 1. グリッド設定

三ヶ月余の限られた調査日程と調査区域に含まれる全ての遺構・遺物の検出を念頭において遺跡の南西部に基準点 1 を、北東部に基準点 2 をそれぞれ設け、基準点 1 と基準点 2 を結んだ調査用基準ラインを基に  $8 \times 8$  m の中区画を設定、さらに各々  $4 \times 4$  m の小グリッドに細分し、これを本調査の基本単位とした。

細分されたグリッドの呼称は南北方向に南からアルファベットで A ~ I、東西方向に西から I ~ VI に付し、これの組み合わせ (A I · A II · B I · B II ...) で表示した。なお黒内Ⅶ遺跡の基準点 1。基準点 2 の平面直角座標第 X 系による成果値及び杭高 (H) は次のとおりである。

基準点 1    X = - 273.667 m

Y = 26461.077 m

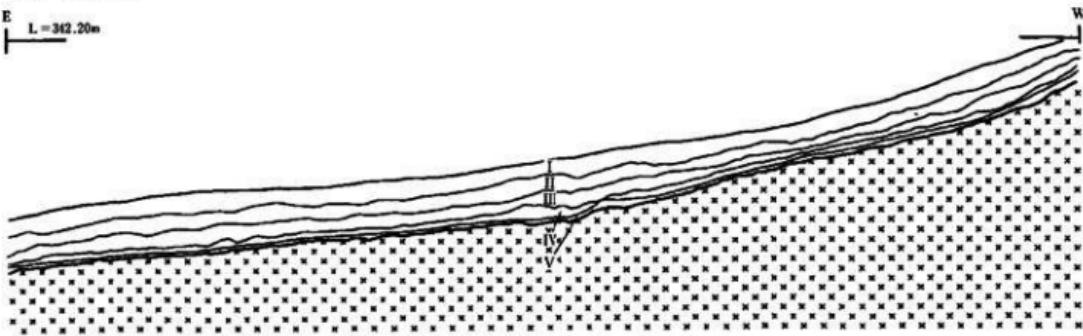
H = 340.426 m

基準点 2    X = - 289.319 m

Y = 26444.705 m

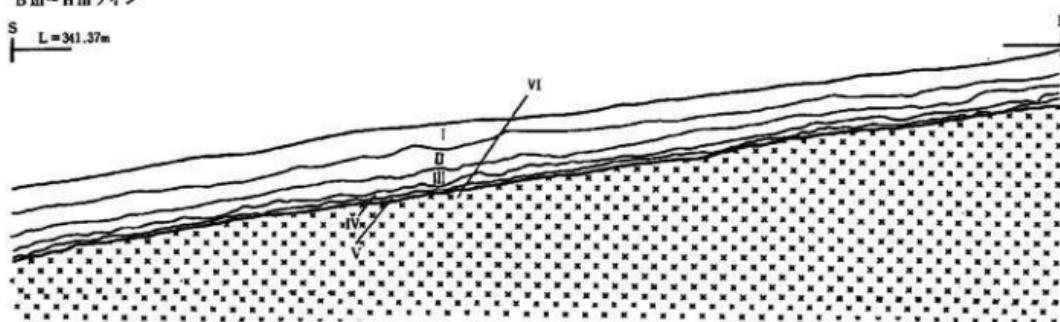
D I ~ D VI ライン

E  
L = 342.20m



B III ~ H III ライン

S  
L = 341.37m



第9図 基本層序図

0 5m

$$H = 340.095 \text{ m}$$

## 2. 調査及び精査

査掘は、当該  $2 \times 4 \text{ m}$  の東西、南北にグリッドに沿って入れ、遺跡全体の把握につとめた。また調査区域に包含される全ての遺構・遺物の検出目的として、全て人出によって行なった。

精査の方法は竪穴住居跡、竪穴状遺構、大口径の土坑に対しては4分法を、小さい土坑類、埋設土器遺構などは2分法をそれぞれ基本とした。また切り合いや重複関係にあると考えられる遺構については4分法、2分法にとらわれず必要に応じて観察用のベルトを残して調査を行なった。

なお土層観察用のベルトは、竪穴住居跡、竪穴状遺構、大口径土坑類の円形状のプランをもつものは地形斜面に対して直交及び平行する二条とし、楕円形・隅丸方形条のプランを有するものは長軸を中心としてこれと直交及び平行する位置で設定した。

検出した遺物のうち、遺構外出土遺物については地区名(グリッド名)や層位などを記入し、完形品土器・半完形品土器・特殊な遺物などは図面への位置記載や写真撮影ののち取り上げた。遺構内出土遺物は埋土内の場合、遺構名や層位を記入(例 DII 竪穴住居跡 1号埋土 1~)し、取り上げた。床面出土写真撮影・図面記載ののち番号を付して取り上げを行なった。

## 3. 遺構の命名

検出された遺構は、前述したグリッド名に遺構の種別を付し、1号～の組み合わせで表示。(例 D III 竪穴住居跡 1号～、GV 竪穴状遺構 2号～、EIV 土坑 1号、H III 埋設土器遺構 1号)

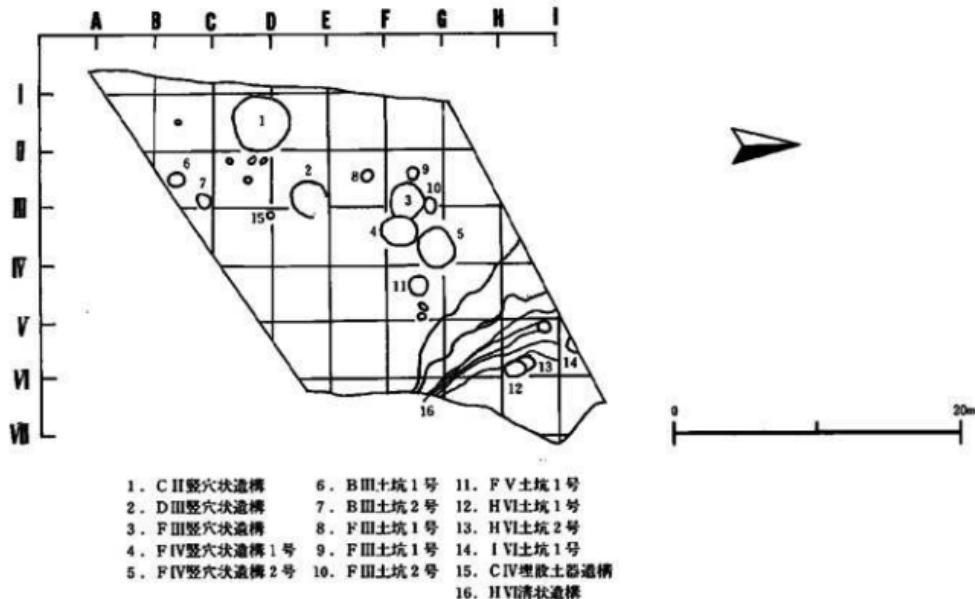
## 4. 実測図の作成

平面実測については、グリッド軸にあった  $1 \times 1 \text{ m}$  のメッシュを基本とする簡易造り方測量法で、縮尺率は20分の1を原則として行なった。なお基本層序図や遺構の土層断面図などの縮尺も同様に20分の1を基本としている。

## 5. 写真撮影

写真撮影は全て調査員が担当し、遺跡の遠景・近景・遺構の検出状況・遺構の精査課程・埋土土層断面・遺物の散布状況・完壊状況・炉跡のアップ・断ち割り等必要に応じてできるだけ多くの状況が把握記録できるようにした。写真撮影には  $6 \times 7 \text{ 版}$ (白黒) 1台、 $35 \text{ mm}$ 版カメラ2台(白黒・カラー用)を使用した。なお遺構などの撮影に際しては、遺構名・方位・年月日・天候などを記入した撮影カードを活用し、室内整理段階での混乱の防止を試みた。

## 6. 室内整理



第10図 遺構配置図

### (1) 遺構

野外での実測図面の座標・セクションポイントの位置・基準高などの点検、必要に応じて第2原図を作成とトレースを行なった。本報告の図版の縮尺は堅穴住居跡・堅穴状遺構・大口径土坑類・溝などの場合40分の1を原則とし、小さい土坑類・埋設土器遺構などは20分の1を基本とした。なお各々の図版にはスケールを付した。

### (2) 遺物

遺物は、水洗い・注記の後遺構内と遺構外に分類し、接合・復元を行なった。これらの作業終了のち、仕分・登録を行ない、本報告記載分については写真撮影・土器及び石器の実測・土器の拓本及び断面図作成一点検査→トレース→点検の順に作業を展開した。なお赤色顔料・漆と考えられる特殊遺物などは関連研究機関等へ鑑定分析を依頼した。

## IV. 検出された遺構及び遺物

### 1. 検出遺構

黒内Ⅳ遺跡の遺構はすべて縄文時代に属するもので、堅穴状遺構5棟。土坑9基、埋設土器遺構1基。溝状遺構1条が検出された。遺構配置図に見られるように堅穴状遺構は調査区の中央や西寄りの緩やかな斜面部に集中し、土坑類は調査区の南西端の斜面部から中央平坦部、北東部の緩やかな斜面に点在している。

#### (1) 堅穴状遺構

##### CII堅穴状遺構(第11図・写真図版4)

〈位置〉 調査区の南西寄りCII、CIIIグリッドにかけて位置している。

〈検出状況〉 遺構の位置するCII、CIIIグリッドは小林道や土取りのため若干削平され平坦化されていたが、V層上位面に黒褐色の不整な広がりを確認、精査検出した。

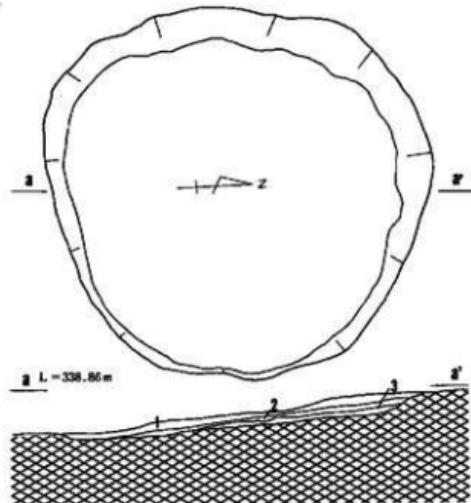
〈埋土〉 本遺構の埋土は、粘性・しまりのある黒褐色土、比較的乾性の暗褐色土、粗砂を含む暗褐色土が霜ふり状に混入する褐色土の3層によって構成されている。

〈形状・規模〉 4.1×3.9mの不整円形のプランを呈している。

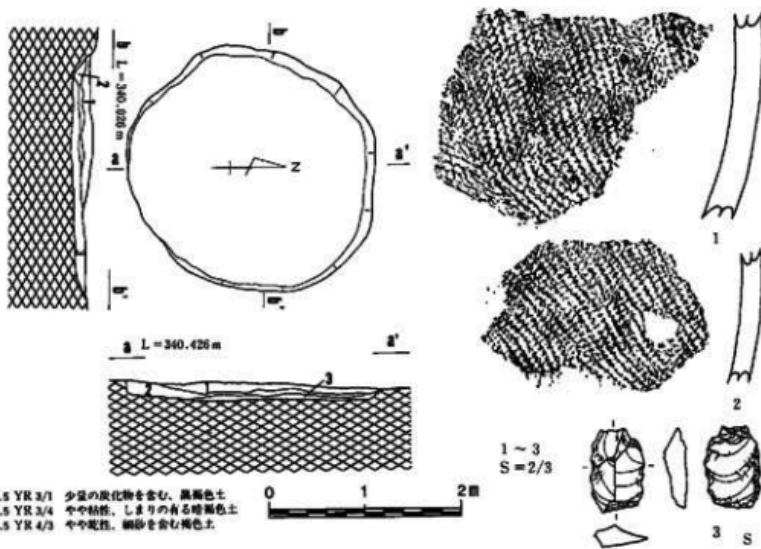
〈壁・床面〉 緩斜面に位置することや削平のためか東側の壁の残りは少いが、西側及び北側部分で10cm土で、さほどの崩壊は示していない。床面は若干凹凸が観察され、不整である。

〈柱穴〉 床面、壁外においても柱穴らしきものは検出されなかった。

〈出土遺物〉 本遺構に伴う遺物は検出されなかった。



C II型穴状造構 1号



D III型穴状造構 1号

第11図 C II型穴状造構 1号・D III型穴状造構 1号

〈時期〉 出土遺物がなく、時期は不明である。

#### DⅢ堅穴状遺構1号（第11図・写真図版4）

〈位置〉 本遺構は調査区の中央平坦部DⅢ・DⅣグリッドにかけて位置している。

〈検出状況〉 IV層の下位面からV層の上位面にかけて少量の炭化物を含む黒褐色土の広がりを認め、精査検出。

〈埋土〉 少量の炭化物を含む黒褐色土、やや粘性・しまりのある暗褐色土、やや乾性・細砂を含む褐色土の3層により構成されている。

〈形状・規模〉 2.60×2.55mのほぼ円形状のプランを呈している。

〈壁・床面〉 西側から北側で5cm土と浅く、若干崩落している。床面は比較的良好で堅く踏みしめられている。

〈柱穴〉 床面及び壁外においても柱穴は検出されなかった。

〈出土遺物〉 本遺構では、埋土2層中（暗褐色土）より原体RL横の粗製深鉢形土器の胴央部破片2点と小剣片の先端部両面に細かい剝離加工を施した石器1点（第11図1～3）が出土している。

〈時期〉 出土遺物などから縄文時代のものと推定される。

#### FⅢ堅穴状遺構1号（第12図・写真図版5）

〈位置〉 本遺構は、調査区の北西寄りのFⅢ・FⅣグリッドにかけて位置している。

〈検出状況〉 V層の上位面で極暗褐色土の不整円形状の広がりを確認し、精査検出。

〈埋土〉 乾質の極暗褐色土、微量の炭化物を含む暗褐色土、粘性・しまりのある暗褐色土の3層によって構成されている。

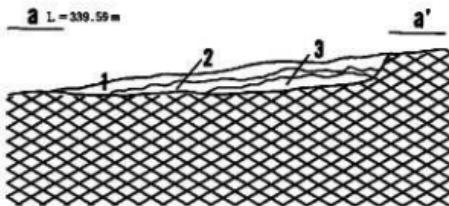
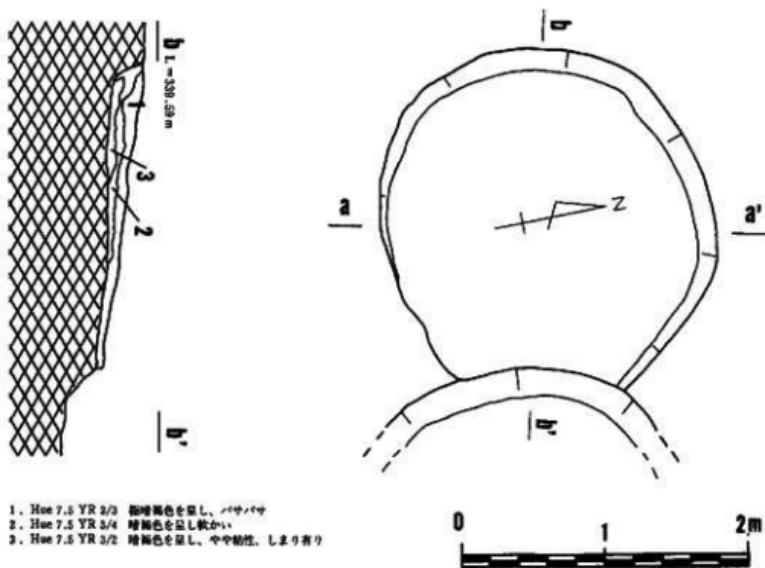
〈形状・規模〉 3.45m土の不整円形状のプランを呈するが、FⅣ堅穴状遺構によって東側部分が一部切られ全体的な把握はできなかった。

〈壁・床面〉 北側～西側で最深15～20cmを測り、やや外傾気味に立ち上がる。床面は凹凸があり、不整で軟弱である。

〈柱穴〉 床面及び壁外においても検出されなかった。

〈出土遺物〉 本遺構に伴う遺物は検出されなかった。

〈時期〉 出土遺物がなく、時期は不明である。



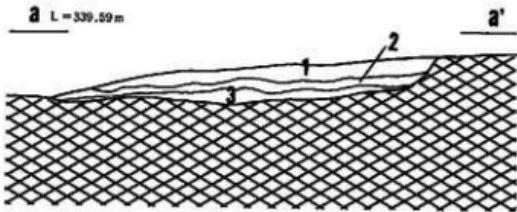
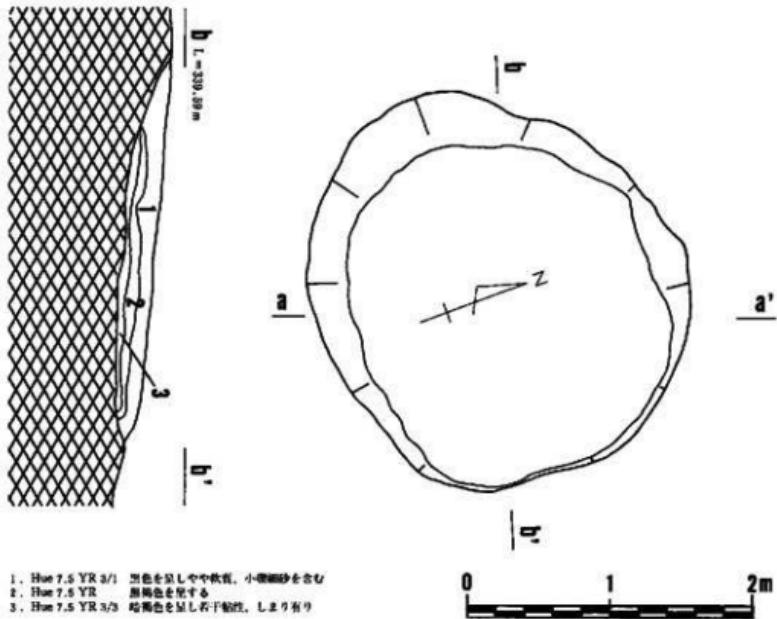
第12図 F III 穴状造構 1号

#### FIV堅穴状造構1号（第13図・写真図版5）

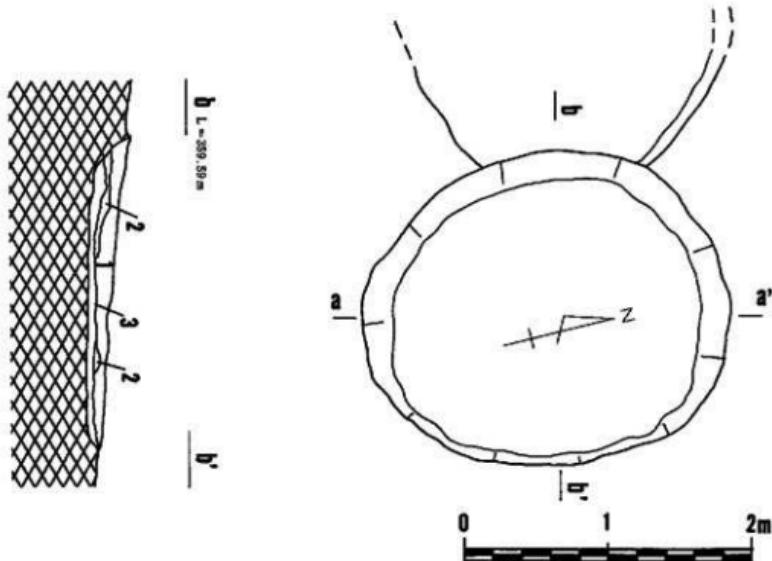
- 〈位置〉 調査区の中央やや北寄りの平坦部FIV・FV・GVグリッドにかけて位置している。
- 〈検出状況〉 FIV・FV・GVグリッドのV層上位面で不整な黒色土の広がりを確認し、精査検出。
- 〈埋土〉 やや軟質の黒色土、粘性・しまりのある黒褐色土、若干の粘性を有し粗砂の混入する暗褐色土の3層によって構成されている。
- 〈形状・規模〉  $4.2 \times 3.75\text{ m}$  の不整楕円形状のプランを呈する。
- 〈壁・床面〉 北側から西側にかけて摺り鉢状に立ち上がり、 $15\text{ cm}$  土を測る。床面は比較的堅く踏みしめられ平坦で良好。
- 〈柱穴〉 本造構に伴う柱穴は床面および壁外でも確認できなかった。
- 〈出土遺物〉 時代を特定する遺物は埋土および床面でも検出されなかった。
- 〈時期〉 出土遺物がなく、時期は不明である。

#### FIV堅穴状造構2号（第14図・写真図版5）

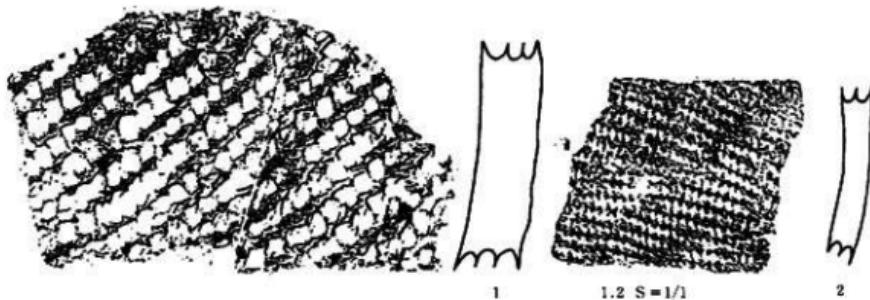
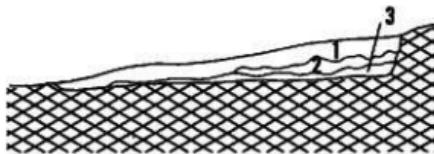
- 〈位置〉 本造構は、調査区のほぼ中央の緩やかな斜面部FIVグリッドに位置している。
- 〈検出状況〉 V層の上位面で微量の炭化物・土器片を包含する黒褐色の広がりを認め、精査検出。
- 〈埋土〉 微量の炭化物・土器破片を含む黒褐色土、褐色粘性土がブロック状に混入する暗褐色土、粗砂を含み、やや粘性・しまりのある暗褐色土の3層によって構成されている。
- 〈形状・規模〉  $3.5 \times 3.35\text{ m}$  のほぼ円形状のプランを呈する。
- 〈壁・床面〉 東側部分の壁は $4\text{ cm}$  土と浅いが、西側～北側部分はほぼ垂直な立ち上がりが認められ、最深 $25\text{ cm}$  を測る。床面は若干凹凸があるが、よく踏みしめられている。
- 〈柱穴〉 他の堅穴状造構同様、床面および壁外においても柱穴は確認できなかった。
- 〈重複関係〉 本造構は、前述したFIII堅穴状造構1号の東側の壁・床面の一部を切り崩して構築されている。
- 〈出土遺物〉 本造構では第14図1、2・写真図版14-7、8) 2点の縄文土器片が出土している。いずれも深鉢形土器の胴央部のものと推定され、2は原体RL横の地文(縄文)のみが施されている。
- 〈時期〉 出土遺物などから縄文時代のものと推定される。



第13図 F IV 竪穴状造構 1号



1. Hue 7.5 YR 3/3 黄褐色を呈し、砂粒、上部混入
2. Hue 7.5 YR 3/3 暗褐色を呈し、板状粘土層入
3. Hue 7.5 YR 黑褐色を呈し、サラサラしている



第14図 F IV 穴状造構 2号

## (2) 土坑

### BⅢ土坑1号（第15図・写真図版6）

〈位置〉 本造構は調査区の南西端の緩やかな斜面部BⅢグリッドに位置している。

〈検出状況〉 調査区南側へのテステトレントでIV層下位面での小梢円形状の黒褐色土の広がりを確認し、精査検出。

〈形状・規模〉  $1.65 \times 1.40 \times 0.23$ mの梢円形状プランを呈する。

〈断面形〉 挖り込みが浅く、浅鉢状を呈している。

〈埋土〉 若干の細粒砂が混入する黒褐色土、乾性の黒褐色土が霜ぶり状に混入する褐色土、少量の土器片・石器類を包含し、粘性・しまりを有する黒褐色土の3層によって構成されている。

〈出土遺物〉 本造構に伴う出土遺物は第15図1、2、3の3点で、1は原体RLのみを施した粗製深鉢形土器の胴央部破片、2は口辺部に一条の沈線を巡らして口縁がやや外反する無文研磨土器である。胎土・焼成ともに良好で、堅敏な作りである。3は周縁部の両面に細い剥離加工を施して鋭い刃部を作出した剝片石器である。

〈時期〉 埋土3層より出土の土器片などから縄文時代晩期中期～後葉の造構と推定される。

### BⅢ土坑2号（第15図・写真図版6）

〈位置〉 BⅢグリッドのやや北寄りの緩斜面部に位置し、BⅢ土坑1号と隣接している。

〈検出状況〉 V層上位面に黑色土の不整な広がりを確認し、精査検出。

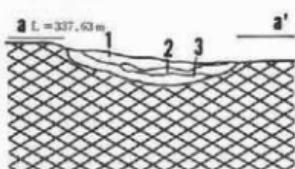
〈形状・規模〉  $1.55 \times 1.35 \times 0.28$ mの不整梢円形状のプランを呈する。

〈断面形〉 BⅢ土坑1号同様緩やかに立ち上がる浅い鉢状を呈する。

〈埋土〉 やや粘性のある黒色土、乾性の極暗褐色土、若干粘性・しまりのある黒褐色土、粗砂を含む褐色土の4層によって構成されている。

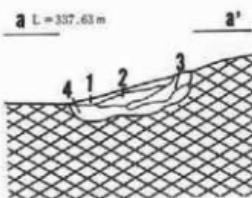
〈出土遺物〉 本造構に伴う遺物は第15図4の1点である。この剝片石器は表面先端部位に粗雑な剥離加工を施して尖頭状の鋭い刃部を作り出している。

〈時期〉 出土遺物に乏しく時期を特定することはできないが、形状、埋土等の状況から縄文期のものと推定されよう。



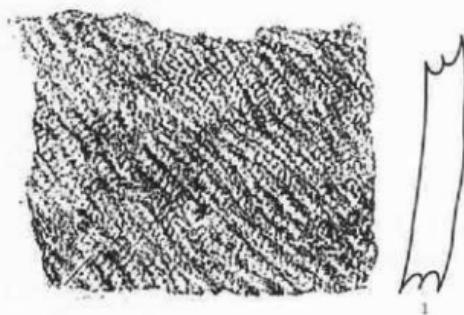
B III土坑 1号

1. Hue 7.5 YR 3/3 黒褐色を呈し若干細粒。砂の混入有り
2. Hue 7.5 YR 4/3 極めて硬い、若干粘性有り
3. Hue 7.5 YR 2/2 黒褐色を呈し、若干土器片等混入



B III土坑 2号

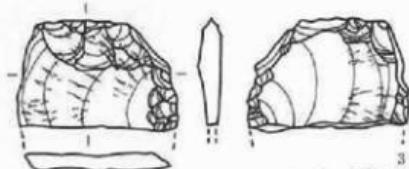
1. Hue 7.5 YR 2/1 黒色を呈し、バサバサしている
2. Hue 7.5 YR 2/3 極めて硬い、やや粘性有り
3. Hue 7.5 YR 3/2 黒褐色を呈し、若干粘性有り
4. Hue 7.5 YR 4/0 極めて硬い、やや粘性有り



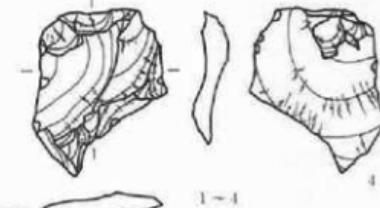
1



2



3



1 ~ 4  
S = 1/1

1 ~ 3 B III土坑 1号出土遺物  
4 B III土坑 2号出土遺物

第15図 B III土坑 1号・2号

### EⅢ土坑1号（第16図・写真図版6）

〈位置〉 調査区のほぼ中央 EⅢグリッドの北寄りに位置している。

〈検出状況〉 V層上位面にかけて乾性暗褐色土の広がりを確認し、精査検出。

〈形状・規模〉  $0.70 \times 0.65\text{ m}$  の楕円形状のプランを呈し、深さは土坑の中央部位で  $0.22\text{ m}$  を測る。

〈断面形〉 比較的小規模であるが摺り鉢状を呈する。

〈埋土〉 乾性の暗褐色土、堅くしまりのある明褐色土、やや粘性・しまりのある褐色土、微量の炭化物・細砂を含む褐色土の4層によって構成されている。

〈出土遺物〉 本遺構の出土遺物は、4層褐色土中より第16図1、2、3・写真図版14-1～3の縄文土器片3点が出土している。1は地文（原体RL横）を施した口縁直口の破片、2・3はやや磨耗しているが、結束のある羽状縄文を施した鉢形土器の胴部破片と推定され、胎土・焼成ともに良好で堅緻な作りである。

〈時期〉 出土遺物が少なく時代を特定できないが、おそらく縄文時代に属するものと考えられる。

### FⅢ土坑1号（第16図・写真図版6）

〈位置〉 本遺構は調査区の中央緩斜面部 FⅢグリッドに位置している。

〈検出状況〉 V層上位面でやや乾性の暗褐色土の不整楕円形状の広がりを確認し、精査検出。

〈形状・規模〉  $0.84 \times 0.75\text{ m}$  の不整楕円形状のプランを呈し、深さは土坑中央部位で  $0.23\text{ m}$  を測る。

〈埋土〉 乾性の暗褐色土、若干粘性・しまりのある黒褐色土、ややしまりのある褐色土、若干粗砂を含み、黒褐色が混入する明褐色土の3層によって構成されている。

〈断面形〉 他の土坑類と同様規模は小さいが、緩やかに立ち上がる浅鉢状を呈している。

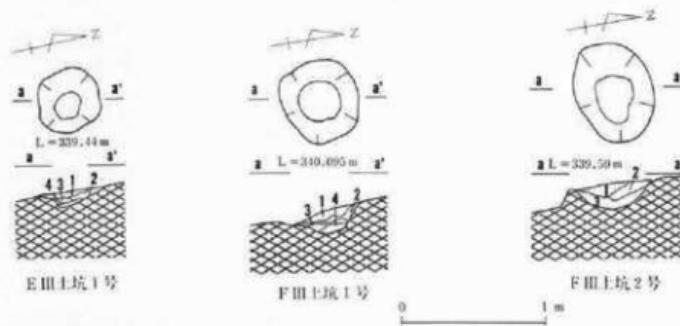
〈出土遺物〉 本遺構の出土遺物は第16図4、5の2つの縄文土器片である。4は原体RLの胴下部破片で緩やかに胴上部に立ち上がる鉢形土器のものと推定される。5は底部破片で木葉痕が観察される。

〈時期〉 出土遺物に乏しく時期を特定することはできないが、埋土の状況などから縄文期のものと推定されよう。

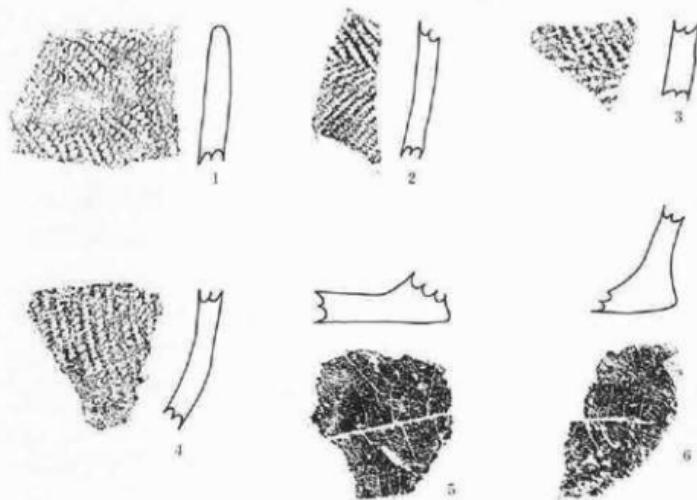
### FⅢ土坑2号（第16図・写真図版6）

〈位置〉 本遺構は調査区の中央 FⅢグリッドに位置し、前述の FⅢ土坑1号に隣接している。

〈検出状況〉 V層上位面での少量の細砂を含む黒褐色土の楕円形状の広がりを確認し、精査検



1. Hue 7.5 YR 細褐色を呈し、若干細砂混入。  
 2. Hue 7.5 YR 黑褐色を呈し、若干粘性有り。  
 3. Hue 7.5 YR 棕色を呈し、若干土じり有り。  
 4. Hue 7.5 YR 棕色を呈し、やや軟弱。  
 5. Hue 7.5 YR 細褐色を呈し、若干粘性有り。  
 6. Hue 7.5 YR 黑褐色を呈し、若干粘性有り。  
 7. Hue 7.5 YR 黑褐色を呈し、やや粘性有り。  
 8. Hue 10 YR 3/2 黑褐色を呈し、少し粘性。  
 9. Hue 10 YR 3/4 黑褐色を呈し、若干黃褐色土。  
 10. Hue 10 YR 4/6 黑褐色を呈し、若干細粒状の砂が混入。



1 ~ 3 E III 土坑 1号出土遺物  
 4 ~ 5 F III 土坑 1号出土遺物  
 6 F III 土坑 2号出土遺物

第16図 E III 土坑 1号・F III 土坑 1号・2号

出。

〈形状・規模〉  $1.1 \times 0.78$  m の不整な橢円形状のプランを呈する。深さは土坑の中央部で 0.32 m を測る。

〈断面形〉 挖り込みが浅く、緩やかな立ち上がりで摺り鉢状を呈する。

〈埋土〉 やや軟質で微量の細砂を含む黒褐色土、粘性・しまりのある暗褐色土、微量の炭化物・粗砂を含む褐色土の 3 層によって構成されている。

〈出土遺物〉 本遺構の出土遺物は第 16 図 6 の底部破片 1 点のみで、磨耗に加えて胎土・焼成ともに不良で全体的に脆弱な作りである。

〈時期〉 出土遺物が少なく、時期を特定することはできないが、埋土・形状などから E III 土坑 1 号と同時期のものと推定される。

#### F V 土坑 1 号（第 17 図・写真図版 6）

〈位置〉 本遺構は、調査区の北側 F V グリッドのはば中央平坦部に位置している。

〈検出状況〉 V 層上位面で粗砂小砾の混入する黄褐色土および暗褐色の不整橢円形状の広がりを確認し、精査検出。

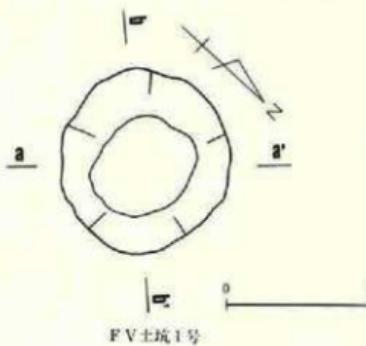
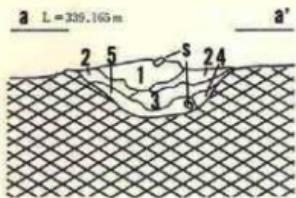
〈形状・規模〉  $1.30 \times 1.15$  m の不整橢円形状のプランを呈する。深さは 40 cm 土を測る。

〈断面形〉 比較的掘り込みが深く、緩やかに立ち上がる摺り鉢状を呈している。

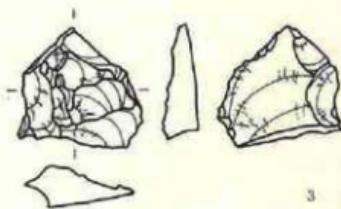
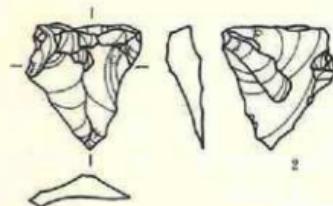
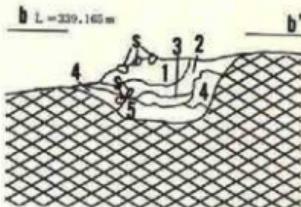
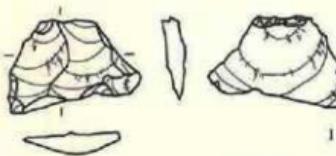
〈埋土〉 粗砂・小砾が混入する黄褐色土、粘性・しまりのある暗褐色土、やや乾性の黒褐色土、細砂を含む乾性の褐色土、粗砂・微量の炭化物の混入する軟質の褐色土の 5 層によって構成されている。

〈出土遺物〉 本遺構に伴う出土遺物は第 17 図 1、2、3 の剥片石器 3 点である。1、3 は台形状の器形を呈し、長辺部に粗雑な剥離加工を施してやや抉り気味の幅広い刃部を作り出している。2 は薄手の小剥片の基部及び先端部位に僅かな剥離加工を施した粗雑な剥片石器であるが、刃部は鋭く尖頭状を呈している。

〈時期〉 本遺構に伴う出土遺物は 3 点の剥片石器のみで時期を特定できる土器などは出土していないが、おそらく縄文期のものと考えられる。



1. Hue 7.5 YR 黄褐色を呈し暗い。若干小礫混入。
2. Hue 7.5 YR 暗褐色を呈し、中等粘性有り。土塊片混入。
3. Hue 7.5 YR 灰色を呈し、粘性有り。
4. Hue 7.5 YR 灰色を呈し、中等粘性混入。



1 ~ 3  
S = 1/1

第17図 F V 土坑 1号・出土遺物

### HVI土坑1号（第18図・写真図版7）

〈位置〉 本遺構は、調査区の北東寄りの緩やかな斜面部 HVIグリッドに位置している。

〈検出状況〉 V層上位面にかけて不整橢円形状の暗褐色土の広がりを確認し、精査検出。

〈形状・規模〉 1.28 × 1.15 m の不整橢円形状のプランを呈し、深さは 0.38 m 土を測る。

〈断面形〉 比較的掘り込みが深く掘り鉢状を呈している。

〈埋土〉 乾性の暗褐色土、若干粘性・しまりのある褐色土、粗砂・微量の炭化物を含む褐色土、やや軟質の明褐色土、黒色土が霜ふり状に混入する褐色土、にぼい黄褐色土の塊の6層によって構成されている。

〈重複関係〉 本遺構は HVI土坑2号の南側部分の壁および底面を切って構築されている。

〈出土遺物〉 本遺構に伴う遺物は1層中より出土した繩文土器片第18図1、2、3、4・写真図版15-1、2、6、7の4点と第18図5、6、7の石製品3点である。1は若干磨滅しているが、体部に地文（原体 RL 線）を施したのち沈線と磨消技法によって加飾した深鉢形土器の胴部破片、2は細かい原体 RL を横方向に施した鉢形土器破片で、胎土・焼成とともに良好で堅緻な作りである。3は原体 RL 横、4は RL 横を施した粗製深鉢形土器の破片と推定される。

5、6、7は土坑底面に密着した状態でまとめて出土した白色凝灰岩製の環状石製品で、四面に丁寧な面取りを施して滑らかに仕上げている。

### HVI土坑2号（第18図・写真図版7）

〈位置〉 HV土坑1号と同様、調査区の北東寄りの緩やかな斜面部 HVグリッドに位置する。

〈検出状況〉 V層上位面にかけて黒褐色土の不整な広がりを確認し、精査検出。

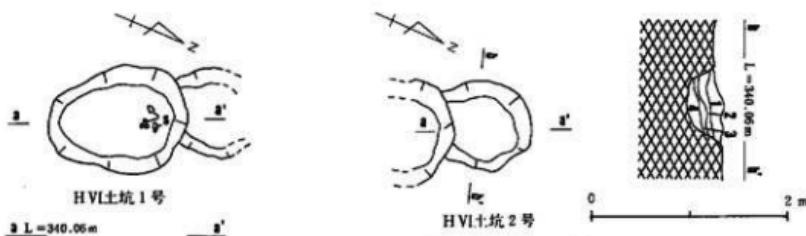
〈形状・規模〉 0.84 m 土の不整円形状のプランを呈している。

〈断面形〉 掘り込みが比較的浅く、掘り鉢状を呈している。

〈埋土〉 若干乾性の黒褐色土、粗砂・微量の炭化物を含む暗褐色土、粘性のある暗褐色土がロック状に混入する褐色土の3層によって構成されている。

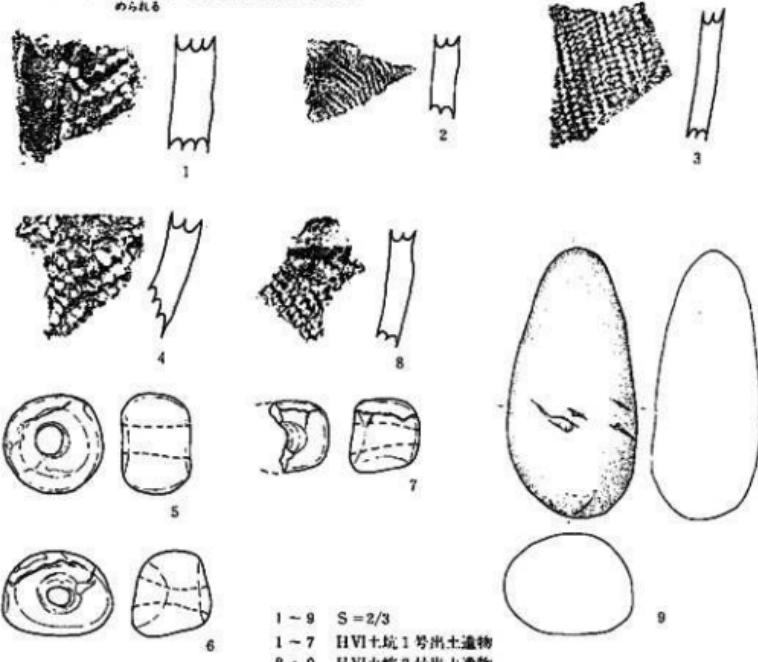
〈重複関係〉 HV坑1号によって土坑南側の壁及び底面の一部が壊されている。

〈出土遺物〉 本遺構に伴う遺物は第18図8、9・写真図版15-8、9の2点である。8は原体 RL 横の鉢形土器の胴央部破片と推定され、胎土・焼成とともに良好で堅緻なつくりである。9は棒状の磨石で、基部および先端部に僅かに擦痕が観察される。



1. Hue 7.5 YR 3/4 暗褐色を呈し、やや軟質
2. Hue 7.5 YR 5/3 にぼい褐色を呈し、やや粘性有り
3. Hue 7.5 YR 4/3 褐色を呈し、若干軟性。しまり有り
4. Hue 7.5 YR 4/3 褐色を呈し、若干粘性。しまり有り
5. Hue 7.5 YR 5/6 暗褐色を呈し、若干かたくしまっている
6. Hue 7.5 YR 4/4 褐色を呈し、若干くしまりしまり、若干小礫の混入が認められる

1. Hue 7.5 YR 3/2 暗褐色を呈し、ややしまり有り
2. Hue 10 YR 3/4 暗褐色を呈し、やや軟質
3. Hue 10 YR 4/4 褐色を呈し、やや粘性有り、若干土器片等含む
4. Hue 7.5 YR 4/3 黒色を呈し、しまり有り。



第16図 H VI土坑 1号・2号

#### I VI 土坑 1 号 (第 19 図・写真図版 6)

〈位置〉 本遺構は、調査区の北端 I VI グリッドに位置し、全体の 3 分の 2 ほどは調査区外に含まれているため未検出。

〈検出状況〉 V 層上位面にかけて乾性黒色土が霜ふり状に混入する明褐色土の円形状の広がりを確認し、精査検出。

〈形状・規模〉 調査区外の未検出部分があるが、現出部から推定し径 3.65 m 土の円形状のプランを呈するものと考えられる。深さは現出部底面で 0.58 m 土を測る。

〈断面形〉 本遺跡中では比較的掘り込みが深く、現出部で若干凹凸がみられるが、緩やかな立ち上がりで全体として摺り鉢状を呈している。

〈埋土〉 乾性黒色土が霜ふり状に混入する明褐色土、やや粘性・しまりのある暗褐色土、明褐色粘性土がブロック状に混入する黒褐色土の 3 層によって構成されている。

〈出土遺物〉 本遺構に伴う遺物は第 19 図 1・第 20 図 2~10・写真図版 16-1~10 の 10 点である。第 19 図 1 は埋土 1 層上位部で検出された口縁の内湾する粗製深鉢型土器で、口唇部は箆状工具等によって滑らかに整形され、体部文様帶は地文（繩文）のみで原体 RL が縦方向に施されている。胎土・焼成ともに良好で堅緻な作りである。

第 20 図 2・3・4・5 はいずれも埋土 3 層上位部で検出された同一個体の繊維土器で、口縁部に 3 cm 土幅の不整撚糸文による文様帶を有し、体部には原体 RL 縫が施されている一群である。なお口唇部の断面の形は内角が剥ぎ取られ、先端部分がやや尖って外傾しているのが特徴である。7・8 は小剣片の先端部に細かい剝離加工を施して鋭い刃部を作出し、搔器的機能を持たせたものと推定される。9・10 は基部及び先端部に粗雑な剝離を施した尖頭状石器である。

#### (3) 埋設土器遺構

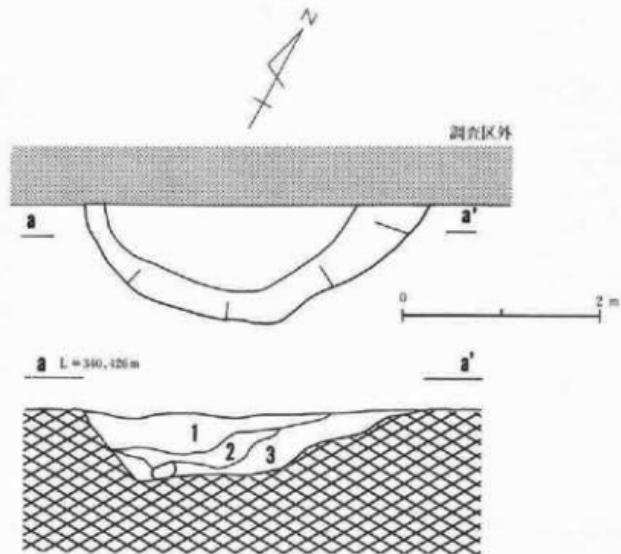
##### CIV 埋設土器遺構 (第 21 図、写真図版 8)

〈位置〉 本遺構は CIV グリッドと DIV グリッドの境界沿いに位置している。

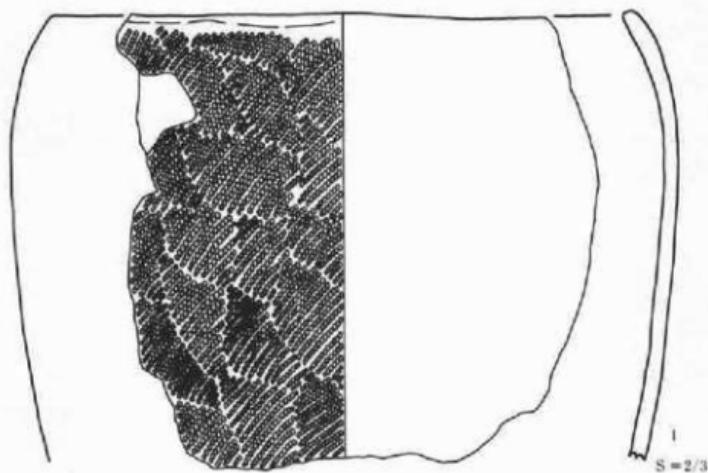
〈検出状況〉 V 層上位面で黒褐色土の周縁を巡る口縁部の一部を確認し、精査検出。

〈掘り込み〉 断面形より観察すると地山部分が径 0.28 m 土 × 深さ 0.35 m にわたって掘り込まれ、粗製深鉢形土器が正位の状態で埋設されている。

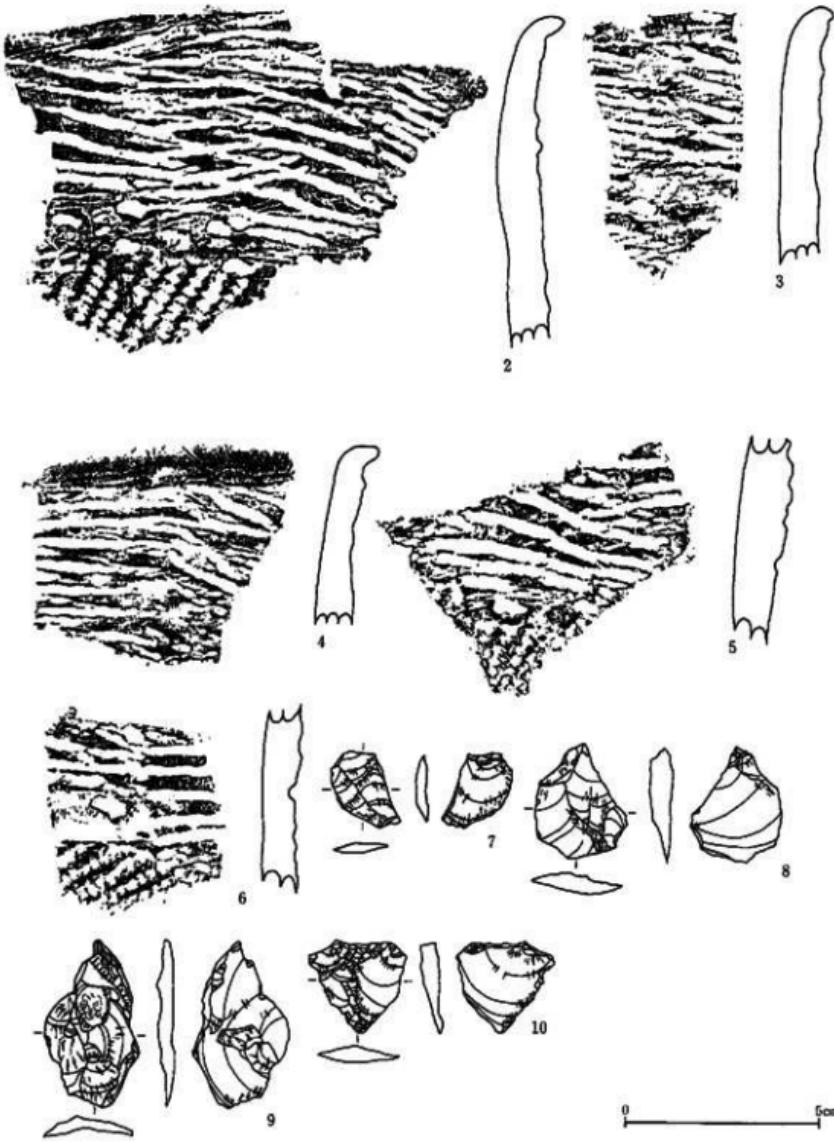
〈土器〉 埋設されている土器は (第 21 図 1、写真図版 12)、口縁部に二条の原体圧痕が巡るやや外反気味の粗製深鉢形土器で、口径 24.5 cm・器高 30.5 cm を測る。なお体部には原体 RL 斜めに施されている。胎土・焼成ともに良好で堅緻な作りである。



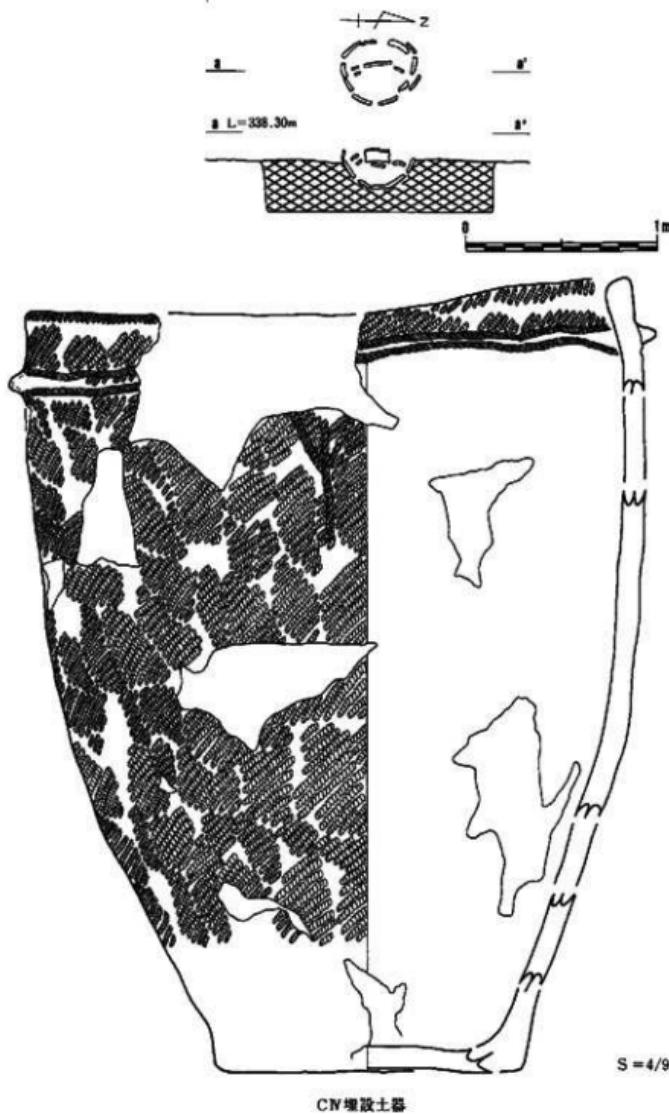
1. Hoe 7.5 YR 5/8 明顯色を呈し、比較的かたくしまっている
2. Hoe 7.5 YR 3/4 明顯色を呈し、湿度有り
3. Hoe 7.5 YR 3/2 明顯色を呈し、明顯色粘性土がブロック状に混入、若干土塊片等を含む



第15図 I VI土坑1号・出土遺物



第20圖 I VI 土坑 1號. 出土遺物



第21図 C IV 埋設土器構造

#### (4) 溝状造構

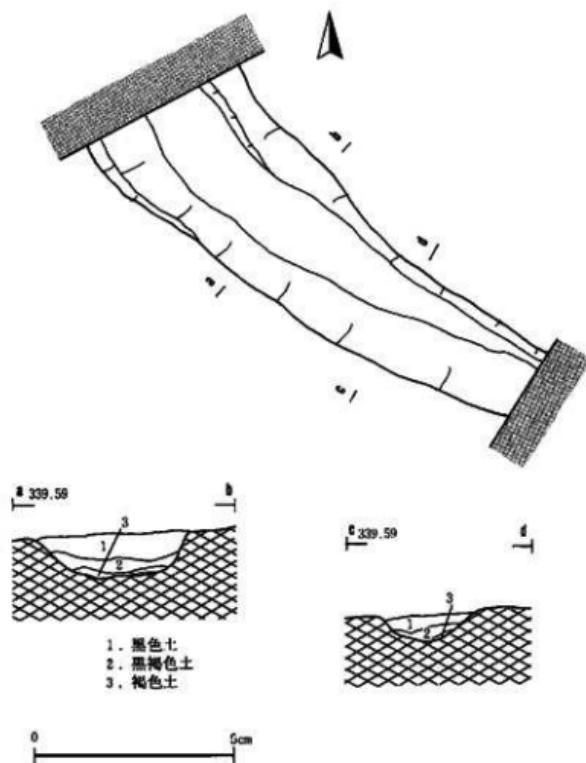
HVI溝状造構（第22図・写真図版9）

〈位置〉 調査区の北端 HVI・HVIグリッドから北東 FVI・FVII・GVIIグリッドにかけて位置している。

〈検出状況〉 IV層下位面で砂礫を含む黒色土の北東方向への広がりを確認し、精査検出。

〈規模・断面形〉 現出部で全長 9.6 m、最大幅 3.55 m、最小幅 0.8 m、深さ 0.58 m の規模を有し、断面形は緩やかに立ち上がる幅広い U字状を呈する。

〈埋土〉 砂礫を含む乾性黒色土、細砂を微量に含み若干粘性・しまりのある黒褐色土砂礫を含み黒褐色土が霜ぶり状に混入する褐色土の3層によって構成されている。



第22図 溝状造構

## 2. 出土遺物

### (1) 土器

黒内面遺跡出土の土器は、縄文時代早期・前期・中期・後期・晩期の広範な時期にわたっている。ここではこれら各期の縄文土器群を文様要素、文様意匠および器種の諸相（特に口頸部の形状）などをとらえて第Ⅰ群（早期）・第Ⅱ群（前期）・第Ⅲ群（中期）・第Ⅳ群（後期）・第Ⅴ群（晩期）に類分した。

#### 第Ⅰ群土器（第23図1、第35図1～14・写真図版17-1、写真図版30-1～14）

縄文時代早期物見台式に比定される貝殻沈線文土器の群である。本遺跡での当類土器は胴下部を欠損する半完成品1点と口縁部および胴央部破片14点と少なく、全体的な器形などは知り得ないが、おそらく平縁の尖底深鉢形土器の様相を呈するものと考えられる。第23図1は胴下部を欠損するが、頸部から緩やかに内湾するキャリバー状の口縁を有し、文様帶は口唇部に施された貝殻腹縁による連続刻目状文、内湾する口縁部を並走屈折する二条の沈線間に施された貝殻腹縁文、頸部を巡る二条の平行する沈線と連続刺突によって画された無文帶の三段の構成となっているが、現存部からの推定口径32.0cm、器高15.5cmを測り、色調はにぶい黄褐色を呈し、胎土・焼成とともに良好で堅緻な作りである。

第35図1～5は口縁部破片で、その形状（断面形から口辺部外角が削ぎ取られ、丁寧に整形されている）や文様構成（貝殻沈線）及び器厚などから第23図1の半完成品と同一のものと考えられる。6、8～14はいずれも細片であるが、は頸部無文帶の幅や器厚などから同種のものであろう。

#### 第Ⅱ群土器

縄文時代前期に比定される繊維を含む土器群を一括した。

#### 第Ⅰ類土器（第23図2・写真図版17-2）

胎土に粗砂及び繊維の混入する表裏縄文の土器を本類とした。本遺跡ではただ1点の出土で第23図2は口縁部がやや外反し、体部地文は原体LRによって施されている。また裏面口辺部には同一原体によって幅7cmの縄文帶が施されている。胎土に粗砂を含み、焼成も不良である。なお色調は明褐色を呈し、口径15.2cm、底径10.0cm、器高25.5cm、器厚0.8cmを測る。

#### 第2類土器（第20図2～6・写真図版16～2～6）

胎土に繊維を含み、不整撚糸文による口縁部文様帶を有する土器群を本類とした。大木1式～大木2a式に比定される繊維土器で、本遺跡ではI IV土坑1号より5点出土している。第20図2～6は口縁部に結束のない不整撚糸文による文様帶を有し、体部には繩文（原体LR）が施されている。いずれも小破片のみであるため全体的な器形などは知り得ないが、おそらく口縁の外反する深鉢状を呈するものと推定される。

なお口縁部の断面形では、内角が削ぎ取られて口辺部がやや屈折していることが観察される。

#### 第3類土器（第36図18～22・写真図版30～18、19、20・31～21、22）

体部文様として結束のある羽状繩文を施した繊維土器を本類とした。第36図18～22はいずれも磨耗しているが、結束した羽状繩文の羽根の先端部分を重ね会わせて結束部分を強調した文様で構成されている。この種の土器は大槌町崎山弁天遺跡第II群第2類土器に類例を認めることができる。

#### 第4類土器（第35図16、17・写真図版30～16、17）

体部文様として木目状撚糸文を有する繊維土器を本類とした。17は細片であるが、頸部を巡る隆帯（粘土紐の貼り付け）によって口縁部文様帶と精緻な木目状撚糸文を施文した体部文様帶が区画されている。本類土器は胎土に微量ながら繊維を含むことや圧縮された口縁部と頸部に配された隆帯（粘土紐貼付）及び体部に施文された木目状撚糸文などから繩文時代前期末葉円筒下層d式に比定される。

#### 第5類土器（第24図4・写真図版17～4）

胎土に粗砂及び繊維を含む素文（無文）土器は本遺跡ではただ1点の出土である。4は胴上部を欠損するが、残存部の観察から縱方向に断続的に籠状工具などによる整形時の擦痕が認められる。なお色調は明赤褐色を呈し、全体的に脆弱な作りである。底径9.5cm、残存部の器高15.8cm、器厚0.8cmを測る。

### 第Ⅲ群土器

縄文時代中期前葉から後葉に比定される土器群を一括した。

#### 第1類土器

本類土器は縄文時代中期前葉に比定される土器群である。

##### 第1a類土器（第23図3、第36図28～32、34、35・写真図版17-3、31-28～33、35）

第36図28～32、34、35は頸部に巡らされた隆帯（太い粘土紐による貼り付け）とこれによって区画された口縁部に横走する数条の撚糸圧痕の文様帶を有する特徴をもっている。第23図3は口縁部を欠損するが、頸部を巡る隆帯とこれに施文された縦位の短線状縄文圧痕文による装饰性などから一応円筒上唇a式に帰属させた。なお体部地文は原体LRによって施されている。色調は橙色、底径13.0cm現存部の器高34.0cm、器厚1.0cmを測る。

##### 第1b類（第36図26、27・写真図版31-26、27）

26は波状の口縁頂端部から垂下する隆帯とこれを半割する縦の撚糸圧痕および瘤状小突起で加飾されている。27は口縁頂端部から垂下する隆帯の両側面に撚糸圧痕が施されている。

##### 第1c類土器（第36図24、写真図版31-24）

口縁部から垂下する隆帯とこれを半割する撚糸圧痕による加飾という点においては第1b類土器の26、27に類似するが、これらよりも隆帯が平坦に研磨整形され、撚糸圧痕文は口辺から継横二段に整然と施されているのが特徴的である。

##### 第1d類土器（第36図25、33・写真図版31-25、34）

口唇部およびやや肉厚の頸部に刻目状に縦位短線撚糸圧痕文が施され、口頸部に付される横位の直線状撚糸圧痕の間隔がやや狭いのが特徴である。

##### 第1e類土器（第37図36・写真図版31-37）

本類土器は、口縁部破片ただ1点の出土で全体的器形などは把握できないが、おそらく口縁外反の円筒深鉢形を呈するものと推定される。細緻な撻糸圧痕による複線的波状文（鋸歯状文）が施されている。なお第1b類土器と同様口辺部及び頸部に巡らされた隆帯（粘土紐による貼り付け）には刻目状に撻糸圧痕が付されている。

#### 第2類土器（第37図37～42・写真図版31～38～41、32～42）

本類土器は口縁部破片の形状などから隆起帯（粘土紐貼付）によって加飾された肉厚・外反の四対の肩状把手と半月状撻糸圧痕（爪形状撻糸圧痕文）を有する円筒深鉢形を呈するものと推定される。なお爪形状撻糸圧痕文は、コイル状の細緻な短線撻糸圧痕の施文される隆帯に沿って一段および二段に付されている。

#### 第3類土器（第37図44～47・写真図版32～43～46）

本類土器は口頸部を飾る肩状把手および隆帯による文様装飾という点で、第2類土器に類似するが、隆帯に沿う爪形状撻糸圧痕文は第2類が指先状のやや丸みをもった弧状に付されるのに対して本類のそれはやや直線的で恐らく棒状あるいは籠状工具等による連続刺突によるものと推定される。

#### 第4類土器（第24図5、6、7・第25図8～11・写真図版18～5～7、19～8～11）

第24図5は口辺部がやや肥厚する複合口縁の様相を呈する円筒形の粗製深鉢である。体部地文は原体LRによって施文され、結束による綾絡文が顕著に觀察される。色調はにぶい褐色を呈し、胎土・焼成はやや良好で全体的に脆弱な作りである。口径20.8cm、底径12.4cm、器高33.8cm、器厚1cmを測る。

第24図の6は四つの大波状の口縁部を中心に、波頂部に配された渦巻文とこれより垂下する二条の隆起文及び頸基部から体部にかけて連結する綾位の綾絡文によって見事に装飾された深鉢形土器である。なお頂端部から垂下する隆起線は両側面から原体圧痕による入念な整形がなされている。

体部地文は原体 RL 線によって施され、色調はにぶい橙色を呈する。胎土・焼成とともに良好で口径 27.5 cm、底径 12.1 cm、器高 27.1 cm、器厚 0.9 cm を測る。

第 24 図の 7 は緩やかな波状を呈する口縁内窓の深鉢形土器で、半截竹管工具などによる二条一組の沈線および刺突文によって口頸部文様帯が構成されている。胎土・焼成とともに良好で堅緻な作りで、色調はにぶい褐色を呈し、現存部口径 19.0 cm、器高 19.0 cm、器厚 0.9 cm を測る。地文は原体 LR によって施されている。

第 25 図 8 は胴下部を欠損する半完形で、キャリバー状の口縁部には原体による連弧状の压痕が施されているのが特徴である。なお口縁部地文に LR (横)、体部地文は羽状繩文が施され、胎土および焼成とともに良好で堅緻な作りである。色調はにぶい褐色を呈し、口径 29.0 cm、現存部器高 19.0 cm を測る。

第 25 図 9 は口縁部及び胴下部を欠損するため全体的な器形・文様などは把握できないが、胴央部の形状から恐らく円筒形の粗製深鉢形土器と推定される。体部地文は原体 LR (横) が不規則に施されている。色調は褐色を呈し、胎土・焼成とともに良好で堅緻な作りである。器高は現存部で 15.8 cm、器厚 1.1 cm を測る。

10 は胴上部の大半を欠損するため、9 と同様全体的な器形・文様などは把握できないが、胴下部に原体 LR 横による地文と横走する練格文が観察される。色調は橙色を呈し、現存部の器高は 15.6 cm、底径 16.2 cm、器厚 1.2 cm を測る。

11 も同様の欠損品で全体的な文様の構成、器形などは把握できなかったが、10 とともに底部の形状などから一応繩文時代中期のものと推定される。

第 38 図 49 は二条の平行沈線これと並走する二条の交互刺突による細隆線文によって加飾されている。

第 5 類土器 (第 26 図 12、第 38 図 52～54、第 39 図 55～61・写真図版 20-12、写真図版 32-52～58、写真図版 33-59～61)

復元土器は第 26 図 12 のただ 1 点で、胴央部から胴下部の大半を欠損するが、体部文様は原体 LR (横) の地文と入念に調整された粘土紐貼り付けによる流麗な渦巻文によって構成されている。なお粘土紐貼り付けによる隆起線の断面形状はやや丸みを有しているのが特徴である。色調はにぶい褐色を呈し、胎土・焼成とともに良好で堅緻な作りである。現存部での器高は 26.5 cm、器厚 1.8 cm を測る。他はいずれも破片であるが、粘土紐貼付による流麗な渦巻文によって加飾される深鉢形のものと推定される。

第6類土器（第26図14、第39図62～68、第40図69～83、第41図84～88、第42図99～105・写真図版21図14、33～62～74、34～75～93、35～104～106）

本類土器は、縄文時代中期後葉から末葉に比定されるもので、体部地文以外に隆起線および沈線による文様区画帯を有する土器群を包括した。

第6a類土器（第26図14・写真図版21～14）

頸部を巡る細く精緻な円形刺突列文によって無文の口縁部文様と胴部文様を明確に区画、その文様意匠は青森県最花貝塚、同櫻林貝塚、同石神遺跡等の大木9式併行の出土土器に酷似している。なお胴部文様は地文（原体RL綫）に肩部から二条一組の沈線を△状に垂下させ、装飾性を強調している。胎土及び焼成とともに良好で薄手ながら堅敏な作りである。色調は褐色を呈し、現存部器高9.0cm、口径9.0cm、器厚0.3cmを測る。

第6b類土器（第39図62～64・写真図版33～62～64）

本類は、いずれも破片で全体的な器形などは把握できないが、口縁部・胴尖部などからおそらく外反口縁のやや胴張の粗製深鉢形を呈するものと推定される。胎土および焼成とともに不良で全体的に脆い作りのものが多い。

第6c類土器（第39図65～68、第40図69～75・写真図版33～65～74）

第6b類土器と同様いずれも破片のみで、全体的な器形や文様意匠などは知り得ないが、二条一組の△状に垂下する隆起線による装飾文様が主体をなす土器群である。なお隆起線は整形され、第5類土器群の隆起線に比較してその断面はやや三角形に近い形状を呈し、並走する隆起線間は凹状に滑らかに作り出されている。

第5類同様、調査区のほぼ全域に散布が確認され、胎土・焼成とともに不良で全体的に脆弱な作りのものが多い。

第 6 d 類土器（第 40 図 77、78・写真図版 34 - 76、77）

本類土器は頭部を巡る凸状の隆起線とこれに付される円形刺突列文によって体部文様帶の上限が画されている。体部には沈線による文様区画帯が展開し、口縁部形状などから恐らくやや外反する深鉢形土器を呈するものと推定され、胎土・焼成ともに良好で堅緻な作りである。

本類土器はその文様要素などから大木 10 式古式の一様相を示す資料として捉えられるものであろう。

第 6 e 類土器（第 40 図 76、79 ~ 83、第 41 図 84、85・写真図版 34 - 79 ~ 84）

本類土器は、いずれも肩部等の破片のため全体的な器形は知り得ないが、沈線および磨消技法による曲線的な文様区画帯を有している。なお磨消部は丁寧に整形研磨され、その装飾性が強調され、曲線的文様区画手法の定型化した段階のものと推定される。なお付される沈線に①やや細目で、彫りの深いタイプ②棒状工具等によるやや太めの彫りの浅いものといった若干の差異が認められることから、今後他遺跡の類例を見ながら文様区画帯との関連を通じた系統的な検討が必要であろう。

第 6 f 類土器（第 41 図 86 ~ 98、第 42 図 99 ~ 105・写真図版 34 - 85 ~ 93・35 - 94 ~ 105）

本類土器は、第 6 a 類～第 6 e 類土器に伴って出土する装飾文様帯を有しない地文（繩文）のみの粗製深鉢形土器の一群である。第 41 図 86、87 は口唇部内角が削ぎ取りによる整形がなされ、やや内済気味の口縁を呈している。第 41 図 88、89、90 は口唇部調整の際のはみ出し部が隆起線化したものと考えられる。第 42 図 99 ~ 105 は底部破片でいずれも平底を呈し、器面が粗く調整されている。

今後、地文のみの本類土器に関しては第 6 e 類同様、伴出土器の吟味を通しての時間的な幅の検討が必要であろう。

#### 第IV群土器

##### 第1類土器（第21図・写真図版12）

二条の縄文圧痕による口頸部文様を有し、その直下に付される円孔を有する瘤状小突起が特徴的である。体部地文は原体LR横によって施され、器高31.2cm、口径23.8cm、底径12.6cm、器厚0.8cmを測る。胎土・焼成とともに良好で、堅緻な作りである。

##### 第2類土器（第26図13・写真図版20-13）

丁寧に調整された幅の広い口縁部と沈線・隆起線・磨消による胴部文様帯を有する土器で、円孔を有する橋状把手が特徴的である。現存部で器高14.6cm、器厚0.8cmを測り、胎土・焼成とともに良好で、堅い作りである。

#### 第V群土器

縄文時代晩期諸形式の土器群を一括し、通常行なわれている器種別にしたがって大別し、さらにそれぞれの内部における器形・施文などの異同を捉えて説明する。

##### (1) 瓢形土器

やや高めの器高をもち、内湾気味に推移してきた体部が上端部で外反に転じ、口縁部と体部に分化した器形である。口縁部形状・施文などから細分することができる。

##### ① 瓢形土器第1類（第27図15、第43図115～118・写真図版21-15、36-116～117、37-118～120）

本類土器は、比較的幅の広い口縁部に6～8条の平行沈線が付され、口唇部に鋸歯状の刻目を有する土器群である。第27図15は胎土・焼成とともに良好で、色調はにぶい褐色を呈する。体部には原体RLによって縄文が付され、現存部器高33.3cm、口径35.2cm、器厚0.8cmを測る。第43図115～118はいずれも口縁部破片で、断面形では口唇先端部が薄く調整され平行沈線間の段差が明瞭に観察される。

②同第2類（第27図16、第43図106～113、第44図119～124・写真図版21-16、36-107～114）

本類は、口唇部に第1類同様の鋸齒状の刻目を有し、「く」に外反する幅広い口頸部の上下端にそれぞれ三条の平行沈線を付した土器群である。第27図16は体部地文に原体RLを横に施し、色調はにぶい黄橙色を呈している。器高は現存部で24.0cm、口径36.6cm、器厚0.6cmを測る。第43図106～113はいずれも口縁部破片で、先端部位の沈線間は階段状に丁寧に器面調整されている。

③同3類（第43図114、第44図125～132・写真図版36-115、37-124、38-129～135）

本類はいずれも第1類、第2類に比してやや幅の狭い口縁部破片で、全体的な器形などは知り得ないが、口頸部上下端に平行する二条の沈線を施している一群もある。沈線施文後に入念な器面調整がなされ、光沢を有するものが多いようである。

## (2)壺形土器

有頸の細口壺、広口壺を中心に包括し、肩部および口頸部の形、文様の構成などからさらに細分した。

①壺形土器第1類（第29図27・写真図版23-27）

頸下部より緩やかに内傾気味に立ち上がる広口壺で、口頸部と肩部の境界線として二条の平行沈線を付し、丁寧に無文研磨されている。27は口径10.6cm、現存部の器高5.7cm、器厚0.7cmを測り、色調はにぶい灰褐色を呈する。胎土および焼成は良好で堅緻な作りである。

②同第2類（第29図28・写真図版23-30）

口辺および頸下部にそれぞれ平行する二条の沈線を付し、頸部下より緩やかに外反する広口壺である。なお残存部の観察から体部地文には原体RLを施し、肩部がやや張り出す形状のもと推定とされる。口径14.0cm、現存部器高5.3cm、器厚0.8cmを測る。全体的に丁寧に研磨され、色調はにぶい黄橙色を呈している。

③同第3類（第29図29、第45図134、137-139、141、142・写真図版23-28、38-137、140、144）

ほぼ直立的に立ち上がる頸部と外折する口辺部及び沈線を付した口唇部、なで肩的な肩部といった特徴を有する器形である。口縁部および胴上部の一部に僅かながら赤色顔料による塗装の痕跡が観察される。29は直立的に立ち上がる頸部に籠状工具による撫での整形痕跡が顕著に観察される。色調はにぶい褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好で、堅敏なつくりである。なお現存部で器高9.3cmを測る。137は口辺部位の破片であるが、いずれも口唇部に細沈線を施しており、器形的には29とほぼ同じ形状を呈するものと考えられる。

④同第4類（第45図133、135、136、138、140・写真図版38-136、138、139）

口辺部位に付された一条の細隆起線（口唇部の整形の際のはみ出し部分の隆起線化）と一、二条の平行沈線といった特徴をもって包括した。なお頸部はいずれも整形研磨され、光沢を有し、直口もしくはやや外反気味の形状を呈している。

器厚および口頸部の形状などから本類は同一個体の可能性が考えられる。

⑤同第5類（第45図143・写真図版38-145）

本類は、口唇部に鋸歯状の連続する刻目を有する頸部直口の整形土器で、前述した壺形土器と同様丁寧に整形研磨されている。また口唇部への籠状工具等による加装飾の手法は晩期後葉のカメ形土器のそれに類似している。

### (3) 深鉢形土器

従来の深鉢形土器の範疇に入るものの（口径〈器高的プロポーション〉を包括し、さらに施文法、口縁部形状などから細分した。

#### ① 深鉢形土器第1類（第28図23、第49図242、245、248・写真図版23-23、45-245、248、251）

体部に地文のみが施され、口辺部に幅の狭い無文帯を有する口縁内湾の一群である。第28図23は体部には体LRによる繩文が施され、器高11.3cm、口径15.5cm、器厚0.7cmを測り、胎土・焼成ともに良好で堅緻な作りである。

第49図242、248は晩期後葉特有の帶繩文とでもいべき条の綫長の繩文が施されており、胎土・焼成ともに良好で堅緻な作りとなっている。なお本類土器の口縁部位には僅かながら煤状の付着物が観察される。

#### ② 同第2類（第49図247・写真図版45-250）

本類は第1類同様体部に繩文のみが施され、口縁が「く」字状に屈折するもので、口唇部位の内側に剥ぎ取りによる調整痕が観察される。なおその際のはみ出し部分も入念に整形され隆起線の様相を呈しているのが特徴である。

#### ③ 同第3類（第28図24・写真図版22-24）

第1類よりも比較的幅広い無文帯を有し、口縁部がやや外反する器形である。なお口唇部に付された二個一対の小突起が特徴的である。色調は褐色を呈し、口径13.8cm、現存部器高10.5cm、器厚0.5cmを測り、体部地文は原体RLが施されている。

#### ④ 同第4類（第49図243、244、246・写真図版45-246、247、249）

本類は口辺部～体部にかけて条の綫長の繩文のみが施された直口の深鉢形土器で、口唇部が丁寧に成形され、やや丸みを呈している。胎土・焼成ともに良好で堅緻な作りのものが多い。

#### (4)鉢形土器

通有鉢形といわれているものを包括し、口縁部形状、施文などによって細分した。

##### ①鉢形土器第1類（第28図17、18、21、第48図223～225・写真図版22-17、18、22・43-226～228）

本類土器は、浮彫調の口縁部文様帯を有し、胴尖部から頸部にかけてやや内湾気味に立ち上がる均整のとれた精製鉢形である。第28図17は比較的幅のある口縁部に沈線・磨消・研磨による変形羊齒状文が浮彫調に展開し、口縁上部と胴上部に付された三条・二条の沈線が装飾文様帯の上下限が示されている。口径18.2cm、現存部器高9.5cm、器厚0.6cmを測り、体部は原体LRによって施されている。

18は口辺部を破損するが、口縁部は上下二段の羊齒状文風文様帯によって構成されている。器高13.2cm、口径18.2cmを測り、胎土・焼成ともに良好で堅緻な作りである。色調はにぶい褐色を呈し、体部は原体LRによって繩文が施されている。

21は内湾気味に立ち上がる器形で、口唇部に付された鋸歯状の連続刻目と口縁部を巡る三条の平行沈線間に付された浮彫調の羊齒状文が特徴である。胴尖部位から緩やかにやや内傾気味に立ち上がる器形で、現存部の器高6.5cm、口径14.8cm、器厚0.5cmを測る。なお体部には原体LRによる繩文が施されている。223～225はいずれも口縁部破片であるが、浮彫的手法によって羊齒状文が効果的に現出されている。

##### ②同第2類土器（第28図19、22・写真図版22-19、21）

本類土器は入念な刻目文によって彫刻的に仕上げられた口唇部を有し、頸部の整形された無文帯、胴尖部に展開する雲形文および大腿骨文によって特徴付けられる。

第28図19は頸部直下に二段にわたって原体施文による刻目状の文様が付され、胴尖部は横長に展開する流麗な雲形文調で装飾されている。体部地文は原体LRによって施され、胎土・焼成ともに良好で堅緻な作りである。現存部器高9.5cm、口径15.8cmを測る。

22は頸部付近より緩やかに外反する口縁で、口唇部は二個一対の小突起を有しているのが特徴的である。体部地文は原体LRで、胴尖部には磨消手法による雲形文調の文様が展開している。現存部器高6.4cm、口径9.2cm、器厚0.4cmを測り、胎土・焼成ともに良好で堅緻な作りである。

③同第3類（第48図227～230・第49図231～236・写真図版44～229～239）

本類土器は、いずれも頸部から緩やかな「く」の字状に外反する器形のものである。なお頸部に付された沈線間に連続する刺突列文とB状突起およびその変種（B状突起の退化）の瘤状小突起を有しているのが特徴である。また第2類同様、胴央部には磨消による装飾文様帯が展開しているが、第2類と比してその手法はやや流麗さに欠ける。第49図234は小破片で全体的な器形などは把握できないが、頸部上に粘土粒貼付けによるB状小突起が観察される。

④同4類（第28図20、第45図145～158、第46図159～163・写真図版39～147～160、40～161～166）

連続する刻目文の付された口唇部を有し、頸部を巡る2～4条の平行沈線とその間に付された点刻文及び刻目文による文様構成が特徴的である。いずれも胎土・焼成ともに良好で、堅緻な作りのものが多い。口唇部の形状は頸部位より緩やかに外反し、口唇部内側に一条の沈線を有し、上面観を意識した精製品（第28図20、第45図145～154）、胴上部よりほぼ直立的に立ち上がり、口唇内部に沈線を有するもの（第45図155～158、第46図161～163）、胴上部よりほぼ直立的に立ち上がり、口唇先端が細く成形されているもの（第46図159、160）の三種に類分することができる。

第28図20は頸部より緩やかに外反を口唇部を有し、口唇部位に付された一条の沈線および四つの山形状突起は明らかに上面観を意識した文様意匠となっている。現存部器高7.5cm、口径20.2cm、器厚1.1cmを測り、胎土・焼成ともに良好で堅緻な作りである。体部地文は原体LRによって施されている。

⑤同第5類土器（第46図164、165・写真図版40～166、167）

口唇部及び頸部の平行沈線と刻目列文を基調とした文様構成は第4類とほぼ同様の手法で施されているが、体部に若干簡素化した磨消技法が取り入れられているものである。胎土・焼成ともに良好で堅緻な作りのものが多い。

⑥同第6類（第46図166～188・写真図版40－169～177、41－178～190）

口唇部に付された鋸歯状刻目文と等間隔に付された二条～三条の細い平行沈線による口頸部文様帶を特徴とする土器群である。なお肩央部より緩やかな弧を描いて立ち上がる器形で、体部には晩期後葉特有の縦長の帯繩文とでもいうべき地文が施されている。また口縁部には、沈線間の整形調整による段差が顕著に観察される。

⑦同第7類（第47図200～206、第48図207～212・写真図版42－202～215）

本類は鋸歯状の刻目文及び平行沈線を基調とする口縁部文様構という点で第6類土器に類似するが、口縁部位に付される平行沈線の幅が若干広く太いのが特徴である。なお体部地文は縦長の繩文が付されている。

⑧同第8類（第48図226～230・写真図版44－229～233）

いずれも口縁部破片で、全体的な器形などは把握できないが、口頸部が「逆く」の字状に内傾しているのが特徴である。第48図226は口辺部に山形状の突起を有し、口唇部の両側に付した細沈線間に連続刻目列文が施されるなど上面觀を強く意識した装飾が展開している。他の破片は磨耗しているが同様の文様意匠を呈するものと考えられる。

⑨同第9類（第47図194～199・写真図版41－197～199、42－200、201）

本類土器は、口唇部の鋸歯状刻目文、頸部位の比較的彫りの深い二～三条の平行沈線文、体部に施されるやや簡略化された磨消繩文の三段構成となっている。特に他の類形に比して内部の器面調整が入念に行なわれ、光沢を有しているのが特徴である。

(5)台付浅鉢形土器（第30図32・写真図版24-31）

基脚部を欠損するが、全面に朱彩の施された精製品である。口唇部上には上面觀を意識した二個一対の蚕豆状の小突起が彫刻的な作り出しによって入念に仕上げられ、この隣接する小突起間に連結するかたちで彫り込みが印象的に付されている。

体部には磨消による雲形文様が器面全体に展開し、上限は口辺部を巡る二条沈線によって、下限は基脚部周縁に付された三条沈線によってそれぞれ画されている。器高5.5cm、口径22.8cm、器高0.7cmを測る。体部地文は原体LRによって付され、口唇部の形状や体部の文様帯構成などから、晩期大洞C<sub>1</sub>式に比定されよう。

(6)浅鉢形土器

鉢形土器と皿形土器の中間的な器種を包括した。

①浅鉢形土器第1類（第32図34、35・写真図版26-33、34）

口縁部位に二条の沈線を有し、体部に磨消による文様帯が展開する鉢形の土器である。34は体部に磨消技法による先端部の尖る流麗な雲形文調のモチーフが展開し、その下限は底部周縁の二条一組の沈線によって画されている。体部地文は原体LRで付され、口径14.8cm、器高4.5cm、器厚0.6cmを測る。35も同様の装飾手法で行なわれ、地文は原体LRで、器高5.4cm、口径11.6cm、器厚0.4cmを測る。

②同第2類（第32図36・写真図版27-37）

本類は、前述した浅鉢に比して若干器高が高い椀状の無文土器である。第32図36は内外両面に比較的粗い調整を加えた粗製品で、色調はにぶい褐色を呈し、器高8.0cm、口径17.3cm、底径5.0cmを測る。

③同第3類（第33図40、41・写真図版28-40、41）

体部に文様帯をもたず、沈線のみが施される精製土器を本類として捉えた。第33図40は口唇部の一条沈線、口縁部の併走する二条沈線、底部周縁の同心円状に配された三条沈線の三段で構成され、体部および底部は入念に整形研磨によって光沢のある無文帶となっている。口径11.2cm、器高3.5cm、器厚0.9cmを測る。

第33図41は口縁部位を欠損するが、底部周縁に精円形状の二条沈線を巡らして体部無文帶との境界を画している。残存体部および底部は40と同様丁寧に整形研磨され、光沢を有する。胎土・焼成ともに良好で堅緻な作りである。底径4.0cm、器厚0.6cmを測る。

(7)皿形土器

広義の鉢形土器のうち、浅鉢形土器よりも口径に比較して器高が極端に低い器種のものを包括した。

①皿形土器第1類（第31図33・写真図版25図32）

本類は概述した台付浅鉢形土器と同様、上面観を意識した彫刻的なつくり出しの口唇部を有し、体部全面に磨消による大腿骨文調のモチーフが施されているものである。第30図33では、口唇部は隆起への彫刻的なつくり出しによる二個一対の小突起と内側に付された連続する刺突列の二構成となっている。体部文様のモチーフは磨消による雲形文で、その上限は口辺部位の一条の沈線を埋める刺突列文によって、下限は二条沈線によって示されている。

底部中央部位は沈線によって円形に間取りされ、凹状を呈している。なお色調は赤褐色を呈し、部分的に赤色顔料によって塗装の痕跡が認められる。器高4.9cm、口径20.8cm、底径8.2cmを測る。

②同第2類（第33図38・写真図版28-38）

本類土器は、比較的安定した底部位より緩やかな弧を描いて立ち上がる器形で、口唇部先端は剥ぎ取り調整によってやや先細りの觀を呈し、体部に施された平行化した大腿骨文調のモチーフが特徴的である。第32図38は第1類のように口唇部位に上面觀を意識した彫刻的な装飾文様帯をもたず、口縁部および底部周縁の二条沈線によって体部文様帯の上下限が画されている。

色調は鈍い黄橙色を呈し、胎土・焼成ともに良好で堅緻な作りである。体部のモチーフは主體要素は大腿骨文と推定され、全体としてやや平行化の傾向が観察される。体部地文は原体RL横によって付され、器高4.0cm、口径12.2cm、器厚0.5cmを測る。

③同第3類土器（第33図39・写真図版28-39）

本類は、第2類と同様底部位よりゆるやかな弧を描いて立ち上がる器形で、体部～底部位にかけて精緻な地文（繩文）のみが施されているのが特徴である。第32図39は口唇部に一条の細沈線と山形状小突起を有し、口縁部の三条沈線によって体部文様帯（原体LR横によって付された繩文）の上限が示されている。

色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土・焼成ともに良好で堅緻な作りである。器高4.1cm、口径15.6cm、器厚0.8cmを測る。

④第4類土器（第32図37・写真図版26-35）

比較的彫りの深い溝線状沈線によって体部地文が明瞭に区割りされるものを本類とした。第32図37は口縁部および胴上部の大半を欠損するため全体的な形状、文様構成などは把握できないが、残存状況から、おそらく第1類、第2類同様の器形を呈するものと推定される。底部周縁に付された溝線状沈線によった体部（原体LR横によって施された繩文帯）との境界が示され、底面中央部位は凹状に無文地に磨り消され、安全性を増した器種となっている。色調はにぶい褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好で堅緻な作りである。

#### (8)注口土器

通常有注口土器といわれているもので、器形および文様構成などから次の三種に類分される。

##### ①注口土器第1類（第29図31・写真図版26-36）

第29図31は口唇部に一条沈線と鋸歯状の刻目が付され、上面観を意識した意匠構成となっている。口縁部には刺突列文と三条沈線が付され、体部文様帶の上限が示されている。体部文様帶は磨消手法によってχ字状のモチーフが展開し、その下限は胴央部の隆起帯の鋸歯状刻目文・刺突列文および三条沈線によって示されている。なお体部地文は原体LRによって施され、色調は灰褐色を呈している。推定口径10.0cm、現存部器高6.3cm、器厚0.6cmを測る。胎土・焼成とともに良好で堅緻な作りである。

##### ②同第2類（第51図275・写真図版47-278）

第1類に比して胴央部からの内傾度が少なく、口唇部に鋸歯状の刻目を有するものを本類とした。第51図275は口唇部に鋸歯状の刻目を有し、やや外にはみ出す「状」を呈している。

体部文様帶は第1類と同様磨消によってχ字状のモチーフが展開し、体部文様帶の上限は沈線を埋める二段一組の刺突列文によって示されている。なお胴央部を巡る隆起带上には突起が貼り付けられている。体部地文は原体LRによって施され胎土・焼成とともに良好である。

##### ③同第3類（第51図274、276、277・写真図版47-277、279、280）

胴央部からほぼ垂直に近いかたちで立ち上がる器形で、比較的幅広の無文頭部を有している。第51図274は口縁部及び胴央部の隆起带上に付された二段の刺突によって体部無文帶の上下限が示されている。胎土・焼成とともに良好で、堅緻な作りである。276は同一個体の胴央部破片と推定され小突起が観察される。

#### (9)研磨土器

整形研磨が他類に比して特に入念に行なわれ、光沢のある無文部を有するものを一応包括したが、いずれも細破片で全体的な形状などは把握できなかった。

①研磨土器第1類（第52図278～280・写真図版48図281～283）

口縁部に沈線及び円形刺突列文字を付し、体部全面が入念に整形研磨された無文帯で構成されている。277～279はいずれも細片であるが、器の内側にも整形研磨が施された精製品である。

②同第2類土器（第52図281～294・写真図版48～284～297）

一応無文研磨土器として包括した。いずれも細片で全体的な器形などは把握できないが、皿・壺などの無文部の可能性も考えられる。胎土・焼成とともに良好で堅緻な作りのものが多い。

③小形土器

通有ミニチュア土器といわれているものを包括した。

①小形土器第1類（第34図42・写真図版29～42）

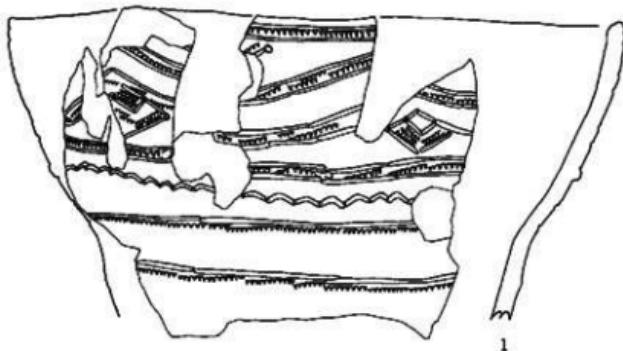
湯呑茶碗状の無文土器で、器面は入念に成形研磨され、光沢を有する。色調は黄橙色を呈し、器高3.8cm、口径3.0cm、底径2.8cm、器厚0.7cmを測る。

②同第2類（第34図43・写真図版29～43）

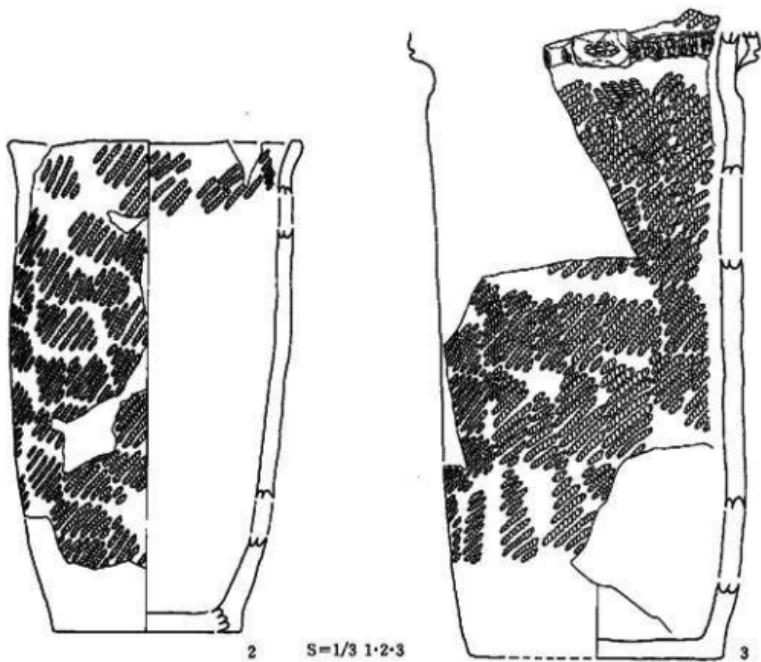
胴下部を欠損するが、なで肩の壺形土器に似た器種で、文様は口縁部位の無文帯と胴央部の無文字地へ沈線文の二段構成となっている。胎土・焼成とともに良好で堅緻な作りである。色調はにぶい橙色を呈し、現存部器高2.7cm、口径2.8cm、器厚0.5cmを測る。

③同第3類（第34図44・写真図版29～44）

緩やかな波状の口縁と丸底を有し、全体として掘り鉢状を呈する無文土器である。色調は橙色を呈し、器高2.6cm、口径5.1cm、底径0.4cm、器厚0.4cmを測る。

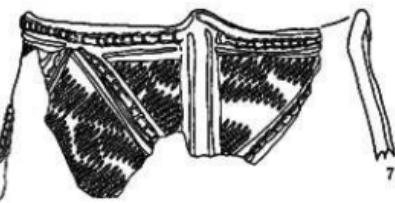
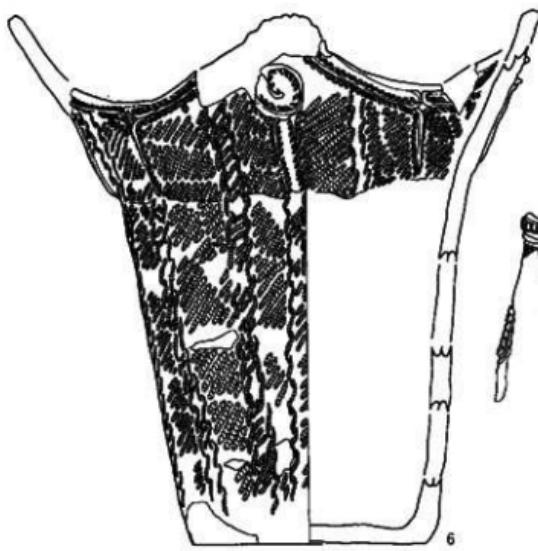
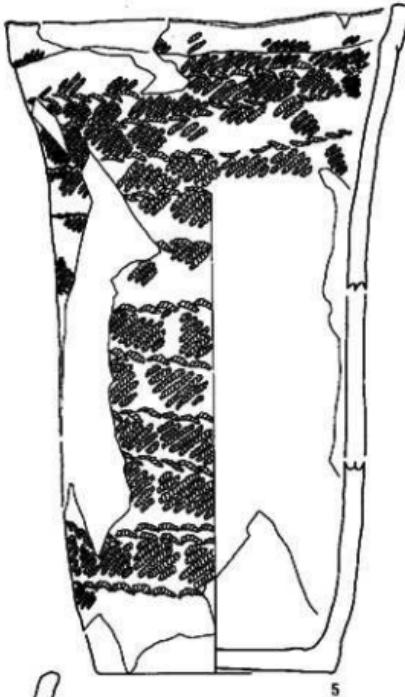
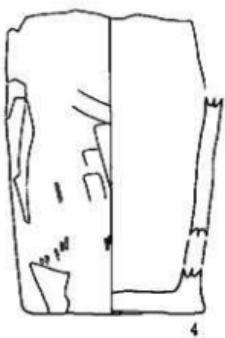


1



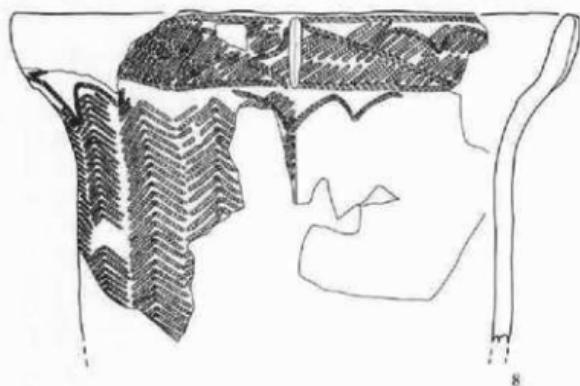
2       $S = 1/3$  1·2·3      3

第23圖 造構外出土土器(1)



S = 1/3 4+5+6+7

第24図 造構外出土土器(2)



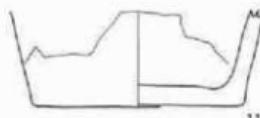
8



9



10

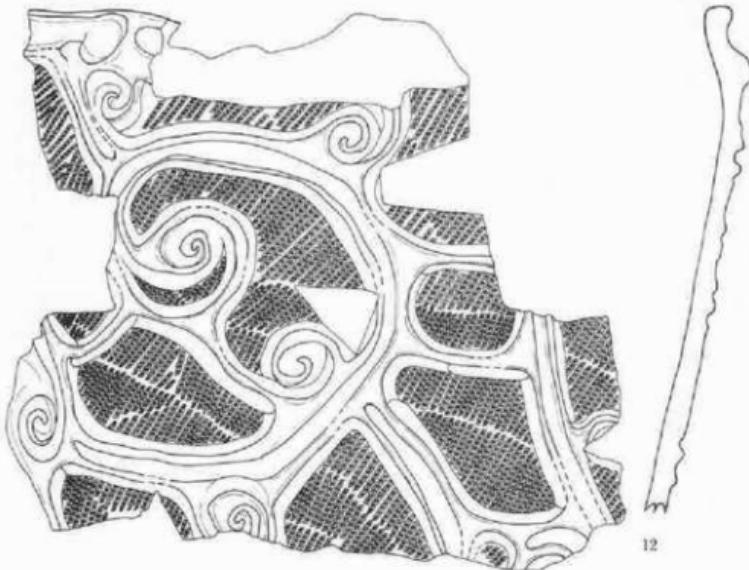


11

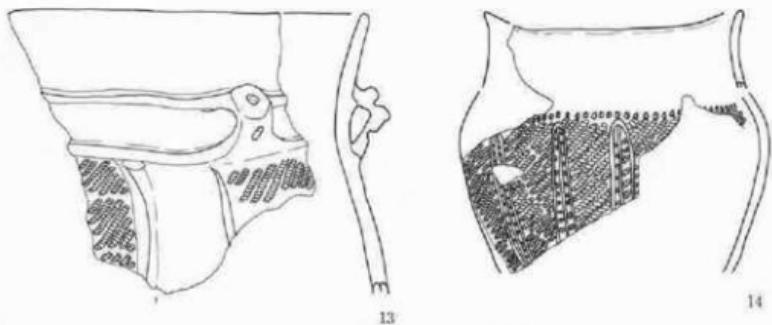


$S=1/3$  8-9-11  
 $S=1/2$  10

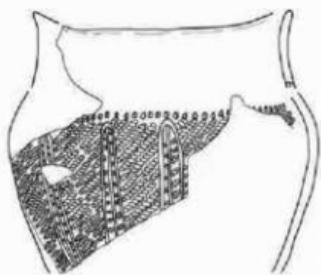
第25図 造構外出土土器(3)



12



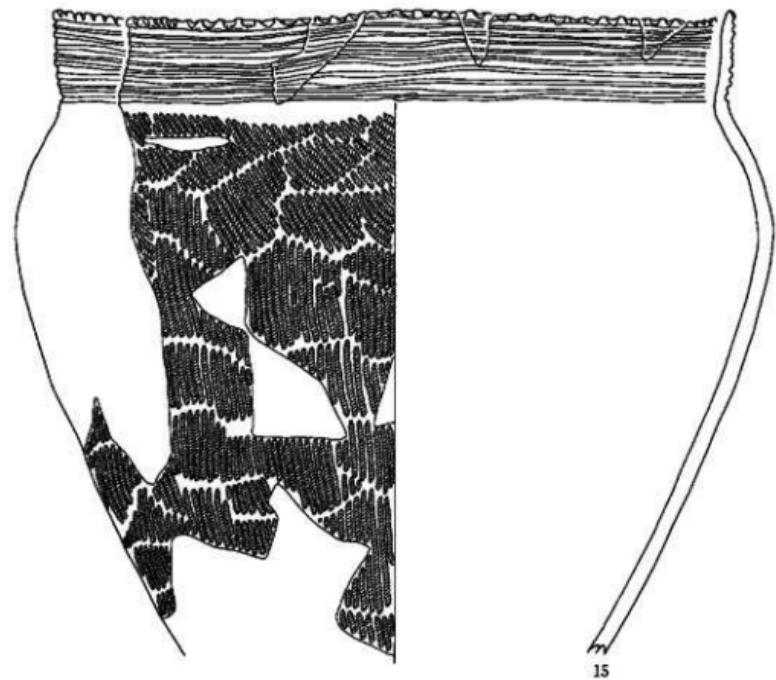
13



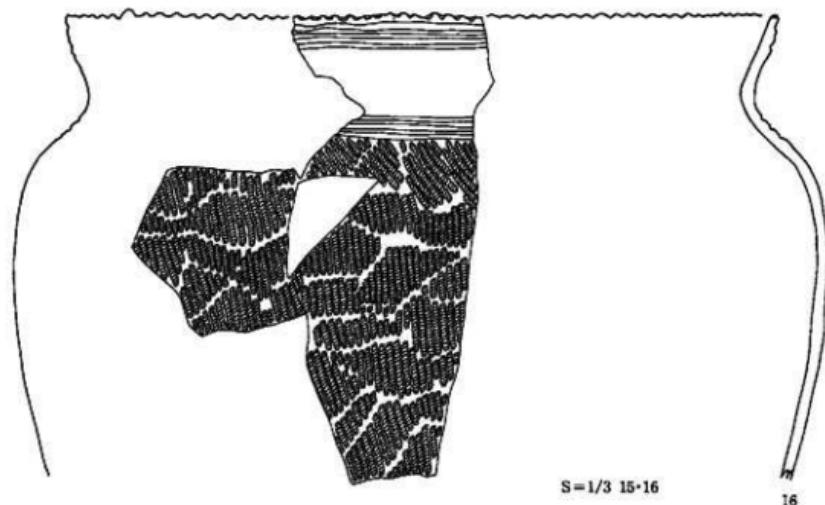
14

S=1/3 12·13 S=1/2 14

第26図 造構外出土土器(4)



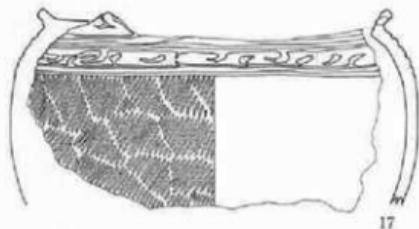
15



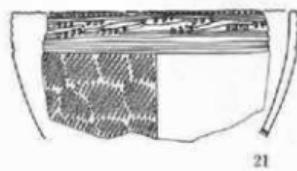
S=1/3 15-16

16

第27図 造構出土土器(5)



17



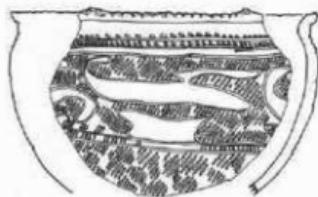
21



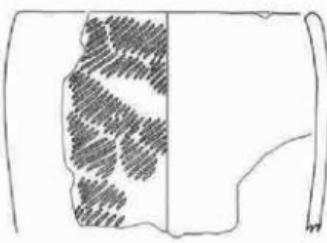
18



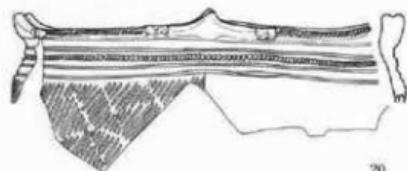
22



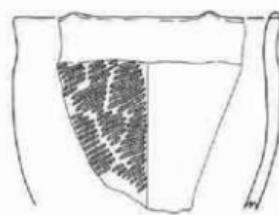
19



23



20



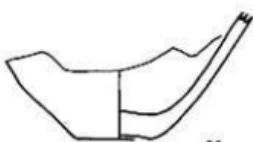
24

 $S=1/3$  17·18·19·20·21·23·24  $S=1/2$  22

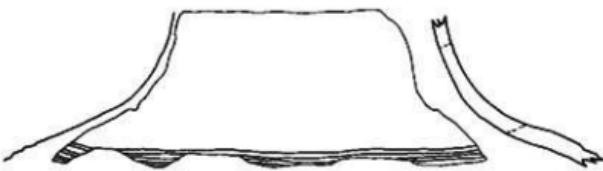
第28図 遺構出土土器(6)



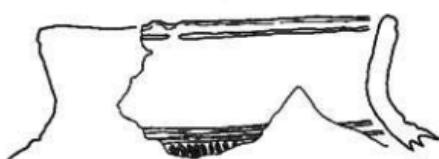
25



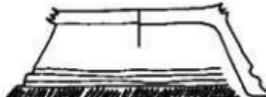
26



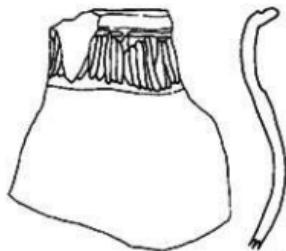
27



28



30



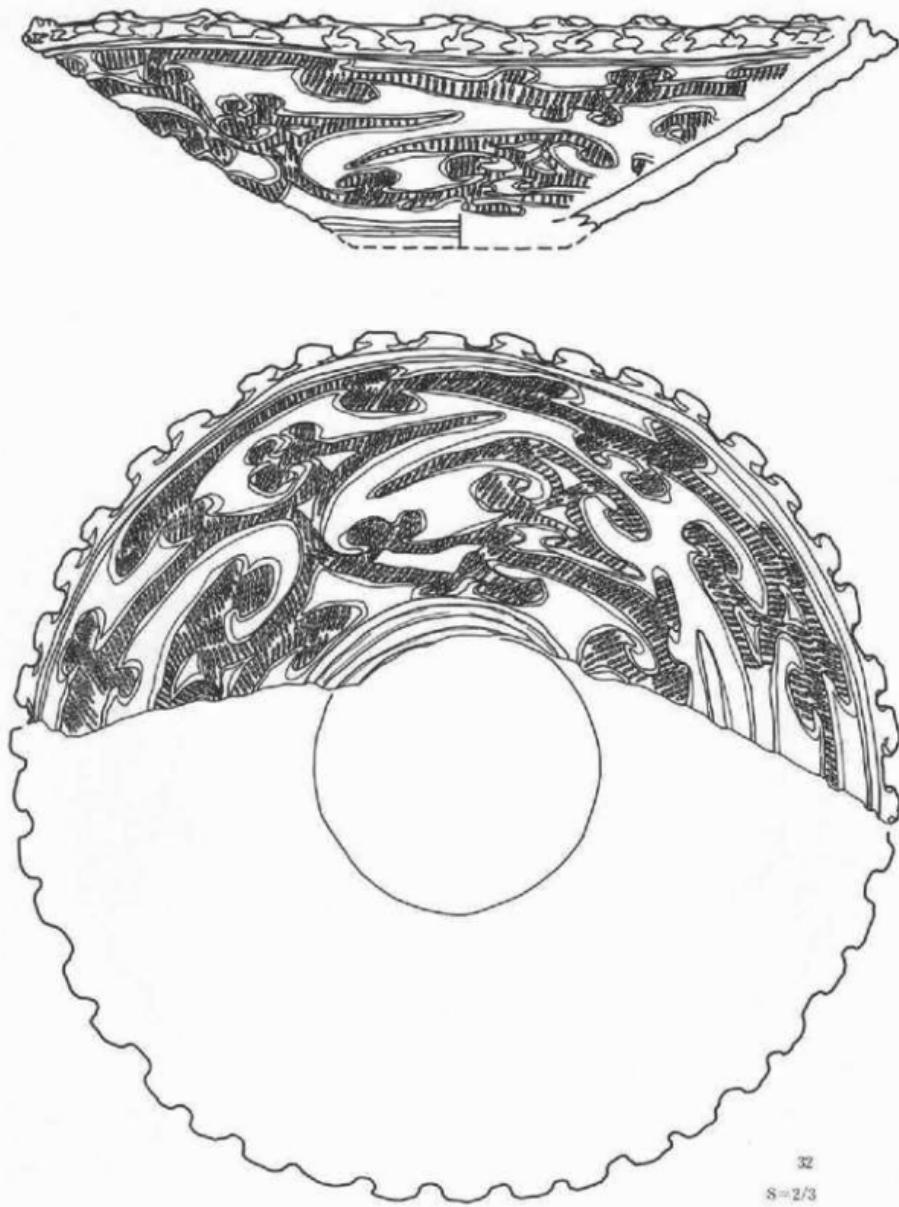
29



31

 $S = 2/3 \cdot 25 \cdot 26 \cdot 27 \cdot 28 \cdot 29 \cdot 30 \cdot 31$ 

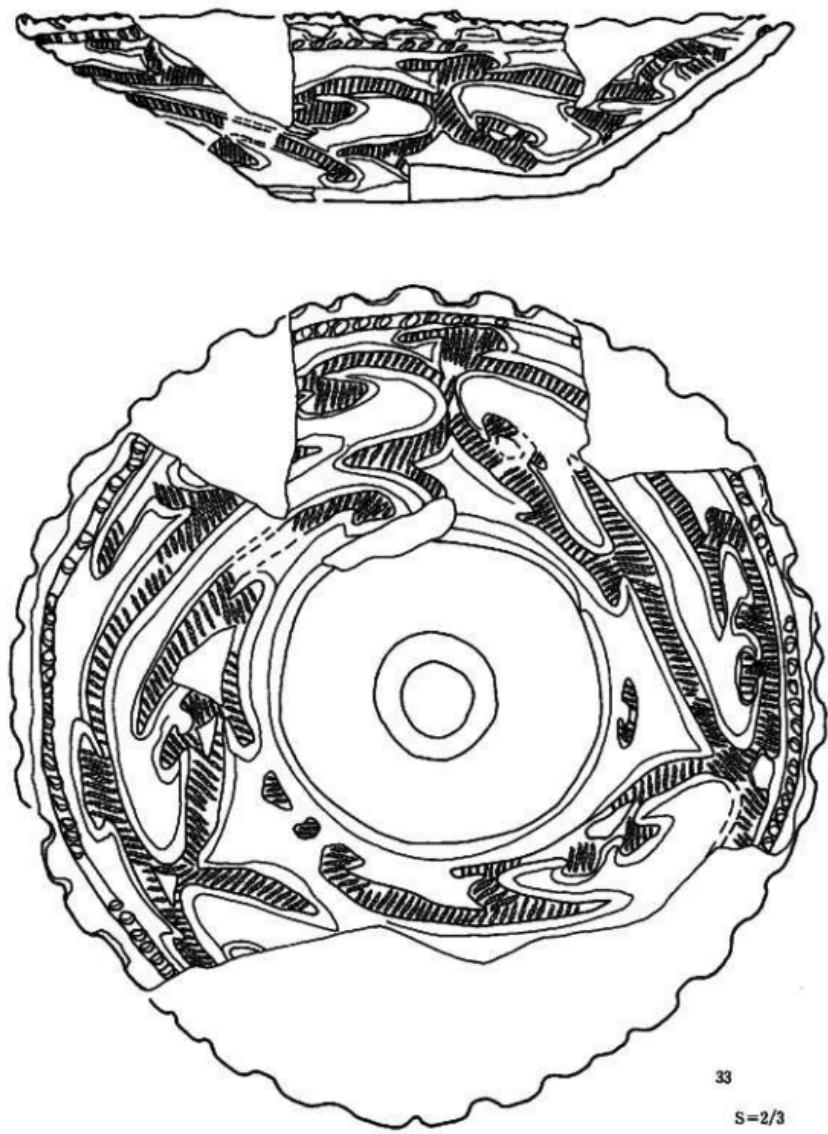
第29図 造構外出土土器(7)



第30圖 造構外出土土器(8)

32

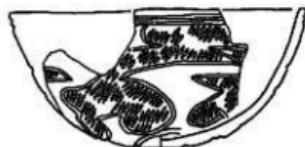
S=2/3



33

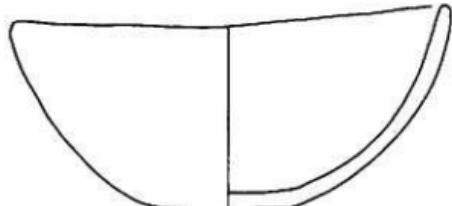
S=2/3

第31図 造構出土土器(9)



34

35



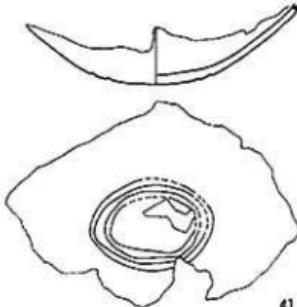
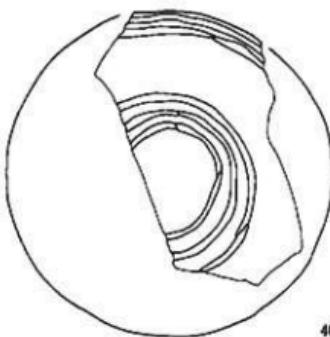
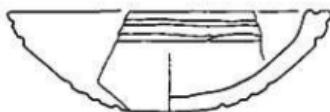
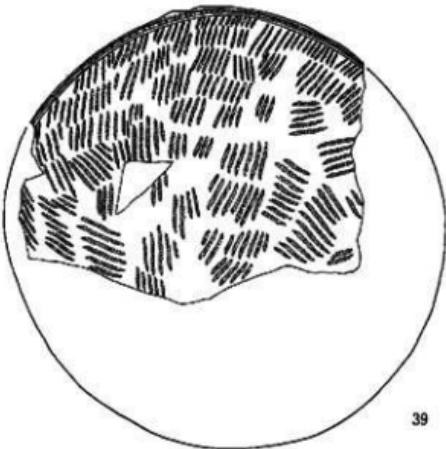
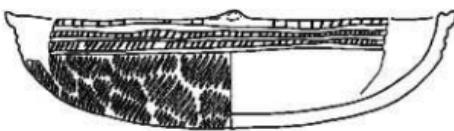
36



37

$S = 2/3$  34-35-37  
 $S = 4/9$  36

第32図 遺構外出土土器(10)

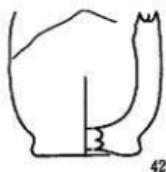


40

41

S = 1/2 38~41

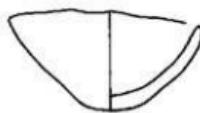
第33図 造構外出土土器(11)



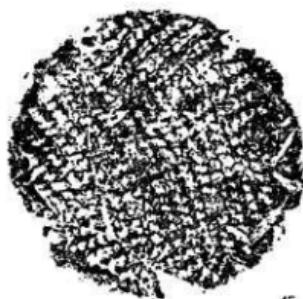
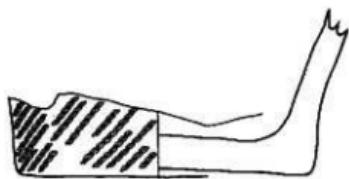
42



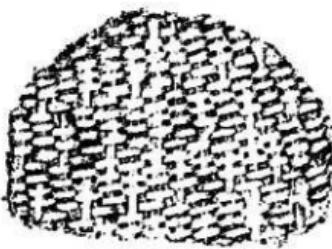
43



44



45



46

 $S = 2/3$  42~46

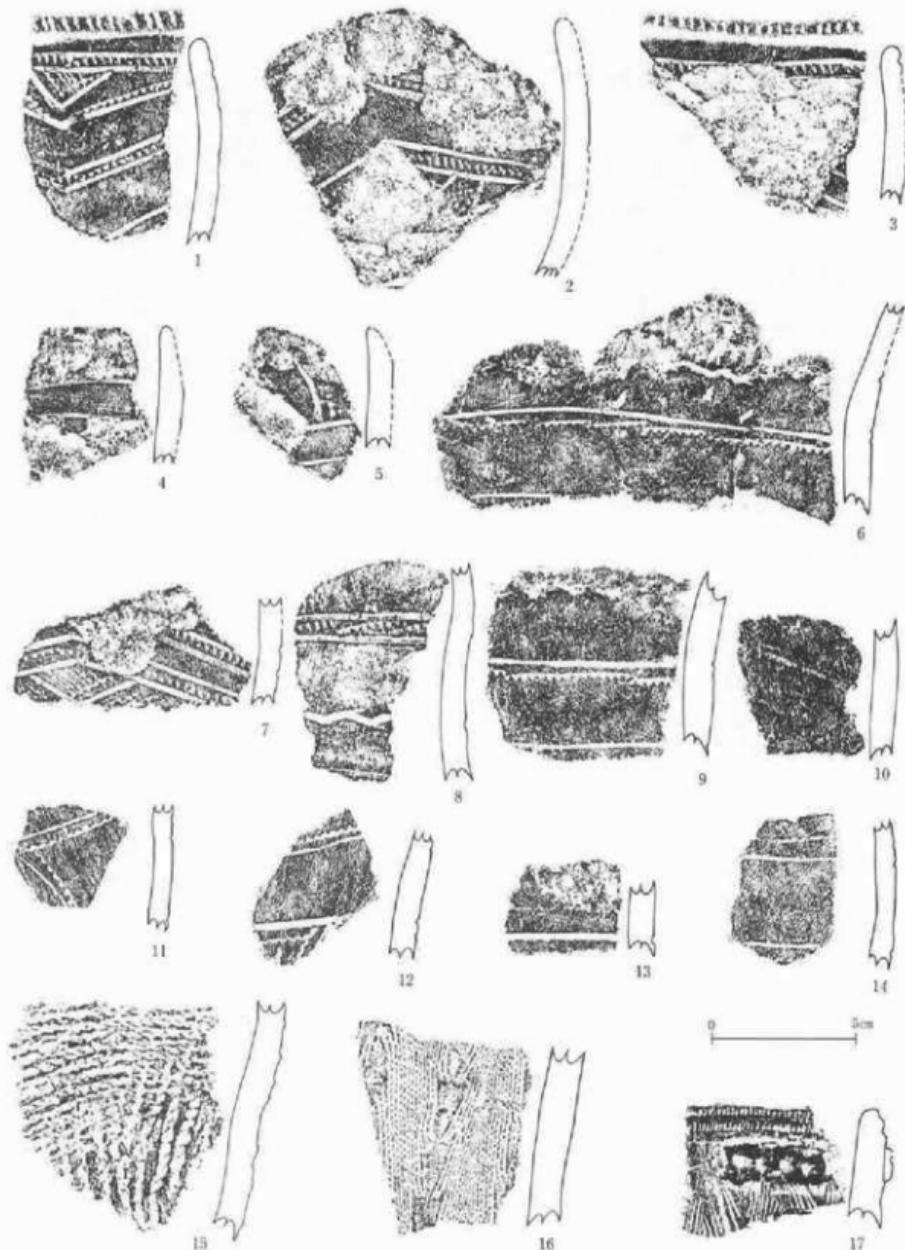
第34図 造精外出土土器(12)

完形・半完形土品觀察表 (No.1)

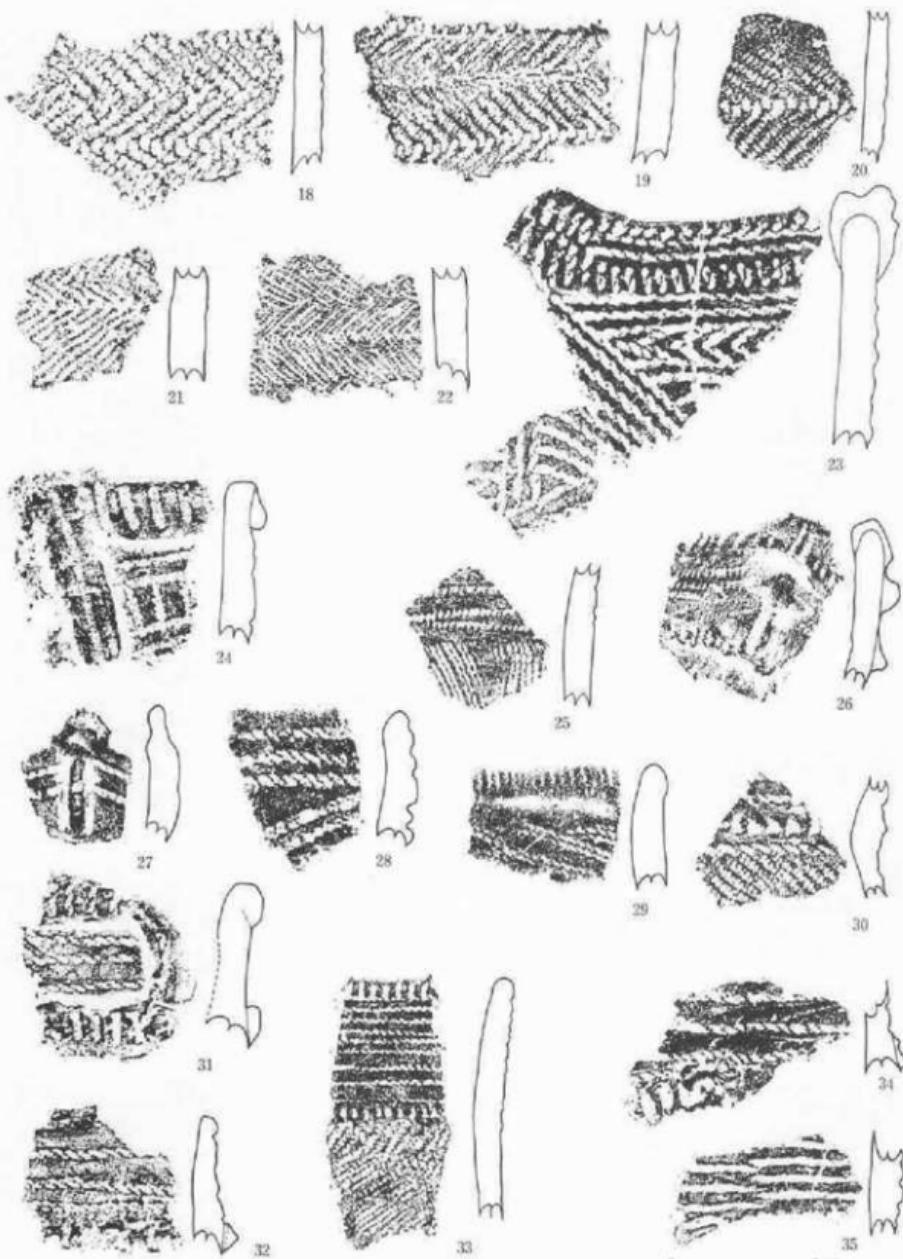
番号	出土地点	種類	文様の特徴	計測値				分類
				高さ cm	口径 cm	底径 cm	厚さ cm	
1 CII	深鉢	貝殻沈縞文	(15.5)	(32.0)	—	1.0	第1類	
2 FV	深鉢	表面縞文	25.5	(15.2)	(10.0)	0.8		
3 EVI	深鉢	地文+縦起脊+斜突文	34.0	—	(13.0)	1.0		
4 FIV	深鉢	無文土器、施痕有り	15.8	—	9.5	0.8		
5 FV	深鉢	地文+縦格文(横位)	33.8	(20.8)	(12.4)	1.0		
6 GIV	深鉢	圓状縫起縞+縦縞文	27.4	27.5	12.1	0.9		
7 FV	深鉢	地文+平敷竹冒文	(9.0)	(19.0)	—	0.8		
8 FII	深鉢	羽尖縞文	17.0	(29.0)	—	0.1		
9 FII	深鉢	原体による斜縞文	(15.8)	—	—	1.2	拓本実測	
10 FII	深鉢	横位縫起縞文	(6.2)	—	15.6	1.2		
11 GIV	深鉢	無文土器	(5.0)	—	(7.0)	0.8	反転実測	
12 CII埋設土器	深鉢	縫起縞+沈線	26.5	—	—	1.8	拓本実測	
13 IVI	深鉢	縫沈縞+磨消	(14.5)	—	—	0.8	拓本実測	
14 EV	鉢	沈線+斜突文	9.1	(8.0)	—	0.3	反転実測	
15 GIV	カメ	平行沈縞+口唇部刻目文	(33.3)	(35.2)	—	0.8		
16 FII	カメ	平行沈縞+口唇部刻目文	(24.0)	(35.6)	—	1.6	反転実測	
17 GIV	鉢形	沈縞+浮雕調磨削	(9.5)	(18.2)	—	0.6	反転実測	
18 HIV	鉢形	沈縞+浮雕調磨削	(13.2)	(18.2)	—	0.6	反転実測	
19 DIV	鉢形	口唇部刻目文磨消縞文	(9.5)	(15.8)	—	0.6	反転実測	
20 CII	鉢形	平行沈縞+刻目文+突起列文	7.5	(20.2)	—	1.1		
21 GVI	鉢形	平行沈縞+半圓状文	(8.5)	(14.8)	—	0.5		
22 DIV	鉢形	沈縞+磨消縞文	(6.4)	(9.2)	—	0.4	反転実測	
23 HIV	深鉢	地文のみ	(11.3)	(15.5)	—	0.7	反転実測	
24 FIV	深鉢	口縁部位に無文帶	(10.5)	(13.8)	—	0.7	反転実測	
25 CII	深鉢	縞文のみ	5.4	—	0.8	0.8		
26 FIV	鉢	無文地、腹部にやや施痕	(4.8)	—	3.0	0.5	反転実測	
27 GV	盃	平行沈縞+無文研磨	(5.7)	(10.6)	—	0.7		
28 CII	盃	平行沈縞+無文研磨+地文	5.3	14.0	—	0.8	反転実測	
29 CV	盃	沈縞+施調整	(9.3)	—	—	0.6		
30 HV		基脚部沈縞+地文+無文地	(3.7)	—	10.3	0.8		
31 GIV	注口	沈縞+磨消縞文	(6.3)	(10.0)	—	(0.7)		
32 FIII	合付	沈縞+磨消縞文	(5.5)	(22.8)	—	0.7	朱影	
33 CII	皿	沈縞+磨消縞文	4.9	20.8	8.2	0.8	朱影	
34 GV	皿	沈縞+磨消縞文	7.5	14.8	—	0.6		
35 HV	皿	沈縞+磨消縞文	5.4	(11.6)	—	0.4	反転実測	
36 GV	深鉢	無文研磨	8.0	17.3	5.0	0.8		
37 DIII	皿	沈縞底面	(1.2)	—	—	0.5		

完形・半完形土品觀察表 (No.2)

番号	出土地点	器種	文様の特徴	計測値				備考
				高さ cm	口径 cm	底径 cm	厚さ cm	
38	CII	皿	沈銀+唐模圓文	(4.1)	(12.2)	-	0.5	反転実測
39	CIII	皿	沈銀+地文	4.1	(15.6)	-	0.5	反転実測
40	EIV	皿	沈銀+無文研磨	3.5	(11.2)	-	0.9	
41	EIV	皿	沈銀+無文研磨	4.1	-	-	0.6	
42	FII	小盤 土器	無文研磨	3.8	3.6	2.8	0.7	反転実測
43	FIII	小盤 土器	無文地+沈銀	2.9	2.8	-	0.5	
44	IWI	小盤 土器	無文地	2.6	5.1	0.4	0.4	
45	FB盤	深鉢	格条体圧痕文	5.7	-	11.6	1.0	
46	DII盤	深鉢	格条体圧痕文	(4.6)	-	(13.0)	1.2	反転実測



第35圖 遺構外出土土器(13)

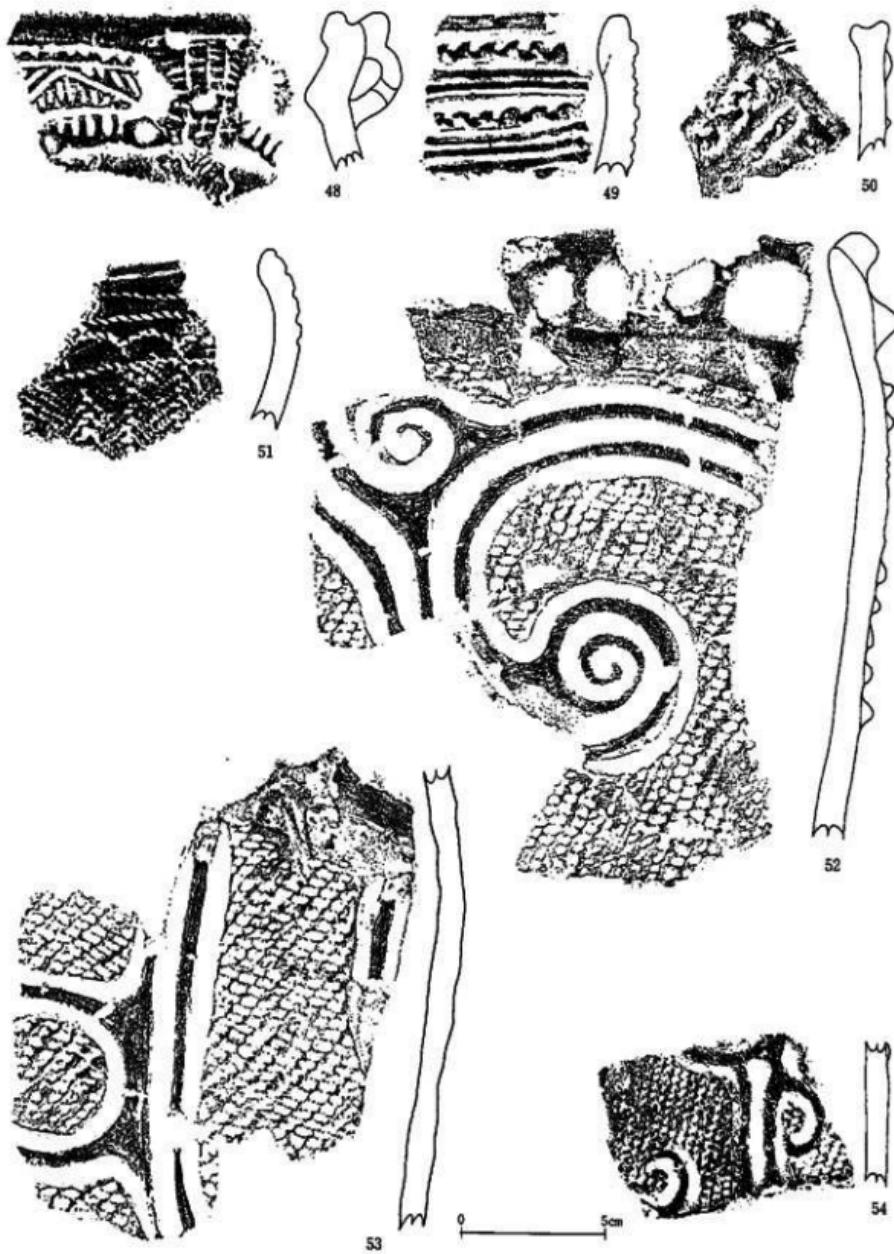


第36圖 遺構外出土土器(14)

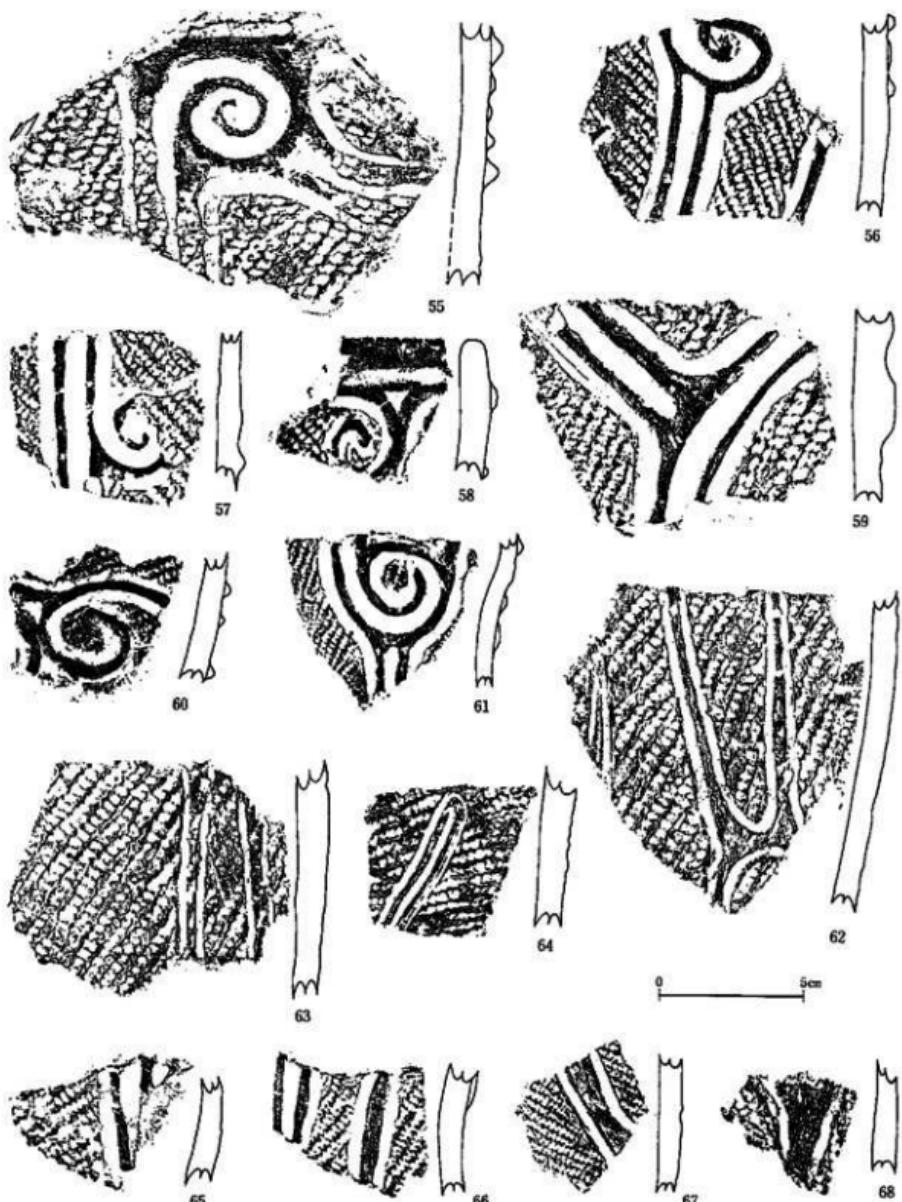
0 5cm



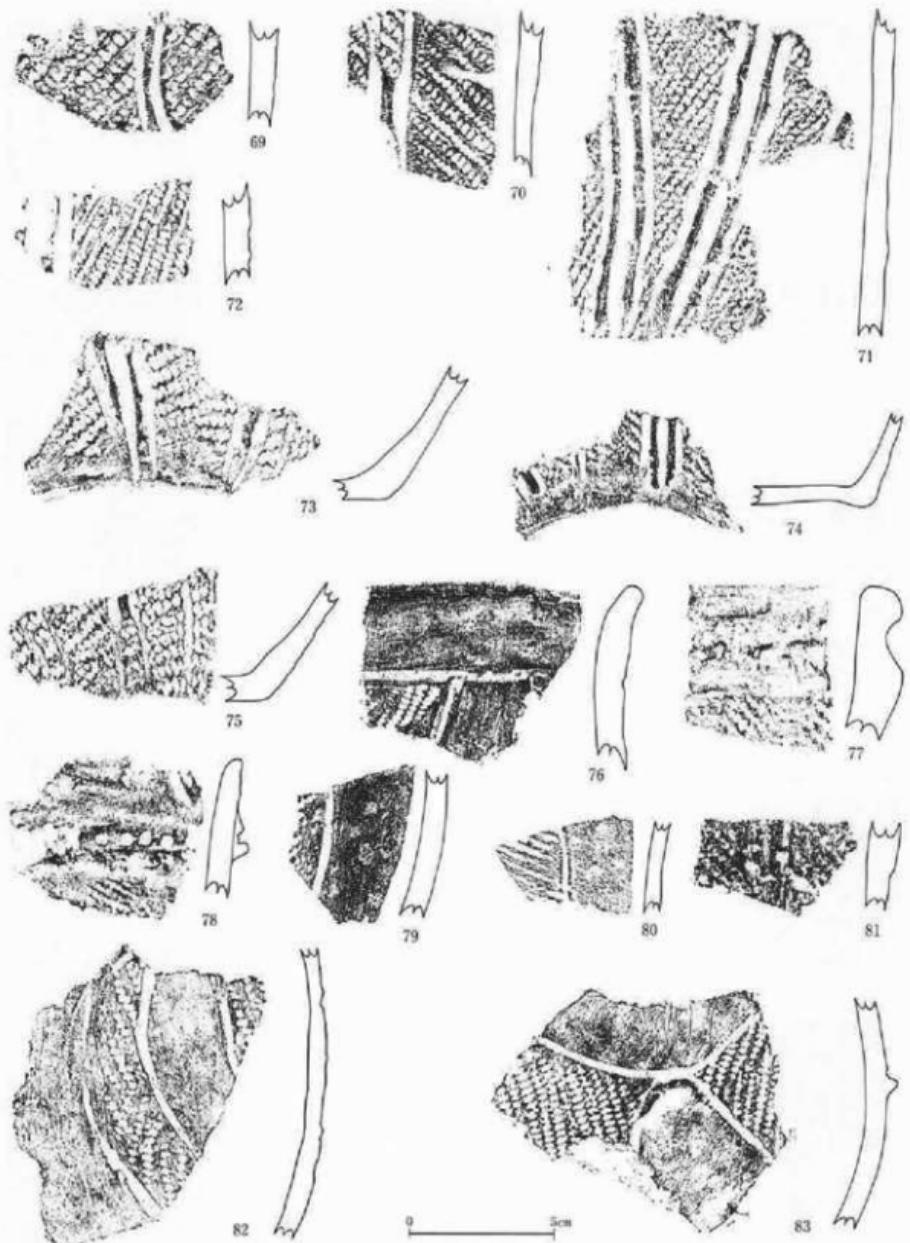
第37圖 造構外出土土器(15)



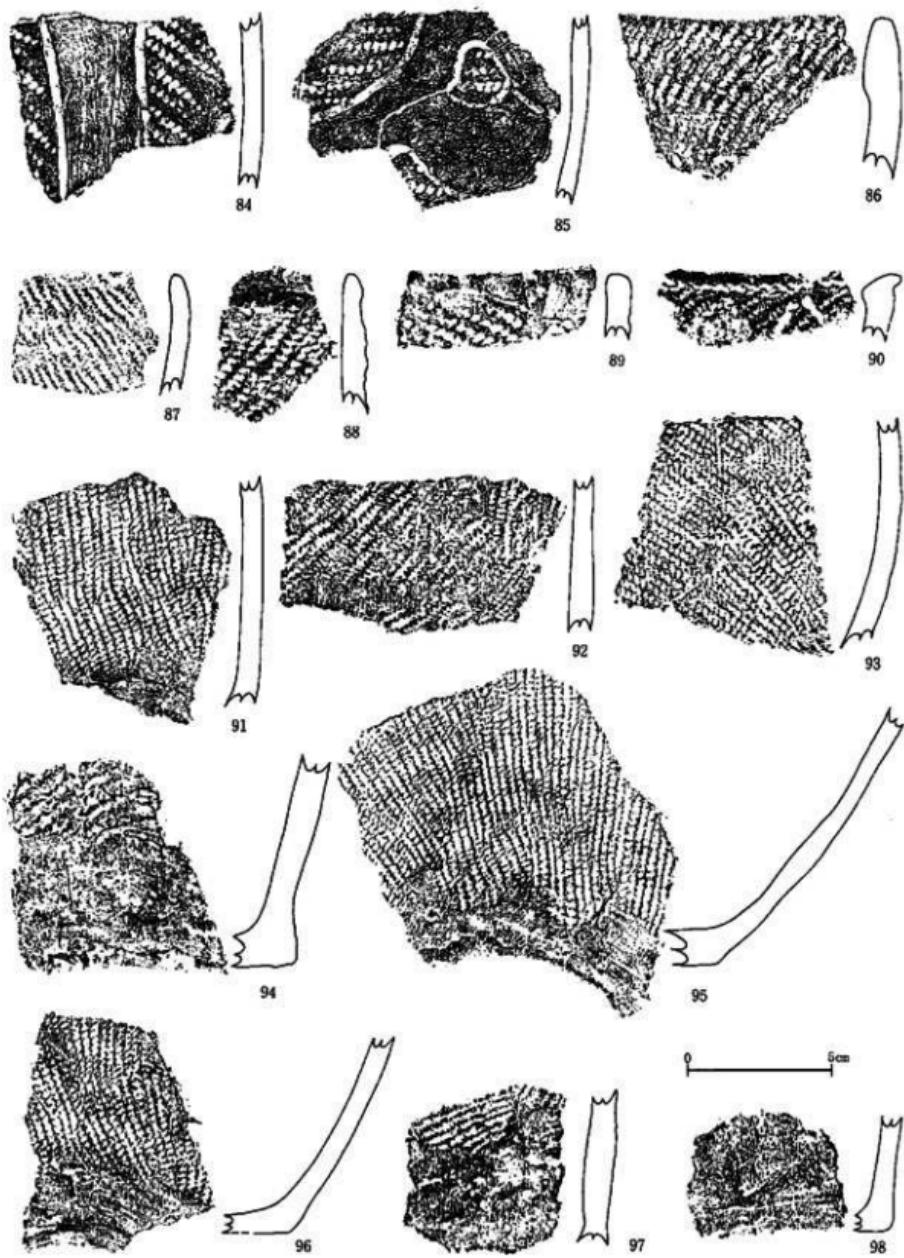
第38図 遺構外出土土器(16)



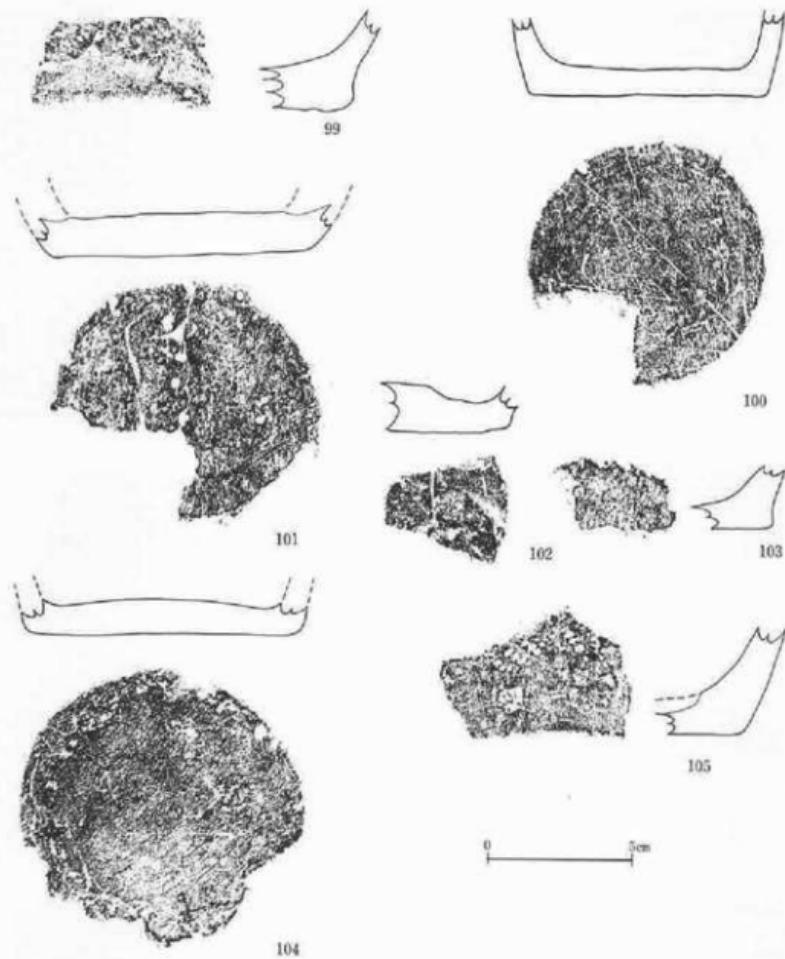
第39圖 造構外出土土器(17)



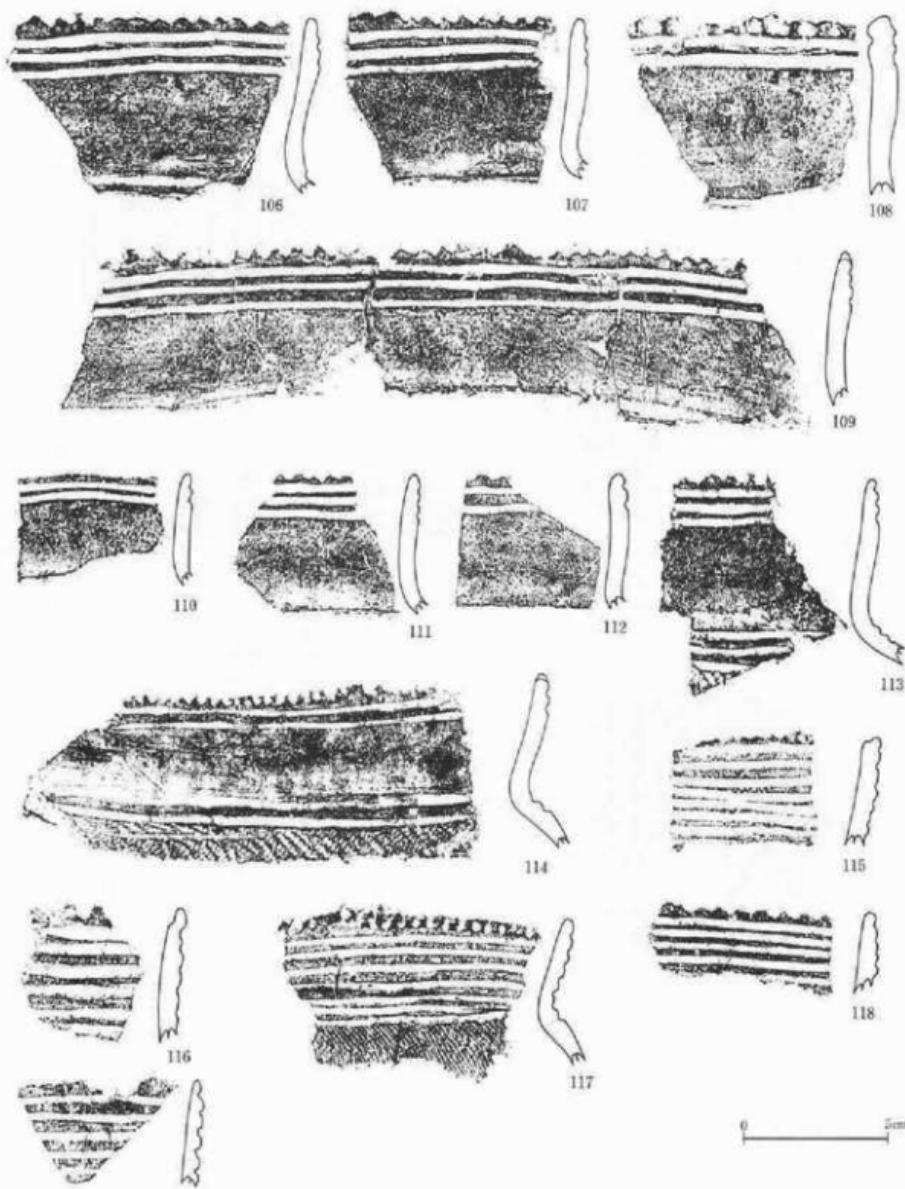
第40図 遺構外出土土器(18)



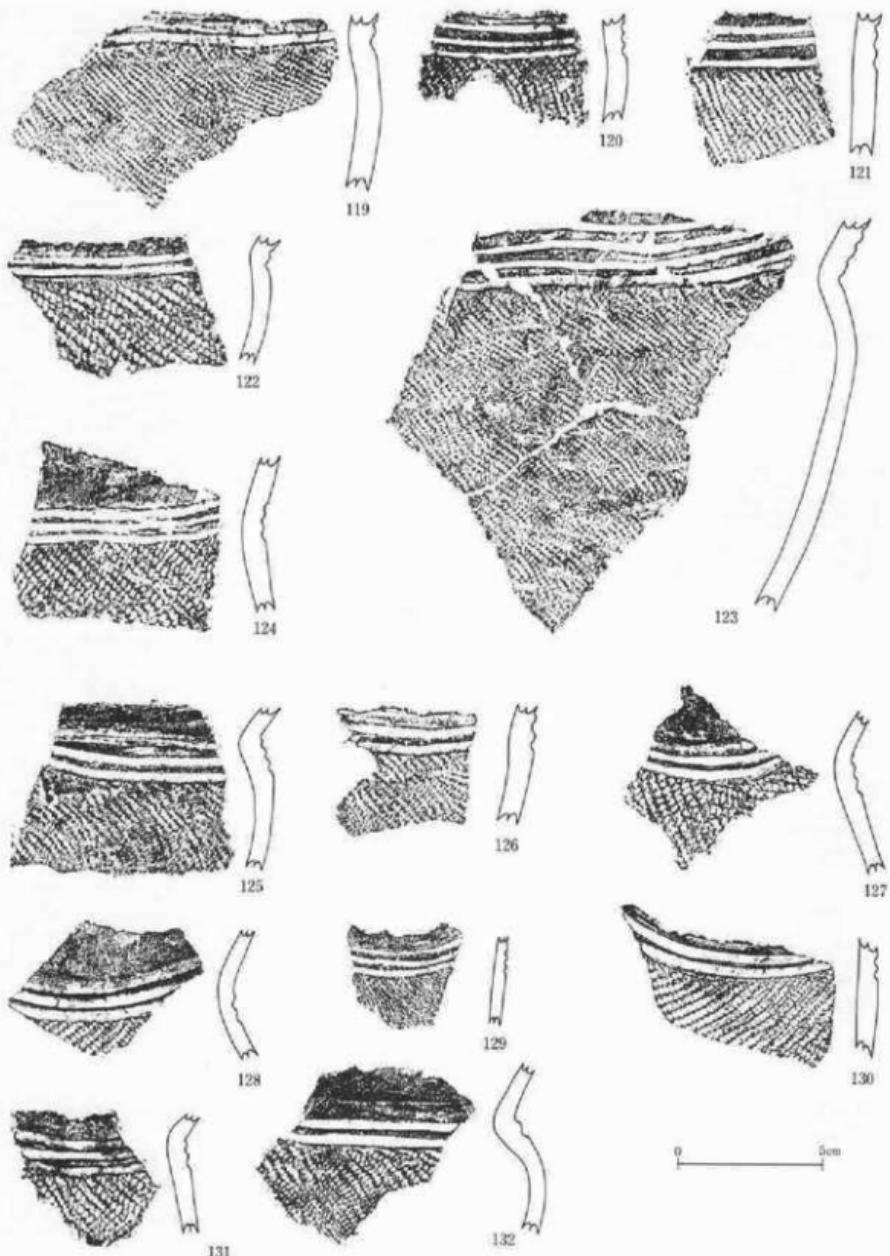
第41図 造構出土土器(15)



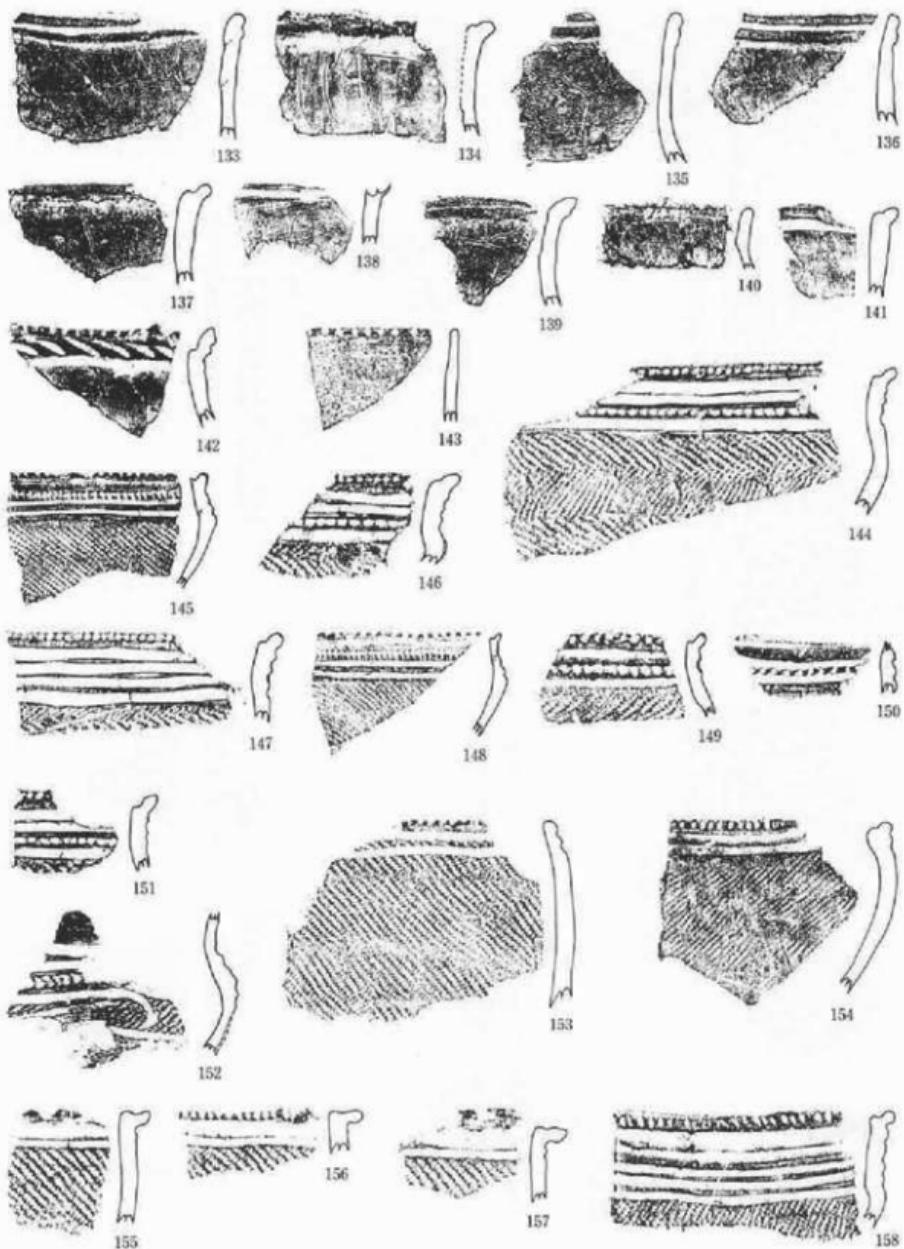
第42圖 遺構外出土土器(20)



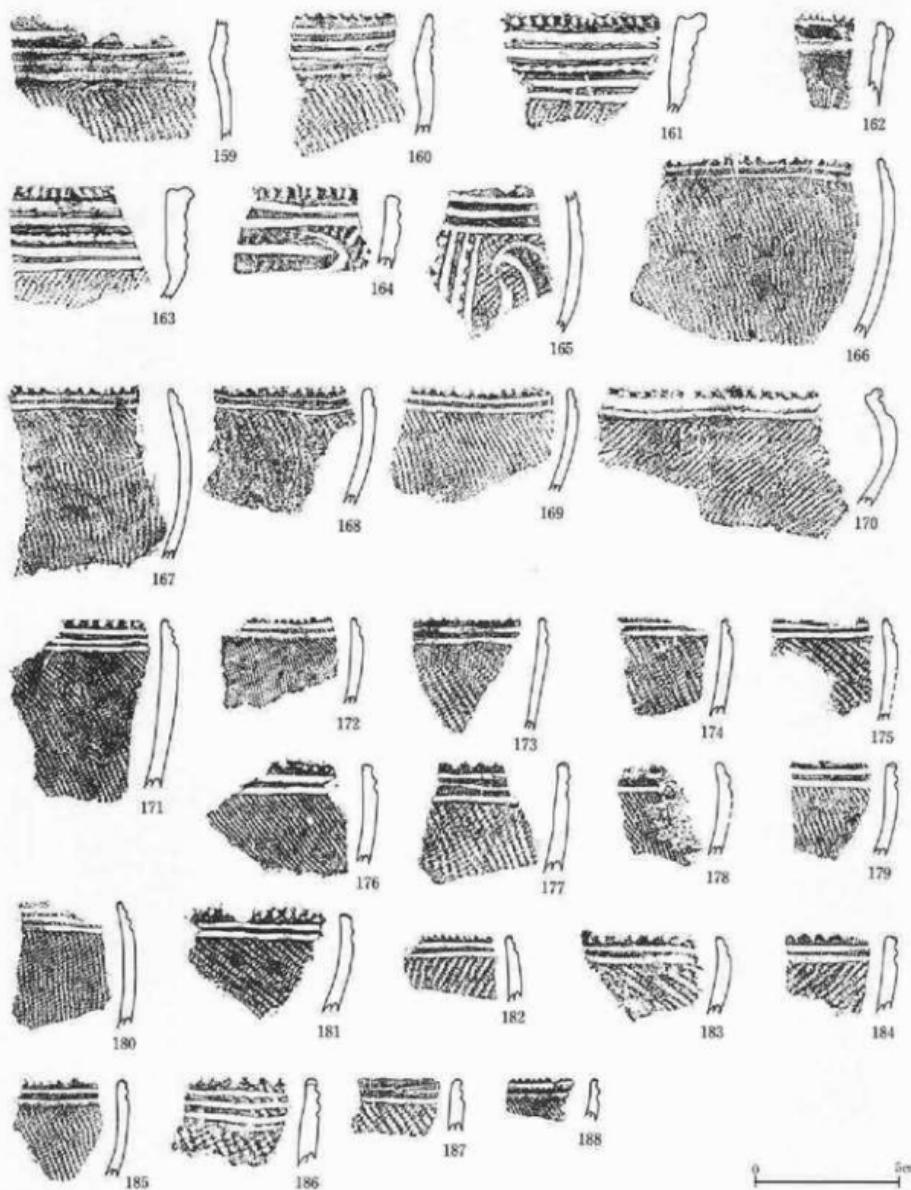
第43図 造構外出土土器(21)



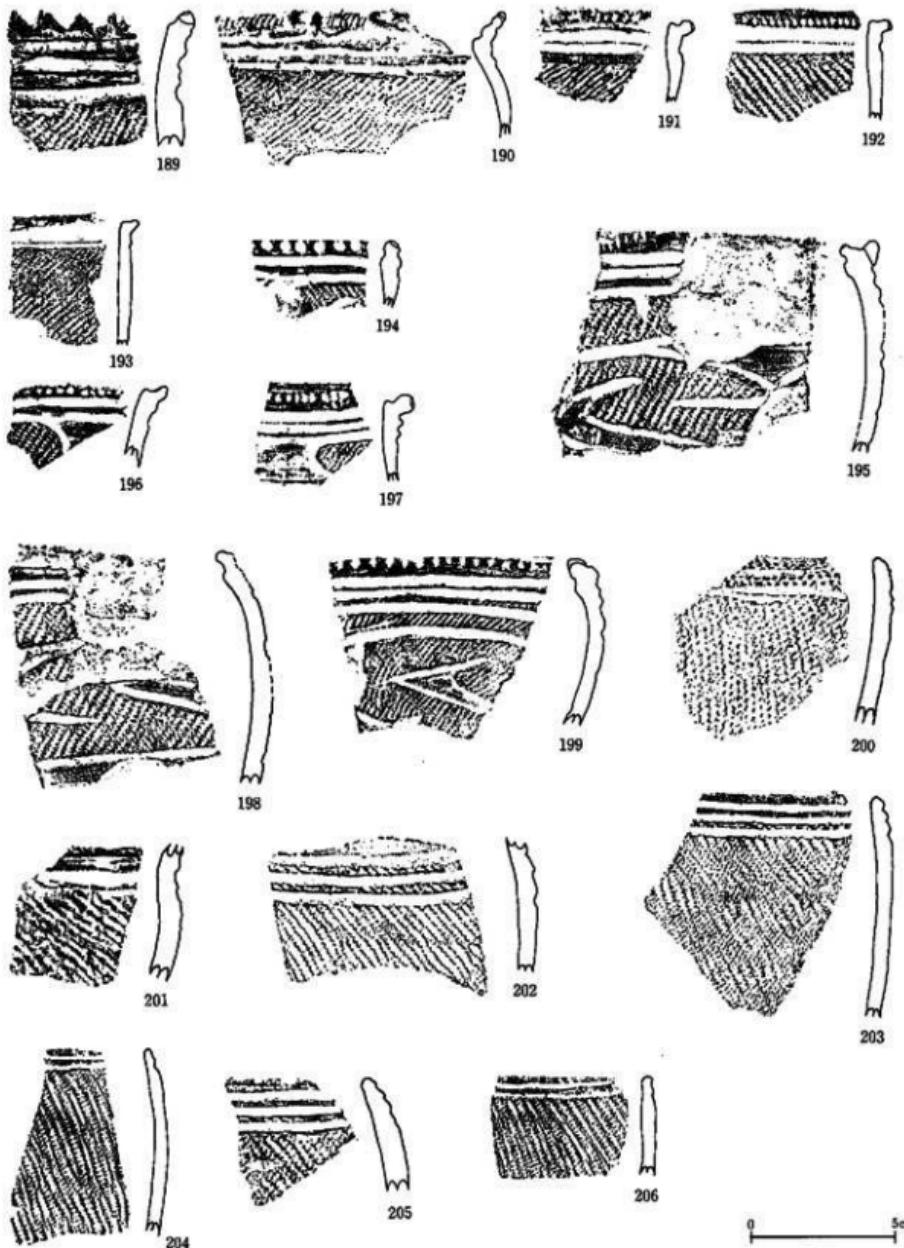
第44図 遺構外出土土器(22)



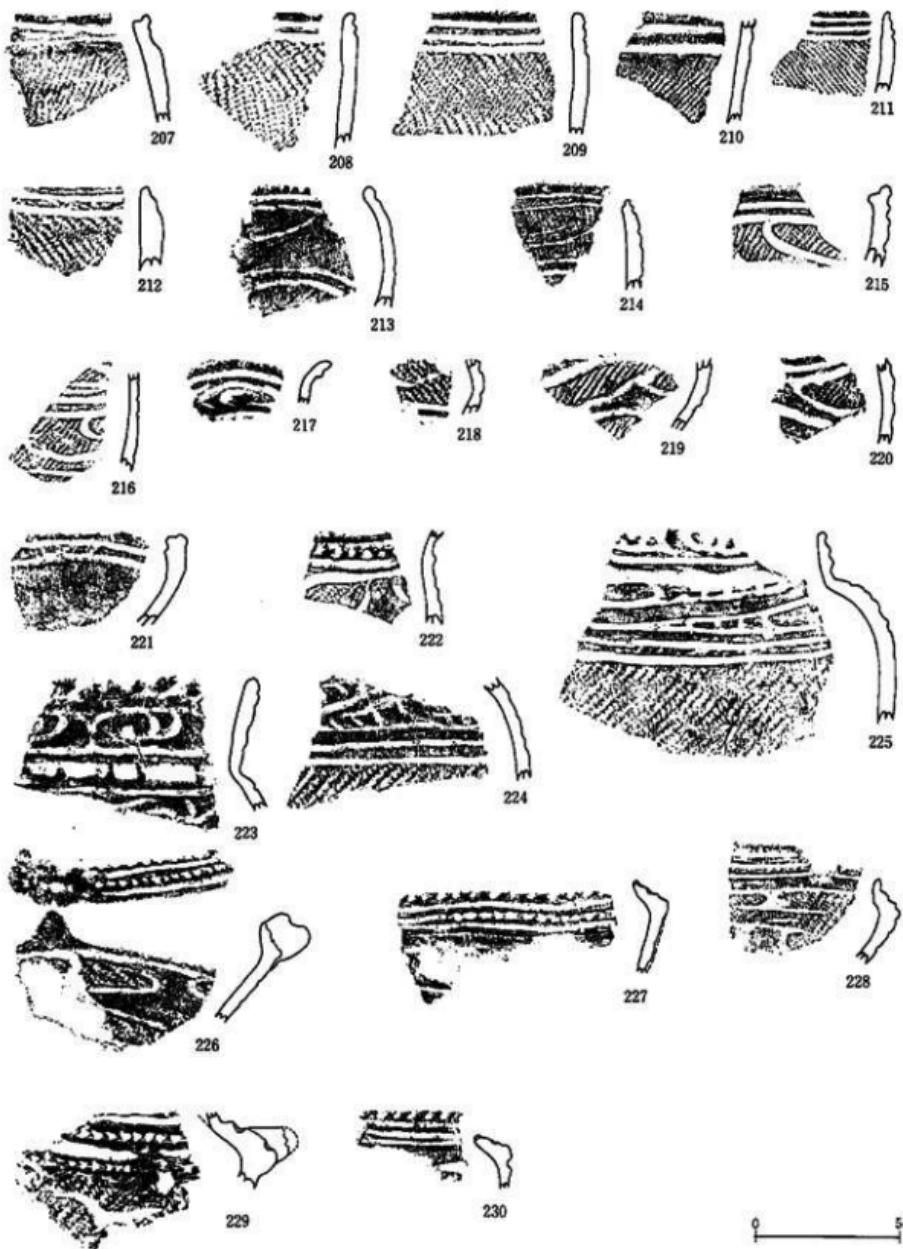
第45図 造構外出土土器(23)



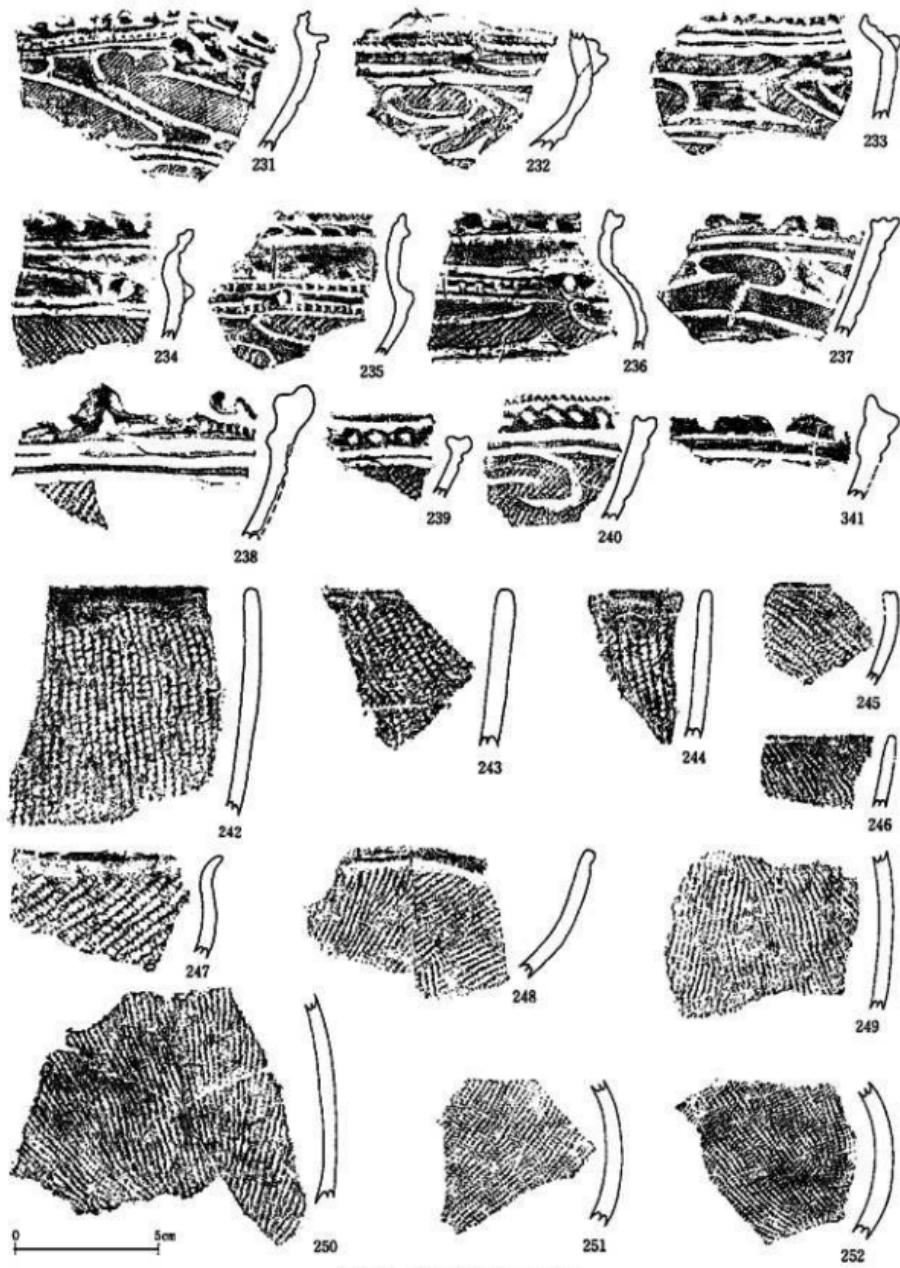
第46図 遺構外出土土器(24)



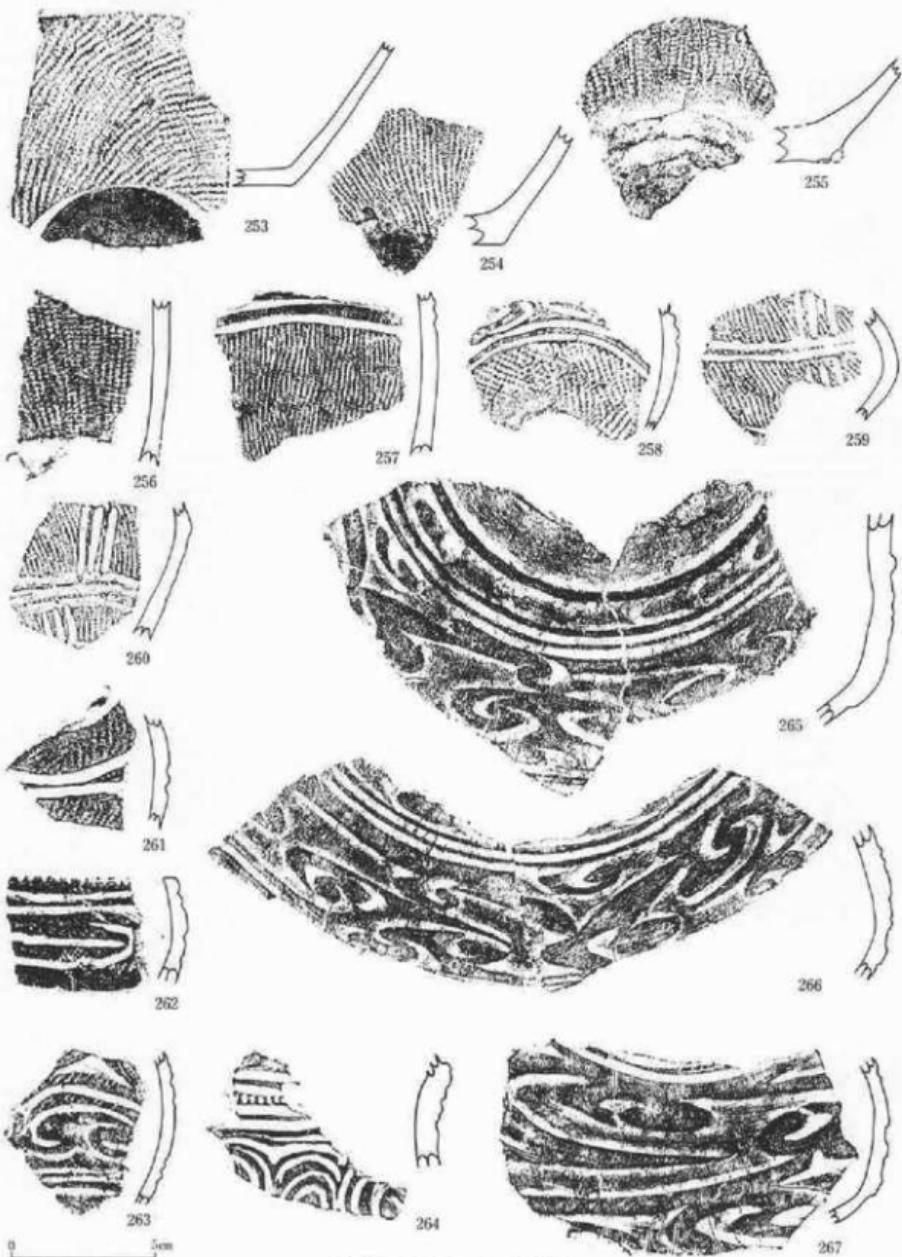
第47図 造構出土土器(25)



第48図 造構外出土土器(28)



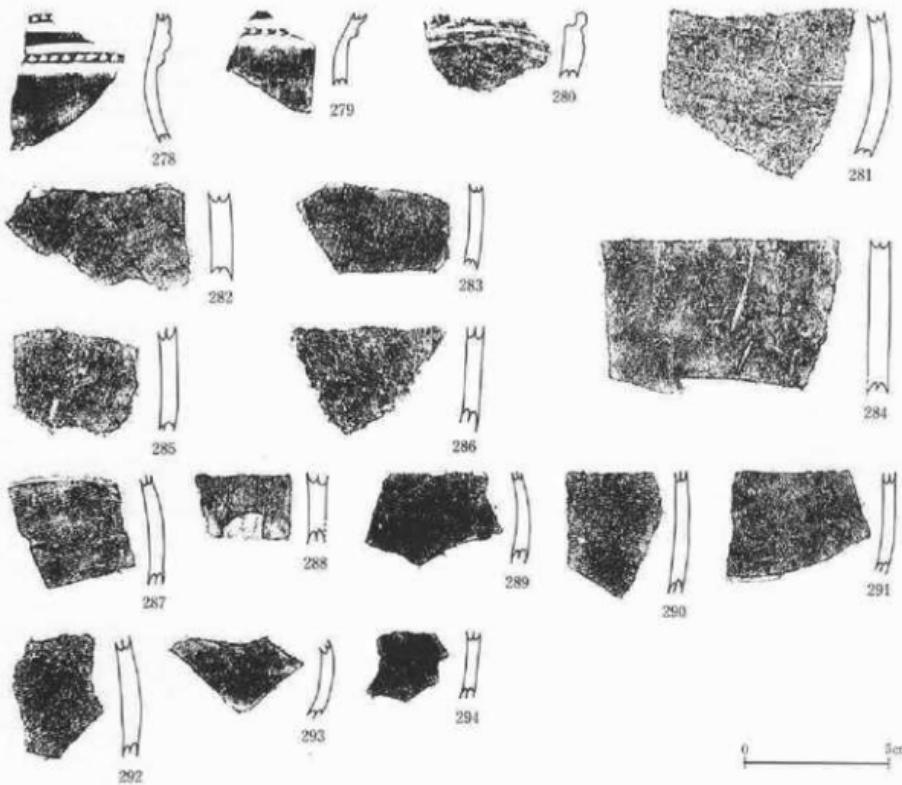
第48図 遺構外出土土器(27)



第50圖 遺構外出土土器(26)



第51図 造構外出土土器(29)



第52図 遺構外出土土器(30)

土器觀察表（拓本No.1）

番号	出土地点	器種	部位	文様の特徴
1	C II	深鉢	口縁	貝殻沈線文 胎土に粗砂を含み
2	C II	深鉢	口縁	貝殻沈線文 胎土に粗砂を含み
3	C III	深鉢	口縁	貝殻沈線文 胎土に粗砂を含み
4	C II	深鉢	口縁	貝殻沈線文 胎土に粗砂を含み
5	C II	深鉢	口縁	貝殻沈線文 胎土に粗砂を含み
6	C II	深鉢	肩部	貝殻沈線文 胎土に粗砂を含み
7	C II	深鉢	肩部	貝殻沈線文 胎土に粗砂を含み
8	C II	深鉢	肩部	貝殻沈線文 胎土に粗砂を含み
9	C II	深鉢	肩部	貝殻沈線文 胎土に粗砂を含み
10	?	深鉢	肩部	貝殻沈線文 胎土に粗砂を含み
11	C II	深鉢	肩部	貝殻沈線文 胎土に粗砂を含み
12	F IV	深鉢	肩部	貝殻沈線文 胎土に粗砂を含み
13	C II	深鉢	肩部	貝殻沈線文 胎土に粗砂を含み
14	F IV	深鉢	肩部	貝殻沈線文 胎土に粗砂を含み
15	F V	深鉢	口縁	不整捲糸文
16	G IV	深鉢	肩部	木目状捲糸文
17	I V	深鉢	口縁	隆帯+木目状捲紋
18	B II	深鉢	肩部	羽状繩文 結束のある羽状繩文
19	B II	深鉢	肩部	羽状繩文 結束のある羽状繩文
20	D IV	深鉢	肩部	羽状繩文 結束のある羽状繩文
21	B II	深鉢	肩部	羽状繩文 結束のある羽状繩文
22	G IV	深鉢	肩部	羽状繩文 結束のある羽状繩文
23	D III	深鉢	口縁	捲糸圧痕文
24	F V	深鉢	口縁	隆起帯+捲糸圧痕文
25	D IV	深鉢	口縁	捲糸圧痕文
26	I V	深鉢	口縁	隆起帯+捲糸圧痕文
27	F II	深鉢	口縁	隆起帯+捲糸圧痕文
28	H IV	深鉢	口縁	捲糸圧痕文
29	G IV	深鉢	口縁	捲糸圧痕文
30	B III	深鉢	口縁	捲糸圧痕文
31	F IV	深鉢	口縁	捲糸圧痕文
32	B II	深鉢	口縁	捲糸圧痕文
33	I V	深鉢	口縁	捲糸圧痕文
34	F II	深鉢	口縁	捲糸圧痕文
35	E III	深鉢	口縁	捲糸圧痕文
36	E VI	深鉢	口縁	隆起帯+捲糸圧痕文

土器觀察表（拓本No.2）

番号	出土地点	器種	部位	文様の特徴
37		深鉢	口縁	隆起線+撚糸圧痕文
38	HIV	深鉢	口縁	隆起線+撚糸圧痕文
39	D II	深鉢	口縁	隆起線+爪形圧痕文
40	D II	深鉢	口縁	隆起線+爪形圧痕文
41	B II	深鉢	口縁	隆起線+爪形圧痕文
42	D II	深鉢	口縁	隆起線+爪形圧痕文
43	HIV	深鉢	口縁	隆起線+爪形圧痕文
44	GIV	深鉢	口縁	隆起線+爪形圧痕文
45	HIV	深鉢	口縁	隆起線+爪形圧痕文
46	H V	深鉢	口縁	隆起線+爪形圧痕文
47	H V	深鉢	口縁	隆起線+爪形圧痕文
48	GVI	深鉢	口縁	隆起線+爪形圧痕文
49	B II	深鉢	口縁	隆起線文
50	B II	深鉢	口縁	隆起線文
51	?	深鉢	口縁	隆起線文
52	C III	深鉢	口縁	渦巻状隆起線文
53	C II埋設土器	深鉢	口縁	渦巻状隆起線
54	IV	深鉢	口縁	渦巻状隆起線
55	C III埋設土器	深鉢	肩部	渦巻状隆起線
56	GV	深鉢	肩部	渦巻状隆起線
57	D III	深鉢	肩部	渦巻状隆起線文
58	IV	深鉢	口縁	渦巻状隆起線文
59	C III埋設土器	深鉢	口縁	渦巻状隆起線文
60	GVI	深鉢	口縁	渦巻状隆起線文
61	F IV	深鉢	口縁	渦巻状隆起線文
62	I VI	深鉢	肩部	沈線+磨消繩文
63	I VI	深鉢	肩部	沈線+磨消繩文
64	F II	深鉢	肩部	沈線+磨消繩文
65	I VI	深鉢	肩部	隆起線+沈線文
66	D IV	深鉢	肩部	沈線+磨消繩文
67	H V	深鉢	肩部	沈線+磨消繩文
68	D III	深鉢	肩部	沈線+磨消繩文
69	E IV	深鉢	肩部	隆沈線文
70	D IV	深鉢	肩部	隆沈線文
71	I VI	深鉢	肩部	隆沈線+磨消繩文
72	J VI	深鉢	肩部	隆沈線+磨消繩文

土器觀察表（拓本No.3）

番号	出土地点	器種	部位	文様の特徴
73	I VI	深鉢	肩下部	隆沈線+磨消繩文
74	G VI	深鉢	肩下部	隆沈線+磨消繩文
75	G IV	深鉢	肩部	沈線+磨消繩文
76	E IV	深鉢	口縁	沈線+磨消繩文
77	D II	深鉢	口縁	隆起線文
78	D II	深鉢	口縁	隆起線文
79	C II	深鉢	肩部	沈線+磨消繩文
80	E II	深鉢	肩部	沈線+磨消繩文
81	C I	深鉢	肩部	沈線+磨消繩文
82	H VI	深鉢	肩部	沈線+磨消繩文
83	C II	深鉢	肩部	沈線+磨消繩文
84	G VI	深鉢	肩部	沈線+磨消繩文
85	F III	深鉢	肩部	沈線+磨消繩文
86	F III	深鉢	口縁	繩文（地文）のみ
87	C II	深鉢	口縁	繩文（地文）のみ
88	B V	深鉢	口縁	繩文（地文）のみ
89	G II	深鉢	口縁	繩文（地文）のみ
90	D II	深鉢	口縁	繩文（地文）のみ
91	D III	深鉢	肩部	繩文（地文）のみ
92	D III	深鉢	口縁	繩文（地文）のみ
93	B II	深鉢	肩部	繩文（地文）のみ
94	E II	深鉢	肩下部	繩文（地文）のみ
95	I V	深鉢	肩下部	繩文（地文）のみ
96	D II	深鉢	肩下部	繩文（地文）のみ
97	D II	深鉢	肩下部	繩文（地文）のみ
98	F II	深鉢	肩下部	繩文（地文）のみ
99	B II	深鉢	肩下部	繩文（地文）のみ
100	J V	深鉢	底部	底面撫での痕跡有り
101	C II	深鉢	底部	底面撫での痕跡有り
102	D II	深鉢	肩下部	繩文（地文）のみ
103	D II	深鉢	肩下部	繩文（地文）のみ
104	G IV	深鉢	底部	底面撫での痕跡
105	D II	深鉢	肩下部	
106	D IV	カメ	口縁	沈線文
107	F II	カメ	口縁	鋸歯状口唇、平行沈線文
108	G VI	カメ	口縁	鋸歯状口唇、平行沈線文

土器觀察表（拓本No.4）

番号	出土地点	器種	部位	文様の特徴
109	C II	カメ	口縁	鋸歯状口唇、平行沈線文
110	C II	カメ	口縁	鋸歯状口唇、平行沈線文
111	B III	カメ	口縁	鋸歯状口唇、平行沈線文
112	J V	カメ	口縁	鋸歯状口唇、平行沈線文
113	C II	カメ	口縁	鋸歯状口唇、平行沈線文+繩文
114	H V	カメ	口縁	鋸歯状口唇、平行沈線文+繩文
115	F II	カメ	口縁	鋸歯状口唇、平行沈線文
116	G II	カメ	口縁	鋸歯状口唇、平行沈線文
117	F III	カメ	口縁	鋸歯状口唇、平行沈線文+繩文
118		カメ	口縁	鋸歯状口唇、平行沈線文+繩文
119	F IV	カメ	口縁	平行沈線文+繩文
120	G II	カメ	口縁	平行沈線文+繩文
121	F II	カメ	口縁	平行沈線文+繩文
122	G IV	カメ	口縁	平行沈線文+繩文
123	G IV	カメ	口縁	平行沈線文+繩文
124	F IV	カメ	口縁	平行沈線+無文帯+繩文
125	B III	カメ	口縁	平行沈線+無文帯+繩文
126	C II	カメ	口縁	平行沈線+無文帯+繩文
127	D II	カメ	口縁	平行沈線+無文帯+繩文
128	I V	カメ	口縁	平行沈線+無文帯+繩文
129	G IV	カメ	口縁	平行沈線+無文帯+繩文
130	I V	カメ	口縁	平行沈線+無文帯+繩文
131	D II	カメ	口縁	平行沈線+無文帯+繩文
132	H V	カメ	口縁	平行沈線+無文帯+繩文
133	C II	壺	口縁	沈線+無文研磨
134	C II	壺	口縁	沈線+無文研磨
135	I V	壺	口縁	沈線+無文研磨
136	C II	壺	口縁	沈線+無文研磨
137	B II	壺	口縁	沈線+無文研磨
138	H IV	壺	口縁	沈線+無文研磨
139	C II	壺	口縁	沈線+無文研磨
140	E II	壺	口縁	沈線+無文研磨
141	E II	壺	口縁	沈線+無文研磨
142	C II	壺	口縫	刻目状文+隆起線+無文研磨
143	E II	壺	口縫	刻目状文+無文研磨
144	H IV	鉢形	口縫	刻目文+平行沈線+羽状繩文

土器觀察表（拓本No.5）

番号	出土地点	器種	部位	文様の特徴
145	D II	鉢形	口縁	平行沈線+刻目文+繩文
146	D II	鉢形	口縁	平行沈線+刻突文+繩文
147	C II	鉢形	口縁	平行沈線文+刻突文+繩文
148	D II	鉢形	口縁	刻目文+平行沈線文+繩文
149	C II	鉢形	口縁	刻目文+刻突文+平行沈線文+繩文
150	D IV	鉢形	口縁	刻目文+刻突文+平行沈線文+繩文
151	D IV	鉢形	口縁	刻目文+刻突文+平行沈線文+繩文
152	F II	鉢形	口縁	刻目文+平行沈線文+繩文
153	F V	鉢形	口縁	刻目文+平行沈線文+繩文
154	F V	鉢形	口縁	刻目文+平行沈線文+繩文
155	V III	鉢形	口縁	刻目文+平行沈線文+繩文
156	G IV	鉢形	口縁	刻目文+平行沈線文+繩文
157	E II	鉢形	口縁	刻目文+平行沈線文+繩文
158	C II	鉢形	口縁	刻目文+平行沈線文+繩文
159	H V	鉢形	口縁	刻目文+平行沈線文+繩文
160	H V	鉢形	口縁	刻目文+平行沈線文+繩文
161	C II	鉢形	口縁	刻目文+平行沈線文+繩文
162	F IV	鉢形	口縁	刻目文+平行沈線文+繩文
163	E II	鉢形	口縁	刻目文+平行沈線文+繩文
164	D II	鉢形	口縁	刻目文+平行沈線文+繩文
165	C II	鉢形	口縁	刻目文+平行沈線文+繩文
166	F V	鉢形	口縁	刻目文+平行沈線文+繩文
167	G VI	鉢形	口縁	刻目文+平行沈線文+繩文
168	C III	鉢形	口縁	刻目文+平行沈線文+繩文
169	E II	鉢形	口縁	刻目文+平行沈線文+繩文
170	G V	鉢形	口縁	刻目文+平行沈線文+繩文
171	C II	鉢形	口縁	刻目文+平行沈線文+繩文
172	F III	鉢形	口縁	刻目文+平行沈線文+繩文
173	H IV	鉢形	口縁	刻目文+平行沈線文+繩文
174	E II	鉢形	口縁	平行沈線文+繩文
175	G II	鉢形	口縁	口縁平行沈線文+繩文
176	F IV	鉢形	口縁	刻目文+平行沈線文+繩文
177	E II	鉢形	口縁	刻目文+平行沈線文+繩文
178	E II	鉢形	口縁	刻目文+平行沈線文+繩文
179	F IV	鉢形	口縁	刻目文+平行沈線文+繩文
180	C II	鉢形	口縁	刻目文+平行沈線文+繩文

土器觀察表（拓本No.5）

番号	出土地点	器種	部位	文様の特徴
181	G II	鉢形	口縁	刻目文+平行沈線文+繩文
182	E II	鉢形	口縁	刻目文+平行沈線文+繩文
183	G II	鉢形	口縁	刻目文+平行沈線文+繩文
184	F IV	鉢形	口縁	刻目文+平行沈線文+繩文
185	C II	鉢形	口縁	刻目文+平行沈線文+繩文
186	B II	鉢形	口縁	刻目文+平行沈線文+繩文
187	B II (209)	鉢形	口縁	口縁文への平行沈線文+繩文
188	E II	鉢形	口縁	刻目文+平行沈線文+繩文
189	C II	鉢形	口縁	鋸歯状刻目文+平行沈線文+繩文
190	B II	鉢形	口縁	刻目文+平行沈線文+繩文
191	F IV	鉢形	口縁	刻目文+平行沈線文+繩文
192	F IV	鉢形	口縁	刻目文+平行沈線文+繩文
193	F IV	鉢形	口縁	刻目文+平行沈線文+繩文
194	C II	鉢形	口縁	刻目文+平行沈線文+磨消繩文
195	E V	鉢形	口縁	刻目文+平行沈線文+磨消繩文
196	F II	鉢形	口縁	刻目文+平行沈線文+磨消繩文
197	D IV	鉢形	口縁	刻目文+平行沈線文+磨消繩文
198	C II	鉢形	口縁	刻目文+平行沈線文+磨消繩文
199	C II	鉢形	口縁	刻目文+平行沈線文+磨消繩文
200	D II	鉢形	口縁	刻目文+平行沈線文+繩文
201	C II	鉢形	口縁	刻目文+平行沈線文+繩文
202	D II	鉢形	口縁	刻目文+平行沈線文+繩文
203	B II	鉢形	口縁	刻目文+平行沈線文+繩文
204	C II	鉢形	口縁	刻目文+平行沈線文+繩文
205	D III	鉢形	口縁	刻目文+平行沈線文+繩文
206	E II	鉢形	口縁	口縁への平行沈線文+繩文
207	D III	鉢形	口縁	刻目文+平行沈線文+繩文
208	E III	鉢形	口縁	口縁への平行沈線文+繩文
209	H IV	鉢形	口縁	口縁への平行沈線文+繩文
210	G IV	鉢形	口縁	口縁への平行沈線文+繩文
211	F II	鉢形	口縁	口縁への平行沈線文+繩文
212	E II	鉢形	口縁	口縁への平行沈線文+繩文
213	E II	鉢形	口縁	刻目文+沈線文+磨消繩文
214	C II	鉢形	口縁	沈線文+磨消繩文
215	E II	鉢形	口縁	沈線文+磨消繩文
216	C II	鉢形	口縁	沈線文+磨消繩文

土器觀察表（拓本No.7）

番号	出土地点	器種	部位	文様の特徴
217	F III	鉢形	口縁部	沈線文+磨消繩文
218	C III	鉢形	口縁部	沈線文+磨消繩文
219	C III	鉢形	口縁部	沈線文+磨消繩文
220	C II	鉢形	口縁部	沈線文+磨消繩文
221	G IV	鉢形	口縁部	沈線文+磨消繩文
222	E II	鉢形	口縁部	沈線+刻目文+磨消繩文
223	I VI	鉢形	口縁部	沈線+刺突文
224	F IV	鉢形	口縁部	羊齒状文+平行沈線
225	I VI	鉢形	口縁部	羊齒状文+平行沈線
226	B II	鉢形	口縁部	沈線文+刻突文+瘤状突起
227	F III	鉢形	口縁部	刻目文+平行沈線+刺突文+磨消繩文
228	G IV	鉢形	口縁部	刻目文+平行沈線文+瘤状突起+磨消繩文
229	G IV	鉢形	口縁部	刻目文+平行沈線文+刺突文+瘤状突起
230	F III	鉢形	口縁部	刻目文+平行沈線文+刺突文+瘤状突起+磨消繩文
231	G IV	鉢形	口縁部	沈線+磨消繩文+瘤状小突起
232	C II	鉢形	口縁部	沈線+磨消繩文+瘤状小突起
233	F IV	鉢形	口縁部	沈線+磨消繩文+瘤状小突起
234	F V	鉢形	口縁部	刻目文+平行沈線文+隆起帯への刺突文+繩文
235	E II	鉢形	口縁部	沈線+刻目文+磨消繩文+瘤状小突起
236	G IV	鉢形	口縁部	刻目文+平行沈線文+刻突文+磨消繩文
237	D III	鉢形	口縁部	沈線+磨消繩文
238	D II	鉢形	口縁部	刻目文+平行沈線+小突起+磨消繩文
239	F IV	鉢形	口縁部	刻目文+平行沈線文+磨消繩文
240	D II	鉢形	口縁部	刻目文+平行沈線文+磨消繩文
241	H IV	鉢形	口縁部	刻目文+平行沈線文+磨消繩文
242	C II	鉢形	口縁部	口辺部にわずかに無文地+繩文
243	F II	鉢形	口縁部	繩文（地文）のみ
244	E II	鉢形	口縁部	繩文（地文）のみ
245	D II	鉢形	口縁部	繩文（地文）のみ
246	J V	鉢形	口縁部	繩文（地文）のみ
247	F II	鉢形	口縁部	繩文（地文）のみ
248	C III	鉢形	口縁部	繩文（地文）のみ
249	C II	鉢形	胴部	繩文（地文）のみ
250	D III	鉢形	胴部	繩文（地文）のみ
251	G IV	鉢形	胴部	繩文（地文）のみ
252	E II	鉢形	胴部	繩文（地文）のみ

土器觀察表（拓本No.8）

番号	出土地点	器種	部位	文様の特徴
253	C III	鉢形	胴下部	繩文（地文）のみ
254	G IV	鉢形	胴下部	繩文（地文）のみ
255	F II	鉢形	胴下部	繩文（地文）のみ
256	G IV	鉢形	胴下部	繩文（地文）のみ
257	C II	鉢形	口縁	沈線+繩文（地文）
258	C II	鉢形	胴中央	沈線+繩文
259	F III	鉢形	胴中央	沈線+圓文
260	D III	鉢形	胴中央	沈線文+繩文
261	E V	鉢形	胴中央	沈線文+繩文
262	G V	鉢形	胴中央	刻目文+磨消繩文
263	G V	鉢形	胴中央	沈線+無文研磨
264	G V	鉢形	胴中央	沈線+無文研磨
265	G IV	壺形	口縁部	隆沈線+無文研磨
266	G IV	壺形	口縁部	隆沈線+無文研磨
267	D II	壺形	口縁部	隆沈線+無文研磨
268	D III	壺形	口縁部	沈線+無文研磨
269	C III	壺形	口縁部	沈線+無文研磨
270	G V	壺	口縁部	沈線+無文研磨
271	F V	壺	胴上部	沈線+無文研磨
272	G V	壺	胴上部	沈線+無文研磨
273	F V	壺	胴上部	沈線+無文研磨
274	G IV	注口	胴中央	無文地+隆起線上への刺突文
275	F III	注口	口縁~胴部	刻目文+平行沈線+X字状磨消+隆起蒂への刺突
276	F II	注口	口縁部	刻目文+隆起蒂への刺突文+無文帶
277	D IV	注口	口縁部	刻目文+沈線文+瘤状小突起
278	C II	鉢	口縁	平行沈線+刺突文+無文研磨
279	C II	鉢	口縁	刻目文+沈線文+無文研磨帶
280	D III	鉢	胴部	無文研磨帶+沈線文
281	F III	鉢	胴部	無文研磨
282	B III	鉢	胴部	無文研磨
283	H IV	鉢	胴部	無文研磨
284	G IV	鉢	胴部	無文研磨
285	H VI	鉢	胴部	無文研磨
286	F III	鉢	胴部	無文研磨
287	F III	鉢	胴部	無文研磨
288		鉢	胴部	無文研磨

土器観察表（拓本No.9）

番号	出土地点	器種	部位	文様の特徴
289	I VI	鉢形	肩部	無文研磨
290	D II	鉢形	肩部	無文研磨
291	C II	鉢形	胴部	無文研磨
292	C II	鉢形	肩部	無文研磨
293	C II	鉢形	胴部	無文研磨
294	I VII	鉢形	肩部	無文研磨

## (2)土製品

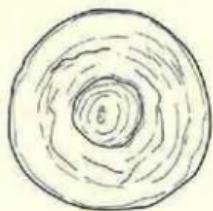
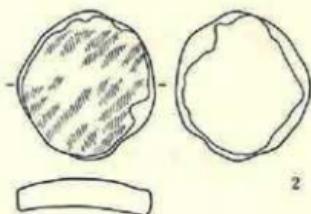
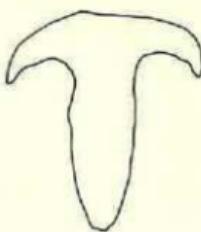
本遺跡では、異形土製品（形状から葺状土製品と呼ぶ）1点、円盤状土製品3点が出土している。

### ①葺状土製品（第53図1・写真図版49-1）

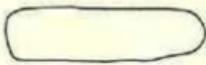
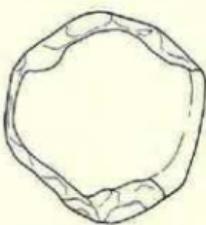
その形状より葺を連想させる土製品で、色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。カサ相当部の径5.2cm、高さ5.6cm、茎相当部の径1.5cmを測る。

### ②円盤状土製品（第53図2～4・写真図版49-2～4）

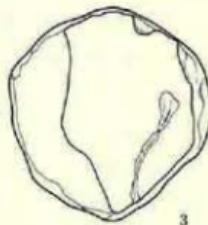
通有土製円盤と称されているもので、基本的には土器破片（素材としての破片は胴部が比較的多く、中には底部を利用する場合もある）の二次的な再利用によって周縁を研磨成形し、円盤状に仕上げられたものである。第52図2は3.5cm×3.7cm、3は4.0cm×5.3cm、4は5.8cm×5.9cmを測る。



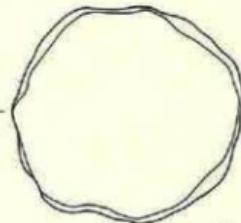
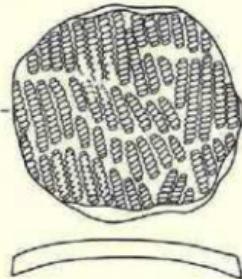
1



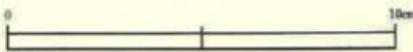
2



3



4



第53図 土 製 品

### (3)石器

本遺跡から出土した石器は、形態に注目するならば、石鎌や石斧のような定形的な石器と、一般に不定形石器と呼ばれるような非定形的な石器とに分けることができる。以下に各石器を形態によって分け、器種別に解説する。遺構外から出土したものが主体であるが、出土地点等については、観察表、遺構ごとの解説を参考にしていただきたい。

#### 石鎌

10点出土。平面形、横断面形、剥離調整の精粗などにより以下のように分けた。平面形態の分類は赤堀 1929 を主に使い、名稱は佐原 1964 によった。

##### ①平基有茎石鎌（第 54 図 1・2・写真図版 50-1、2）

2点出土。どちらも基部を軸に左右対象形で、先端部および着柄部の剥離調整は入念である。断面形は三角形状で、偏平である。両者とも茎部端部が欠けている。

##### ②平基無茎石鎌（第 54 図 3・写真図版 50-3）

1点出土。基部底辺は直線的で、平面形は二等辺三角形に近い。表裏面とも細かく入念な剥離調整が施されている。断面形は扁平な菱形である。

##### ③凹基無茎石鎌（第 54 図 4・写真図版 50-4）

1点出土。着柄部が内弯するようにえぐられたものである。調整は細かく入念である。断面形は扁平な菱形に近い。

##### ④尖基石鎌（第 54 図 6～10・写真図版 50-6～10）

基部がいくぶん尖るものである。6・10は比較的幅広だが、7・8・9は幅はさほど広くなく、基部との胴部の境が明瞭ではない。これらは他のタイプの石鎌とは異なり、肉厚である。この点をこの石鎌の特徴とすることができます。他の石鎌との機能、ひいては用途の差を示しているのかもしれない。特に 10などは、幅広で肉厚であることから細い柄をつけて矢として用いるよりも、握るのにちょうどよいほどの太さの柄を付けて手持ちの槍やヤスとして用いた可能性は考えられないだろうか。

### 石錐（第 54 図 11・写真図版 50-11）

1点出土。つまみ部に相当するやや幅広い基部を持ち、肉厚、細身の尖頭部位に穿孔具手的な機能を想定できる石器である。素材面を多く残し、調整も粗雑である。錐部の断面は三角形状である。先端部がいくぶん欠けている。

### 石鎌（第 54 図 12・写真図版 50-12）

1点出土。肉厚、横長の剥片を用い、両面に入念な加工が施されている。刃は両面から同等の加工が施された両刃、刃の平面形は半円状である。刃の反対側が基部と考えられるが、そちらは尖端にむかって次第に細くなっている。柄に挿入されていたのであろうか。基部と考えられる部分の形態が整っており、調整が入念なのはそのためかもしれない。平面形は左右対象である。

### 不定形石器

石鎌や石錐といった細かい加工を施された定形石器に用いられることの多い石材を用いた石器で、定形的ではない剥片石器を一括して不定形石器と呼んだ。削器、壺器的な機能を持つものも、平面形が定形でないものはここに入れた。素材の形状と刃部の規模、形状、位置に注目し、以下のように分類した。

#### I 石槍状だが厚いもの（第 54 図 13・写真図版 51-13）

両面加工が施されており、平面形は槍状であるが、断面は厚い菱形である。厚いので、柄を付けるのにはあまり適した形ではない。ナイフかスクレイパーとして用いられていたのであろうか。

#### II 同様な加工が両面に施されるもの（第 56 図 34・写真図版 52-34）

基部と考えられる部分の他の三辺に刃が作られている。加工は両面とも同じように施されている。刃の接物線はほぼ直線である。両刃のナイフとして利用された可能性が高い。しかし、実際は片面からの加圧が多かったようで、刃こぼれは片面からの加圧によっておこっているものがほとんどである。スクレイパーとしても利用されたのであろう。

#### III 基部の加工が考えられるもの（第 56 図 28-31・写真図版 52-28-31）

28 の場合は、やや横長剥片的な素材の最も厚みのある打点、打瘤部をいくらか剥離してあるのである。そして、使用によると思われる剥落が加工されていない反対の辺にある。31 は、素

材のほぼ中央部片面に長く薄い剝離が施されている。使用によると思われる剝落があるのは、加工されていない部分である。

#### IV ピエス・エスキュー的なもの（第 56 図 35・写真図版 52-35）

両極に比較的長い幅広の薄い剝離があるが、回数は多くない。数回の加圧による階段状の剝離は見られない。したがって、ピエス・エスキューと言うよりは両極打法による剝離の結果付いた痕と考えるべきかもしれない。

#### V 利用されたフレイク

他に利用された結果特定の形状の刃こぼれ、連続した剝落が見られるものがある。それらを利用されたフレイク（utilized flake）と認定した。

##### V-1 平面形半円状の剝落、片面からの加圧のもの（第 55 図 16・写真図版 51-16）

細い筒状のものを一方向から削ったりした場合に付くような剝落である。

##### V-2 平面形直線、片面からの加圧、刃角度 60 度以上のもの

使用される前のフレイクの角度はほぼ 90 度。スクレイバーとして利用されたのであろう。

##### V-3 平面形直線、片面からの加圧、刃角度 20 ~ 30 度のもの

鋭い新鮮な刃部を持ったフレイクを利用したもの。刃部の角度は 20 ~ 30 度ほど。片面からの加圧による剝落痕があるので、多少傾けて小刀的に利用したのであろうか。他にフレイクをいくらか図示した。

#### 大型粗製刃器（第 56 図 42、第 57 図 43、44・写真図版 53-42 ~ 44）

本類は、最広義には打製石器あるいは大型剝片石器の範疇のものとして捉えられよう。いずれも鈍角、肉厚に作り出された幅広い刃部は磨滅し、裏面には擦痕が顕著である。本遺跡では 3 点の出土であるが、広瀬遺跡、堂ヶ沢遺跡でも同様の石器が出土している。

#### 磨製石斧（第 57 図 45 ~ 51、第 58 図 52・写真図版 54-45 ~ 52）

7 点出土。すべて流紋岩製。ただし、そのうち 1 点は磨製石斧ではなく、敲石の類かもしれない。平面形、刃の側両面とも中心軸に対し対象に作られているものが主である。また、石材や刃の形状（両刃）から考えて、切断具である斧が主体をしめる。ただし、比較的小型、軽量

で、破損していないものは加工工具である手斧やノミとしても用いられていたかもしれない。破損したものは斧として用いられていたと考えられる。

平面形、刃の幅の組み合わせにより、2形態、4タイプに分けられた。

#### 全体平面形

- I 脊部が最も幅広となり、基部先端部幅が刃幅よりも狭い
- II 刀部が最も幅広となり、基部先端部にむかって徐々に狭くなる（平面形は三角形的）

#### 刃部平面形

- a 中心が最も突出した外彫形（円刃）

外湾の度合いがほんのわずかであるものもあるが、本遺跡から出土したものには、直刃はない。

#### 基部幅、基部厚さ（絶対値）

小—基部幅およそ3cm以下、基部厚さおよそ1.5cm以下

大—基部幅およそ4cm以下、基部厚さおよそ2cm以上

#### ① I-a-小（第57図45・写真図版54-45）

完成品。両刃。ただし、基部から刃部を見た場合の両側刃部が両面ともよく磨かれており、いくぶん面取りが施されたかのようになっている。

#### ② I-a-大（第57図49・写真図版54-49）

破損品。脣部から刃部にかけて残存。ゆるく外彫する両刃。刃部尖端にはいくぶん刃こぼれがある。側縁は面取りされてはいない。

#### ③ II-a-小（第57図46・48・写真図版54-46・48）

46は完形品。両刃。刃の付近が最もよく磨かれており、光沢がある。側縁は平に面取りされており、よく磨かれている。48は刃部、基部先端部が欠けているが、側縁は平に面取りされている。刃部の欠損は、使用によるものなのか不明だが、両面とも刃先端部から基部に向かって剥落している。

#### ④ II-a-大（第57図50・写真図版54-50）

破損品。脣部から刃部にかけて残存。外彫する両刃。ただし、脣部から折れた後に、再加工しようとしたのか、両面、側縁とも敲打痕が広くついている。刃部は両面とも剥離されている部分が広い。

⑤II一大（第57図51・写真図版54-51）

破損品。基部先端部のみ残存。側縁はよく磨かれ平らになっているが、稜ができるほど面取りされたというものではない。一度の加撃で折れている。

⑥その他（第58図52・写真図版54-52）

最初に述べたが、これは磨製石斧ではないかもしれない。胴部から基部にかけて残存していると考えてもよいが、刃部が不明なので磨製石斧と断定することはできない。基部先端部側縁が使用によるか敲打痕が1.5cmほどついている。側縁に面取りはおこなわれていない。細長いタイプの敲石の破損品の可能性もある。

### 打製石斧

ここで打製石斧と呼んだのは、安山岩、凝灰岩、ホルンフェルス、流紋岩製の簡単な調整をおこなっただけの比較的大きな斧型石器である。一般には土掘り具と考えられているものである。本遺跡出土のものが土掘り具であったか否かは不明だが、破損の仕方から考えて、土掘り具として使われた可能性は大きい。

用途はどちらも同じと思われるが、素材形状の選び方によって以下の二つに分類した。

#### I 製品に近い自然縁を選び、その縁辺を加工するもの。（第58図54、57・写真図版55-54、57）

54は完成品である。細長い形状をしているので、幅の狭い端部が刃部と推定できるが、両端とも、肉眼では使用痕と思われるものは見られない。したがって、どちらが基部であるか正確にはわからないが、胴部中央からどちらかにかたよって側面の刃つぶしが多くおこなわれている方を基部と考えた。そうすると、この個体の刃部先端は自然面が残されていることになる。

57は胴部で破損している。基部の方が残ったのか、刃部の方が残ったのか不明。側面には敲打痕が比較的多く残る。残存している先端部は多くの調整が施され、形状が整えられている。

#### II 削片の縁辺を加工するもの。（第58図55、56、58-60、第59-61-63・写真図版55-55、56、58-63）

完形品は56と58の2点である。61と62は胴部で破損している。63は胴部で破損したと思われるが、その後破損部が加工され、再び利用されていたようである。いずれも、肉眼では使用痕は観察できない。63は幅が広いが、柄を付けるため基部幅が狭くなっていたかもしれない。また、破損した後は、その形状から考えると、柄を付けた土掘り具としては利用されていなかったのではなかろうか。

使用痕は観察できなかったが、胸部半ばで刃部と思われる先端部に対して平行に破損しているものが多いことから、胸部に胸部と同じくらいの幅の柄を付けて使用していたと推測できる。土掘り具であったと想定してもよいのではなかろうか。

#### 半円形扁平打製石器（第 59 図 64・写真図版 56-64）

青森県を中心に、半円形扁平打製石器と言われているもので、本遺跡では 1 点だけの出土である。半円形をなす湾曲部位面に両側から粗雑な打撃調整を施して横刃形の刃部を作り出している。

#### 礫石器（第 59 図 65、66・写真図版 56-65・66）

既述した大型敲打切削器 1 類よりも表裏両面に多く礫面を残し、片面および両面の粗雑な調整によって锐角の刃部を作り出しているものである。65 は粗雑な片面加工、66 は先端部およびその周縁に両面加工をおこなって幅広い刃部を形成している。

#### 磨石類（第 59 図 67、第 60 図 68-71・写真図版 56-67-71）

扁平な楕円礫を素材とし、使用痕（擦る、敲く、潰す）が重複している石器群で、68-70 は表裏両面および周縁に擦痕が観察され、その使用頻度がうかがわれる。

#### 特殊磨石（第 62 図 81、82・写真図版 58-81・82）

棒状磨石とも言われているもので、断面が三角形状の方形礫の側辺部に使用擦痕、破損痕が顕著に観察される。

#### 凹石（第 60 図 72、第 61 図 73-78・写真図版 56-72、73-57-74-78）

円形・楕円形・長楕円形の礫の片面および表裏両面に凹状の痕跡を有するものである。72-76 は表裏両面に 1-2 個の凹状の痕跡を持つ。77 は長楕円形で片面のみ、78 は表裏両面にそれぞれ凹状の痕跡を持つ。

#### 石錐（第 62 図 79、80・写真図版 57-79、80）

2 点出土。いずれも扁平な小円礫の長軸上下端に若干の打ち欠きを施した粗製品である。

#### 石皿（第 62 図 83、第 63 図 84-87・写真図版 58-83-87）

いずれも自然石に大きな加工を加えず、片面が緩やかな凹状の粗製品である。83 は周縁部に

若干の縁取りがなされている。84、85はいずれも破損品である。

#### 石棒（第64図88～101・写真図版59-88～98、60-99～101）

未製品と思われる石材を含め14点出土。成形時の精粗および断面形状などから分類した。

##### I（第64図88・写真図版59-88）

端部は、ちょうど野球のバットのグリップ・エンドのように膨らんでいる。そして、端部先端は研磨され、浅く窪んでいる。横断面は正円形に近い形状で、器表面が滑らかに研磨された精製品である。端部から10cmほどのところで破損している。また、端部のちょうどグリップ・エンドのように膨らんだ部分の縁部も3～4箇所剥落している。意図的な加撃の結果であろう。

##### II（第64図89・写真図版59-89）

胸部の破損品。表面はよく研磨されている。横からの力、縦からの力、両方向から破損され、残存部横断面は半円形だが、本来横断面はほぼ円形であったと思われる。

##### III（第64図90～101・写真図版59-90～101）

断面形状は方形、五角形、六角形の柱状の石である。石材の種類が石棒に用いられることの多い流紋岩、安山岩であること、形態が石棒製作に都合がよいこと、周辺にはない形状の自然石であるにもかかわらず遺跡にあったことから、石棒の未製品であると推定した。

#### 石刀（第65図102・写真図版60-102）

粘板岩製であることと、形状から石刀刃先に近い部分と認定した。破損品である。横断面形態は狭長楕円形で、刃状に鋭く磨かれた部分は刃先に近い4cmほどの部分だけである。

#### 石刀・石剣類（第65図103～106・写真図版60-103～106）

103は凝灰岩質千枚岩製である。偏平で長い自然縫が選択され、縁辺部が欠けている。人為的に剥離されたというよりは、使用による欠けと言った方がよさそうである。したがって、石刀や石剣と言うより、なにかを切断するための道具と考えた方がよいだろう。

104～106の断面形態は、石刀と考えた102のものよりも扁平な狭長楕円形である。すべて粘板岩製である。ただし、すべて破損品である。刃部に相当する可能性のある縁辺部は明確に刃として調整されているのは片方だけであるので、石剣というよりは石刀と分類すべきかもしれないが、一部しか残っていないため正確なことはわからない。104の片方の端部にはくびれ

がある。把手が付いていたのかもしれない。あるいは石材を切断するための行為の痕であるかも知れない。

#### (4)石製品

環状石製品 3 点、有孔石製品 1 点、円盤状石製品 1 点の 5 点の石製品が出土している。

##### (1)環状石製品（第 18 図 5～7・写真図版 15－3～5）

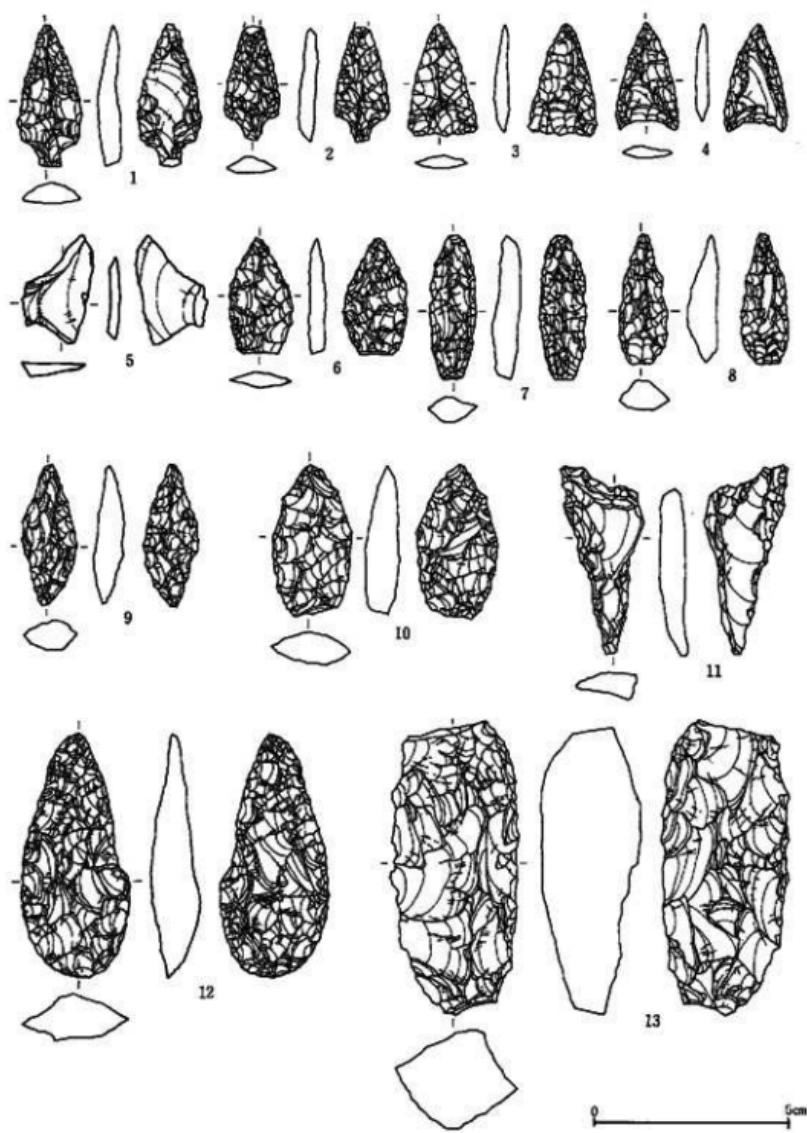
HIV 土坑 1 号の底面から 3 点かたまって検出された。やや軟質の白色極細粒凝灰岩を素材としている。両側から孔を穿ち、四側面部に入念な面取りを施した精製品である。ネックレスのように用いられたものであろう。土坑は墓の可能性が想定できるものであった。これらの環状石製品は、被葬者に装着されていたものであろうか。

##### (2)有孔石製品（第 66 図 107・写真図版 61－107）

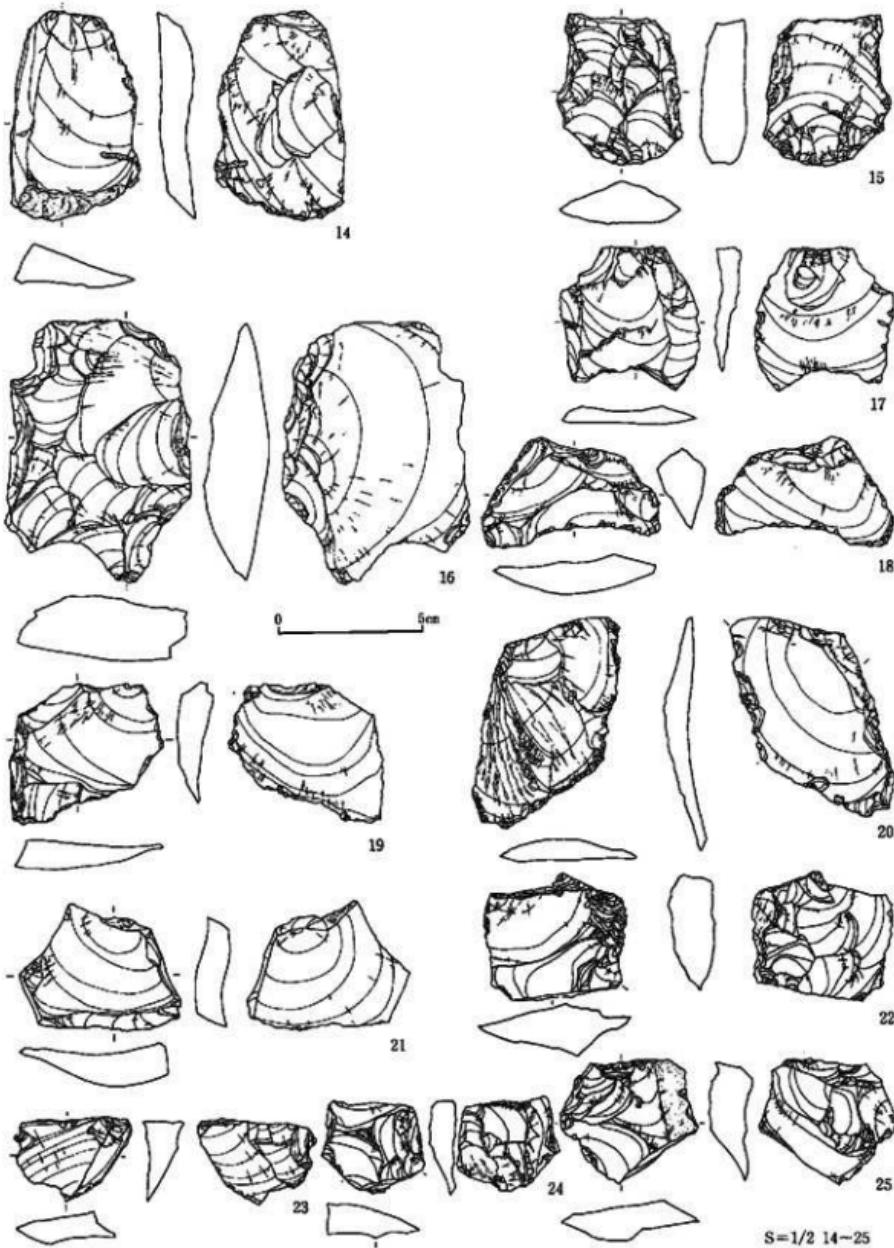
楕円形盤の上端両側面から孔を穿ち、器表面に凹状の痕跡を持つ。

##### (3)円盤状石製品（第 66 図 108・写真図版 61－108）

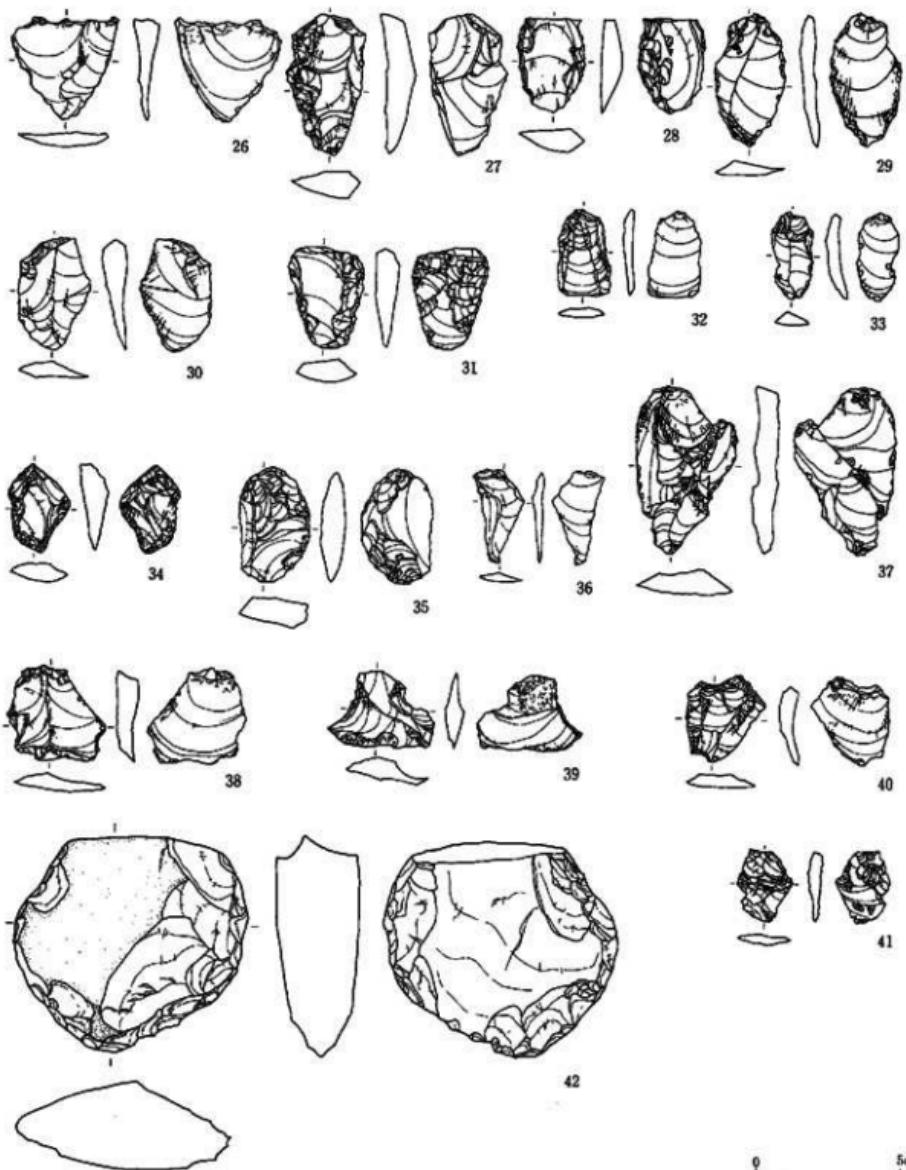
扁平な円盤の周縁を剥離し、大略円盤状に仕上げられた石器である。この種の石器は縄文時代中期以降に散見されるが、岩手県内では衣川村東裏遺跡、北上市九年橋遺跡、大迫町小田遺跡、盛岡市手代森遺跡などからうかがえるように、縄文時代晩期に極端に出土例が増える傾向がある。



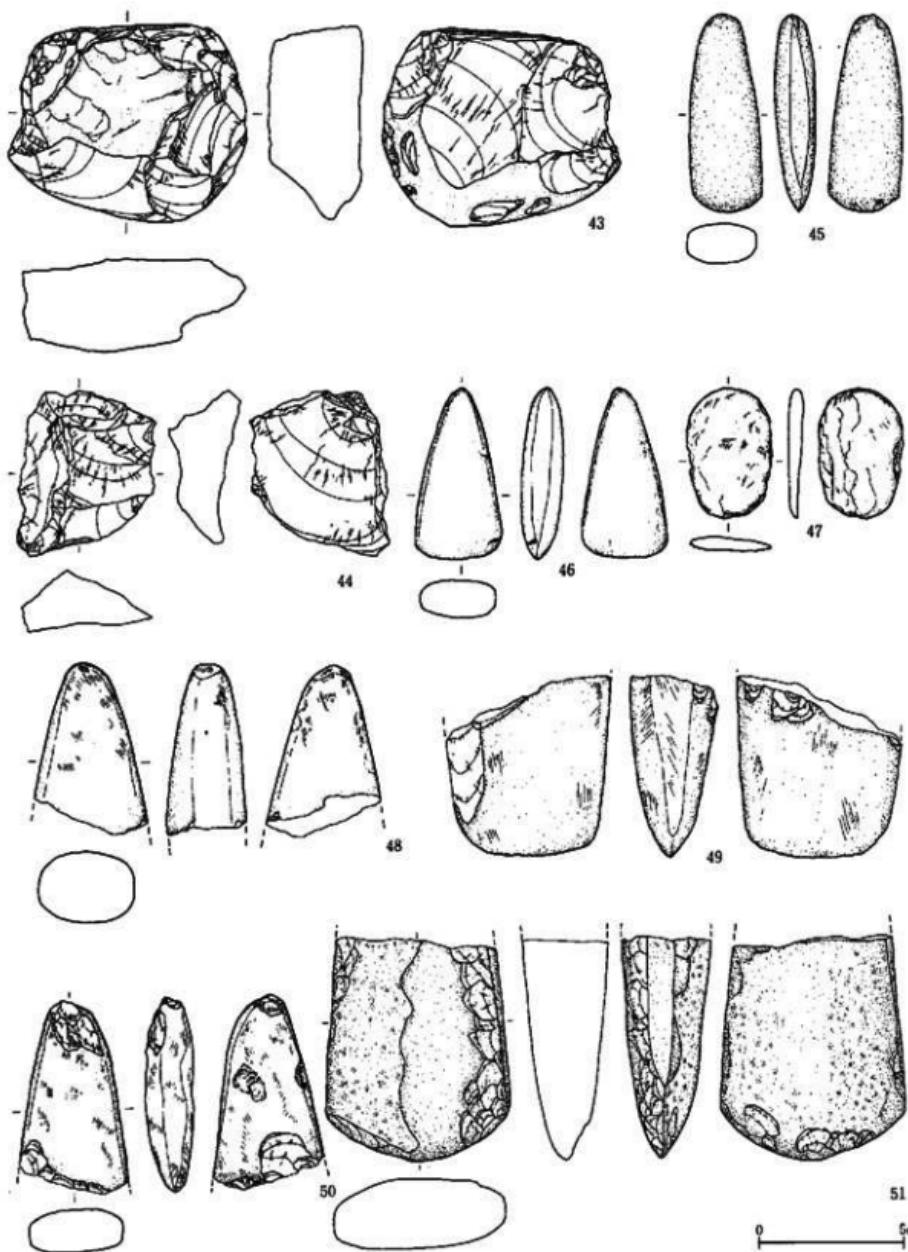
第54図 出土石器(1)



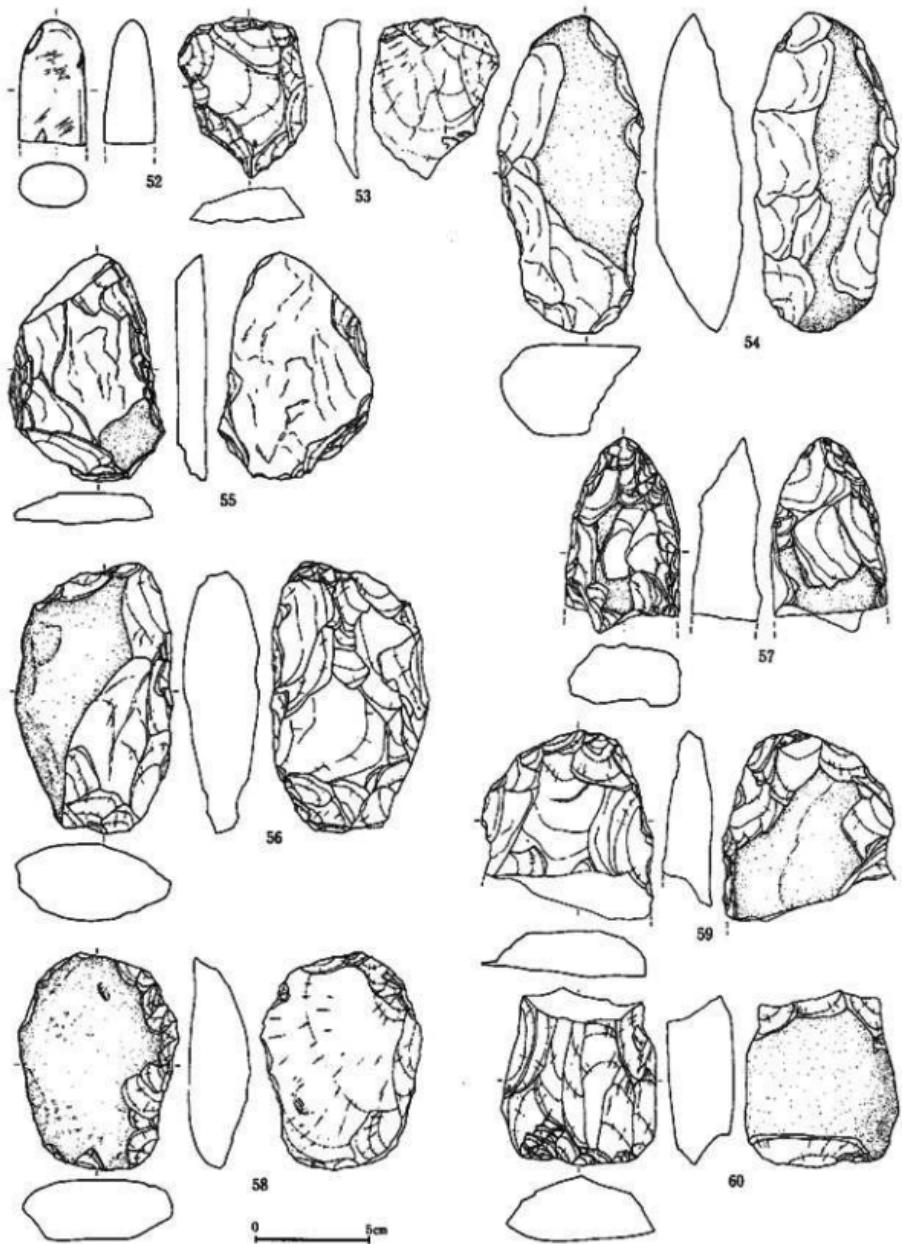
第55図 出土石器(2)



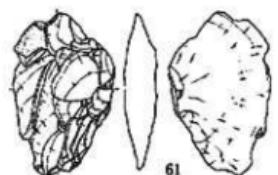
第56圖 出土石器(3)



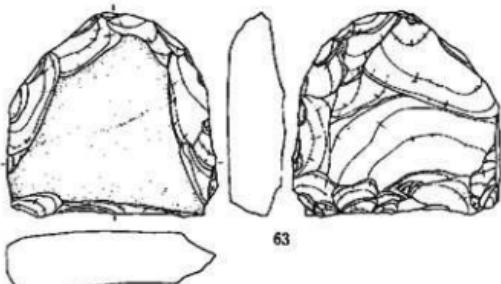
第57圖 出土石器(4)



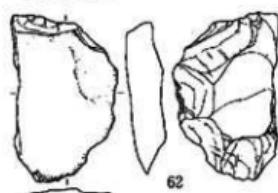
第58圖 出土石器(5)



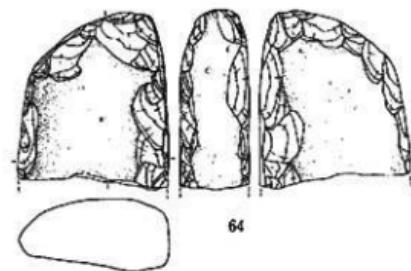
61



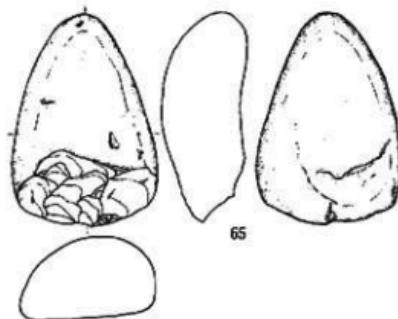
63



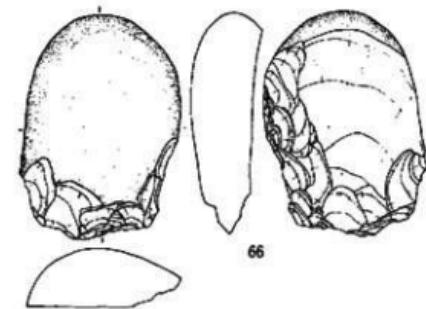
62



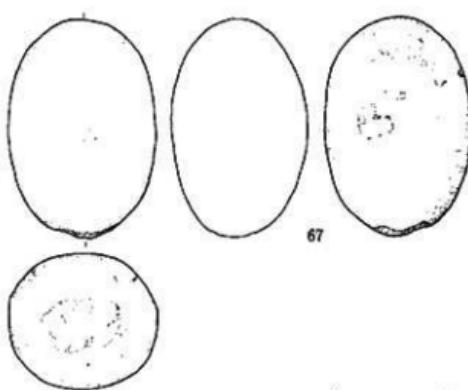
64



65



66



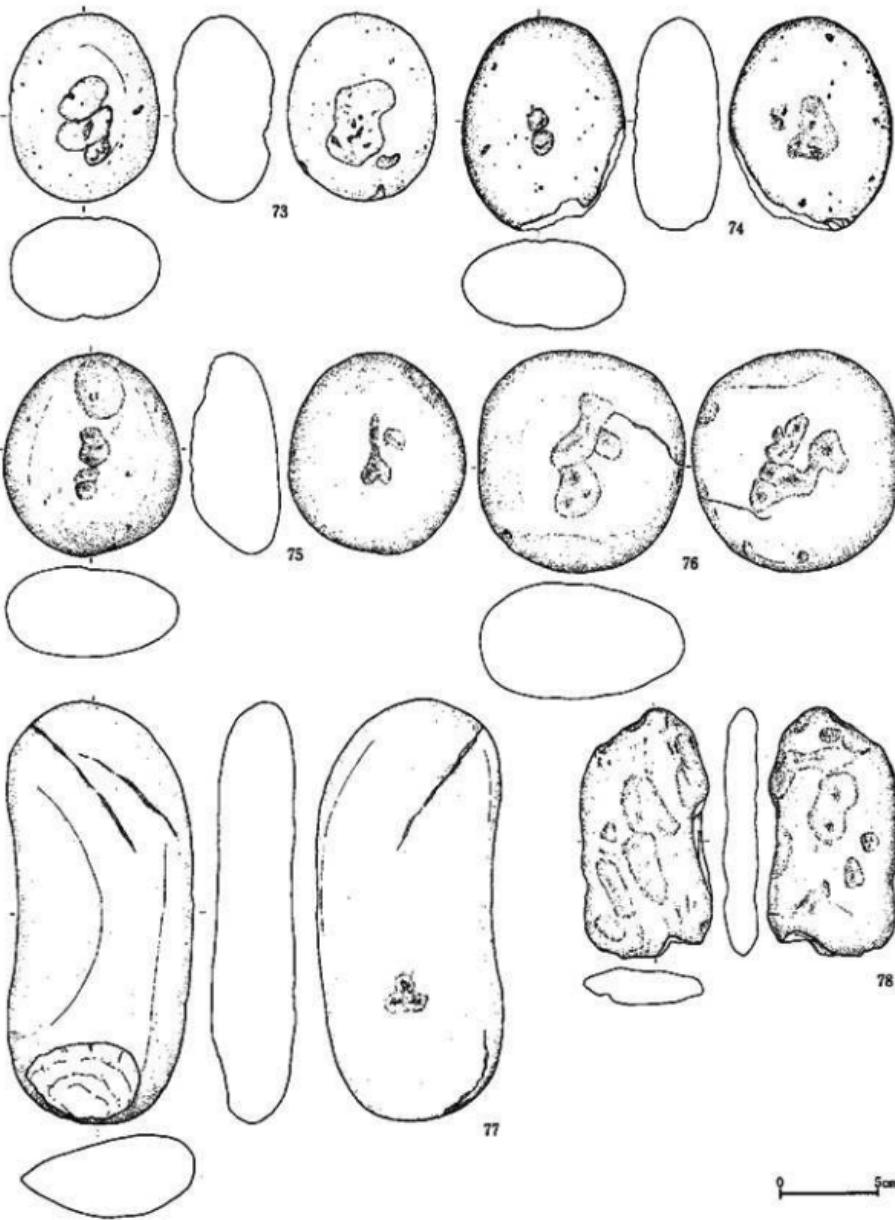
67

0 5cm

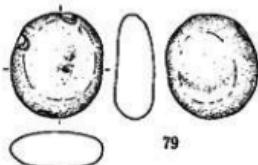
第59図 出土石器(6)



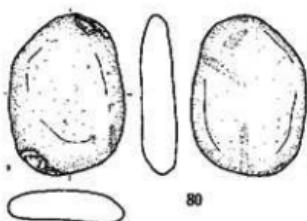
第60圖出土石器(7)



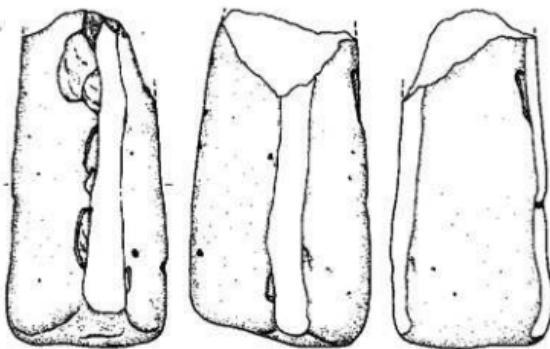
第61図 出土石器(8)



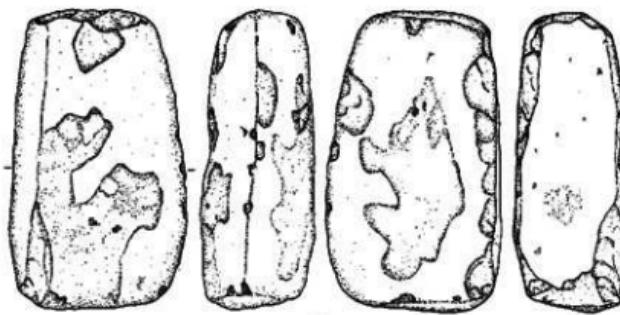
79



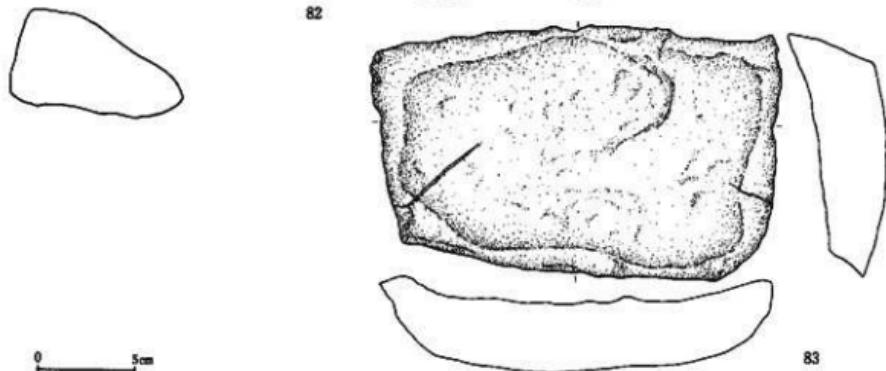
80



81

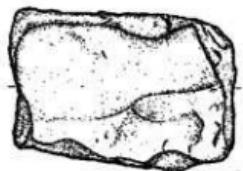


82

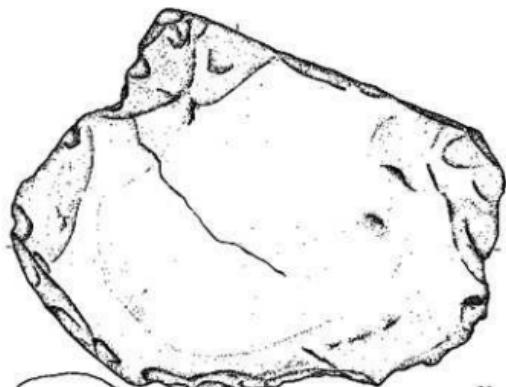


83

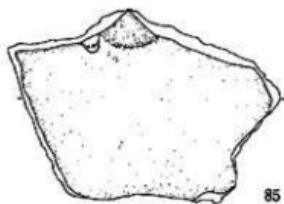
第62図 出土石器(3)



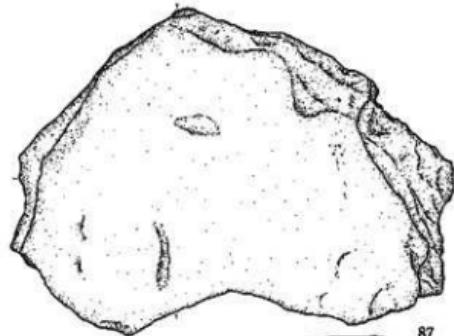
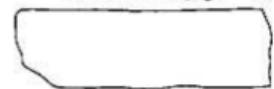
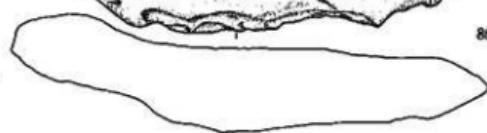
84



86



85

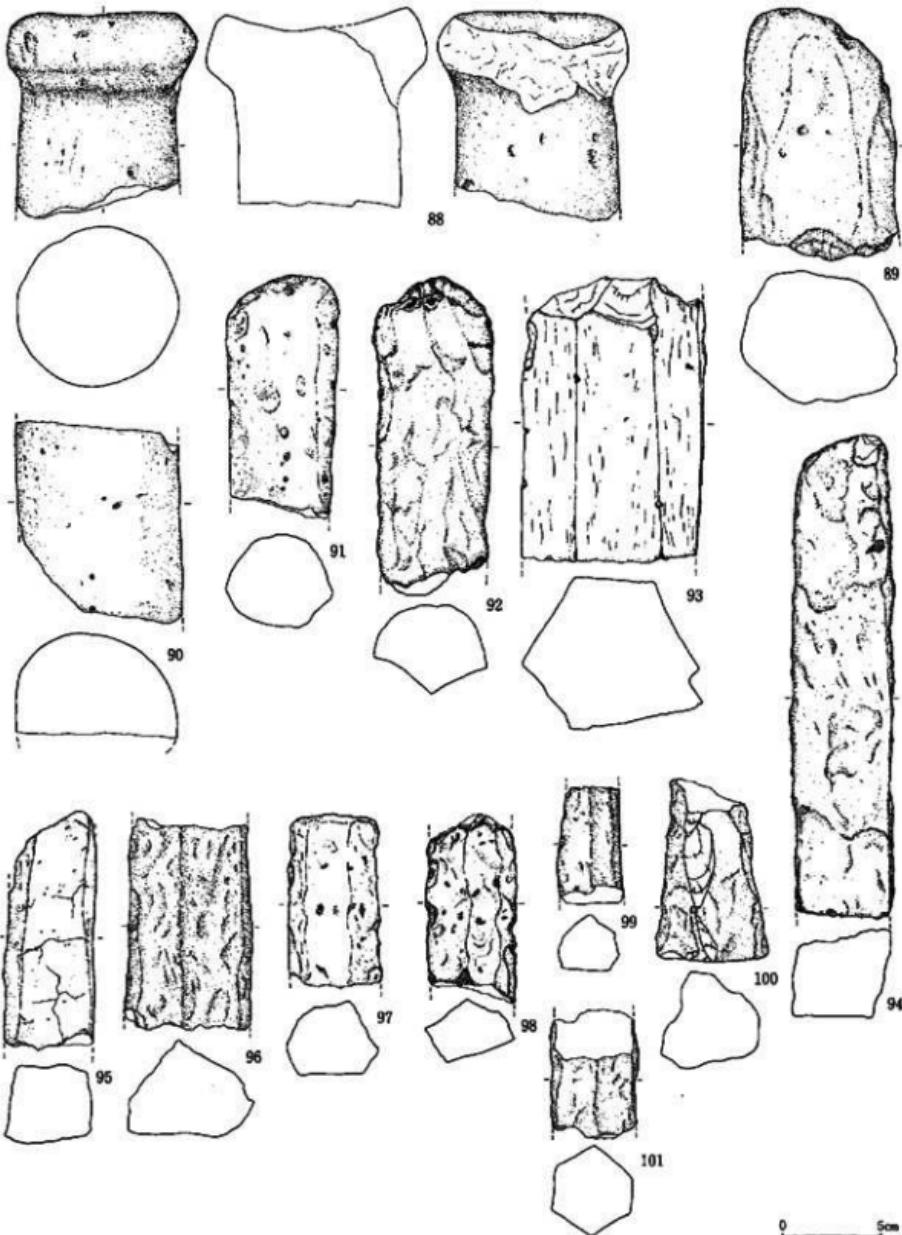


87

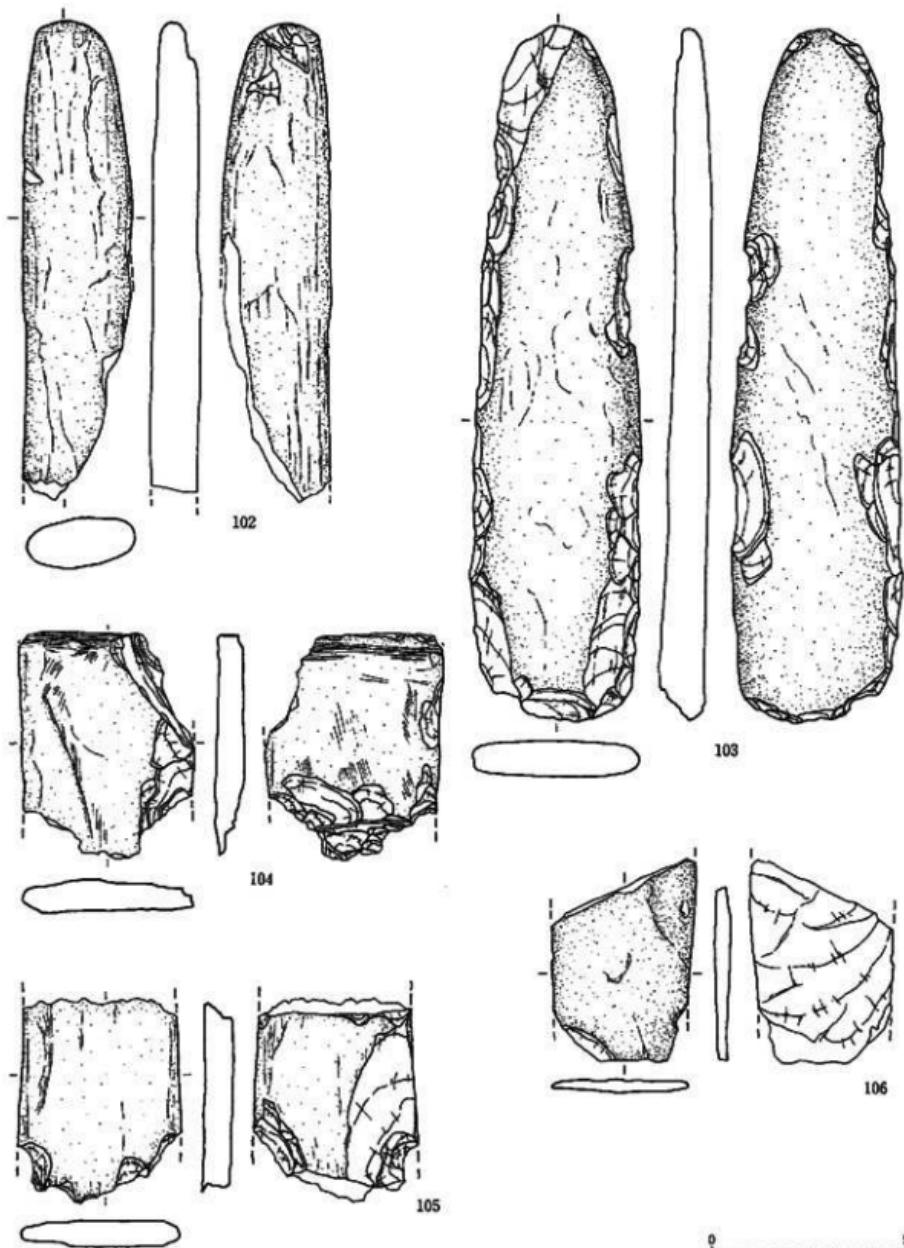


S=1/3 84+85  
S=1/6 86-87

第63圖 出土石器(10)

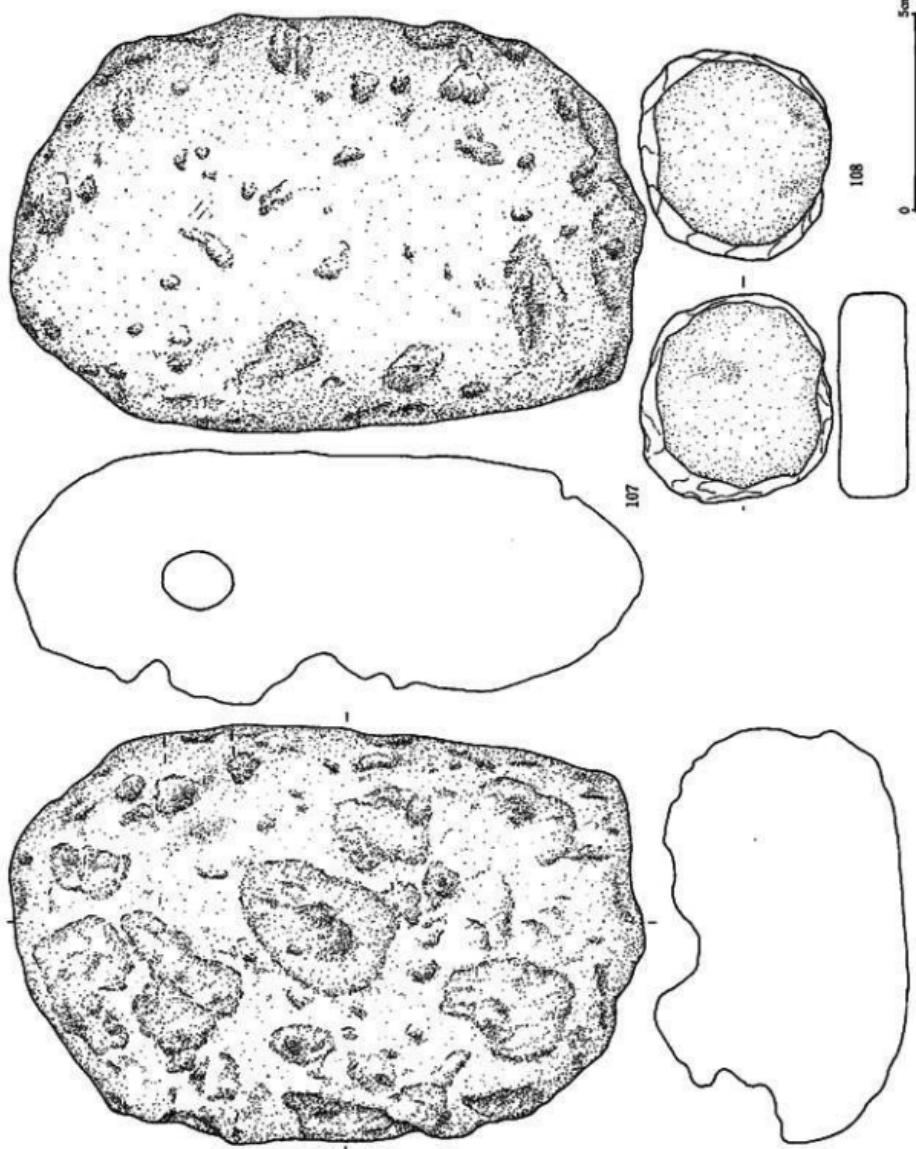


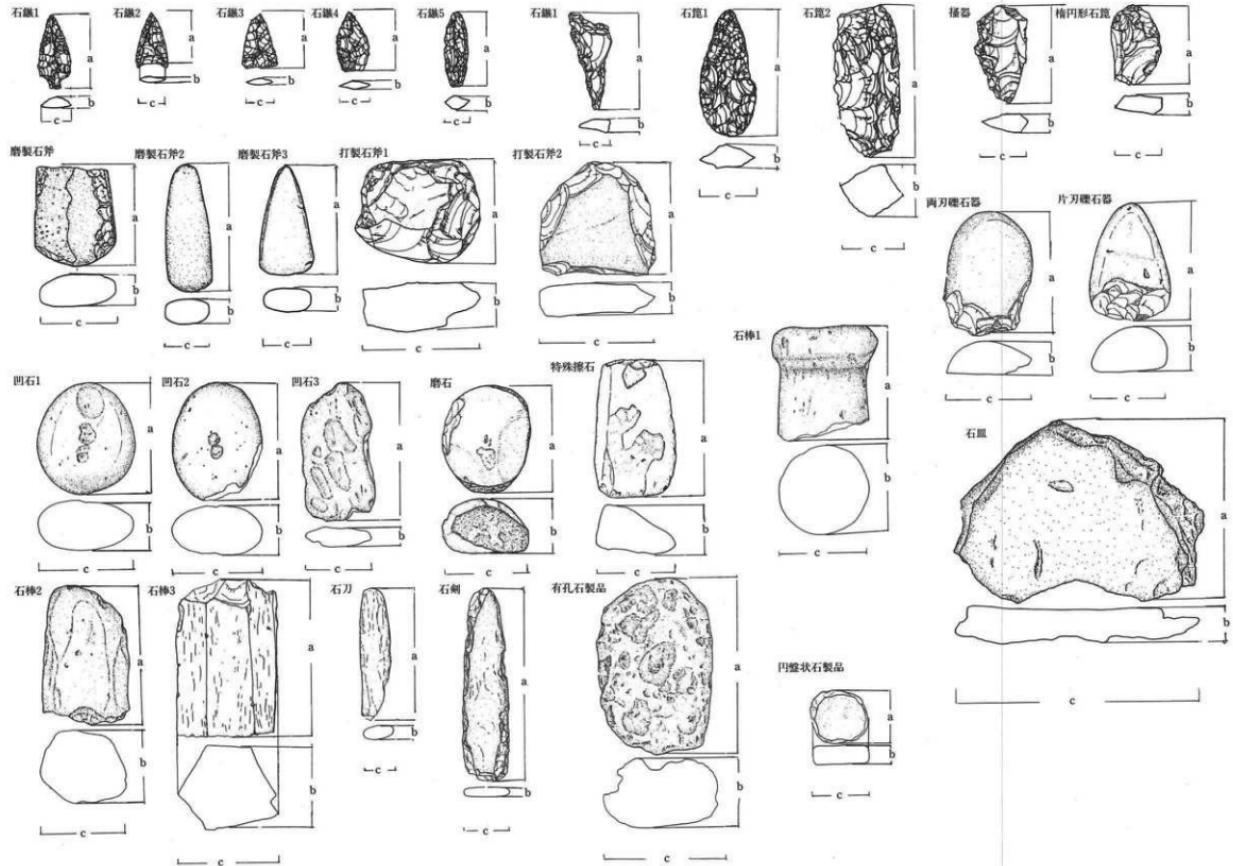
第84図 出土石器(11)



第65図 出土石器(12)

第36圖 石製品





第67図 石器計測位置図

石器觀察表 (No.1)

番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	重量(g)	厚さ(cm)	石質
1	JVI	有茎石鏟	3.7	1.5	0.6	0.6	珪質凝灰岩
2	DII	有茎石鏟	3.0	1.3	0.4	0.4	粘板岩
3	FII	無茎石鏟	2.9	1.8	1.4	0.4	珪質凝灰岩
4	FV	無茎石鏟	2.6	1.6	1.23	0.3	粘板岩
5	DII	フレイク	1.6	2.7	3.0	0.3	粘板岩
6	FII	尖基石鏟	3.0	1.6	1.24	0.4	赤色凝灰岩
7	CIV	尖基石鏟	3.7	1.2	2.81	0.6	ボーフィライト
8	GIV	尖基石鏟	3.3	1.3	2.8	0.8	粘板岩
9	FIV	尖基石鏟	3.6	1.4	1.67	0.7	粘板岩
10	HII	尖基石鏟	4.0	2.1	3.06	0.8	粘板岩
11	HV	石鎚	4.3	1.9	5.77	0.6	粘板岩
12	HIV	石鎚	6.3	2.7	6.41	1.2	泥質凝灰岩
13	JII	不定形I	7.5	3.2	17.7	2.5	泥質凝灰岩
14	BII	フレイク	7.1	4.2	16.5	1.3	粘板岩
15	HIV	u.フレイク V-2	5.0	4.2	17.5	1.5	珪質凝灰岩
16	CII	u.フレイク V-1	5.9	9.0	18.6	2.2	珪質凝灰岩
17	FIII	u.フレイク V-3	4.1	4.6	17.5	0.8	珪質凝灰岩
18	EII	u.フレイク V-3	2.6	6.1	22.7	1.6	珪質凝灰岩
19	BII	フレイク	4.2	5.1	12.7	1.0	粘板岩
20	BIV	u.フレイク V-3	4.7	8.1	18.6	0.9	珪質凝灰岩
21	CII	フレイク	3.8	5.2	30.4	1.2	珪質凝灰岩
22	FV	フレイク	4.8	5.4	8.9	1.7	珪質凝灰岩
23	BIII	u.フレイク V-2	2.8	3.4	12.7	1.3	粘板岩
24	HV	フレイク	4.0	3.2	12.3	1.0	粘板岩
25	IWI	フレイク	4.2	4.6	12.8	1.3	珪質凝灰岩
26	IWI	フレイク	3.5	3.5	10.4	0.8	粘板岩
27	FII	u.フレイク V-3	4.8	2.6	14.4	1.0	粘板岩
28	FIII	不定形III	3.2	2.3	4.91	0.8	珪質凝灰岩
29	FIV	u.フレイク V-3	4.4	2.4	5.6	0.5	硬質凝灰岩
30	IWI	フレイク	3.9	2.5	8.51	0.8	珪質凝灰岩
31	IWI	不定形III	3.5	2.2	2.48	0.8	珪質凝灰岩
32	IWI	フレイク	3.0	1.5	2.35	0.3	珪質凝灰岩
33	IWI	フレイク	2.9	1.2	2.6	0.5	珪質凝灰岩
34	GIV	不定形II	2.9	2.0	7.0	0.9	粘板岩

石器観察表 (No.2)

番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	重誠(g)	厚さ(cm)	石質
35	HIV	不定形IV	2.4	3.9	2.93	0.9	硬質泥岩
36	FV	フレイク	3.2	1.5	4.6	0.6	珪質凝灰岩
37	DII	フレイク	5.7	3.2	15.1	0.9	粘板岩
38	HV	フレイク	3.2	3.1	5.93	0.7	粘板岩
39	DII	フレイク	2.6	3.6	4.3	0.7	珪質凝灰岩
40	CIV	フレイク	2.6	2.3	3.8	0.5	粘板岩
41	FV	フレイク	2.5	1.9	1.36	0.4	粘板岩
42	GIII	大型粗製刃器	8.1	7.4	221.1	2.8	ホルンフェルス
43	HVI	大型粗製刃器	7.6	6.6	226.9	3.2	ホルンフェルス
44	BII	大型粗製刃器	5.2	4.4	54.4	2.2	赤色凝灰岩
45	DII	磨製石斧	6.8	2.4	37.29	1.4	ボーフィライト
46	FIV	磨製石斧	5.9	2.9	36.5	1.3	ボーフィライト
47	FV	砾	4.5	2.8	9.6	0.4	粘板岩
48	GV	磨製石斧	(5.5)	3.4	31.7	2.4	ボーフィライト
49	CIII	磨製石斧	(6.0)	(5.5)	34.9	(3.0)	ボーフィライト
50	HVI	磨製石斧	(6.4)	3.7	13.3	1.5	凝灰質砂岩
51	DIV	磨製石斧	(7.7)	6.3	21.6	2.9	凝灰質砂岩
52	DIII	磨製石斧	(5.3)	2.3	14.4	1.9	粘板岩
53	DIII	u.フレイク	6.9	5.0	40.63	1.9	ボーフィライト
54	DIII	打製石斧	13.7	6.0	108.1	8.0	粘板岩
55	FIII	打製石斧	9.9	6.4	305.0	1.3	ホルンフェルス
56	EVII	打製石斧	11.0	6.7	169.7	3.2	ボーフィライト
57	BIII	打製石斧	(8.0)	4.7	28.4	2.4	粘板岩
58	EIII	打製石斧	9.2	7.0	145.8	2.6	ホルンフェルス
59	EIII	打製石斧	7.7	7.1	183.3	1.9	ホルンフェルス
60	CIII	打製石斧	(7.5)	6.5	169.7	2.8	ボーフィライト
61	FII	打製石斧	5.1	8.2	24.40	1.7	ホルンフェルス
62	DIII	打製石斧	8.6	5.0	82.2	1.6	ホルンフェルス
63	DIV	打製石斧	10.4	10.8	50.7	3.0	ホルンフェルス
64	IVI	半円形偏平 打製	(9.1)	7.8	465.0	3.8	ボーフィライト
65	DIV	砾石器	11.0	7.5	417.0	4.1	凝灰岩
66	GIII	砾石器	11.5	8.0	467.0	3.2	流紋岩
67	JV	磨石	11.3	7.7	875.0	7.0	両輝石安山岩
68	JVI	磨石	12.0	8.9	760.0	5.1	粘板岩

石器觀察表 (No.3)

番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	重量(g)	厚さ(cm)	石質
69	IV	磨 石	9.9	8.2	1190	5.1	両輝石安山岩
70	CII	磨 石	11.8	9.4	744	7.8	両輝石安山岩
71	EIV	磨 石	8.7	8.1	501	7.4	両輝石安山岩
72	HIV	凹 石	(7.9)	9.0		5.5	両輝石安山岩
73	FIV	凹 石	9.7	7.7	500	5.0	両輝石安山岩
74	FIV	凹 石	10.9	8.4	640	4.6	両輝石安山岩
75	HIV	凹 石	10.4	9.2	610	4.6	両輝石安山岩
76	I VI	凹 石	11.5	10.7	1100	5.9	両輝石安山岩
77	I VI	凹 石	21.9	9.0	1235	4.1	両輝石安山岩
78	IV	凹 石	12.9	6.2	1100	1.8	凝灰質砂岩
79	JV	石 鏊	4.5	3.9	24.4	1.6	凝灰質砂岩
80	I VI	石 鏊	6.9	4.9	41.5	1.5	粘板岩
81	FVI	特殊磨石	13.9	7.4	700	6.6	流紋岩
82	GV	特殊磨石	12.9	7.4	690.0	4.0	両輝石安山岩
83	BII	石 盤	10.5	17.0	835	3.0	両輝石安山岩
84	BII	石 盤	7.7	11.7	912	4.6	両輝石安山岩
85	EII	石 盤	(9.7)	(13.2)	872	(4.0)	両輝石安山岩
86	I VI	石 盤	40.0	49.5	1050	9.0	両輝石安山岩
87	CIV	石 盤	31.0	45.0	1065	6.6	流紋岩
88	FIV	石 棒	(9.9)	9.7	1005	8.4	流紋岩
89	CII	石 棒	(12.5)	8.1	457	6.5	流紋岩
90	FIV	石 棒	(10.2)	8.4	760	(5.2)	流紋岩
91	EIV	石 棒	(12.1)	5.7	550	4.7	流紋岩
92	BII	石 棒	(16.3)	6.0	662	(4.6)	流紋岩
93	FIV	石 棒	(14.7)	9.3	1760	7.9	流紋岩
94	IV	石 棒	(24.8)	5.1	347.0	4.6	流紋岩
95	DIII	石 棒	(12.1)	4.4	800	3.2	流紋岩
96	H	石 棒	(10.5)	6.4	546	4.6	両輝石安山岩
97	DIV	石 棒	(9.0)	4.6	247	3.7	流紋岩
98	IV	石 棒	(9.0)	4.7	188.3	2.4	流紋岩
99	HIV	石 棒	(6.0)	3.1	63.8	2.9	流紋岩
100	HIV	石 棒	(6.6)	4.2	160	4.7	流紋岩
101	HIV	石 棒	(9.3)	5.7	265	4.6	流紋岩
102	BII	石 刀	(12.1)	2.8	69.2	1.2	粘板岩

石器觀察表 (No.4)

番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	重さ(g)	厚さ(cm)	石質
103	CII	石劍	18.1	4.3	135.4	1.1	凝灰質千板岩
104	HV	石劍	5.7	4.5	31.25	0.8	粘板岩
105	EV	石劍	(4.9)	4.1	28.03	0.7	粘板岩
106	CII	石劍	(4.5)	(3.5)	116.0	(0.3)	凝灰岩
107	IV	有孔石製品	16.3	10.7	75.32	6.6	凝灰岩
108	JVI	円盤状石製品	4.9	5.3	25.8	1.8	粘板岩

## V. まとめ

本調査によって得られた資料の基礎的な事実の一部については、既述してきたとおりである。以下では、これらの基礎的な事実の中の数項目を選定し、若干の問題提起とともにまとめをおこなう。

### 1. 遺跡の立地

既に遺跡の位置と地形の項で述べたように、黒内Ⅴ遺跡は、東日本火山帯に属する七時雨山より放射線状に走行する水系によって刻まれた山麓丘陵面およびその周縁部に形成された遺跡である。この七時雨山からの水系によって刻まれた山麓丘陵面と小支谷（沢根）およびその水系が流下する一方井川流域の段丘面に所在する遺跡群を概観すると、ほとんどが表面観察による分布調査の結果であるため、地域により調査の粗密の差はあるものの、「岩手町の遺物出土地と主な遺跡—一方井川流域」で既述したとおり多くの遺跡のうち存在する。その繰り返しになるが、遺跡番号 37 久保遺跡～84 大股開拓遺跡の計 47 遺跡が縄文時代前期単独遺跡（山王遺跡の 1 遺跡）、中期単独遺跡（とうやもり遺跡他 6 遺跡）、後期単独遺跡（久保遺跡他 8 遺跡）、晚期単独遺跡（ざるくぼ遺跡他 9 遺跡）、土師器、須恵器単独出土遺跡（沢口遺跡他 6 遺跡）である。他に縄文時代前期～晚期、弥生時代、土師器、須恵器の複合遺跡で、膨大な量の遺物を伴う包含層、集落跡が形成されている。

一方井流域一帯には、特に縄文時代後期・晚期の相当な量の遺物を包含する遺跡群が密集している傾向が認められるが、このような縄文時代遺跡の立地・占地の現象は如何なることに起因するものであろうか。とりわけ七時雨山の山麓丘陵上およびその周縁先端部に立地する遺跡群す性質を考える時、水系は大変重要な意味を持つものと思われる。すなわち生活の糧をこの水系と周縁に求めて行動し、その集落の規模、性格を形造っていったと思われるのである。しかしながら、まだまだ調査例は少なく、大ざっぱな観察を述べることしかできない。

七時雨山の山麓丘陵を樹枝状に開拓している小支谷、小沢は急峻な地形を形成しているわけではないが、丘陵を分断していることにはかわりはない。この地勢的な制約が当時の縄文人たちの行動様式にどのような影響を与えていたのか興味深い。

## 2. 遺構

竪穴状遺構、土坑、埋設土器、溝状遺構などが検出された。細かな時期がわかるものはほとんどないが、縄文時代晚期前葉～中葉、後期初頭、中期中葉～後葉の遺構が多いようである。この時期、本遺跡にはどの時期の住居もなかったようであるが、墓と思われる土坑や埋設土器があった。近くの黒内ⅩⅢ遺跡にはその時期の住居が複数あったことがわかっている。そちらには墓はない。したがって、黒内ⅩⅢが住居跡で、本遺跡が墓域であった可能性もある。黒内ⅩⅢ遺跡は木谷内川に面した低い段丘線の狭い平坦部にあり、本遺跡はその北北東にあたるいくぶん高くなった尾根上の緩い斜面にある。黒内ⅩⅢ遺跡と本遺跡の間には、古くは沢であったような低地があり、簡単に区切られている。勿論、これは意識上の区切りを作ることがかろうじてできるほどの簡単なものであり、遺跡間の行き来はまったく難しくはない。

ただし、黒内ⅩⅢ遺跡としてくくることのできる地域の一部を、遺跡の性格理解のために調査したのではなく、道路建設のために調査ただけであるので、これだけで多くのことを推測するのは危険である。

### (1) 竪穴状遺構

#### 〈時期・占地〉

検出された竪穴状遺構は、CⅡ1号、DⅢ1号、FⅢ1号、FⅣ2号の5棟である。いずれも時代を特定する出土遺物に乏しく、時代は不明である。しかし、それぞれの規模、形状、埋土の堆積状況が類似していることや、DⅢ1号、FⅣ2号の埋土から若干の縄文土器片が出土していることと、土の状態から縄文時代のものとは考えられる。

なおこれらの竪穴状遺構は調査区の西側の緩やかな斜面部に2棟(CⅡ1号、DⅢ1号)、やや北東側の狭小の平坦部に小土坑群と隣接して3棟(FⅢ1号、FⅣ1号、FⅣ2号)がある。

#### 〈平面形・規模〉

本遺跡で検出された竪穴状遺構は規模および平面形状などから次の3タイプに分類できる。

- |                    |           |
|--------------------|-----------|
| A 平面形が不整円形で径約4m±   | CⅡ1号、FⅣ1号 |
| B 平面形が不整円形で径約3.5m± | FⅣ2号      |
| C 平面形が円形で径約2.5m±   | DⅢ1号      |

底面積が狭小で、炉跡、柱穴といった居住空間的な機能を持たないこれらの遺構の性格については、今後他の遺跡での類例をもとに十分検討しなくてはならない。

それぞれ、深さは20～30cmであった。しかし、遺跡表面が削られていたので、本来はもっと深かったと思われるが、正確なところは不明である。

#### 〈埋土〉

埋土の中には細かな炭化物が入るものもあったが、堆積の状況からは埋土全体は自然に流入したものと思われた。また、堆積中には遺物は少なく、意図的に入れられたと思われる遺物はなかった。

#### (2) 土坑

##### 〈時期・占地〉

本遺跡で検出された土坑は9基である。遺跡南端の斜面部に2基(BIII 1号、BIII 2号)、北側の緩やかな斜面部に4基(EIII 1号、FIII 1号、FIII 2号、FV 1号)、北東寄りの緩やかな斜面部に3基(HVI 1号、HVI 2号、IVI 1号)がブロック状に点在している。遺物が含まれている土坑がほとんどないため、細かな時期の確定は難しいものが多い。ただし、BIII 1号土坑、埋土3層で、大洞C<sub>2</sub>式に比定される。口縁部に一条の沈線を巡らした研磨土器が出土している。また、埋土の性質から、EIII 1号、FIII 1・2号、HVI 1・2号土坑も、BIII 1号土坑とほぼ同じ頃のものではないかと予想している。一方、IVI 1号土坑埋土最下部および底部面から、胎土に繊維を含む不整撚糸文土器破片が出土している。これらは大木1～2式に比定できる。しかしながら、それを含む土には明褐色粘性土がブロック状に含まれており、人為的に埋められたものである可能性もある。それがいつ埋められたかは不明であるが、縄文時代晩期に埋められた可能性もある。なお同土坑第1層からは晩期の縄文土器片も出土している。

##### 〈平面形・規模〉

平面形状はいずれも梢円形である。規模・断面形状から次の3タイプに分類できた。

- A 長径80～90cm、断面形摺り鉢形 EIII 1号、FIII 1号、FIII 2号、FV 1号、HVI 1号
- B 長軸130～150cm、断面形状浅鉢形 BIII 1号、BIII 2号
- C 径約2cmの円形、断面形状摺り鉢形 IVI 1号

深さ 15 ~ 20 cm のものがほとんどである。ただし、上部は削られている可能性があるので、本来はもっと深かったと思われる。

ところで、これらの土坑がいったい何であったかは、不明であったが、HVI 土坑 1 号は土壙墓である可能性もある。3 個の環状石製品が土坑北側底面からまとまって出土したが、これらは被葬者の装身具であった可能性がある。

土坑の埋土を観察するかぎり、自然堆積というよりは人為堆積と考えられるものもあるが、調査中には積極的に一気に埋めたとも観察されなかった。ただし、これらの土坑には墓であったものがある可能性も多い。

#### (3) 埋設土器遺構

本遺跡からはただ 1 基検出された。遺跡の南側斜面 CIV グリッドと DIV グリッドの境界線に位置し、器高 30.5 cm、口径 24 cm の深鉢が正位の状態で埋設されていたものである。口縁部の 1.5 cm ほど下に二条の縄文圧痕を巡らし、圧痕直下に 4 個の瘤状突起が等間隔に配置されている。大槌町崎山弁天遺跡第 IV 群第 6 類土器に類似し、縄文時代後期初頭のものと推定される。

「縄文文化の研究」雄山閣 1983 菊地実によれば、後期初頭には関東地方で複数の胎児・幼児を納めた土器棺が出土している。肉眼観察の限り、埋土からは特別なものは出土しなかった。骨などは出土しなかったが、口径や器高から考えて、胎児の土器棺の可能性もある。

#### (4) 溝状遺構

遺跡北端の HVI グリッド・HVI グリッドから、北東方向の FVI・FVII・GVII グリッドにかけて検出された。長さ 9.5 m 分が検出され、幅 0.8 ~ 3.55 m、深さ 0.55 m である。埋土は砂礫をはさみ、黒褐色土が霜降り状に混ざる褐色土が主体である。埋土上位面で若干の縄文土器破片が検出されたのみで、時期・性格ともに不明である。

### 3. 出土遺物

#### (1) 土器

黒内Ⅶ遺跡の土器はその大部分が遺構外の出土であり、縄文時代晩期を主体に少量ながら早期・前期・中期・後期の広範な時期にわたっている。ここではこれら各期の縄文土器群を文様要素、文様意匠および器種の諸相（特に口頸部の形状）などから、その時期等について若干捉えておきたいと考える。

#### 第Ⅰ群土器

前述したが、本類土器は貝殻沈線文を主体とし、縄文時代早期物見台式に比定されると考えられる土器群である。第23図1および若干の小破片などから頸部位より緩やかに内湾するキャリバー状の口縁を有する尖底深鉢形土器を呈するものと考えられる。文様帶は口唇部に施された貝殻腹縁による連続刺目状文、内湾する口縁部を並走屈折する二条の沈線間に施された貝殻腹縁文、頸部を巡る二条の平行する沈線と連続刺突によって画された無文帶の三段の文様構成となっていることが観察される。また他の小破片は口縁部位の断面形状などから口辺部位の外角が削ぎ取られ、入念に整形されていることや文様構成（貝殻沈線）及び器厚などから同一のものと考えられる。本類土器は柴石町桜松遺跡、岩手町黒内ⅩIII遺跡、同蟹沢遺跡、二戸市長瀬A遺跡、種市町大宮遺跡等で類例がみられいずれもキャリバー状口縁を呈し、貝殻腹縁文・沈線文・隆起帯といった文様構成を諸特徴としている。

#### 第Ⅱ群土器

#### 第1類土器

胎土に粗砂及び纖維の混入する表裏縄文の土器で、縄文時代前期前葉に比定されるものと考えられる。第22図2は口縁部がやや外反する平底の深鉢形土器で、体部地文は原体LRによって施されている。また裏面口辺部には同一原体によって幅7cmの縄文帶が施文されているのが特徴的である。このように口縁部位内側にまで施文する手法は円筒下層a式にも認められることなどから、今後このような資料検討からの円筒下層土器群との対比が必要であろう。

## 第2類土器

胎土に繊維を含み、不整撚糸文による口縁部文様帶を有する土器群で、大木1式～大木2a式に比定されるものであろう。いずれも小破片であるが、口縁部に結束のない不整撚糸文による文様帶を有し、体部には繩文（原体 RL）が施されているところからおそらく同一個体のもので、その形状などから口縁の外反する深鉢形を呈するものと推定される。なお口縁部の断面形では、内角が削ぎ取られて口辺部がやや屈折していることが観察される。

本類土器は盛岡市大館町遺跡第II群第1類土器、大槌町崎山弁天遺跡第II群1類土器などに類例が見られる。

## 第3類土器

体部文様として結束のある羽伏繩文を施した繊維土器で、いずれも磨耗しているが、結束した羽状繩文の羽根の先端部分を重ね会わせて結束部分を強調した文様構成が特徴的である。この種の土器は大槌町崎山弁天遺跡第II群第1類土器に類例を認めることができる。

## 第4類土器

体部文様として木目状撚糸文を有する繊維土器で、頸部を巡る隆帯（粘土紐の貼り付け）によって口縁部文様帶と精緻な木目状撚糸文の施された体部文様帶が区画されているのが特徴的である。本類土器は胎土に微量ながら繊維を含むことや圧縮された口縁部と頸部に配された隆帯（粘土紐貼付による）及び体部に施文された木目状撚糸文などから繩文時代前期末葉円筒下層d式に比定されよう。本類土器については類例が多く、柴石町塩ヶ森遺跡、松尾村水切場遺跡、九戸村田代遺跡、野田村広内遺跡等で確認されている。

## 第5類土器

胎土に粗砂及び繊維を含む無文土器で、本遺跡では胴上部を欠損する半完形品のただ1点の出土である。残存部の観察から縱方向に断続的に籠状工具などによると推定される整形痕跡が認められる。

全体的に脆弱な作りで、柴石町塩ヶ森遺跡においては円筒下層d式土器に伴っての出土例が確認されており、繩文前期末葉に比定されるものであろう。

### 第Ⅲ群土器

縄文時代中期前葉円筒上層 a 式、b 式から後葉大木 9 式、末葉 10 式に比定される土器群である。

#### 第 1 類土器

本類土器は縄文時代前葉円筒上層 a 式に比定される土器群である。文様構成の特徴などから第 1 a 類～第 1 e 類の四種に類分されよう。

##### 第 1 a 類土器

本類は円筒上層 a 式のメルクマールである口頸部に巡らされた粘土紐貼り付けによる隆起線文とこれによって区画された比較的幅の広い口縁部に施文される数条の横位直線状撚糸圧痕文を有する土器類で、円筒上層 a 2 式に比定されよう。

##### 第 1 b 類土器

本類土器は第 1 a 類と同様の口頸部文様帯に加えて、口縁部突起直下に「II」の字状の粘土紐貼付による垂垂文あるいはボタン状貼付文を有する土器群で、その装飾性から円筒上層 a 3 式に比定されるものと考えられる。

##### 第 1 c 類土器

口縁部から垂下する隆帶とこれを半割する撚糸圧痕による加飾という点においては第 1 b 類土器に類似するが、これらよりも隆帶が平坦に研磨整形され、撚糸圧痕文は口辺から縦横二段に整然と施されているのが特徴的である。第 1 b 類との間に若干の時間的差異があるものと考えられる。

##### 第 1 d 類土器

第 1 a 類にみられたような突出した隆起帯は無く、幅の広い口頸部の上下端に連続して短線状撚糸圧痕が縦位に施文されることから円筒上層 a 1 式相当のものと考えられる。

## 第1e類土器

口縁部の文様帶として単線ではなく、複線による頂角の鋭い鋸歯状撚糸圧痕文が施されていることから、円筒上層a3式に比定されるよう。なお第1a類、第1b類土器と同様、口辺部及び頸部に巡らされた隆帯（粘土紐による貼り付け）には縦位に撚糸圧痕が付されている。

## 第2類土器

本類土器は隆帯によって加飾された扁状把手と半月状撚糸圧痕文（爪形状撚糸圧痕文あるいは弧状撚糸圧痕文）といった特徴などから円筒上層b式に比定されるよう。なお爪形状撚糸圧痕文は、コイル状の細緻な短線撚糸圧痕の施文によって装飾された隆帯に沿い、一段および二段に付されている。円筒上層b式の把握は前述の爪形状撚糸圧痕文をもって類型されるが、本類のそれは緩やかな弧状を呈することやその半径あるいは直徑が同一であることなどから、恐らく指先に短い撚糸をのせて一押一押入念に施したものと推定される。

## 第3類土器

口頭部の扁状把手および隆帯による文様装飾は、第2類土器に類似するが、隆帶にそって施される爪形状圧痕文は匙状工具等による刺突と推定されるところから、時期的には円筒上層c式に比定されよう。

## 第4類土器

第24図5は口辺部がやや肥厚する外反複合的様相を呈し、体部地文の他に、結束による横位綾格文が顯著に観察される。これは大木7a式に多く見られる手法で、大館町遺跡第Ⅲa6類土器、天神ヶ丘遺跡第3群2類土器に類例が認められる。

第24図の6は四対の大波状の口縁部を中心に、波頂部に配された渦巻文とこれより垂下する二条の隆帯及び口頭部から体部に連結する綾格文によって見事に装飾され、頂端部から垂下する隆帯には両側面から原体圧痕による整形が特徴となっている。

本類土器は器形・口頭部形状・口頭部文様帶などから前期的様相が薄れ、大館町遺跡第Ⅲb群2類土器、畠井野第二類土器、天神ヶ丘第4群3類土器等に類例を認めることができ、大木7式のなかでも比較的新しい7b式に相当するものと考えられる。

第24図の7は半截竹管工具などによる二条一組の沈線および斜位刺突文によって口頸部文様帯が構成されているのが特徴である。ほぼ大木7式の早い段階に主流を占める文様意匠と考えられ、本類土器は長根三群六類土器、大館町遺跡第Ⅲ群a6類土器に類例が認められている。

第25図8はキャリバー状の口縁部に原体による連弧状の圧痕が施されているのが特徴である。大館町遺跡第Ⅲb群5類土器に類似し、大木7b式に相当するものと考えられる。第38図49は二条の平行沈線これと並走する二条の交互刺突による細隆線文によって加飾されている。この装飾手法は大館町遺跡第Ⅲb群第2類、畠井野第二類、天神ヶ丘4群3類等に類例が見られ、大木7式のもっとも新しい範疇に入るものと考えられる。

### 第5類土器

黒内Ⅳ遺跡での本類土器群は各グリッドにおいて相当量出土しているが、いずれも細片で全般的な器形・文様構成などは把握できなかった。復元土器は第26図12のただ1点で、胴央部から脇下部の大半を欠損するが、体部文様は原体LRの地文と粘土紐貼付による流麗な渦巻文によって構成されている。

なお本類の貼付文はaタイプ：貼り付け後の調整が粗雑で、紐跡を器面に残す一群、bタイプ：粘土紐にそって棒状工具等の痕でつけによる浅い沈線が巡っているもの、cタイプ：一部磨削的手法によって精巧な渦巻文が作り出しているものの3タイプに類分が可能である。この3タイプには時期的な差異があるものと推定され、特にaタイプの手法などには大木8a式的色彩が感じられる。またcタイプのものには大木8b式特有の立体的な渦巻文の退化的傾向が観察されるようである。器形的にはキャリバー状、樽形状といった比較的大形の深鉢土器が多いようである。時期的には繩文時代中期中葉大木8b式に比定されるものと考えられよう。

## 第 6 類土器

本類土器は、縄文時代中期後葉から末葉に比定される土器群である。

### 第 6 a 類土器

縄文中期後葉に位置する最花式土器に類似する精製土器で、本遺跡では復元土器ただ 1 点である。頸部を巡る細い円形刺突列文によって無文の口縁部文様体と胴部文様を明確に区画している。なお胴部文様は地文に肩部から二条一組の沈線を「匚」状に垂下させ、装飾性を強調しているのが特徴である。

青森県最花貝塚、櫻林貝塚において最花式土器に伴って大木 9 式土器の出土が確認されていることなどから、縄文中期後葉大木 9 式併行のものとして位置付けられるものであろう。なお本資料は断片ではあるが、円筒上層式土器と同様、この時期の青森、津軽地方との文化的な接觸を裏付けるものであり、今後県北部周辺の他遺跡での類例を見ながら検討しなければならない土器である。

### 第 6 b 類土器

本類は、いずれも胴中央の破片で全体的な器形などは把握できないが、二条一組の沈線によって長梢円形状の区画帯を装飾文様とする土器群である。このような装飾手法などから大木 9 式に相当する一群と推定される。

### 第 6 c 類土器

第 6 b 類土器と同様いすれも胴中央・胴下部の破片のみで全体的な器形や文様意匠などは知り得ないが、二条一組の「匚」状に垂下する隆起線によって胴下部・底部まで加飾される一群である。なお隆起線は入念に整形され、丸みのある凹状を呈しているのが特徴的である。第 6 b 類とともに大木 9 式に比定されるものであろう。

#### 第 6 d 類土器

本類土器は頸部を巡る凸状の隆起線上に付された円形刺突列および沈線による曲線的な文様区画帯を有する土器群で、その文様構成の様相などから大木 10 式の古い部分に位置付けられるべきものであろう。

しかし、本類的な文様要素を持って大木 10 式の古式様相として捉えることは早計であり、次の第 6 e 類土器の一部を含め、文様構成要素の系統的な比較検討が必要と思われる。

#### 第 6 e 類土器

本類土器は、いずれも破片のため全体的な器形は知り得ないが、やや口縁の外反する胴張深鉢形を呈するものと推定される。沈線および磨消技法によって曲線的な文様帯を有する一群である。なお磨消部は丁寧に成形研磨され、その装飾性が強調されている。その文様構成などから大木 10 式に比定されよう。

#### 第 6 f 類土器

本類土器は、第 6 a 類～第 6 e 類土器に伴って出土する装飾文様帯を有しない地文（綱文）のみの粗製深鉢形土器の一群である。口縁部および口唇部の形状などから①口唇部内角が削ぎ取りによる成形がなされ、やや内湾気味の口縁を呈するタイプ、②口唇部調整の際のはみ出し部が隆起線化したタイプ、③胴上部からやや直口気味に立ち上がるタイプ、④やや内湾気味の口縁を有する点で①タイプに類似するが、口唇部位の内外面が入念に調整され、先端が丸みをもっているタイプに類分が可能である。なお本類の底部破片の観察ではいずれも調整が粗く、全体的に胎土・焼成とともに不良で脆弱な作りのものが多い。

このように体部に地文のみが施される粗製深鉢形土器に関しては、前述した精製土器群が文様系統論的に円滑に生成発展過程を把握できるのに対して、顯著な相違点を認めることはできなかった。今後他遺跡との類例検討の中から時間的幅を考えるべきであろう。

## 第IV群土器

縄文時代後期に位置付けられる一群である。

### 第1類土器

やや肉厚の口頸部を巡る二条の縄文圧痕とこれを連結するかたちで付される胴上部の三叉様懸垂状文とによって文様帶が構成されている。器形的にはやや外反の複合的口縁の様相を呈する深鉢形土器で、縄文圧痕の巡る頸部直下に四個の瘤状小突起を有しているのが特徴的である。本類土器の文様構成は大槌町崎山弁天遺跡第IV群第6類土器・青森牛ヶ沢第III群土器に類似し、縄文時代後期前葉のものと推定されよう。

### 第2類土器

丁寧に調整された二条の隆起帯の巡る幅の広い口縁部と沈線・隆起線・磨消によって加飾される胴部文様帶が見事に連結している土器である。なお円孔を有する橋状把手が特徴的で、大迫町立石遺跡などに類例がみられる。

## 第V群土器

前葉大洞B式、大洞BC式、中葉大洞C<sub>1</sub>、後葉C<sub>2</sub>式の晩期諸型式の土器群を一括し、通常行なわれている器種別にしたがって大別し、さらにそれぞれの内部における器形・施文などの異同を基準細分化し説明する。

### 変形土器

やや高めの器高をもち、内湾気味に推移してきた体部が上端部で外反に転じ、口縁部と体部に分化した器形である。口縁部形状・施文などから細分することができる。

#### ①カメ形土器第1類

比較的幅の広い口縁部に6～8条の平行沈線が付され、口唇部に鋸歯状の刻目を有する土器群である。本類土器はいずれも口縁部の断面形状は口唇先端部が薄く調整され、平行沈線間の段差が明瞭に観察される。時期的には大洞C<sub>2</sub>式に比定されるものであろう。

北上市九年橋遺跡、衣川村東裏遺跡などに類例が認められ、比較的肩部の張り出す器形が多く、体部地文には晩期後葉特有の条の長い繩文が施されている。

## ②同第2類

口唇部に第1類同様の鋸歯状の刻目を有し、「く」の字に外反する幅広い口頸部の上下端にそれぞれ三条の平行沈線を付した土器群である。このような口縁部の文様構成は晩期後葉大洞C<sub>2</sub>式に多く見られる手法で、北上市九年橋遺跡、衣川村東裏遺跡等で類例が見られる。いずれも口縁部先端部位の沈線間は階段状に丁寧に器面調整されている。

## ②同3類

第1類、第2類に比してやや幅の狭い口縁を有し、口頸部上下端に平行する二条の沈線を施している一群である。本類の口縁部形状は①やや外反するもの、②頸部よりやや内湾気味に立ち上がるものの二つのタイプが認められるようである。沈線施文後の入念な器面調整などの諸特徴等から晩期後葉大洞C<sub>1</sub>式に比定されよう。

## 壺形土器

ほとんどが破片で全体的な器形、文様構成などは把握できないが、有頭の細口壺形土器、広口壺形土器を中心に包括し、肩部および口頸部の形・文様の構成などからさらに細分した。

### ①壺形土器第1類

頸下部より緩やかにやや内傾気味に立ち上がる広口壺で、頸部に二条の平行沈線を付し、体部文様帶の上限が画されている。器面調整も入念で、とくに口頸部から肩部にかけて無文研磨されている。器形および沈線による文様構成などから晩期後葉大洞C<sub>2</sub>式相当のものと推定される。

## ②同第2類

本類は頸下部より緩やかに外反する広口壺形土器で、口辺および頸部にそれぞれ平行する二条の沈線が付され、肩部がやや張り出す形状が特徴となっている。全体的に丁寧に研磨された精製品が多い。第1類と同様、平行沈線による加飾手法などから晩期後葉大洞C<sub>1</sub>式に相当するものと考えられる。

## ③同第3類

本類は、ほぼ直立的に立ち上がる頸部と外折する口辺部を有し、全体としてなで肩の形状を呈しているのが特徴となっている。また沈線を付した口唇部は明らかに上面觀を意識した精巧な作りとなっている。なお直立的に立ち上がりを見せる頸部には錐状工具による撫での整形痕が頗著に觀察される。時期的には、第1、第2類同様晩期大洞C<sub>1</sub>式～C<sub>1</sub>式相当のものと推定される。

## ④同第4類

本類は、口辺部位に付された一条の細隆起線（口唇部の整形の際のはみ出し部分の隆起線化）と一、二条の平行沈線といった特徴をもって包括した。なお頸部はいずれも整形研磨され、光沢を有し、直口もしくはやや外反気味の形状を呈している。胎土および焼成とともに良好で堅緻な作りのものが多い。

時期的には晩期後葉相当のものと推定されよう。

## ⑤同第5類

本類は、口縁部細片のため全体的な形状は把握できないが、口唇部に鋸歯状の連続する刻目を有する頸部直立の器形を呈するものと推定される。前述した壺形土器と同様、丁寧に整形研磨されている精製品で、時期的には晩期中葉～後葉に相当すると推定される。

## 深鉢形土器

本遺跡における深鉢形土器は a：口縁部位の形状等から内湾するタイプ、b：直口するタイプ、c：やや外反するタイプの三類に大別される。

### ①深鉢形土器第1類

本類は口辺部に幅の広い無文帯を有する口縁内湾の器形で、体部に地文が施されているものを包括した。全体的に粗製品が多く、口縁部位に煤状の付着物が観察され、おそらく煮沸用雜器として使用されたものであろう。体部地文の条の長い施文などから縄文晚期後葉の大洞 C<sub>4</sub> 式に比定されるものである。

### ②同第2類

本類は口縁部位が「く」字状に屈折するもので、口唇部位の内側に剥ぎ取りによる整形痕が観察される一群である。なお口辺部に整形時ののみ出し部分が隆起線の様相を呈して残存しているのが特徴である。晩期中葉から後葉に比定されるものであろう。

### ③同第3類

口縁部がやや外反する深鉢形土器で、口唇部に二個一対の小突起が特徴的である。第1類、第2類に比してやや薄手での半精製品である。小形突起から縄文晚期後葉大洞 C<sub>1</sub> 式に相当するものであろう。

### ④同第4類

本類は胴上部位からほぼ真直ぐな立ち上がりを見せる器形で、口辺部から体部にかけて晩期後葉特有の条の継長の縄文のみが施されている。口唇部の整形が他類に比して入念で、やや丸みを呈しているのが特徴的である。

## 鉢形土器

深鉢形土器としたものはど器高が高くなく、通有鉢形といわれているものを包括し、口縁部形状、施文などによって細分した。

### ①鉢形土器第1類

本類は、沈線・磨消技法・研磨によって浮彫調の口縁部文様帯を有し、体部に細縞文が施されている一群である。第28図17は胴上部より内渦気味に立ち上がり、外折する比較的幅のある口縁部位に沈線・磨消・研磨による変形羊齒状文及び変種入組文的な文様が浮彫調に施文されている。なお胴上部に付された二条の平行沈線が口頸部装飾文様帯の下限を画しているのが特徴的で、その文様手法などから晩期前葉のものと推定される。

第28図18は口縁部文様帯が沈線と精緻な磨消手法によって上下二段の羊齒状文風に仕上げられている。なお口唇部内角の剥ぎ取り調整が観察され、先端部位が先細りの状態を呈している。時期的には晩期前葉相当のものと推定されよう。21は口唇部に付された鱗齒状連続刻目文と口頸部を巡る三条の平行沈線間に付された羊齒状文によって特徴付けられる。また胴央部位から緩やかにやや内渦気味に立ち上がる器形で、その主体文様などから晩期前葉大洞BC式に比定されよう。第48図223～225はいずれも口縁部破片であるが、浮彫的手法によって羊齒状文が効果的に現出され、装飾文様などから晩期大洞BC式に相当するものと推定されよう。

### ②同第2類土器

本類土器は、口唇部に付された刻目文、頸部の整形された無文帯、胴央部に展開する磨消手法による雲形文および大腿骨文によって特徴付けられる。

第28図19は頸部直下に二段にわたって原体施文による刻目状の文様が付され、胴央部は横長に展開する流麗な雲形文で装飾され、晩期大洞C<sub>4</sub>に比定されるものであろう。

22は頸部付近より緩やかに外反する小波状口縁を呈し、口唇部に二個一対の小突起を有して上面観を意識した入念な作り出しとなっているのが特徴である。体部地文は原体LRで、胴央部には磨消手法によるやや平行線化した雲形文調の文様が展開している。その文様手法などから晩期後葉大洞C<sub>4</sub>式の比較的古いものに相当するものではなかろうか。

#### ③同第3類

本類土器は、頸部から緩やかな「く」の字状を呈して外反する鉢形土器の精製品である。頸部の沈線間に付された連続する刺突列文とB状突起およびその変種(B状突起の退化)の瘤状小突起を有しているのが特徴である。なお第2類同様、胴央部には磨消手法による装飾文様帯が展開しているが、從前と比してその手法はやや流麗さに欠ける。晩期大洞C<sub>1</sub>の中でもこの種は比較的新しい時期のものと推定される。第48図232の頸部上にはこの時期特有のB状突起が認められている。

#### ④同第4類

本類土器は口唇部の連続する刻目文、頸部の2~4条の平行沈線とその間に付された点列文及び刻目文、体部の地文(繩文)の三段による文様構成を特徴とするものを包括した。いずれも胎土・焼成ともに良好で、堅緻な作りのものが多い。口縁および口唇形状などからaタイプ:口縁部の形状は頸部より緩やかに外反し、口唇部内側に一条の沈線を有するもの、bタイプ:胴上部よりほぼ直立的に立ち上がり、口唇内側に沈線を有するもの、cタイプ:胴上部よりほぼ直立的に立ち上がり、口唇先端が細く成形されているものに類分され、いずれも精製品が多く、口縁部にわずかながら媒状の付着物が観察され、その用途の一端が想定される。

第28図20は口唇部位に四つの山形状突起を有してよりその装飾性を強調されている。現存部器高7.5cm、口径20.2cm、器厚1.1cmを測り、体部地文は原体LRによって施されている。本類土器は文様構成及び口縁部の形状などから晩期後葉大洞C<sub>2</sub>式に相当するものと考えられる。

#### ⑤同第5類土器

本類土器は、口唇部の上面觀を意識した刻目文による彫刻的な作り出し及び頸部の平行沈線と刻目列文を基調とした文様構成は第4類とほぼ同様の手法で行なわれているが、体部の磨消文様帯にやや簡略化の傾向が観察されるようである。時期的には第4類とほぼ同時期の晩期大洞C<sub>2</sub>式に相当するものと推定されよう。

#### ⑥同第6類

本類土器は、口唇部に付された鋸齒状刻目文と幅の狭い口縁部の二条～三条の平行沈線による文様帶構成が特徴である。なお体部地文は繩文晚期後葉大洞C<sub>2</sub>式に特徴的に見られる縦長の帶繩文とでもいうべき地文が施されている。また口縁部には、沈線間の整形調整による段差が顕著に観察される。

#### ⑦同第7類

本類は刻目状文及び平行沈線を基調とする口縁部文様構成という点で、第6類に類似するが、口頸部文様帶の平行沈線の幅が若干広く、段差も明瞭であるのが特徴である。体部地文は第6類と同様縦長の繩文が付されている。

口頸部沈線の段差のある入念な調整、条の縦長の繩文などから晚期後葉大洞C<sub>2</sub>式に相当するものと推定されよう。

#### ⑧同第8類

本類土器はいずれも口頸部が「逆く」の字状に内傾する鉢形土器で、口辺部に山形状の突起を有し、口唇部の両側に付された細沈線間には連続刻目列文が施されるなど上面觀を強く意識した装飾が展開している。他の破片は磨耗しているが同様の文様意匠を呈するものと考えられる。本類は文様構成などから時期的には晚期後葉期に比定されよう。

#### ⑨同第9類

本類土器は、口唇部の鋸齒状刻目文と沈線による彫刻的な作り出しと頸部位の比較的彫りの深い二～三条の平行沈線文及び体部の磨消繩文の三段構成となっている。特に他の類型に比して口唇部への内部の器面調整が入念に行なわれ、内面觀をも強く意識したものである。本類は口唇部・口頸部の形状などからaタイプ：直口する口縁を有し、口唇部位が先細りするもの、bタイプ：やや内湾気味の口縁を有し、沈線によって口唇部位が二叉状を呈するもの、cタイプ：やや外反気味に立ち上がる口縁を有し、彫りの深い沈線によって口唇部位が外張りするものの三種に類分されるようである。調整された平行沈線を基調とした文様構成などから晚期後葉に比定されるものであろう。

## 台付浅鉢形土器

台基脚部を欠損するが、全面に赤色顔料等による塗彩の施された精製品で、底部位より緩やかに立ち上がる浅鉢状を呈している。口唇部位に二個一対の彫刻的な蚕豆状小突起が付され、明らかに上面觀を意識した装飾帯を作り出されているのが特徴的である。なおこの隣接する小突起間を連結するかたちで溝線状の彫り込みが印象的に付されている。

体部には精緻な磨消手法によって流麗な雲形文風のモチーフが器面全体に展開し、その上限は口辺部を巡る二条の平行沈線によって、下限は基脚部周縁に付された三条の沈線によってそれぞれ区別されている。

本土器は赤色顔料による入念な塗彩および彫刻的な作り出しなどから日常的な盛付け用の雑器としてではなく、祭事に關わる供獻用的なものとして製作されたものではなかろうか。体部地文は原体 LR 横によって付され、口縁部形状、体部文様帶の諸特徴などから縄文晚期中葉大洞 C<sub>1</sub>式に比定されよう。

## 浅鉢形土器

前述した鉢形土器と皿形土器の中間的な器種のものを包括、口縁部位および体部形状、文様構成などからさらに類分した。

### ①浅鉢形土器第1類

本類は底部周縁より緩やかな弧を描いて立ち上がる楕形に近い器形で、口縁部位に付された二条の沈線によって体部磨消文様帶の上限が区別されているといった特徴を有している。第 32 図 34 は体部に磨消手法によって先端の尖る流麗な雲形文風のモチーフが展開し、その上限は二条沈線間の刺突列文によって、その下限は底部位をめぐる二条一組の沈線によってそれぞれ示され、地文は原体 LR 横によって施されている。35 も同様の手法によって装飾文様帶が腰開し、入念に無文調整された底部は、周縁に配された二条一組二段の沈線によって体部との明瞭な境界が示されている。文様構成などから時期的には晚期中葉～後葉に相当するものと推定される。

### ②同第2類

浅鉢に比して若干器高が高い碗状の無文土器で、比較的安定した底部よりやや緩やかな弧を描いて立ち上がる摺鉢形の器形を呈している。内外両面に比較的粗い調整痕が観察される。胎土・焼成とともに良好で堅い作りである。時期的には晩期中葉～後葉に相当するものであろう。

### ③同第3類

体部に文様帶をもたず、沈線のみが施される精製品で、第33図40はやや肉厚の口唇部上に一条沈線が付され入念な作り出しなくなっている。またやや内湾気味の口縁部位には二条の彫りの深い沈線が、底部周縁には同心円状の三条沈線が配され、無文地ながら強くその装饰性が強調されている。

第33図41は口縁部位・底部の大半を欠損するが、底部周縁に椭円形状の二条沈線を巡らして体部無文帶との境界を画しているのが特徴的で、残存体部および底部は40と同様入念に無文研磨され、光沢を有する。本類は沈線を基調とした文様構成などから晩期後葉に相当するものであろう。

## 皿形土器

広義の鉢形土器のうち、浅鉢形土器よりも口径に比較して器高が極端に低い器種のもので、口唇部の形状・体部の文様意匠などから類分される。

### ①皿形土器第1類

本類は台付浅鉢形土器と同様、上面觀を意識した彫刻的な作り出しの小波状口唇部を呈しているのが特徴である。第31図33では、口唇部は陰帯への彫刻的な作り出しによる二個一対の小突起と内側に付された連続する刺突列の二構成となっている。体部文様のモチーフは磨消による雲形文で、その上限は口辺部位の一条沈線に付された刺突列文によって、下限は二条沈線によって示されている。底部中央部位は沈線によって円形に間取りされ、凹状を呈し、やや揚げ底風に入念に仕上げられている。なお彫刻的な口唇部および体部磨り消し文様帶に部分的に赤色顔料等による塗彩の痕跡が認められるなど祭事に関わる器としての用途が想定される。時期的には晩期中葉大洞C<sub>1</sub>式のものと推定されよう。

#### ②同第2類土器

本類土器は、比較的安定した底部より緩やかな弧を描いて立ち上がる器形で、口唇部先端は削ぎ取り調整によってやや先細りの觀を呈し、体部に施されたやや平行化した大脛骨文調のモチーフが特徴的である。第33図38は第1類のように口唇部位に上面觀を意識した彫刻的な装飾文様帯をもたず、口縁部および底部周縁の二条沈線によって体部文様帯の上下限が画されている。体部のやや平行化した大脛骨文調のモチーフなどから時期的には晩期後葉大洞C<sub>2</sub>式に相当するものと考えられよう。

#### ③同第3類土器

本類は、第2類と同様底部により緩やかな弧を描いて立ち上がる器形で、体部から底部にかけて精緻な地文（繩文）のみが施されているのが特徴である。第33図39は口唇部への一条の細沈線と山形状小突起、口縁部を巡る三条沈線といった文様構成などから晩期後葉大洞C<sub>2</sub>式に相当するものと考えられる。

#### ④同第4類土器

比較的彫りの深い溝線状沈線によって体部地文が明瞭に区割りされているもので破損品のため全体的な文様構成などは把握できないが、溝線状沈線を主体とする文様構成などから晩期後葉に比定されるものであろう。

以上本遺跡における皿形土器について口縁部および口唇部形状、文様構成などから四種に類分する中で、晩期中葉から晩期後葉への器形および文様構成の変遷過程（中葉の上面觀を強く意識した装飾文様から後葉の機能重視のためか文様構成に流麗な動きがみられなくなり、全体的に簡略の傾向をたどり、器形もやや小型する。）の一端を断片資料ながら捉えることができた。

## 注口土器

通有注口土器といわれているものを包括した。

### ①注口土器第1類

本類は胴央部から緩やかに内傾する珠算玉状の器形を呈し、口唇部に鋸歯状の刻目を有するものを本類とした。第29図31は口唇部に一条沈線と鋸歯状の刻目が付され、上面觀を意識した意匠構成となっている。口縁部には刺突列文と三条沈線が付され、体部文様帶の上限が示されている。体部文様帶は磨消手法によってエ字状のモチーフが展開し、その下限は胴央部の隆起帶上の鋸歯状刺突列文および三条線によって示されている。時期的には裝飾文様帶の特徴などから晩期中葉C<sub>1</sub>式の中でも新しい時期に相当するものと推定されよう。

### ②同第2類

第1類に比して胴央部からの内傾度が少なく、口唇部に鋸歯状の刻目を有し、やや外にはみ出す形状を呈しているのが特徴的で、体部文様帶は第1類と同様磨消によってX字状のモチーフが展開している。胴央部を巡るエ字状のモチーフなどから第1類とほぼ同時期と推定される。

### ③同第3類

胴央部からほぼ垂直に近いかたちで立ち上がる器形で、比較的幅の広い無文頸部を有している。第51図274は口縁部及び胴央部の隆起带上に付された二段の刺突によって体部無文帶の上下限が示されている。なお全体的に器厚は薄く、堅敏な作りのものが多く、時期的には胴央文種構成などから第1・第2類と同時期のものと推定される。

## 研磨土器

整形研磨が他類に比して特に念に行なわれ、光沢のある無文部を有するものを一応包括したが、いずれも経破片で全体的な形状などは把握できなかった。

### ①研磨土器第1類

口縁部に沈線及び円形刺突列文が付され、やや内湾気味に立ち上がる器形で、表裏面が入念に整形研磨された無文地ながら上面觀を意識した精製品である。晩期中葉から後葉のものと推定されよう。

## ②同第2類土器

いずれも細片で全体的な器形などは把握できないが、皿・壺などの無文部の可能性も考えられる。胎土・焼成ともに良好で堅緻な作りのものが多い。

### 小型土器

通有ミニチュア土器といわれているもので、文様構成・口縁部形状から a タイプ：湯呑茶碗状の器形を呈し、器全面に入念な整形研磨が施されているもの、b タイプ：なで肩の壺形土器に似た器種で、文様は口縁部位の無文帶と胴央部の無文地への C 字状沈線区画文の二段構成となっているもの、c タイプ：緩やかな波状の口縁と丸底を有し、全体として摺鉢状を呈し、器全面が入念に無文研磨されているものの三種に類分される。本遺跡における非実用品的な様相を呈するこの種の小形土器は、時期的には遺跡の主体を占める晩期中葉から後葉に位置付けられるものであろう。

## (2)土製品

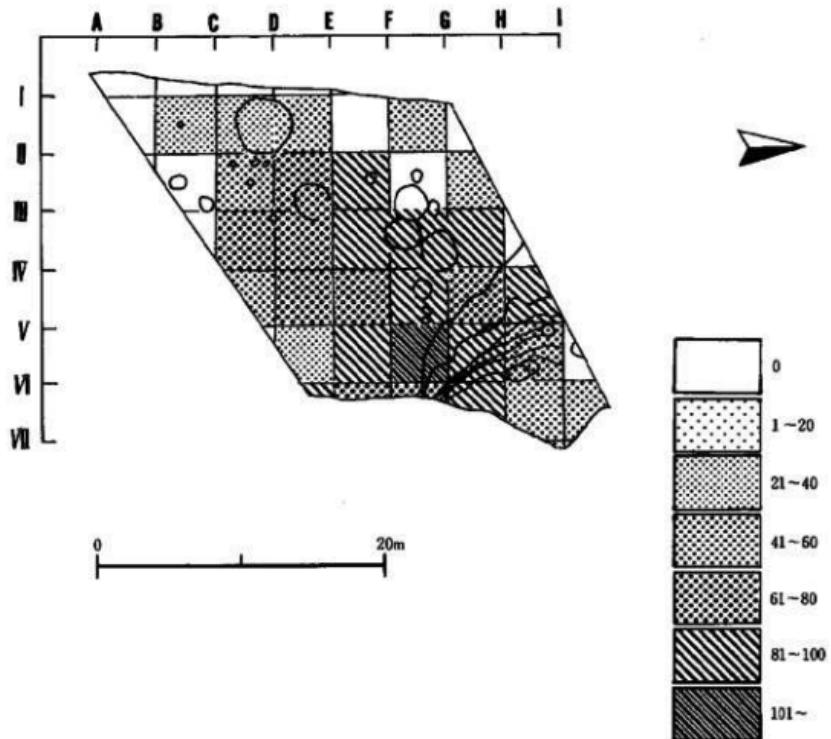
本遺跡では、異形土製品（形状から草状土製品と呼ぶ）1点、円盤状土製品3点が出土している。

### ①草状土製品

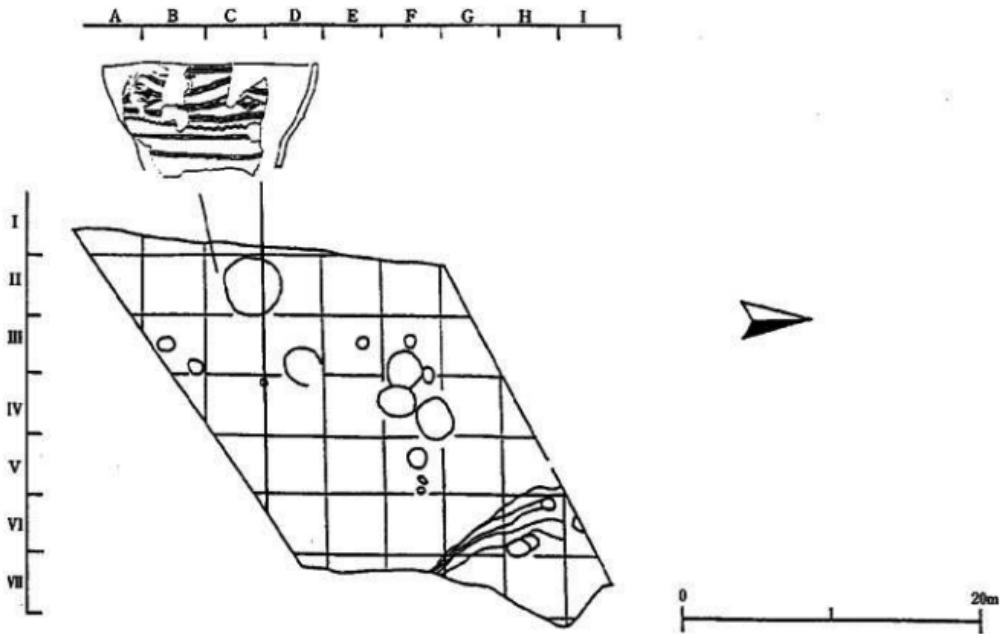
その形状より草を連想させる土製品で、色調はぶい黄橙色を呈し、胎土・焼成とともに良好である。カサ相当部の径5.2cm、高さ5.6cm、茎相当部の径1.5cmを測る。粗掘段階で削平の頗著なHVIグリッドI層上位面から出土。岩手県内では軽米町駒板遺跡、九戸村流谷Ⅲ遺跡、二戸市青ノ久保遺跡などで検出例があり、後期～晩期の縄文人の豊かな食相をうかがわせる資料であろうか。

### ②円盤状土製品

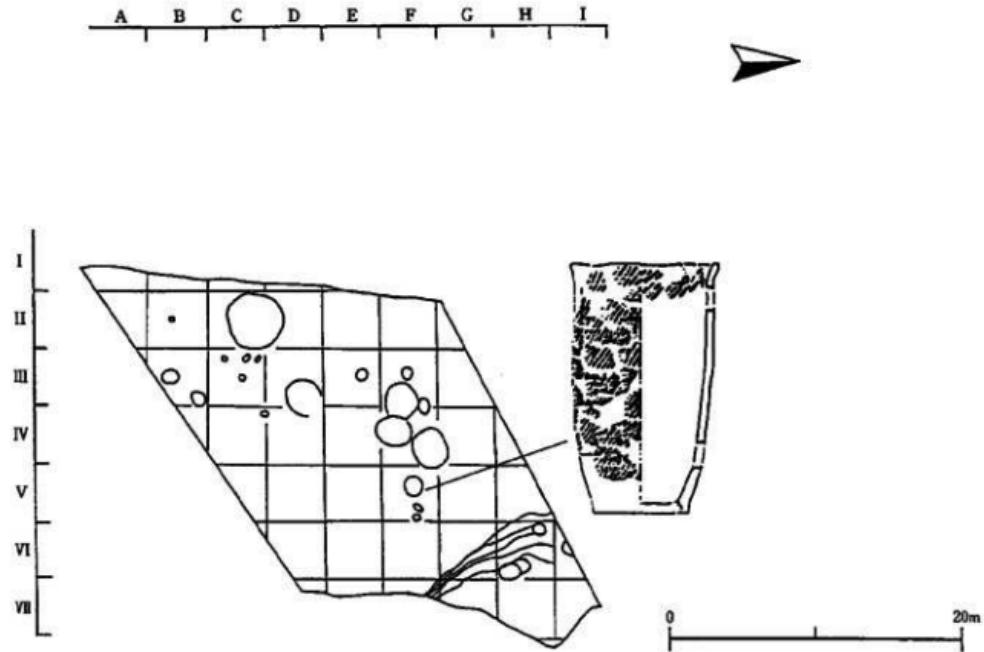
通有土製円盤と称されているもので、基本的には土器破片（素材としての破片は洞部が比較的多く、中には底部を利用する場合もある）の二次的な再利用によって周縁を研磨形成し、円盤状に仕上げられたものである。第53図2は3.5cm×3.7cm、3は4cm×5.3cm、4は5.8cm×5.9cmを測る。この種の土製品は中期末から後期・晩期に至るまで出土し、とくに後期末から晩期にかけて増加する傾向がみられるようである。県内では大迫町小田遺跡の例では破片利用した278点、花泉町貝島貝塚で25点、衣川村東裏遺跡で72点などが確認されているが、その機能については円盤状の形状を利した特殊遺物という観点から検討しなければならないものであろう。



第68図 黒内城跡出土分布図(グリッド毎破片分布)

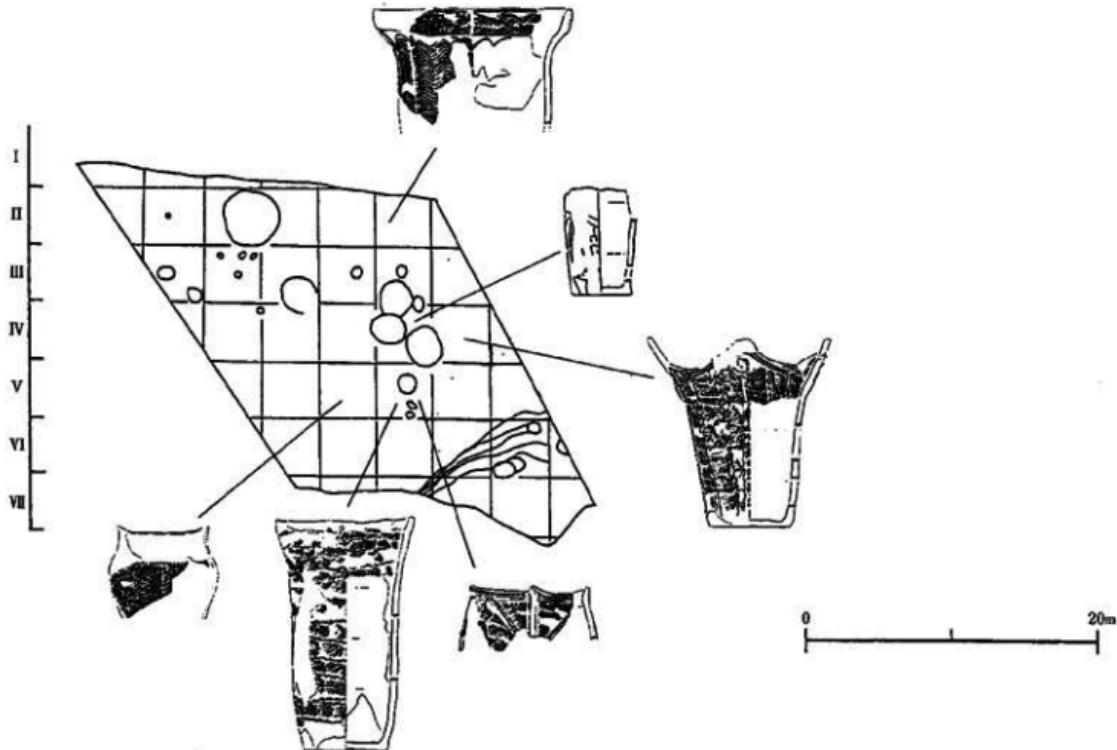


第69図 土器分布1 (縄文早期深鉢)

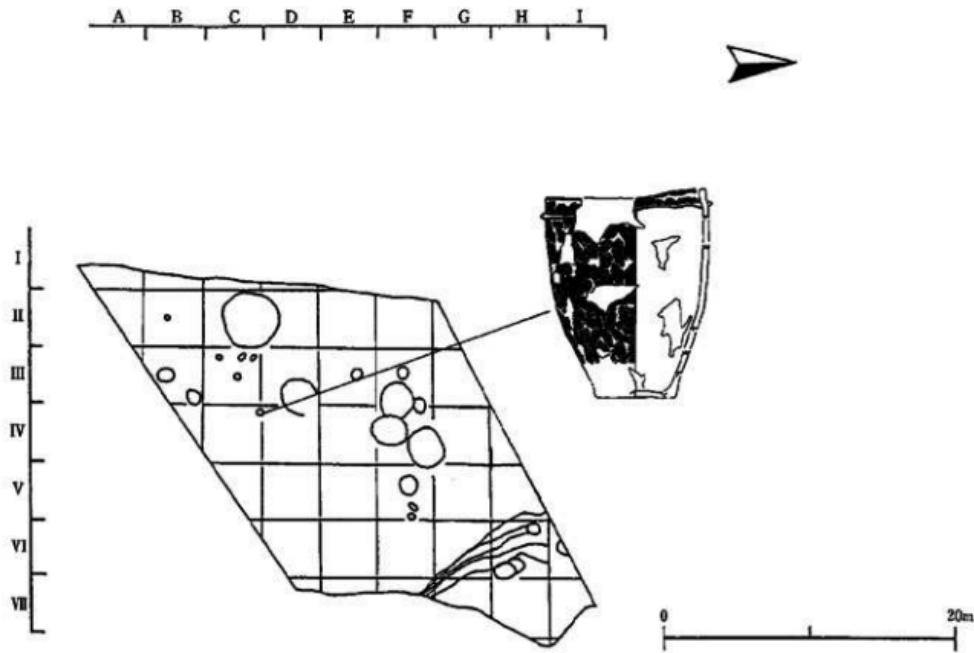


第78図 土器分布2（前期深鉢）

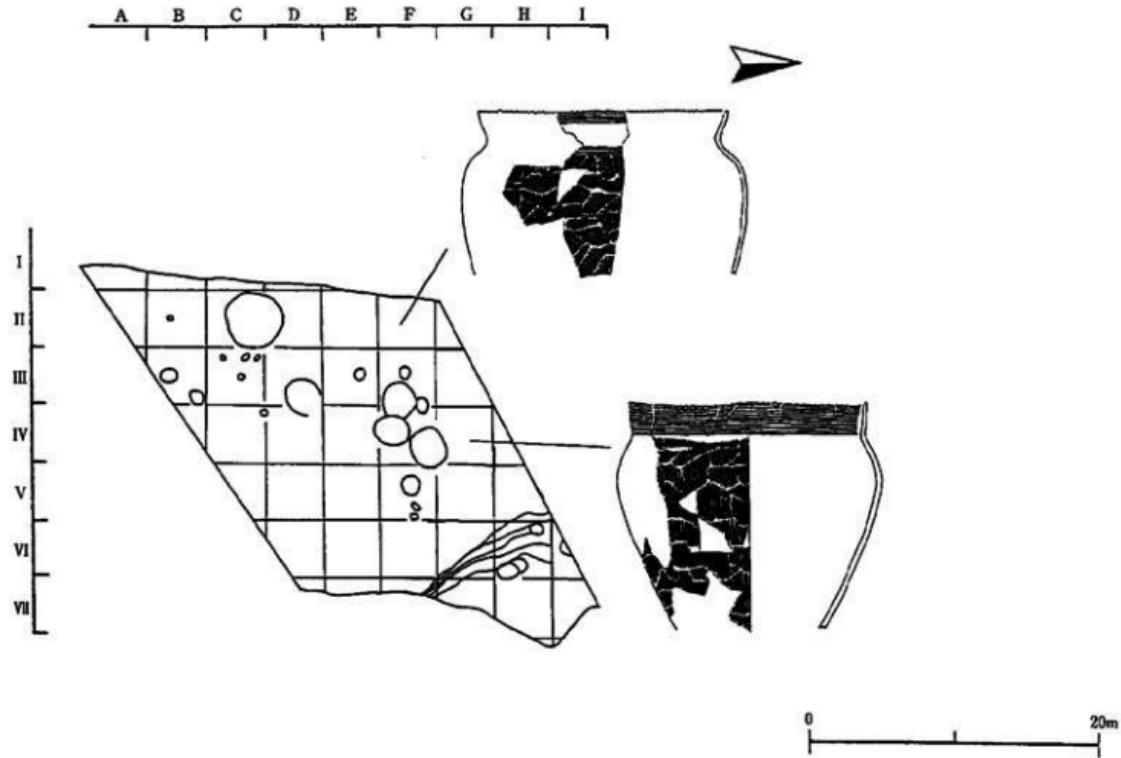
A B C D E F G H I



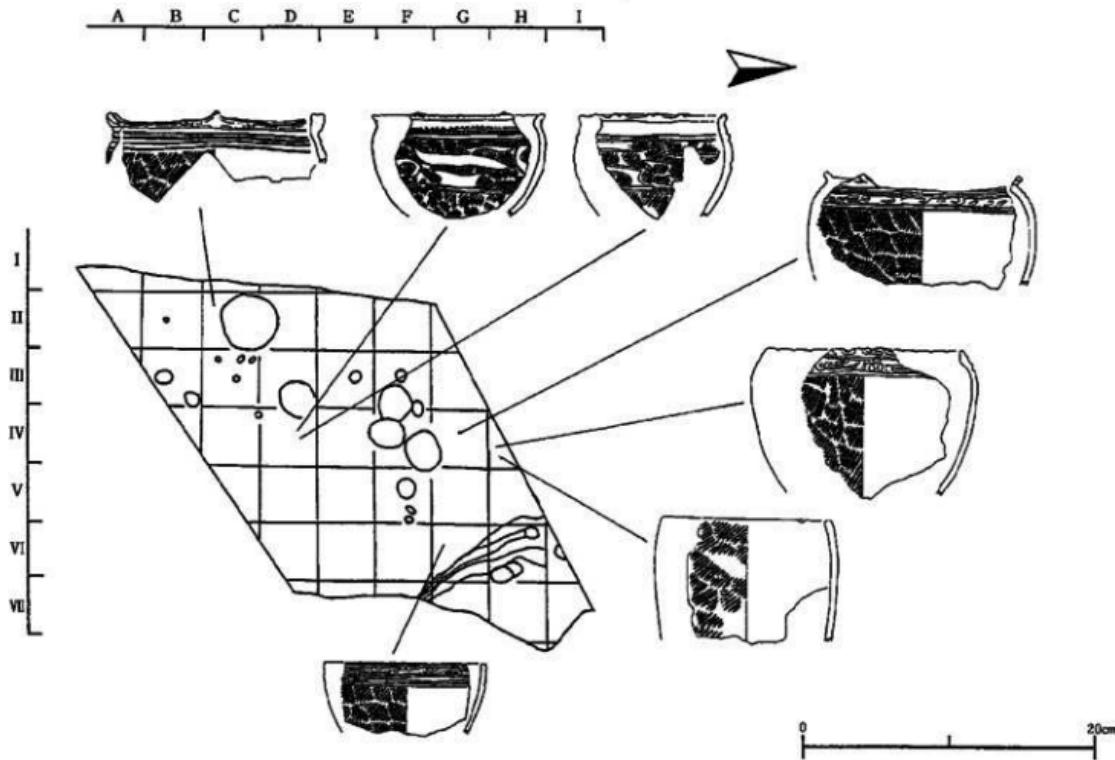
第71図 土器分布3（中期深鉢）



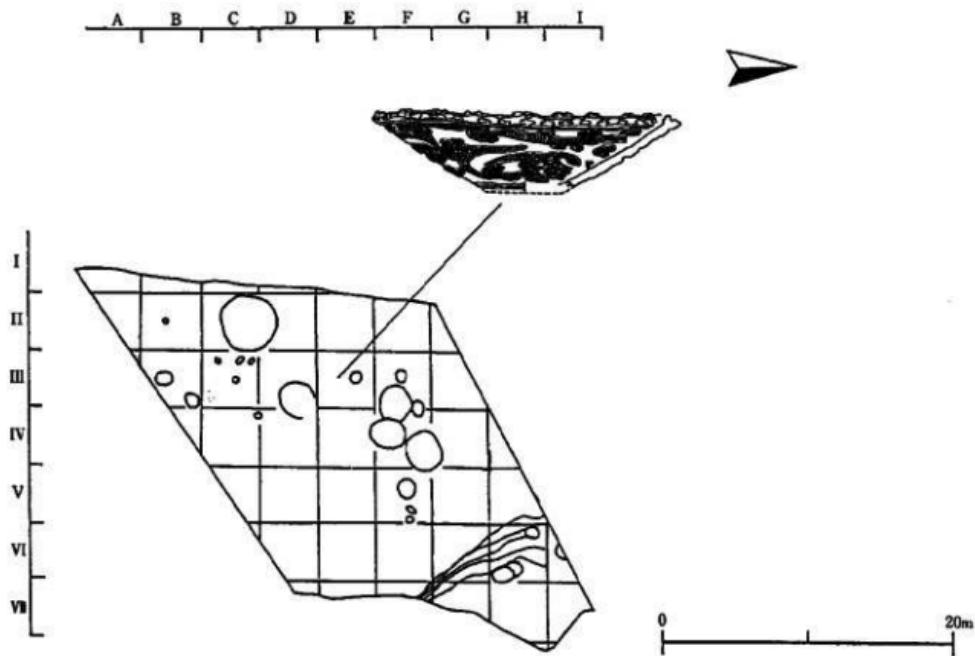
第72図 土器分布4（後期深鉢）



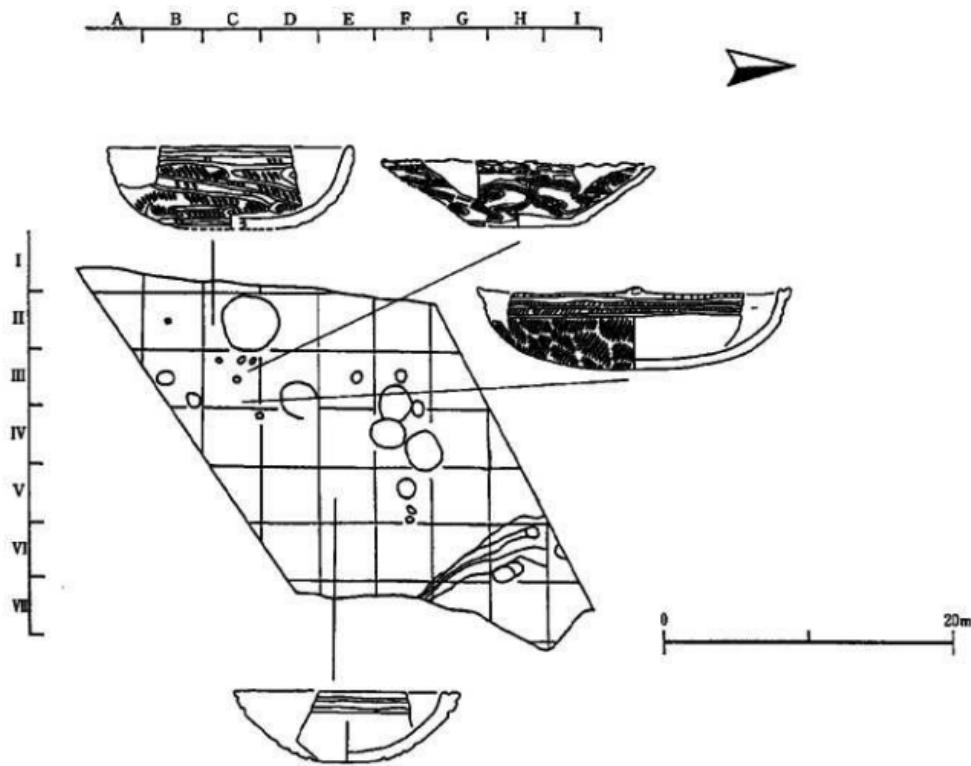
第73図 土器分布5（晚期変形土器）



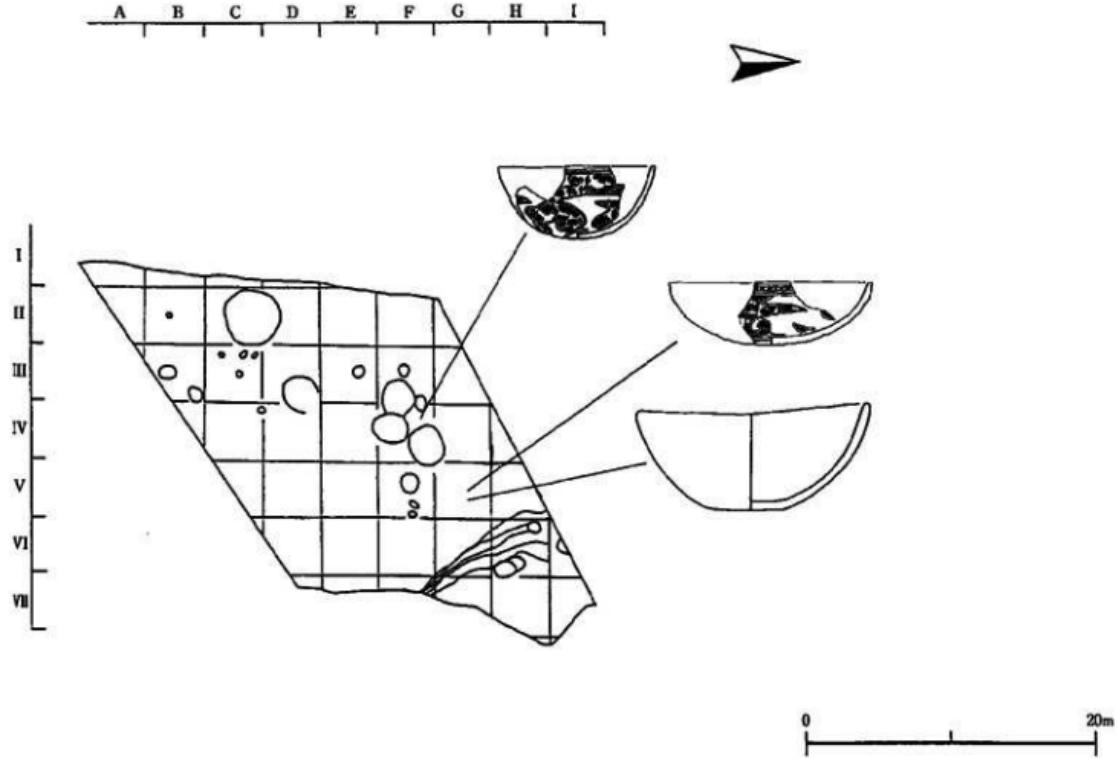
第74図 土器分布6（晩期鉢形土器）



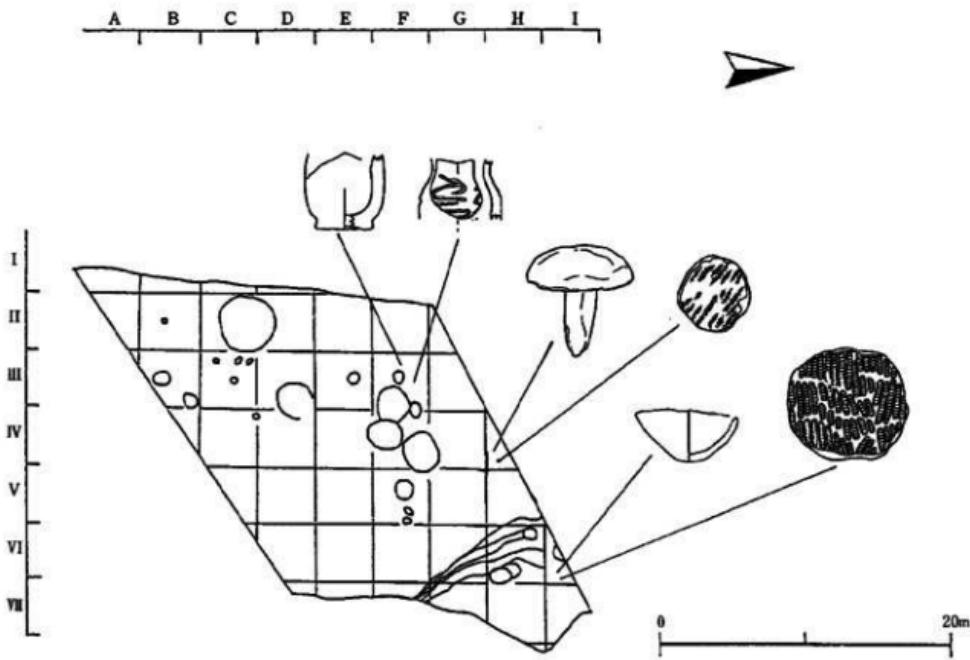
第75図 土器分布7（晚期台付浅鉢形土器）



第78図 土器分布8（晩期皿形土器）



第77図 土器分布9（晩期桜形土器）



第78図 土器分布10（ミニチュア土器・土製品）

### (3)石器

本遺跡からは、定型石器、非定型石器が出土している。だが、出土石器のほとんどは、遺構外からの出土であり、その正確な帰属時期がわかるものはほとんどない。ただし、器種によっては、岩手県内における一般的な出土例からおよその帰属時期が推測できるものもある。したがってここでは、時期を考慮せずに考察できる問題、時期を推測しながらおこなう遺跡の立地条件、遺跡の使用のあり方等の考察を石器を中心に据えておこなってみる。内容は以下である。

#### a 時期を考慮せずにおこなう考察

##### 1：器種と石材選択の問題

##### b 時期を推測しながらおこなう考察

##### 1：器種と時期の問題

##### 2：遺跡の性格の変化

#### a-1 器種と石材選択の問題

石鎌

石錐

石鏟

不定形石器（スクレイパー・ナイフ含む）

打製石斧

磨製石斧

凹石

石皿

石棒

石刀

石劍

玉類

##### ①細かな加工を必要とする石器について

ここで言う細かな加工を必要とする石器とは、石鎌、石錐、石鏟と不定形石器の一部である。山本 1989 では、東日本における縄文時代前期～後期の石器製作における石材の選択のあり方が述べられている。その中で石鎌や石錐は、「珪酸 ( $\text{SiO}_4$ ) 含有量が多く、緻密で均質・硬質な

石材（p. 56）」が選択されているとされている。それらの石材は「母材から薄い剝片を剥ぎ取りやすく、鋭利な刃部や尖端部を作り出すのに適した石質を持ち、さらには微細な剥離を加えて小形の石器に加工しやすい石質を備えた石材であると思われる。また、これらの石材は硬質なため、鋭利な縁辺や作り出した尖端部を保持し易いであろう（p. 56）」と述べられている。

実際、石鎌や石錐のような比較的小形で薄く、また、細かな調整を必要とする石器は、なによりもまず、意図した形に整形が可能であるか否かが石材選択においては重要視されたと思われる。山本は鋭利な縁辺や先端部が保持しやすかったことも石材選択において考慮されたと考えているが、この点はそれほど重要ではなかったと思われる。なぜなら、おそらく最も強い衝撃を受ける道具は斧の類であるが、これらの斧には普通、このような珪酸を多く含んだ堆積岩よりも、火成岩、変成岩が利用される。また、山本も磨製石斧の石材選択に関する解説の部分では「衝撃が加えられる石器である打製石斧や磨製石斧には、黒曜石や珪質頁岩・硬質頁岩のような硬質で脆弱な石材は不適当である（p. 58。）」と述べている。黒曜石や頁岩あるいは泥岩は硬質ではあるが、ガラスのようにかなり緊張している石材であり、衝撃には非常に弱いのである。だが、それゆえに、思いのままに細かな加工が可能となるのである。よって、石鎌、石錐のように細かな加工が必要な定形石器では、使用時における強さよりも、加工し易さを第一に考えて選択されたことが推測できる。

他に、珪質の泥岩を利用した利器として、利用された剝片（utilized flake）があるが、これは、剝片石器製作時に二次的に生み出された鋭利な剝片を用いることが多いため、このような傾向があると思われる。勿論、その鋭利さが使用目的に合致していることが最大の理由ではある。ここから、1：ナイフやスクレイパーとしての刃は、細かな調整することなしに得られるものも多いにあること、そして、2：それは使用期間が非常に短い使い捨て石器としての傾向があること、3：これは常に携帯する石器ではないため定型的である必要がないことなどが考えられる。

## ②粗い加工で重い石器

打製石斧がその代表的な石器である。用いられている石材は、ホルンフェルス、粘板岩、千枚岩などの硬い石である。細かな加工には向きのない石材である。

## ③最終的に研磨整形がおこなわれる鋭利な刃を持つ重い石器

磨製石斧がその代表的な石器である。用いられている石材は、ひん岩、安山岩など、硬い火成岩である。

## ④敲打、摺り削りに用いる比較的重い石

敲石、磨石がその代表的な石である。

#### ⑤台として用いられる石器あるいは石製品

石皿、凹石がその代表例である。用いられている石材は、安山岩などである。

#### ⑥大きくて太い石棒

流紋岩が用いられている。本遺跡では、流紋岩の柱状構造の原石が出土している。自然に風化磨耗したものも2点ある。これらは石棒の未製品、あるいは素材の可能性もあるが、製品に比べると細いものもある。したがって、別の用途のものだった可能性もある。あるいは、このままで石棒として利用されていたかもしれない。類例は、大木8a式、円筒上層a・c式頃の湯の沢Ⅲ遺跡（二戸郡安代町）、縄文前期から晩期までの沼久保遺跡（二戸郡淨法寺町）などで出土している。

#### b-1 器種と時期の問題

本遺跡の場合、石器の帰属時期がわかるものはほとんどなかった。また、石器の場合、石器のみから細かな帰属時期まではわからない。しかし、大まかな時期の指標になる得る石器もいくらかはある。以下に、いくつかの石器について述べてみる。

一般的には、大きく太い石棒は、縄文時代中期中葉から晩期にかけて利用されたものと考えができる（山本1983）。本遺跡で出土している土器から考へるならば、大木8b・9・10式、そして後期初頭頃、大洞BC～C<sub>2</sub>式土器に伴うものではなかろうか。

粘板岩製の石刀、石劍は、その起源は縄文時代前期に遡れる可能性があるにせよ、本遺跡で出土しているようなタイプのものは縄文晩期のものである（野村1983）。本遺跡出土の土器で考へるならば、大洞BC～C<sub>2</sub>式に伴うものであろう。

円盤状石製品は、縄文時代中期から晩期にかけてみられるが、晩期に特に多く出土する。ここでも大洞BC～C<sub>2</sub>式に伴う可能性が高いだろう。

#### b-2 遺跡の性格とその変化

本遺跡からは、縄文時代早期～晩期後葉までの土器が出土している。晩期の土器が最も多く、次に中期の土器が多い。他の時期のものは量的にはそれほど多くはない。このことから、この遺跡のうち、調査した範囲では、縄文時代晩期前葉～後葉の土器片が最も多く存在したことになる。しかし、絶対量が少ないので、この範囲で、土器をどのように用いていたかは不明である。

一方、石器は帰属時期が細かくわかるものがほとんどないので、大まかに考えるしかないのだが、中期中葉から後期にかけてのどの時期かに、この場所で石棒を用いるということがあったようだ。石棒はどれも破損している。おそらくは、故意に割ったのであろう。火を受けてもいるようだった。山梨県北巨摩郡大泉村金生遺跡でも、縄文時代中期後半、後期から晩期の石棒の破片や焼けた破片が出土しているが、意図的に「壊され」「焼かれた」と考えられている（山梨県教育委員会 1989、p. 183）。本遺跡の場合、石棒の破片や、炉、焼土集積遺構などがないことから、この場所でそれがおこなわれたと即断はできない。だが、近くの黒内XIII遺跡には中期中葉～後期初頭、晩期前葉～後葉の住居跡があることから、そことの関係を思わせる遺物であろう。

磨製石斧は6点出土しているが、うち大形の斧である3点は胸部で破損している。完形品あるいは完形品に近いものは小型のもので、ノミや手斧として用いられていたと思われるものである。これらのものがどの時期に用いられたものであるかは不明だが、斧として用いられていたと思われる大型品が3点とも、使用に耐え得ない破損品であることから、この場所は斧が捨てられた場所であるのかもしれない。使用中に破損して、柄から離れた部分を捨てた場所というふうに考えることもできるかもしれない。しかし、主にノミや手斧用と思われ、樹木伐採に用されたものとは考えられない小形品もあったことから、使用中の不意の破損によって、不要品を捨てていったと想定するよりも、単にそれらの石器を捨てた場所であると考えた方がよいかもしれない。ただし、これらの石斧類の帰属時期は不明である。

黒内XII遺跡には住居跡が発見されてはおらず、墓の可能性のあるものも含んだ用途不明の墓類似の土坑や、埋設土器がある。しかし、本遺跡出土の石器のほとんどはそれらの土坑から出土したわけではないので、土坑との直接の関係は考えられない。また、以上のように遺物の帰属時期にしても、この場所での使用のあり方についても明確ではないので、石器からみた遺跡の性格についても確定なことは言えない。ただし、遺跡の近さや、遺跡の存続時期の近さから考えて、本遺跡での石器の使用は黒内XII遺跡に住んだ人々と関連がある可能性があろう。

## VII 参考文献

- 竹田 煙雄 1969 「縄文晩期文化－北海道」 新版考古学講座 3
- 田村 誠一 1968 大曲 1 号遺跡『岩木山』
- 坪井 清足 1962 縄文文化論『日本歴史（原始および古代）』
- 寺村 光晴 1971 「製作技術－石工（玉工）」新版考古学講座 9
- 西村 強三 1968 龜ヶ岡は川遺跡出土品『青森県埋蔵文化財展目録』
- 林 勝作 1965 「縄文文化の発展と地域性－東北」 日本の考古学 II
- 半田 純子 1966 「東日本縄文時代晩期前半から後半にみられる変化についての考察」  
明治学院紀要第 4 集
- 清水 潤三 1972 是川遺跡と縄文文化『是川遺跡出土遺物報告書』
- 鈴木 克彦 1973 中字田遺跡（浜名 A 遺跡改め）『国道 280 号線道路改良工事関係埋蔵文化財試掘調査  
報告書』青森県教育委員会
- 村越 淳 1968 小森山西部遺跡『岩木山』
- 村越 淳 1970 「石神 II 号遺跡発掘調査報告書」
- 村越 淳 1974 「円筒土器文化」
- 山内 清男 1929 「関東北に於ける縄維土器」 史前学雑誌 1 - 2
- 山内 清男 1930 「斜行縄文に関する二、三の観察」 史前学雑誌 2 - 3
- 山内 清男 1937 「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄文式土器の終末」 考古学 1 - 3
- 山内 清男 1958 「縄文土器の技法」世界陶器全集 1
- 山内 清男 1964 「日本原始美術 1」
- 山内 清男 1967 「日本先史土器図譜」
- 長谷部哲人 1927 「円筒土器文化」 人類学雑誌 42 - 1
- 林 勝作 1965 「縄文文化の発展と地域性－東北」 日本の考古学 II
- 藤森 栄一 1969 「縄文式土器」
- 松下 亘・石川辰也 1966 「宗谷郡浜猿佐遺跡」 北海道考古学 2
- 松山 力 1974 「八戸市十日市松ヶ崎出土土器片の組成からみた土器材料土の推定」  
第 2 回研究発表会発表
- 馬目 順一 1968 綱取貝塚第四地点発見の縄之内 I 式期土器の考察『小名浜』
- 三友国五郎・柳田敏司・青木義徳 1968 「明花遺跡」浦和市文化財調査委員会
- 三宅 徹也 1970 「野木和遺跡調査報告書」青森市の文化財 5
- 村越淳・小片保 1962 「青森県二ツ森貝塚発掘調査概要」
- 筆津 健洋 1960 「青森県八戸市日計遺跡」史学 33 - 1, pp. 71 ~ 83

- 佐藤 達夫 1958 a『青森県上北郡早稻田貝塚』(外3名共著)考古学雑誌 43-2, pp. 35~58  
b『青森県上北郡出土の早期縄文土器』(共・渡辺兼庸)同上 43-3, pp. 75~78
- 1961 a『六ヶ所村出土早稻田第5貝塚』(共・二本柳正一)上北考古会報告 2  
b『青森県上北郡出土の早期縄文土器(追加)』考古学雑誌 46-4, pp. 42~43
- 周東 隆一 1960『撫糸文化の研究』考古学研究 7-4, pp. 8~24
- 薗田 芳雄 1946『群馬県善門寺遺跡調査報告』両毛古代文化 1, pp. 1~11
- 角田 文衛 1936『陸前船入島貝塚の研究』考古学論叢 3, pp. 255~274
- 村越 漂 1977『円筒土器に伴う特殊な石器』『東北考古学の諸問題』所収
- 草間 俊一 1965『中島遺跡』『水沢の原始・古代遺跡』
- 鈴木孝志・草間俊一 1967『北上市程瀬棒山遺跡緊急調査中間報告』
- 小笠原好彦 1968『東北地方南部に於ける前期末から中期初頭の縄文式土器』『仙台湾周辺の考古学的研究』所収
- 興野 義一 1968『大木式土器理解のために』『考古学ジャーナル』24, 32, 48
- 高倉 淳 1968『宮城県気仙沼市大島礁石貝塚出土の土器について』『仙台湾周辺の考古学的研究』
- 草間俊一・金子浩昌『貝島貝塚』花泉町教育委員会 1971
- 草間 俊一『天神ヶ丘遺跡』大迫町教育委員会 1974
- 『岩手町史 I』岩手町教育委員会 1976
- 熊谷 常正『南小梨蛇王遺跡』千厩町教育委員会
- 甲野 勇『土偶・裝身具』『日本原始美術大系 2』講談社 1964
- 小林 達雄『土偶・埴輪』『日本陶冶全集 3』中央公論社 1977
- 佐々木輝蔵『亀ヶ森に於ける考古遺跡物調査して』1968
- 赤堀 英三 1929『石器研究の一方法-石鐵に関する二三の試み-』  
『人類学雑誌』44-3 pp. 87~105
- 赤堀 英三 1931 a『磨製石斧の形態と石質との関係に就いて』『人類学雑誌』46-3 pp. 82~89
- 赤堀 英三 1931 b『打製石器の地域的差異』『人類学雑誌』46-5 pp. 166~180
- 佐原 真 1964『紫雲出』鉢間町
- 岩手県埋蔵文化財センター 1984『湯の沢Ⅲ・葉沢Ⅱ・石神Ⅱ遺跡発掘調査報告書』
- 岩手県埋蔵文化財センター 1986『沼久保遺跡発掘調査報告書』
- 菊地 実 1983『斐積葬』『縄文文化の研究』9 pp. 57~71 雄山閣
- 野村嵩 1983『石劍・石刀』『縄文文化の研究』9 pp. 181~196 雄山閣
- 山本 薫 1989『縄文時代の石器製作における石材の利用について』『筑波大学先史学・考古学研究』  
第1号 pp. 45~96
- 山本 薫 1983『石棹』『縄文文化の研究』9 pp. 170~180 雄山閣

# 黒内VIII遺跡写真図版



写真図版1図 黒内遺跡遠景(東方より)



写真図版 2 図 黒内VII遺跡完掘全景

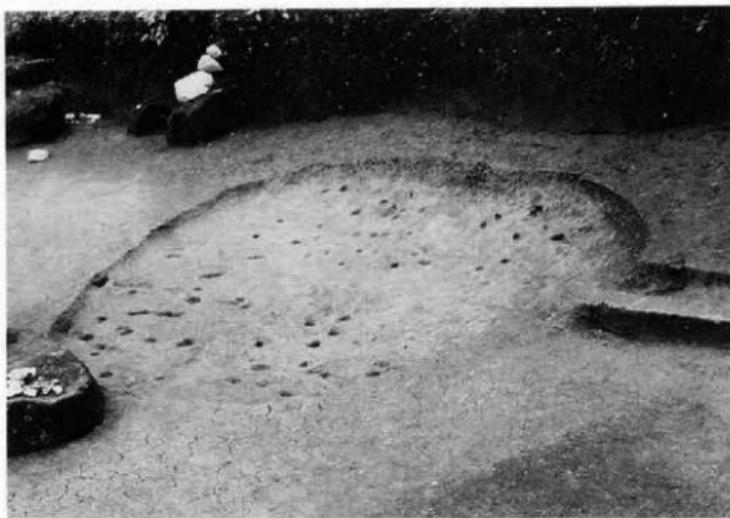


北西斜面粗掘



中央斜面粗掘

写真図版 3 図 粗掘風景

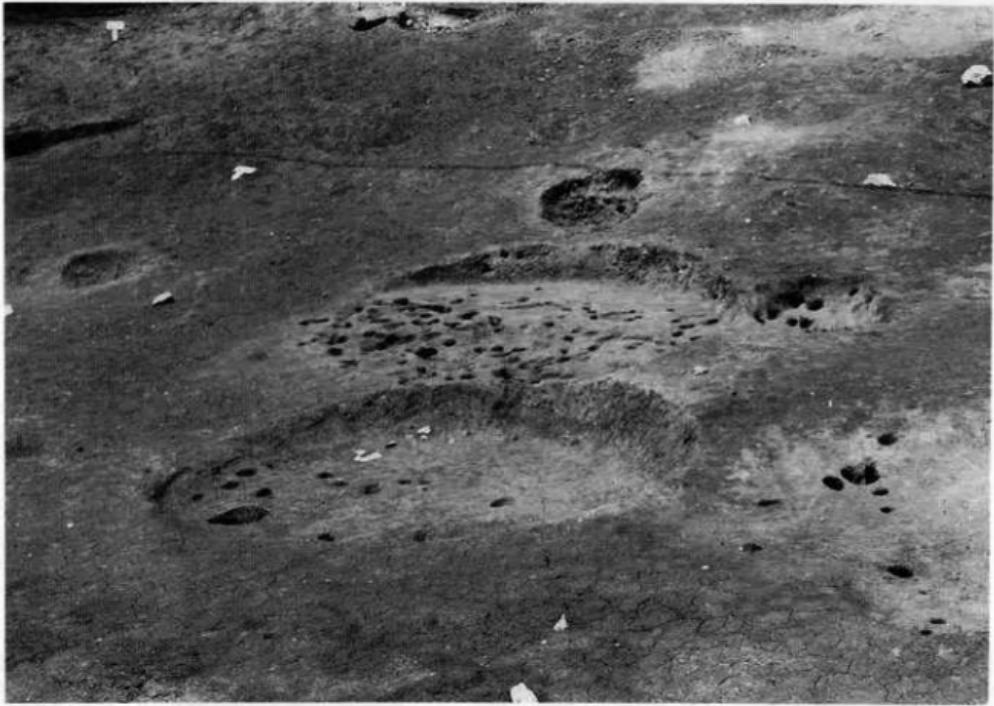


C II型穴状遺構 1号

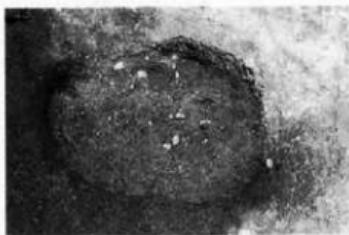


D III型穴状遺構 1号

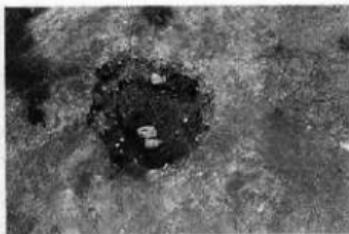
写真図版 4 図 C II型穴状遺構 1号・D III型穴状遺構 1号



写真図版 5 図 F III 竪穴状造構 1 号・F IV 竪穴状造構 1 号・F IV 竪穴状造構 2 号



B III 土坑 1 号



B III 土坑 2 号



E III 土坑 1 号



F III 土坑 1 号



F III 土坑 2 号



F V 土坑 1 号



I VI 土坑 1 号

B III 土坑 1 号、2 号 · E III 土坑 1 号 · F III 土坑 1 号、2 号  
写真图版 6 国 F V 土坑 1 号 · I VI 土坑 1 号



H VI土坑1号 環状石製品出土状況(2)



H VI土坑1号 環状石製品出土状況(1)



H VI土坑2号 棒状磨石出土状況



H VI土坑1号・2号  
写真図版7図 H VI土坑1号・2号



C IV埋設土器 (1)



C IV埋設土器 断面 (2)

写真図版 8 図 C IV 埋設土器遺構



写真図版 9 図 H VI 溝状造構



C II グリッド石刀出土状況



C III グリッド石皿出土状況



C III グリッド土器出土状況



C IV グリッド石皿出土状況



E IV グリッド土器出土状況



F V グリッド石棒出土状況



F V グリッド石棒出土状況



G IV グリッド土器出土状況

写真図版10図 造構外遺物検出状況(1)



F V グリッド石棒出土状況



F VI グリッド特殊磨石出土状況



G V グリッド壺形土器出土状況



H VI グリッド石斧出土状況



I V グリッド有孔石製品出土状況



I VI グリッド石棒出土状況



I VII グリッド石棒出土状況



I VIII グリッド凹石出土状況

写真図版11図 造構外遺物検出状況(2)



写真図版12 C IV 埋設土器



B III 土坑 1 号

1



B III 土坑 2 号 土坑出土遗物 4

2



1



2



3

D III 窑穴状造構出土遺物

写真図版13 B III 土坑 1号・2号・D III 窯穴状造構 出土遺物



1



2



3

E III土坑1号出土遗物



4



5



6

F III土坑1号



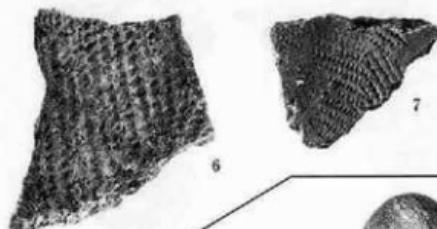
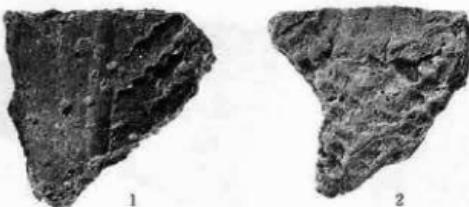
7



8

F VI竖穴状造構2号出土遗物

写真図版14 E III土坑1号・F III土坑1号・F IV竖穴状造構2号出土遗物

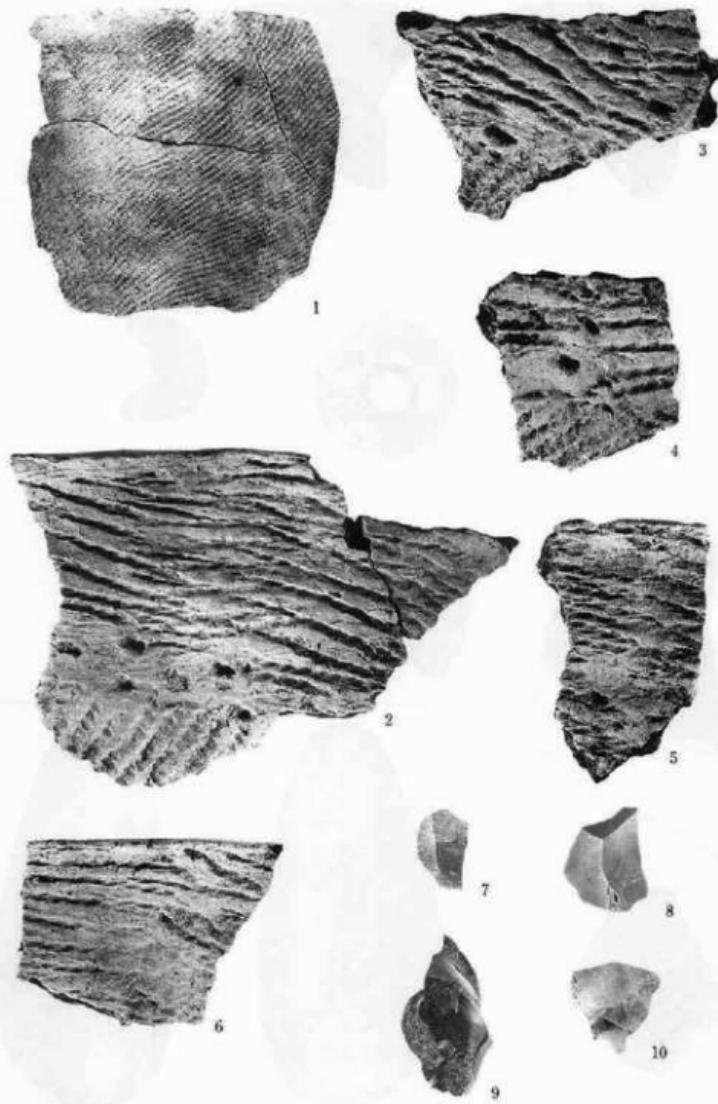


H VI 土坑1号出土遺物



H VI 2号出土遺物

写真図版15 H VI 土坑1号・2号出土遺物



写真図版16 I VI土坑1号出土遺物（土器・石器）



1



2



3



4

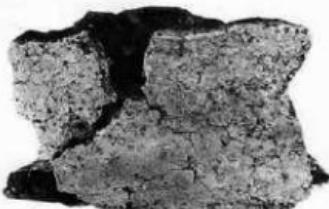
写真図版17 造構外出土遺物 土器(1)



写真図版18 造構外出土遺土器(2)



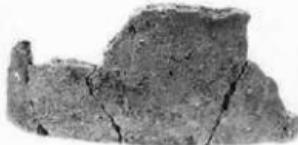
8



10



9



11

写真図版19 造構外出土土器(3)



12



13

写真図版20 造構外出土土器(4)



14



16



15

写真図版21 造橋外出土土器(5)



17



18



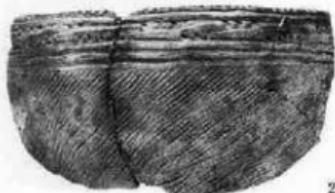
19



21



20



22

写真図版22図 遺構外出土土器(6)



23



24



25



26



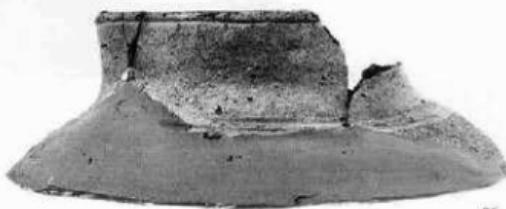
27



29

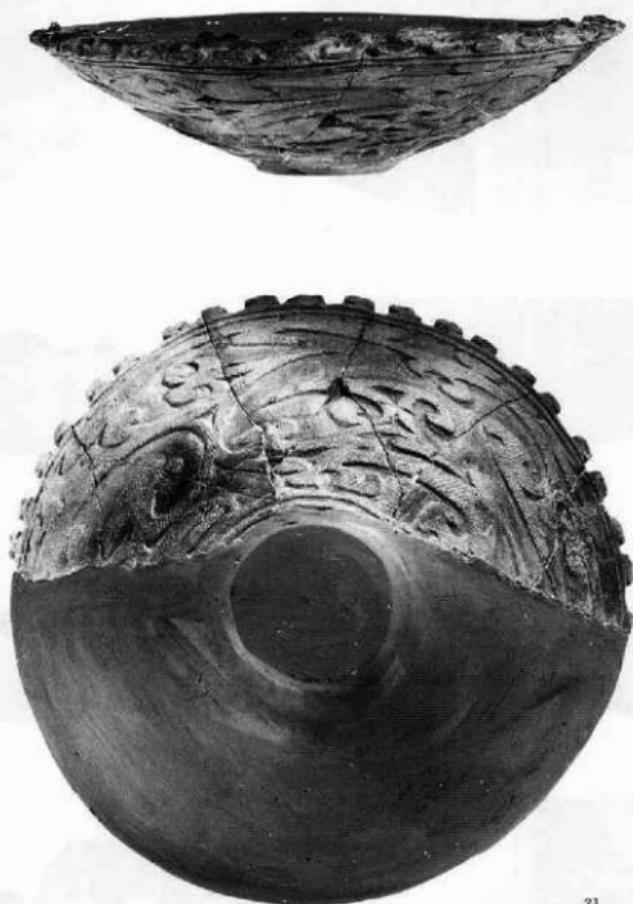


28



30

写真図版23 造構外出土土器(7)



31

写真図版24 造構外出土土器(8)



32

写真図版25 造構外出土土器(5)



34

33



36

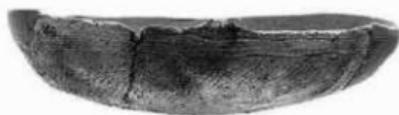
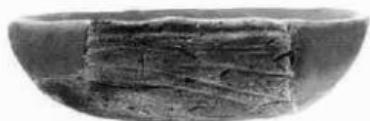
35

写真図版26 造構外出土土器(10)



37

写真図版27 造構外出土土器(11)



38

39



40

41

写真図版28 造構外出土土器(12)



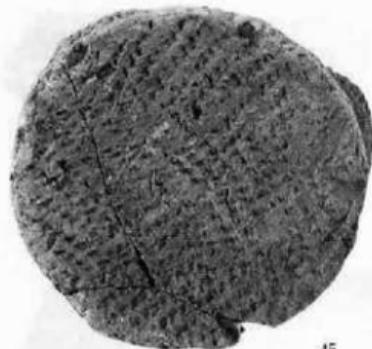
42



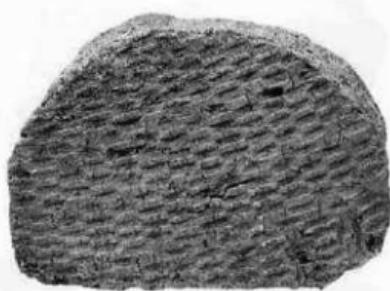
43



44

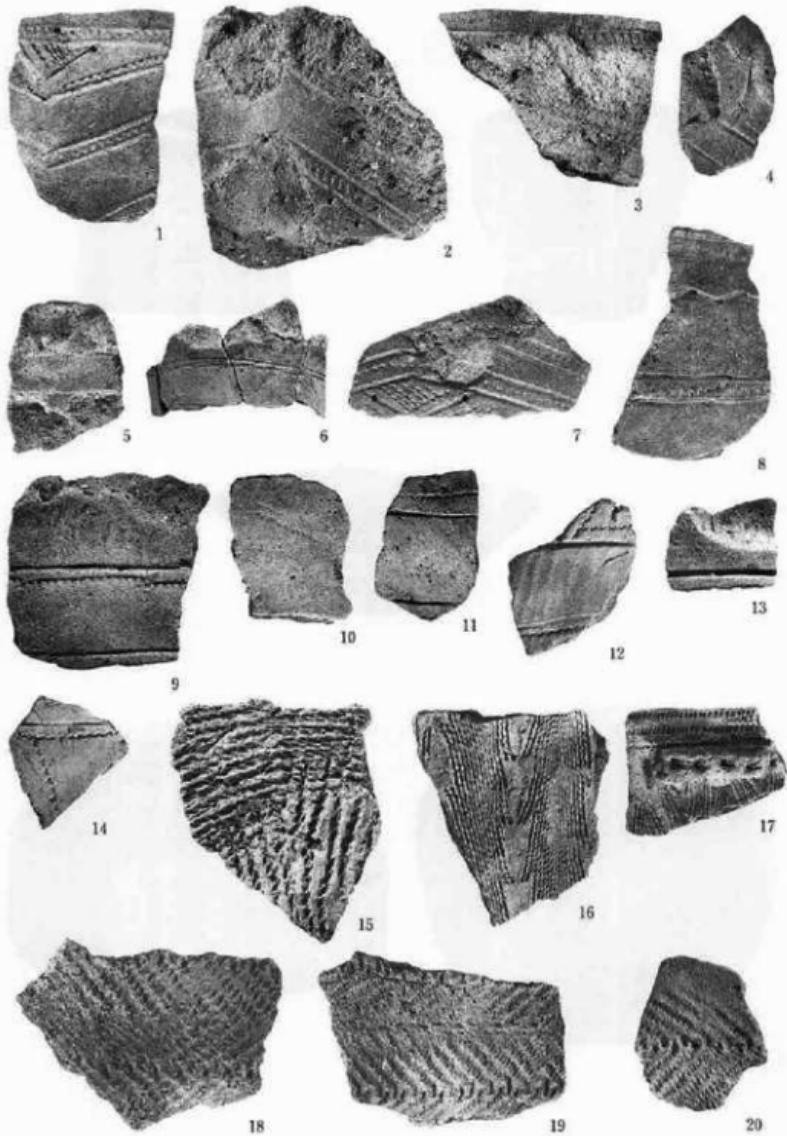


45

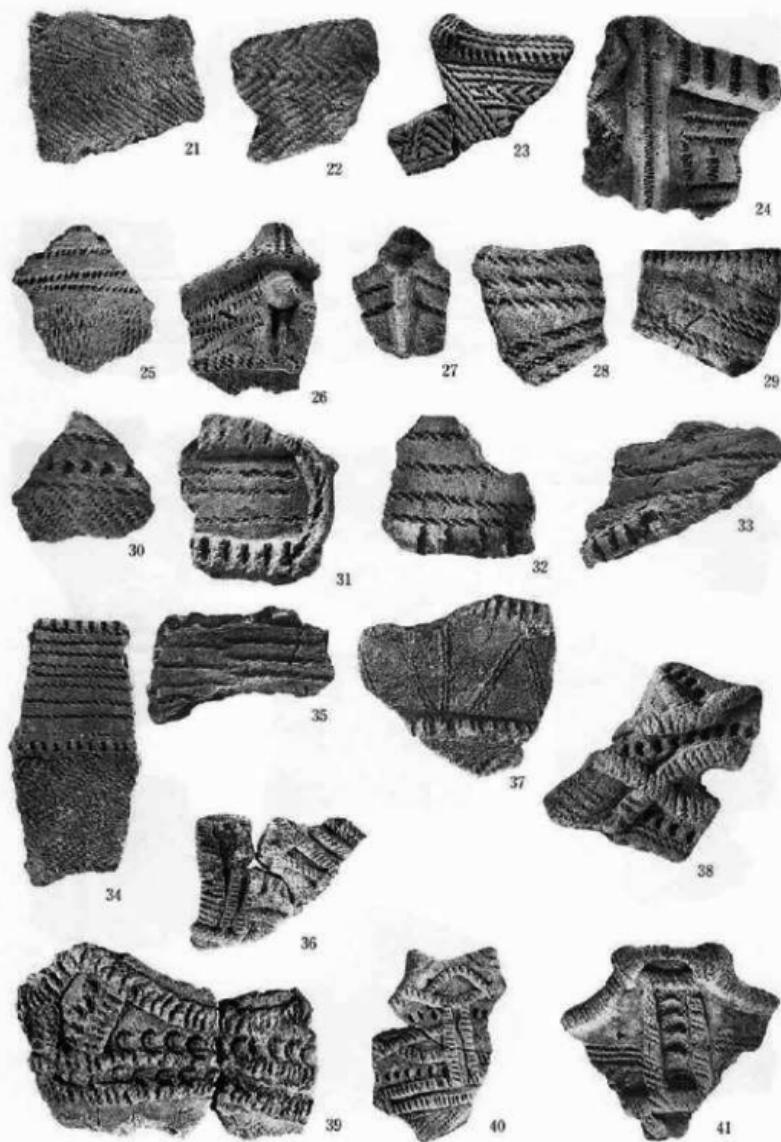


46

写真図版29 造構出土土器(13)



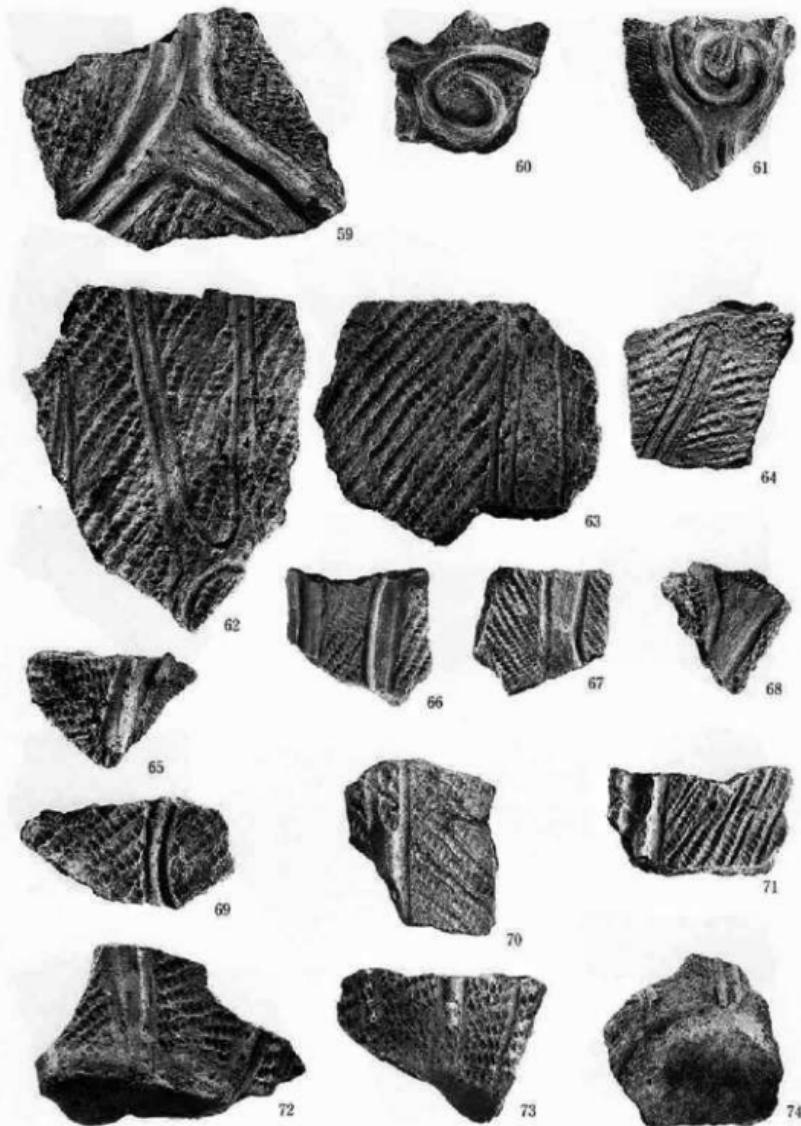
写真図版30 造構外出土土器(14)



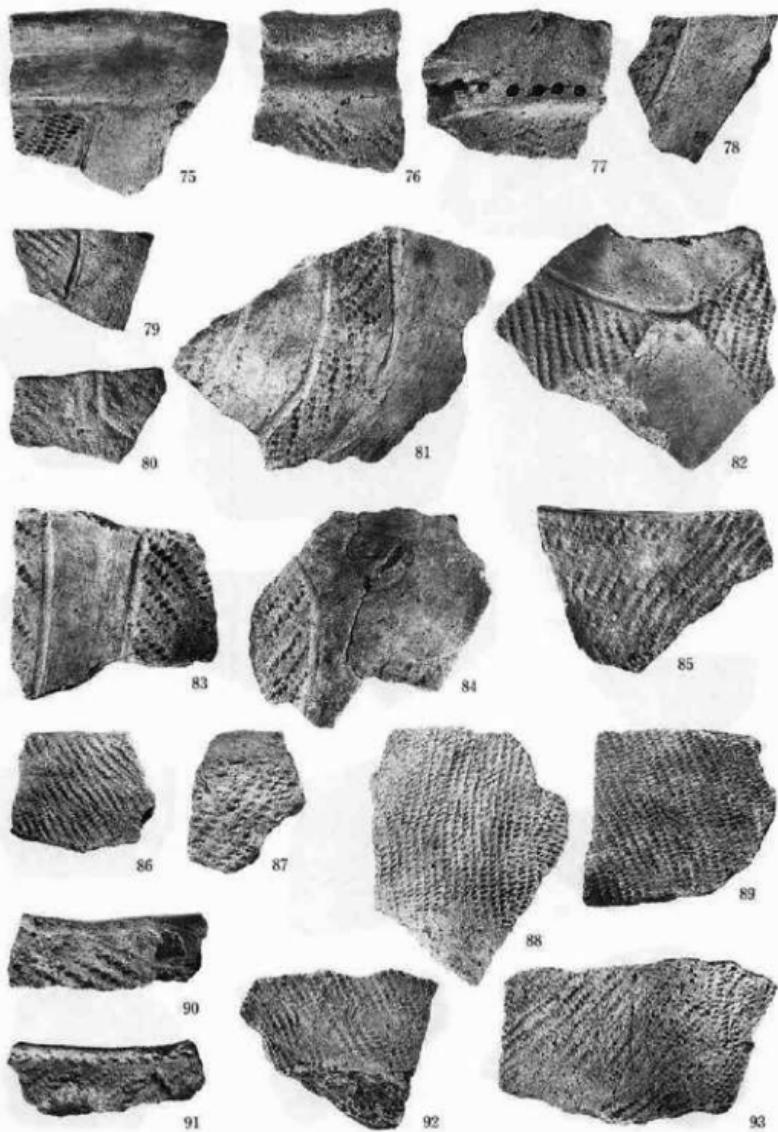
写真図版31 造構出土土器(15)



写真図版32 造構外出土土器(16)



写真図版33 造構外出土土器(17)



写真図版34 造構外出土土器(18)



94



95



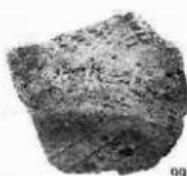
96



97



98



99



100



101



102



103

104



105



106

写真図版35 造構外出土土器(19)



107



108



109



110



111



112



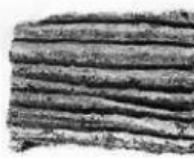
113



114



115

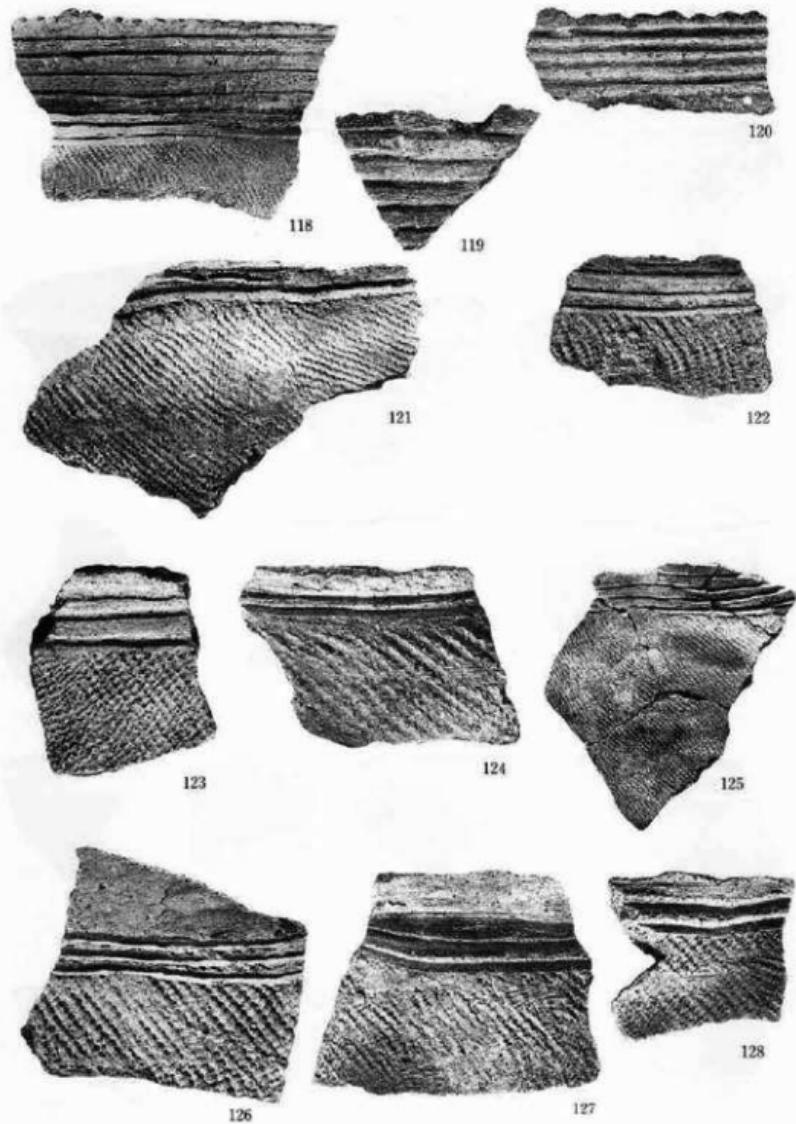


116

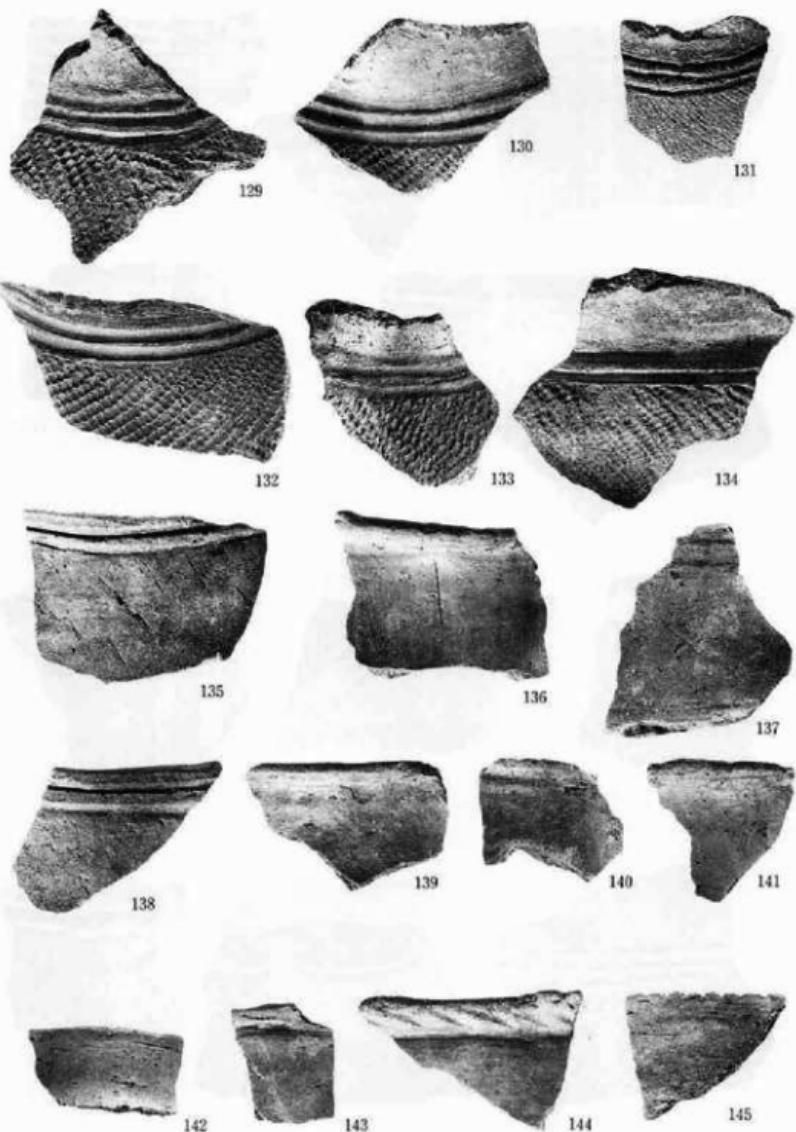


117

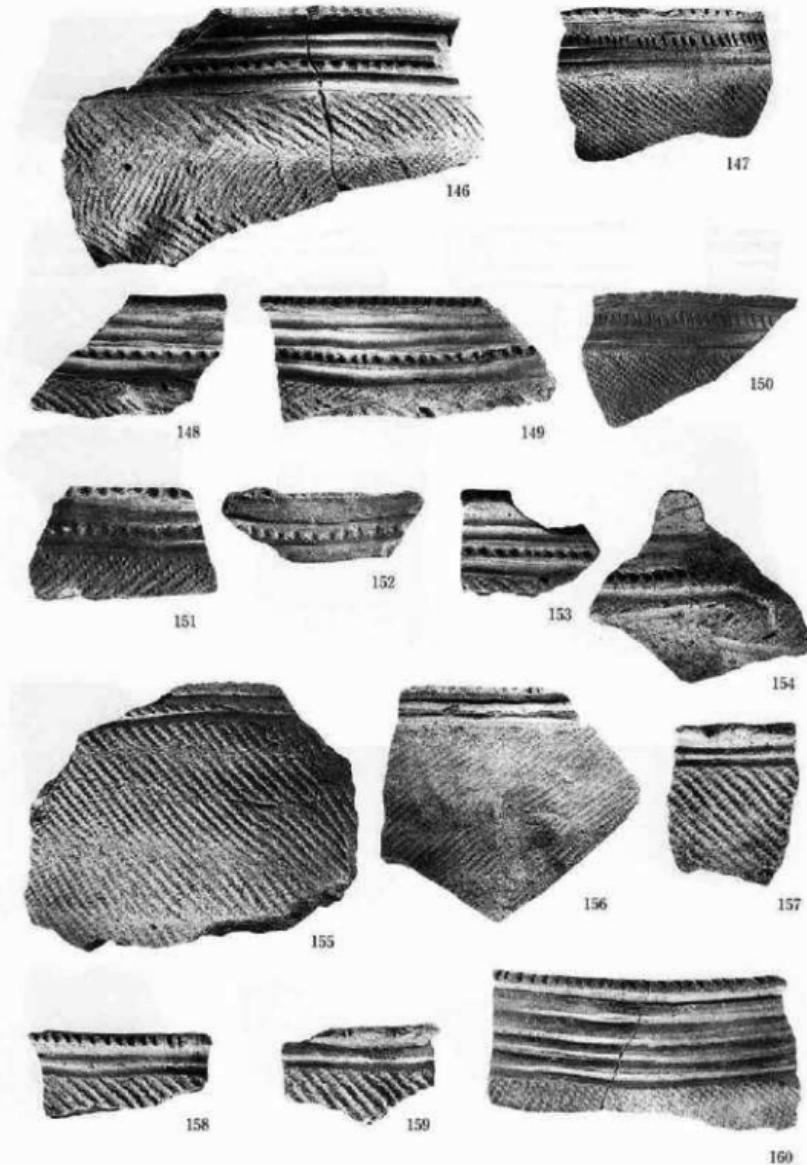
写真図版36 造構外出土土器(20)



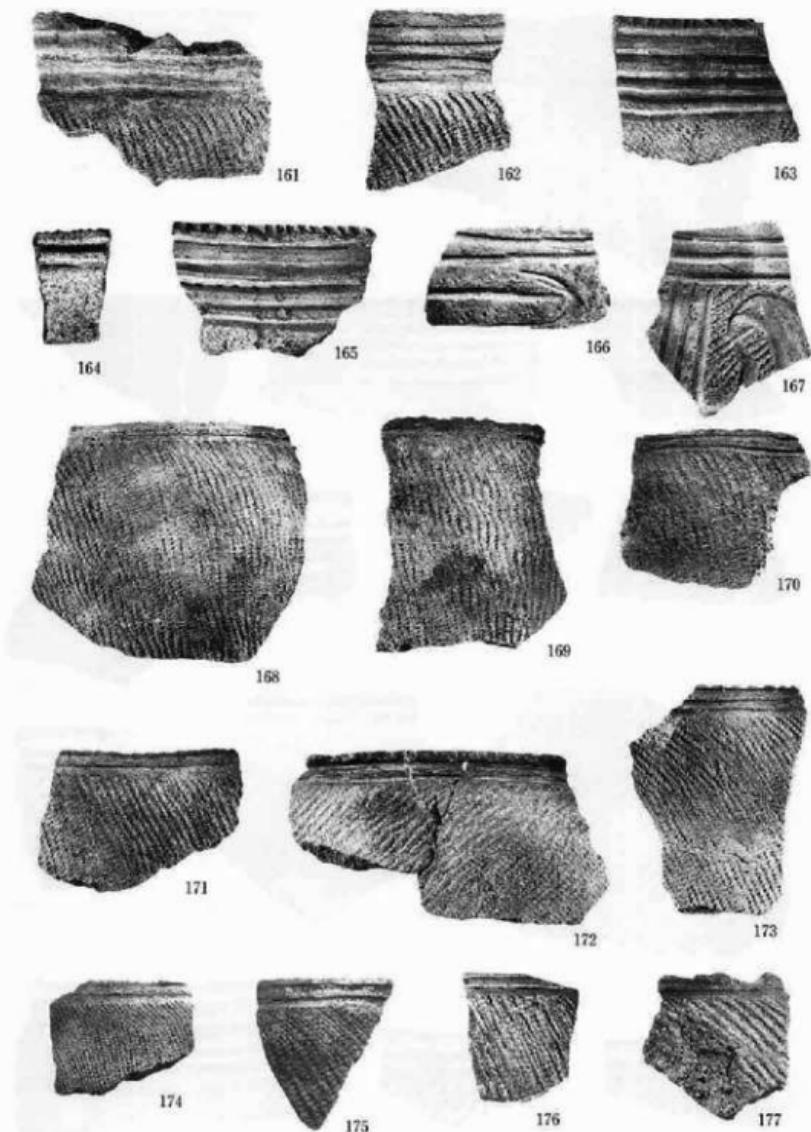
写真図版37 遺構外出土土器(21)



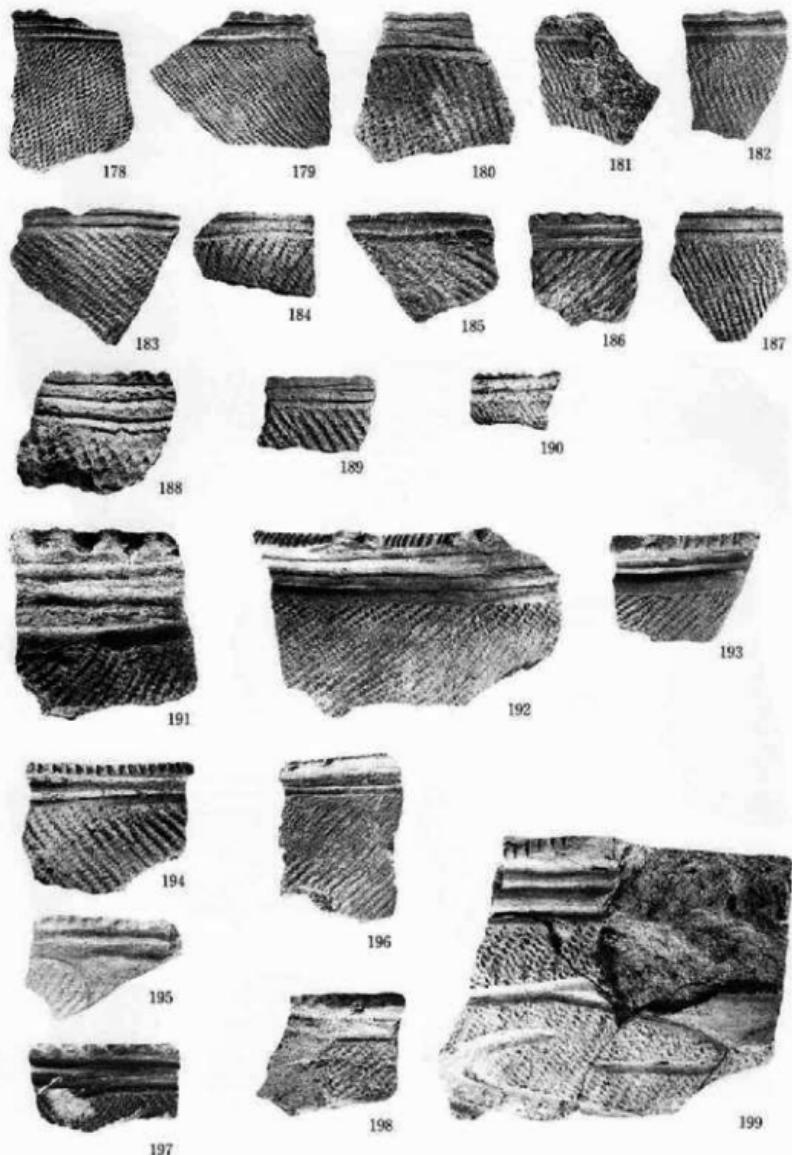
写真図版38 遺構外出土土器(22)



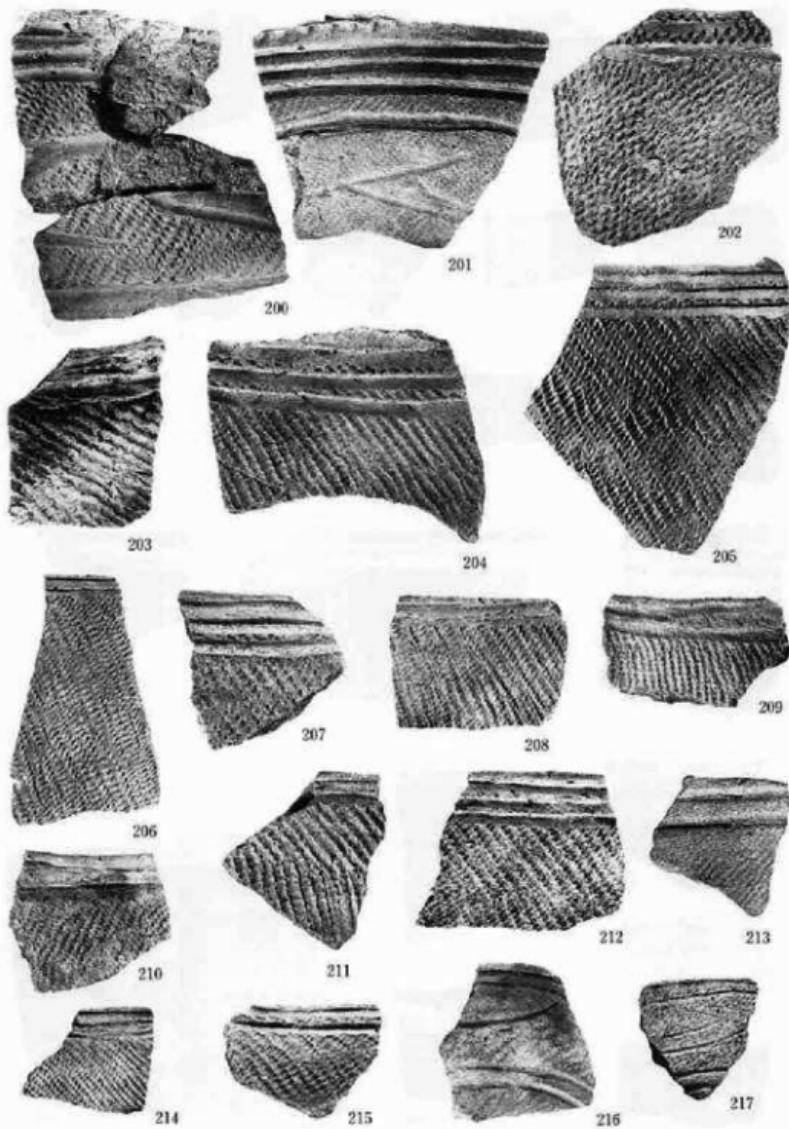
写真図版39 造構外出土土器(23)



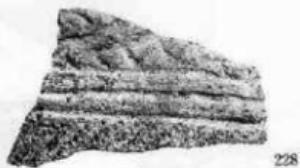
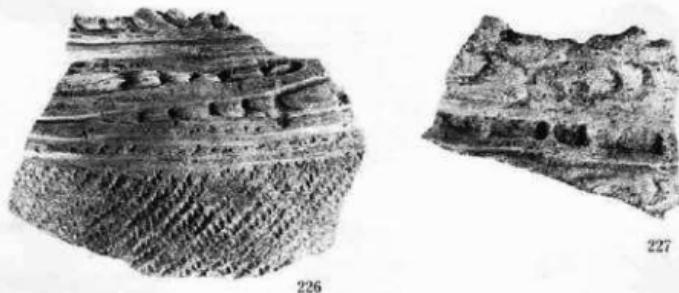
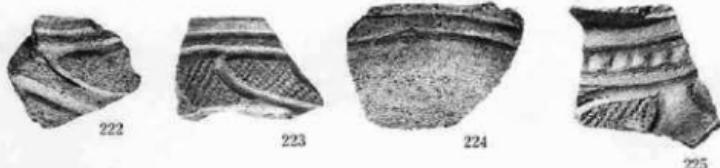
写真図版40 造構外出土土器(24)



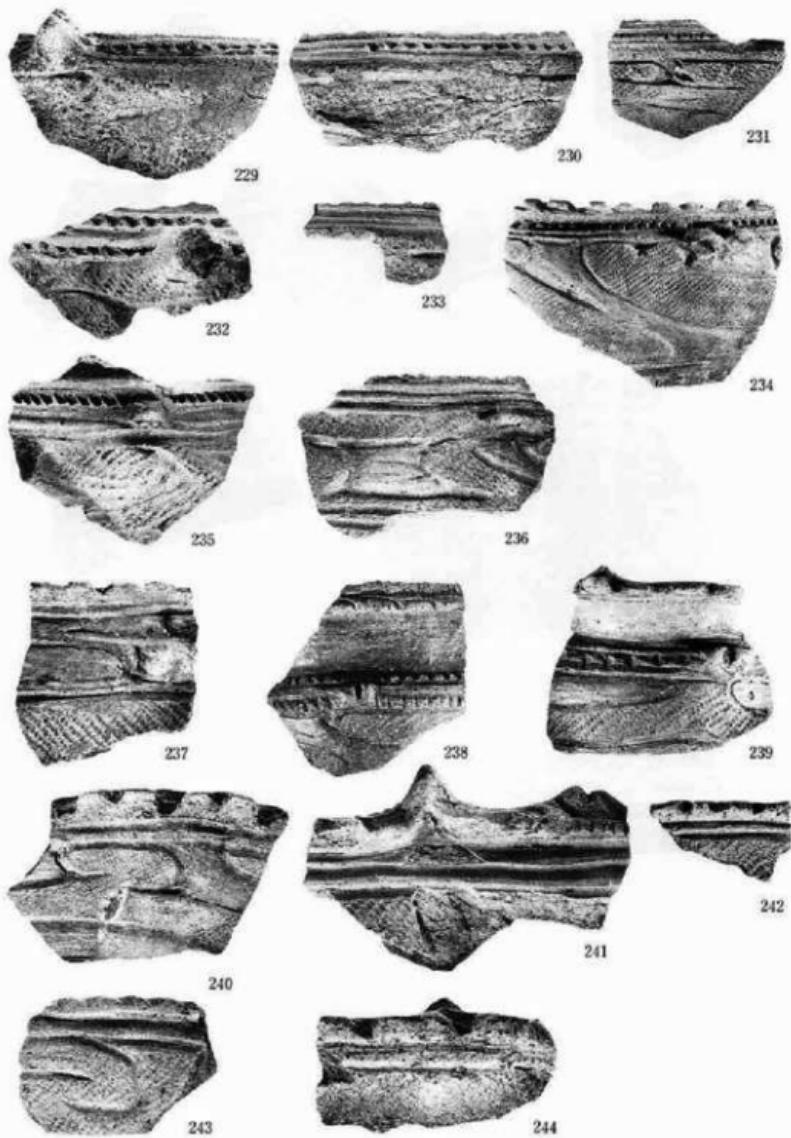
写真図版41 造構外出土土器(25)



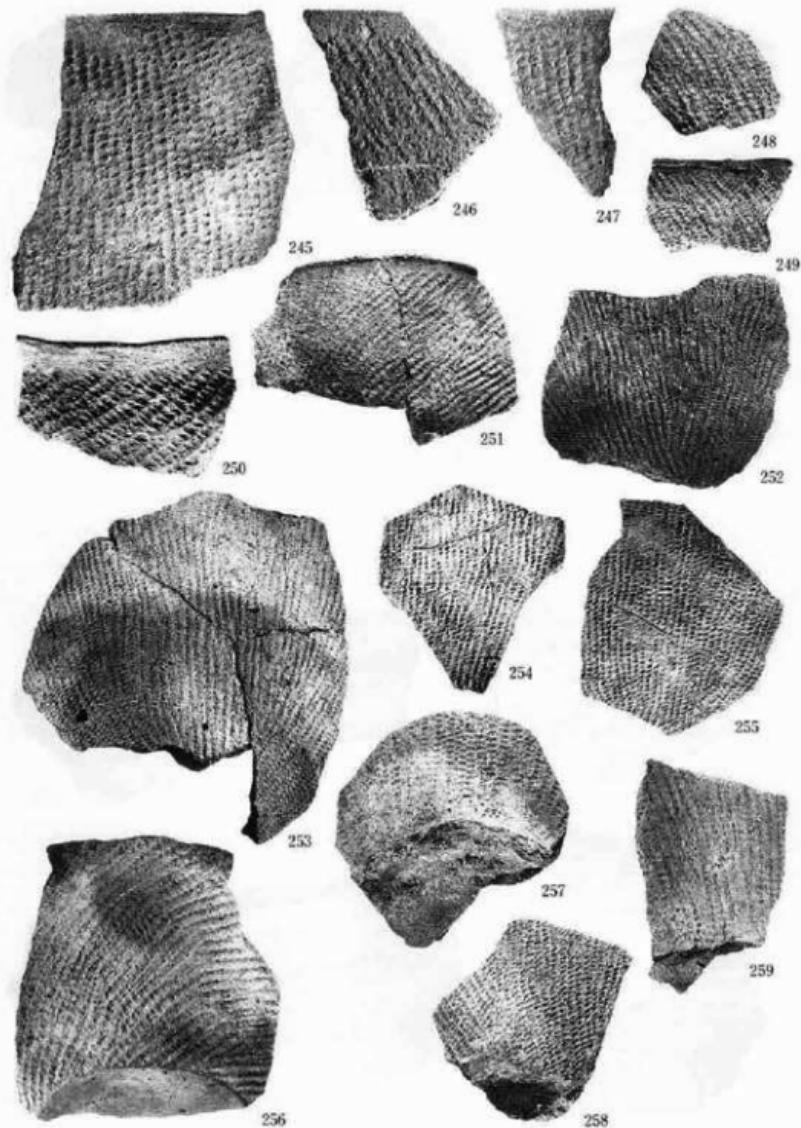
写真図版42 遺構外出土土器(26)



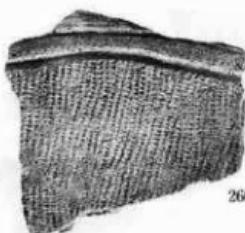
写真図版43 遺構外出土土器(27)



写真図版44 造精外出土土器(28)



写真図版45 造構出土土器(29)



260



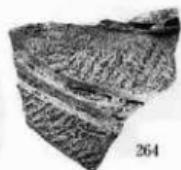
261



262



263



264



265



267



268



266

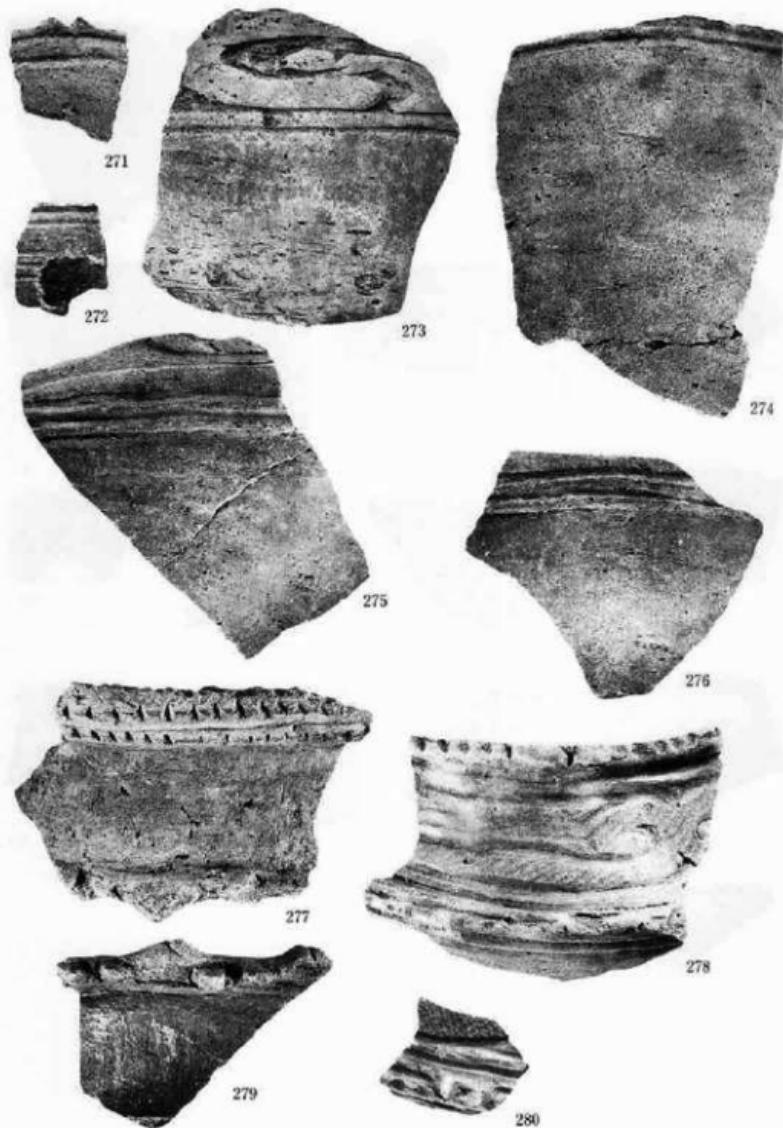


270

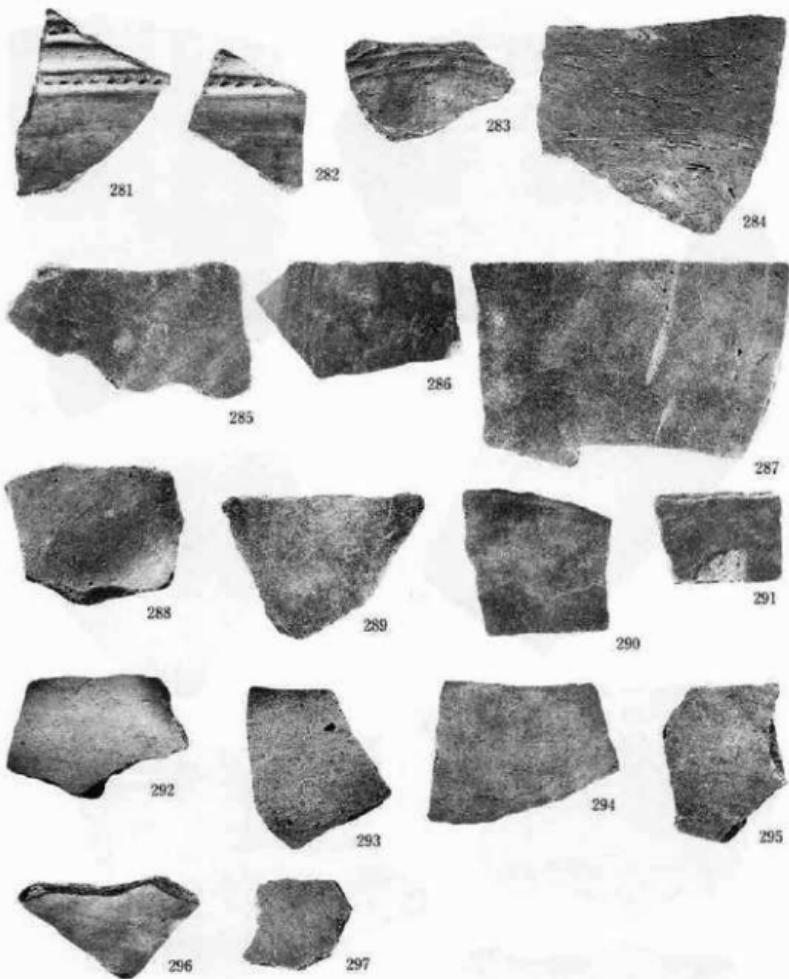


269

写真図版46 造構外出土土器(30)



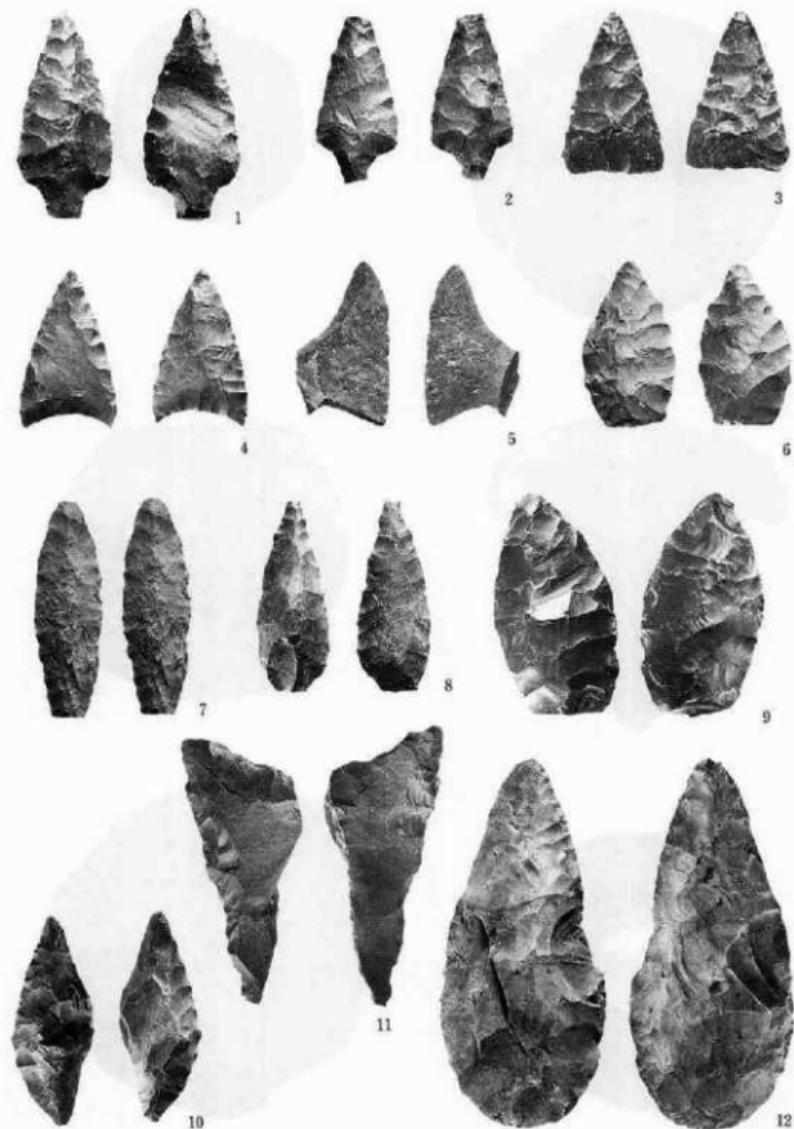
写真図版47 造構外出土土器(31)



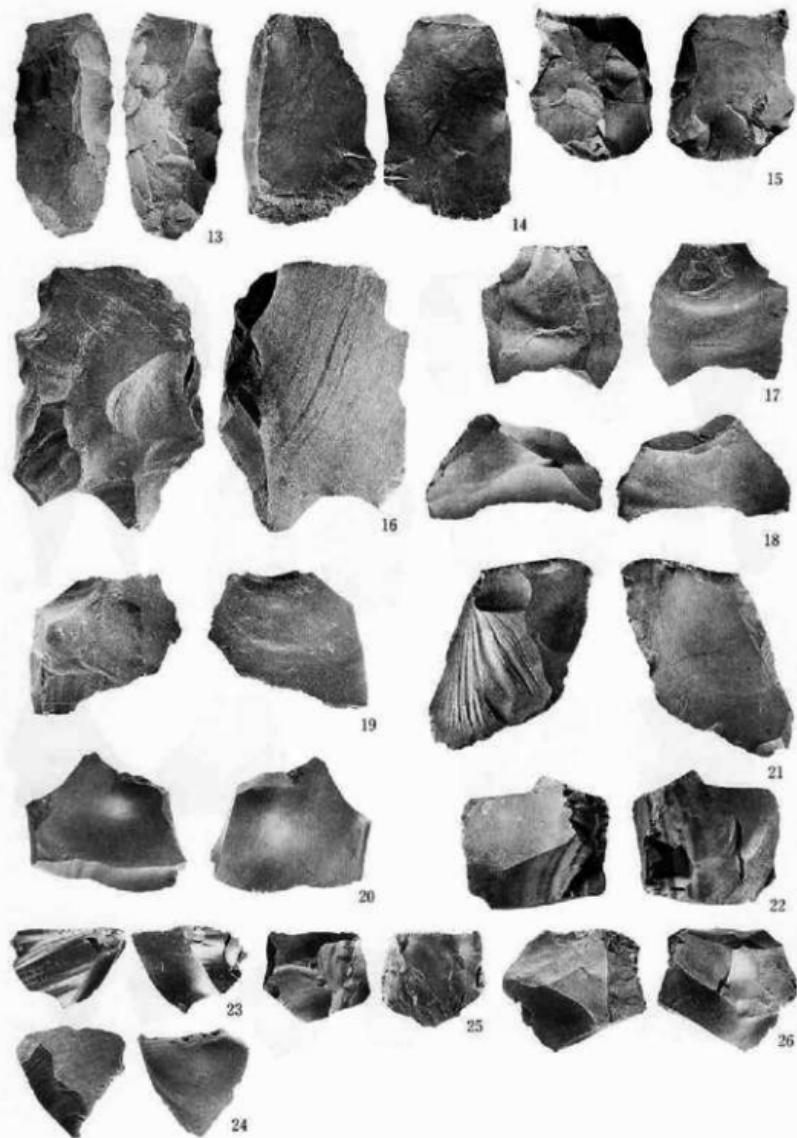
写真図版48 造構外出土土器(32)



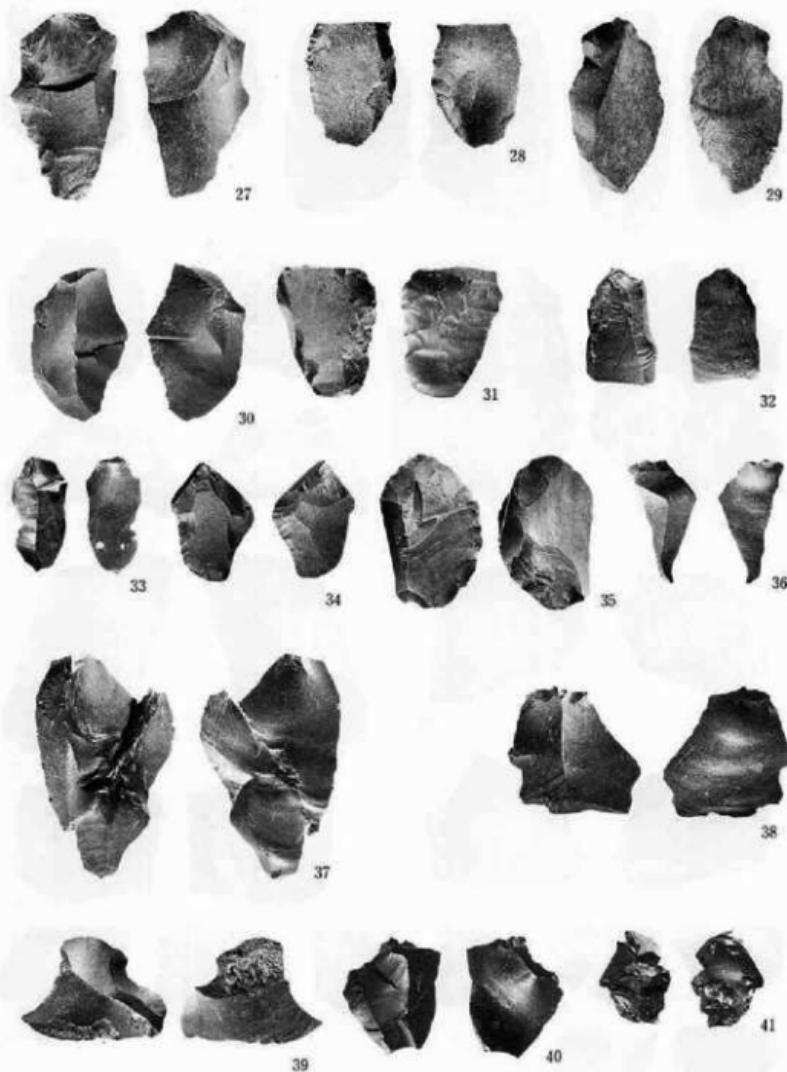
写真図版49 造構外出土土製品



写真図版50 造構外出土石器(1)



写真図版51 造構外出土石器(2)



写真図版52 造構外出土石器(3)



42

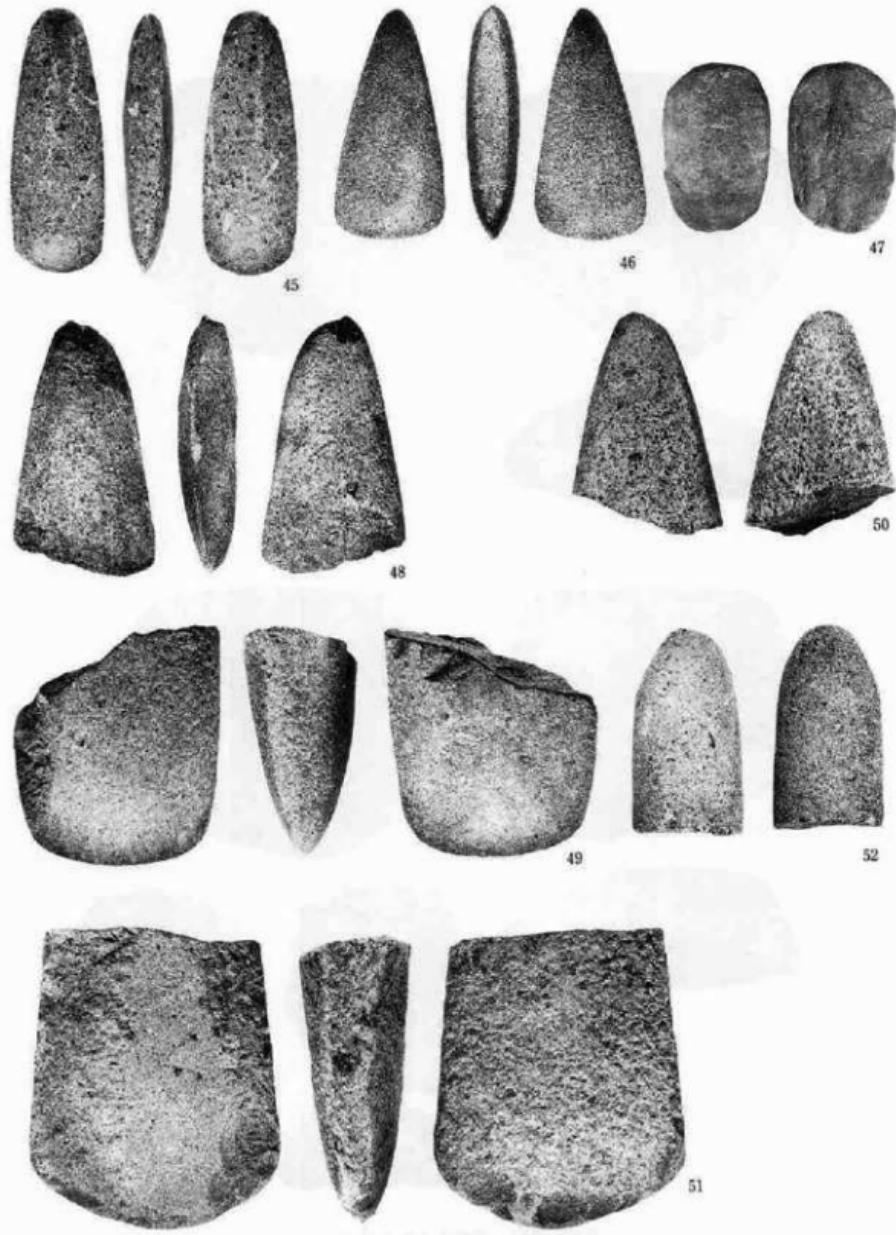


43



44

写真図版53 造構外出土石器(4)



写真図版54 造構外出土石器(5)



53

54



55



56

57



58



61



62

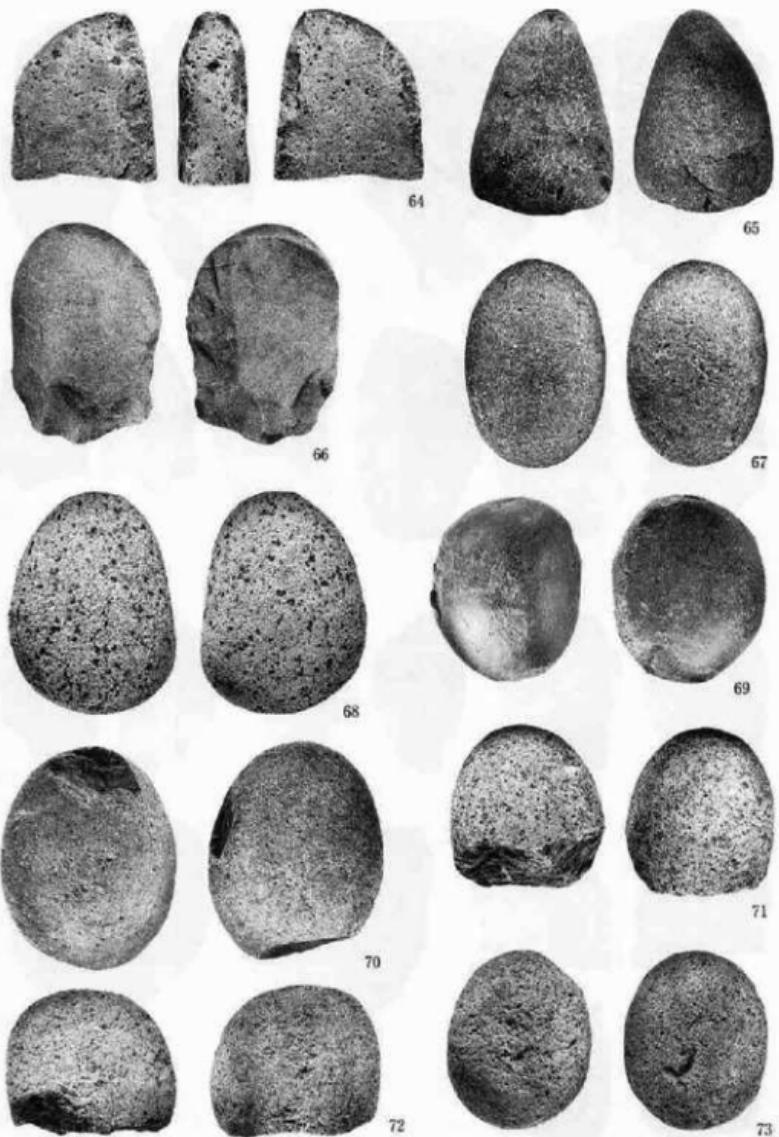


59

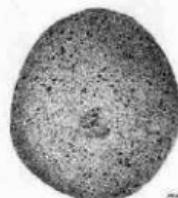


63

写真図版55 造構外出土石器(8)

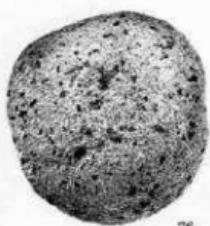


写真図版56 造構外出土石器(7)



74

75



76



78



77

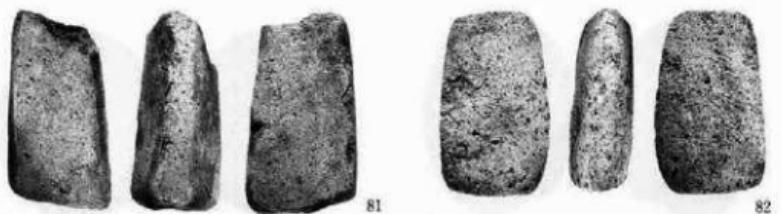


79



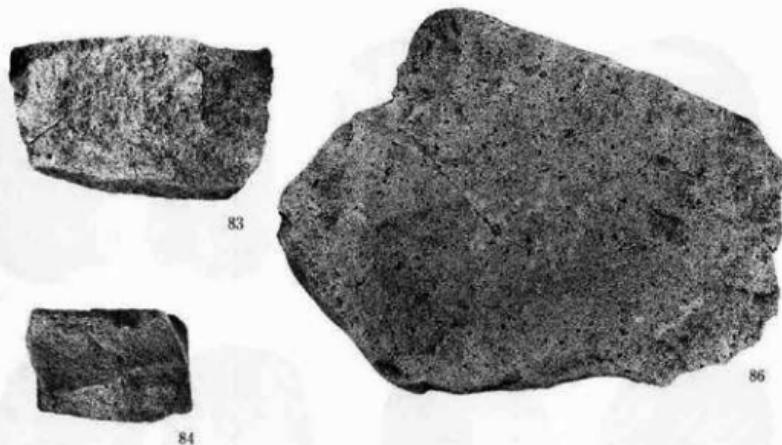
80

写真図版57 造構出土石器(8)



81

82



83

86

84

85

87

写真図版58 造構外出土石器(9)



88

89



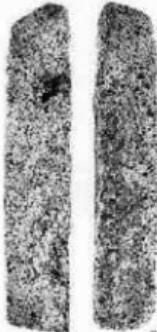
90

91

92



93



94



95



96

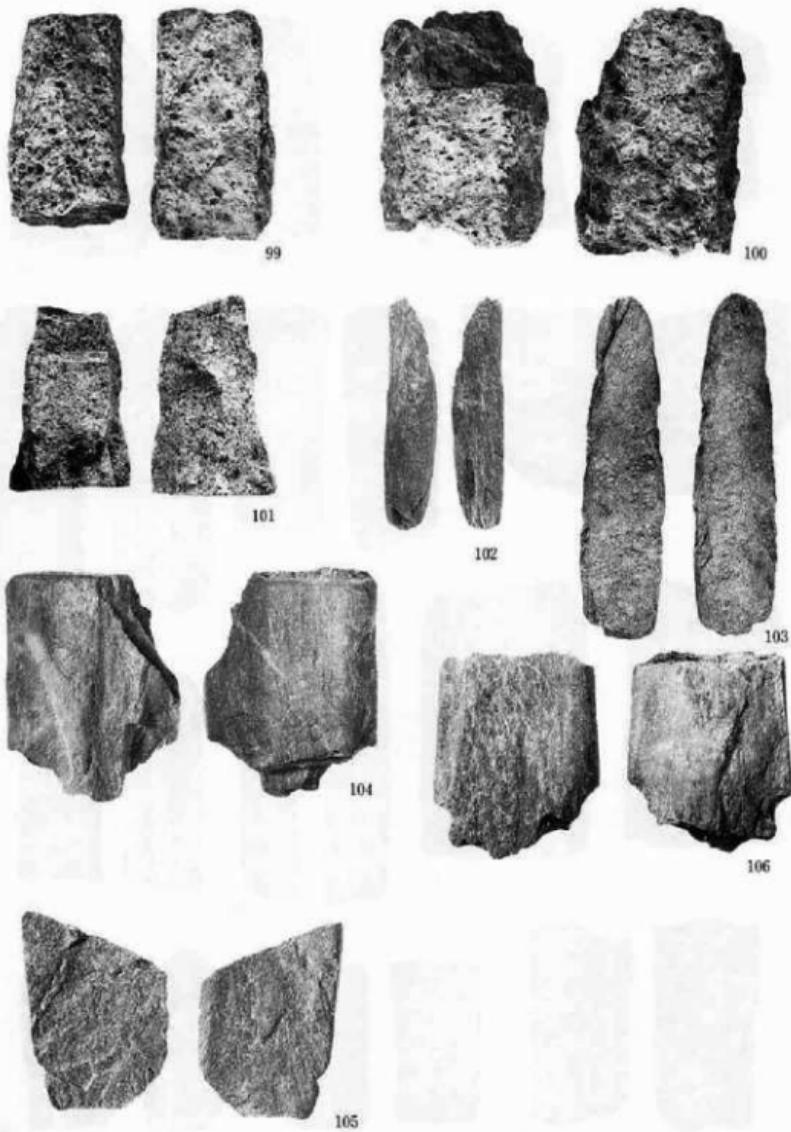


97



98

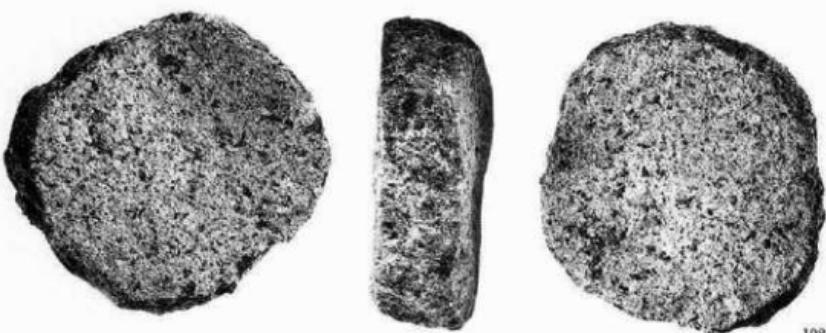
写真図版59 遺構外出土石器(10)



写真図版60 造構外出土石器(11)



107



108

写真図版81 造構外出土石製品

# 黒内 XIII 遺跡

遺跡番号 KE 06-0262

遺跡略号 KN XIII-92

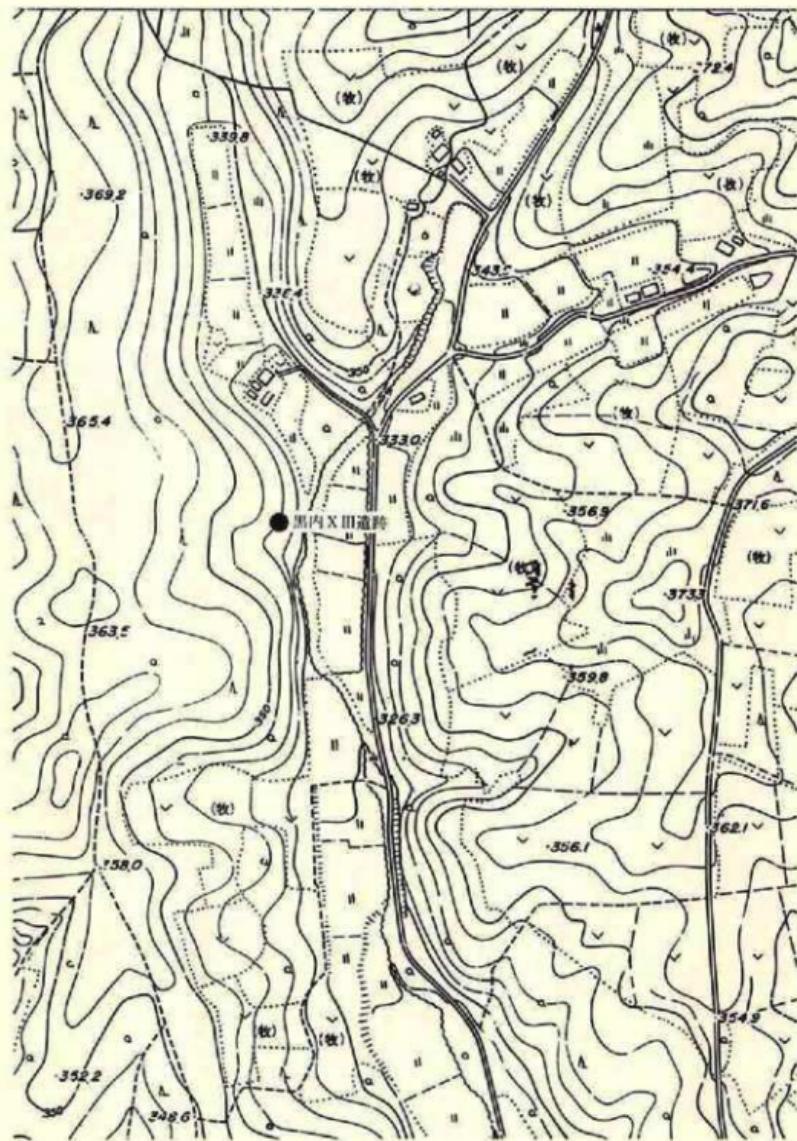
調査面積 1300m<sup>2</sup>

調査期間 平成4年8月1日～11月13日

調査担当者 主任文化財専門調査員 高橋 正之  
期限付専門職員 高橋 英樹



第1図 遺跡位置図



第2図 遺跡周辺の地形図

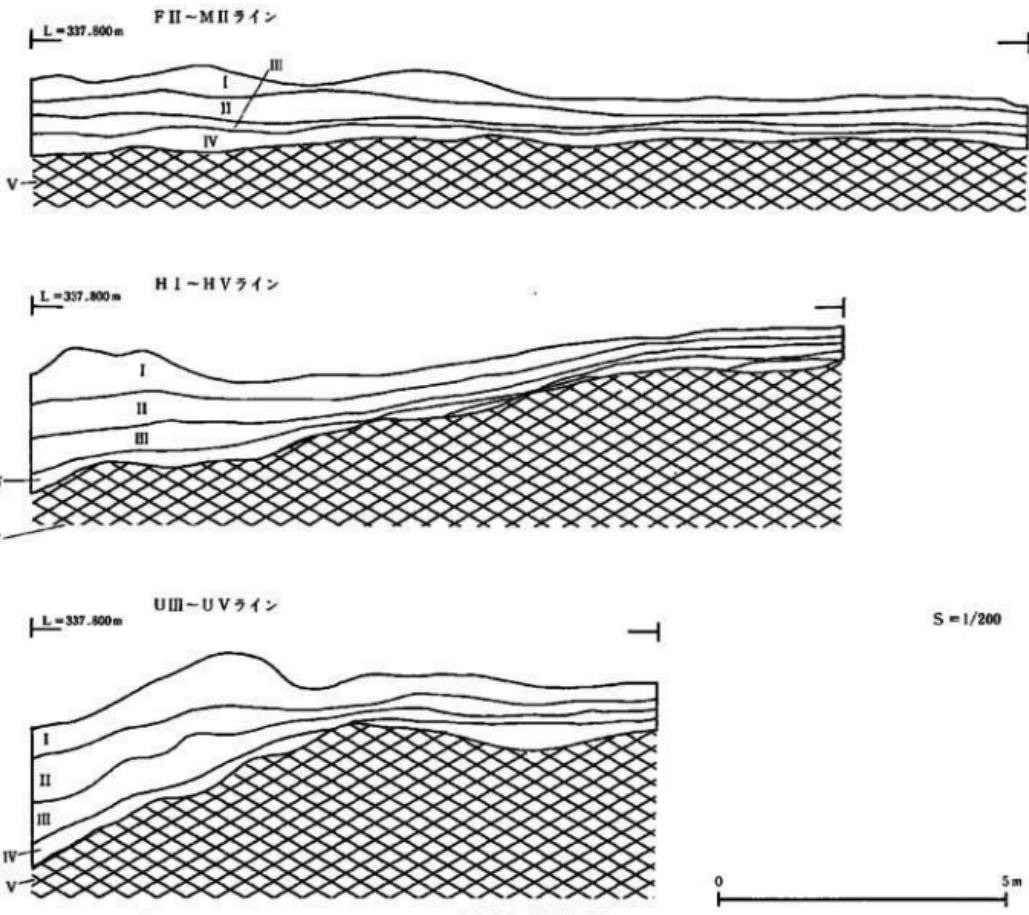
## I 調査に至る経過

## II 遺跡の位置と環境

1. 位置（第1図）
  2. 地形
  3. 遺跡及び周辺の地形（第2図）
  4. 地質
  5. 岩手町の遺物出土地と主な遺跡
  6. 基本層序（第3図）
- 黒内町遺跡の頁で既述しているため省略

調査区域をお互いに直行する形で横断と縦断する土層観察図を作成した。南西寄りの山脈及び東側木谷内川寄りの箇所では開墾時の客土によって層厚が厚くなり、調査区の北側から中央部になるにつれ薄くなり、畑地・牧草地・小農林道の箇所は削平や擾乱が著しい。特に調査区のP II・Q II・R II・U IV・V IVグリッドでは近現代の廃棄物の処理穴が乱掘され、土器は碎片が多く、型式の層位的逆転が観察された。以下各層について概説する。なお本文や表等に記載している遺物の出土層位や検出面などはそれぞれの層序と対応している。

I層	黒褐色土	10 YR 2 / 2	表土層。粘性・湿性を有するが、締まりがなく脆い。層全体に草木根の混入が顕著で、調査区の中央部から北東部にかけては後世の擾乱を受け繩文前期・後期・晚期・近現代の遺物が出土している。層厚 30 ~ 50 cmを測る。
II層	黑色土	10 YR 2 / 1	粘性・湿性ともにあるが、全体に脆くしまりがない。層全体に根毛および若干の繩文土器の細片・剥片等が認められる。調査区の中央部から北東部にかけてIII層との境界が不明瞭である。層厚 20 cmを測る。
III層	暗褐色土	10 YR 3 / 2	粘性・湿性ともにあるが、全体に固くしまっている。層全体に少量の炭化物と遺物を含む。IV層との境界は漸移層である。層厚 15 ~ 20 cmを測る。
IV層	褐色土	10 YR 4 / 4	シルト質で若干湿性あり。層厚 25 cmを測り、大部分の繩文時代の遺構はこの層の上位面で確認されている。



V層 明黄褐色土 10 YR 6 / 6 本遺跡の地山層。粘性・湿性ともにあり。下部に多く小礫を含み、無遺物層である。

### III 調査方法と室内整理

#### 1. グリッド設定(第4図)

黒内Ⅲ遺跡の調査終了後の三ヶ月余の限られた調査日程と調査区域に包含される全ての遺構・遺物の検出を念頭において遺跡の南西部に基準点1を、北東部に基準点2をそれぞれ設け、基準点1と基準点2を結んだ調査用基準ラインを基に $8 \times 8\text{ m}$ の中区画を設定、さらに各々 $4 \times 4\text{ m}$ の小グリッドに細分し、これを本調査の基本単位とした。

細分されたグリッドの呼称は南北方向に南からアルファベットでA～V、東西方向に西からI～VIを付し、これの組み合わせ(J I・K II・L 1・M II….)で表示した。なお黒内Ⅲ遺跡の基準点1、基準点2の平面直角座標第X系による成果値及び杭高(H)は次のとおりである。

基準点1 X = - 459.910 m

Y = 26.326.491 m

H = 337.702 m

基準点2 X = - 401.741 m

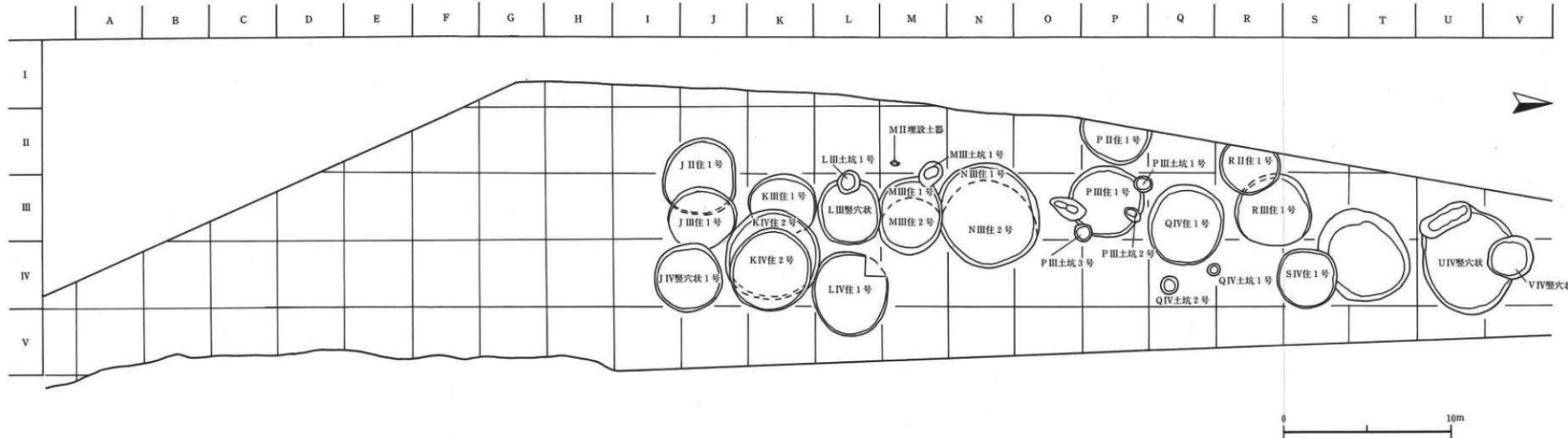
Y = 26.332.847 m

H = 338.335 m

#### 2. 粗掘・精査

粗掘は、当該南北に細長調査区の中央やや南寄りJ I～JVグリッド、北寄りU III～UVグリッドにかけて2m幅でテストレンチを入れ、遺跡全体の把握に努めた。遺跡に包含されるすべての遺構・遺物の検出を目的に原則として人手によって行なったが、立木及び伐採根の多い調査区の西侧斜面部・南側斜面部については重機を可動して表土除去を行ない、粗掘段階での効率化を図った。また重機可動に際しては、調査員とオペレーターの二者間で発掘作業員の安全確保や除去層の厚さ、土捨場の確認、小規模遺構の破壊や遺物の散乱を防止等について事前に打ち合せ、可動時には調査員が立ち合い万全を期した。

以下3. 遺構の命名、4. 実測図の作成、5. 写真撮影、6. 室内整理の項については黒内Ⅲ遺跡で既述しているので省略した。



第4図 黒内XIII遺跡構造配置図

## IV 検出された遺構及び遺物

### 1. 検出遺構

黒内廻遺跡で検出された遺構はすべて繩文時代に属するもので、遺構配置図に見られるように調査区の中央部やや東寄りの緩やかな斜面の周縁に沿って竪穴住居跡 16 棟、竪穴状遺構 4 棟、土坑 9 基、埋設土器遺構 1 基が検出された。

#### (1) 竪穴住居跡

柱穴計測は長軸×短軸×深さ (cm) で記述。

##### J II 竪穴住居跡 1 号 (第 5 図・写真図版 4)

###### 〈位置〉

調査区のやや南東寄り H II 、 H III 、 J II 、 J III グリッドにかけて位置している。

###### 〈検出状況〉

IV 層の上位面で炭化物の細粒を含む黒褐色の不整円形状の広がりを確認し、精査検出。

###### 〈規模・形状〉

抜根及び削平のため東壁が流失しているが 4.25 m × 4.10 m 土の不整円形状のプランを呈するものと推定される。

###### 〈埋土〉

暗褐色土 7.5 YR 3 / 3 、炭化物を微量に含む軟質土、黒色土 7.5 YR 3 / 3 炭化物及び土器破片をふくむ軟質土、極暗褐色土 7.5 YR 2 / 3 焼土粒及び炭化物が混入する軟質土の 3 層により構成されている。

###### 〈床面〉

東側部分は J III 竪穴住居跡 1 号を埋め立て、若干凹凸が認められるが、全体堅く踏みしめられて良好。

###### 〈柱穴〉

周壁に沿って小柱穴 P 1 ~ P 13 が確認されている。P 1 (20 × 18 × 14 cm) 、 P 2 (17 × 16 × 12 cm) 、 P 3 (13 × 12 × 11 cm) 、 P 4 (14 × 12 × 10 cm) 、 P 5 (22 × 22 × 13 cm) 、 P 6 (12 × 11 × 13 cm) 、 P 7 (22 × 22 × 17 cm) 、 P 8 (23 × 21 × 14 cm) 、 P 9 (20 × 8 × 15 cm) 、 P 10 (18 × 18 × 11 cm) 、 P 11 (20 × 17 × 13 cm) 、 P 12 (17 × 16 × 12 cm) 、 P 13 (16 × 15 × 11 cm) を剖る。

### 〈壁〉

西壁・北壁で 28 cm を測り、比較的良好であるが、東壁は流亡が著しく確認できなかった。

### 〈炉跡〉

床面はほぼ中央部に位置し、長軸 48 cm、短軸 43 cm の規模を有する石囲炉である。炉跡内の埋土は多量の炭粒・焼土粒が混入する黒褐色土 (10 YR 2 /)、3 ~ 5 cm の小礫・炭化物を含む黑色土 (10 YR 2 / 1)、粗砂を含む焼土。

### 〈重複〉

本住居跡東側床面の一部が軟弱で、JIII 穫穴状遺構の西側部分を一部埋め立て、構築されたものと考えられる。

### 〈出土遺物〉

第 6 図 1・写真図版 24-1 の半完形土器、第 7 図 3・写真図版 65-3 の石皿が床面より出土している。第 6 図 1 は口縁部が急激に内傾屈曲する鉢形土器の精製品で、口唇部には二条の沈線間に連続刻目文が付され、上面觀を意識した装飾が施されている。体部文様帯は磨消手法によって大腿骨文が展開し、上限は口辺部に巡らされた二条の沈線によって占されている。現存部器高 5 cm、推定口径 18 cm、器厚 0.5 cm を測り、体部地文は原体 RL によって施されている。東裏遺跡鉢形土器第 2 類に類似し、大洞 C<sub>1</sub> 式に比定されるものと考えられる。出土石器は剥片石器 2 点、石皿 1 点である。第 7 図 1 は表裏両面に大きく剥離面を残し「U」状を呈する先端部および周縁部位にわずかに調整痕が観察される。2 は先端部および直線的な一側辺に鋭利な刃部が作出されている。

第 7 図 3 は安山岩を素材とした石皿で、凹状の中央部位には同心円状の擦痕が顕著に観察される。

### 〈時期〉

床面出土の土器などから縄文晩期大洞 C<sub>1</sub> 式のものと推定される。

### JIII 穫穴住居跡 1 号 (第 8 図・写真図版 4)

#### 〈位置〉

JII 穫穴住居跡 1 号と隣接し、III、JIII グリッドにかけて位置している。

#### 〈検出状況〉

IV 層上位面で JII 穫穴住居跡と重複する微量の炭化物を含む暗褐色土の不整円形状の広がりを確認し、精査検出した。

#### 〈規模・形状〉

東壁部分が流亡しているが、4.1 m × 3.78 m の不整橈円形状を呈する。

### 〈埋土〉

炭化物を含むやや軟質の暗褐色土 (7.5 YR 3 / 4)、やや粘性・湿性のある黒褐色土 (7.5 YR 3 / 2)、粗砂及び明褐色土がブロック状に混入する黒褐色土 (7. YR 2 / 2) の 3 層によって構成されている。

### 〈床面〉

東南に向かって若干の凹凸が認められるが、概ね平坦でよく踏みしめられている。

### 〈壁〉

壁高 6 cm ~ 10 cm 土で、西壁・北壁の一部が確認された。残存状態はよくないが、柱穴の配列からおよその壁ラインが推定できた。

### 〈柱穴〉

周壁に沿って小柱穴 P1 ~ P7 が確認されている。P1 (22 cm × 18 cm × 15 cm)、P2 (18 cm × 17 cm × 11 cm)、P3 (17 cm × 16 cm × 13 cm)、P4 (12 cm × 11 cm × 12 cm)、P5 (12 cm × 12 cm × 9 cm)、P6 (10 cm × 9 cm × 10 cm)、P7 (22 cm × 20 cm × 16 cm) をそれぞれ測る。

### 〈炉跡〉

床面中央やや東寄りに若干の焼土が確認され、地床炉的なものと推定される。

### 〈重複〉

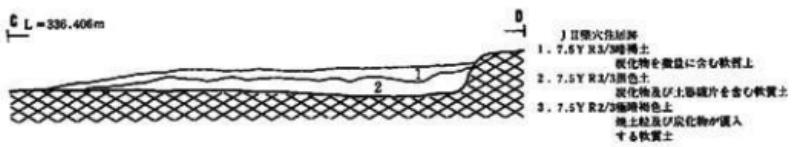
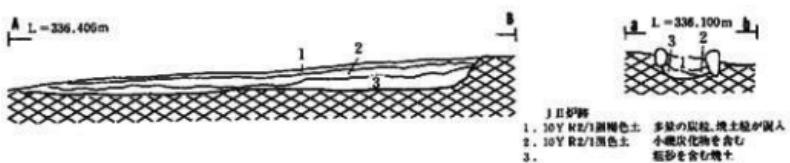
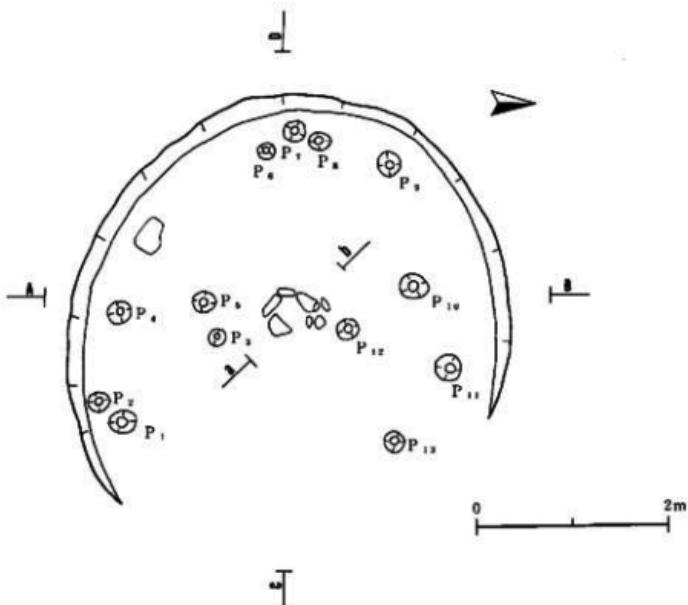
JII 壁穴住居跡 1 号によって東側部分の一部が埋め立てられている。

### 〈出土遺物〉

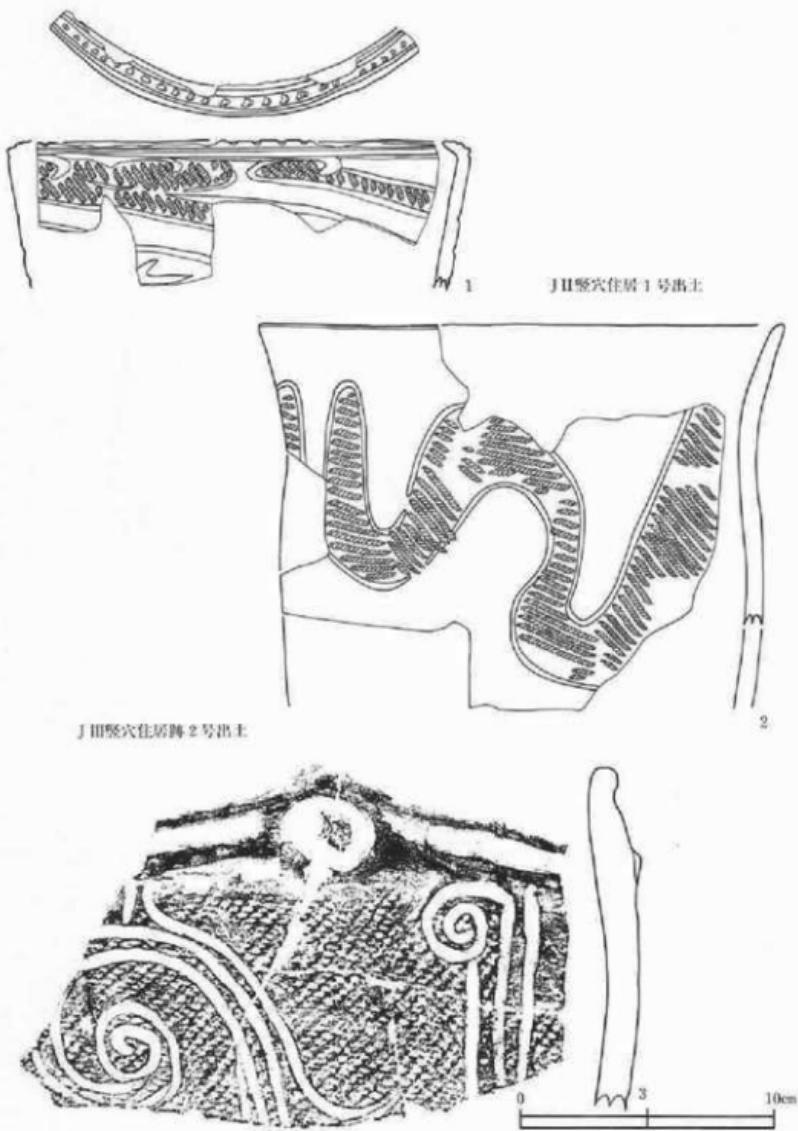
第 6 図 2、3・写真図版 24-2、3 の土器のほかに石篋・石匙、小剝片が若干出土している。第 6 図 2 は胴央部が膨らむ口縁外反の深鉢形土器で、胴部上半には沈線と磨消手法による繩文帶曲線区画文が横 S 字状に展開しているのが特徴である。なお体部地文は原体 LR によって付されている。口径 20.6 cm、現存部器高 15 cm、器厚 0.8 cm を測り、胎土・焼成ともに良好で堅緻な作りである。

第 6 図 3 はやや内湾気味の深鉢形土器で、肉厚の口縁部は入念に整形された凹状の隆起線とこれに連絡する耳状の渦巻文によって装飾されている。体部文様は太い溝線文で懸垂文、縦方向にセンマイ状に渦巻文、曲線文が複合的に施され、文様効果を強調している。なお体部地文は原体 RL によって付されている。

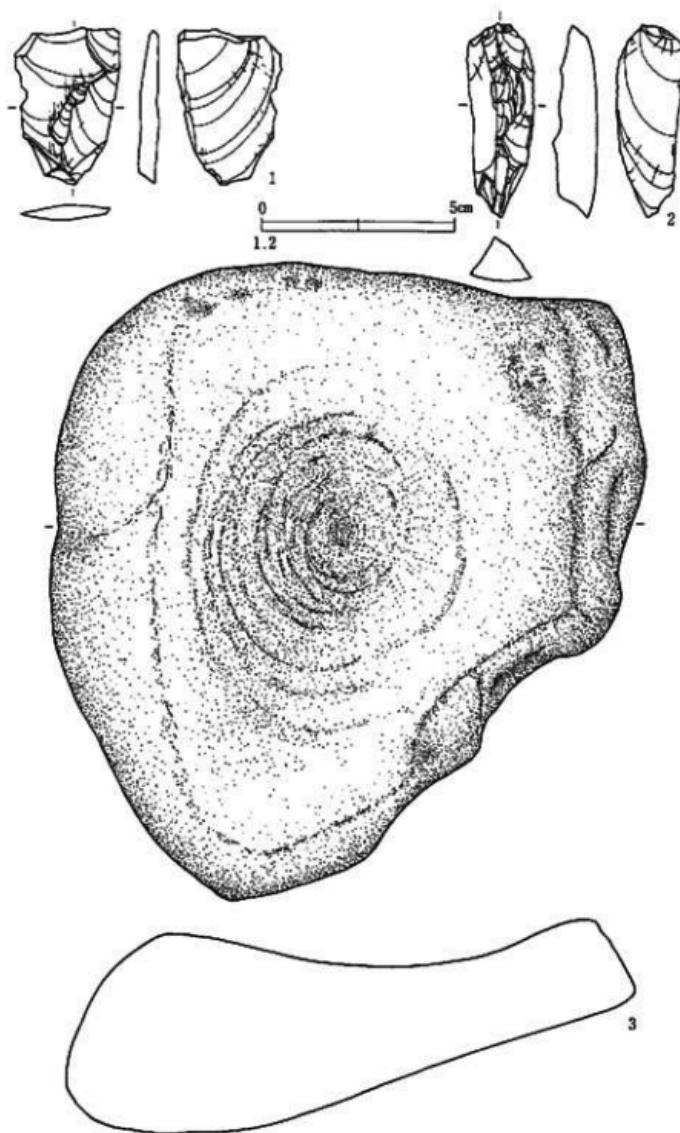
出土石器は剝片石器 2 点、磨石 1 点である。第 9 図 1 は嘴状を呈する先端部位に僅かに剥離調整がなされ搔器的機能を有したものと考えられる。2 は長台形状を呈し、直線的な底辺部に片面剥離加工を施し、角度のある鋭い刃部を作り出している。両側の調整などから削搔器的機能を有したものと考えられる。3 は両輝石安山岩を素材とした磨石で表裏両面に磨耗した平坦部を有している。



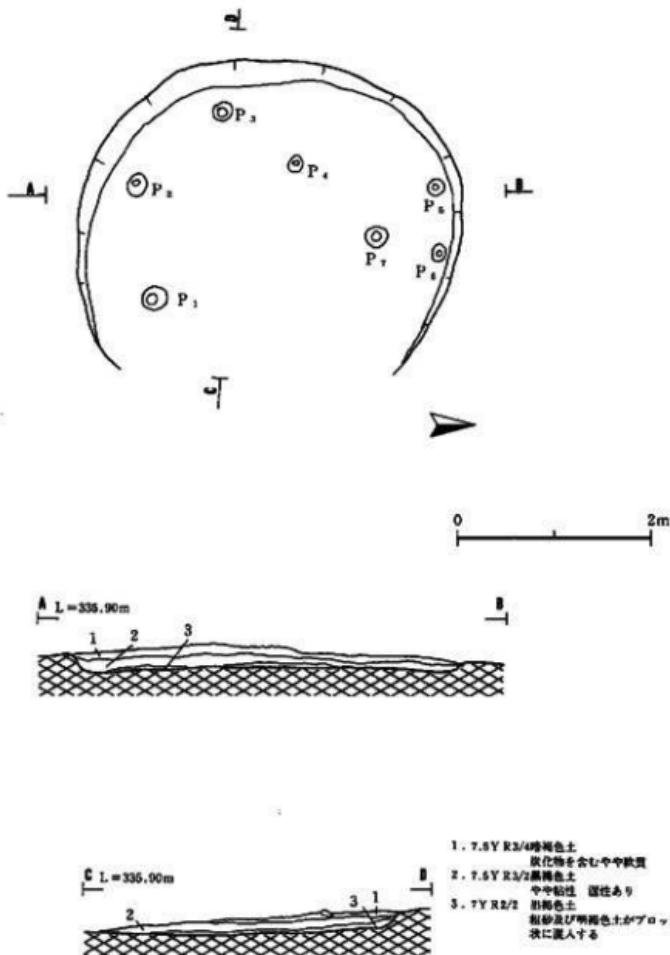
第5図 J II 突穴住居跡 1号



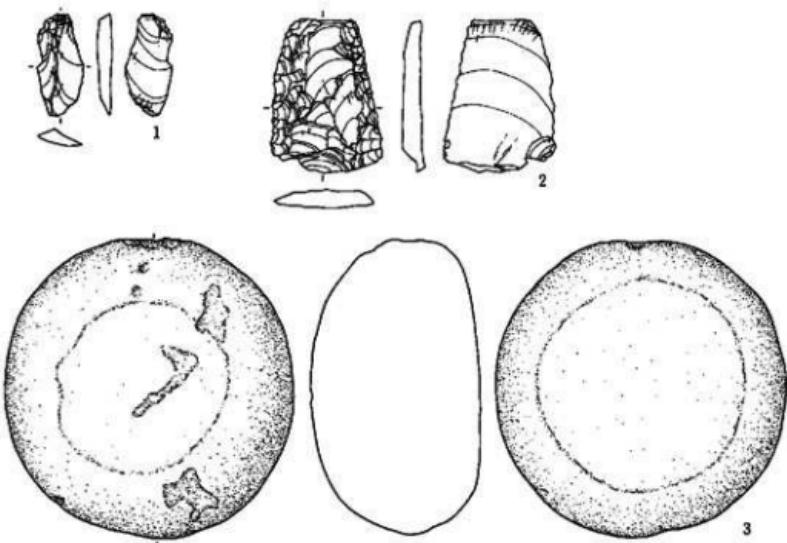
第6図 JII竪穴住居跡1号 JIII竪穴住居跡1号 出土遺物 土器



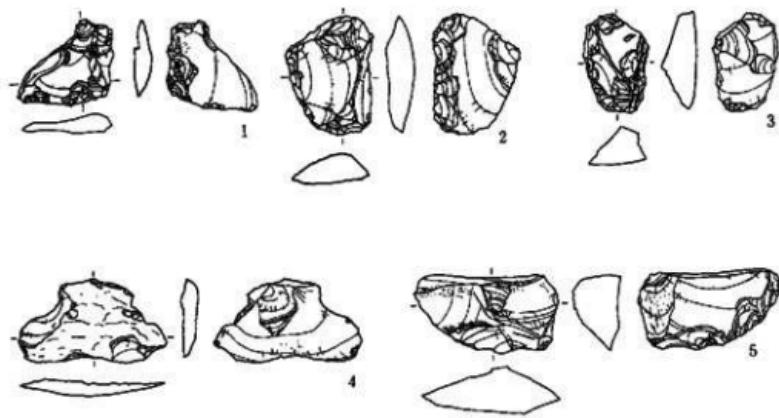
第7図 J II 竪穴住居跡 1号 出土遺物 石器



第8図 JIII 竪穴住居跡1号



J III 垂穴住居跡 1 号出土石器



J IV 垂穴状造構 1 号出土遺物石器

0 5cm

第 9 図 J III 垂穴住居跡 1 号、J IV 垂穴状造構 1 号出土遺物石器

〈時期〉

埋土3層中の出土土器などから中期中葉～後葉（大木8b式～10式）のものと推定される。

KIII堅穴住居跡1号（第10図・写真図版4）

〈位置〉

KIIIグリッドのほぼ中央に位置し、JIII堅穴住居、KIV堅穴住居跡1号・2号に隣接した。

〈検出状況〉

IV層上位面で粗砂及び炭化物を微量に含む黒色土の楕円形状の広がりを確認し、精査検出した。

〈形状・規模〉

抜根等で若干削平されているが、4.3m×3.6m土の楕円形状のプランを呈するものと考えられる。

〈埋土〉

粗砂・炭化物を微量に含む黒色土（7.5YR2/1）、微量の焼土粒を含む軟質の暗褐色土（7.5YR3/3）、粘性・湿性のある黒褐色土（7.5YR3/2）の3層によって構成されている。

〈床面〉

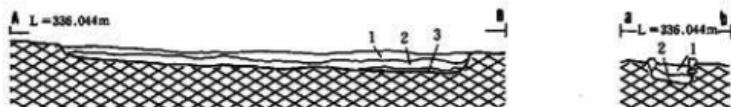
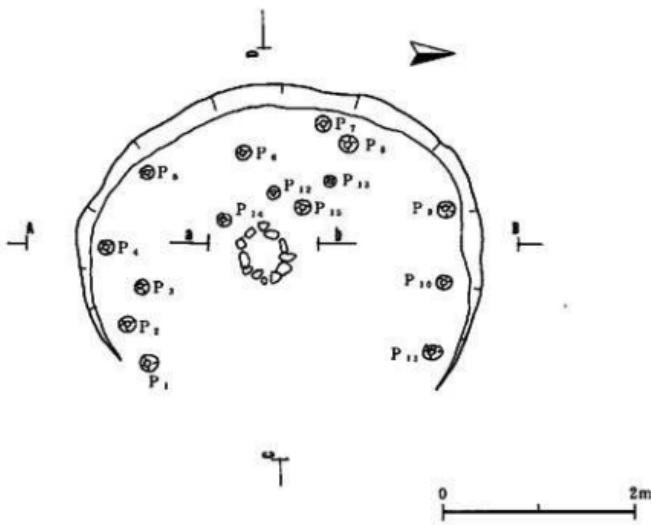
凹凸はさほどないが、全体的に軟弱で、西側の一部は粗砂混じりの黄褐色土でよく踏みしめられている。

〈壁〉

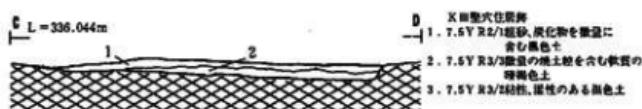
西壁、北壁は残存状態もよく、床面より緩やかな立ち上がりを示し、10cm～15cm土を測る。

〈柱穴〉

周壁に沿ってP1～P14が確認されている。P1（14cm×13cm×11cm）、P2（11cm×10cm×10cm）、P3（12cm×10cm×8cm）、P4（12cm×12cm×8cm）、P5（11cm×11cm×8cm）、P6（12cm×11cm×9cm）、P7（9cm×8cm×13cm）、P8（12cm×11cm×12cm）、P9（13cm×10cm×12cm）、P10（11cm×11cm×12cm）、P11（9cm×8cm×14cm）、P12（7cm×7cm×11cm）、P13（12cm×12cm×13cm）、P14（9cm×8cm×12cm）を測る。

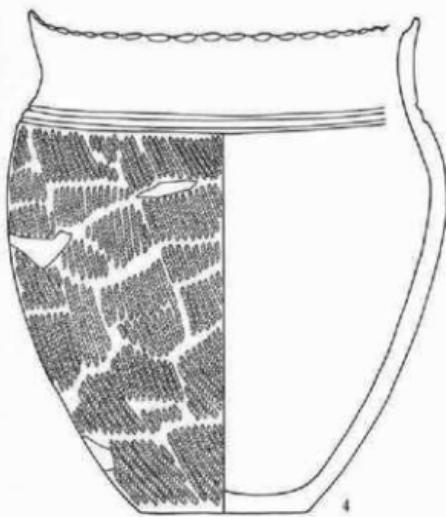


K III H-1号跡  
 1. 10Y R3/2褐色土 地上及び炭化物の混入する  
 2. 10Y R3/4褐色土 稲穂、破土の混入する

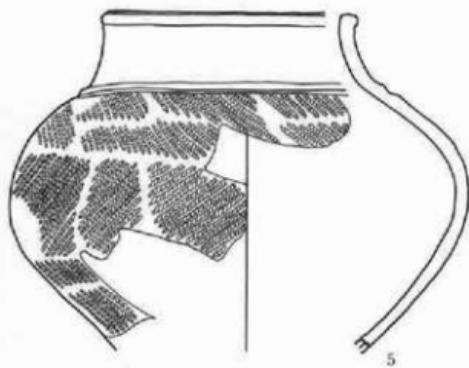


K III 垂穴住居跡  
 1. 7.5Y R2/1紅褐色土 炭化物を微量に含む褐色土  
 2. 7.5Y R3/3微黄の粘土質を含む軟質の  
 黄褐色土  
 3. 7.5Y R3/2粘性、塑性のある褐色土

第10図 K III 垂穴住居跡1号



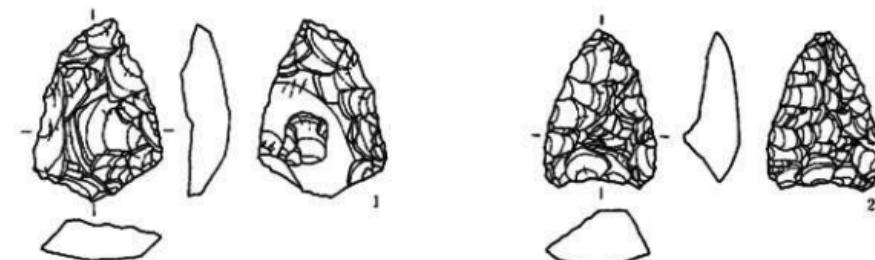
4



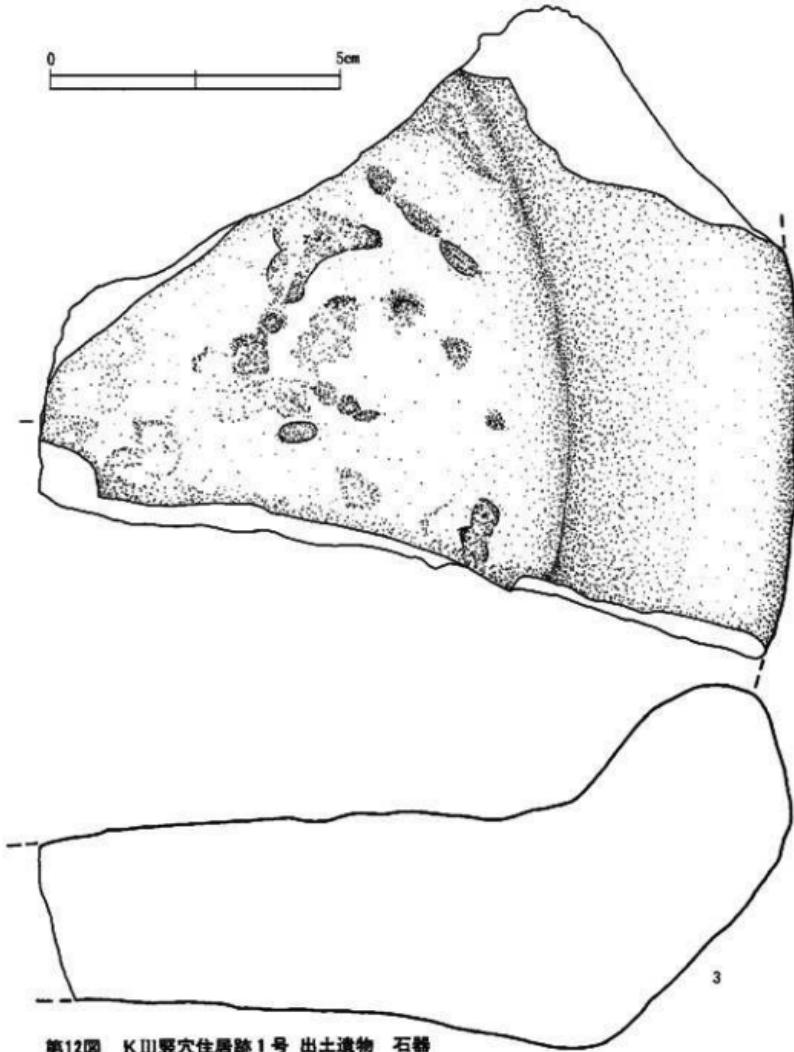
5

0 10cm

第11図 KIII竪穴住居跡1号 出土遺物 土器



0 5cm



第12圖 KIII 穹穴住居跡 1号 出土遺物 石器

#### 〈炉跡〉

床面のほぼ中央に位置し、5cm～10cm土の礫を梢円形状に整然と配列し、長軸61cm、短軸42cmを測る。炉跡内の埋土は焼土及び炭化物の混入する黒褐色土(10 YR 3/2)、粗砂・焼土の混入する暗褐色土(10 YR 3/4)の2層によって構成されている。

#### 〈重複〉

KIV堅穴住居跡1号、KIV堅穴住居跡2号の一部を埋め立て構築されている。

#### 〈出土遺物〉

第11図4、5・写真図版25-1、2の他に若干の晩期土器破片、石匙・石皿・剝片が出土している。

第11図1は口縁がやや外反気味に直上する壺形土器の精製品で、口部が鐘状工具等により入念な削ぎ取りの整形手法によって彫刻的に仕上げられ、小波状を呈している。無文化された幅の広い口縁下部には二条の平行沈線が付され、条の長い体部地文帯(原体RL)とを画している。器高19.7cm、口径15.2cm、底径6.4cm、器厚1.2cmを測り、胎土・焼成とともに良好で堅緻なつくりである。

第11図2は無文・研磨の口類部がやや外反気味に内傾する広口壺形土器の精製品で、口頭基部は若干の張り出しと沈線によって段差が認められ、体部文様帯との明瞭な境界線が示されている。体部には縦横回転によって施文された整然とした帯状の羽状繩文が付されている。器高13.2cm、口径10.0cm、器厚0.7cmを測る。胎土・焼成とともに良好で堅緻な作りである。

出土石器は石鎌2点、石皿1点である。第12図1は菱形状を呈する石鎌で両面削離加工によって整形されている。茎部の形状等から未完成品とも考えられる。2は二等辺三角形状の抉り部を有する無茎鎌で、両面調整加工が入念に施されている。3は扁平疊の周縁に入念な縁取りを施した石皿の破損品で、安山岩を素材としている。

#### 〈時期〉

床面出土の土器などから晩期後半大洞C<sub>2</sub>式のものと推定される。

#### KIV堅穴住居跡1号(第13図・写真図版5)

##### 〈位置〉

調査区の中央やや東寄りの緩やかな斜面部JIVグリッド・KIVグリッド・KVグリッドにかけて位置している。

##### 〈検出状況〉

IV層上位面でKIII堅穴住居跡1号と西側部分で接する不整円形状の暗褐色土の広がりを確認し、精査検出した。

#### 〈規模・形状〉

不整円形状のプランを呈し、5.12 m × 4.93 m を測る。

#### 〈埋土〉

炭化物及び焼土粒を微量に含む暗褐色土 (7.5 YR 3 / 3)、炭化物及び粗砂を多量に含むやや軟質の極暗褐色土 (7.5 YR 4 / 4) の3層によって構成されている。

#### 〈床面〉

粗砂を含む褐色粘性土で貼床されているが、全体的に軟弱である。

#### 〈壁〉

緩やかなカーブを描いて立ち上がり、残存状況も良好である。壁際の所々に繩文土器片が確認される。西側で壁高 25 cm ~ 30 cm 土を測る。

#### 〈柱穴〉

柱穴と考えられる小柱穴は周壁に沿って P 1 ~ P 15 が確認されている。P 1 (20 cm × 17 cm × 18 cm)、P 2 (18 cm × 18 cm × 15 cm)、P 3 (22 cm × 21 cm × 16 cm)、P 4 (18 cm × 15 cm × 12 cm)、P 5 (20 cm × 19 cm × 14 cm)、P 6 (18 cm × 16 cm × 16 cm)、P 7 (22 cm × 21 cm × 18 cm)、P 8 (20 cm × 16 cm × 15 cm)、P 9 (21 cm × 16 cm × 20 cm)、P 10 (22 cm × 19 cm × 15 cm)、P 11 (17 cm × 16 cm × 11 cm)、P 12 (17 cm × 14 cm × 12 cm)、P 13 (21 cm × 21 cm × 15 cm)、P 14 (21 cm × 16 cm × 14 cm)、P 15 (21 cm × 20 cm × 17 cm) を測る。

#### 〈炉跡〉

床面中央やや西寄りに位置し、5 cm ~ 10 cm ほどの円暈を精円形状に二重に整然と配列した石圓炉で、長軸 40 cm、短軸 25 cm を測る。炉跡内の埋土は焼土を多量に含む黒褐色土 (7.5 YR 3 / 2)、微量の炭化物および粗砂混入する暗褐色土 (7.5 YR 3 / 4) の3層によって構成されている。

#### 〈重複〉

KIV 穴住居跡 2 号を全体埋め立て、構築されている。

#### 〈出土遺物〉

第 14 図 6・8・写真図版 26-1・2 の粗製深鉢形土器、第 14 図 7・写真図版 27-1 鉢形土器の精製品、広口壺形土器、台付浅鉢形土器、平柿状小形土器が出土している。

第14図6は口縁部がやや内湾気味に立ち上がる粗製の深鉢形土器で、口唇部上端部はやや丸みをもって入念な整形が施されている。現存部器高25.0cm、口径36.0cmを測り、体部地文は原体LRによって施されている。第14図8は口縁部及び胴下部を欠損するが、この粗製深鉢形土器とほぼ同形のものと推定される。

第14図8は粗製深鉢形土器の胴下部で地文は原体LRによって施されている。現存部器高8.5cm、口径18.0cmを測る。第15図15は胴下部を欠損する深鉢形土器で、やや外反気味に直する肉厚口縁を有し、体部地文は原体LRによって施されている。現存部器高12.3cm、口径14cmを測る。

第14図7は鉢形土器の精製品で、やや内湾気味に立ち上がる口縁を有し、幅の狭い口辺部は二条の平行沈線によって加飾され、階段状に入念に整形されている。体部文様は帯繩文とでもいうべき条の長い地文が原体RLによって施されている。色調はにぶい橙色を呈し、器高10.5cm、口径10cm、底径4.4cm、器厚0.4cmを測る。

第15図14は胴上部を欠損するため、口縁部の形状等は把握できないが、底部周縁が外に大きく張り出し、台付に似た様相を呈している。なお体部地文は原体LRによって施されている。

第14図9は口縁部を欠損するが、口頭部がやや外反気味に内傾する広口壺形土器の様相を呈するものと推定される。頭基部に二条の平行する沈線が付され、体部に施された横位回転による整然とした帯状の羽状繩文文様帶の上限を画している。胎土・焼成とともに良好で堅緻な作りである。現存部器高9.2cm、底径6.2cmを測る。

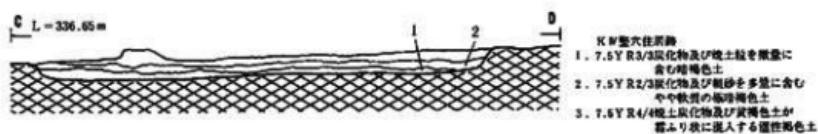
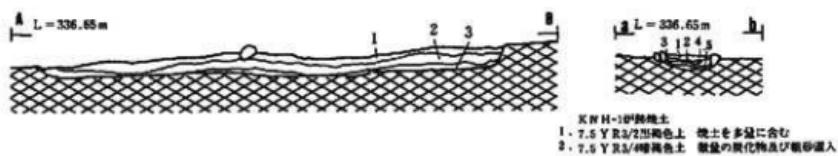
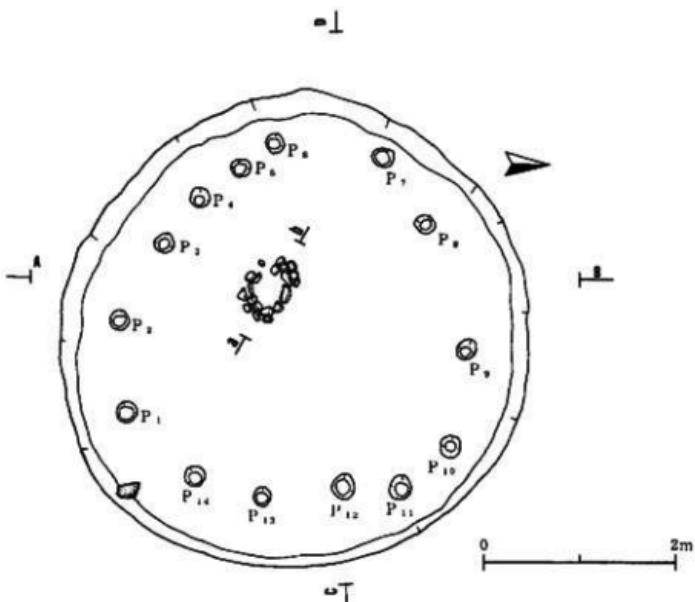
第15図12は口縁部を欠損するが、器高及び肩部（胴上部）の張り出しの度合いなどからカメ形土器に近い器種のものと推定される。体部文様帶は、前述の広口壺形土器と同様、横位回転によって施された帯状の整然とした羽状繩文が付されている。

第14図10は脚部からやや内湾気味に緩やかなカーブを描いて立ち上がる台付浅鉢形土器で、表裏両面が入念に無文研磨され光沢を有する精製品である。

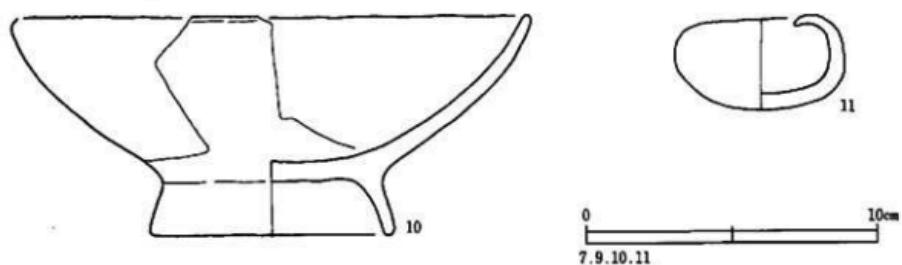
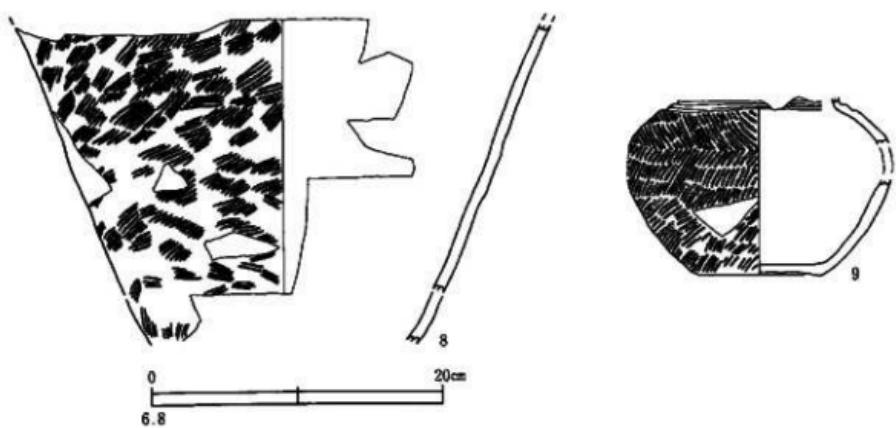
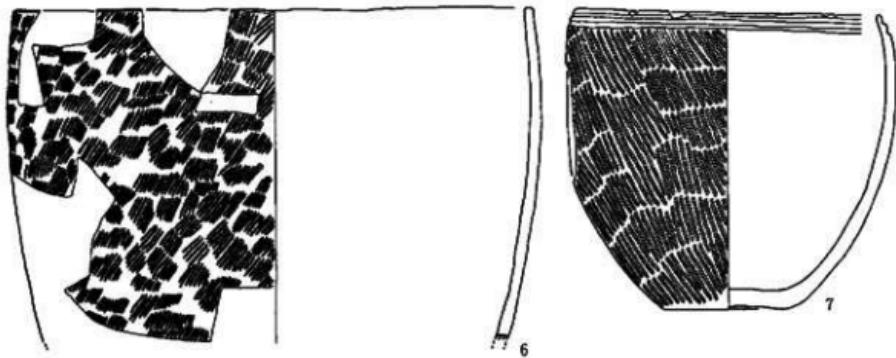
第14図11は胴下部から半月状に立ち上がる平柿状の小形土器で器表面は丁寧に無文研磨され、光沢を有する。器高3.3cm、口径2.3cm、底径1.0cmを測り、胎土・焼成とともに良好で堅緻な作りである。

出土石器は石鎌3点、剥片石器5点、石窓1点、石棒1点、石剣1点である。第16図1は有茎鎌で両面加工によって調整されている。2は二等辺三角形状を呈する無茎鎌で両面からの入念な剥離加工が施されている。

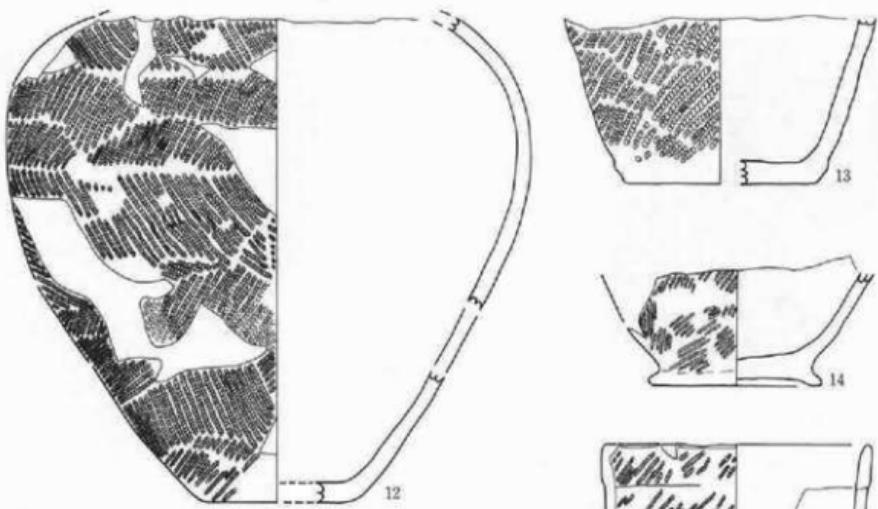
3は全体として柳葉形を呈し、先端部を欠損するが、両面に入念な調整加工が施されている。4、5はいずれも小剥片石器で、先端部位に両面加工を施して鋭利な嘴状刃部を作出している。6は扁平緩長の剥片を素材にその先端部位両面に粗雑な加工を施して機能刃部を作出している。



第13図 K N 穴住居跡 1号



第14図 KIV堅穴住居跡1号 出土造物 土器(1)



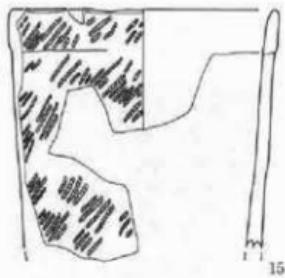
0 10cm



16



17



15



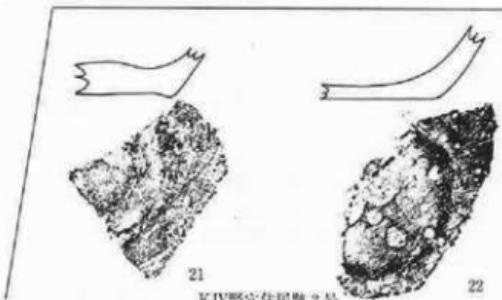
18



20



19

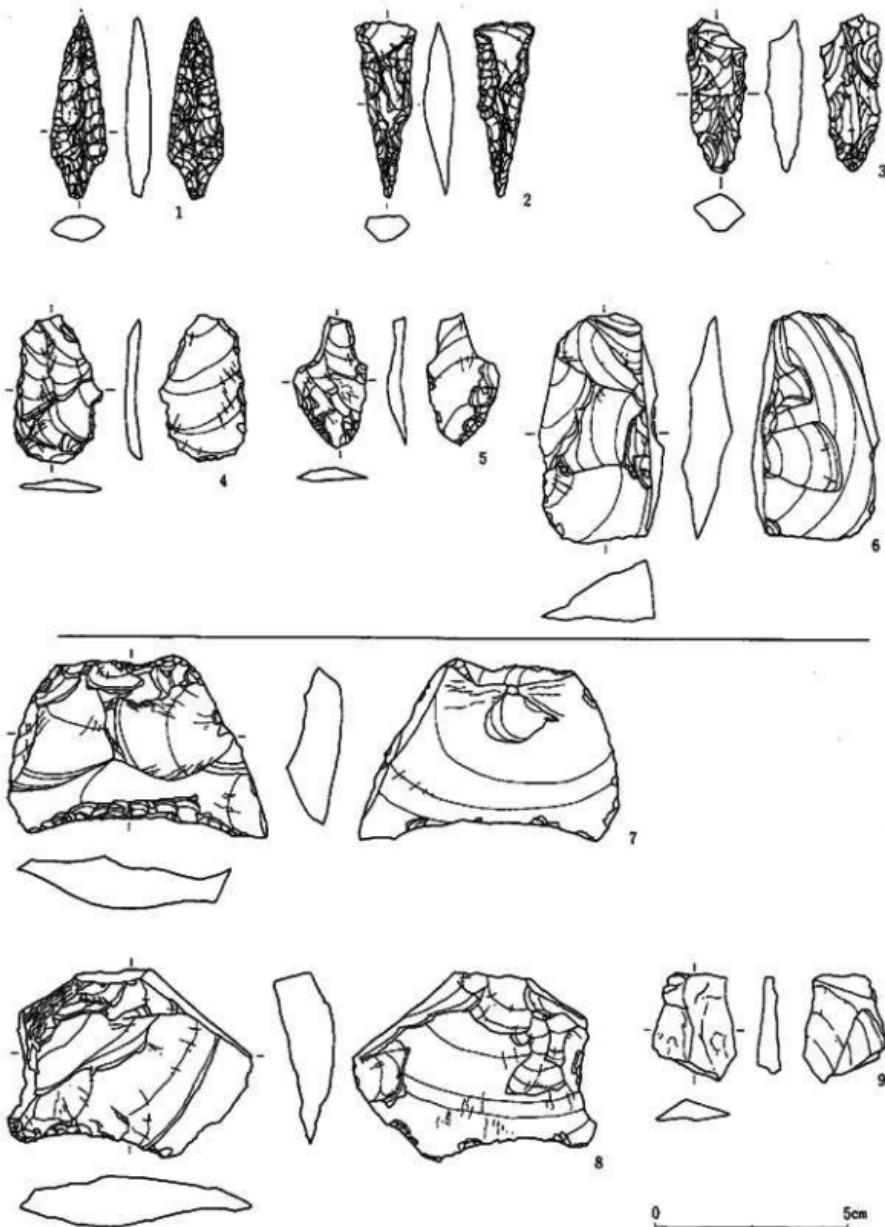


21

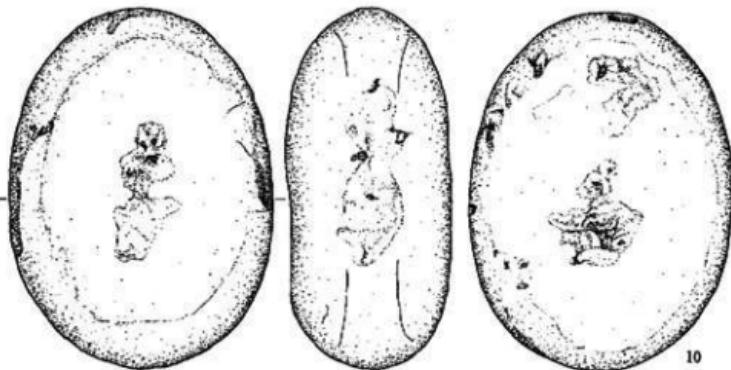
22

KIV vertical-pit dwelling site 2

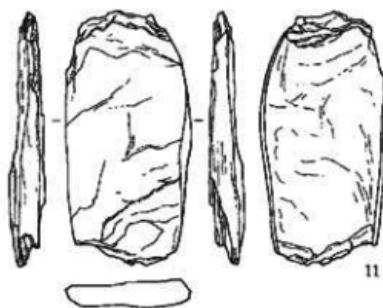
Figure 15: KIV vertical-pit dwelling site 1 and 2出土遗物 土器(2)



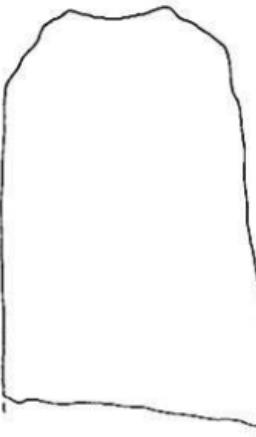
第16圖 KIV堅穴住居跡1号出土遺物 石器(1)  
L IV堅穴住居跡1号出土遺物



0 5cm  
10.11



11



0 10cm  
12

第17图 KIV竖穴住居跡1号 出土造物 石器(2)

る。

刃部の形状などから石鎧の機能が想定される。8、9は扁平剝片の一辺に比較的細かい片面加工を施し、内湾状の機能刃部を作り出している。

10は梢円形状扁平礫の表裏面にそれぞれ凹状の痘痕が観察される凹石である。

17図11は両側面に鋭利な両刃が作り出された石劍で、先端部位に磨滅痕が観察される。

17図12は全体が円筒状に入念な調整加工が施され、その先端部位には小円形状のつまみ様突起を有している。

#### 〈時期〉

完形・半完形の出土土器などから縄文晚期後葉大洞C<sub>2</sub>式相当のものと推定される。

### KIV堅穴住居跡2号（第18図・写真図版6）

#### 〈位置〉

調査区の中央やや東寄りの緩やかな斜面部JIII・KIII・KIVグリッドにかけて位置し、KIV堅穴住居跡1号と折り重なっている状態である。

#### 〈検出状況〉

KIV堅穴住居跡1号の粗砂を含むやや軟弱な褐色粘性土の床面を断ち割り、その存在を確認し、精査検出した。

#### 〈規模・形状〉

不整円形状のプランを呈し、5.43m×5.12mを測る。

#### 〈埋土〉

炭化物及び焼土を微量に含む暗褐色土（10YR3/4）、粗砂及び炭化物が多量に含まれる黒褐色土（10YR2/3）、炭化物を含むやや軟質の褐色土（10YR4/4）の3層によって構成されている。

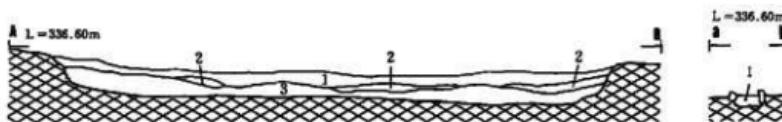
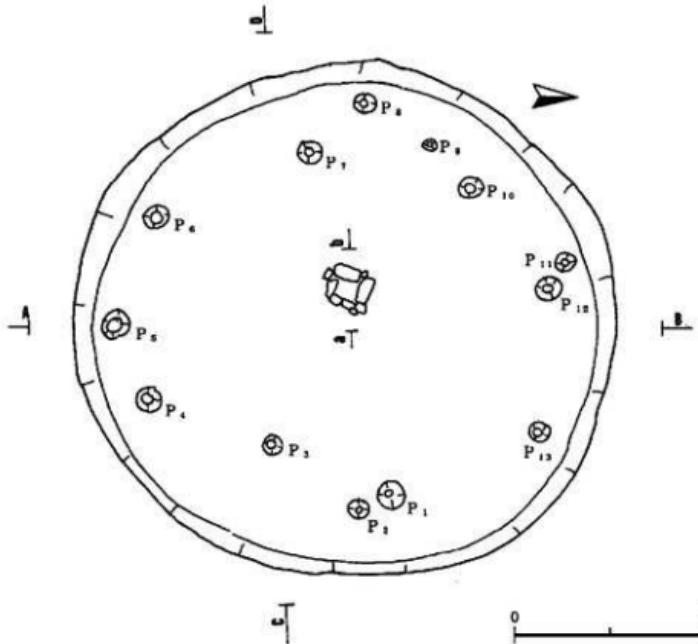
#### 〈柱穴〉

柱穴と推定される小ピットp1～p13が検出されている。p1（20cm×18cm×16cm）、p2（14cm×12cm×7cm）、p3（12cm×11cm×10cm）、p4（20cm×20cm×16cm）、p5（22cm×21cm×15cm）、p6（17cm×16cm×12cm）、p7（16cm×15cm×10cm）、p8（15cm×14cm×6cm）、p9（7cm×7cm×8cm）、p10（18cm×17cm×11cm）、p11（14cm×14cm×9cm）、p12（16cm×14cm×12cm）、p13（14cm×12cm×8cm）をそれぞれ測る。

#### 〈床面〉

若干周壁際に凹凸が認められるが、概ねよく踏みしめられ良好である。

#### 〈壁〉



KIV H-25号  
1. 7.5Y R3/2深褐色土 岩土及び炭化物を多量に含む



1. 10Y R3/4炭化物及び岩土を多量に含む暗褐色土
2. 10Y R3/3砂及び炭化物が多量に含まれる深褐色土
3. 10Y R4/4炭化物を含むやや軟質の褐色土

第18図 KIV 竪穴住居跡 2号

全体的に保存状況は良好で、西壁で 25 cm～30 cm 土、東壁で 10～15 cm 土を測る。

#### 〈炉跡〉

床面中央やや西寄りに位置し、角礫を「ロ」字状に配した石囲炉で長軸 42 cm 土、短軸 35 cm 土を測る。なお炉跡内の埋土は単層で焼土及び炭化物を多量に含む黒褐色土 (7.5 YR 3/2) である。

#### 〈重複〉

KIV 壺穴住居跡 1 号構築の際にはほぼ全面が埋め込まれている。

#### 〈出土遺物〉

第 15 図 21・22 の縄文土器の若干の細片と石鏃 2 点が出土している。第 15 図 21 は原体 LR によって施された地文のみの粗製の深鉢形土器で、底面がやや揚底風に整形されている。胎土・焼成とともに不良で脆弱な作りである。第 15 図 22 は底部破片で、入念に整形研磨され揚げ底風に仕上げられている。胎土・焼成とともに良好で堅緻な作りである。

#### 〈時期〉

埋土内の底部破片などから縄文晩期 (KIV 壺穴住居跡 1 号よりも古い) に相当するものと考えられる。

### LIV 壺穴住居跡 1 号 (第 19 図・写真図版 6)

#### 〈位置〉

調査区の中央東寄り緩斜面 LIV・LV・MIV グリッドにかけて位置している。

#### 〈検出状況〉

IV 層上位面で炭化物及び微量の焼土・粗砂を含む極暗褐色土の不整梢円形状の広がりを確認し、精査検出した。

#### 〈規模・形状〉

5.10 m × 4.5 m 土の不整梢円形状のプランを呈する。

#### 〈埋土〉

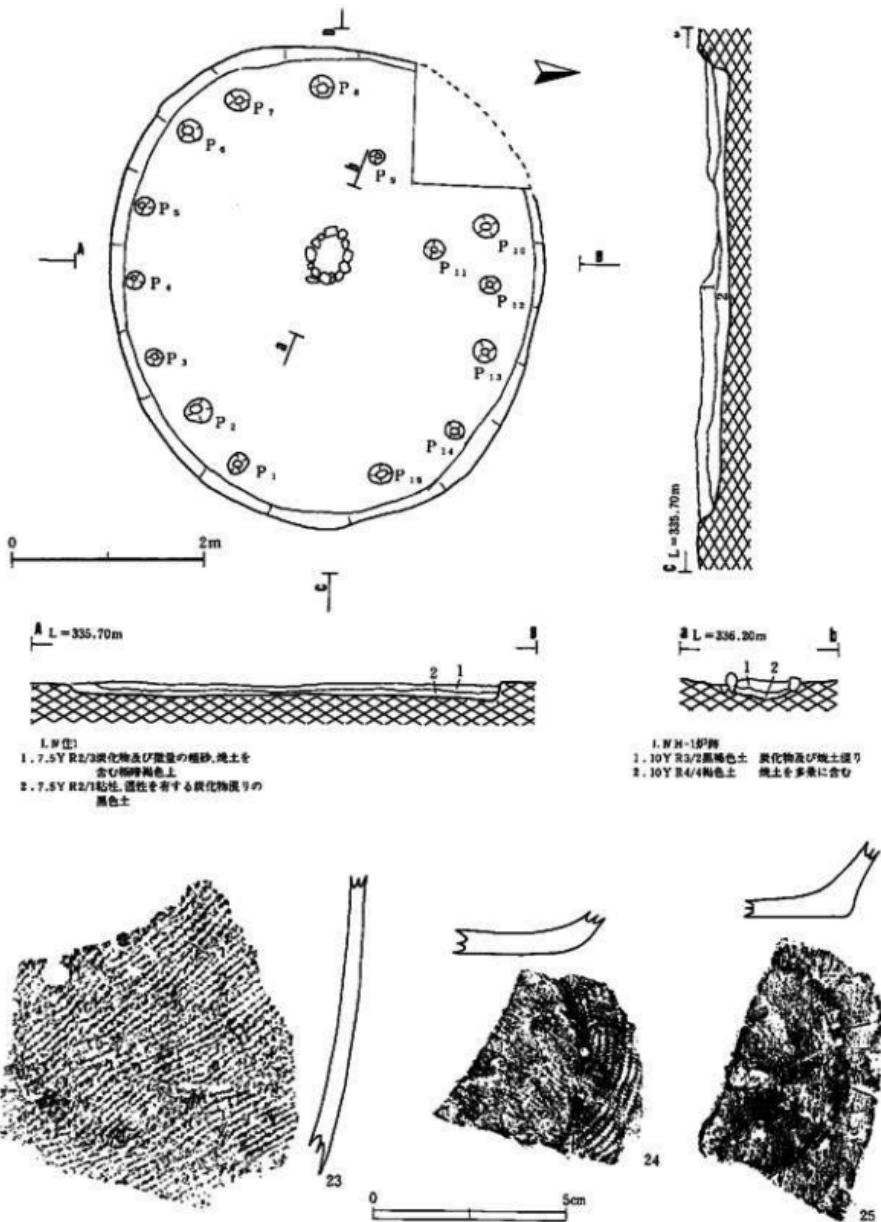
炭化物及び微量の粗砂・焼土を含む極暗褐色土 (7.5 YR 2/3)、粘性・湿性を有する炭化物混じりの黒色土 (7.5 YR 2/1) の 2 層によって構成されている。

#### 〈床面〉

周壁薦及び炉跡周辺では若干堅く踏みしめられているが、全体的に軟弱である。

#### 〈壁〉

深掘によって北西壁の一部を欠損するが、西壁・北壁はほぼ垂直に近い立ち上がりを見せ、15 cm～20 cm 土を測る。残存状況は全体的に良好である。



第18図 L.W.1号

#### 〈柱穴〉

柱穴状のビットは周壁に沿って p 1 ~ p 15 が検出されている。p 1 (18 cm × 17 cm × 11 cm)、p 2 (20 cm × 17 cm × 9 cm)、p 3 (15 cm × 12 cm × 10 cm)、p 4 (17 cm × 15 cm × 12 cm)、p 5 (13 cm × 12 cm × 8 cm)、p 6 (18 cm × 16 cm × 11 cm)、p 7 (17 cm × 15 cm × 7 cm)、p 8 (21 cm × 20 cm × 8 cm)、p 9 (11 cm × 11 cm × 7 cm)、p 10 (19 cm × 16 cm × 10 cm)、p 11 (15 cm × 14 cm × 7 cm)、p 12 (15 cm × 15 cm × 9 cm)、p 13 (16 cm × 15 cm × 8 cm)、p 14 (14 cm × 12 cm × 7 cm)、p 15 (16 cm × 15 cm × 9 cm) をそれぞれ測る。

#### 〈炉跡〉

5 cm ~ 10 cm 土の円環を椭円形状に整然と配列した石圓炉で、長軸 42 cm 土、短軸 34 cm 土を測る。なお炉跡内の埋土は、炭化物及び焼土混じりの黒褐色土 (10 YR 3 / 2)、焼土を多量に含む褐色土 (10 YR 4 / 4) の 2 層によって構成されている。

#### 〈重複〉なし

#### 〈出土遺物〉

第 19 図 23、24、25 の縄文土器の破片の他に石鏃・剥片石器等が出土している。第 19 図 23 は粗製深鉢形土器腹央部と推定され、原体 RL によって地文のみが施されている。胎土・焼成とともに良好で堅緻な作りである。第 19 図 24・25 はいずれも底部周縁の破片で、全体的な器形等は把握できないが、底面はよく整形研磨され若干揚げ底風に仕上げられている。

出土石器は網片 3 点である。第 23 図 1 は扁平網片の一辺に粗雑な片面加工を施し、鈍い鋸歯状の機能刃部が作出されている。2 は比較的厚手の貝殻状剥片の周縁に粗雑な両面剥離加工を施し、蛤刃状の機能刃を作出している。

#### 〈時期〉

若干の縄文土器片や炉跡の形状、若干の出土遺物などから、晩期前葉～中葉相当のものと推定される。

#### MIII 穹穴住居跡 1 号 (第 20 図・写真図版 7)

#### 〈位置〉

調査区のはば中央緩斜面 MIII・MIV グリッドにかけて位置している。

#### 〈検出状況〉

IV 層上位面で微量の炭化物を含む極暗褐色の不整椭円形状の広がりを確認し、精査検出した。

#### 〈規模・形状〉

不整椭円形状のプランを呈し、4.22 m × 3.72 m の規模を有する。

#### 〈埋土〉

やや乾質で微量の炭化物を含む極暗褐色土 (7.5 YR 2 / 3)、微量の炭化物と焼土を含むやや

粘性の暗褐色土 (7.5 YR 3 / 4)、微量の粗砂を含むやや軟質の黒褐色土 (7.5 YR 3 / 2) の 3 層によって構成されている。

#### 〈床面〉

西壁際及び炉跡周辺ではよく踏みしめられて良好であるが、全体的に軟弱で凹凸が認められる。

#### 〈壁〉

西壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がり、25 cm～30 cm 土を測る。東壁は小柱穴の配列に沿ってかろうじて壁のラインを確認することができた。

#### 〈柱穴〉

柱穴と推定される小柱穴は p1～p5 が検出されている。p1 (18 cm × 17 cm × 14 cm) p2 (14 cm × 14 cm × 11 cm)、p3 (22 cm × 19 cm × 9 cm)、p4 (13 cm × 12 cm × 10 cm)、p5 (8 cm × 8 cm × 9 cm) を測る。

#### 〈炉跡〉

床面中央やや西寄りに位置し、5 cm 土の円碟を梢円形状に配した石囲炉である。長軸 41 cm、短軸 36 cm 土を測る。

炉跡内の埋土は炭化物を多量に含む黒褐色土 (10 YR 2 / 2)、微量の焼土及び細砂を含む暗褐色土 (10 YR 3 / 3) の 2 層によって構成されている。

#### 〈重複〉

北東壁の一部が M III 土坑 1 号 (1.65 m × 1.24 m の梢円形状プランで、断面形は浅鉢状を呈し、粘性のある黑色土 10 YR 2 / 1、微量の粗砂を含む褐色土 10 YR 4 / 4、微量の炭化部を含むやや湿性の黒褐色土 10 YR 3 / 2 の 3 層によって構成される。) によって切り崩されている。

また M III 穴住居跡 2 号の大半を埋め込んで構築されている。

#### 〈出土遺物〉

第 21 図 26・写真図版 31-1 は胴上部から緩やかにやや外傾気味に立ち上がる浅鉢形土器で、口縁部は入念に無文研磨されている。体部文様は地文のみで、原体 LR によって施文され、胎土・焼成ともに良好な作りである。色調は黄褐色を呈し、器高 4.0 cm、口径 8.6 cm、器厚 0.3 cm を測る。

第 21 図 27・写真図版 31-2 は胴央部から緩やかに内傾気味に立ち上がる口縁を有し、二条の平行沈線と口端部の小波状風の作り出しによって加飾されている。体部は原体 RL によって条の長い帶繩文風の地文が施されている。色調はにぶい黄橙色を呈し、器高 7.9 cm、口径 7.9 cm、底径 3.6 cm、器厚 0.4 cm を測る。

第 21 図 29 は鉢形土器破片で、口縁部に平行する二条沈線が付され、体部は晩期後葉特有の

縦長の地文が原体 RL によって施文されている。第 21 図 31 は口唇部に鋸歯状刻目文、口縁部の二条の沈線による装飾手法が取られ、体部文様は第 21 図 19 と同様、条の長い纏文が原体 RL によって施されている。第 21 図 30 はやや肉厚の口唇部上に二個一対の小突起を、内側に「逆 L」字状の段差を作り出して上面觀を意識した装飾となっている。体部には磨消手法による文様帯が展開し、その上限は口辺部をめぐる二条の平行沈線によって画されている。

第 21 図 33 は胴央部の磨消纏文手法による文様帯の上下限は一～二条の平行沈線によって示される鉢形土器で、胴下部には原体 RL によって細い地文が施されている。

第 21 図 32 はカメ形土器に近い器種と推定され、口縁部は整形研磨された無文帯と平行する二条沈線による構成となっている。体部文様帯は原体 RL によって晩期後葉特有の条の長い地文が施されている。第 21 図 34 は鉢形土器の底部破片で、底面が入念に無文研磨され、揚げ底風に仕上げられている。胎土・焼成とともに良好で堅密な作りのものが多い。

第 22 図・写真図版 32 は両端部に円孔を有する甲虫状土製品で、頭端部位から頸部にかけてノブ状に成形無文化され、端部周縁には小円形刺突文が付されている。頸基部の「Y」字状の沈線によってその上限が示される背面部は、中央に配された刻目文隆起帯によって二分された左右に甲虫特有の前翅とその下の後翅が磨消の手法によって象徴的な文様に仕上げられている。腹面部は周縁に配された刻目を有する隆起帯によって背面文様帯と区画され、上下二段に雲形文的なモチーフが磨消手法によって施されている。最大長 10.1 cm、最大幅 6.8 cm、厚さ 3.7 cm を測り、胎土・焼土とともに良好である。

出土石器は石鏃 2 点、剥片石器 6 点、凹石 1 点である。第 23 図 1 は二等辺三角形を呈する無基盤で、入念な両面加工によって銳利な機能部位が作り出されている。2 は尖頭状小剥片の先端部および両側に片面加工を施した無基盤の粗製品であろう。

3 は薄手の剥片を素材とし、側辺部位に内渦状機能刃部が作り出されている。5、6 はいずれも比較的肉厚の剥片を素材とし、長側の一辺および先端部位に粗い片面加工を施して尖頭状の機能刃部を作出している。

第 26 図 7 は両舞石安山岩の椭円形蹠を素材とした磨石で、両側面に僅かに擦痕が観察される。8 は硬質泥岩を素材とした始刃状を呈する磨製石斧の破損品である。

#### 〈時期〉

出土遺物などから晩期後葉大洞 C<sub>1</sub> 式相当のものと考えられる。

#### MⅢ整穴住居跡 2 号（第 20 図・写真図版 7）

#### 〈位置〉

MⅢ整穴住居跡 1 号同様、調査区の中央やや東寄りの緩斜面 MⅢ・MIV グリッドにかけて位

置している。

〈検出状況〉

MⅢ竪穴住居跡1号精査の過程で、東側の軟弱な床面から斑状に露呈する微量の炭化物と焼土の混じる黒褐色土を確認し、精査検出した。

〈規模・形状〉

3.45 m × 3.20 m の不整橿円形状のプランを呈する。

〈埋土〉

微量の炭化物と焼土を含むやや軟質の黒褐色土(7.5 YR 3/2)の単層である。

〈床面〉

全体的に凹凸が認められるが、概ねよく踏みしめられ良好である。

〈壁〉

周壁はMⅢ竪穴住居跡1号によってほとんど崩落し、東壁で5 cm～10 cm土を測る。

〈柱穴〉

小柱穴p1～p4が検出されている。p1(20 cm×18 cm×13 cm)、p2(17 cm×17 cm×10 cm)、p3(16 cm×11 cm×9 cm)、p4(18 cm×15 cm×9 cm)を測る。

〈炉跡〉

床面のはば中央に位置し、5 cm～10 cm大の円盤を橿円形状に整然と配した石囲炉で、長軸45 cm土、短軸37 cm土を測る。

炉跡内の埋土は多量の炭化物と焼土の混入する黒褐色土(10 YR 2/2)、微量の焼土が混入するやや粘性のある褐色土(10 YR 4/4)の2層によって構成されている。

〈重複〉

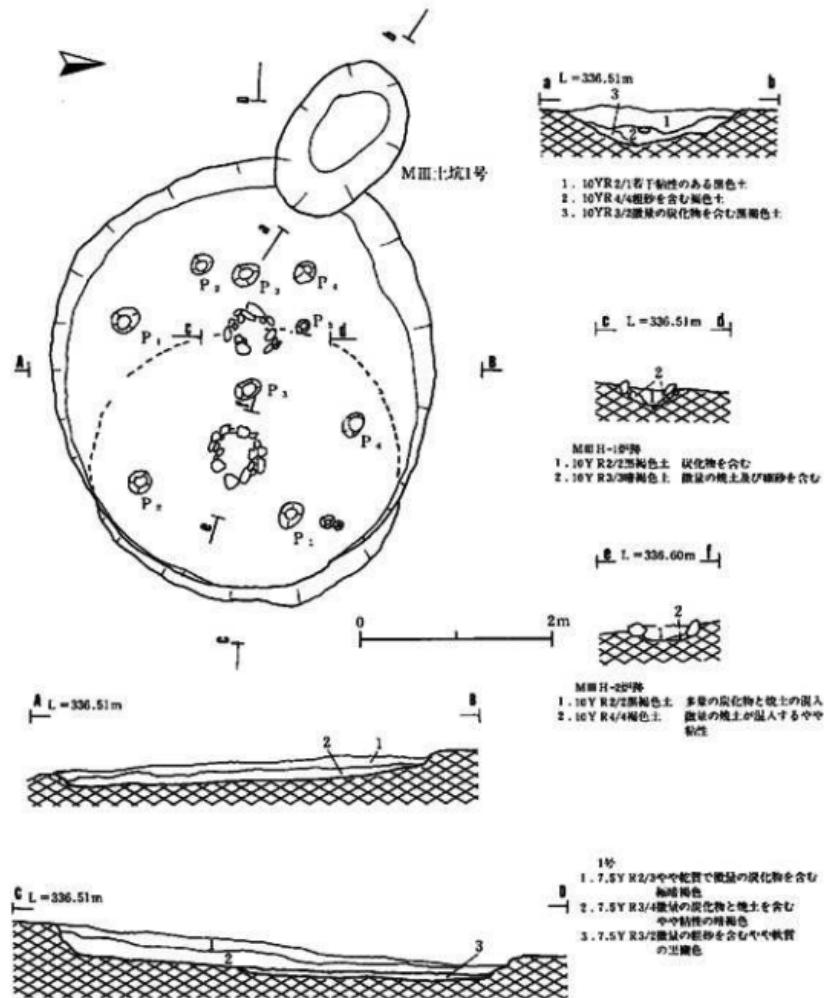
MⅢ竪穴住居跡1号によってほぼ全面が埋め込まれている。

〈出土遺物〉

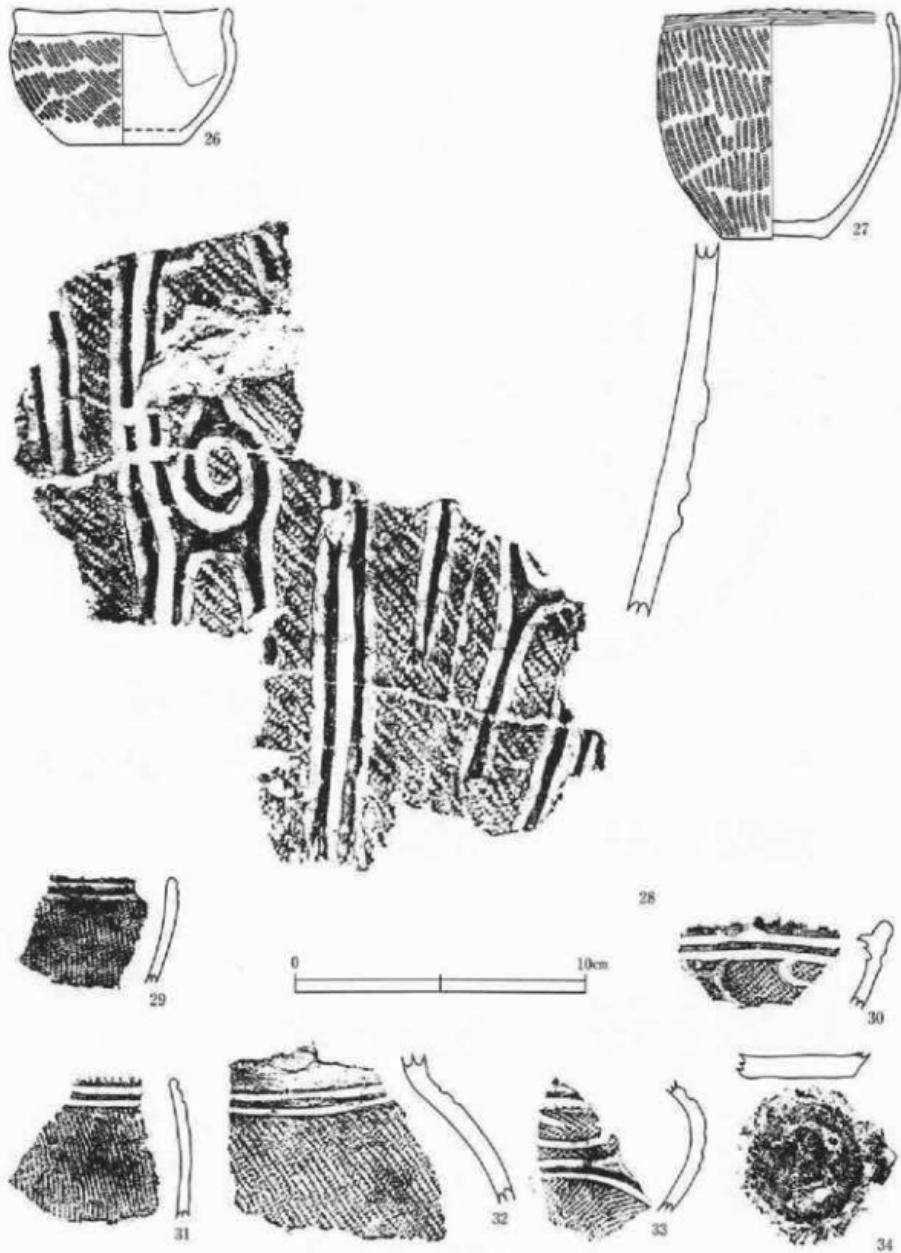
第24図36は口縁部が「逆く」の字状に内傾する台付鉢形土器の精製品で、口唇部が小波状様に入念に仕上げられている。口辺部には沈線によって区画された縄文圧痕による斜位刻目文様が帯状に配され、体部文様帶の上限が示されている。

脚部文様は磨消縄文手法による雲形文調文様帶が展開し、その下限は二条の平行沈線によって示され、地文は原体LRによって施されている。脚部は入念に無文研磨され、端部に一条沈線を巡らして器全体の装飾性を高めている。色調は明赤褐色を呈し、胎土・焼成とともに良好で堅緻な作りである。器高16.2 cm、口径21.7 cm、底径7.4 cmを測る。

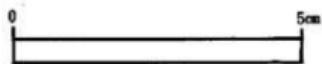
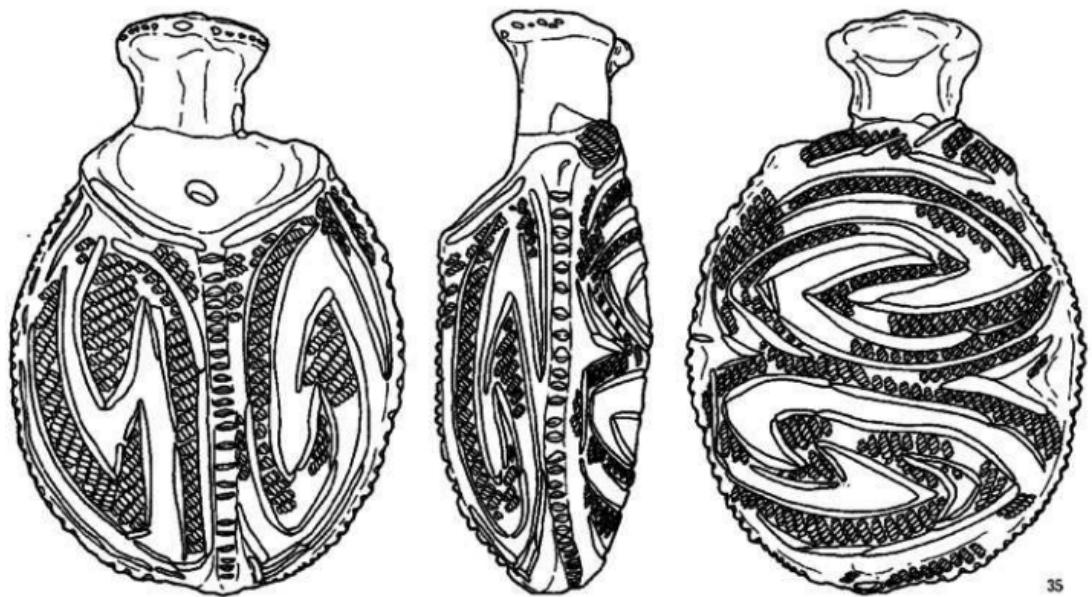
第24図37は底部から緩やかな弧を描いて立ち上がる小型の輪形土器で、器全面が整形研磨され、胴上部にわずかではあるが短沈線による加飾痕が観察される。色調はにおい褐色を呈し、



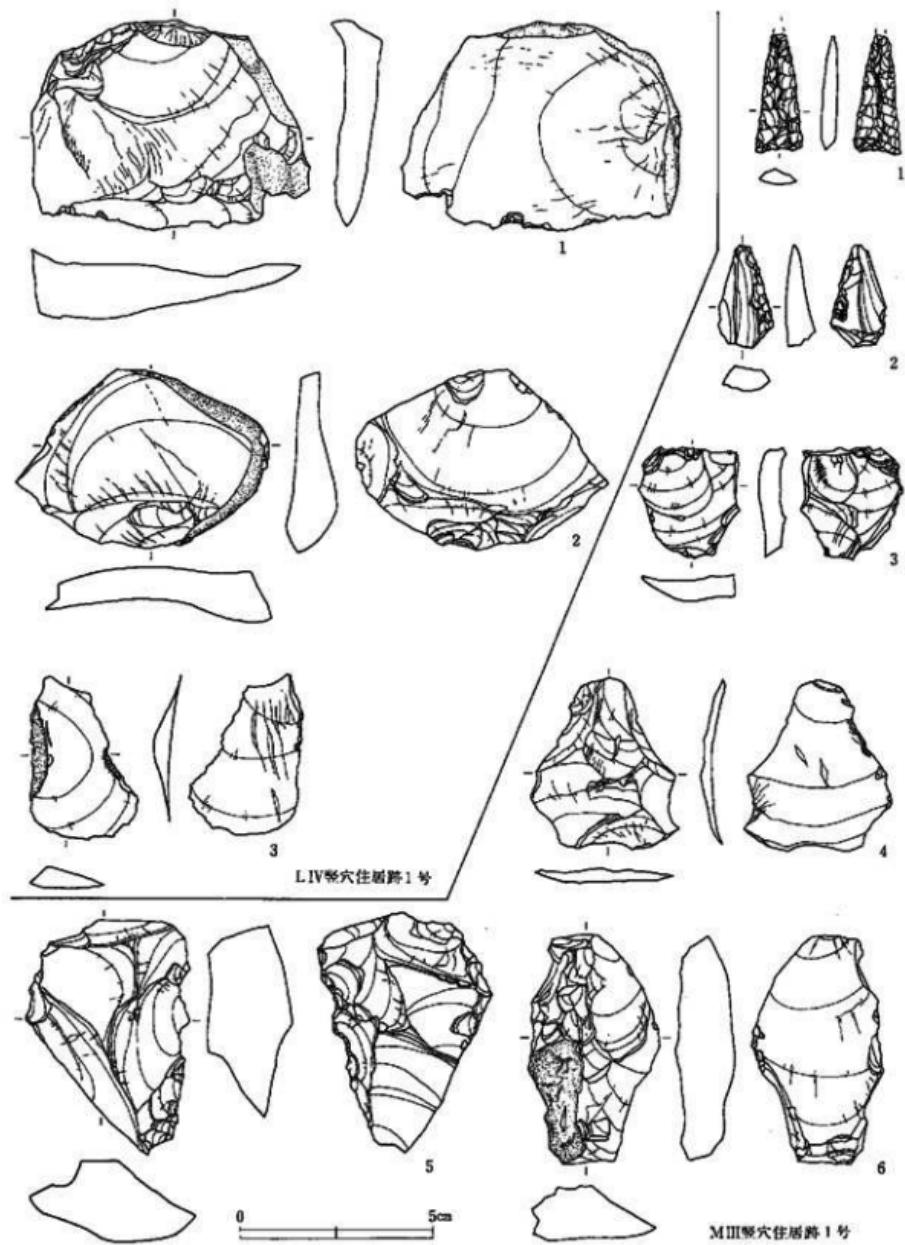
第20図 M III 竪穴住居跡 1号・2号



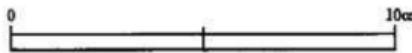
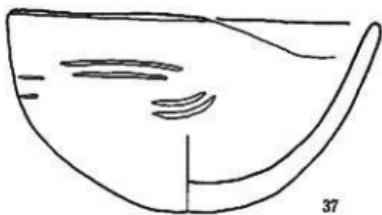
第21図 MIII竪穴住居跡1号 出土遺物 土器



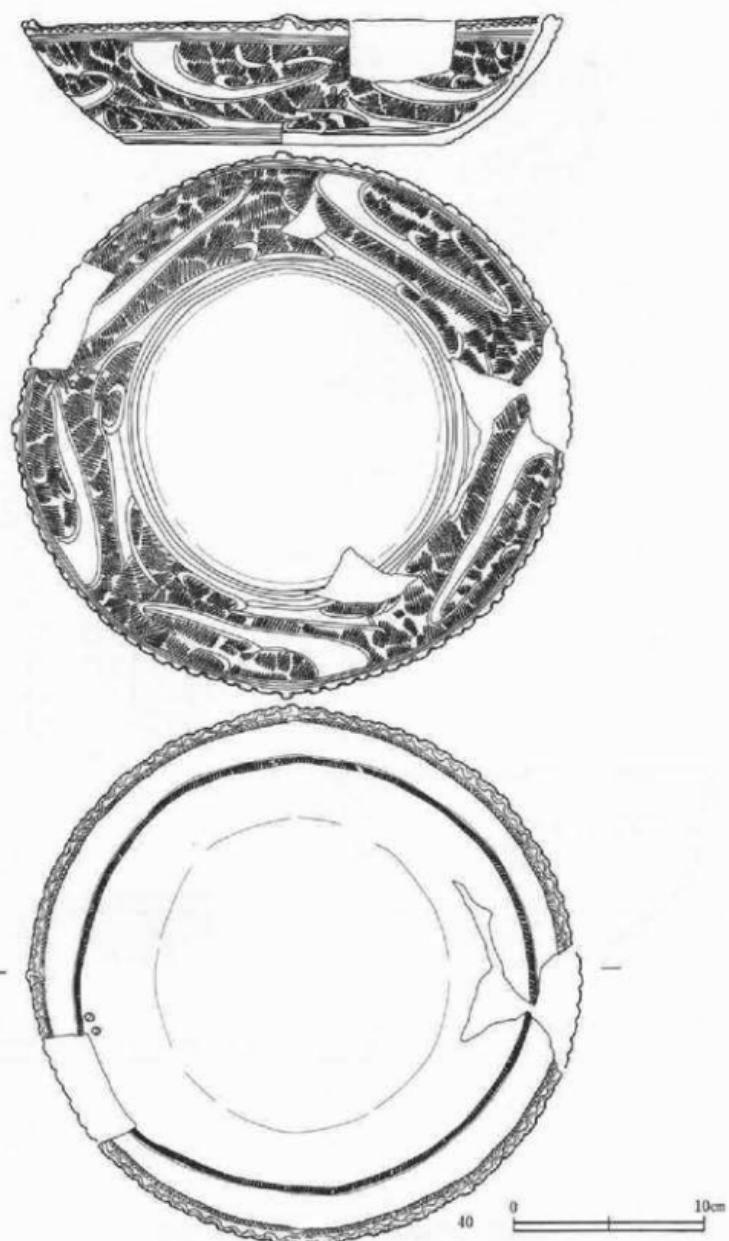
第22図 MIII 竪穴住居跡 1号 遺物 土製品



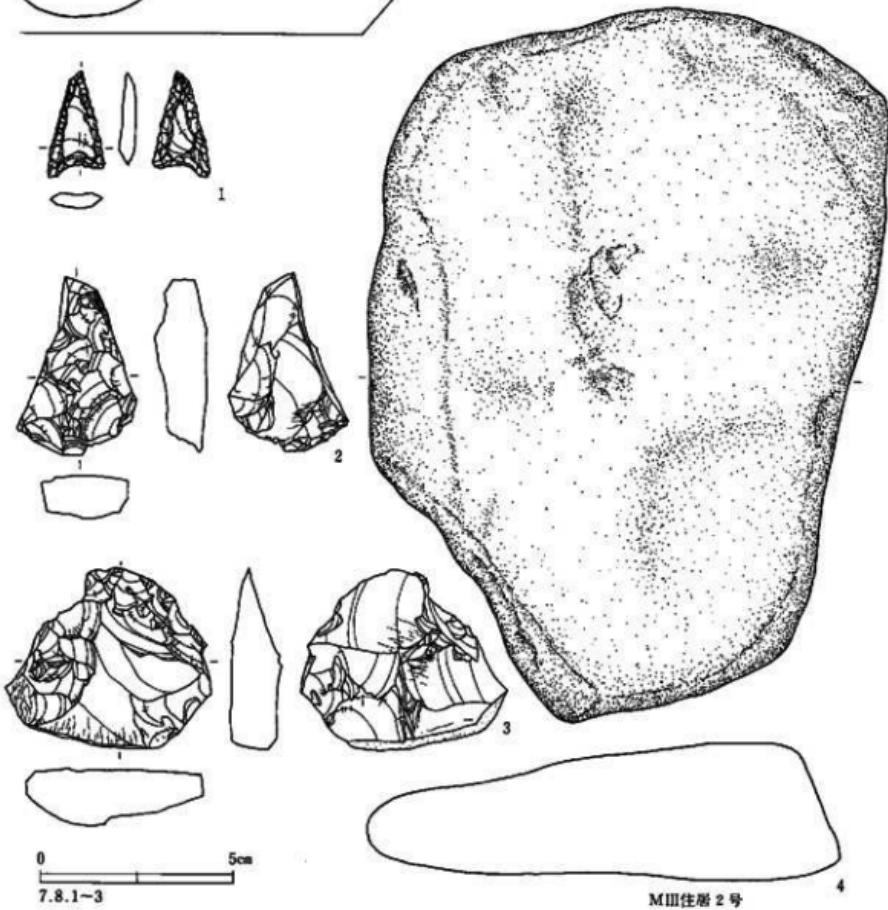
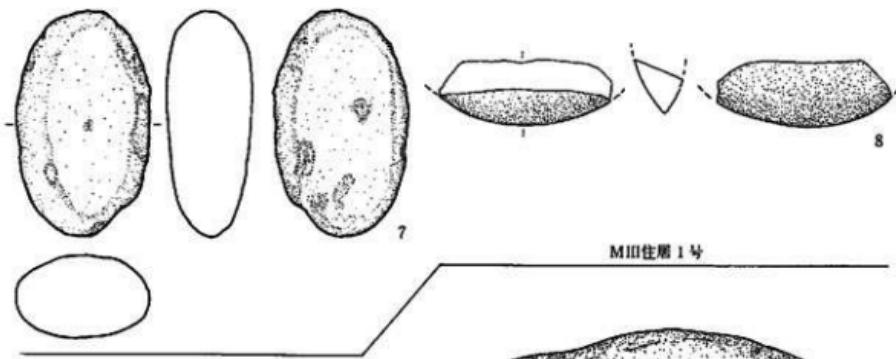
第23図 LIV·MIII 竖穴住居跡 1号 出土遺物 石器



第24図 MIII堅穴住居跡 2号 出土遺物 土器



第25図 MIII竪穴住居跡2号 出土遺物 土器



第28圖 M III 穹穴住居 1號・2號 出土遺物 石器

胎土・焼成とともに良好で堅緻な作りである。器高 5.3 cm、口径 9.7 cm、底径 1.8 cm、器厚 0.7 cm を測る。

第 25 図 40 は底部からやや内湾気味に緩やかな立ち上がりを見せる大皿の精製品である。彫刻的に仕上げられた小波状口縁には四個の中突起が付され、口唇部の小突起間を連結する彫り込みや内側の細緻な連続刻目文とともに上面観を意識した精巧な作り出しどうっている。

なお内面調整も入念で、繩文圧痕の付された一条の細隆帯を巡らすなど装飾性が強調されている。体部には磨消繩文手法による雲形文調の文様帯が器面全体に展開し、その上限は口辺部に付された平行する二条沈線によって示されている。底部周縁には二条沈線が付され、入念に成形研磨され、光沢を有する。体部地文は原体 LR によって施され、器高 6.4 cm、口径 29.6 cm、底径 16.8 cm を測る。

出土石器は石鏃 1 点、剥片石器 2 点、石皿 1 点である。第 26 図 1 は内湾状の抉り入り部を有する無茎縁で、両面からの調整加工によって鋭利な機能部が作り出されている。2 は比較的肉厚のチャートを素材とした剥片石器で、粗い両面加工によって角度のある機能刃部が作出されている。3 は比較的肉厚の貝殻状剥片を素材とした剥片石器で、周縁部位に粗い両面加工を施し、円形状の機能刃部が作出されている。4 は比較的肉厚の両輝石安山岩を素材とした石皿で、中央部位に痘痕状の擦痕が観察される。

#### 〈時期〉

出土遺物等から繩文晚期後葉大洞 C<sub>2</sub> 式の比較的新しい時期のものと推定される。

#### N III 穴住居跡 1 号（第 27 図・写真図版 8）

##### 〈位置〉

調査区の中央やや北寄りの緩やかな斜面部 N III・N IV・O III・O IV グリッドにかけて位置している。

##### 〈検出状況〉

IV 層上位面で微量の炭化物を含む極暗褐色土の不整梢円形状の広がりを確認し、精査検出した。

##### 〈規模・形状〉

6.24 m × 5.75 m を測り、梢円形状のプランを呈する。

##### 〈埋土〉

やや軟質で微量の炭化物を含む極暗褐色土 (7.5 YR 2/3)、粘性および湿性のある暗褐色土 (7.5 YR 3/4)、粘質で粗砂を若干混入する黒褐色土 (7.5 YR 3/4) の 3 層によって構成されている。

#### 〈床面〉

周壁際はよく踏みしめられ良好であるが、中央部から東側にかけては軟弱で若干凹凸が認められ、NⅢ竪穴住居跡2号をほぼ全面埋め立てて構築している。

#### 〈壁〉

南西壁から西壁にかけてはほぼ垂直的な立ち上がりを見せ、保存状況も良好で50cm～55cm土を測る。

#### 〈柱穴〉

柱穴と推定される小柱穴状のピットはp1～p10が検出されている。p1(36cm×34cm×16cm)、p2(29cm×27cm×17cm)、p3(30cm×28cm×15cm)、p4(26cm×24cm×12cm)、p5(22cm×22cm×13cm)、p6(23cm×18cm×14cm)、p7(34cm×29cm×11cm)、p8(21cm×18cm×15cm)、p9(34cm×29cm×13cm)、p10(19cm×15cm×8cm)を測る。

#### 〈炉跡〉

5cm～10cm土の円礫を楕円形状に配した土器埋設石囲炉で、長軸80cm土、短軸52cm土を測る。炉跡内の埋土は炭化物及び焼土粒を含む黒褐色土(10YR3/2)、焼土の2層によって構成されている。

#### 〈重複〉

NⅢ竪穴住居跡2号をほぼ全面を埋め立てて構築されている。

#### 〈出土遺物〉

第28図41は頸基部からやや外反気味に立ち上がる鉢形土器で、口辺部は入念に無文研磨され、緩やかな波状様に仕上げられている。この波状様頂部の直下には平行沈線によって区画された二段の帯状文様帯を連繋する円形文が施されている。本部には蛇行曲線区画文や三角形状沈線区画文の組み合わせによる装飾文様が展開している。器高14.7cm、口径15.3cm、底径7.0cm、器厚0.6cmを測る。

第28図43は口頸部から緩やかに外反気味に立ち上がる鉢形土器である。四対の山形状の中突起と傾位に付された刻目文によって小波状様に仕上げられた口縁部は、無文化され、波状様山形中突起直下にはボタン状の貼付文とこれより垂下する撻糸圧痕文による四区画帯の構成となっている。頸部には一条の撻糸圧痕文を巡らし、体部地文帯との上限を画している。色調は橙色を呈し、胎土・焼成とともに良好で堅緻な作りである。器高27.0cm、口径19.0cm、底径10.1cm、器厚0.8cmを測る。

第28図42は、整形無文化された口縁部がやや内傾気味に立ち上がる鉢形土器で、第28図43と異なり頸部に巡らした一条の沈線によって体部地文帯の上限が画されている。色調は黒褐色を呈し、胎土・焼成とともに良好で堅緻な作りである。現存部器高12.2cm、口径18.3cm、器厚

0.8 cmを測る。

第28図45は炉跡内の埋設土器で、口縁部および胴下部を欠損するが、胴央部から直上気味に立ち上がる粗製深鉢形土器と推定される。体部は地文のみで原体LRによって施されている。胎土・焼成とともにやや不良で脆弱である。色調はにぶい橙色を呈し、現存部器高14.0 cm、口径14.5 cm、器厚0.8 cmを測る。

第28図46は胴上部等を欠損する深鉢形土器で、体部地文として羽状繩文が施されている。色調は橙色を呈し、胎土・焼成とともに良好で薄手の堅い作りである。現存部器高6.0 cm、底径6.7 cm、器厚0.7 cmを測る。

出土石器は有茎石鏃1点、無茎石鏃3点、橢円形状石器2点、不定形剝片石器16点、磨石3点、凹石1点、棒状磨石1点、石棒1点、石皿1点である。第29図1は両面加工によって鋭い刃部が作り出されている有茎石鏃である。2は内湾する抉り入り部を有している。3、4は基部が丸みをもつ無茎石鏃で、周縁部位に粗い両面加工の施された粗製品である。

5、6はやや内湾気味の小剝片を素材として、その先端部位に僅かな片面加工を施して機能部を作り出している。刃部の形状などから削摺器的機能を有したものと考えられる。

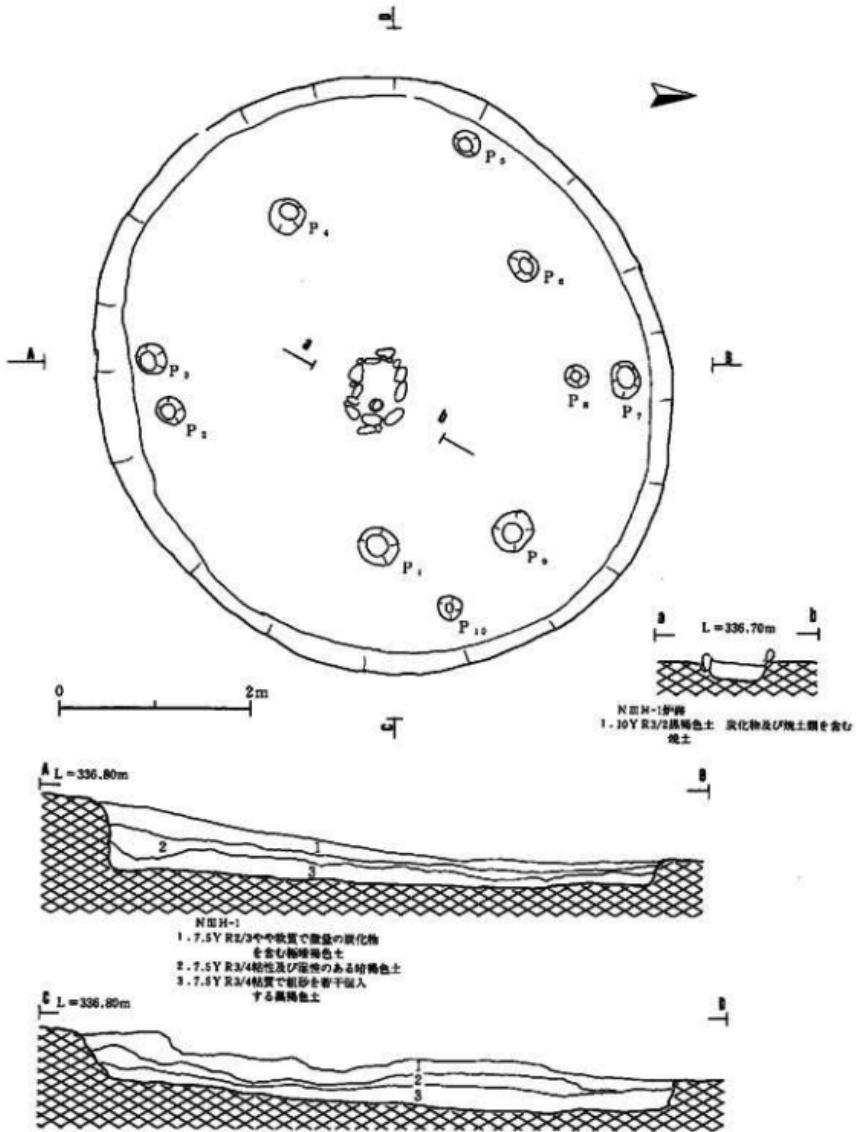
8、10はいずれも裏面に一次剥離面を残す橢円形状石器で、周縁部位に粗い片面剥離加工を施して機能刃部が作出されている。第30図12、15は不整三角形状を呈する剝片石器で、底辺部位に片面加工が施されている。13、14は先端部位に尖頭状の機能刃部を有する剝片石器で、粗い両面加工が付されている。刃部形状などから削摺器的なものに用されたものと考えられる。17は貝殻状の小剝片石器で周縁部位に比較的粗い片面加工を付して鋭利な機能刃部を作り出している。18は粘板岩を素材とした小剝片に僅かに片面加工痕が観察される程度である。

20は薄手・綫長のチャートを素材とした剝片石器で、一側に細片面加工を施して幅のある鋭い機能刃部を作り出している。削摺器的なものとして用いたものであろう。

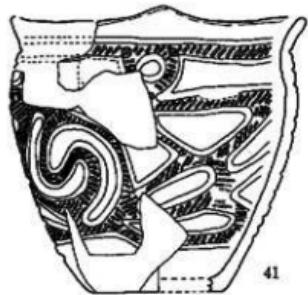
第31図21、22はいずれも綫長板状の粘板岩を素材とした剝片石器で、先端部位に粗い片面加工を施して角度のある機能刃部が作出されている。

第31図23、24・第32図25はいずれも両輝石安山岩を素材とした磨石で、両面には擦痕が観察される。23は片面に残る痘痕などから凹石との兼用が推察される。第32図26は両輝石安山岩を素材とした凹石で、片面に痘痕が観察される。27は両輝石安山岩を素材とした棒状擦石で、三面に擦痕が認められる。28は流紋岩を素材とした石棒で、整形調整も粗雑である。29は両輝石安山岩を素材とした石皿で、中央部位が緩やか凹状を呈し、使用頻度がうかがわれる。

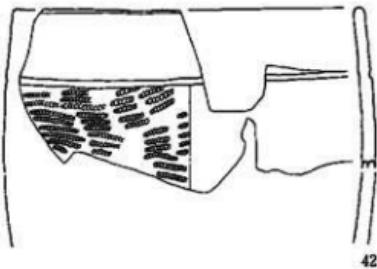
〈時期〉出土遺物などから繩文後期前葉のものと推定される。



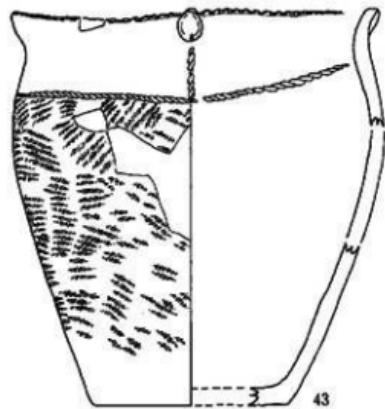
第27図 N III 積穴住居跡 1号



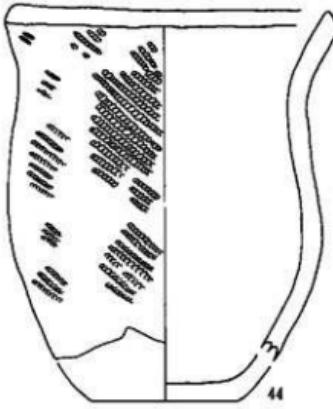
41



42

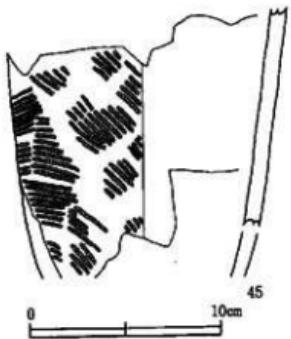


43



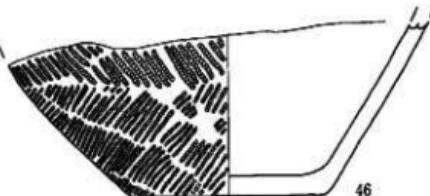
44

N III 突穴住居跡 2 号出土



0

10cm

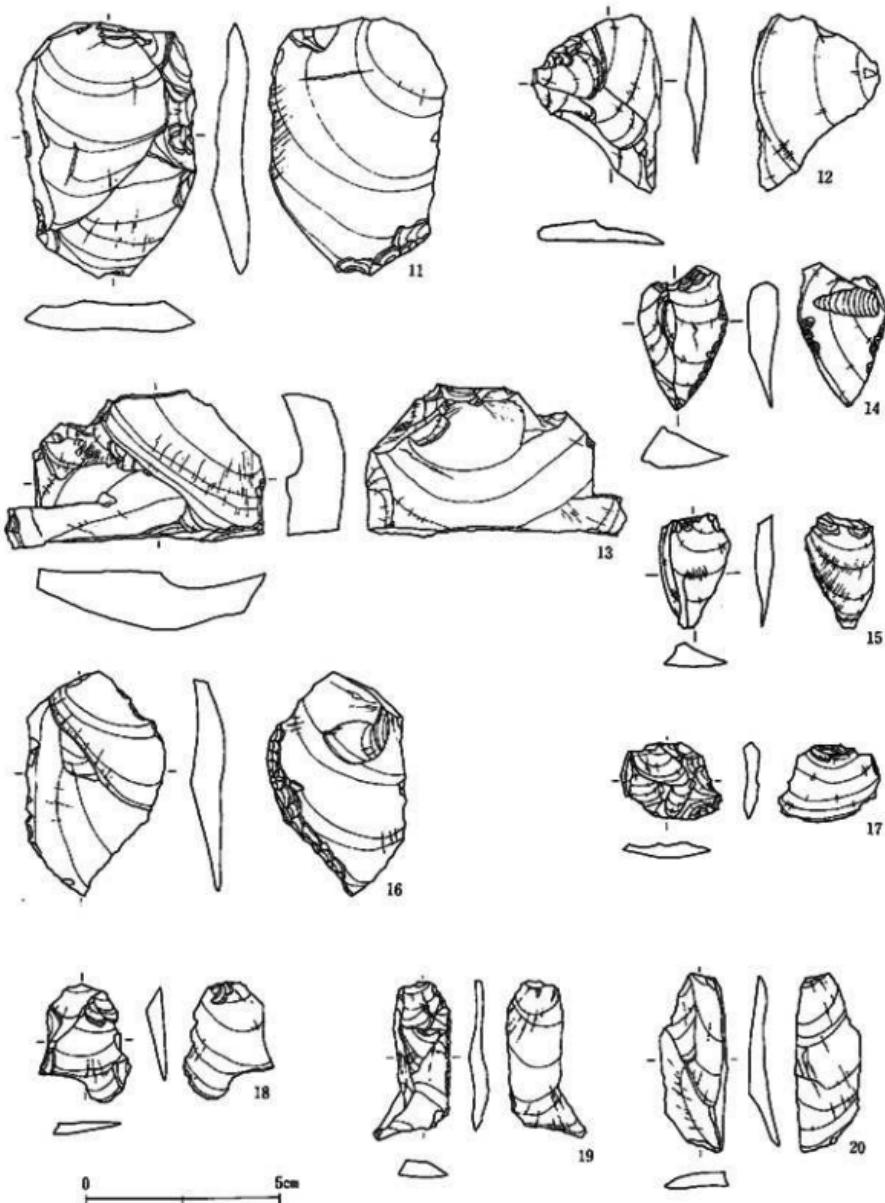


46

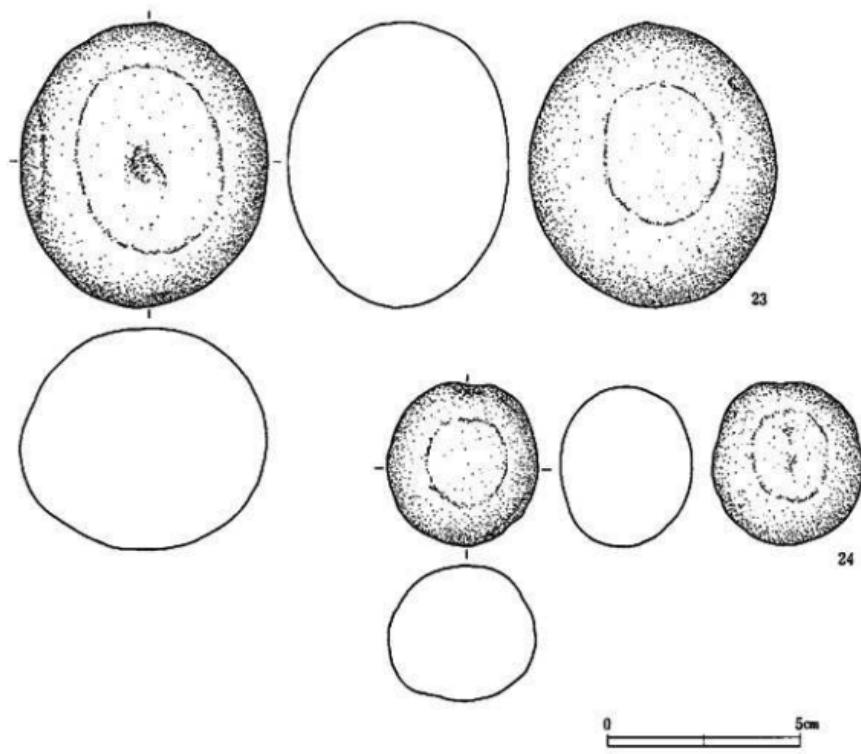
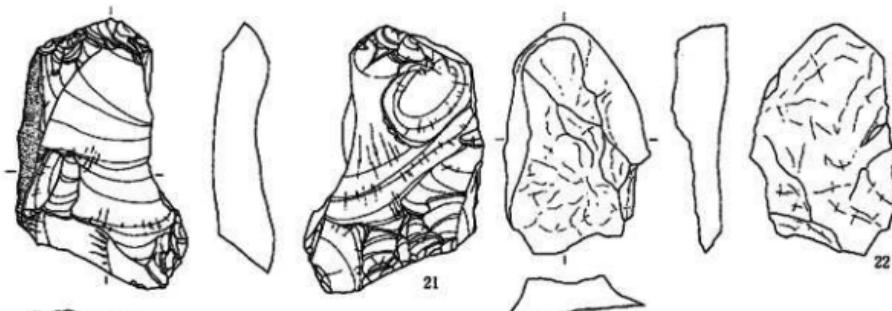
第28図 N III 突穴住居跡 1号・2号出土遺物 土器(1)



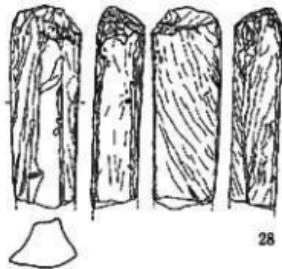
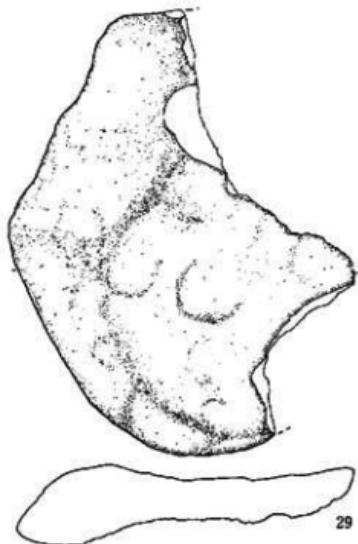
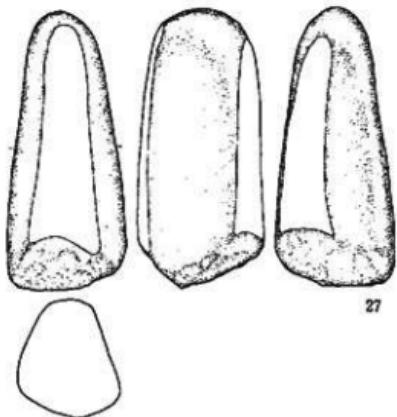
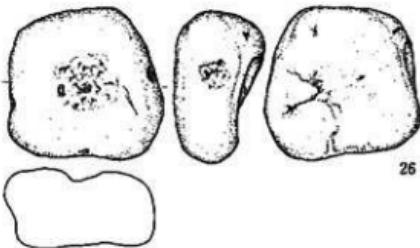
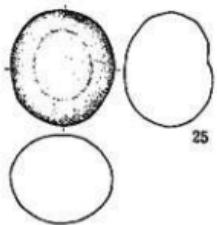
第29図 N III 壁穴住居跡 1号 出土遺物 石器(1)



第30図 N III 竪穴住居跡 1号 出土遺物 石器(2)



第31図 N III 穹穴住居跡 1号 出土遺物 石器(3)



第32図 N III 壁穴住居跡 1号 出土遺物 石器(4)

### NIII堅穴住居跡2号（第33図・写真図版17）

#### 〈位置〉

NIII堅穴住居跡1号に重複し、NIII・NIVグリッドにかけて位置している。

#### 〈検出状況〉

NIII堅穴住居跡1号精査の過程でやや軟弱に踏み固められた床面に広がる不整円形状の洞りを確認し、精査検出した。

#### 〈規模・形状〉

5.45m×5.27mの不整円形状のプランを呈する。

#### 〈埋土〉

微量の炭化物と褐色粘性土がブロック状に混入する暗褐色土（10 YR 3/3）、粗砂及び微量の焼土粒が混じる褐色土（10 YR 4/4）の2層によって構成されている。

#### 〈床面〉

よく踏みしめられているが、全体的に凹凸が認められる。

#### 〈壁〉

NIII堅穴住居跡1号構築の際に崩落したためか、壁高は10cmと低く、緩やかな立ち上がりを呈している。

#### 〈柱穴〉

柱穴と推定される小ビットはp1～p5が検出されている。p1（8cm×7cm×5cm）、p2（7cm×7cm×6cm）、p3（8cm×7cm×10cm）、p4（5cm×5cm×8cm）、p5（9cm×7cm×11cm）をそれぞれ測る。

#### 〈戸跡〉

NIII堅穴住居跡1号構築の際に削平除去されたらしく、床面東寄りにわずかに焼土が観察される。

#### 〈重複〉

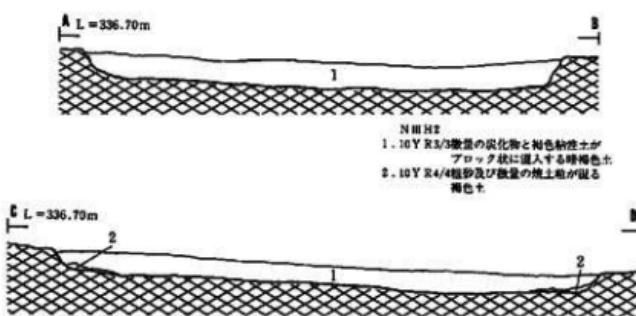
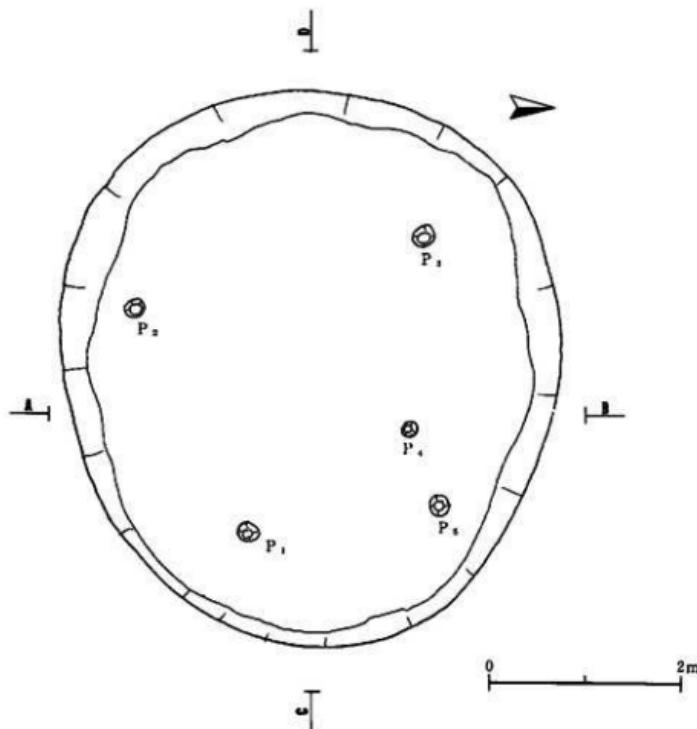
NIII堅穴住居跡1号によってほぼ全面が埋め立てられている。

#### 〈出土遺物〉

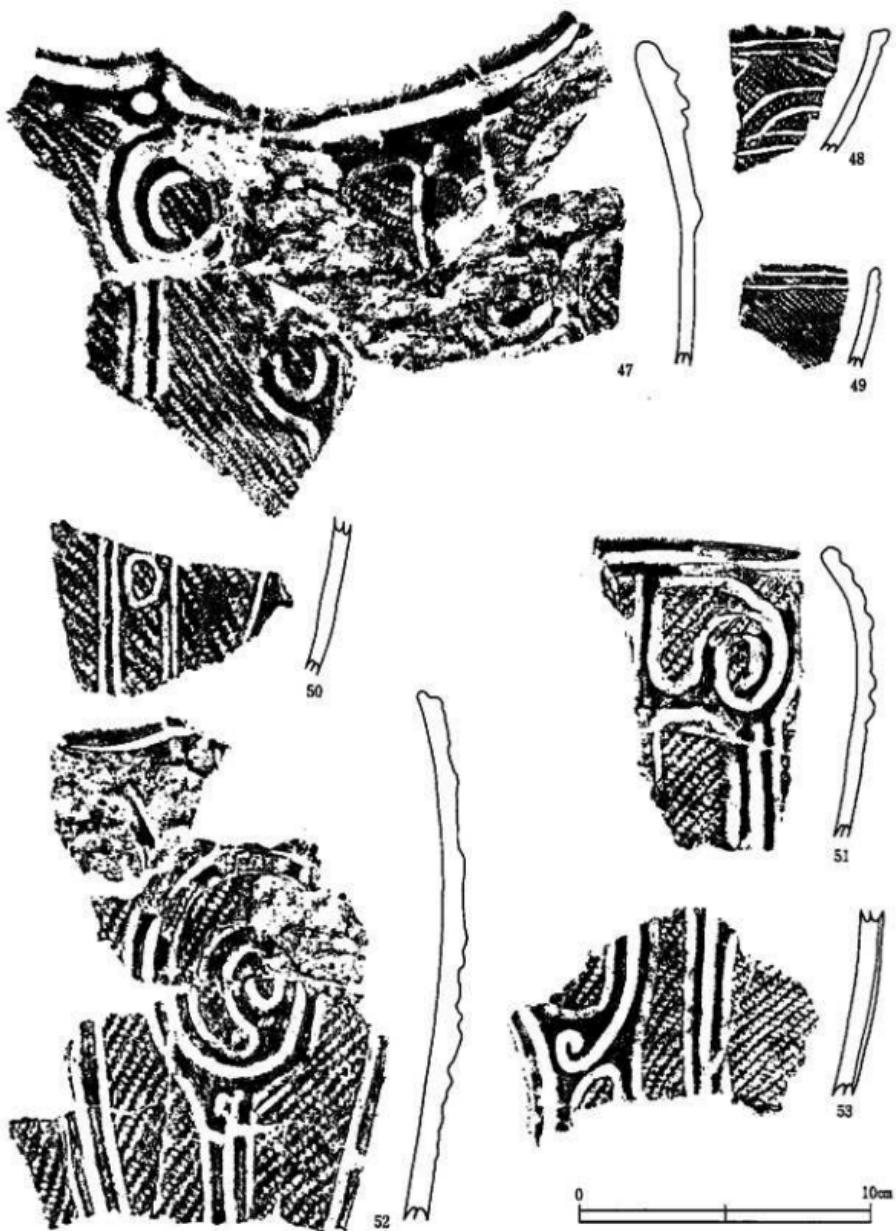
第28図44は口縁が緩やかに外反する鉢形土器で、胴央部の膨らみが特徴的である。体部は地文のみで原体LRによって施文されている。色調はにぶい褐色を呈し、胎土・焼成とともに良好で堅緻な作りである。器高12.2cm、口径11cm、器厚0.7cmを測る。

第34図47、52はやや内湾気味に立ち上がる波状口縁の鉢形土器で、体部文様帶は隆起線・沈線による渦巻文で構成されている。

第29図51は平縁を呈し、やや内湾気味に立ち上がる深鉢形土器である。47、52と同様隆起



第33図 N III 壘穴住居跡 2号



第34図 N III 穹穴住居跡 2号 出土遺物 土器

線と沈線による渦巻文で文様帯が構成されている。

#### 〈時期〉

埋土内の土器破片などから縄文時代中期中葉大木 8b 式～9 式相当のものと推定される。

#### P II 穹穴住居跡 1 号（第 35 図・写真図版 9・10）

#### 〈位置〉

調査区の北西寄り平坦部 P I・P II グリッドにかけて位置し、穹穴住居跡の半分は調査区域外のため精査できなかった。

#### 〈検出状況〉

IV 層上面で微量の炭化物と焼土粒を含む軟質暗褐色土の不整な広がりを確認し、精査検出した。

#### 〈規模・形状〉

約半分ほどが調査区域外 P I グリッドにかかっているため全体的な形状は把握できなかったが、現出部から径 4.32 m 土の円形プランを呈するものと考えられる。

#### 〈埋土〉

微量の炭化物および焼土粒が混入する暗褐色土 (10 YR 3/3)、粗砂の若干混入する粘性的黒褐色土 (10 YR 2/3)、微量の炭化物と黄褐色粘性土が小ブロック状に混入する黑色土 (10 YR 2/1) の 3 層によって構成されている。

#### 〈床面〉

若干凹凸が認められるが、ほぼ平坦で堅く踏みしめられている。

#### 〈壁〉

南壁～東壁は 7 cm 土～10 cm 土と残存状況は不良で、西壁は調査区域外のため未検出である。

#### 〈柱穴〉

柱穴と推定される小ビットは p1～p5 が検出されている。p1 (26 cm × 23 cm × 13 cm)、p2 (23 cm × 18 cm × 10 cm)、p3 (21 cm × 18 cm × 9 cm)、p4 (22 cm × 20 cm × 12 cm)、p5 (20 cm × 18 cm × 12 cm) を測る。

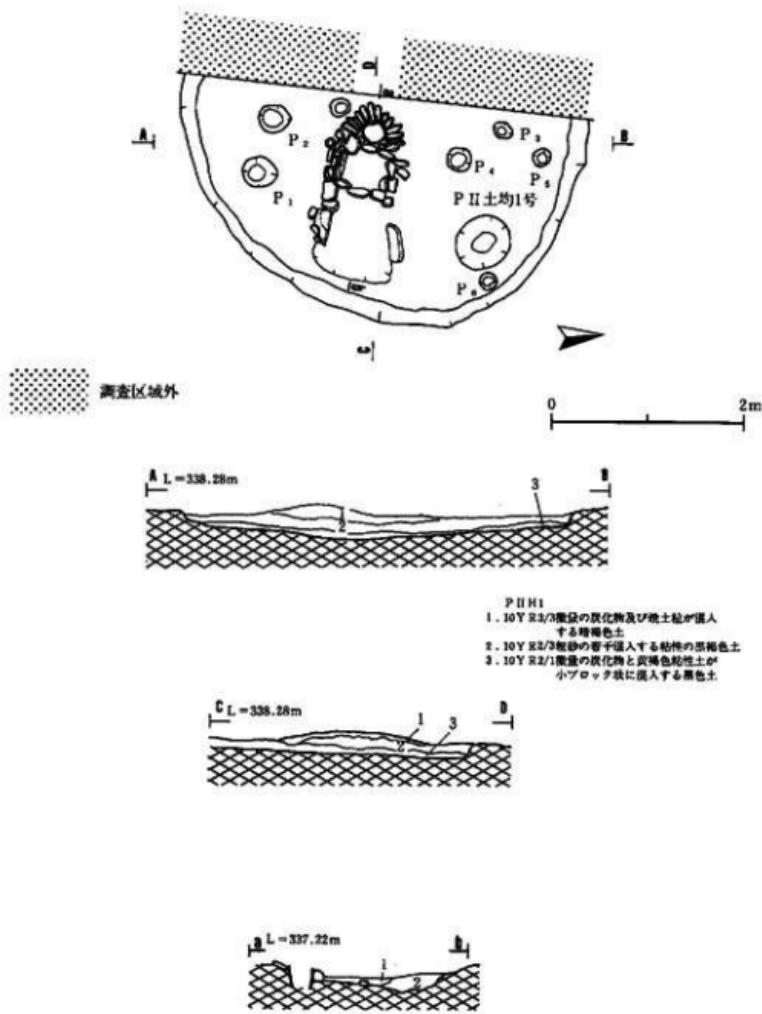
#### 〈炉跡〉

馬蹄状を呈する複式炉で、長軸 1.86 m、短軸 0.85 m を測る。特に埋設土器の周縁には扁平砾が向日葵の花弁状に配列されているのが特徴である。

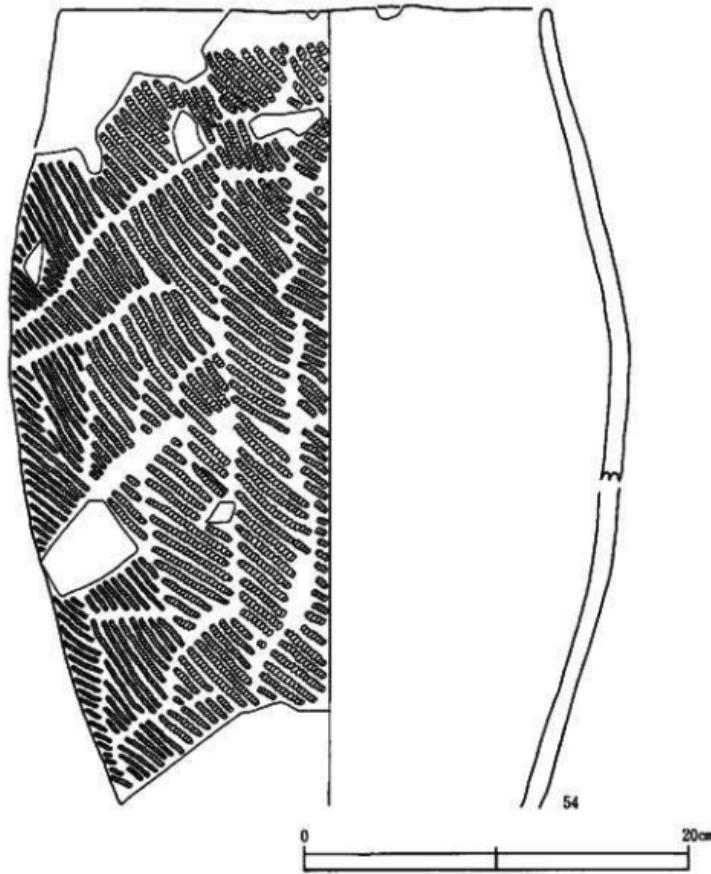
#### 〈重複〉なし

#### 〈出土遺物〉

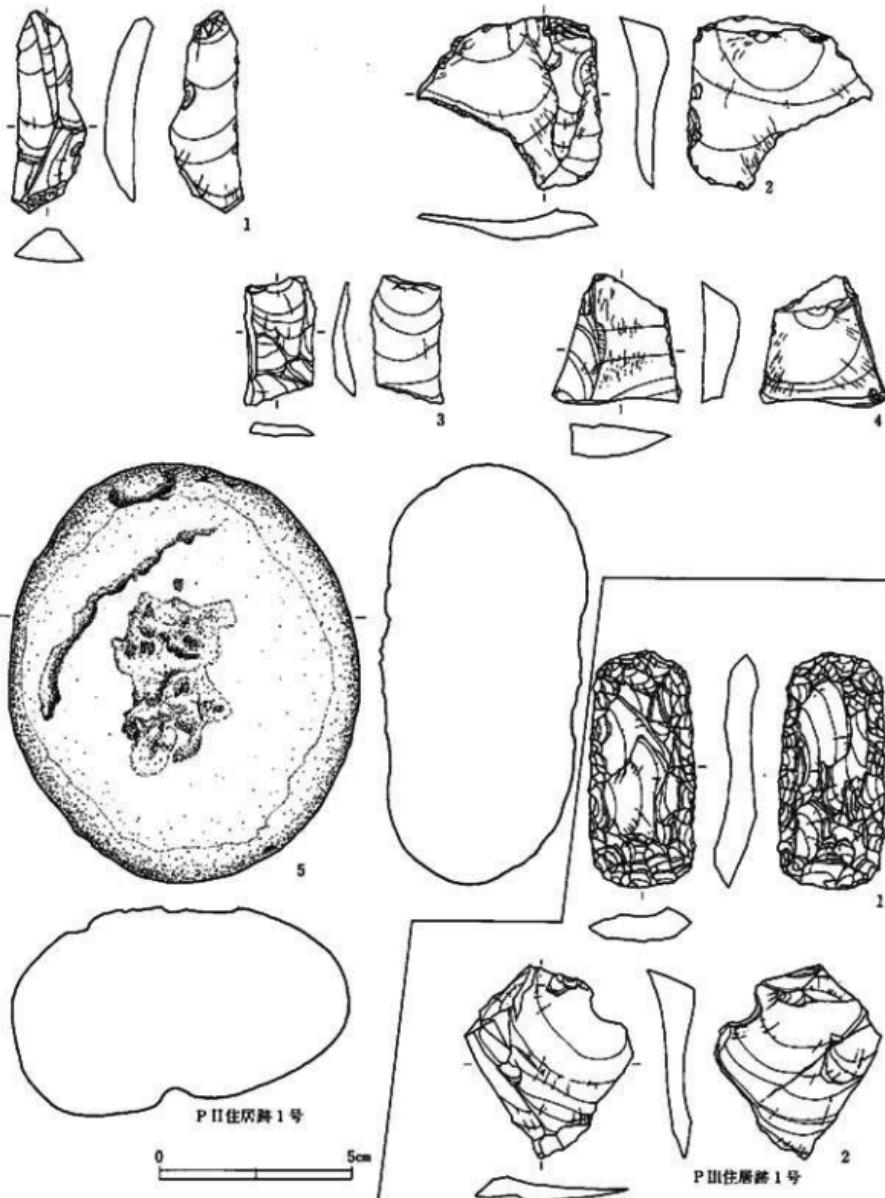
第 36 図 54・写真図版 37-1 は石圓部埋設の粗製深鉢形土器で、胴央部からやや内傾気味に立ち上がる口縁を有し、口辺部は丁寧に成形され、幅の狭い無文帶を構成している。体部文



第35図 P II 壁穴住居跡 1号



第36図 P II 竪穴住跡 1号 出土遺物 土器



第37圖 P II. P III 穩穴住居跡 1號 出土遺物 石器

様は地文のみで、原体 LR によって施されている。色調はにぶい褐色を呈し、胎土・焼成とともに良好で堅緻な作りである。

出土石器は剥片石器 4 点、凹石 1 点である。第 37 図 1 はナイフ状の機能刃部が片面加工によって作り出されている。2 は円弧状および内湾状の機能刃部を有する剥片石器で片面剥離加工によって鋭利に調整されている。3、4 は不整形形状を呈する小剥片石器で、いずれもわずかな調整痕が観察される程度である。5 は両輝石安山岩を素材とした凹石で、両面に凹状の痘痕が観察される。

#### 〈時期〉

炉跡の形状や出土遺物などから縄文時代中期中葉～後葉（大木 8b 式～9 式）に位置するものと考えられる。

#### PⅢ壁穴住居跡 1 号（第 38 図・写真図版 11）

##### 〈位置〉

調査区の北西寄りの緩斜面部 OⅢ・PⅢ グリッドにかけて位置している。

##### 〈検出状況〉

IV 層上位面で微量の炭化物と細砂を含む黒褐色土の不整な広がりを確認し、精査検出した。

##### 〈規模・形状〉

不整梢円形状のプランを呈し、4.45 m ± × 4.25 m ± を測る。

##### 〈埋土〉

微量の炭化物及び細砂を含む黒褐色土（7.5 YR 2/2）、粗砂を含むやや粘性の暗褐色土（7.5 YR 3/4）の 2 層によって構成されている。

##### 〈炉跡〉

全体として馬蹄形状を呈し、「ロ」の字状の石圓燃焼部と粗雑に配石された「ハ」の字状の焚口部によって構成されている。

炉跡内の埋土は炭化物および焼土が混入するやや軟質の黒褐色土（7.5 YR 3/1）の単層である。

##### 〈重複〉

北西壁で PⅢ 土坑 1 号（1.12 m ± × 1.03 m の不整梢円形状のプランで、断面はバケツ状を呈している。埋土は焼土粒を微量に含む黑色土 7.5 YR 2/1、やや軟質で粘性のある黒褐色土 2/2、粗砂を若干混入する暗褐色土 7.5 YR 3/4、黒褐色土が霜ぶり状に混入する明褐色土 7.5 YR 5/8 の 4 層によって構成されている。）によって切られている。

北壁は PⅢ 土坑 2 号（0.96 m × 0.65 m の不整梢円形状のプランで、断面形は浅鉢状を呈している。埋土はやや湿性の暗褐色土 10 YR 10B/3、細砂と微量の焼土粒を含む黒褐色土 10 YR

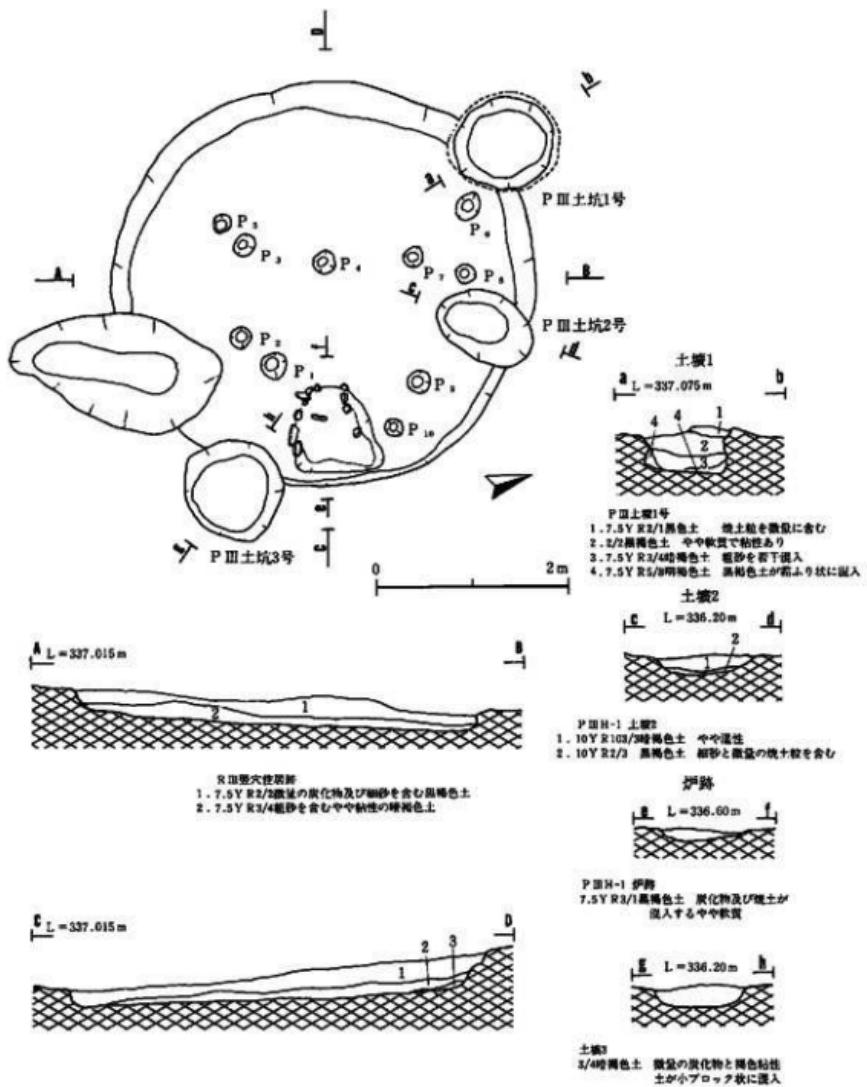
2/3の2層によって構成されている。) によって切られている。炉跡の近くの南壁はPⅢ土坑3号(1.02m×0.98mの不整円形状のプランで、断面形は浅鉢状を呈している。埋土は微量の炭化物と褐色粘性土が小ブロック状に混入する暗褐色土3/4の單層。) によって切られている。

#### 〈出土遺物〉

第37図1は両面の入念な削離加工によって鋭利な刃部を形成する石鏟状石器、2は石器製作時の剝片であろう。

#### 〈時期〉

炉跡の形状や出土遺物等から縄文中期中葉～後葉のものと推定される。



第38図 P III 積穴住居跡 1号・P III 土坑1、2、3号

QIV整穴住居跡 1号（第39図・写真図版12）

〈位置〉

調査区のやや北寄り緩斜面部 QIII・QIVグリッドにかけて位置している。

〈検出状況〉

IV層上位面で炭化物および細砂を微量に含む暗褐色土の不整な広がりを確認し、精査検出した。

〈規模・形状〉

不整円形状のプランを呈し、4.75m×4.47m土を測る。

〈埋土〉

微量の炭化物および細砂を含む暗褐色土（10 YR 3 / 4）、やや軟質で微量の焼土および粗砂を含む黒褐色土（10 YR 3 / 2）、微量の焼土粒および褐色粘性土が小ブロック状に混入する黒色土（10 YR 2 / 1）の3層によって構成されている。

〈床面〉

若干凹凸が認められるが、全体的に堅く踏みしめられて良好である。

〈壁〉

全体的に保存状況は良好で、西壁・北壁では垂直的な立ち上がりをみせ、40cm土～45cm土を測る。

〈柱穴〉

柱穴と推定される小ビットは p1～p15 が検出されている。p1 (18cm×16cm×12cm)、p2 (23cm×16cm×9cm)、p3 (14cm×12cm×7cm)、p4 (27cm×25cm×13cm)、p5 (26cm×22cm×12cm)、p6 (16cm×13cm×5cm)、p7 (12cm×12cm×7cm)、p8 (29cm×25cm×14cm)、p9 (20cm×18cm×10cm)、p10 (25cm×21cm×11cm)、p11 (16cm×15cm×8cm)、p12 (31cm×27cm×12cm)、p13 (13cm×11cm×7cm)、p14 (24cm×21cm×13cm)、p15 (16cm×14cm×8cm) をそれぞれ測る。主柱穴は p1、p4、p8、p12、p15 と推定される。

〈炉跡〉

馬蹄形状を呈する複式の炉跡で長軸 1.43m 土、短軸 1.12m を測る。石圓頂端部位に「ロ」の字状の燃焼部を複数有しているのが特徴的である。炉跡内の埋土は、炭化物を微量に含む黒褐色土（10 YR 3 / 2）、多量の焼土を含むやや乾性の暗褐色土（10 YR 3 / 3）、微量の粗砂および炭化物を含むやや軟質の褐色土（10 YR 4 / 4）の3層によって構成されている。

〈重複〉なし

〈出土遺物〉

第40図 56・写真図版 38-1 は胸上部から緩やかに外反する大波状口縁の深鉢形土器で、

口辺部は入念に整研磨され、無文帯が作り出されている。体部には磨消繩文技法と縦長の長横円形状沈線区画文による装飾文様帯が展開している。胎土・焼成とともに良好で、体部地文は比較的粗く施されている。第40図57は底部破片で、磨耗が激しく全体的な文様等は把握できない。

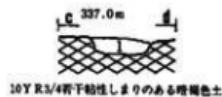
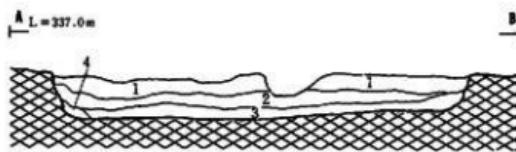
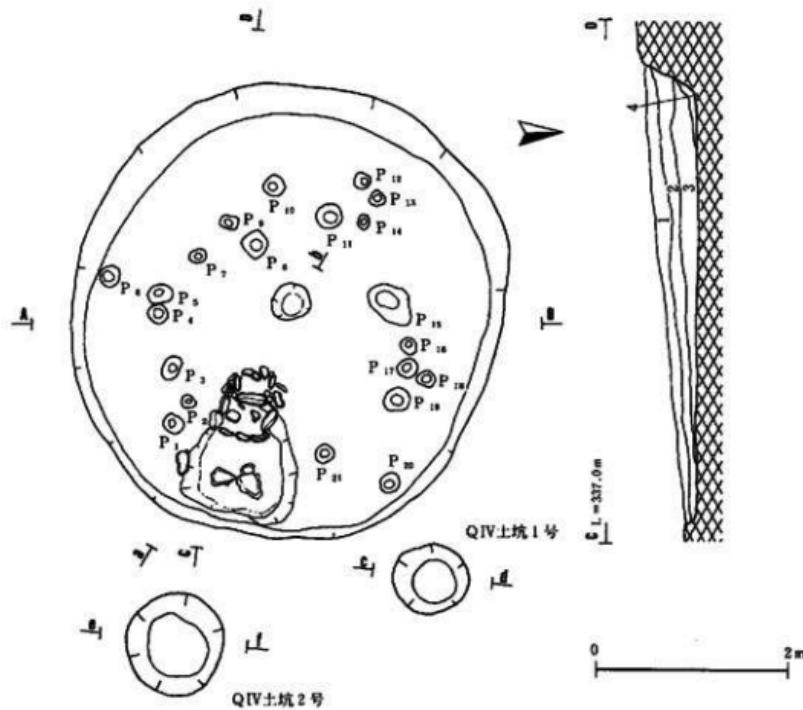
出土石器は石鎌4点、石錐1点、石匙2点、半月状異形石器1点、剝片石器20点、磨製石斧1点、磨石2点である。第42図1・2は有茎石鎌で両面削離加工によって鋭い先端部が作り出されている。第42図3・4は内湾状の抉り入りを有する無茎石鎌で、いずれも入念な両面削離加工が施されている。5は尖頭状の刃部から石錐の破損品であろう。6はつまみ部を有する横形石匙で両面削離加工によって半円弧状の機能刃部が作り出されている。7はつまみ部を有する縦形石匙で、先端部および両側辺に片面加工が施され、鋭利な刃部が作出されている。

9は半月状を呈する異形石器で、周縁部に両面削離加工が施され鋭利な機能刃部が作出されている。削器的機能を有したものと推定される。10、21はやや肉厚の不整長方形形状の剝片を素材とし、先端部位に粗い片面加工痕が観察される。第42図11・第43図14、15、16、19、20はいずれもやや縦長の小剝片を素材とし、先端部位および側辺に僅かな加工痕が観察される。刃部形状などから摺器的機能を有したものと推定される。第42図8・第43図28はいずれも先端部位および両側辺に片面削離加工を施して鋭利な機能部が作出されている。刃部状などから削摺器的機能を有したものと推定される。26はやや肉厚の粘板岩を素材とした剝片石器で、先端部位の粗い片面加工によって機能刃部が作り出されている。

第44図29は緑色凝灰岩を素材とした磨製石斧で入念な整形研磨がなされ、始刃状の鋭利な刃部が作り出されている。30、31は片面および側辺に擦痕が観察される。

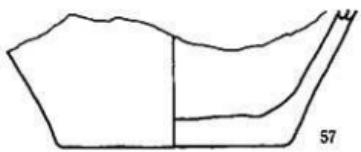
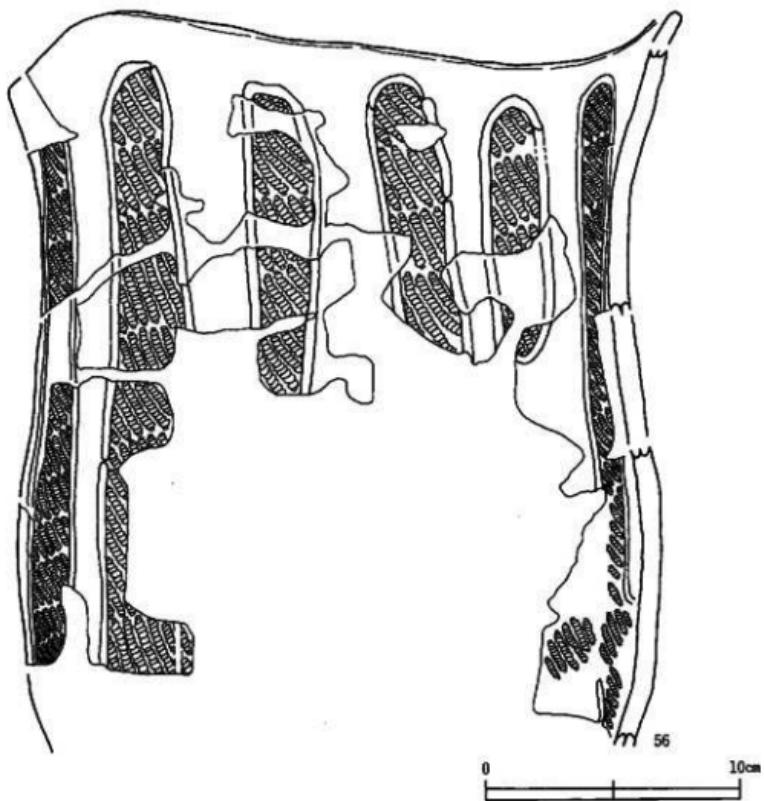
#### 〈時期〉

床面近くの繩文破片および炉跡の形状等から繩文中期後葉大木9式相当のものと推定される。

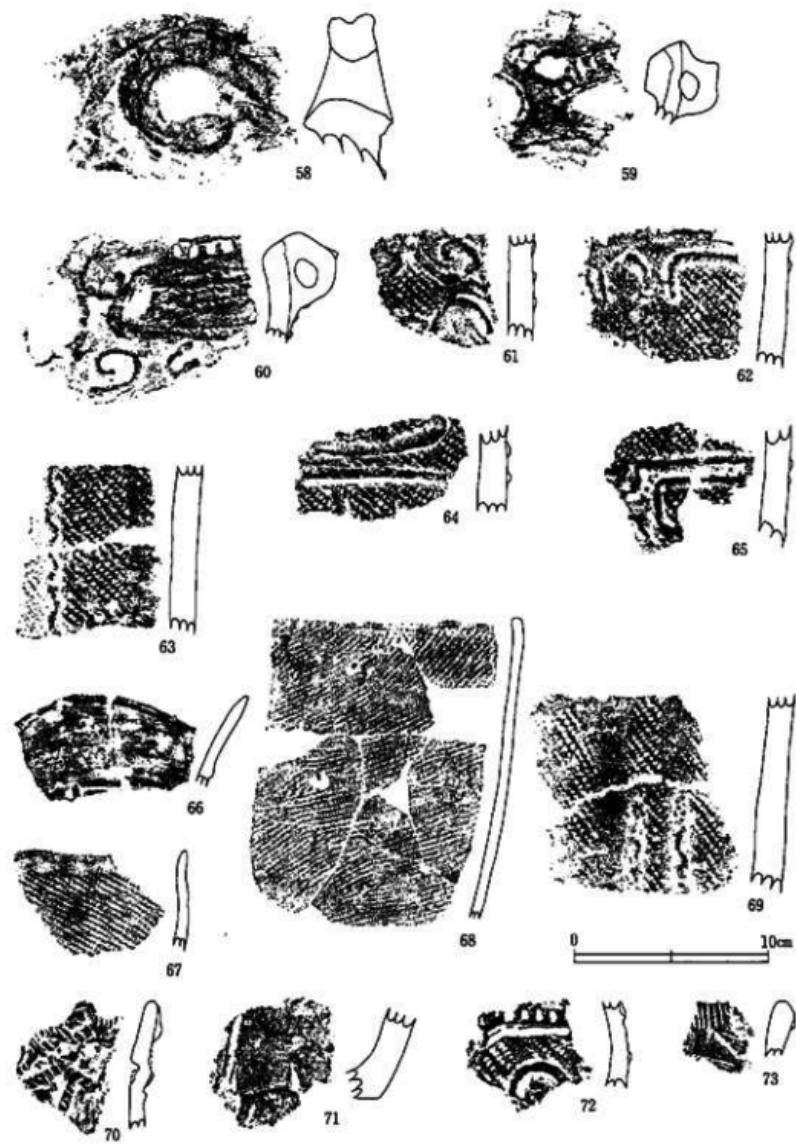


Q IV H-1  
10Y R 3/2 褐褐色土、炭化物を微量に含む  
10Y R 3/2 褐褐色土  
多量の塊土を含むやや灰褐色  
10Y R 4/4 灰褐色土  
塊土の粗砂及び炭化物を含む  
やや軟質

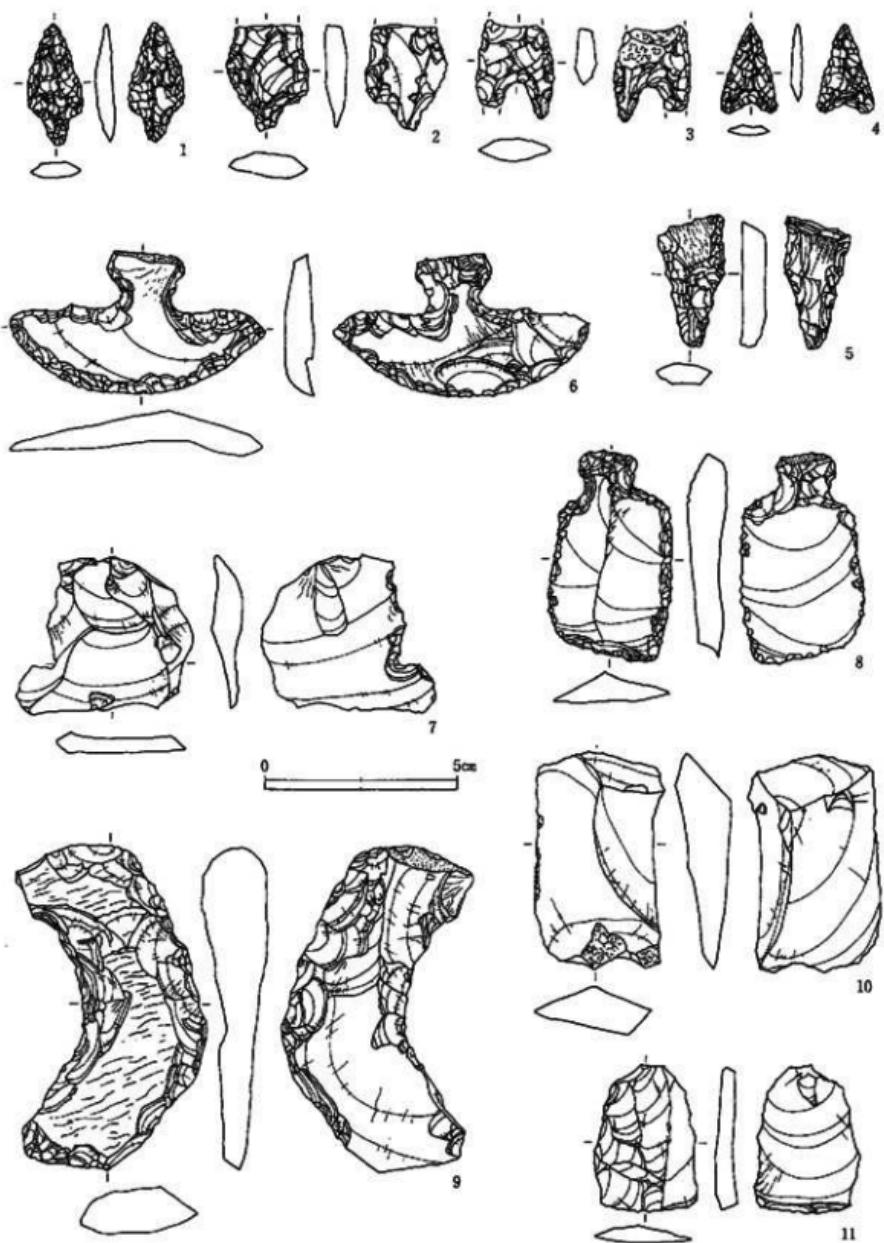
第39図 Q IV 壘穴住居跡 1号・Q IV 土坑1・2号



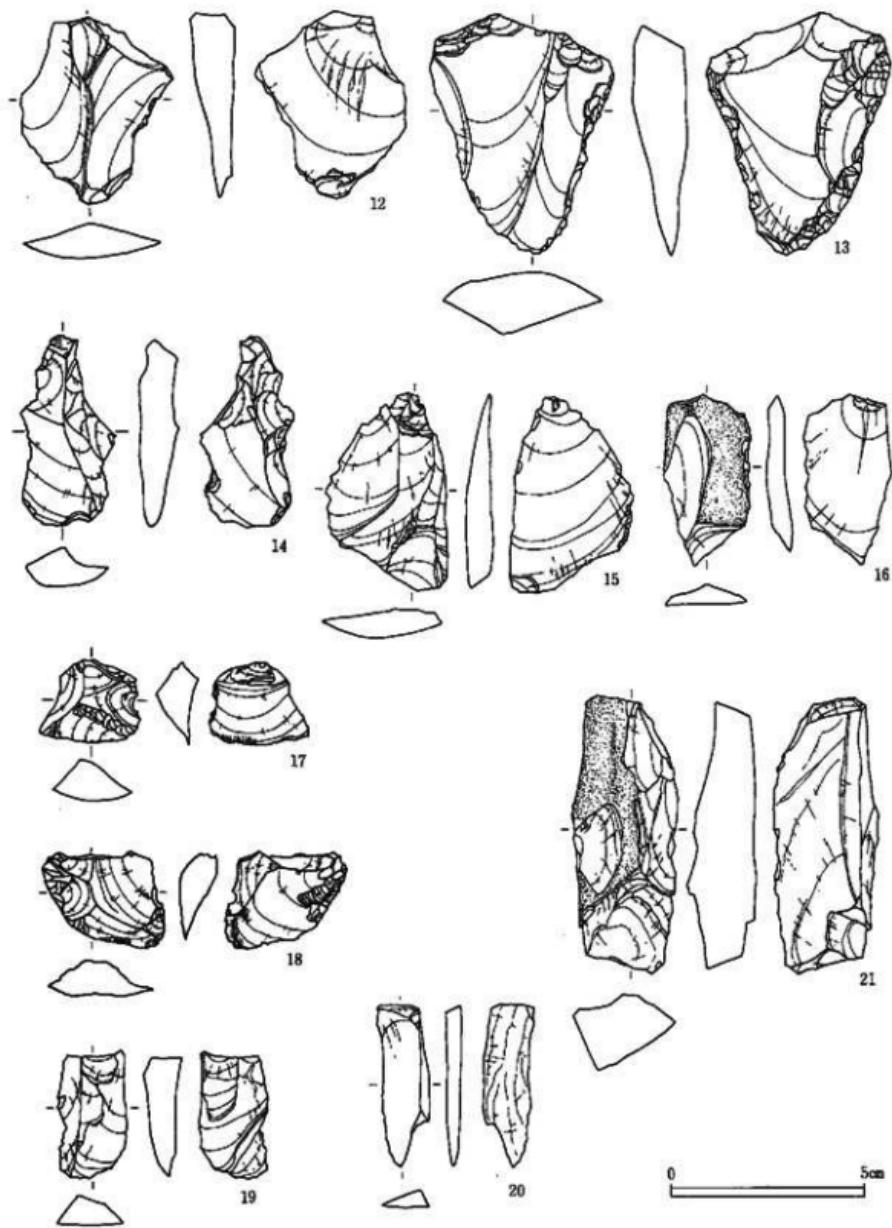
第40図 Q IV 壁穴住居跡 1号 出土遺物 土器(1)



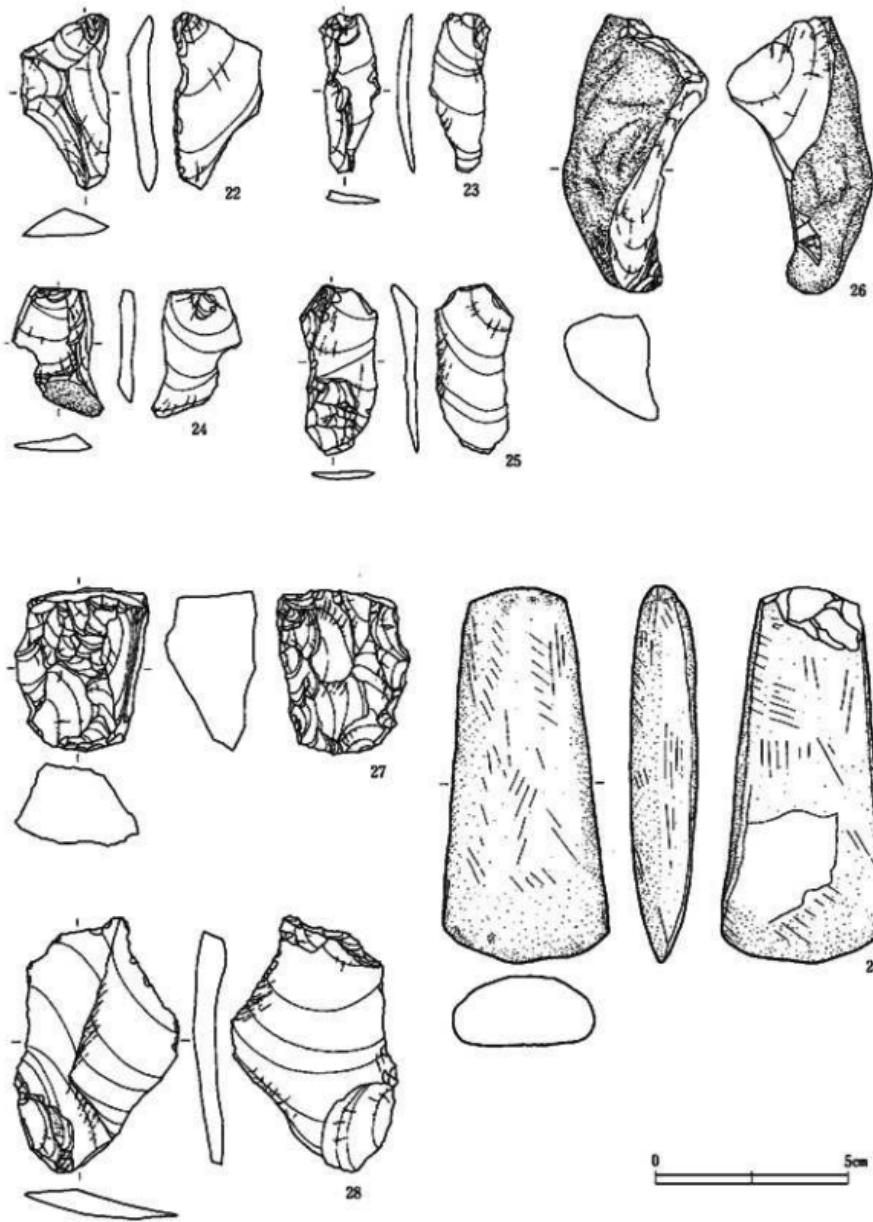
第41図 Q IV 穴住居跡 1号 出土造物 土器(2)



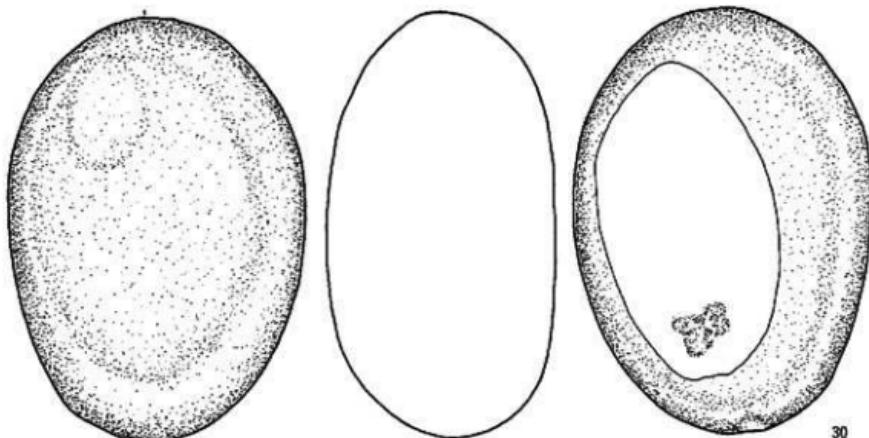
第42図 QIV竪穴住居跡1号出土遺物 石器(1)



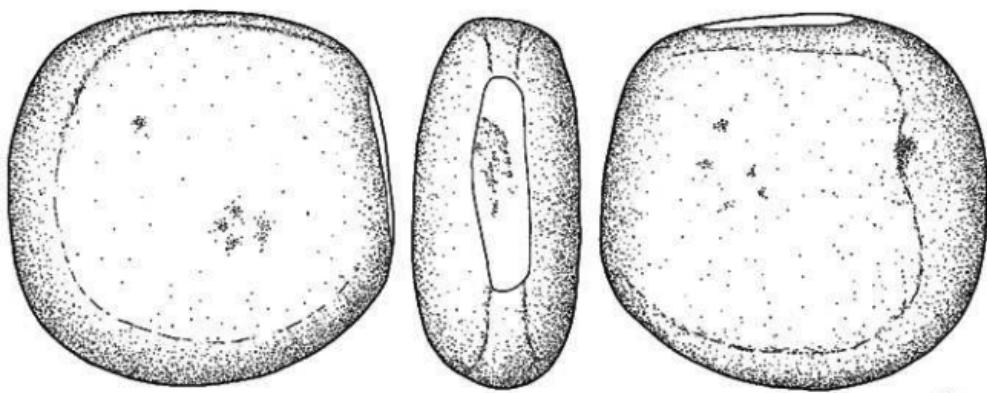
第43図 QIV竪穴住居跡1号出土遺物 石器(2)



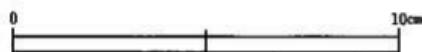
第44圖 QIV 穹穴住居跡 1號出土遺物 石器(3)



30



31



第45図 QIV竪穴住居跡1号 出土遺物 石器(4)

## R II 穹穴住居跡 1 号（第 46 図・写真図版 13）

### 〈位置〉

調査区の北西寄りの平坦部 R II ・ S II グリッドにかけて位置し、西側の一部が調査区域外のため未調査である。

### 〈検出状況〉

IV 層の上位面で焼土および炭化物を含む暗褐色土の不整な広がりを確認し、精査検出した。

### 〈規模・形状〉

現出部の推定で径 3.65 m 土の正円形状のプランを呈するものと考えられる。

### 〈埋土〉

焼土および炭化物を多量に含む暗褐色土 (10 YR 3 / 3)、微量の炭化物を含むやや粘性・湿性の黒褐色土 (10 YR 2 / 3)、微量の炭化物と焼土および黄褐色粘性土が小ブロック状に混入する黒色土 (10 YR 2 / 1) の 3 層によって構成されている。

### 〈床面〉

東側部分はやや軟弱で凹凸が認められるが、全体的に堅くしまり良好である。

### 〈壁〉

西壁は調査区域外のため未検出。北壁、東壁で 5 cm 土～7 cm 土と低く、残存状況は不良である。

### 〈柱穴〉

主柱穴と推定される小ビットは p 1 ~ p 9 が検出されている。p 1 (21 cm × 18 cm × 10 cm)、p 2 (2 cm × 20 cm × 8 cm)、p 3 (18 cm × 16 cm × 7 cm)、p 4 (12 cm × 10 cm × 7 cm)、p 5 (14 cm × 10 cm × 7 cm)、p 6 (15 cm × 12 cm × 6 cm)、p 7 (12 cm × 9 cm × 7 cm)、p 8 (14 cm × 10 cm × 5 cm)、p 9 (17 cm × 15 cm × 8 cm) をそれぞれ測る。

### 〈炉跡〉

橢円形状に整然と配列した土器埋設石窯炉で長軸 0.62 m 土、短軸 0.52 m 土を測る。炉跡内の埋土は多量の炭化物および焼土粒を含むやや乾性の暗褐色土 (10 YER 3 / 4) の単層である。

### 〈重複〉

R III 穹穴住居跡 1 号の西側部分の一部を埋め立て構築されている。

### 〈出土遺物〉

第 47 図 74 ・ 写真図版 40 - 1 は頭部より「逆く」の字状にやや内傾気味に立ち上がる鉢形土器で、口唇部は刻目によって小波状様に仕上げられている。口縁部文様帶は沈線と連続刻突文帶の三段繰返しで構成され、体部文様帶の上限が示されている。体部の羽状織文は整然と施文されている。なお底部周縁は入念な器面調整で無文化されている。色調は橙色を呈し、胎土・

焼成とともに良好で堅緻な作りである。器高 16.6 cm、口径 19.6 cm、底径 5.3 cm、器厚 0.6 cm を測る。

第 47 図 77 は鉢形土器の底部周縁の破片で、体部地文は原体 LR によって施されている。胎土・焼成とともに良好で堅緻な作りである。

第 47 図 75・写真図版 40-2 はミニチュアの壺形土器で、頸部から外反気味に立ち上がり球体に近い形状を呈している。体部は入念に無文研磨され、光沢を有している。色調はにい黄橙色を呈し、胎土・焼成とともに良好で堅緻な作りである。器高 3.6 cm、口径 2.7 cm を測る。

第 47 図 78・79・80 は本竪穴住居跡の北西側擾乱部分より出土した口縁部破片で、全体的な器形などは把握できないが、三叉状入組文を主体文様とした鉢形土器と推定される。

第 47 図 81 は鉢形土器～浅鉢形土器の口縁部破片と推定され、やや肉厚の口唇部は一条の溝線と波状風の彫刻的な作り出しによって上面観を意識した構成となっている。なお口辺部には二条の平行する線が施され、体部地文帯（原体 LR 横）の上限を画している。胎土・焼成とともに良好で堅緻な作りである。

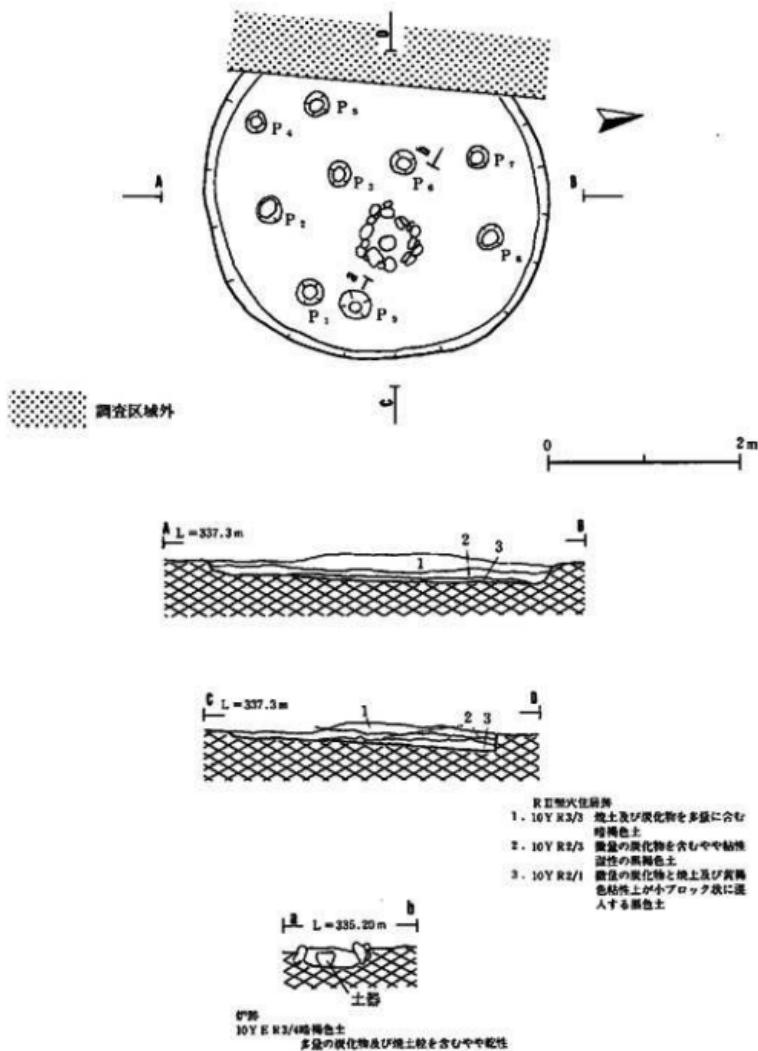
第 47 図 82 は入念に研磨された無文地に沈線が施される精製品で、胴央部位から「逆く」の字状に屈折ところから注口土器に近い器形を呈するものと推定される。

第 47 図 83 は頸部より緩やかに外反する深鉢形土器で、口唇部内側が入念に削ぎ取り調整されているのが特徴的である。なお口縁部は無文化され、体部地文は原体 RL によって施されている。

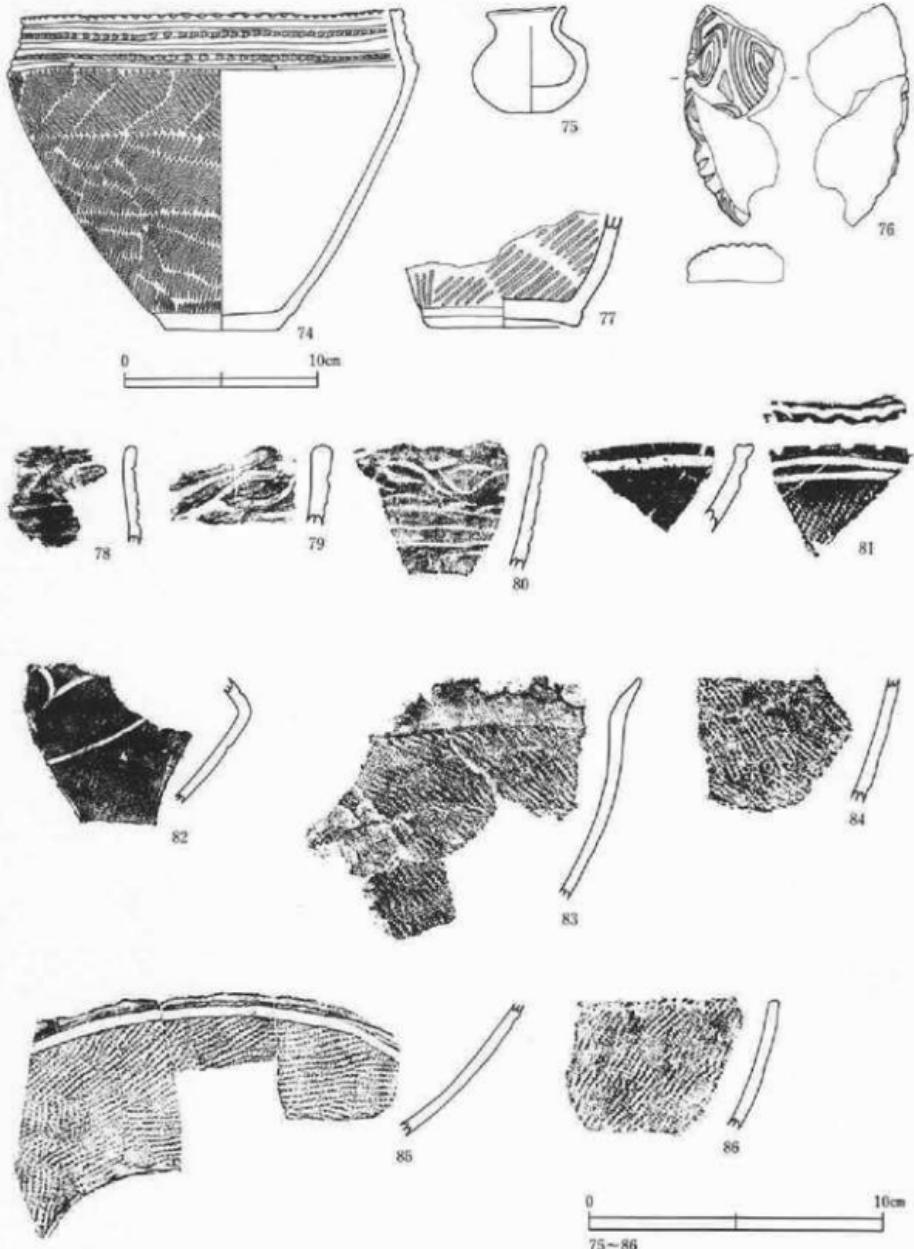
第 47 図 86 はやや内湾気味に立ち上がる粗製深鉢形土器で、口唇部上端が平坦に整形され挫れの痕跡が観察される。胎土・焼成とともに良好で堅緻な作りとなっている。

第 47 図 85 は浅鉢形土器に近い器形と推定され、二条の平行する沈線によって体部地文帯の上限が画されている。体部地文は原体 LR によって付され、薄手であるが、胎土・焼成とともに良好で堅緻な作りである。

第 48 図 1・写真図版 41 はミニチュア壺形土器とともに炉跡に近接して出土した梢円形状の土版で、表面側には沈線による四対の「の」の字状溝巻文とその間に付される三角帶文が浮彫り的な手法によって入念に仕上げられて、明らかに人面を意識したモチーフとなっている。裏面は縱走する刺突列文によって二分割され、左右それぞれに表面と同様の加飾技法によるやや横広がりの人面をモチーフとした文様が表出されている。色調は黄橙色を呈し、胎土・焼成とともに良好で堅緻な作りである。最大長 10.6 cm、最大幅 9.0 cm、厚さ 2.6 cm を測る。



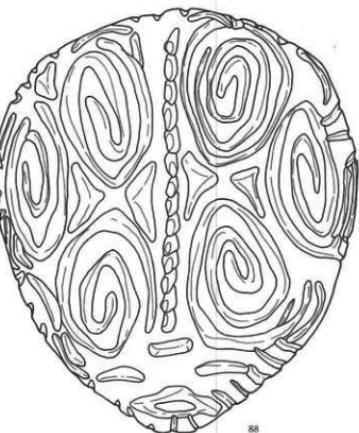
第46図 R II 穴住居跡 1号



第47図 R II 竪穴住居跡 1号 出土遺物 土器



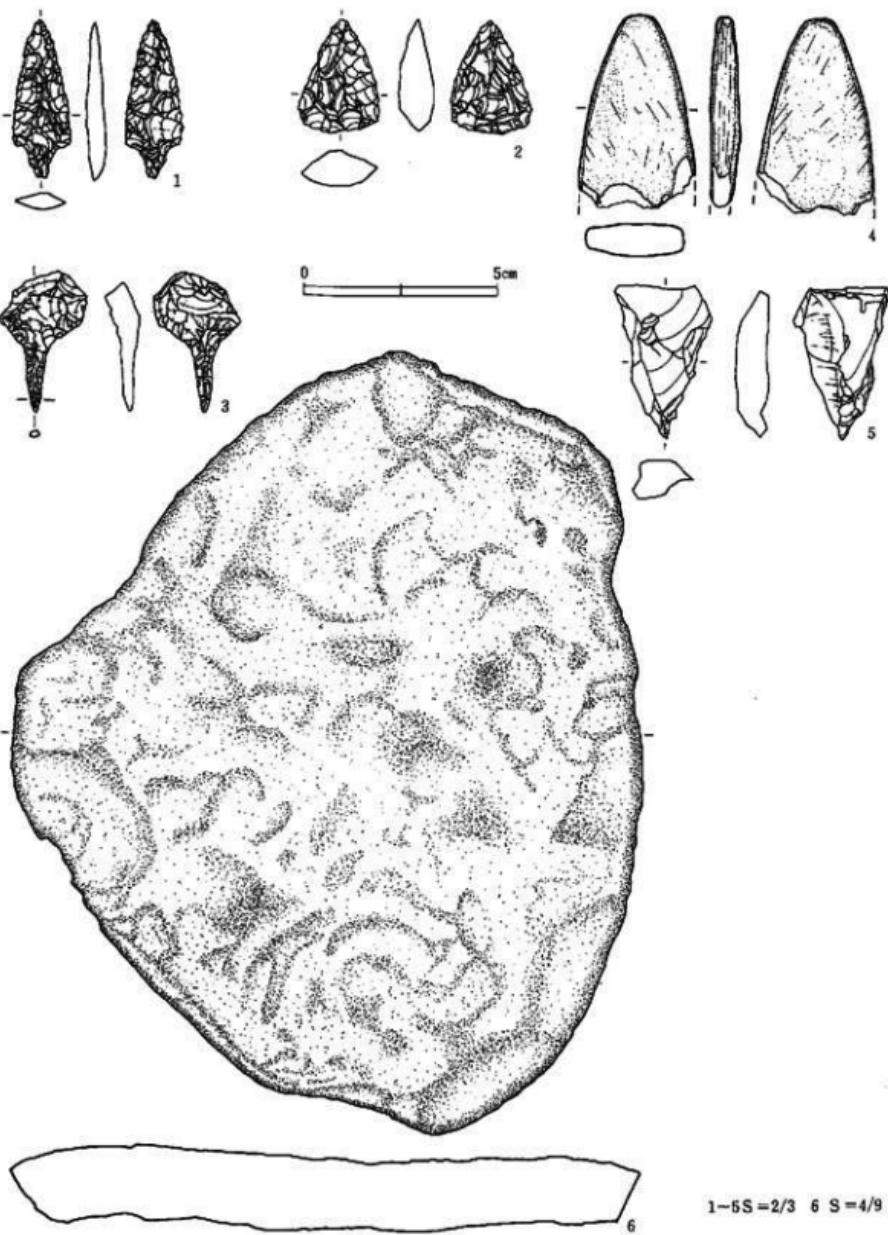
87



88



第48図 R II 積穴住居跡 1号 出土遺物土版



第49図 R II 竪穴住居跡 1号 出土遺物 石器

第47図76は第48図1と同様、沈線による「の」の字状渦巻文と三角蒂文が浮彫り調に仕上げられた土版と推定される。胎土・焼成ともに良好で堅緻な作りである。現存部最大長7.5cm、現存部幅3.4cm、厚さ1.2cmを測る。

出土石器は石鎌2点、石錐2点、磨製石斧1点、石皿1点である。第49図1は入念な両面剥離加工の施された有茎石族である。第49図2は二等辺三角形を呈する両面剥離加工の無茎石鎌で、基部はやや丸みをもって作り出されている。3は珪質泥岩を素材としたつまみ部を有する石錐で、先端部は両面剥離加工によって鋭いドリル状に作り出されている。4は粘板岩を素材とした定角式の磨製石斧で、刃部は破碎痕が顕著に観察される。5は先端部位置に粗い両面加工が施され、ドリル状の機能部が作出されている。刃部形状などから石錐的な機能をもたせたものと考えられる。6は扁平な両輝石安山岩を素材とした石皿で、器表全面で痘瘍状の痕跡が観察される。第52図7は両輝石安山岩砾を素材とした凹石で、三個の凹状の痘瘍が観察される。

#### 〈時期〉

炉跡埋設の鉢形土器や床面出土土器片などから晩期後葉大洞C<sub>1</sub>式のものと推定される。

### RⅢ堅穴住居跡1号（第50図・写真図版14）

#### 〈位置〉

調査区の北西寄り緩斜面RⅢ・RIV・SⅢ・SIVグリッドにかけて位置している。

#### 〈検出状況〉

IV層上位面でRⅡ堅穴住居跡1号と接する微量の炭化物を含む軟質および湿性の黒色土の不整な広がりを認め、精査検出した。

#### 〈規模・形状〉

4.55m±×4.30m±の不整形円形状のプランを呈する。

#### 〈埋土〉

微量の炭化物を含むやや軟質・湿性の黒色土(10YR2/1)、若干褐色土が霜ぶり状に混入する軟質暗褐色土(10YR3/4)の2層によって構成されている。

#### 〈床面〉

全体的に堅く踏みしめられて良好である。

#### 〈壁〉

緩やかな立ち上がりで、西壁はRⅡ堅穴住居跡1号によって若干崩落しているが壁高25cm～30cm±を測る。東壁は残存状況は不良で僅かな立ち上がりが確認される程度である。

#### 〈柱穴〉

柱穴と推定される小ピットは p1～p15 が検出されている。p1 (20 cm × 18 cm × 12 cm)、p2 (22 cm × 20 cm × 8 cm)、p3 (14 cm × 12 cm × 8 cm)、p4 (9 cm × 9 cm × 5 cm)、p5 (18 cm × 16 cm × 10 cm)、p6 (19 cm × 19 cm × 12 cm)、p7 (7 cm × 7 cm × 5 cm)、p8 (8 cm × 8 cm × 6 cm)、p9 (23 cm × 21 cm × 12 cm)、p10 (16 cm × 16 cm × 7 cm)、p11 (6 cm × 6 cm × 4 cm)、p12 (15 cm × 13 cm × 6 cm)、p13 (19 cm × 16 cm × 8 cm)、p14 (20 cm × 17 cm × 7 cm)、p15 (25 cm × 23 cm × 10 cm) を測る。

#### 〈炉跡〉

床面のほぼ中央部に微量の焼土の広がりが見られたが、炉石抜き取りの痕跡等は確認できなかった。おそらく地床炉的なものと推定される。

#### 〈重複〉

R II 穴住居跡 1 号によって西側の一部が埋め立てられている。

#### 〈出土遺物〉

第 51 図 89・写真図版 42-1 は胴上部からやや内湾気味に立ち上がる深鉢形土器で、口唇部上端は入念に整形調整されている。体部地文は原体 RL によって施されている。色調はにぶい褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好で堅緻な作りである。現存部器高 23.8 cm、口径 38.4 cm を測る。第 51 図 90 は胴央部破片で、体部地文は原体 LR によって付され、胎土・焼成とともに不良で全体的に脆弱である。

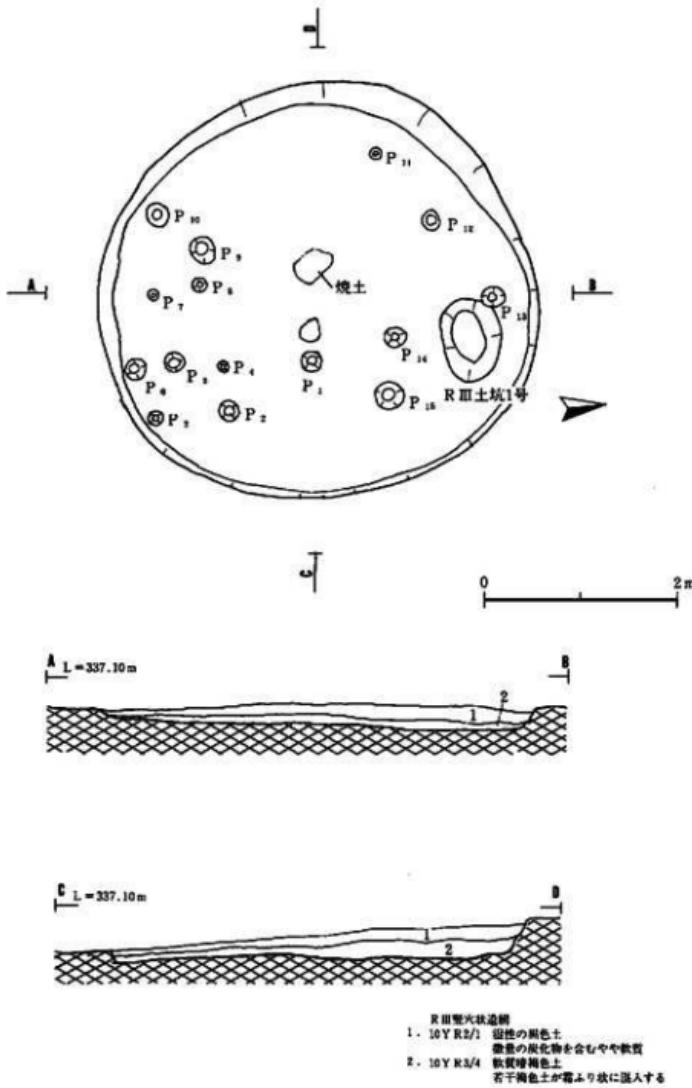
第 51 図 93 は原体 LR によって晩期後葉特有の糸の長い縄文が地文として施されている。

第 51 図 92 は頭部位より「く」の字状に外反する鉢形土器片で、浮彫り的な手法によって羊齒状文風の装飾文様帯が展開している。第 51 図 91 は床面北寄りの近現代の擾乱穴（農作業用廻糞穴）より出土した口縁部破片で、隆起線による渦巻文が付されている。

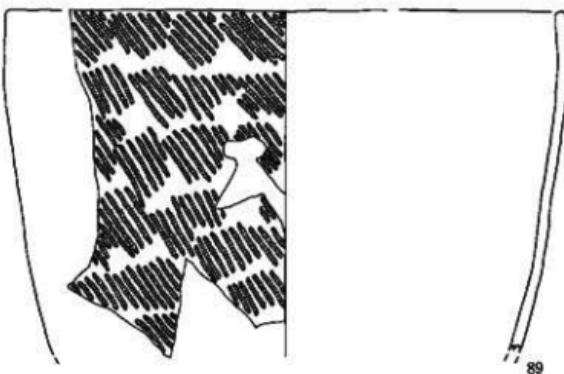
出土石器は石錐 2 点、石錐 1 点、楕円形状石器 1 点、剝片石器 3 点である。第 52 図 1、2 は基部が僅かに内湾する二等辺三角形状の無茎石錐で、いずれも入念な両面剥離加工が施されている。3 は両面加工によって先端部位がドリル状に作出されている石錐である。4 は楕円形状石器で、周縁部に両面加工を施して整理刃部が作り出されている。5 は珪質泥岩を素材とした不整形形状の剥片石器で、底辺部位に僅かに加工の痕跡が認められる。削器的な機能を有したものと推定される。6、7 は先端部位に粗い片面加工を施して尖頭状の機能刃部を作出している。搔器的な機能が推定される。

#### 〈時期〉

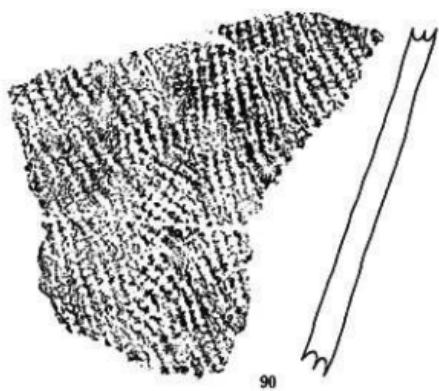
床面出土の遺物から縄文晩期前半のものと推定される。



第50図 R III 竪穴住居跡 1号



89



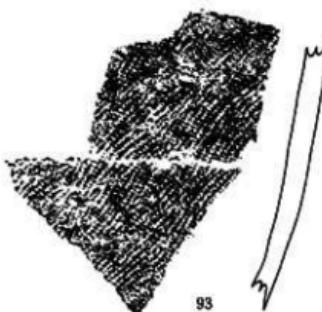
90



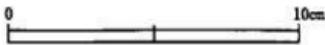
91



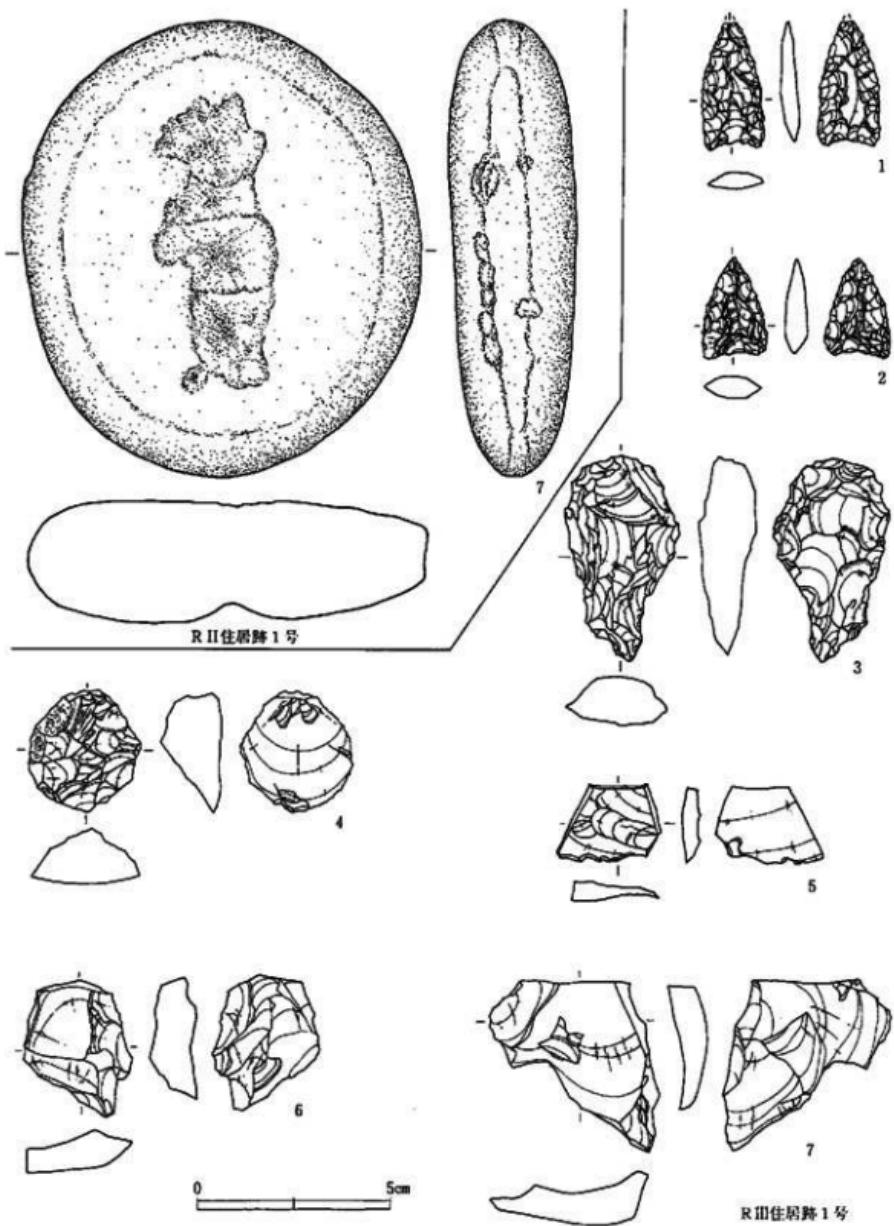
92



93



第51図 R III 竪穴住居跡 1号 出土遺物 土器



第52図 R II. R III 穴住居跡 1号 出土遺物 石器

## SIV整穴住居跡1号（第53図・写真図版14・15）

### 〈位置〉

調査区のやや北西寄り緩斜面 RIV・SIVグリッドにかけて位置している。

### 〈検出状況〉

IV層上面で細砂および微量の炭化物を含む乾性黒褐色土の不整円形状の広がりを確認し、精査検出した。

### 〈規模・形状〉

3.55 m<sup>2</sup> × 3.42 m<sup>2</sup> の不整円形状のプランを呈する。

### 〈埋土〉

細砂および微量の炭化物を含むやや乾性の黒褐色土 (10 YR 3 / 2)、微量の焼土粒と小ブロック状に褐色粘性土を含むやや軟質・湿性の暗褐色土 (10 YR 3 / 3) の2層によって構成されている。

### 〈床面〉

SIV土坑1号、SIV土坑2号などの重複によって全体的にやや凹凸が認められる。

### 〈壁〉

全体的に残存状況は不良で、周縁に遡る小柱穴の配列に沿ってかろうじて確認される程度である。

### 〈柱穴〉

柱穴状小ビットは周壁に沿って p1～p15 が検出されている。p1 (10 cm × 9 cm × 6 cm)、p2 (16 cm × 14 cm × 6 cm)、p3 (12 cm × 10 cm × 5 cm)、p4 (9 cm × 6 cm × 6 cm)、p5 (7 cm × 7 cm × 6 cm)、p6 (8 cm × 7 cm × 5 cm)、p7 (7 cm × 7 cm × 6 cm)、p8 (5 cm × 5 cm × 4 cm)、p9 (6 cm × 5 cm × 6 cm)、p10 (14 cm × 12 cm × 8 cm)、p11 (9 cm × 7 cm × 7 cm)、p12 (12 cm × 11 cm × 7 cm)、p13 (10 cm × 9 cm × 5 cm)、p14 (7 cm × 6 cm × 4 cm)、p15 (7 cm × 5 cm × 5 cm)、p16 (4 cm × 4 cm × 3 cm) をそれぞれ測る。

### 〈炉跡〉

床面中央やや北寄りに位置していたものと推定されるが、SIV土坑1号によってその大半が切り崩され、炉跡の残部と僅かな焼土痕が確認される程度である。

### 〈重複〉

SIV土坑1号 (1.32 m<sup>2</sup> × 1.25 m<sup>2</sup> の不整梢円形状のプランを呈し、埋土はやや軟質・粘性の暗褐色土 10 YR 3 / 3、微量の炭化物および粗砂を含む黒色土 10 YR 2 / 1、やや乾性の黒褐色土が霜ふり状に混入する褐色土 10 YR 4 / 4 の3層で構成) によって炉跡の大半と北寄りの床面の一部が切り崩されている。また SIV土坑2号 (1.12 m<sup>2</sup> × 0.86 m<sup>2</sup> の梢円形状のプランを

呈し、埋土は微量の炭化物および・褐色粘性土がブロック状に混入する暗褐色土7.5 YR 3 / 3、微量の粗砂を含む極暗褐色土7.5 YR 2 / 3の2層によって構成）を埋め立て構築されている。

#### 〈出土遺物〉

第54図94は口縁外反の台付鉢形土器で、口唇部が小波状様に入念な作り出しがなされている。剥落磨滅が激しく全体的な文様構成は把握できないが、胴上部から口縁部にかけて沈線・磨消技法による入組文的なモチーフが展開し、その上下限は沈線によって示されている。なお体部地文は原体LR横によって付されている。色調はにぶい褐色を呈し、胎土・焼成とともに良好で堅緻な作りである。現存部器高13.0cm、口径15.5cm、器厚0.5cmを測る。

第54図95は肩部よりやや内傾気味に立ち上がる短頸壺形土器で、全体として球体に近い形状を呈している。

体部地文は原体LR横によって付され、胎土・焼成とともに良好で堅緻な作りである。器高10.8cm、口径3.9cm、底径6.4cm、器厚0.7cmを測る。

第54図96は胴央部から内湾気味に立ち上がる粗製深鉢形土器で、口唇部上端は「匁」状に入念な整形が施されている。なお底部周縁は整形調整によって無文化されている。体部地文は原体RLによって付され、胎土・焼成とともに良好で堅緻な作りである。色調は橙色を呈し、器高32.0cm、口径22.7cm、底径7.2cm、器厚0.8cmを測る。

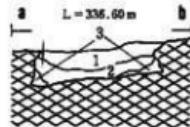
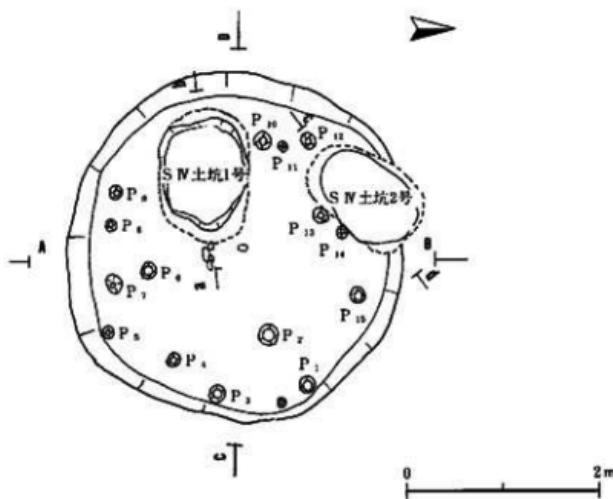
第54図97は3と同様、胴央部から緩やかに立ち上がり、やや内湾気味の口縁を有する粗製鉢形土器である。口唇部は入念に整形され、「匁」状を呈し、体部地文は原体LR横によって施されている。色調は褐色を呈し、胎土・焼成とともに良好で堅緻な作りである。器高12.8cm、口径12.8cm、底径5.0cm、器厚0.5cmを測る。

第55図103・写真図版45-1は北寄り床面より出土した土製品で、頭部および背面の剥落が激しく全体的な様相は把握できないが、手部・脚部の形状などから動物を題材としたものとも考えられる。長さ10.5cm、胴回り2.7cmを測る。

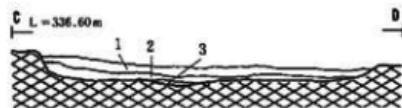
第55図104は耳栓状を呈する土製品で入念に成形されている。色調は橙色を呈し、長さ1.7cm、円形容幅1.9cmを測る。胎土・焼成とともに堅緻な作りである。105は円錐状を呈する異形土製品でその使用目的などは不明である。色調はにぶい黄橙色を呈し、長さ4.2cm、幅2.0cmを測る。

第54図98～102はSIV土坑2号の埋土内よりの出土破片で、いずれも平行沈線による帶綱文を主体装飾文様としている。98はこの帶綱文が曲沈線によって連結する構成となっている。

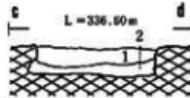
出土石器は剥片石器4点、打製石斧1点、石皿1点で、第56図1～4はいずれも先端部位に細片面加工を施して切り出しナイフ状の刃部を作出している。5は発状を呈する打製石斧で、先端部位に破碎痕が観察される。6は両輝石安山岩を素材とした石皿で中央部位が緩やかな凹



1. 10Y R3/3暗褐色土 やや軟質・粘性  
 2. 10Y R2/1出色土 硫量の炭化物及び粗砂  
を含む  
 3. 10Y R4/4褐色土 やや軟性的出焉土上が  
泥より灰に侵入する



S IV型穴住居跡  
 1. 10Y R3/2出色土上  
細砂及び微粒の炭化物を含むやや粘性  
 2. 10Y R3/3暗褐色土  
微量の塊土と小ブロック状に褐色粘性土を  
含むやや軟質・粘性

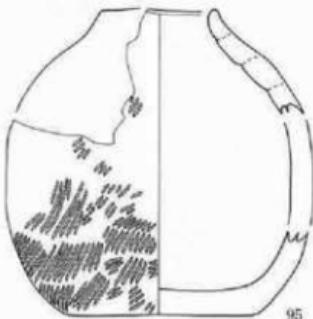


1. 7.5Y RA/3暗褐色土  
微量の炭化物及び褐色粘性土が  
ブロック状に混入する  
 2. 7.5Y R2/3褐色褐色土  
炭量の粗砂を含む

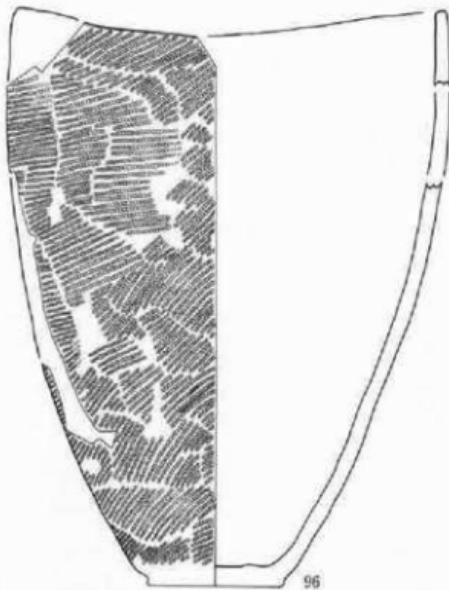
第53図 S IV型穴住居跡 1号



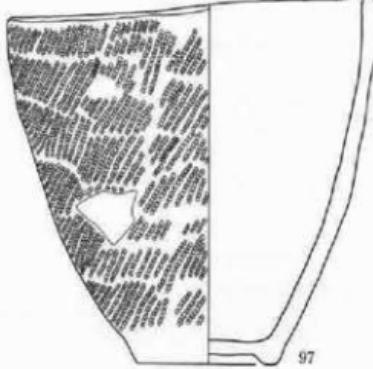
94



95



96



97



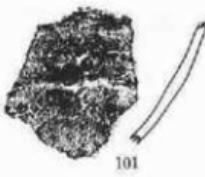
98



99



100

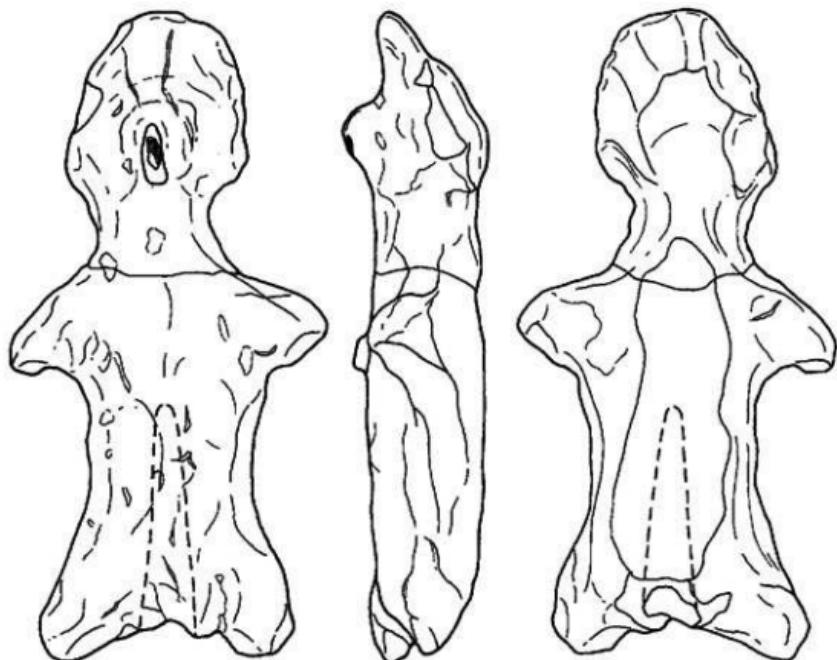


101

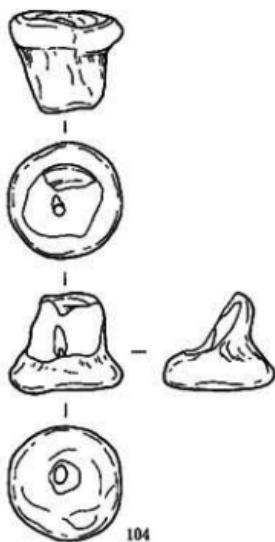


102

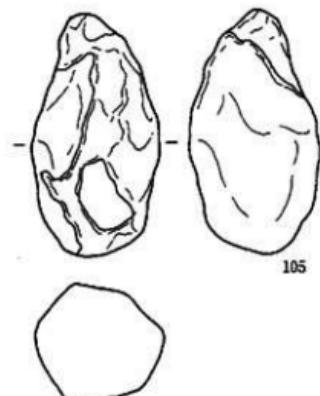
第54図 S IV 竪穴住居跡 1号 出土遺物 土器



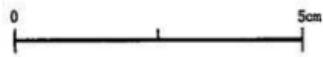
103



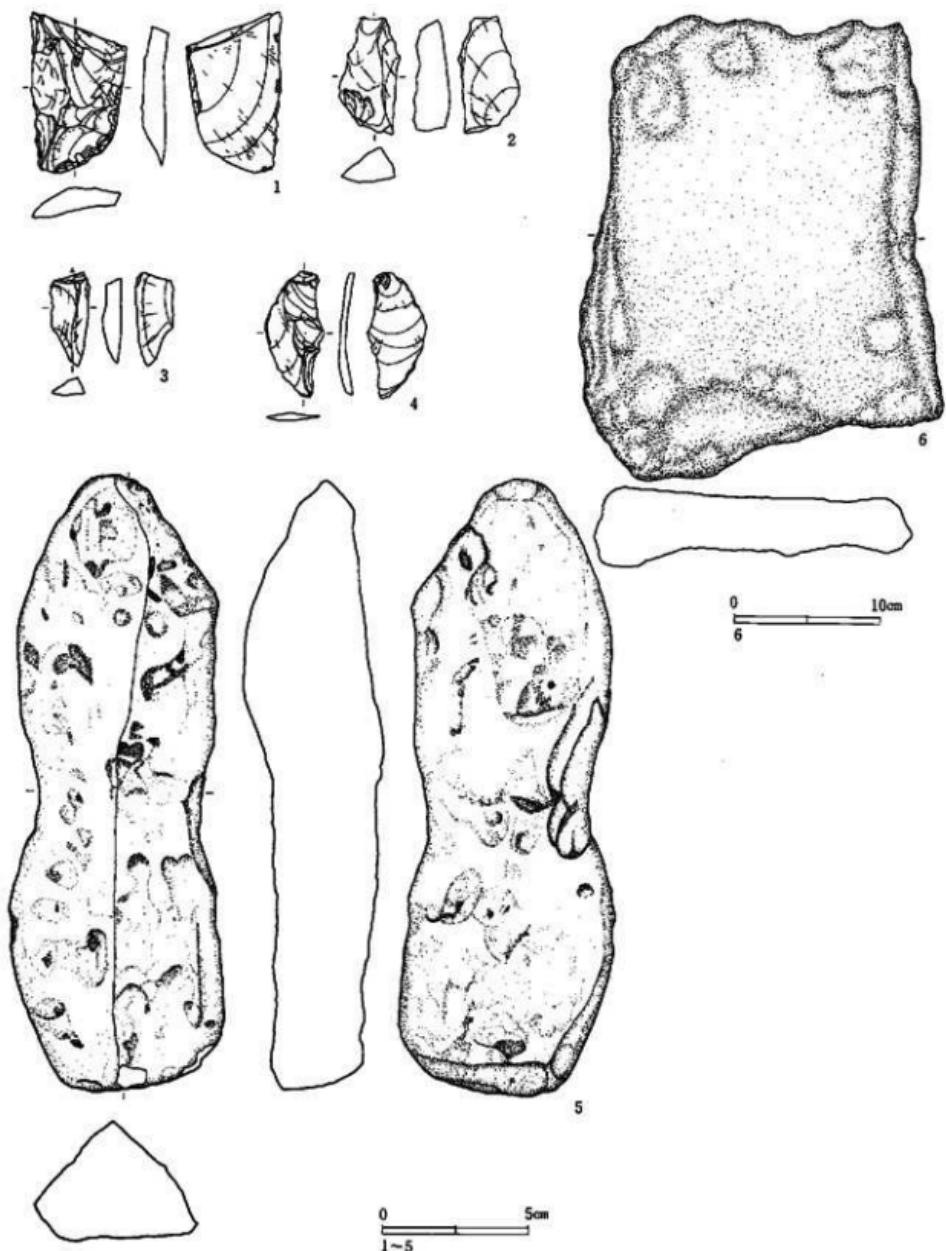
104



105



第55图 SIV竖穴住居跡1号 出土造物 土製品



第56図 S IV聖火住居跡 出土遺物 石器

状を呈している。

〈時期〉

出土遺物などから縄文晩期前半のものと推定される。

(2)堅穴状遺構

JIV堅穴状遺構1号（第57図・写真図版16）

〈位置〉

調査区のやや南寄り緩斜面部IIV・IV・JIV・JVにかけて位置している。

〈検出状況〉

IV層上位面でJIII堅穴住居跡1号に接するやや軟質および粘性のある黒褐色土の不整な広がりを確認し、精査検出した。

〈規模・形状〉

4.05m×3.95m土の不整円形プランを呈する。

〈埋土〉

やや軟質および粘性の黒褐色土（7.5YR3/2）、微量の粗砂を含む乾性の極暗褐色土（7.5YR2/3）の2層によって構成されている。

〈床面〉

中央部から東寄りにかけて若干凹凸が認められるが、全体的に堅く踏みしめられて良好である。

〈壁〉

残存状況は不良で、西壁で10cm土、東壁では5cm土を測る。

〈柱穴〉

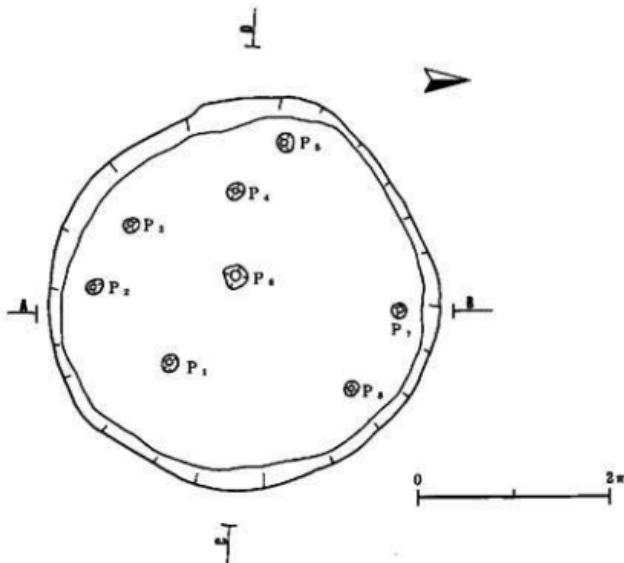
柱穴状小ピットはp1～p8が検出されている。p1（16cm×15cm×5cm）、p2（13cm×11cm×4cm）、p3（8cm×8cm×4cm）、p4（8cm×6cm×10cm）、p5（11cm×9cm×7cm）、p6（20cm×16cm×9cm）、p7（8cm×8cm×6cm）、p8（8cm×6cm×4cm）を測る。

〈炉跡〉

焼土および炉跡などは確認できなかった。

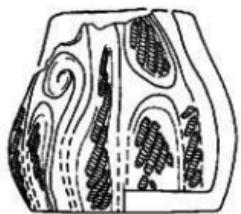
〈重複〉

JIII堅穴住居跡1号の東側の一部を切って構築されたものと推定される。

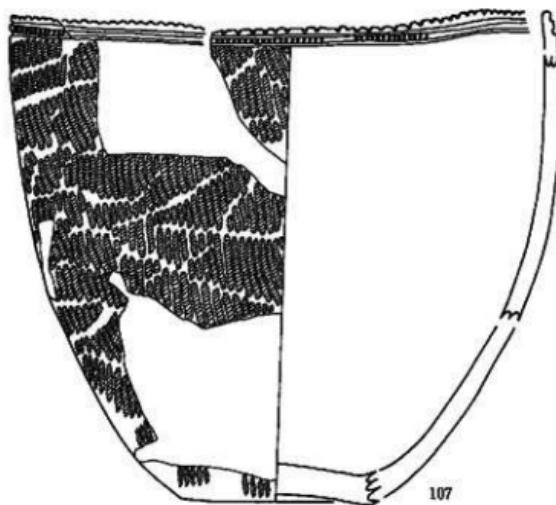


1. 7.5Y R3/2暗褐色土 やや軟質を及び粘性  
2. 7.5Y R2/3暗褐色土 硬質の粗砂を含む

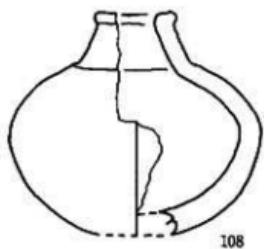
第57図 JIV堅穴状造構1号



106



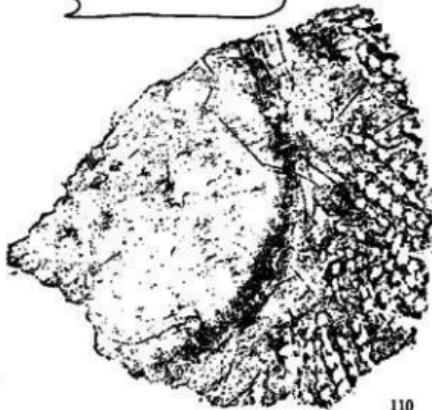
107



108



109



110



第58圖 J IV 穹穴狀造模1號出土遺物 土器

#### 〈出土遺物〉

第58図106・写真図版46-1は北東壁際の精査段階で立木の抜根に混じり出土した小形土器で、胴央部より内傾して立ち上がる口縁を有している。体部には隆沈線による渦巻文が展開し、体部地文は原体RLによって付されている。色調はにぶい黄褐色を呈し、胎土・焼成等は良好で堅緻な作りである。器高5.2cm、口径3.8cm、底径5.0cm、器厚0.5cmを測る。

第58図107・写真図版46-2は胴央部より内溝気味に立ち上がる小波状を呈する鉢形土器で、口辺部は平行沈線とその間に付された刻目文によって装飾されている。体部地文は原体RLによって条の長い繩文が施されている。色調はにぶい褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好で堅緻な作りである。器高13.1cm、口径14.3cm、底径5.0cm、器厚0.5cmを測る。

第58図108・写真図版46-3は頸頭部より緩やかに外反する小形の細口壺形土器である。体部に入念に無文研磨され、光沢を有している。色調は橙色を呈し、胎土・焼成ともに良好で堅緻な作りである。器高5.9cm、口径2.2cmを測る。

第58図110・写真図版46-5は粗製深鉢形土器の底部破片で、全体的な形状は把握できないが、体部地文は原体LR横によって付されている。

#### 〈時期〉

埋土内より出土した遺物などから縄文時代晩期後葉のものと推定される。

#### LIII堅穴状遺構1号（第59図・写真図版17）

##### 〈位置〉

調査区のやや南東より緩斜面部LIIIグリッドの中央に位置している。

##### 〈検出状況〉

IV層上位面でKIII堅穴住居跡1号・MIII堅穴住居跡1号・2号と近接する微量の粗砂を含むやや乾性の暗褐色の梢円形状の広がりを確認し、精密検出した。

##### 〈規模・形状〉

4.05cm±×3.65m±不整梢円形状のプランを呈する。

##### 〈埋土〉

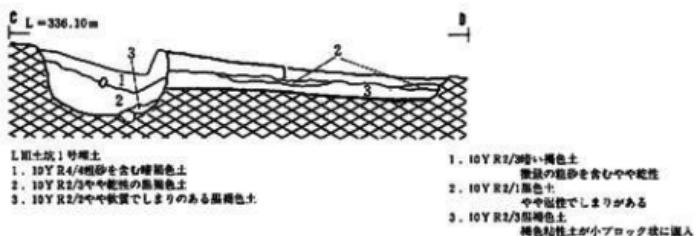
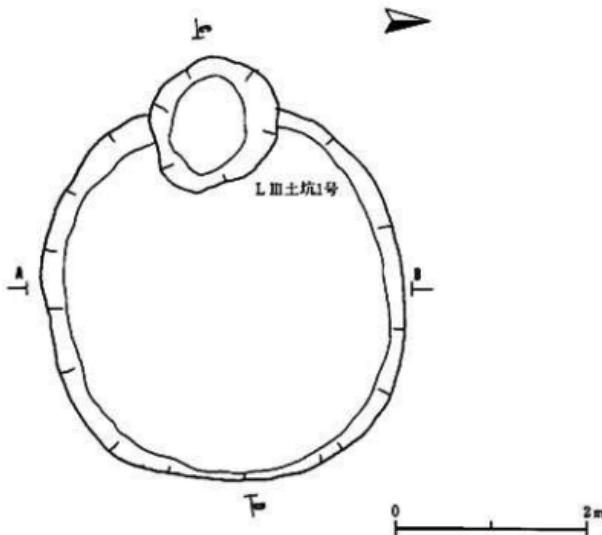
微量の粗砂を含むやや乾性の暗褐色土(10YR3/3)、やや湿性でしまりのある黒色土(10YR2/1)、褐色粘性土が小ブロック状に混入する黒褐色土(10YR2/3)の3層によって構成されている。

##### 〈床面〉

西壁周辺部位は堅くしまっているが、全体的に軟弱で不良である。

##### 〈壁〉

南壁および北壁は残存状況は不良である。西壁は一部LIII土坑1号によって切られ崩落して



第58図 L III 穴状造構1号 L III 土坑 1号

いるが壁高 40 cm 土を測る。

〈重複〉

LIII 土坑 1 号によって西壁の一部が切られている。

〈時期〉

遺物は皆無で時期を特定することはできなかった。

UVI 穴状造構 1 号 (第 60 図・写真図版 18)

〈位置〉

調査区の北側緩斜面部 UIII・UVI・VIII・VIV にかけて位置している。

〈検出状況〉

IV 層上位面で粗砂を含むやや湿性のある黒褐色の不整な広がりを確認し、精査検出した。

〈規模・形状〉

6.75 m 土 × 5.65 m 土 の不整梢円形状のプランを呈する。

〈埋土〉

粗砂を含むやや湿性黒褐色土 (7.5 YR 3/2)、やや乾性で微量の炭化物を含む極暗褐色土 (7.5 YR 2/3)、粘性でしまりのある暗褐色土 (7.5 YR 3/4) の 3 層によって構成されている。

〈床面〉

全体的に凹凸が観察され、軟弱である。

〈壁〉

全体的に脆弱で西壁は風倒木によって崩落しているが、全体に緩やかな立ち上がりで 30 cm ~ 40 cm 土を測る。北壁の一部は VIV 穴状造構によって切られている。

〈柱穴〉

柱穴状小ピットは p1 ~ p15 が検出されている。p1 (12 cm × 11 cm × 8 cm)、p2 (16 cm × 13 cm × 10 cm)、p3 (14 cm × 14 cm × 10 cm)、p4 (19 cm × 17 cm × 12 cm)、p5 (13 cm × 13 cm × 7 cm)、p6 (11 cm × 10 cm × 7 cm)、p7 (22 cm × 18 cm × 9 cm)、p8 (20 cm × 20 cm × 10 cm)、p9 (16 cm × 14 cm × 8 cm)、p10 (17 cm × 14 cm × 8 cm)、p11 (10 cm × 8 cm × 7 cm)、p12 (9 cm × 8 cm × 5 cm)、p13 (24 cm × 20 cm × 10 cm)、p14 (11 cm × 8 cm × 8 cm)、p15 (8 cm × 8 cm × 6 cm) を測る。

〈炉跡〉

床面上で焼土および炉跡等の痕跡は検出されなかった。

〈重複〉

西側で風倒木痕 (3.40 m 土 × 1.2 m 土 の不整梢円形状のプランを呈し、埋土は砂礫および黄

褐色粘性土が縦ふり状に混入する黒褐色土 10 YR 2 / 2、やや軟質で微量の粗砂を含むしまりのある黒色土 10 YR 2 / 1 の 2 層によって構成されている) によって切られている。

#### 〈出土遺物〉

第 61 図 111、113 は同一個体と考えられる口縁部外反の粗製深鉢形土器で、胎土に粗砂および微量の纖維を含み、焼成等も不良で脆弱な作りである。

出土石器は石鏃 2 点、石錐 2 点、石匙 1 点、剥片石器 13 点、磨製石斧破損品 1 点が出土している。第 62 図 2 は両面加工によって鋭い先端部が作出されている石鏃の破損品で、基部形状は把握できない。第 62 図 3・5 は先端部位周辺に粗い両面加工を施して鋭いドリル状の機能刃部が作出される石錐で、基部はいずれもやや平坦に両面加工されている。

第 62 図 4 はつまみ部を有する横形の石匙で、両面加工によって直線的な鋭い刃部が作出されている。第 62 図 6、8~10・第 63 図 13、14、18、19 は先端周縁部位に片面加工がなされ、角度のある「匁」状の刃部を有している。その形状などから削摺器的機能を有したものと推定される。第 63 図 7、第 64 図 17 は先端部位周辺に粗い両面加工が施され、角度ある嘴状の機能刃部が作出されている。第 63 図 12、14 は薄手の小剣片を素材とし、わずかな片面加工痕が観察される。第 64 図 15 は梢円形状石器で周縁部位に両面加工を施し、鋭い刃部を作出している。20 は緑色凝灰岩を素材とした磨製石斧の破損品である。残存部の形状等から定角式のものと推定される。

#### 〈時期〉

確定資料に乏しいが、埋土内の出土土器片などから縄文中期後葉に相当するものと推定される。

### VIV 整穴状造構 1 号 (第 61 図・写真図版 16)

#### 〈位置〉

調査区の北端緩斜面 VV グリッドの中央に位置し、UVI 整穴状造構に近接している。

#### 〈検出状況〉

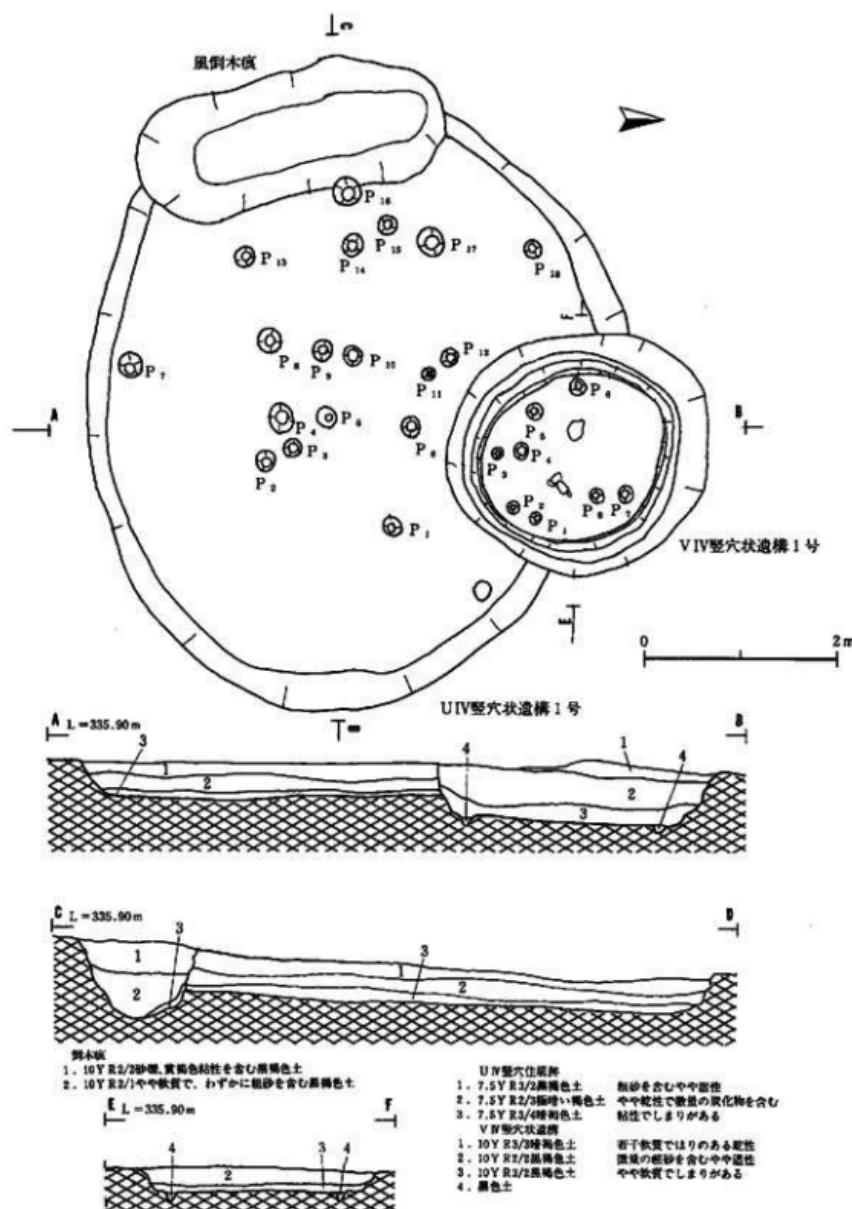
IV 層上位面で UVI 整穴状造構と接する不整な暗褐色土の広がりを確認し、精査検出した。

#### 〈規模・形状〉

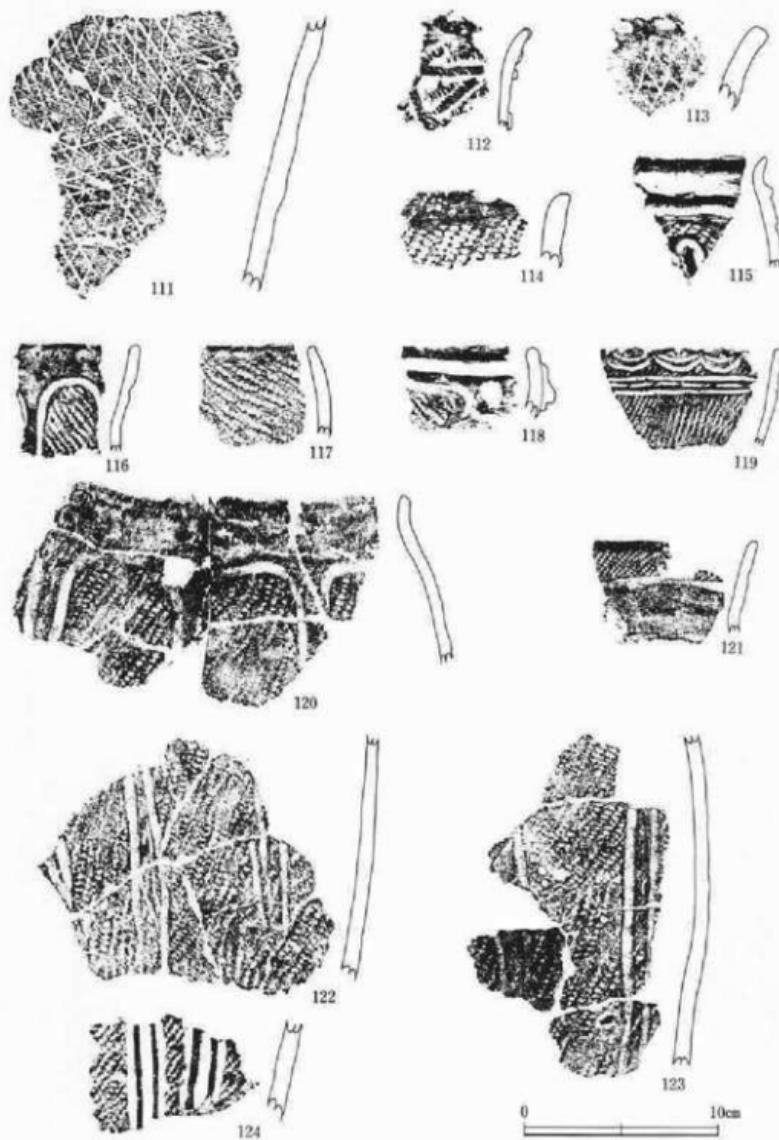
2.75 m 土 × 2.36 m 土 の不整梢円形状を呈する。

#### 〈埋土〉

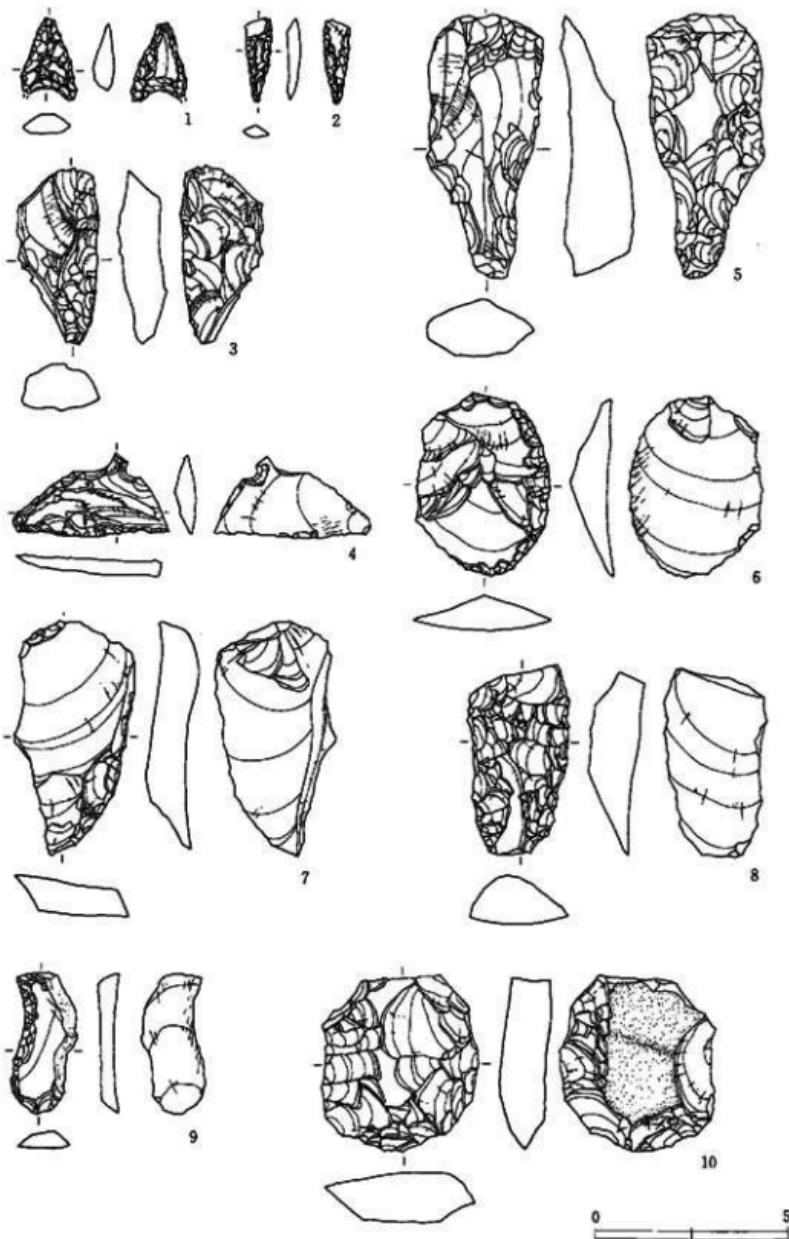
若干軟質でしまりのある乾性の暗褐色土 (10 YR 3 / 3)、微量の粗砂を含むやや湿性の黒褐色土 (10 YR 2 / 2)、やや軟質でしまりのある黒褐色土 (10 YR 3 / 2) の 3 層によって構成されている。



第60図 UIV・VIV 穴状造構 1号



第61図 UIV竪穴状造構1号出土遺物 土器



第62図 UIV堅穴状遺構1号出土遺物 石器(1)



第63图 UIV·VIV 穿孔状遗构1号出土遗物 石器(2)

〈床面〉

若干凹凸が認められ、よく踏みしめられている。

〈周溝〉

幅3cm～5cm土の溝が周壁に沿って掘り込まれている。

〈壁〉

南壁で30cm土～35cm土を測り、保存状況は良好である。

〈柱穴〉

柱穴状小ピットはp1～p8が検出されている。p1 (8cm×6cm×5cm)、p2 (8cm×8cm×4cm)、p3 (5cm×5cm×4cm)、p4 (11cm×9cm×5cm)、p5 (11cm×10cm×6cm)、p6 (9cm×7cm×4cm)、p7 (9cm×8cm×3cm)、p8 (8cm×6cm×4cm)といずれも掘り込みが浅い。

〈重複〉

南側でUIV堅穴状遺構1号を切って構築されている。

〈出土遺物〉

出土石器は不定形剥片石器2点である。第63図1・2はいずれも先端部位に僅かな片面加工痕が観察される程度である。

〈時期〉

資料に乏しく、時期を確定することはできないが、UIV堅穴状遺構よりも新しい縄文期のものであろう。

(3)土坑

LIII土坑1号(第59図・写真図版20)

〈位置〉

LIIIグリッドの西寄りに位置し、LIII堅穴状遺構を切って構築されている。

〈検出状況〉

IV層上位面で不整円形状の黒褐色土の広がりを確認、精査検出した。

〈規模・形状〉

1.40m土～1.32m土の不整円形状のプランで、深さ0.46m土を測る。断面形は幅広の「U」状を呈する。

〈埋土〉

粗砂を含む暗褐色土(10YR4/4)、若干砂礫を含むやや乾性の黒褐色土(10YR2/3)、や

や軟質でしまりのある黒褐色土 (10 YR 2 / 2) の 3 層によって構成されている。

〈出土遺物〉

なし

〈時期〉

埋土内よりの出土は皆無で時期は不明である。

MⅢ土坑 1 号 (第 20 図)

〈位置〉

MⅡ・MⅢグリッドにかけて位置し、MⅢ竪穴住居跡 1 号西壁を切って構築されている。

〈検出状況〉

IV 層で MⅢ竪穴住居跡 1 号と接する黒色土の不整な広がりを確認し、精査検出した。

〈規模・形状〉

1.65 m ± × 1.24 m 土の不整橿円形状のプランを呈している。断面形は浅鉢状を呈し、深さ 45 cm 土を測る。

〈埋土〉

若干粘性のある黒色土 (10 YR 2 / 1)、微量の粗砂を含む褐色土 (10 YR 4 / 4)、微量の炭化物を含むやや湿性の黒褐色土 (10 YR 3 / 2) の 3 層によって構成されている。

〈出土遺物〉

なし

〈時期〉

出土遺物は皆無で時期を推定することはできないが、MⅢ竪穴住居跡 1 号に付属する施設とも考えられる。

PⅢ土坑 1 号 (第 38 図・写真図版 20)

〈位置〉

PⅢグリッドに位置し、PⅢ竪穴住居跡 1 号の北西壁と接している。

〈検出状況〉

IV 層上位面で PⅢ竪穴住居跡 1 号と接する不整橿円形状の黒色土 (微量の焼土粒を含む 7.5 YR 2 / 1) の広がりを確認し、精査検出した。

〈規模・形状〉

1.12 m ± × 1.03 m 土の不整円形状のプランを呈し、断面形はバケツ状で深さ 0.48 m 土を測る。

〈埋土〉

微量の焼土粒を含む黒色土 (7.5 YR 2 / 1)、やや軟質で粘性のある黒褐色土 (7.5 YR 2 / 2)、粗砂を若干含む暗褐色土 (7.5 YR 3 / 4)、黒褐色土が霜ぶり状に混じる明褐色土 (7.5 YR 5 / 8) の 4 層によって構成されている。

〈出土遺物〉

なし

〈時期〉

出土遺物は皆無で、時期は不明。

PⅢ土坑 2 号（第 38 図・写真図版 20）

〈位置〉

PⅢ グリッドに位置し、PⅢ 壁穴住居 1 号の北壁に接している。

〈検出状況〉

IV 層面で PⅢ 壁穴住居跡の北側に接するやや湿性暗褐色土の不整な広がりを確認し、精査検出した。

〈規模・形状〉

0.96 m 土 × 0.65 m の不整円形形状のプランで、断面形は浅鉢状を呈し、深さ 20 cm 土を測る。

〈埋土〉

埋土はやや湿性の暗褐色土 (10 YR 3 / 3)、細砂と焼土を微量に含む黒褐色土 (10 YR 2 / 3) の 2 層によって構成されている。

〈出土遺物〉

なし

〈時期〉

出土遺物が皆無で、時期不明。

PⅢ土坑 3 号（第 38 図・写真図版 20）

〈位置〉

PⅢ グリッドに位置し、PⅢ 壁穴住居跡 1 号の南東壁と接している。

〈検出状況〉

IV 層上位面で PⅢ 壁穴住居跡 1 号と接する暗褐色土の不整円形形状の広がりを確認し、精査検出した。

〈規模・形状〉

1 1.02 m 土 × 0.98 m 土 の不整円形形状のプランを呈し、断面形は浅鉢状で、深さ 0.15 m 土を測

る。

〈出土遺物〉

なし

〈時期〉

出土遺物が皆無で時期不明。住居跡に付属する施設とも考えられる。

QIV土坑1号（第39図・写真図版20）

〈位置〉

QIVグリッドの北寄りに位置している。

〈検出状況〉

IV層上位面で不整円形状に広がる暗褐色土を確認し、精査検出した。

〈規模・形状〉

0.8m土×0.78m土の不整円形状を呈し、断面形は椀型で深さ0.23m土を測る。

〈埋土〉

やや軟質で若干粘性・しまりのある暗褐色土（10YR3/4）の単層である。

〈出土遺物〉

なし

〈時期〉

出土遺物が皆無で時期不明。

QIV土坑2号（第39図・写真図版20）

〈位置〉

QIVグリッドの南東寄り緩斜面に位置している。

〈検出状況〉

IV層上位面で暗褐色土の不整円形状の広がりを確認し、精査検出した。

〈規模・形状〉

1.2m土×1.08m土の不整円形状のプランを呈し、断面形は椀型で深さ0.38m土を測る。

〈埋土〉

若干粘性のある暗褐色土（10YR3/3）、砂礫を含むしまりのある褐色土（10YR4/4）、や  
や軟質で粗砂を含む黒褐色土（10YR3/2）の3層によって構成されている。

〈出土遺物〉

なし

〈時期〉

出土遺物が皆無で、時期不明。

SIV土坑1号（第53図・写真図版21）

〈位置〉

SIVグリッドのやや北寄りに位置し、SIV堅穴住居跡1号と重複している。

〈検出状況〉

SIV堅穴住居跡1号精査の過程で、北寄り床面に黒褐色土の不整な広がりを確認し、精査検出した。

〈規模・形状〉

1.32m±×1.25m±の不整円形状のプランを呈し、断面形はフラスコ状で深さ0.38m±を測る。

〈埋土〉

やや軟質・粘性の黒褐色土（10YR3/3）、微量の炭化物および粗砂を含む黒色土（10YR2/1）、やや乾性の黒褐色土が霜ふり状に混入する褐色土（10YR4/4）の3層によって構成されている。

〈出土遺物〉

なし

〈時期〉

出土遺物が皆無で、時期不明。

SIV土坑2号（第53図・写真図版21）

〈位置〉

SIVグリッドの東寄りに位置し、SIV堅穴住居跡1号の東壁と接している。

〈検出状況〉

SIV堅穴住居跡1号東寄り床面に暗褐色土の不整な広がりを確認し、精査検出した。

〈規模・形状〉

1.12m±×0.86m±の不整楕円形状を呈し、断面形は浅いフラスコ形で深さ0.3m±を測る。

〈埋土〉

褐色粘性土が小ブロック状に混入する暗褐色土（7.5YR3/3）、微量の粗砂を含む極暗褐色土（7.5YR2/3）の2層によって構成されている。

〈出土遺物〉

若干の帶繩文の文様帶を有する土器片が出土している。

〈時期〉

出土遺物等から繩文後期に相当するものであろう。

(4) 埋設土器遺構

M II 埋設土器遺構（第 64 図・写真図版 21）

〈位置〉

M II グリッド南東寄り緩斜面に位置している。

〈検出状況〉

IV 層上位面で口縁部の一部を確認し、精査検出した。

〈規模・形状〉

器高 41 cm、口径 32 cm、底径 8.4 cm の大型のカメ形土器が正位の状態で埋設され、掘り込み部分の埋土は不明瞭であるが、僅かに地山黃褐色粘性土の細粒を含むシルト質褐色土が認められた。

〈土器〉

第 64 図 124・写真図版 48-1 は頸基部より緩やかにやや外反気味に立ち上がるカメ形土器で、口唇部は小波状様の作り出しと二個一対の中突起によって構成されている。平行沈線によって区画された口頸部は入念に整形され、無文帶を有している。

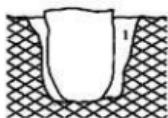
体部地文は原体 RL 横によって條の長い繩文が施されている。胎土・焼成とともに良好で堅緻な作りである。

〈時期〉

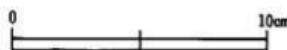
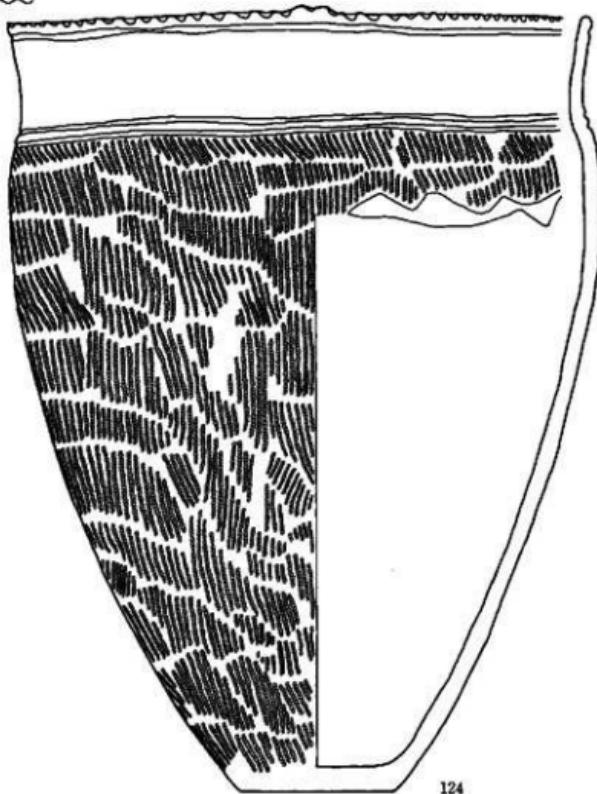
口頸部文様の構成などから繩文時代晩期後葉大洞 C<sub>2</sub> 式のものと推定される。



a — L = 334.70m — a'



I. 7.5Y R3/2褐色性土が細粒状に混入する  
黒褐色土・比較的軟質である。



第64図 M II 埋設土器造構 埋設土器

造構内出土土器觀察表 (No.1 1部土製品含む)

番号	出土地点	器種	文様の特徴	計測値				備考
				器高	口径	底径	器厚(cm)	
1	JII住1	鉢形	沈線文+刻目文+唇消繩文	5.6	(18)	-	0.5	反転実測
2	JIII住1	深鉢	沈線+唇消繩文(横S字文)	15	(20.8)	-	0.8	反転実測
3	JIII住1	深鉢	隆起繩文+沈線文					
4	KIII住1	カメ形	刻目文+沈線	19.7	15.2	6.4	1.2	
5	KIII住1	壺	沈線+羽状繩文+無文研磨	(13.2)	10	-	0.7	
6	KIV住1	深鉢	地文のみ	(25.0)	(36.0)	-	-	反転実測
7	KIV住1	鉢形	鋸齒状刻目文+平行沈線文	10.5	10.7	4.4	0.4	
8	KIV住1	深鉢	地文(斜繩文)					反転実測
9	KIV住1	壺	沈線文+羽状繩文	(9.2)	(8.2)	(6.2)	-	
10	KIV住1	合付浅鉢	無文研磨土器	(7.7)	(1.8)	(8.4)		反転実測
11	KIV住1	ミニチュア	無文研磨	3.3	3.2	1.0	-	
12	KIV住1	深鉢	羽状繩文	(25.2)	-	-	0.8	
13	KIV住1	深鉢	地文(斜繩文)	(8.5)	-	10		反転実測
14	KIV住1	鉢	地文(斜繩文)若干底縁外出	(4.5)	-	6.0		
15	KIV住1	深鉢	地文(斜繩文)	(12.3)				
16	KIV住1	鉢形	沈線+無文研磨					
17	KIV住1	鉢形	平行沈線文+地文					
18	KIV住1	深鉢	地文(斜繩文)					
19	KIV住1	深鉢	地文(斜繩文)					
20	KIV住1	深鉢	隆起繩+沈線文					
21	KIV住1	深鉢(底)	地文(斜繩文)					
22	KIV住1	深鉢(底)	地文(斜繩文)					
23	LIV住1	深鉢	地文					
24	LIV住1	深鉢	地文					
25	LIV住1	深鉢	地文					
26	MIII住1	碗形	地文(斜繩文)	4.0	8.5	-	0.3	反転実測
27	MIII住1	浅鉢	刻目文+平行沈線文	7.9	7.9	3.6	0.4	
28	MIII住1	深鉢	唇沈線による渦巻文					
29	MIII住1	鉢形	刻目文+平行沈線文					
30	MIII住1	鉢形	鋸齒状刻目文+平行沈線+唇削					
31	MIII住1	鉢形	鋸齒状刻目文+平行沈線文					
32	MIII住1	鉢形	平行沈線文+無文研磨帶					
33	MIII住1	鉢形	沈線文+唇消繩文					
34	MIII住1	鉢形(底)	地文、底部墨色黒					
35	MIII住1	土製品	唇消繩文	最大長 10.1		巾 6.9	3.7	
36	MIII住2	合付鉢形	刻目文+平行沈線文+唇消繩文	16.2	21.7	7.4	--	

遺構内出土土器観察表（No.2）

番号	出土地点	器種	文様の特徴	計測値				備考
				器高	口径	底径(cm)	高厚	
37	MⅢ住2	鉢形	沈線+無文研磨	5.3	9.7	1.8	0.7	
38	MⅢ住2	鉢形	口縁部に刻目文+平行沈線文					
39	MⅢ住2	鉢形	平行沈線文					
40	MⅢ住2	皿	彫刻的刻目文+平行沈線+磨消					
41	NⅢ住1	鉢形	沈線+磨消繩文	(14.7)	(15.3)	(7.0)	0.6	
42	NⅢ住1	鉢形	口縁部無文帯、沈線文	(12.2)	(18.3)		0.8	
43	NⅢ住1	鉢形	頸部位に撫糸圧痕文	27	19	10	0.8	
44	NⅢ住2	鉢形	口縁部撕ぎ取り調整、地文	12.2	11.1	—	0.7	
45	NⅢ住1	深鉢	地文のみ	(14)	(14.5)		0.8	
46	NⅢ住1	深鉢形	羽状繩文	(6.0)	(14.6)	6.7	0.7	
47	NⅢ住2	深鉢	陰沈線による捲巻文					
48	NⅢ住1	鉢形	口縁部彫刻状刻目文、磨消繩文					
49	NⅢ住1	鉢形	平行沈線文					
50	NⅢ住1	深鉢	沈線文(垂下)					
51	NⅢ住1	深鉢	陰沈線文による捲巻文					
52	NⅢ住2	深鉢	陰沈線による捲巻文					
53	NⅢ住1	深鉢	陰沈線による捲巻文					
54	PⅡ	深鉢	地文(斜繩文)					埋設
55	PⅡ	深鉢	陰沈線による渦文					
56	QⅣ住1	深鉢	磨消による横円形文	(28.7)	(7.2)	—		
57	QⅣ住1	深鉢	無文					
58	QⅣ住1	深鉢	陰起線文+繩文					
59	QⅣ住1	口縁部	陰起線+繩文					
60	QⅣ住1	深鉢	陰起線(LI縫部破損)+繩文					
61	QⅣ住1	深鉢	地文(斜繩文)					
62	QⅣ住1	深鉢	陰起線文+繩文					
63	QⅣ住1	深鉢	陰起線文+繩文					
64	QⅣ住1	深鉢	陰起線文+繩文					
65	QⅣ住1	深鉢	陰起線文+繩文					
66	QⅣ住1	深鉢	陰起線文+繩文					
67	QⅣ住1	深鉢	地文(繩文)					
68	QⅣ住1	深鉢	地文(繩文)					
69	QⅣ住1	深鉢	地文(繩文)					
70	QⅣ住1	深鉢	陰起線文+繩文					
71	QⅣ住1	深鉢	沈線文					
72	QⅣ住1	深鉢	陰沈線文+刻目文					
73	QⅣ住1	深鉢	口縁部撫糸圧痕文					

造構内出土土器観察表 (No.3)

番号	出土地点	器種	文様の特徴	計測値				備考
				器高	口径	底径(cm)	器厚	
74	RⅡ住1	鉢形	刺目文+平行沈線文+刺突文+羽状 縞文	16.6	19.6	5.3	0.6	
75	RⅡ住1	ミニチュア	無文研磨土器、壺形を呈する	3.6	2.7	-	-	
76	RⅡ住1			長さ15.2	巾5.4		厚さ2.4	土版
77	RⅡ住1	鉢形	地文のみ(縞文)	4.0	-	5.0	0.5	
78	RⅡ住1	鉢形	三叉伏入組文+縞文					
79	RⅡ住1	鉢形	三叉伏入組文+縞文					
80	RⅡ住1	深鉢	三叉伏入組文+縞文					
81	RⅡ住1	鉢形	口唇部刺目文、口縁部平行沈線文					
82	RⅡ住1	鉢形	沈線+無文研磨					
83	RⅡ住1	鉢形	地文、口縁に無文帶有り					
84	RⅡ住1	鉢形	地文(縞文)					
85	RⅡ住1	鉢形	帯状の磨消部+平行沈線					
86	RⅡ住1	深鉢	地文(縞文)					
a.87	RⅡ住1			長さ10.7	巾8.8		厚さ3	土版(表)
b.88	RⅡ住1							土版(裏)
89	RⅢ住1	深鉢	地文	(23.8)	38.4	-	-	反転実測
90	RⅢ住1	深鉢	地文(縞文)					
91	RⅢ住1	深鉢	墨沈線+磨消					
92	RⅢ住1	鉢形	沈線による羊歛状文					
93	RⅢ住1	鉢形	地文(縞文)					
94	SIV住1	合付鉢形	入組文+磨消縞文	13.0	15.5	-	0.5	
95	SIV住1	壺形	地文(縞文のみ)	(10.6)	(4.2)	5.6	(10.6)	
96	SIV住1	深鉢	地文(縞文のみ)	32	22.7	7.2	0.8	
97	SIV住1	鉢形	平行沈線文+地文(縞文)	12.8	12.8	5.0	0.5	
98	SIV住1	深鉢	沈線文+地文					
99	SIV住1	深鉢	沈線文+帯縞文					
100	SIV住1	深鉢	帯縞文					
101	SIV住1	深鉢	帯状縞文					
102	SIV住1	深鉢	沈線+帯状縞文					
103	SIV住1	(土偶)		長さ11.2	頭巾2.9	胴巾2.9	厚さ2	土偶
104	SIV住1	(ボタン状 土製品)		長さ1.7	巾1.9			土製品
105	SIV住1	(ボタン状 土製品)		長さ4.2	巾2.2			土製品
106	JIV壺穴状	ミニチュア	沈線+磨消	5.2	(3.8)	5.0	0.5	
107	JIV壺穴状	鉢形	口唇刺目文、口縁平行沈線文	(13.1)	(14.3)	(5.0)	0.4	
108	JIV壺穴状	ミニチュア	無文研磨の壺形土器	(5.9)	(2.2)	-		反転実測
109	JIV壺穴状	深鉢	地文(縞文のみ)					
110	JIV壺穴状	深鉢	地文(底部破片)やや掻き痕					

遺構内出土土器観察表（No.4）

番号	出土地点	器種	文様の特徴	計測値				備考
				器高	口径	底径(cm)	器厚	
111	UNV型穴状	深鉢	網目状撚糸文					
112	UNV型穴状	深鉢	粘土紐貼付による隆起線文					
113	UNV型穴状	深鉢	網目状撚糸文、口唇部に刺突文					
114	UNV型穴状	深鉢	地文（口縁に無文帶有り）					
115	UNV型穴状	深鉢	隆起線+沈線（渦文）					
116	UNV型穴状	深鉢	沈線+磨消（椎円形文）					
117	UNV型穴状	深鉢	地文					
118	UNV型穴状	深鉢	隆沈線文					
119	UNV型穴状	深鉢	沈線（円弧文）					
120	UNV型穴状	深鉢	沈線+磨消繩文（椎円形文）					
121	UNV型穴状	深鉢	沈線+磨消					
122	UNV型穴状	深鉢	沈線+磨消繩文					
123	UNV型穴状	深鉢	沈線文+磨消繩文					
124	UNV型穴状	深鉢	隆起線文+沈線文					
125	MII埋設 土器	變形	刻目文+平行沈線文+地文	40.8	30.9	8	1.0	

遺構内出土石器観察表(1)

番号	出土地点	器種	長さcm	幅cm	重さg	厚さcm	石質
<b>JII住1号</b>							
1	JII住1	搔器	4.0	2.7	4.51	0.5	珪質泥岩
2	JII住1		5.0	1.8	8.52	1.1	珪質泥岩
3	JII住1床面	石皿	31.0	32.8	10,000.00	10.4	両輝石安山岩
<b>JIII住1号</b>							
1	JIII住1	搔器	3.5	1.6	2.17	0.5	珪質泥岩
2	JIII住1	石籠	5.2	3.5	20.64	0.6	
3	JIII住1	磨石	10.2	9.9	867	5.8	両輝石安山岩
<b>JIV堅穴状1号</b>							
1	JIV堅穴状1	石匙	3.3	2.9	4.89	0.6	珪質泥岩
2	JIV堅穴状	橢円形石器	4.0	2.7	24.7	0.9	
3	JIV堅穴状1	橢円形石器	2.2	3.5	9.44	1.1	珪質泥岩
4	JIV堅穴状1	抉り有る石器	2.9	5.1	7.71	0.6	珪質泥岩
5	JIV堅穴状1	剝片石器	2.8	5.0	21.56	1.7	硬質泥岩
<b>KIII住1号</b>							
1	KIII住1	石籠	3.1	2.2	4.63	0.7	珪質泥岩
2	KIII住	石籠	2.7	1.9	2.94	1.0	珪質泥岩
3	KIII住1	石皿	10.1	13.0	580.0	3.6	両輝石安山岩
<b>KIV住1号</b>							
1	KIV住1	石籠	4.7	1.5	3.37	0.6	粘板岩
2	KIV住1	石籠	4.5	1.6	3.54	0.7	粘板岩
3	KIV住1	石籠	5.3	3.0	18.15	1.5	粘板岩
4	KIV住1	搔器	3.9	2.4	3.23	0.3	硬質泥岩
5	KIV住1	石匙	3.5	1.9	2.39	0.5	チャート
6	KIV住1	石籠	5.8	3.05	28.51	1.5	
7	KIV住1	抉り有る搔器	4.7	1.8	34.17	1.4	硬質泥岩
8	KIV住1	抉り有る搔器	4.9	6.3	35.74	1.6	珪質泥岩
9	KIV住1	不定形石器	2.5	2.0	1.65	0.5	珪質泥岩
10	KIV住1	凹石	12.4	9.1	850.00	5.5	両輝石安山岩
11	KIV住1	石刀	8.8	4.3	57.98	1.2	粘板岩

遺構内出土石器観察表(2)

番号	出土地点	器種	長さcm	幅cm	重量g	厚さcm	石質
<b>KIV</b>							
12	KIV住1	石棒	23.0	14.6	6kg	13.5	流紋岩
<b>LIV住1号</b>							
1	LIV住1	抉り有る搔器	5.4	7.3	52.55	1.4	硬質泥岩
2	LIV住1	不定形石器	4.7	6.7	36.47	1.3	硬質泥岩
3	LIV住1	抉り有る搔器	2.8	4.2	4.05	0.4	珪質泥岩
<b>MⅢ住1号</b>							
1	MⅢ住1	石鎌	(3.1)	1.2	1.37	0.4	粘板岩
2	MⅢ住1	石鎌	2.7	1.4	2.16	0.7	粘板岩
3	MⅢ住1	搔器	2.8	2.5	5.38	2.6	粘板岩
4	MⅢ住1	削搔器	4.4	3.9	4.52	0.6	珪質泥岩
5	MⅢ住1	搔器	4.2	6.1	42.98	2.2	粘板岩
6	MⅢ住1	不定形石器	6.0	3.4	28.41	1.5	チャート
7	MⅢ住1	磨石	5.8	3.4	745	2.1	両輝石安山岩
8	MⅢ住1	磨製石斧	(1.7)	(4.6)	8.9	(1.0)	硬質泥岩
<b>MⅢ住2号</b>							
1	MⅢ住2	石鎌	2.8	1.5	1.23	0.4	粘板岩
2	MⅢ住2	搔器	4.7	3.1	16.14	1.4	チャート
3	MⅢ住2	削搔器	5.7	5.4	44.69	1.3	珪質泥岩
4	MⅢ住2	石皿	37.0	26.8	10,100.00	7.1	両輝石安山岩
<b>NⅢ住1号</b>							
1	NⅢ住1	石鎌	3.2	1.7	3.48	0.8	粘板岩
2	NⅢ住1	石鎌	4.4	1.4	2.43	0.8	粘板岩
3	NⅢ住1	石鎌	3.3	1.4	1.55	0.4	硬質泥岩
4	NⅢ住1	石鎌	2.9	1.0	1.07	0.4	硬質泥岩
5	NⅢ住1	削搔器	4.0	2.0	3.33	0.6	チャート
6	NⅢ住1	搔器	3.6	2.1	3.90	0.9	流紋岩質極細粒凝灰岩
7	NⅢ住1	搔器	7.8	4.3	38.27	1.4	硬質泥岩
8	NⅢ住1	複円形石器	3.4	5.3	26.59	1.5	チャート
9	NⅢ住1	搔器	5.6	4.2	26.73	1.3	粘板岩

遺構内出土石器観察表(3)

番号	出土地点	器種	長さcm	幅cm	重量g	厚さcm	石質
<b>NIII 1</b>							
10	NIII住1	橢円形石器	3.1	4.1	14.89	1.2	粘板岩
11	NIII住1	削撫器	5.9	3.5	22.10	1.4	赤色凝灰岩
12	NIII住1	撫器	3.3	4.5	5.71	0.5	流紋岩質極細粒凝灰岩
13	NIII住1	不定形石器	4.0	6.8	44.10	2.1	流紋岩質極細粒凝灰岩
14	NIII住1	削撫器	3.7	2.3	5.79	1.1	珪質泥岩
15	NIII住1	削撫器	2.9	1.8	2.13	0.6	粘板岩
16	NIII住1	削撫器	3.6	5.9	15.24	0.8	珪質泥岩
17	NIII住1	削撫器	2.0	2.3	1.73	0.4	粘板岩
18	NIII住1	撫器	3.1	2.4	2.03	0.4	石灰質泥岩
19	NIII住1	削撫器	4.2	2.0	2.61	0.4	珪質泥岩
20	NIII住1	削撫器	4.6	1.7	3.15	0.5	チャート
21	NIII住1	不定形石器	6.5	3.4	42.51	1.6	粘板岩
22	NIII住1	不定形	5.9	3.6	26.81	1.0	粘板岩
23	NIII住1	凹石	7.3	6.4	340	5.7	両輝石安山岩
24	NIII住1	磨石	4.1	3.9	58.51	3.5	両輝石安山岩
25	NIII住1	磨石	5.9	5.3	190.12	4.6	両輝石安山岩
26	NIII住1	凹石	8.8	8.0	340.00	4.6	両輝石安山岩
27	NIII住1	特殊擦石	14.6	6.2	730	6.2	両輝石安山岩
28	NIII住1	石錐	(10.5)	3.5	115	2.5	流紋岩
29	NIII住1	石皿	23.2	18.0	1,365	4.2	両輝石安山岩
<b>PII住1号</b>							
1	PII住1	撫器	5.3	1.9	6.32	0.8	珪質泥岩
2	PII住1	削撫器	4.5	4.8	13.10	1.3	珪質泥岩
3	PII住1	削撫器	3.4	1.9	2.77	0.5	チャート
4	PII住1	削器	3.4	3.4	10.66	1.0	硬質泥岩
5	PII住1	凹石	10.9	9.2	715	5.7	両輝石安山岩
<b>PIII住1号</b>							
1	PIII住1	石錐	6.1	2.7	20.50	0.8	
2	PIII住1	抉り有り撫器	5.0	3.9	5.80	0.5	珪質泥岩

遺構内出土石器観察表(4)

番号	出土地点	器種	長さcm	幅cm	重量g	厚さcm	石質
QIV住1号							
1	QIV住1	石鎌	3.1	1.4	1.59	0.4	チャート
2	QIV住1	石鎌	(2.7)	2.1	4.49	0.6	粘板岩
3	QIV住1	石鎌	(2.6)	2.0	2.21	0.6	チャート
4	QIV住1	石鎌	2.0	1.4	0.68	0.2	流紋岩質極細粒凝灰岩
5	QIV住1	石錐	3.4	1.7	3.57	0.6	珪質泥岩
6	QIV住1	石匙	3.7	6.7	15.14	0.8	流紋岩質極細粒凝灰岩
7	QIV住1	削器	4.1	4.6	11.96	0.8	流紋岩質極細粒凝灰岩
8	QIV住1	石匙	5.3	3.0	17.72	1.0	流紋岩質極細粒凝灰岩
9	QIV住1	半月状	8.3	5.0	50.97	1.7	硬質泥岩
10	QIV住1	削器	5.7	3.3	21.84	1.3	硬質泥岩
11	QIV住1	不定形	3.8	2.7	5.32	0.5	硬質泥岩
12	QIV住1	搔器	4.9	4.0	13.92	1.1	流紋岩質極細粒凝灰岩
13	QIV住1	搔器	6.2	4.8	33.84	1.6	珪質泥岩
14	QIV住1	搔器	4.9	2.3	8.27	1.0	流紋岩質極細粒凝灰岩
15	QIV住1	不定形	5.1	3.2	10.11	0.8	珪質泥岩
16	QIV住1	削搔器	4.5	2.2	5.13	0.6	流紋岩質極細粒凝灰岩
17	QIV住1	削搔器	2.1	2.5	3.85	1.1	珪質泥岩
18	QIV住1	削搔器	2.5	2.8	6.42	0.9	粘板岩
19	QIV住1	搔器	3.4	1.8	5.00	0.9	チャート
20	QIV住1	不定形	4.3	1.3	3.24	0.4	硬質泥岩
21	QIV住1	不定形	7.3	2.8	33.40	1.7	硬質泥岩
22	QIV住1	搔器	4.6	2.4	5.15	0.7	流紋岩質極細粒凝灰岩
23	QIV住1	削搔器	4.1	1.6	1.35	0.2	珪質泥岩
24	QIV住1	搔器	3.3	2.3	2.88	0.4	硬質泥岩
25	QIV住1	搔器	4.4	2.1	3.09	0.5	硬質泥岩
26	QIV住1	削器	7.0	2.6	37.6	2.5	粘板岩
27	QIV住1	石鎌	4.2	3.2	2.48	2.3	硬質泥岩
28	QIV住1	削搔器	6.1	3.9	9.53	0.7	粘板岩
29	QIV住1	磨製石斧	9.8	3.6	118.70	1.8	綠色凝灰岩
30	QIV住1	磨石	11.0	7.8	745.00	6.0	玢岩
31	QIV住1	磨石	9.7	10.0	670.00	4.0	兩輝石安山岩

遺構内出土石器観察表(5)

番号	出土地点	器種	長さcm	幅cm	重量g	厚さcm	石質
<b>RⅡ住1号</b>							
1	RⅡ住1	石鎌	4.0	1.5	2.10	0.4	流紋岩質極細粒凝灰岩
2	RⅡ住1	石鎌	3.0	2.1	4.93	0.9	赤色凝灰岩
3	RⅡ住1	石錐	3.6	2.3	3.58	0.8	珪質泥岩
4	RⅡ住1	磨製石斧	5.0	2.5	17.4	0.8	粘板岩
5	RⅡ住1	石錐	3.9	1.6	17.53	1.0	粘板岩
6	RⅡ住	石皿	30.8	24.6	3,600.00	3.4	両輝石安山岩
7	RⅡ住1	凹石	11.8	10.4	525.00	3.2	両輝石安山岩
<b>RⅢ住1号</b>							
1	RⅢ住1	石鎌	(3.3)	1.5	1.96	0.4	流紋岩質極細粒凝灰岩
2	RⅢ住1	石鎌	2.6	1.7	2.00	0.6	硬質泥岩
3	RⅢ住1	石錐	4.0	1.6	4.76	0.9	珪質泥岩
4	RⅢ住	橢円形石器	3.2	2.9	10.64	1.5	赤色凝灰岩
5	RⅢ住1	振器	2.0	2.2	3.13	0.5	珪質泥岩
6	RⅢ住1	振器	3.5	2.8	10.46	1.0	珪質泥岩
7	RⅢ住1	振器	4.4	4.4	15.41	1.1	珪質泥岩
<b>SIV住1号</b>							
1	SIV住1	削振器	5.5	3.4	17.91	1.0	硬質泥岩
2	SIV住1	不定形	4.0	2.1	8.14	1.1	珪質泥岩
3	SIV住1	振器	3.2	1.3	2.44	0.6	石灰質泥岩
4	SIV住1	振器	4.3	2.0	1.69	0.3	珪質泥岩
5	SIV住1	打製石斧	20.1	5.6	710	4.0	両輝石安山岩
6	SIV住1	石皿	18.6	11.3	964	3.2	両輝石安山岩
<b>UVI堅穴状1号</b>							
1	UVI堅穴状	石鎌	2.1	1.5	1.04	0.5	硬質泥岩
2	UVI堅穴状	石鎌	2.2	0.7	0.37	0.3	粘板岩
3	UVI堅穴状	石錐	6.9	2.9	3.16	1.8	粘板岩
4	UVI堅穴状	石匙	2.1	4.1	3.14	0.5	珪質泥岩
5	UVI堅穴状	石錐	4.6	2.1	11.69	1.1	珪質泥岩
6	UVI堅穴状	橢円形石器	4.7	3.4	11.33	0.9	流紋岩質極細粒凝灰岩
7	UVI堅穴状	振器	6.1	3.1	20.22	1.0	硬質泥岩
8	UVI堅穴状	振器	4.9	2.6	17.39	1.2	硬質泥岩

遺構内出土石器観察表(6)

番号	出土地点	器種	長さcm	幅cm	重量g	厚さcm	石質
<b>UV</b>							
9	UV堅穴状	振器	3.6	1.7	3.19	0.6	硬質泥岩
10	UV堅穴状	楕円形石器	4.0	4.6	28.37	1.2	硬質泥岩
11	UV堅穴状	振器	6.0	3.7	16.17	0.8	硬質泥岩
12	UV住状	不定形	2.4	2.8	5.58	0.8	粘板岩
13	UV住状	振器	3.5	5.5	23.51	1.0	珪質泥岩
14	UV堅穴状	振器	3.4	2.0	2.45	0.5	粘板岩
15	U堅穴状	楕円形石器	2.9	3.6	11.94	1.3	珪質泥岩
16	UV住状 1	不定形	5.9	4.9	16.41	1.9	珪質泥岩
17	UV堅穴状	振器	9.6	4.9	52.61	2.5	流紋岩質極細粒凝灰岩
18	UV堅穴状	振器	5.7	3.2	15.43	1.9	白色細粒凝灰岩
19	UV堅穴状	振器	6.2	4.0	38.15	1.4	流紋岩質極細粒凝灰岩
20	UV堅穴状	磨製石斧	5.4	2.4	27.18	1.5	綠色凝灰岩
<b>VIV堅穴状 1号</b>							
1	VIV	振器	4.1	2.4	5.22	0.5	硬質泥岩
2	VIV堅穴状	抉り有り削振器	6.3	4.9	27.81	1.2	硬質泥岩

## V 遺構外出土遺物

### (1)土器

本遺跡における遺構外出土土器は縄文時代早期・前期・中期・後期・晚期の広範な時期にわたっている。ここではこれらの土器群を文様要素、意匠、器種（特に口頭部形状）などを捉えて第Ⅰ群（早期）・第Ⅱ群（前期）・第Ⅲ群（中期）・第Ⅳ群（後期）・第Ⅴ群（晚期）に類分した。

#### 第Ⅰ群土器（第70図1～13・写真図版54－1～13）

貝殻沈線文を主体文様とする縄文早期の土器群である。本遺跡での当該土器は胴部および底部破片のみで全体的な器形等は知り得ないが、黒内窓遺跡出土の類例などからおそらく尖底深鉢形を呈するものと考えられる。5、11は胴上部破片と推定され、平行沈線と貝殻腹縁による文様構成が観察される。1～3は尖底部破片で入念な整形がなされ無文化されている。色調はにぶい黄褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好で堅緻な作りである。

#### 第Ⅱ群土器

##### 第1類土器（第70図14、15・写真図版54－14、15）

胎土に纖維を含み、不整撚糸文による文様帯を有する土器群である。14、15はいずれも口縁部に外反の深鉢形土器片で、本遺跡では僅かに2点の出土である。口唇上端部の形状が「匁」状に、15は内角が削ぎ取られてやや屈折していることが観察される。

##### 第2類土器（第65図1・写真図版49－1）

胎土に纖維を含み、体部文様が縦位の撚糸文と縄文の併用によって構成されているものである。1は口縁部外反の深鉢形土器で、胎土・焼成とともに不良で脆弱なつくりである。

##### 第3類土器（第65図2・写真図版49－2）

三段の綾格文による口縁部文様帯を有し、体部に斜位撚糸文が施されている土器である。2

は口縁部が外反の粗製深鉢形土器で、体部撚糸文の回転方向が胴央部位で若干変わっていることが観察される。胎土に繊維および粗砂を含み、焼成も不良で脆弱な作りである。色調は橙色を呈し、現存部器高 11.7 cm、口径 14.0 cm、器厚 0.8 cm を測る。

#### 第4類土器（第65図4、5・写真図版49-4、5）

4は口唇部および幅の狭い口縁部に撚糸圧痕文が付され、胎部に継位の撚糸文が施されている深鉢形土器である。口縁が外反し、胎土に微量の粗砂および繊維を含むが焼成は良好で比較的堅紙な作りとなっている。色調は浅黄橙色を呈し、器高 23.9 cm、口径 21.6 cm を測る。5は胴下部破片で色調および撚糸原体などから4と同一のものと推定され、底径 12.8 cm、器厚 0.7 cm を測る。

#### 第5類土器（第71図17～22・写真図版55-1～6）

第4類よりも太く、粗い継位の撚糸文が付されている繊維土器群で、胎土・焼成も第4類に比して不良で脆弱な作りのものが多い。1に観察されるようにやや外反気味に立ち上がる口縁を有し、内角が削ぎ取りによる成形がなされている。色調はにぶい褐色を呈している。

#### 第6類土器（第71図23～26・写真図版54-6・54-7、9、10）

体部文様として網目状撚糸文が施されている繊維土器である。いずれも細片で全体的な器形などは把握できないが、23にみられるように口縁外反の深鉢形土器を呈するものと推定される。胎土・焼成等も不良で脆弱な作りである。

### 第三群土器

#### 第1類

①隆沈線による渦巻文を主体文様とする土器（第66図6・写真図版50-1・第72図27～34・第73図35～43・写真図版56-1～9）

いずれも破片で全体的な文様構成・器形などは把握できないが、第66図6は胴上部から緩やかにやや内湾して立ち上がる深鉢形土器で、体部には隆沈線による渦巻文調の文様区画帯が展開している。体部地文は原体LRによって施され、色調は黄橙色を呈し、胎土・焼成とともに

良好で堅緻な作りである。

器高 20.6 cm、口径 22.0 cm、器厚 0.8 cm を測る。

第 72 図 31 はやや内湾気味の波状口縁を有し、体部地文は原体 LR によって付されている。胎土・焼成とともに良好で堅緻な作りである。32、33、37 は口縁部がキャリバー状に内湾し、口辺部位で僅かに外反する器形である。体部の渦巻文は入念に整形されやや退化的傾向にあるものと考えられる。

②隆沈線による梢円形状の区画文を有する土器（第 74 図 45、50・写真図版 57-2、7）

45 は緩やかに外反する口縁部を有し、口辺部が入念に成形され無文帯となっている。なお隆起線の断面形状が三角形を呈しているのが特徴的である。体部地文は原体 LR によって施されている。50 は原体 RL によって付され、胎土・焼成とともに良好で堅緻な作りである。

③沈線および磨消技法による区画帯を有する土器（第 74 図 44、46～48・写真図版 57-1、3、4）

44、46、47 はいずれも口縁部がゆるやかに外反する深鉢形土器で、沈線および磨消による梢円形状の区画帯によって加飾されている。なお 44 は原体 RL 縫、46 は原体 LR 縫によって付されている。

④垂下する隆沈線によって体部装飾文様帯が構成される土器（第 74 図 49、第 75-51～53・写真図版 57-6、8～11）

いずれも破片で全体的な形状は把握できないが、二条の溝線状沈線に挟まれて垂下する隆起線は入念に整形研磨されているのが特徴である。胎土・焼成とともに良好で堅緻な作りのものが多い。

⑤垂下する二条沈線と磨消による装飾文様帯を有する土器（第 75 図 54～56・写真図版 59-1、2、4）

いずれも垂下する沈線間は入念に磨り消され、滑らかな仕上げになっている。54 は原体 LR 橫、55 は原体 RL 橫、56 は原体 RL 橫によってそれぞれ付されている。胎土・焼成とともに良好

で堅緻な作りのものが多い。

⑥沈線および磨消に装飾文様に加えて円形刺突文が施されている土器（第66図 7、8・写真図版50-2、3）

7、8は口縁部が外反し、胴央部に脹らみを有する深鉢形土器である。沈線による曲線的な区画文と磨消を主体文様とし、口縁下部に付された二段の円形刺突文によってその上限が画されているのが特徴的である。なお体部磨消部位にも沈線にそって同様の円形刺突文が付されている。色調はにぶい黄褐色を呈し、胎土・焼成とともに良好で堅緻な作りである。7は現存部器高80.5cm、口径25.6cm、器厚0.8cmを測る。8は現存部器高23.8cm、口径25.6cm、器厚0.9cmを測る。

⑦体部に地文のみが施文される土器（第66図9、10、第67図12、第68図13、第69図16、第75図57～60・写真図版50-4、5・51-1・52-1）

第66図9は胴上部を欠損する深鉢形土器で、胎土・焼成とともに不良で脆弱な作りである。色調は明赤褐色を呈し、器高12.5cm、底径9.0cmを測る。

第66図10は9と同様胴上部を欠損する深鉢形土器で、底部周縁が若干整形された痕跡が認められる。胎土・焼成とともに不良で脆弱な作りである。体部地文が原体LR縁によって付され、器高13.2cm、底径9.9cm、器厚0.8cmを測る。

第68図13は口縁部が緩やかに外反する胴張りの深鉢形土器で、口辺部位が入念に整形無文化されている。体部地文は原体LR縁によって施され、色調はにぶい黄橙色を呈している。胎土・焼成とともに良好で堅緻な作りである。器高23.6cm、口径11.0cm、器厚0.9cmを測る。第69図16は13同様口縁部が外反する胴張りの深鉢形土器で、口辺部位は整形無文化されている。体部地文は原体LR縁によって施されている。色調はにぶい褐色を呈し、胎土・焼成とともに良好で堅緻な作りである。器高27.5cm、口径27.5cm、器厚1.1cmを測る。第76図57は緩やかに外反する深鉢形土器で、口唇部位に整形時の捲れが微隆起状に残存している。体部地文は原体LR縁によって付され、胎土・焼成とともに良好で堅い作りである。第75図59、60は口辺部位に無文帯を有する外反口縁の深鉢形土器片で、胎土・焼成とともに良好で堅い作りである。59は原体RL、60は原体RL縁によって体部地文がそれぞれ付されている。

#### 第IV群土器（第79図100、101、102・写真図版63-1~3）

第80図100、101はいずれも口縁部破片で、平行沈線と磨り消し技法による帶繩文で文様帯が構成されている。100はやや外反気味の波状口縁を有し、波頂部位は二個一対の山形状に仕上げられている。体部地文は原体RL横によって付され、胎土・焼成とともに良好で堅緻な作りである。101は原体LRによって体部地文が施され、胎土・焼成も良好である。

#### 第V群土器

本群土器は器形・口縁形状・文様構成などから下記のように類分した。

##### 深鉢形土器

a類（第67図11、第77図81、82、87、88、89・第78図91・写真図版53-1、60-2、4、8、9）

口縁部が内湾する粗製深鉢形土器を本類とした。第67図11は胴上部から緩やかに内湾する器形で口唇部は「匂」状態に入念に整形調整されている。色調はほい褐色を呈し、体部地文は原体LRによって施されている。胎土・焼成とともに良好で堅緻な作りである。器高49.5cm、口径41.4cm、14.0cmを測る。

第77図81、82はいずれも内湾口縁の破片で口唇部位は10と同様「匂」に整形調整がなされている。81は原体RL、82は原体LR横によってそれぞれ付されている。

87は内湾口縁上部が幅の狭い無文帶に調整され、体部地文は原体LR横によって付されている。胎土・焼成とともに不良で脆弱な作りである。

88、89も口辺部位に幅の狭い粗雑な無文調整がなされている。88は原体LR横、89はRL横によって体部地文が付されている。

91は胴上部よりやや内湾気味に立ち上がる深鉢形土器で、他に比して口縁部位がやや肉厚になっている。体部地文は条の長い帶繩文様の繩文が施されているのが特徴的である。

b類（第69図17、第77図83、84第78図92・写真図版52-2、60-3、61-3）

口縁がやや直口気味に立ち上がる器形で、第77図83、84は口唇部位に整形時の捲れが微隆起線状に観察されている。83は原体RL縦、84は原体LR横によって体部地文がそれぞれ付されている。胎土・焼成とともに良好で堅い作りである。

第69図17は口縁および胴上部を欠損する深鉢形土器で、胴央部よりの立ち上がり形状などから一応本類に帰属させた。体部には地文のみが施され、胎土・焼成とともに良好で堅緻な作りである。

c類（第79図105・写真図版63-5）

やや内湾気味に立ち上がる口縁を有し、口唇部に二個一对の山形状突起が観察される。体部地文は原体LR横によって施されている。胎土・焼成とともに良好で堅緻密な作りである。

浅鉢形土器（第68図15・写真図版51-3）

器高に比して口径が大きい鉢形土器と皿形土器の中間的器種である。第68図15は胴下部より外反気味に立ち上がる楕状を呈し、口辺部位で緩やかに内傾する特徴を有している。幅の狭い口縁部は整形調整によって無文化され、体部地文は原体LR横によって付されている。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土・焼成とともに良好で堅緻な作りである。器高11.5cm、口径9.1cm、底径8.0cm、器厚0.6cmを測る。

鉢形土器

a類（第76図63～67・写真図版62-1～4）

口縁部に浮彫調の三叉状入組文による装飾文様帶を有する一群で、体部地文の上限は沈線によって示されている。いずれも細片で全体的な形状は把握できないが、63、64の口縁部形状などから、小波状風に入念に仕上げられているものと考えられる。いずれも胎土・焼成とともに良好で堅緻な作りのものが多い。

b 類（第 76 図 68、69・写真図版 62-6、7）

小波状口縁を呈し、齒列文風の刻目文が入念に加飾されている一群である。68 は直口気味の立ち上がりをみせ、口縁下部の二条沈線によって体部地文（原体 LR 横によって付されている）の上限が示されている。69 は浮彫調の齒列文による文様帯が展開し、その上限は一条沈線によって示されている。胎土・焼成ともに良好で堅緻な作りである。

c 類（第 76 図 70～75・写真図版 62-8～13）

口唇部に小刻目、内湾口縁部に平行する二条沈線が付されている一群である。いずれも口唇部上端が鋸齒状に入念な整形調整が施されているのが特徴である。胎土・焼成ともに良好で堅緻な作りのものが多い。

d 類（第 76 図 78、79・写真図版 62-15、16）

口縁部平行沈線によって上限を画された体部に地文以外の装飾が施されている一群である。78 はやや肉厚の口唇を有し、その上端に一条の沈線が付されている。79 は口唇部に二個一対の小突起を有し、内側端部に段差を設けるなど上面観を意識した装飾となっている。いずれも裏面の調整が入念に行なわれている。胎土・焼成ともに良好で堅緻な作りである。

f 類（第 76 図 76・写真図版 62-14）

無文化された頸下部より「く」の字状に立ち上がり、小波状風の口唇部上端部に一条の沈線を配した土器である。76 は頸部に刻目帯が巡らされ、体部の磨消装飾帯の上限かせ示されている。なお裏面の調整も入念に行なわれている。体部地文は原体 LR 横によって付され、胎土・焼成ともに良好である。

g 類（第 77 図 85・写真図版 60-5）

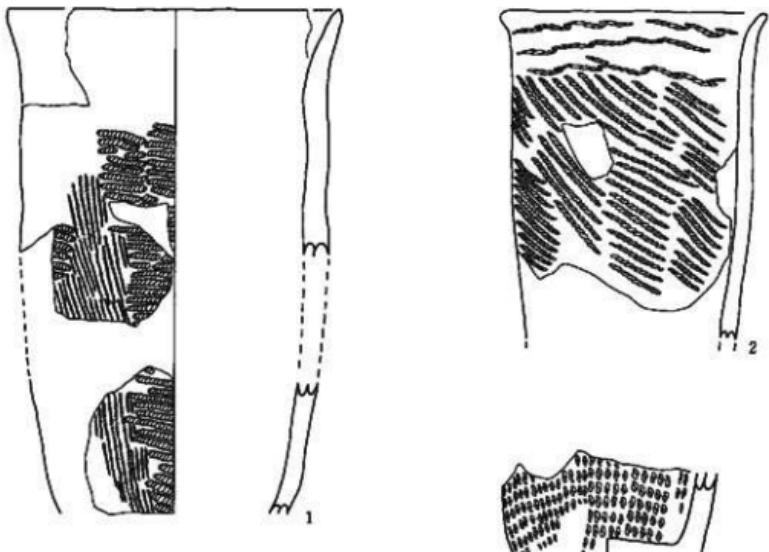
第 77 図 85 は口頸部に工字文調の文様帯が展開し、その接合部は小突起状を呈している。体部地文は原体 LR 横によって付されている。胎土・焼成ともに良好で堅緻な作りである。

壺形土器（第76図77・写真図版62-15）

体部破片で全体的な形状は把握できないが、胴央部の内湾形状などから一応本類に帰属させた。胴央部が二条一組の平行沈線によって二区画に分割されているのが特徴的である。体部地文は原体LR横によって付され、胎土・焼成ともに良好で堅緻な作りである。

無文研磨土器（第78図96～99・写真図版61-5、6、8、9）

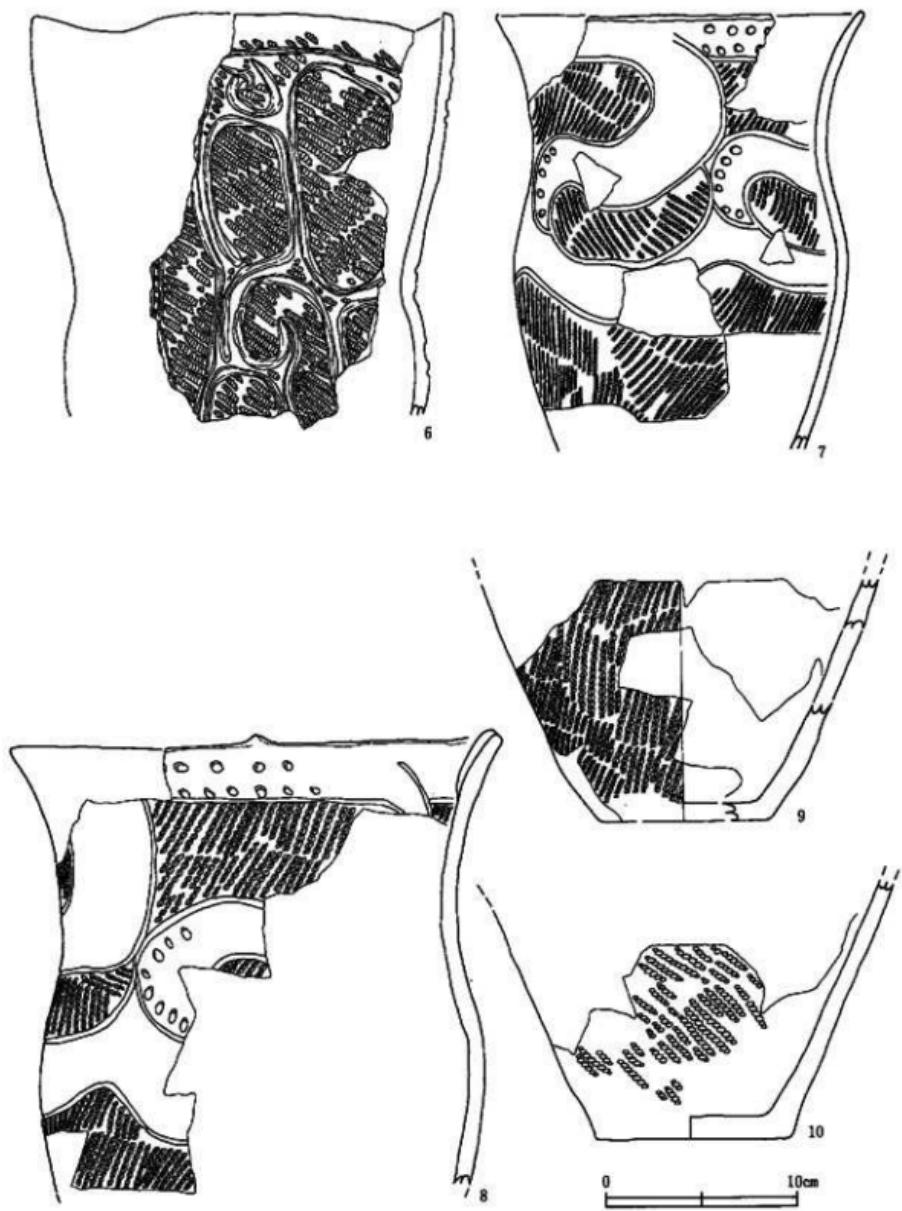
すべて細片で全体的な形状等は把握できないが、表裏両面ともに入念に無文研磨され、光沢を有している。胎土・焼成も良好で堅緻な作りのものが多い。



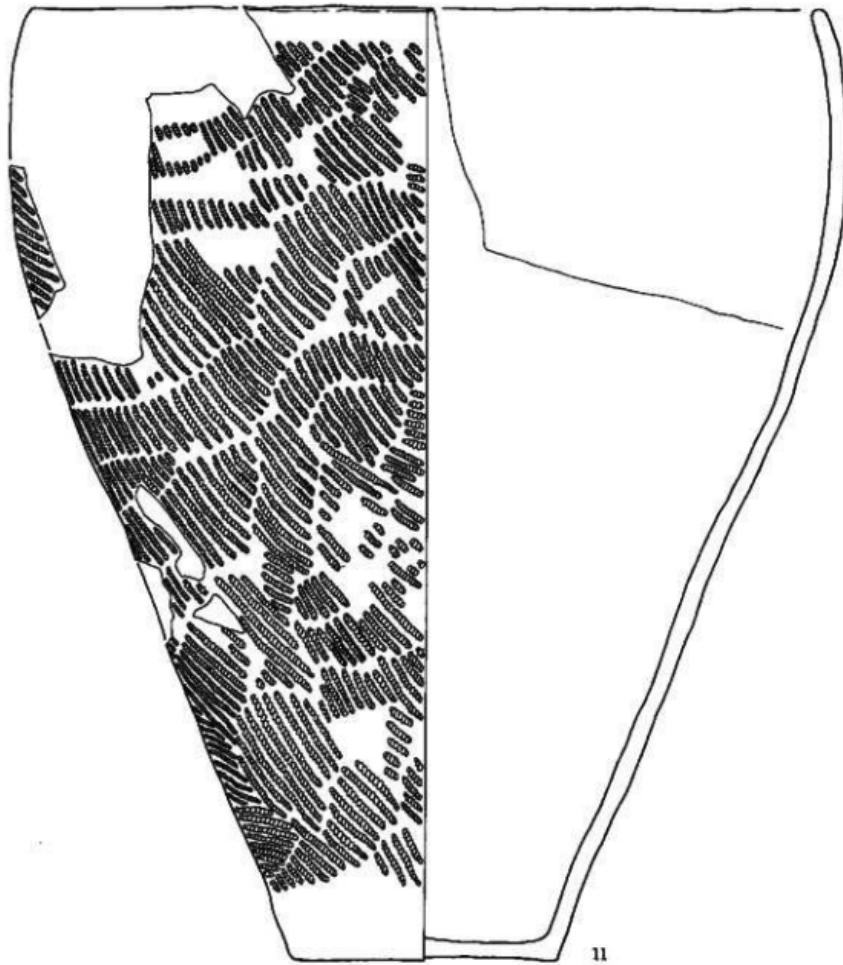
0 5cm

0 10cm  
1.2.4.5

第85圖 造機外出土遺物 土器(1)



第56図 造構外出土遺物 土器(2)

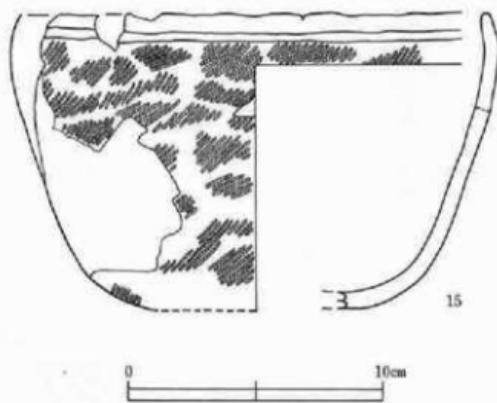
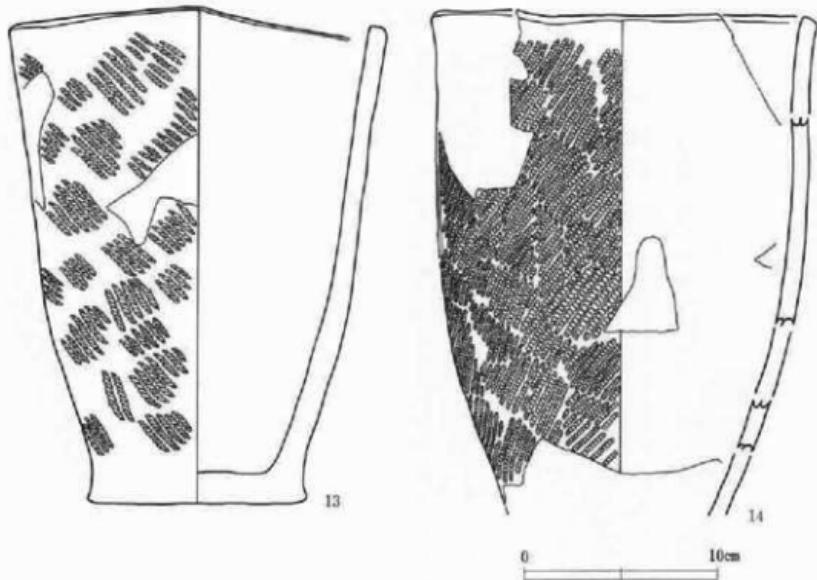


11

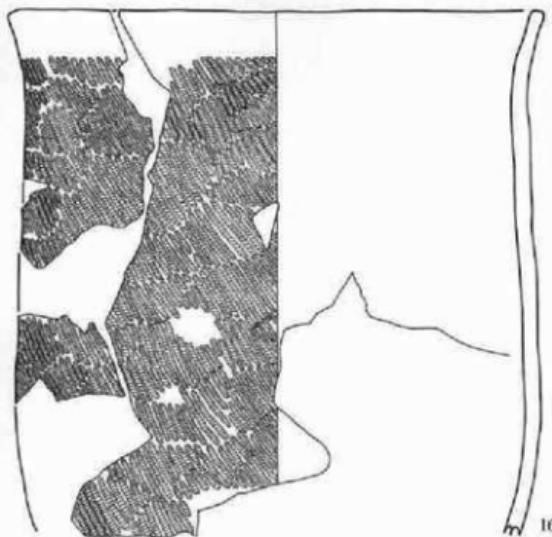


5cm

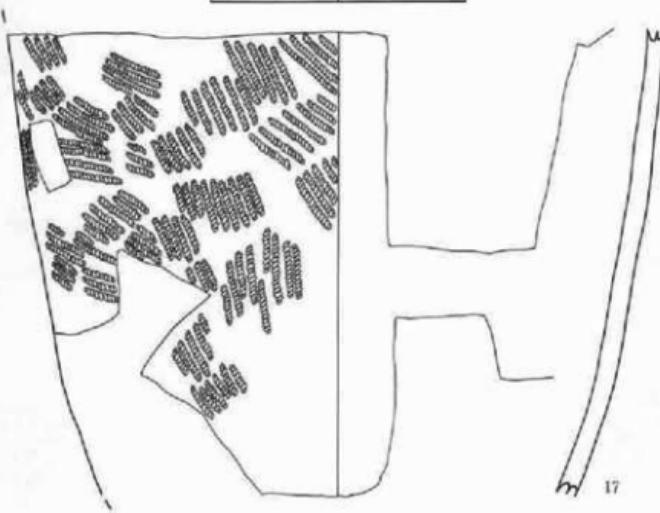
第67図 造構外出土遺物 土器(3)



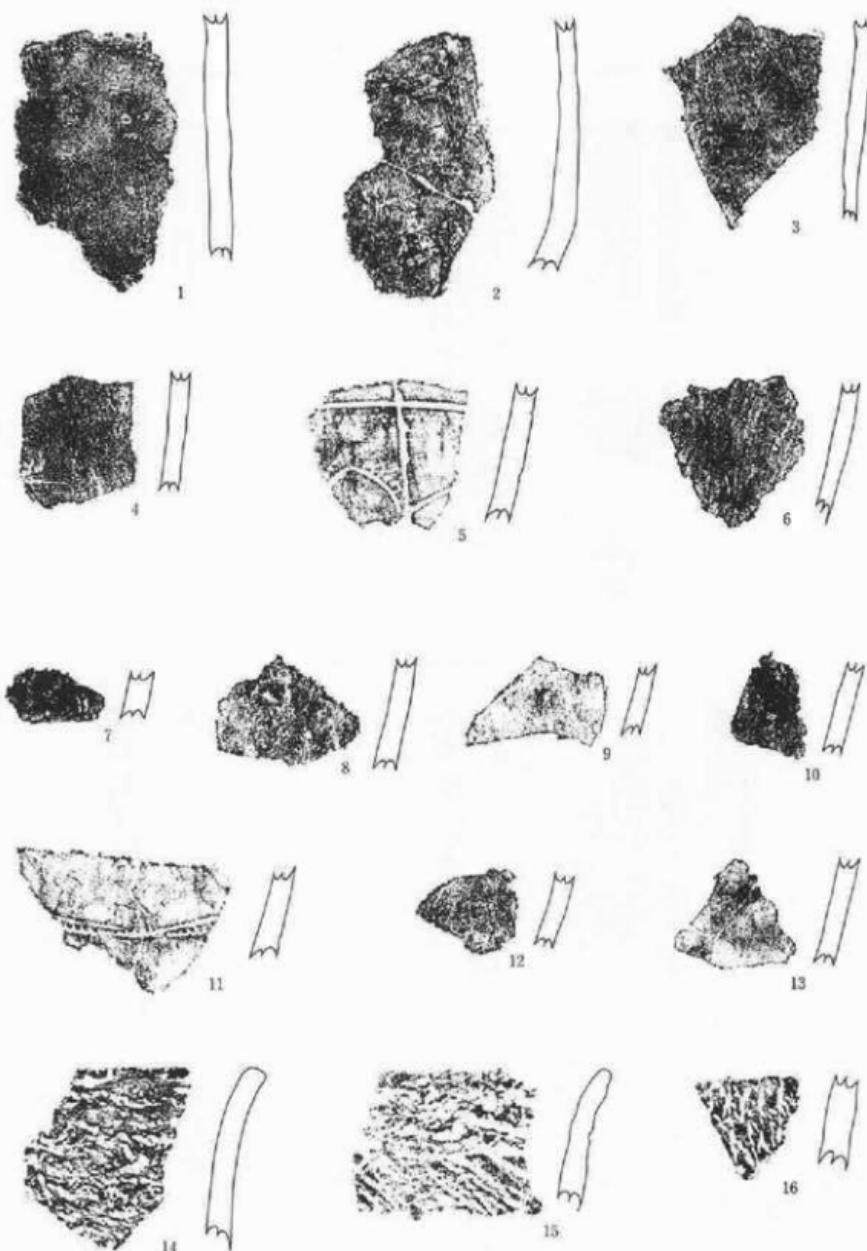
第68図 遺構外出土遺物 土器(4)



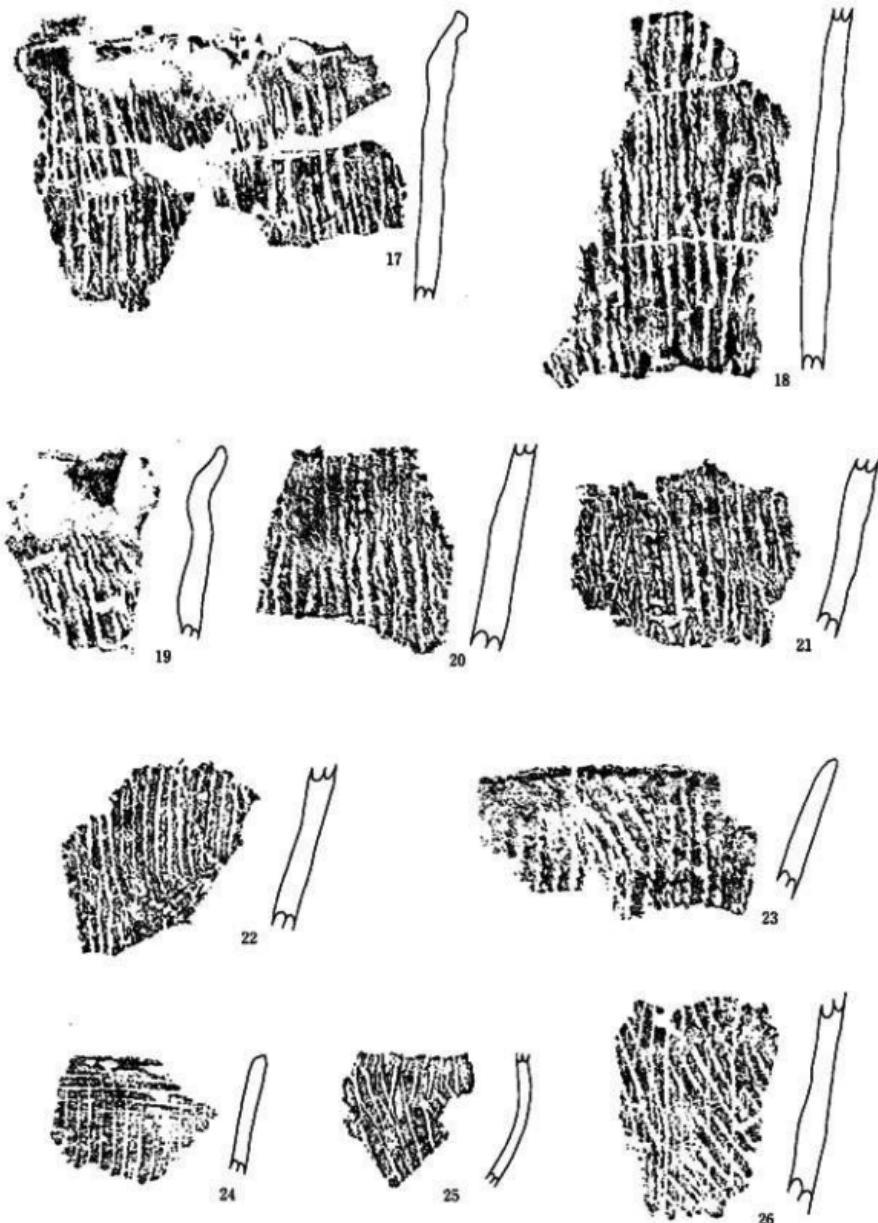
0 10cm



第69図 造構外出土遺物 土器(5)



第70図 造構外出土遺物 土器(8)



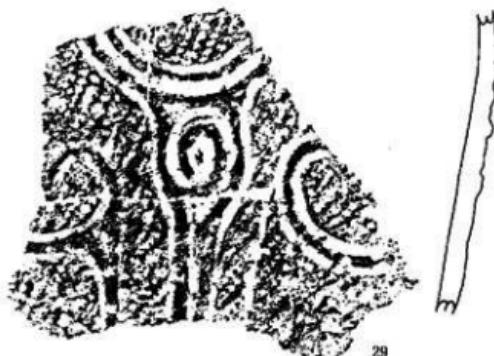
第71図 遺構外出土造物 土器(7)



27



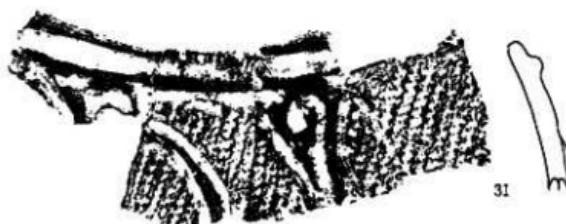
28



29



30



31



32

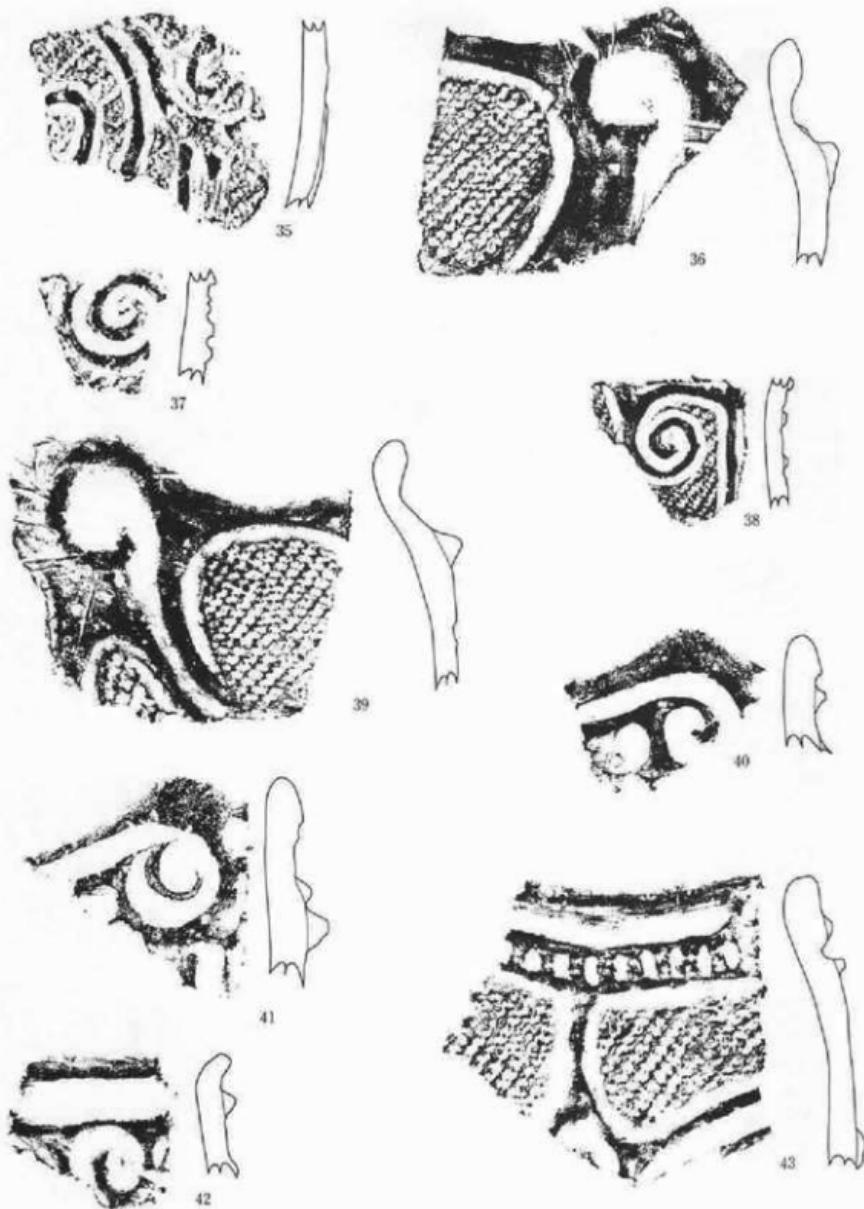


33

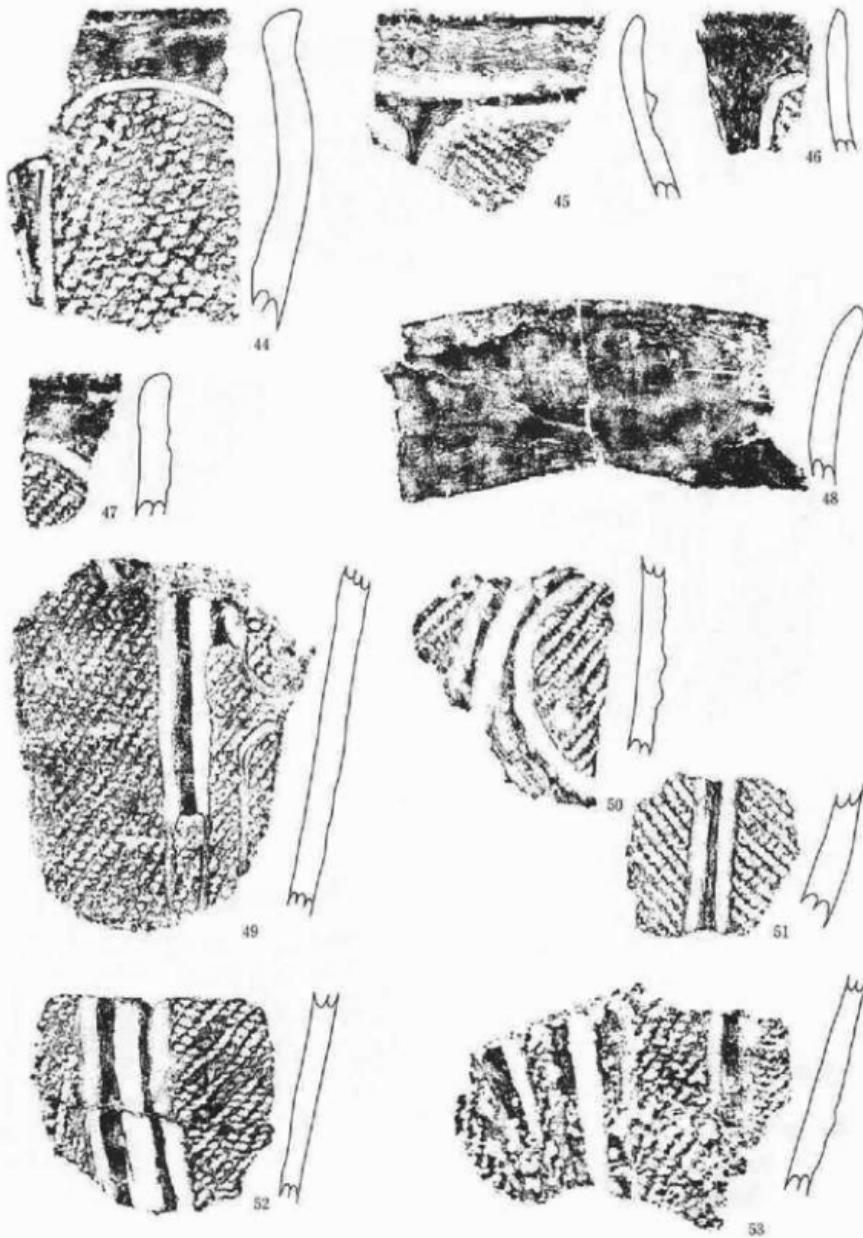


34

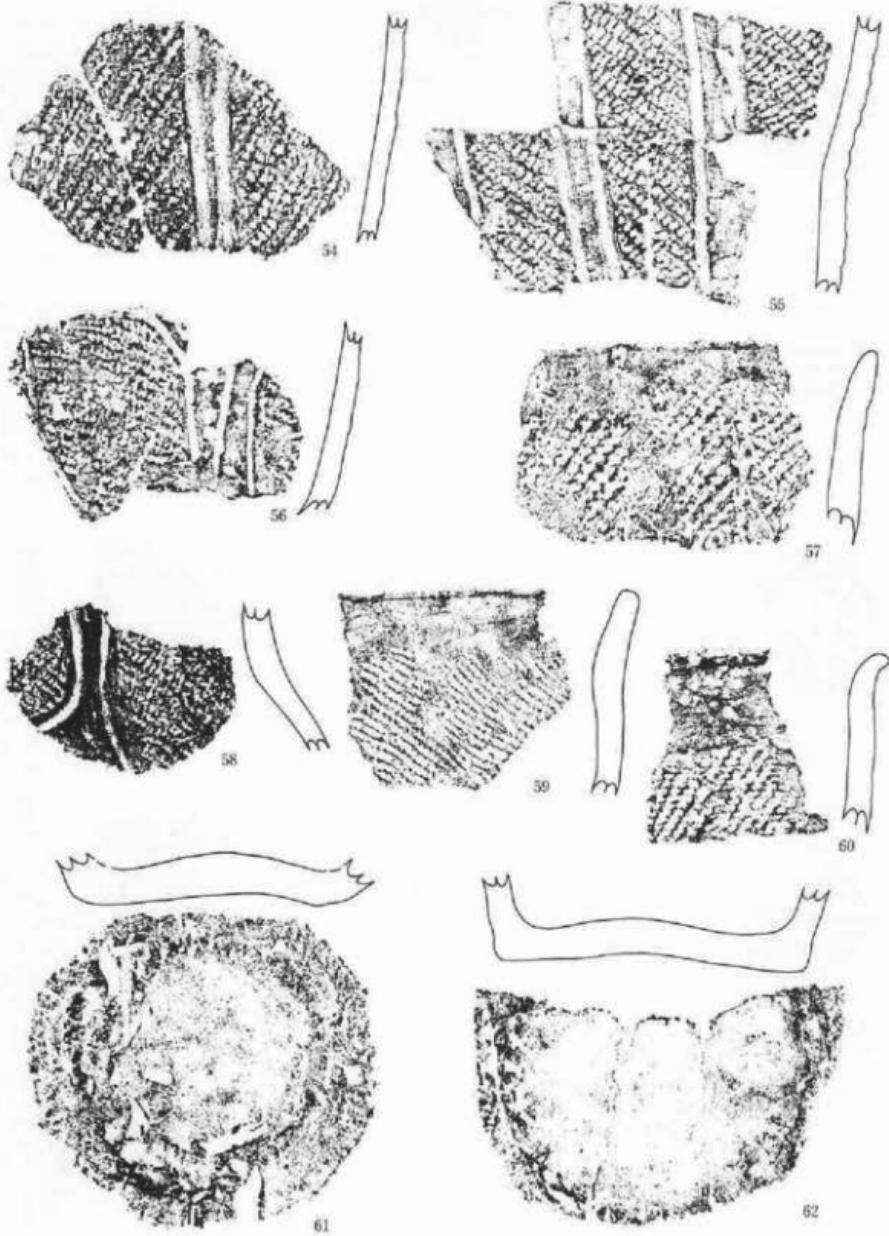
第72図 遺構外出土遺物 土器(8)



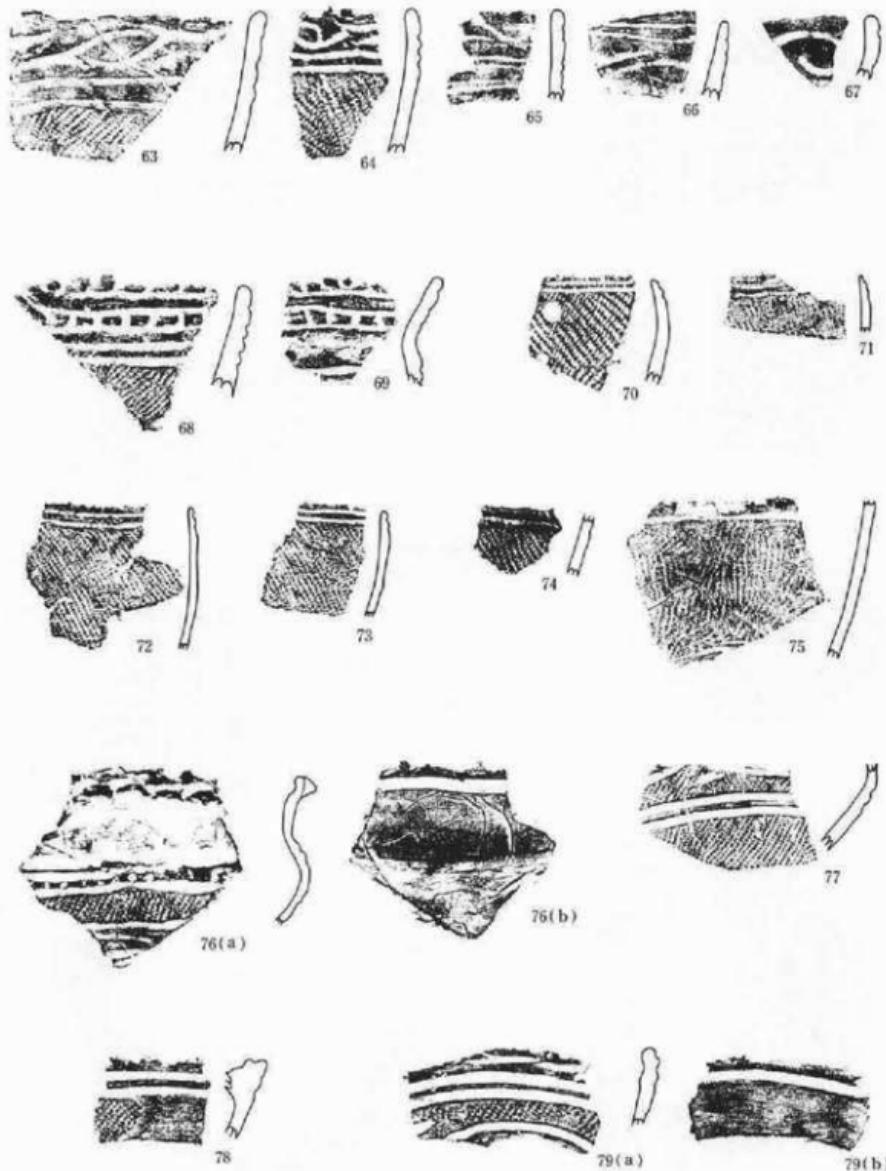
第73圖 造構外出土遺物 土器(9)



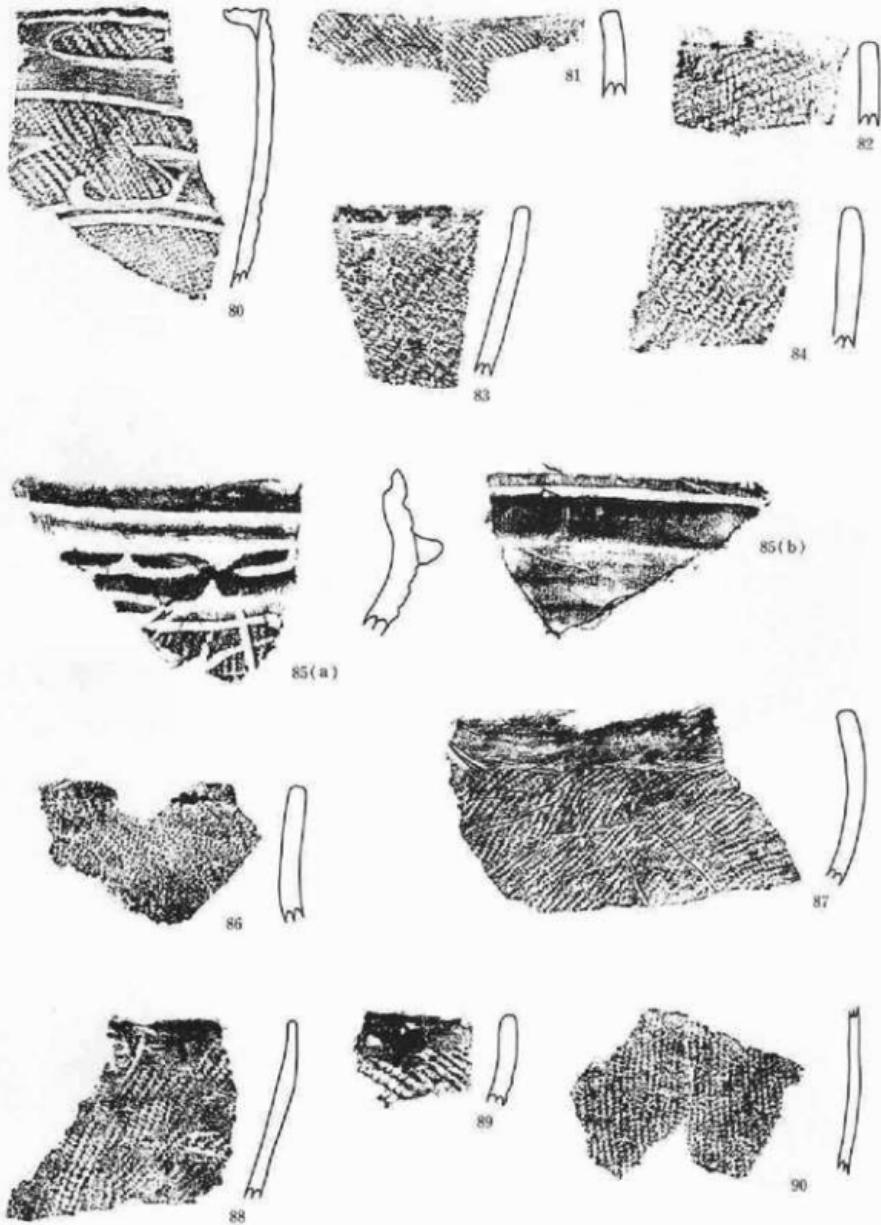
第74図 造構外出土遺物 土器(10)



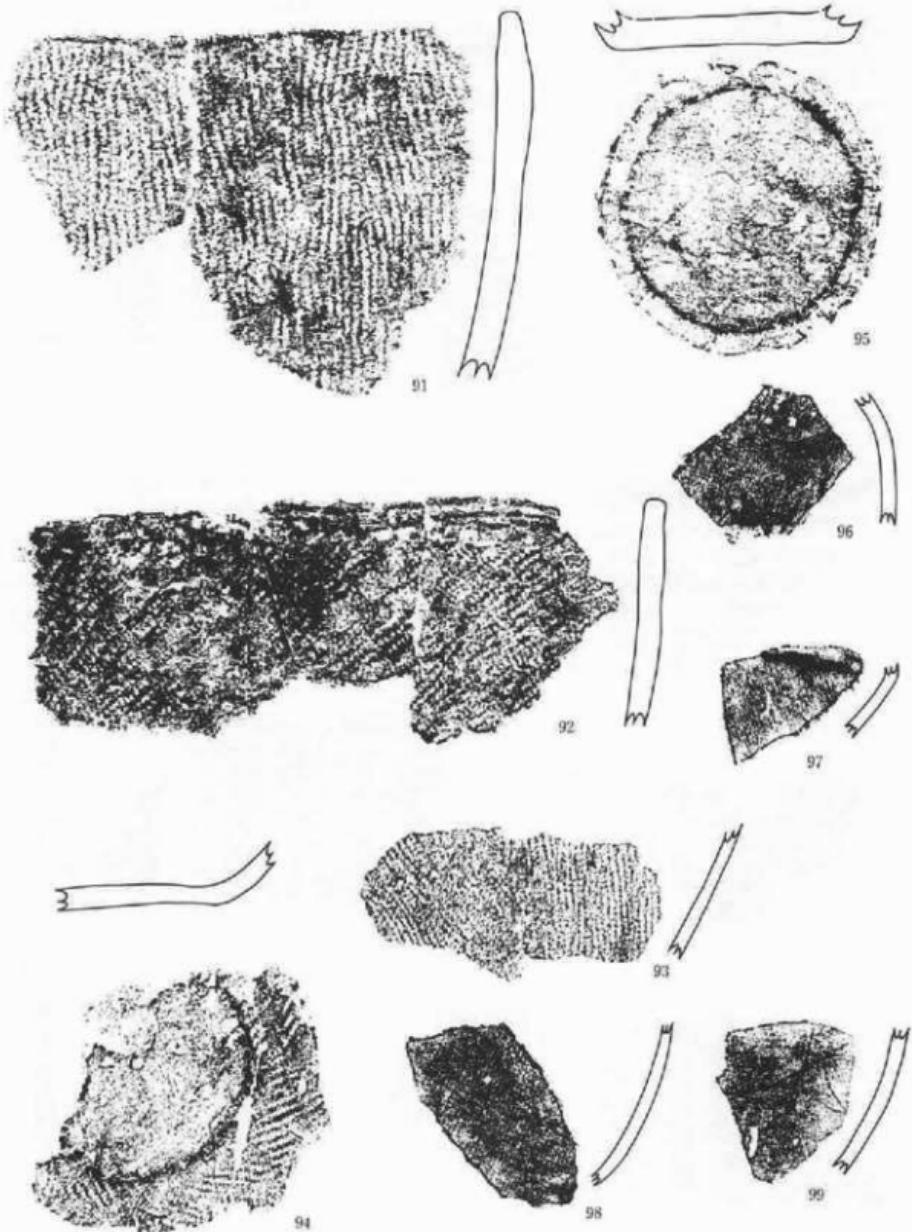
第75図 造構外出土遺物 土器(11)



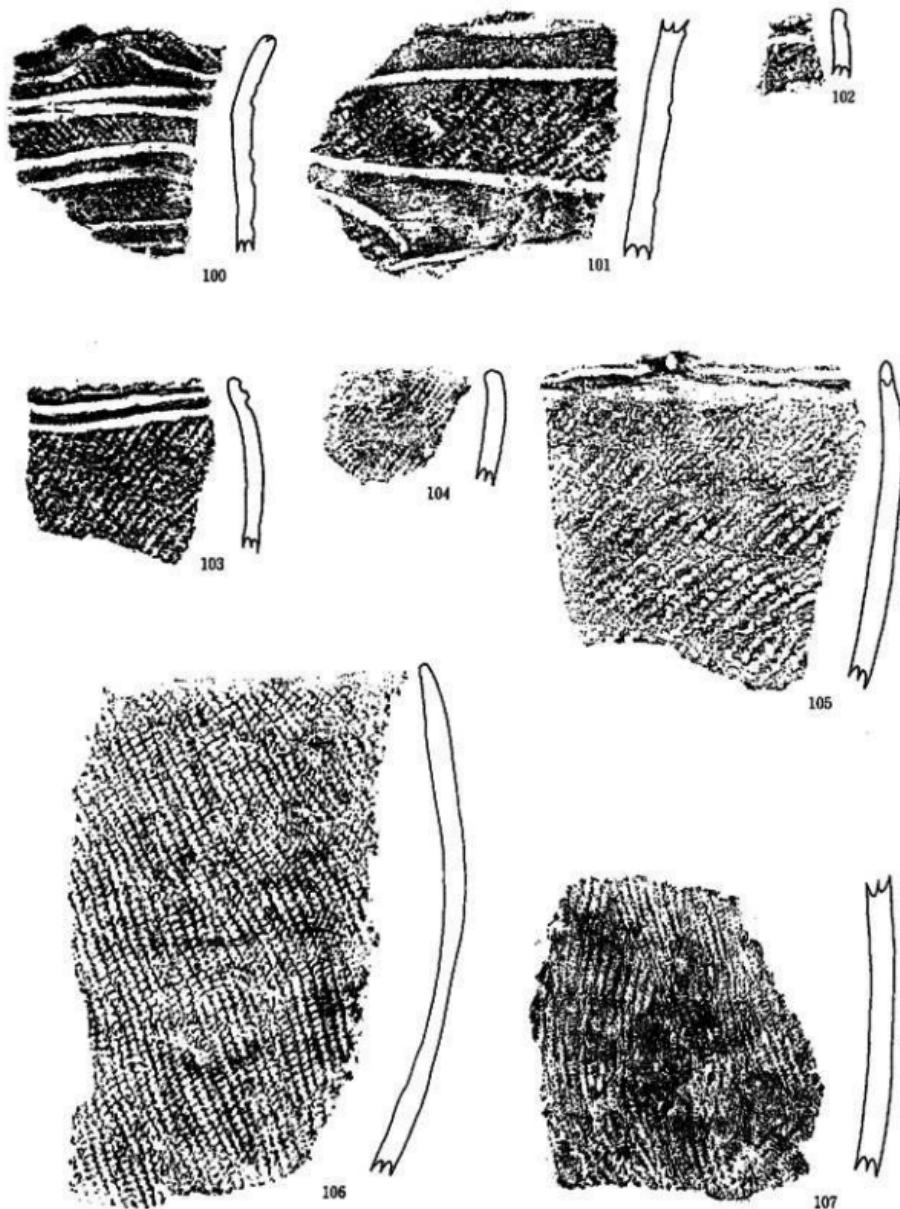
第76図 造構外出土遺物 土器(12)



第77図 造構外出土遺物 土器(13)



第78图 遗构外出土造物 土器(14)



第79圖 遺構外出土遺物 土器(15)



第80圖 遺構外出土遺物 土器(16)

遺構外出土器觀察表(1)完形・半完形品

(cm)

番号	出土地点	器種	文様の特徴	計測値				備考
				器高	口径	底径	器厚	
1	QIV	深鉢	縦文+縦位撚糸文	(26.1)	(16.5)	-	1.0	
2	UIV	深鉢	縦格文+撚糸文	(17.0)	(14.0)	-	0.8	
3	UIV	深鉢	撚糸文压痕文	(4.3)	-	6.2	0.7	
4	QIV	深鉢	口唇部撚糸压痕、体部縦位撚糸文	(23.9)	(21.6)	-	-	
5	QIV	深鉢	体部に縦位撚糸文	(17.7)	-	(12.8)	0.7	
6	DII	深鉢	陰沈線による捲巻文	(20.6)	(22.0)	-	0.8	
7	RIV	深鉢	沈輪+唐消+刺突文	(30.5)	(25.6)	-	0.8	
8	RIV	深鉢	沈輪+唐消+刺突文	(23.8)	(25.6)	-	0.9	
9	HIV	深鉢	地文(斜縞文)	(12.5)	-	(9.0)	-	
10	TIII	深鉢	地文(斜縞文)	(13.2)	-	9.9	0.8	
11	N	深鉢	地文(斜縞文)	(49.5)	(41.1)	14.0		
12	RIV	深鉢	地文(斜縞文)	(1.1)	-	3.8	0.5	
13	UGIV	深鉢	地文(斜縞文)	12.9	(9.8)	(5.6)	-	
14	HIII	深鉢	地文(斜縞文)	(23.6)	(11.0)	-	0.9	
15	KIV	浅鉢	地文(斜縞文)+口縦縞文帯	11.5	9.1	8	0.6	
16	KIII	深鉢	地文(斜縞文)+撚文帯	(27.5)	(27.8)	-	-	
17	TII	深鉢	地文(斜縞文)	(18.2)	-	-	-	

造構外出土土器観察表(2)

番号	山土地点	器種	部 位	文 様 の 特 徴
1	T II	深鉢	胴下部	貝殻沈線文
2	T II	深鉢	胴央部	貝殻沈線文
3	T II	深鉢	胴下部	貝殻沈線文
4	T II	深鉢	胴下部	貝殻沈線文
5	S IV	深鉢	胴下部	貝殻沈線文
6	T II	深鉢	胴下部	貝殻沈線文
7	T II	深鉢	胴下部	貝殻沈線文
8	T II	深鉢	胴下部	貝殻沈線文
9	T II	深鉢	胴下部	貝殻沈線文
10	T II	深鉢	胴下部	貝殻沈線文
11	S IV	深鉢	胴下部	貝殻沈線文
12	T II	深鉢	胴下部	貝殻沈線文
13	T II	深鉢	胴下部	貝殻沈線文
14	U IV	深鉢	口縁部	口縁部に不整撚糸文
15	U IV	深鉢	口縁部	口縁部に不整撚糸文
16	U IV	深鉢	口縁部	網目状撚糸文
17	T II	深鉢	口縁～胴部	継位撚糸文（繊維含む）
18	Q I	深鉢	口縁部	継位撚糸文（繊維含む）
19	T II	深鉢	口縁部	継位撚糸文（繊維含む）
20	U IV	深鉢	胴上部	継位撚糸文（繊維含む）
21	T II	深鉢	胴上部	継位撚糸文（繊維含む）
22	T III	深鉢	胴上部	継位撚糸文（繊維含む）
23	U IV	深鉢	口縁	網目状撚糸文
24	Q III	深鉢	口縁	網目状撚糸文
25	V IV	深鉢	口縁	網目状撚糸文
26	V IV	深鉢	口縁	網目状撚糸文
27	P I	深鉢	口縁部	隆沈線による渦巻文
28	V III	深鉢	胴央部	隆沈線による渦巻文
29	V III	深鉢	胴央部	隆沈線による渦巻文
30	T III	深鉢	胴央部	隆沈線による渦巻文
31	T III	深鉢	口縁	隆沈線による渦巻文
32	P II	深鉢	胴部	隆沈線による渦巻文
33	R IV	深鉢	口縁部	隆沈線による渦巻文
34	H III	深鉢	口縁部	隆沈線による渦巻文
35	Q III	深鉢	胴央部	隆沈線による渦巻文
36	U IV	深鉢	口縁部	隆沈線による渦巻文

遺構外出土土器観察表(3)

番号	出土地点	器種	部位	文様の特徴
37	JIV	深鉢	胴部	隆沈線による渦巻文
38	Q III	深鉢	胴央部	隆沈線による渦巻文
39	UIV	深鉢		隆沈線による渦巻文
40	UIV	深鉢	口縁	隆沈線による渦文
41	UIV	深鉢	口縁	隆沈線による渦文
42	UIV	深鉢	口縁	隆沈線による渦文
43	UIV	深鉢	口縁	隆沈線による渦文+刺突文
44	VIV	深鉢	口縁	沈線区画文
45	Q III	深鉢	口縁	隆沈線区画文
46	U I	深鉢	口縁	沈線区画文
47	Q III	深鉢	口縁	沈線区画文
48	Q III	深鉢	口縁	口縁に幅広い無文帯有り
49	UIV	深鉢	胴央部	隆沈線文
50	UIV	深鉢	胴央部	隆沈線区画文
51	U I	深鉢	胴央部	隆沈線文
52	Q I	深鉢	胴央部	隆沈線文
53	Q I	深鉢	胴下部	隆沈線文
54	R II	深鉢	胴下部	沈線文
55	Q III	深鉢	胴下部	沈線文
56	Q III	深鉢	胴下部	沈線垂下文
57	UIV	深鉢	口縁	地文(斜繩文)
58	UIV	深鉢	口縁	地文(斜繩文)
59	R IV	深鉢	口縁	地文(斜繩文)+口縁無文帯
60	UIV	深鉢	口縁	地文(口唇やや隆起)
61	R IV	深鉢	底部	底面やや揚底風
62	V IV	深鉢	底部	地文(斜繩文)やや揚底風
63	R IV	鉢形	口縁	三叉状入組文+地文
64	R II	鉢形	口縁	三叉状入組文+地文
65	R II	鉢形	口縁	三叉状入組文+地文
66	Sg IV	鉢形	RL	三叉状入組文+地文
67	S IV	鉢形	口縁	三叉状入組文+地文
68	R IV	鉢形	口縁	羊齒状文+地文
69	N III	鉢形	口縁	羊齒状文
70	R III	鉢形	口縁	平行沈線文+地文
71	Q III	鉢形	口縁	平行沈線文+地文
72	R II	鉢形	口縁	平行沈線文+地文

遺構外出土土器觀察表(4)

番号	出土地点	器種	部 位	文 様 の 特 徴
73		鉢形	口縁	鋸歯状刻目文+平行沈線文
74	R II	鉢形	口縁	平行沈線文+地文
75	Q II	鉢形	口縁	平行沈線文+地文
76	Q II	鉢形	口縁	口唇刺突文+体部磨消繩文
77	R II	鉢形	胴部	二条一組沈線文
78	M I	鉢形	口縁	口唇刻目文+体部磨消
79	Q II	鉢形	口縁	平行沈線文+磨消繩文
80	Q II	鉢形	口縁	沈線文+磨消繩文
81	S IV	鉢形	口縁	地文(斜繩文)
82	R II	鉢形	口縁	地文(斜繩文)
83	R IV	深鉢	口縁	地文
84	R IV	深鉢	口縁	地文
85	M IV	鉢形	口縁	平行隆沈線+磨消繩文
86	M III	深鉢	口縁	地文
87	R IV	深鉢	口縁	地文(斜繩文)+口縁に無文帯
88	Q II	深鉢	口縁	地文+口縁に無文帯有り
89	I IV	深鉢	口縁	地文+口縁に若干無文帯
90	R II	深鉢	胴下部	地文(斜繩文)
91	R II	深鉢	口縁部	地文
92	T III	深鉢	口縁	地文
93	Q III	深鉢	胴央部	地文
94	T III	深鉢	底部	地文(底面やや揚底風)
95	NgIVH-1	深鉢	底部	揚底風に研磨整形
96	N III	鉢形	胴部	無文研磨
97	O II	鉢形	胴部	無文研磨
98	O II	鉢形	胴下部	無文研磨
99	O II	鉢形		無文研磨
100	U IV	鉢形	口縁	波状口縁、磨消繩文
101	U I	鉢形	口縁	帶状繩文+磨消
102	U II	鉢形	口縁	平行沈線文+地文
103	M III	鉢形	口縁	二条平行沈線文+地文
104	J IV	鉢形	口縁	地文(斜繩文)
105	O III	深鉢	口縁~胴部	隆沈線+地文(斜繩文)
106	M II	深鉢	口縁~胴部	地文(斜繩文)
107	M III	深鉢	胴央部	地文(斜繩文)
108	J II	深鉢	口縁部	隆起線+沈線による渦巻文

番号	出土地点	器種	部位	文様の特徴
109	R III	深鉢	胴部	隆沈線
110	P II	深鉢	口縁	斜繩文（地文のみ）
111	UIV	深鉢	口縁	隆起線
112	R II	深鉢	口縁	隆沈線+磨消繩文
113	Q III	深鉢	胴部	隆起線+地文
114	UIV	深鉢	口縁	刻目文+隆沈線+地文
115	P III	深鉢	口縁	隆起線による+渦巻文
116	T IV	深鉢	底部	地文（斜繩文のみ）底部やや揚底風

## (2)石器

本遺跡での遺構外出土石器は、調整および使用痕跡の観察されない相当数の小剥片等は割愛し、器種の明確なもの・調整加工を施した不定形石器類を中心として取り扱った。

### 石鎌（第81図1・写真図版81-1）

入念な両面剥離加工の施された有茎石鎌ただ1点である。

### 石匙（第81図2・写真図版81-2）

横形に近い形状を呈し、粗い片面加工によって直線的な機能刃部が作り出されている。

### 石鎌（第81図3・写真図版81-3）

硬質泥岩の縦長板状剥片を素材として先端および両側に両面加工を施している。刃部形状などから削鑿器的機能を有したものと推定される。

### 不定形石器a類（第81図9・写真図版82-9）

先端部位が「U」状を呈し、片面加工によって搔器的機能刃部を有するものである。

### 不定形石器b類（第81図12～14・写真図版82-12～14）

「V」状を呈する先端両側に僅かな片面加工を施し、鋭い機能部が作り出されている。

### 不定形石器c類（第81図10・写真図版82-10）

不整形形状を呈し、側辺部位に細い片面加工を施して鋭利な機能刃部を作出している。削鑿器的機能を有したものと推定される。

不定形石器 d 類（第 81 図 8 ・ 写真図版 82 - 8）

粗雑な片面加工によって内湾状の鋭い機能刃部が作出されている。

不定形石器 e 類（第 81 図 4 ・ 写真図版 81 - 4）

切り出しナイフ状の先端部位に片面加工を施して鋭い刃部が作り出されている。

不定形石器 f 類（第 81 図 11 ・ 写真図版 82 - 11）

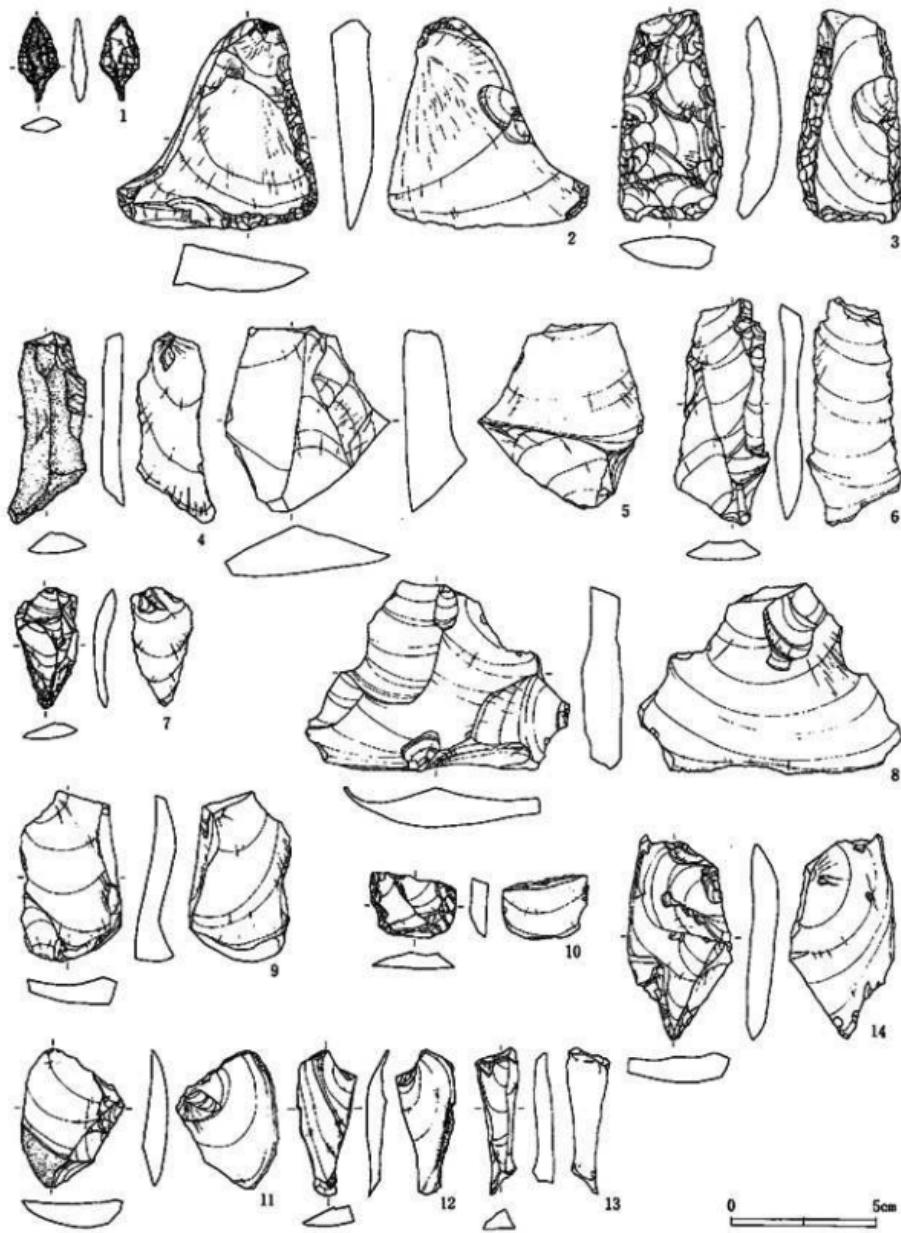
貝殻状小剣片の形状を利した石器で、その周縁部位に僅かな片面加工を施されている。

不定形石器 g 類（第 82 図 15 ・ 写真図版 82 - 16）

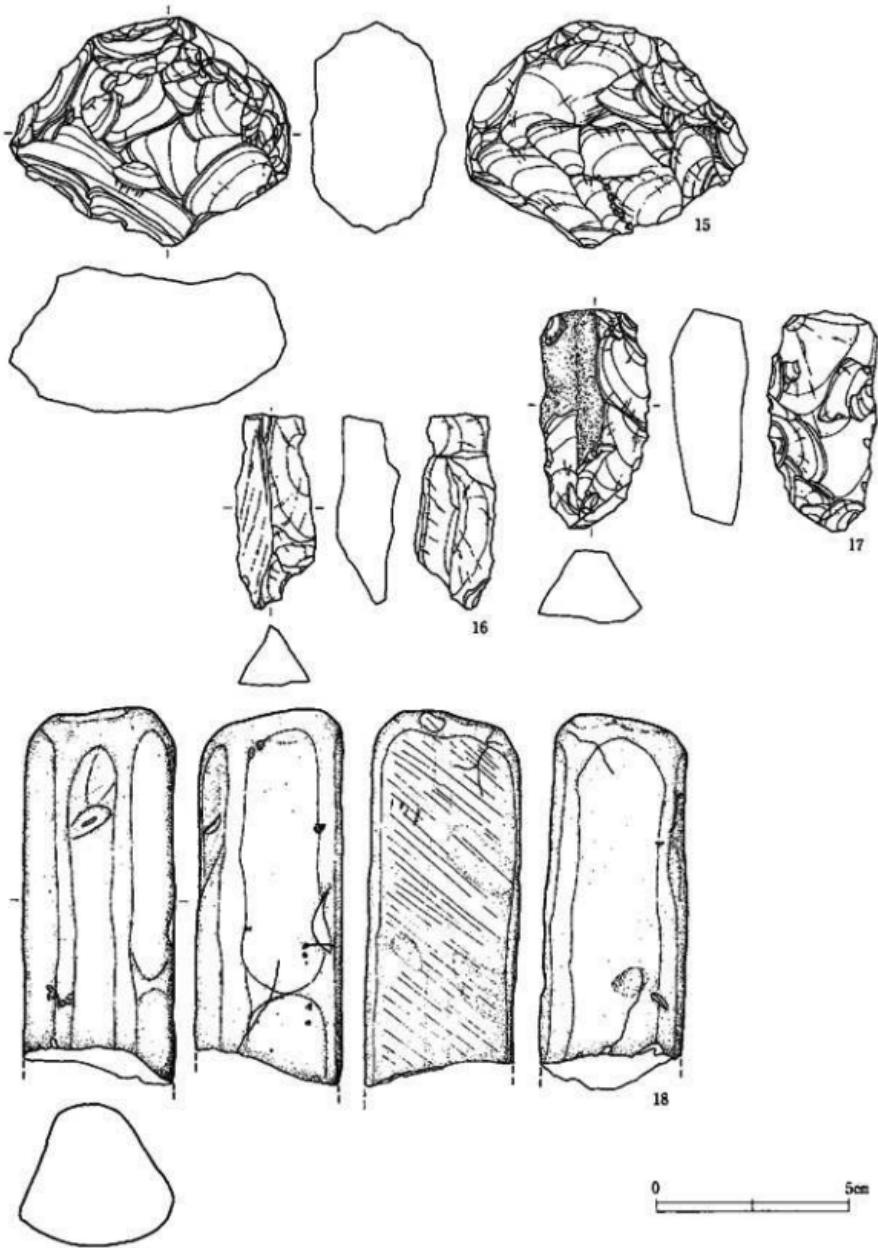
やや肉厚の剣片を素材とした不整椭円形状石器で、周縁部位への粗い両面加工によって鋭い刃部が作り出されている。

棒状擦石（第 82 図 18 ・ 写真図版 83 - 18）

流紋岩を素材とした三角柱状を呈する擦石で、三面に擦痕が観察される。



第81図 遺構外出土遺物 石器(1)



第82図 遺構外出土造物 石器(2)

遺構外出土石器観察表

番号	出土地点	器種	長さcm	幅cm	重量g	厚さcm	石質
1	Q I グリッド	石鏃	2.9	1.4	1.34	0.5	硬質泥岩
2	KV グリッド	石匙	7.3	6.9	64.55	1.5	流紋岩質極細粒凝灰岩
3	O II グリッド	石鏃	7.0	3.3	31.42	1.1	硬質泥岩
4	Q III グリッド	撲器	6.7	2.7	12.19	0.7	流紋岩質極細粒凝灰岩
5	Q II グリッド	撲器	6.4	5.7	48.01	2.0	硬質泥岩
6	O III グリッド	撲器	7.9	3.3	16.44	0.9	珪質泥岩
7	T III グリッド	撲器	4.2	2.2	4.30	0.5	硬質泥岩
8	P IV グリッド	不定形石器	6.3	7.0	6.58	1.3	珪質泥岩
9	M II グリッド	不定形石器	5.9	3.5	22.10	1.4	赤色凝灰岩
10	T III グリッド	撲器	2.3	3.0	4.65	0.6	?
11	L 10 グリッド	不定形石器	3.5	4.8	12.94	0.8	珪質泥岩
12	T III グリッド	撲器	5.0	1.8	5.22	0.6	硬質泥岩
13	O 住 グリッド	撲器	5.1	1.5	3.72	0.7	チャート
14	V III グリッド	撲器	3.6	7.0	28.35	0.9	硬質泥岩
15	D 3 グリッド	石核	5.9	7.3	28.32	3.6	赤色凝灰岩
16	R III グリッド	不定形石器	5.0	2.1	13.58	1.6	硬質泥岩
17	R II グリッド	石鏃	5.7	2.9	19.5	2.0	硬質泥岩
18	R V グリッド	特殊擦石	9.6	4.0	185.0	3.7	流紋岩

## VI. まとめ

本調査によって得られた資料の基礎的な事実の一部については、概述してきたとおりである。以下では、これらの基礎的な事実の中の数項目を選定し、若干の問題提起とまとめを行うこととする。なお遺物の一部については、分析・鑑定の結果報告とかねて行なう。

### 1. 遺跡の立地

既に遺跡の位置と地形の項で述べたように、黒内Ⅲ遺跡は、黒内Ⅳ遺跡同様、東日本火山帯に属する七時雨山より放射線状に走行する水系によって刻まれた山麓丘陵の東側の傾斜面およびその周縁部に形成された遺跡である。この七時雨山からの水系によって刻まれた山麓丘陵面と小支谷（沢根）およびその水系が流下する一方井川流域の段丘面に所在する遺跡群を概観すると、地域により調査の疎密の差はあるものの、概述した「岩手町の遺物山土地と主な遺跡：一方井川流域」の遺跡番号 37 久保遺跡～84 大股開拓遺跡の 47 遺跡うち縄文時代前期単独遺跡：山王遺跡の 1 遺跡、中期単独遺跡：とうやもり遺跡他 6 遺跡、後期単独遺跡：久保遺跡他 8 遺跡、晚期単独遺跡：ざるくぼ遺跡他 9 遺跡、土師器単独遺跡：沢口遺跡他 4 遺跡、須恵器単独遺跡：土川新田遺跡他 2 遺跡、他は縄文時代前期～晚期、弥生時代、土師器、須恵器の複合遺跡で、膨大な量の遺物を伴う包含層、集落跡が形成されている。

特にこの一帯に縄文時代後期・晚期の膨大な量の遺物を包含する遺跡群が密集している傾向が認められるが、このような縄文時代遺跡の立地・占地の現象は如何なることに起因するものであろうか。とりわけ七時雨山の山麓丘陵面及びその集縁先端部に立地する遺跡群を捉える時、水系は大変重要な意味をもつものと考えられる。すなわち生活の糧をこの水系と周縁に求めて行動し、その集落の規模、性格を画していたといっても過言ではないと考える。七時雨山の山麓丘陵を樹枝状に開析している小支谷・小沢は急峻な地形を形成しているわけではないが、丘陵を分断していることに変わりはなく、この地勢的な規制が当時の縄文人の行動様式にどのような影響を与えていたのか、倍田Ⅳ遺跡、黒内Ⅳ遺跡との対比の中で検討しなければならない課題であろう。

### 2. 遺構

#### (1) 壕穴住居跡

#### <時期・占地>

本遺跡で検出された竪穴住居跡は床面および床面直上の出土遺物などから判断すると、縄文時代中期に推定される5棟(JⅢ竪穴住居跡1号、NⅢ竪穴住居跡2号、PⅡ竪穴住居跡1号、PⅢ竪穴住居跡1号、QⅣ竪穴住居跡1号)後期に比定される1棟(NⅢ竪穴住居跡1号)と晚期に推定される10棟(JⅡ竪穴住居跡1号、KⅣ竪穴住居跡1号、KⅣ竪穴住居跡2号、LⅣ竪穴住居跡1号、MⅢ竪穴住居跡1号、MⅢ竪穴住居跡2号、RⅡ竪穴住居跡1号、RⅢ竪穴住居跡1号、SⅣ竪穴住居跡1号、KⅢ竪穴住居跡1号)に分けられる。

中期竪穴住居跡は、NⅢ竪穴住居跡2号・PⅡ竪穴住居跡1号・PⅢ竪穴住居跡1号・QⅣ竪穴住居跡1号は、大木8b~9式に、JⅢ竪穴住居跡1号は大木10式期にそれぞれ位置付けられる。NⅢ竪穴住居跡1号は出土遺物などから後期初頭に位置付けられよう。晚期竪穴住居跡は、RⅢ竪穴住居跡1号・SⅣ竪穴住居跡1号の2棟が晚期前葉大洞B式~BC式期に、JⅡ竪穴住居跡1号・KⅢ竪穴住居跡1号・KⅣ竪穴住居跡1号・MⅢ竪穴住居跡1号・MⅢ竪穴住居跡2号・RⅡ竪穴住居跡1号は晚期後葉C<sub>2</sub>式期、LⅣ竪穴住居跡1号・KⅣ竪穴住居跡2号の2棟は出土遺物に乏しく、炉跡の形態などからおそらく晚期前半~後半期にそれぞれ位置付けられるものであろう。

#### <規模・形状>

縄文時代中期中葉~後葉に相当すると考えられる竪穴住居跡は、JⅢ竪穴住居跡1号-4.18×3.70m、NⅢ竪穴住居跡2号-5.45×5.27m、PⅡ竪穴住居跡1号-4.30m±、PⅢ竪穴住居跡1号-4.45×4.25m、QⅣ竪穴住居跡1号-4.75×4.40m±を測り、平面形は不整円形及び不整橢円形状を呈するものが多く、この時期の竪穴住居跡は径4m~5mの範囲に捉えることができよう。

縄文時代後期初頭に相当するNⅢ竪穴住居跡1号は6.24×5.70mを測り、本遺跡検出の竪穴住居中、最大の規模を有している。

縄文晚期前葉大洞B式~BC式期相当の竪穴住居跡では、SⅣ竪穴住居跡1号-3.55×3.42m、RⅢ竪穴住居跡1号-4.55×4.36mを測り、平面形は不整橢円形を呈している。規模的には3.5~4.5m±の範囲内に捉えることができる。晚期後葉C<sub>2</sub>式に相当する竪穴住居跡は、JⅡ竪穴住居跡1号-4.25×4.10m、KⅢ竪穴住居跡1号-4.38×3.60m、KⅣ竪穴住居跡1号-5.12×4.93m、MⅢ竪穴住居跡1号-4.22×3.72m、MⅢ竪穴住居跡2号-3.45×3.20m、RⅡ竪穴住居跡1号-3.65m±を測り、平面形は不整円形及び不整橢円形状のプランを呈する。規模的には3.50m~5mの範囲内に捉えることができ、他の縄文期の竪穴住居跡に比較してやや幅のある数値となっている。床面等からの出土遺物に乏しく、埋土の状況及び炉跡な

どの形状などから晩期前葉～後葉に相当と考えられる KIV 竪穴住居は  $5.43 \times 5.12$  m 土、LIV 竪穴住居 1 号が  $5.10 \times 4.50$  m 土を測り、断面形状は不整円形のプランを呈する。規模的には径  $4.50 \text{ m} \times 5.50 \text{ m}$  土の範囲内に捉えることができる。

## (2) 竪穴状遺構

### <時期・占地>

本遺跡において竪穴状遺構は、調査区の中央やや南寄り緩やかな斜面部に 2 棟 (JIV 竪穴状遺構 1 号—縄文晚期後葉、LIII 竪穴状遺構 1 号—出土遺物に乏しく時期不明) と北東側緩斜面部に 2 棟 (UIV 竪穴状遺構 1 号—縄文中期後葉、VIV 竪穴状遺構 1 号—出土遺物に乏しく、時期不明) の計 4 棟が検出されている。いずれも竪穴住居跡としての諸要素（炉跡および柱穴・焼土痕跡が認められない）等を欠損するが、規模・形状等が類似し、埋土内に相当量の遺物を包含する遺構である。この種の遺構については分村的な小集落におけるキャンプサイト的に短期間の居住空間および新增改築時の廃屋の可能性を含め、今後他遺跡での類例をみながら検討しなければならないと考える。

### <規模・形状>

JIV 竪穴状遺構 1 号 ( $4.05 \times 3.95$  m 土)、LIII 竪穴状遺構が  $4.05 \times 3.65$  m 土、UIV 竪穴状遺構が  $6.75 \times 5.65$  m 土、VIV 竪穴状遺構が  $2.75 \times 2.36$  m 土を測り、平面形状は不整橿円形および不整円形のプランを呈する。本遺跡中最小規模ながら VIV 竪穴状遺構 1 号は UIV 竪穴状遺構 1 号を切って構築され、唯一周溝を有する遺構である。この種の小竪穴状遺構は隣接する黒内 VII 遺跡でも確認されており、今後他遺跡での類例をみながら居住空間以外の機能を含め検討しなければならないと考える。

## (3) 土坑

### <規模・形状>

本遺跡において検出された土坑は 9 基で、LIII グリッド (LIII 土坑 1 号)、MIII グリッド (MIII 土坑 1 号)、PIII グリッド (PIII 土坑 1 号・2 号・3 号)、QIV グリッド (QIV 土坑 1 号・2 号)、

SIVグリッド（SIV土坑1号・2号）でいずれも竪穴住居跡および竪穴状遺構に隣接している。

<規模・形状>

9基の土坑はその断面形状から次のように類分することができる。a類一断面形が「U」状を呈するもの（LⅢ土坑1号；1.40×1.32m±）、b類一断面形が浅鉢状を呈するもの（MⅢ土坑1号；1.65×1.24m±、PⅢ土坑2号；0.96×0.65m±、PⅢ土坑3号；1.02×0.98m±）、c類一断面形が鉢状を呈するもの（PⅢ土坑1号；1.12×1.03m±）、d類一断面形が楕状を呈するもの（QⅣ土坑1号；0.80×0.78m±、QⅣ土坑2号；1.20×1.08m±）、e類一断面形がフ拉斯コ状を呈するもの（SIV土坑1号；1.32×1.25m±、SIV土坑2号；1.12×0.86m±）でSⅣ土坑2号の後期の土器片をのぞくと出土遺物が皆無で時期を特定することはできなかった。いずれの土坑も出土遺物が皆無で時代を特定することができなかった。

#### (4)複式炉について

縄文時代中期から晩期にかけての分村的小規模集落の様相を呈する本遺跡で検出された堅穴住居内の二基の複式炉（東北地方及び北陸地方の縄文時代中期後葉から末葉にかけて見られる複数の燃焼部を有する極めて特異な形態の炉跡で、大きく石組複式炉、土器埋設石組炉と敷石石組部の組み合わせの二種に類別される）の部分的特徴及び機能等について若干触れておきたいと思う。本県における複式炉あるいは複式炉系列の炉跡について大迫町教育委員会中村良幸氏は、1982年の『考古風土器』の中で県内24遺跡から検出された複式炉の形態的な特徴を捉え、A類：石組炉+（a掘込み部、b石組部）石組炉は円形、椭円形あるいは「コ」字形状を呈し、bは掘り込み内に片側、両側に石が並べられているものを含む。以下同じ・B類：石組炉+石組炉+（a、b、c施設なし）この類には石組炉内で区画されたものや石組炉が三段、四段などに組まれる大型のものも含める・C類：土器埋設石組炉+（a、b）・D類：土器埋設炉+石組炉+（a、b、c）埋設土器が複数あるいは石組炉部分が複数のものも含む・E類：土器埋設炉+土器埋設石組炉+（a、b、c）埋設土器が斜位、横位、縦位や複数のものもある。また土器埋設石組炉が複数のものもある・F類：土器埋設石組炉+石組炉+（a、b、c）土器埋設部と石組部が前後している場合も入る・G類：土器埋設石組炉+敷石石組炉+（a、b、c）この類は敷石部を持つものを中心としたもので、土器埋設部分が複数であり、B類・D類的なものも含む・H類：土器埋設炉+土器片開炉の8タイプの類分をおこなっており、本遺跡検出の二基の炉跡は部分的に若干の差異は認められるものの基本的には上記類型のうち、PⅡ堅穴住居跡1号炉跡（第83図①）はF-b類、QⅢ堅穴住居跡1号炉跡（第83図②）はB-aにそれぞれ該当するものと考えられる。さて岩手県内におけるF類タイプの複式炉の発見例をみるとF-b類では平石町広瀬Ⅱ遺跡・盛岡市繁Ⅲ遺跡・松尾村長者原敷遺跡・北上市八天遺跡など、B-a類タイプの複式炉は軽米町呂屋敷遺跡・大迫町観音堂遺跡・盛岡市堂ヶ沢遺跡・石鳥谷町田屋遺跡・一戸町田中V遺跡など県北・県央の広い地域に分布し、いずれも整然とした連式の石組炉を有しているのが特徴的で、部分的に認められる若干の差異は地域性あるいは時期的な違いに起因するものではなかろうか。なお機能的な問題については、今後の資料検討を待たなければならないが、本遺跡検出のB-a類炉跡、F-b類炉跡の前庭部はいずれも堅く踏みしめられており、この部位の焚口あるいは出入り口的な機能が想定され、また燃焼主体部と目される土器埋設石組炉及び複数の石組炉に火熱による痕跡、焼土の残存堆積が観察されることなどから、この種の屋内炉の役割は、當時火を絶やさずに暖房、照明、穂火保存などの複合した機能を兼ね備えていたと考えられないだろうか。



① P II 住居跡 1号炉跡

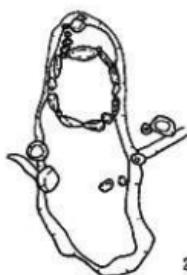


② Q IV 住居跡 1号炉跡

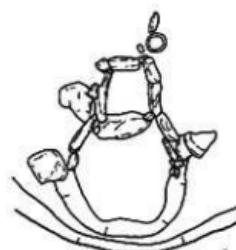
黒内XIII遺跡住居跡内複式炉



黒内XIII



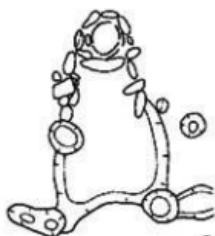
黒内XIII



堂ヶ沢



堂ヶ沢



黒内XIII



広瀬II

第83図 複式炉模式図

### 3. 出土遺物

#### (1) 土器

本遺跡における遺構外出土土器は縄文時代早期・前期・中期・後期・晩期の広範な時期にわたっている。ここではこれらの土器群を文様要素、意匠、器種（特に口頸部形状）などを捉えて第Ⅰ群（早期）・第Ⅱ群（前期）・第Ⅲ群（中期）・第Ⅳ群（後期）・第Ⅴ群（晩期）に類分した。

#### 第Ⅰ群土器

貝殻沈線文を主体文様とする土器群である。本遺跡での当該土器は胴部および底部破片のみで全体的な器形等は知り得ないが、黒内Ⅶ遺跡出土の類例などからおそらく尖底深鉢形を呈するものと考えられる。5、11は胴上部破片と推定され、平行沈線と貝殻復縁による文様構成が観察される。尖底部破片は入念な整形がなされ無文化され、色調はにぶい黄褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好で堅緻な作りである。

施文方法や口縁・尖底形状等から縄文時代早期物見台式に比定され、琴石櫻松遺跡、黒内Ⅶ遺跡第Ⅰ群土器に類似している。

#### 第Ⅱ群土器

##### 第1類土器

胎土に纖維を含み、不整撚糸文風の綾格文による口縁部文様帶を有する土器群である。第70図14、15はいずれも口縁部に外反の深鉢形土器片で、本遺跡ではわずかに2点の出土である。口唇上端部の形状が「匂」状に整形され、内角が削ぎ取られてやや屈折していることが観察される。この種の土器は崎山弁天遺跡第Ⅱ群第1類土器、大西遺跡第Ⅱ群3類土器に類例が認められる。

##### 第2類土器

胎土に纖維を含み、体部文様が綴位の撚糸文と斜縄文の併用によって構成されているものである。第65図1は外反する口縁部に横走する綾格文が施される深鉢形土器で、胎土・焼成とも

に不良で脆弱な作りである。前期前葉に相当するものと考えられ、大西遺跡第Ⅰ群3a類、3b類土器に類似する。

#### 第3類土器

胎土に繊維を含み、三段の綾格文による口縁部文様帯を有する土器で、体部地文に斜位撚糸文が付されている。基本的には第2類土器と同様の文様構成となっているが、撚糸文の施文間隔が疎らで不整である。大西遺跡第Ⅰ群5類土器に類似し前期前葉のものと推定される。

#### 第4類土器

口唇部および幅の狭い口縁部位に撚糸圧痕文が付され、体部には綾位撚糸文が施されている土器である。第65図4は口縁部が外反する深鉢型土器で胎土に微量の繊維・粗砂を含むが、焼成は良好で堅い作りである。幅の狭い口縁部文様帯などから、円筒下層d式的特徴を有している。

#### 第5類土器

第4類土器よりも太く、粗い綾位の撚糸文が付されている繊維土器群である。胎土・焼成とともに不良で脆弱な作りのものが多い。若干の口縁部資料などからやや外反に立ち上がる深鉢形土器を呈するものと考えられる。撚糸文の多用さなどから円筒下層d式的に比定されよう。

#### 第6類

体部地文として網目状撚糸文が付されている繊維土器である。いずれも細片で全体的な器形などは把握できないが、口縁外反の深鉢形土器を呈するものと推定される。第4類とほぼ同時期のものと考えられる。

#### 第Ⅲ群土器

##### 第1類土器

隆沈線文による渦巻文を主体文様とする土器群で、第 66 図 6 は胴上部から緩やかにやや内湾して立ち上がる深鉢土器で、体部に流麗な渦巻文調の区画帯が展開している。第 72 図 33、34、37 は口縁部がキャリバー状にやや内湾気味に立ち上がり、口辺部位でわずかに外反する器形である。体部渦巻文は入念に整形され、やや退化的傾向が観察される。中期中葉大木 8 b 式の比較的新しい時期のものとも推定される。

## 第 2 類

隆沈線により梢円形状の区画文を有する土器で、緩やかに外反する深鉢形土器を呈するものが多い。なお隆起線の断面形状は三角形を呈しているのが特徴的である。中期後葉大木 9 式に比定されよう。

## 第 3 類

沈線および磨消手法によって梢円形状の文様区画帯が展開している土器群で、口辺部位が入念に無文整形され、緩やかに外反する器形が多い。なお口唇部位の内角には刺取り調整が顕著に観察される。大木 9 式に比定されよう。

## 第 4 類土器

垂下する二条一組の隆沈線によって体部文様帯が構成されている土器群である。溝線状沈線に挟まれて垂下する隆起線は入念に整形研磨されているのが特徴的である。2、3 類同様中期後葉大木 9 式に比定されよう。

## 第 5 類土器

垂下する二条沈線と磨消手法による体部文様帯が展開する土器群である。とくに沈線間が入念に仕上げられているのが特徴である。基本的には第 4 類と文様構成が類似し、大木 9 式に相当しよう。

## 第6類土器

沈線および磨消の装飾文様に加えて円形刺突文が施されている土器で第66図7、8口縁部が外反し、胴央部に脹らみを有する深鉢形土器である。沈線による曲線的な区画文と磨消を主体とし、口縁下部に付された二段の円形刺突文によってその上限が画されているのが特徴的である。なお体部磨消部位にも沈線にそって同様の円形刺突文が付されている。色調はにぶい黄褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好で堅緻な作りである。大木10式に比定されよう。

## 第7類土器

体部に地文のみが施される土器群で、第66図9は胴上部を欠損する深鉢形土器で、胎土・焼成ともに不良で脆弱な作りである。色調は明赤褐色を呈する。第66図10は9と同様胴上部から緩やかに立ち上がる深鉢形土器で、底部周縁が若干整形された痕跡が認められる。胎土・焼成ともに不良で脆弱な作りである。体部地文が原体LRによって付されている。

第68図13は口縁部が緩やかに外反する胴張りの深鉢形土器で、口辺部位が入念に整形無文化されている。体部地文は原体LR縦によって施され、色調はにぶい黄褐色を呈している。胎土・焼成ともに良好で堅緻な作りである。第69図16は13同様口縁部が外反する胴張りの深鉢形土器で、口辺部位は整形無文化されている。体部地文は原体LR縦によって施されている。色調はにぶい褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好で堅緻な作りである。第75図57は緩やかに外反する深鉢形土器で、口唇部位に整形時の捲れが微隆起状に残存している。体部地文は原体LR横によって付され、胎土・焼成ともに良好で堅い作りである。59、60は口辺部位に無文帯を有する外反口縁の深鉢形土器片で、胎土・焼成ともに良好で堅い作りである。59は原体RL、60は原体LR横によってそれぞれ体部地文が付されている。

伴出土器および胴央部・口縁部形状などから中期中葉～後葉期にかけての粗製深鉢形土器と推定されよう。

#### 第IV群土器

##### 第1類土器

第28図41は頸基部からやや外反気味に立ち上がる鉢形土器で、口辺部は入念に無文研磨され、緩やかな波状様に仕上げられている。この波状様頂部の直下には平行沈線によって区画された二段の帯状文様帶を連繋する円形文が施されている。体部には蛇行曲線区画文や三角形状沈線区画文の組み合わせによる流麗な装飾文様が展開している。

文様装飾などから後期初頭十腰内I式土器に比定されるものと考えられる。

##### 第2類土器

第28図43は口頸部から緩やかに外反気味に立ち上がる鉢形土器である。四対の山形状の中突起と傾位に付された刻目文によって小波状様に仕上げられた口縁部は、無文化され、波状様山形中突起直下にはボタン状の貼付文とこれより垂下する撚糸圧痕文による四区画帶の構成となっている。頸部には一条の撚糸圧痕文を巡らし、体部地文帶との上限を画している。色調は橙色を呈し、胎土・焼成とともに良好で堅緻な作りである。後期初頭十腰内I式土器に比定され、崎山弁天遺跡第IV群土器第5類、立石遺跡第VII群第3類土器に類似する。

##### 第3類土器

第28図42は、整形無文化された口縁部がやや内傾気味に立ち上がる鉢形土器で、頸部に巡らした一条の沈線によって体部地文帶の上眼が画されている。色調は黒褐色を呈し、胎土・焼成とともに良好で堅緻な作りである。崎山弁天遺跡第IV群第6類土器に類似している。

##### 第4類土器

沈線と磨消手法によって帶繩文が展開している土器であるいずれも口縁部破片で、やや外反気味の波状口縁を、波頂部が山形状を呈しているのが特徴である。文様構成などから関東地方の掘之内II式、東北地方の大湯式、十腰内I式に併行するものと推定される。

## 第V群土器

### 變形土器

#### 第1類

第11図4は口縁部がやや外反気味に立ち上がる變形土器で、口唇部は範状工具等による入念な剥ぎ取り整形によって彫刻的に仕上げられ、小波状を呈している。無文化された頸下部には二条沈線が付され、條の長い体部文様帶の上限が画されている。文様構成の特徴などから晩期大洞C<sub>2</sub>式に相当するものと考えられよう。

#### 第2類

第64図124はMⅡ埋設土器で、頸基部より緩やかに外反する口縁を有している。口唇部は小波状風の入念な作り出しと二個一対の中突起によって構成されている。体部地文は二条沈線によってその上限が示されている。晩期大洞C<sub>2</sub>式に比定されよう。

### 深鉢形土器鉢

#### 第1類

第14図6は胴央部より緩やかに内湾する口縁を有し、体部地文は原体LRによって付されている。口唇部は入念に整形され「匂」状を呈し、晩期中葉から後葉に相当しよう。

#### 第2類

第15図12は体部地文に羽状繩文が付されるもので、肩部の張り具合いなどから広口壺形土器に近い器形を呈するものと推定される。伴出土器などから晩期後葉に比定されよう。

### 第3類

第15図15は頸央部よりほぼ直口気味に立ち上がる粗製深鉢形土器で、胎土・焼成とともに不良で脆弱な作りである。口唇部の内側に入念な剥ぎ取りによる調整痕が観察される。伴出土器などから晩期大洞C<sub>6</sub>式相当のものであろう。

### 壺形土器

#### 第1類

第54図95は頸下部より緩やかに内傾しながら立ち上がる球体形の細口壺形土器である。体部に入念に整形調整され、無文地である。伴出土器などから晩期前葉期に比定される。

#### 第2類

第11図5は頸下部よりやや外反気味に立ち上がる広口壺形土器で、頸基部は若干の張り出しと沈線によって段差が認められ、体部文様帯との明瞭な境界が示されている。文様構成などから晩期大洞C<sub>1</sub>式に比定されよう。

#### 第3類

第14図9は口縁部位を欠損するが、体部および肩部形状などから広口壺形土器の様相を呈するものと推定される。頸基部に二条沈線を付し、体部羽状繩文帯の上限を画している。晩期後葉のものと推定される。

### 鉢形土器

#### 第1類

第21図27は頸央部より内湾気味に立ち上がる口縁を有し、小波状風の入念な作り出しと平行二条沈線によって口縁部装飾が構成されている。いずれも胎土・焼成とともに良好で堅緻密な作りとなっている。晩期後葉に相当するものと考えられよう。

## 第2類

第6図1は口縁部が「フ」の字状態に内傾する鉢形土器で、口唇部は沈線と連続刺突列によって上面観を意識した構成となっている。なお体部には磨消技法による大腿骨文調のモチーフが腰開している。晩期後葉大洞C<sub>1</sub>式に相当されよう。

## 第3類

第47図74は口頸部より「逆く」の字状にやや内傾して立ち上がる鉢形土器で、口唇部は刺目文によって小波状風に仕上げられている。口縁部文様帶は沈線と連続刺突列の三段繰り返しで構成され、体部文様帶の上限が示されている。なお体部地文は羽状繩文が施されている。文様構成等から晩期後葉大洞C<sub>1</sub>式に比定されよう。

## 第4類

第76図63～65はいずれも細片で全体的な形状などは把握できないが、口縁部文様として浮彫調の三叉状入組文が付されている土器群である。文様構成の特徴などから晩期前半大洞B式に比定されよう。

## 第5類

第76図68、69はいずれも細片で全体的な形状は把握できないが、口縁部文様帶として浮彫調の羊齒状文が付されている土器群である。文様構成などから晩期前葉大洞BC式に比定される。

## 第6類

第14図7、第58図107は口唇部が鋸齒状に作り出され、内湾口縁部位に二条沈線の配し鉢形土器で、体部地文に帯状繩文とでもいべき縦長条の繩文が付されている。体部地文及び口唇部形状の特徴などから晩期後葉大洞C<sub>2</sub>式に比定される。

## 第7類

第76図76は無文帶の頸部より「く」の字状を呈して緩やかに立ち上がる鉢形土器で、口唇部内側に溝線状沈線を巡らすなど上面觀を意識した裝飾構成となっている。なお体部磨消文様帶の上限を画する隆起带上には円形刺突列が施されている。晩期中葉～後葉に相当されよう。

## 第8類

第77図85は口頸部に浮彫調の工字文調文様帶が展開し、その接合部は小突起状を呈している。体部地文は原体LR横によって付されている。文様構成等から晩期末葉大洞A式に比定されよう。

## 台付鉢形土器

### 第1類

第24図36は口縁部が「逆く」の字状に内傾する台付鉢形土器で、口唇部が小波状風に入念に仕上げられている。口辺部位の沈線による区画帶には繩文圧痕による斜位刻目文が帶状に配され、体部文様帶の上限を画している。

体部文様帶には磨消手法によって雲形的なモチーフが展開し、その下限は二条沈線によって示されている。文様構成などから晩期後葉大洞C<sub>1</sub>式に比定されよう。

### 第2類

第54図94は口縁外反の台付鉢形土器で、口唇部が小波状風を作り出されている。剥落磨耗が激しく、全体的な文様構成は把握できないが、胴上部から口縁部にかけて沈線・磨消手法による入組文的なモチーフが展開、その下限は沈線によって示されている。器形・文様構成などから晩期前葉期のものと推定される。

## 台付浅鉢形土器

第14図10は脚部からやや内湾気味に緩やかな立ち上がりをみせる台付浅鉢形土器で、表裏面が入念に無文研磨され、光沢を有する精製品である。伴出土器などから晩期後葉大洞C<sub>1</sub>式に比定されよう。

## 椀形土器

### 第1類

第24図37は底部位置から緩やかな弧を描いて立ち上がる椀形土器である。器全面が入念に無文研磨され、胴上部にわずかに短沈線による加飾痕が観察される。伴出土器などから晩期後葉大洞C<sub>1</sub>式に比定される。

### 第2類

第21図26は胴央部から外傾気味立ち上がる器形で、口縁部は入念に無文研磨されている。体部地文は原体RLによって施されている。文様構成および伴出土器などから晩期後葉大洞C<sub>1</sub>式に比定されよう。

### 第3類

第68図15は胴上部よりやや内傾する口縁を有し、幅の狭い口辺部位は入念に無文調整されている。体部地文は原体LRによって付され、胎土・焼成ともに良好で堅緻密な作りである。器形及び口縁部形状などから晩期後葉大洞C<sub>1</sub>式に相当すると推定される。

## 皿形土器

第25図40は底部位からやや内湾気味に緩やかな立ち上がりをみせる大皿の精製品である。彫刻的に仕上げられた小波状口縁部には四個の中突起が付され、口唇部の小突起間を連結する彫り込みや細緻な刻目文は明らかに上面觀を意識した精巧な作り出しどうっている。なお内側調整も入念で、細緻な繩文圧痕の付された細隆起帯を巡らし、その装飾性から大洞C<sub>1</sub>式に比定

されよう。

#### ミニチュア土器

##### 第1類

第14図11は底部位より緩やかな円弧を描いて立ち上がる平柿状の土器で、器表面は入念に無文研され光沢を有する。伴出土器などから晩期大洞C<sub>1</sub>に相当すると考えられる。

##### 第2類

第47図75は頸下部より外反気味に立ち上がる小型の短頸広口壺形土器である。球体に近い形状を呈し、入念に無文研磨されている。伴出土器などから晩期後葉大洞C<sub>1</sub>に比定されよう。

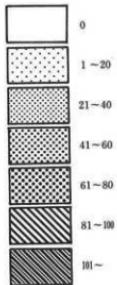
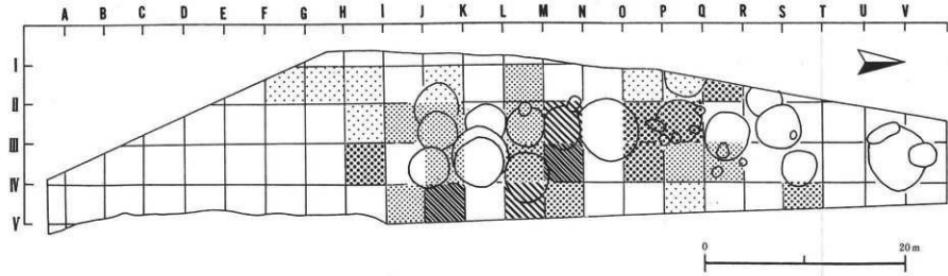
(2)甲虫を模したと思われる土製品（甲虫状土製品）

本資料は、調査区のほぼ中央緩斜面に位置するMⅢ堅穴住居跡1号（出土土器より縄文晩期大洞C<sub>4</sub>式に位置付けられる）の北東寄り床面より出土した有孔土製品で、刻目状隆起帯によって画された背面左右には精緻な磨消手法が施され、甲虫類特有の前翅（前羽）と後翅（後羽）を連想させる文様帯が見事に作り出されているのが特徴的である。

またノブ状に無文研磨された頸基部と下端中央部位には同型の小円孔があり、一方を親指の先で軽くおさえ、他方に口をあてて指先で孔の開閉加減を調整しながら吹くと様々な音階を奏でることができることから吹奏的な楽器（笛等）として用されたものであろうか。なお本遺跡を含め昆虫類を模したと考えられる土製品は、縄文後期～晩期にかけて頻出する猪・亀・犬・狼・熊形といった土製品に比して類例が乏しく、岩手県玉山村沢目の蟻状土製品（中国西周時代の玉器につく蟻に類似している）、青森県西津郡木造町亀ヶ岡泥炭層遺跡の水棲虫（ゲンゴロウ）を模した土製品、東京都大田区下沼郡貝塚遺跡のカマキリを模した土製品と数例が確認されているにすぎない。

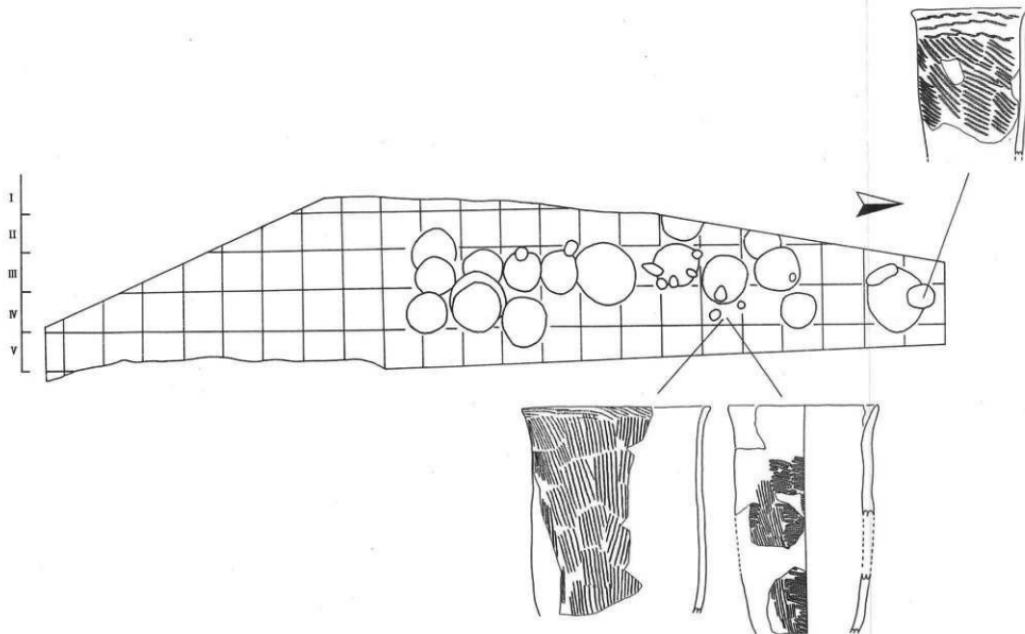


第84図 甲虫を模した土製品



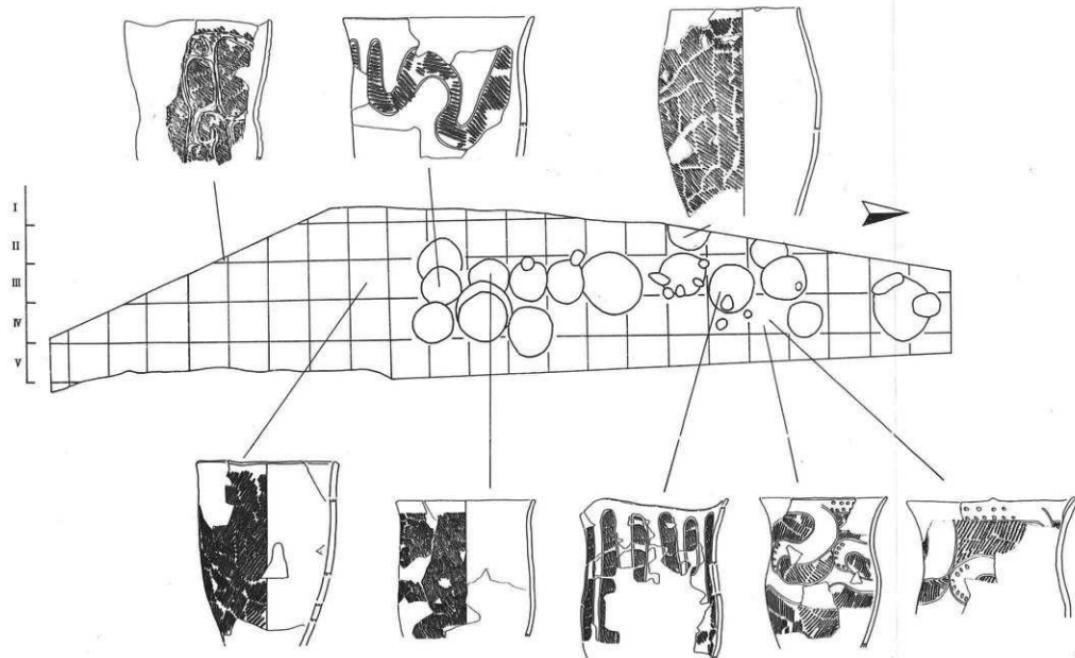
第85図 黒内X-III遺跡土器出土分布図(グリッド毎片分布)

A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V



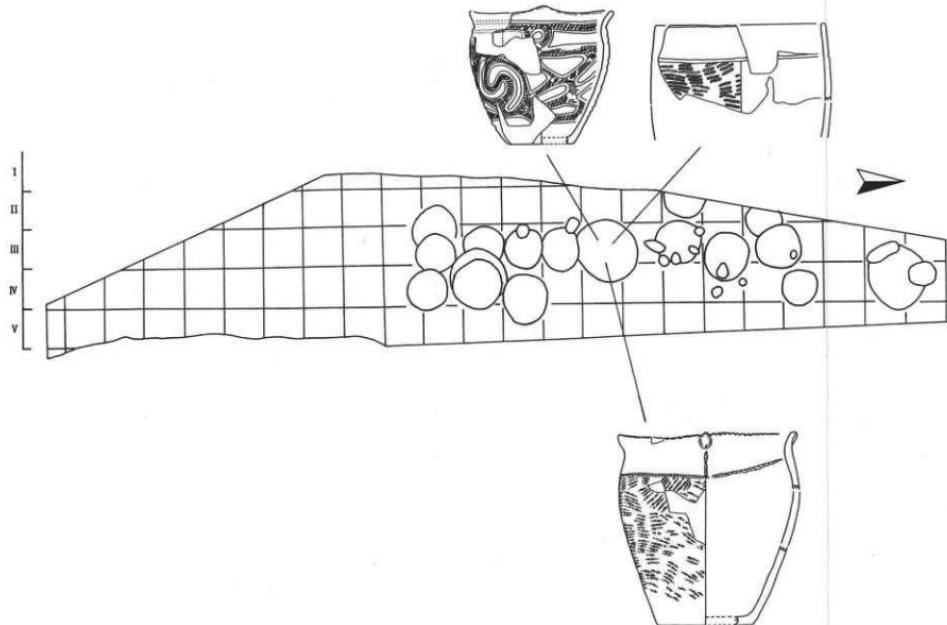
第86図 土器分布図 1 前期深鉢形土器

A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V



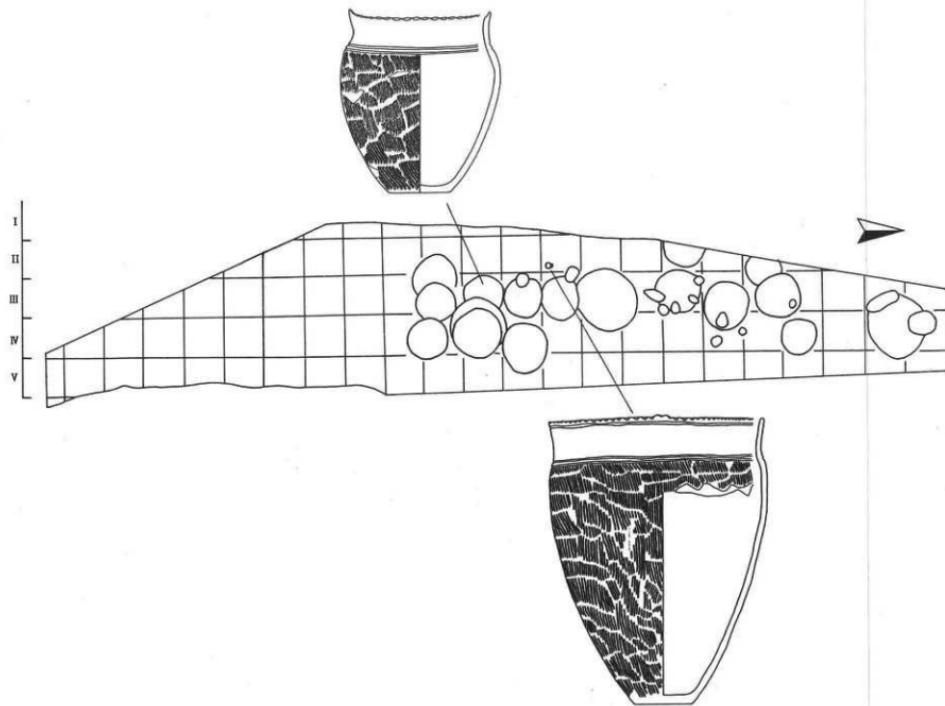
第87図 土器分布図 2 中期深鉢形土器

A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V



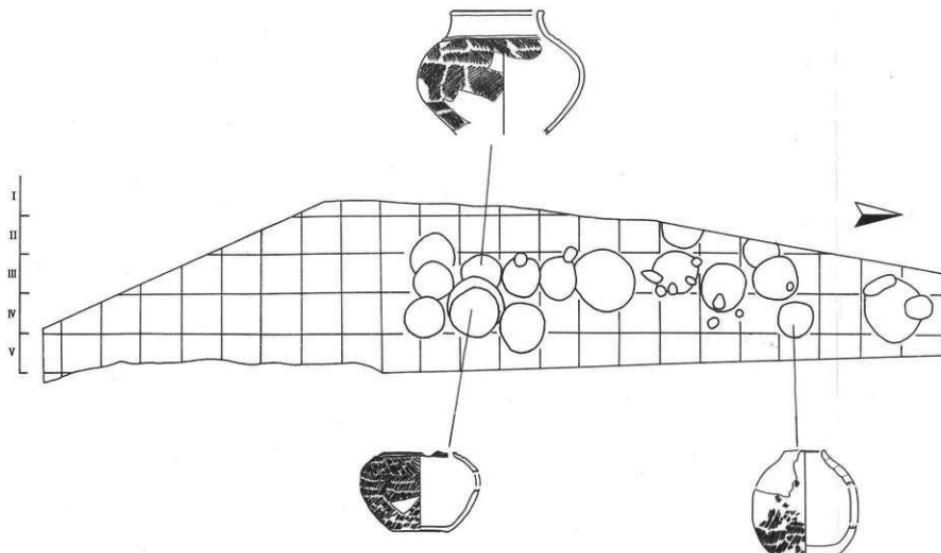
第88図 土器分布図3 後期鉢形土器

A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V



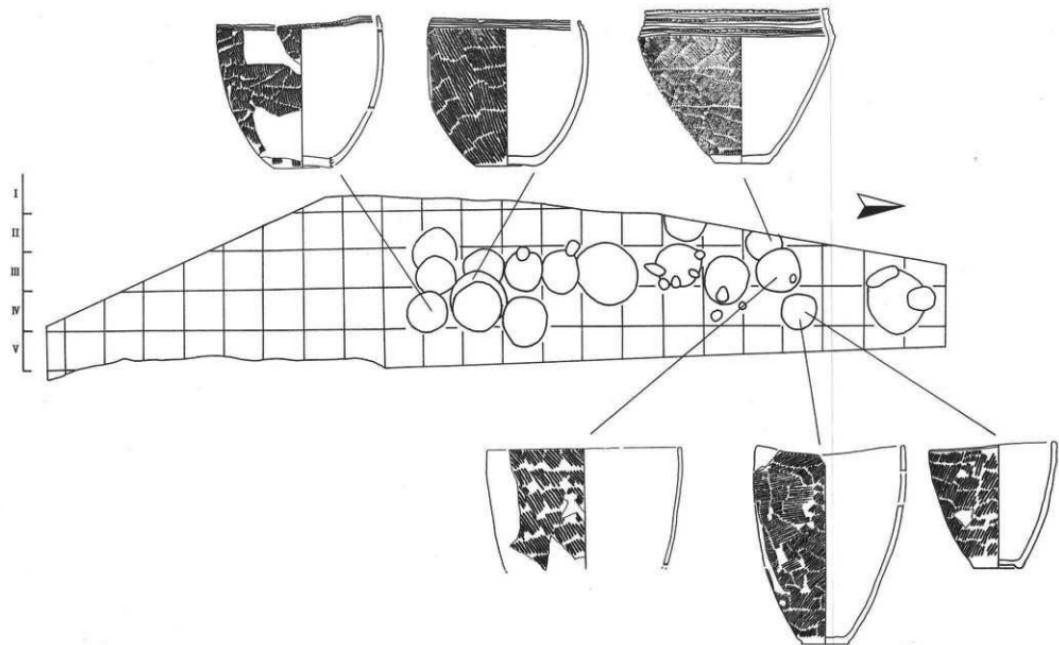
第89図 土器分布図4 晩期變形土器

A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V



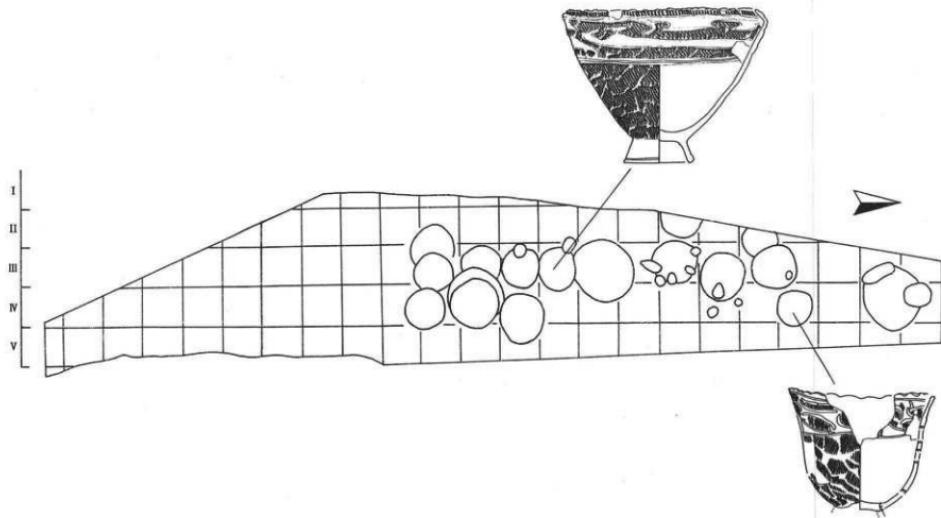
第90図 土器分布図 5 晩期壺形土器

A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V



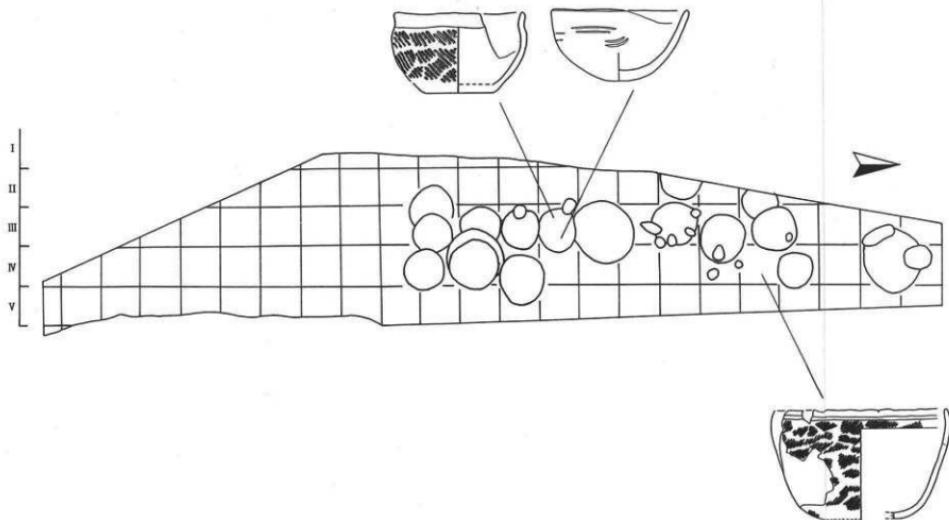
第91図 土器分布図 5 晩期鉢形・深鉢形土器

A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V

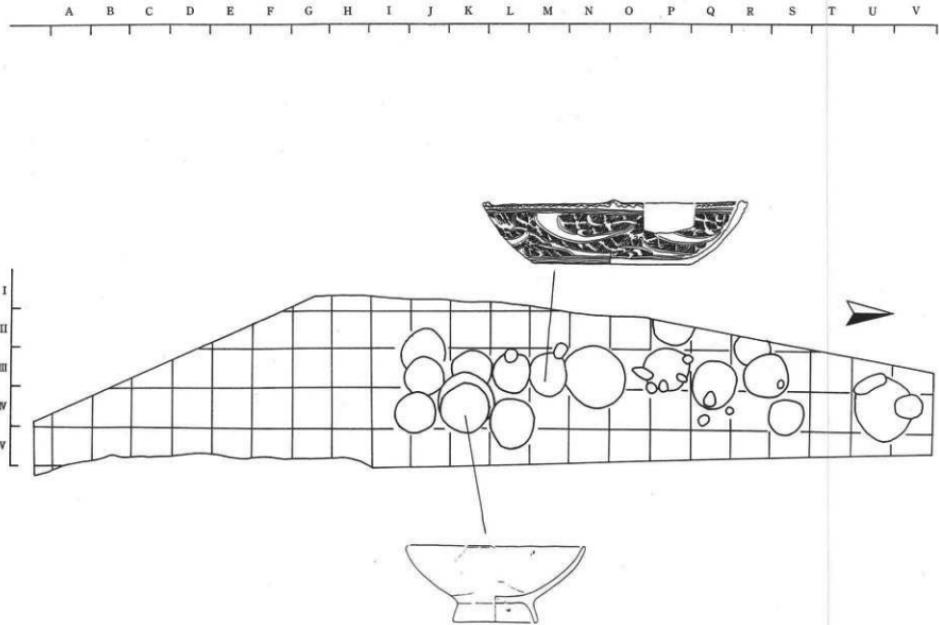


第92図 土器分布図 7 晩期台付鉢形土器

A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V

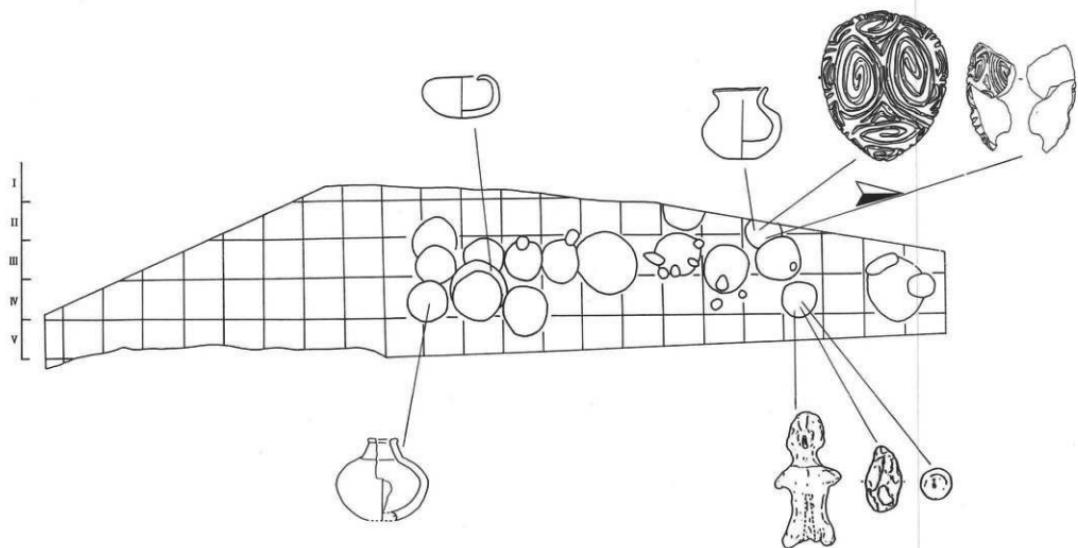


第93図 土器分布図 8 晩期桜形土器



第94図 土器分布図 9 晩台付浅鉢・皿形土器

A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V



第95図 土器分布図10晩期ミニチュア土器・土製品

(3) 石器

<石器群の分類基準について>

石器類については、既に先学によって種々の分類が試みられているが、ここでは石器を使用した人々の生業形態を推察しうる有効な手段という観点から適用行なわれている基準にしたがってⅠ類刺突具、Ⅱ類穿孔具、Ⅲ類削摺影具、Ⅳ類打割・掘削・切削具、Ⅴ類粉碎具、Ⅵ類製作関連具（石器の原素材）、Ⅶ類その他に大別し、さらに下記のように推定しうる機能別に細分した。

類	機能	名 称	備 考
Ⅰ	刺突具	石錐	有茎、無茎および形状等で細分される
Ⅱ	穿孔具	石錐	つまみの有無、先端部形状等で細分
Ⅲ	削摺具	石匙	縦型、横型
		石籠状石器	
		梢円形状石器	摺器的機能が想定される
		湾入ある剝片石器	削摺器的機能
		三日月状石器	削器
Ⅳ	打割 掘削 切削	磨製石斧	
		打製石斧	
Ⅴ	粉碎具	石皿 凹石 磨石	凹石、磨石兼用多い
Ⅵ	製作過程関連	石核	製作過程に関連するもので石器素材と推定されるもの
		剝片	
Ⅶ	その他	石棒 石劍	用途不明で呪術的色彩の強い石器

I類は刺突具（とりわけ狩猟用）としての鍛的機能を有するものである。II類は穿孔具と推定されるもので、広義的には刺突具の範疇に捉えるべきものと考えられるが、回転運動による穿孔作業に使用されたものとして独立させた。つまみ部の有無や先端部位の形状などから類分される。III類は削り、搔き出し、彫刻刀的な比較的小型の利器機能の推定される石器類である。つまみ部の有無、刃部形状などから類分されるが、特に橢円形状石器についてはその周縁部に細い調整剝離が施されるスクレーパー的機能が想定される。

IV類は打ち割り、敲く、打つ、掘削具としての機能が想定され石器で、刃部形状などから「斧」的なものとして用されたものであろう。V類は広義の粉碎具として捉えられるもので、特に磨石と凹石の兼用のものがやや多いようである。VI類は石器製作過程に関連するもので、素材および調整痕の観察されない側片・石屑を包括。VII類は上記以外のものを包括したが、特に石棒・石刀の性格規定については今後検討しなければならない。

#### <石器群を構成する各器種について>

##### 石鎌

狩猟用の鎌としての機能を有するもので、a：有茎鎌とb：無茎鎌の2種に類分される。aの有茎鎌はいずれも細身の鎌身を有し、肩部の形状などからa1：肩部がやや丸みを呈するものとa2：肩部が「く」状に角張るもの2タイプに細分される。bの無茎鎌は基部および先端部の形状などからb1：二等辺三角形状の縦長の鎌身を有し、基部が直線的に調整加工されているもの、b2：b1と同様縦長の二等辺三角形状を呈するが、基部に僅かな抉りの調整加工痕が観察されるもの、b3：b1、b2と同様縦長の二等辺三角形状の鎌身を呈し、明確な凹状の抉り調整を有するもの、b4：二等辺三角形状を呈し、b1～b3に比して鎌身が短く、基部にわずかな抉り調整が観察されるもの、b5：やや薄手、幅広の鎌身を有し、基部に凹状の抉り調整の観察されるもの、b6：全体として柳葉形を呈し、基部が丸みをもって調整加工されているもの、薄手の剥片を素材とした粗製品が多い6種類に細分が可能である。

##### 石錐

前述したように穿孔具としての機能を有するもので、a：円形状に調整加工されたつまみ部を有し、針状の鋭い刃部が作り出されているとb：aに比して機能先端部が太く尖頭状を呈し、基部相当部が不明瞭で調整も粗雑なもの2種に類分される。機能先端部の鋭利差は穿孔対象の違いによるものであろうか。

## 石匙

いわゆる生産補助具として削撲器的機能が想定される石器である。その形状などからa：縦型とb：横型の2種に類分される。縦型石匙のa1はつまみ部を有し、全体として薄手の籠状を呈するものである。周縁部位への片面加工、平坦な先端部位には両面調整加工が施されている。a2は粗雑なつまみ部が作り出され、「V」状の鋭利な機能部位が片面加工によって作り出されている。横型石匙のb1はつまみ部の両側に「く」状、その対辺に半円弧状の鋭い刃部が作り出されている。b2はつまみ部の片側および対辺に「く」状の鋭い刃部が作出されている。b3はつまみ部位の両側に片面加工による「く」状、対辺に直線的機能刃を作り出している。b4はつまみ部の両側に「ニコ」状、対辺にやや凹状の機能刃部が作り出されている。

b5はつまみ部を有さず、全体として△状を呈する周縁部位への片面加工によって鋭利な刃部が作出されている。

## 石籠

削撲器的機能の想定される生産補助具で、その形状、調整加工などから次の4種に類分される。1類は扁平縦長の刷片を素材とした比較的小型の石籠状石器で、片面からの調整加工によって両側および先端部位に鋭い刃部が作り出されている。2類は1類に比較してやや縦長の扁平刷片を素材とし、両面加工によって直線的な両側およびやや丸みを呈する鋭利な先端部位が作り出されている。3類は扁平縦長方形の刷片形状を利用し、基部および片側に僅かな両面加工が施されている。4類はやや棒状の肉厚の刷片を素材とし、片面加工によって角度のある鋭利な機能刃部が作り出されている。この種の籠状石器には大きく一次打面を残す未完製品も多いようである。

## 橢円形状石器

片面が平坦で、他面が極端に盛り上がる不均衡な断面形を有し、平面形にはかなりの定形性が認められ、周縁の広範な部分に剥離調整が施されているものである。全体的な形状および調整加工等から次の3種に類分されよう。1類は比較的小型のもので、周縁部位への粗い両面加工によって角度ある機能刃部が作出され、使用によるものか想定し得ないが、細い破碎痕跡が顯著に観察されるのが特徴的である。2類は1類に比してやや大きく、片面からの調整加工によって角度ある機能刃部が作出されている。3類は2類よりも定形性が強く、両端がやや尖り、断面形状が菱形を呈している。両面加工によって角度ある機能刃部が作り出され、使用による

ものと想定される細破碎痕が観察される。

#### 湾入部ある剥片石器

基本的特徴としては、素材の周辺に凹状の抉り部を作り出し、そこに刃部形成と思われる剝離を施したもので、道具の「柄」などの成形に用いられた振器的なものであろう。この種の石器は全体形状・刃部形成部位・破碎残有部位などから次の4類に類分される。

a タイプは不整方形形状の剥片を素材とし、底辺部位に片面加工による湾入ある鋭い刃部が形成され、破碎痕もほぼこの部位に集中している。b タイプは比較的薄手・綫長の小剥片を素材とし、長軸側辺部位に片面加工による湾入状の鋭利な刃部を形成しているものである。この種は断面形状がほぼ三角形のカテゴリーにおさまるものが多い。c タイプは b タイプと同様の薄手・綫長の小剥片を素材とし、短軸辺に片面加工によって凹状の湾入部位を作り出されている。d タイプは a～c タイプに比して肉厚・長大で長軸辺に粗雑な片面加工によって凹状の湾入部を作り出されている。

以上のように、湾入部ある振器として捉えたものにはある程度の定形性を認めることが出来よう。したがって本来、広義の振器的なものに含まれるが、一応分離・独立して取り扱った。

#### 三日月状石器

全体形状が三日月状（鎌先状）を呈するこの種の石器は本遺跡では QIV堅穴住居跡 1号埋土からのただ 1 点の出土である。比較的肉厚・綫長の剥片を素材として、周縁部位に両面加工を施し、湾入部およびその対辺部位に鋭い刃部が形成されている。広義的には前述した湾入ある振器の一類と考えられるべきものであろうが、全体形状・刃部成等の精巧さから独立・分離して捉えた。

#### 加工痕ある剥片石器

削振器的機能を有したと推定される剥片石器は、刃部形状などから次のように類分が可能であろう。a 類は薄手・綫長の剥片を素材とし、先端部位周辺に両面加工によって嘴状の鋭い「V」形刃部を作り出されている。b 類は a と同様、薄手・綫長剥片を素材として、先端周縁部位に片面加工による嘴状の刃部が作出されているものある。c 類は薄手・綫長の小剥片を素材として、先端部位に片面加工による「U」の鋭利な刃部を作り出されている。おそらくエンドスクリーバー的機能を有したものであろう。d 類は不整合形の小剥片を利用した削器的機能が想定

される石器で、短軸辺に直接的な刃部が形成される d1 タイプ、長軸辺（底辺）に直線的な鋭い刃部が作出されている d2 タイプ、二側辺に「 $\angle$ 」状の鋭利な直線的刃部を作り出している d3 タイプの 3 種に細分されよう。

e 類は薄手・綾長の剥片形状を利用し、先端部位が片面加工によって「切り出しナイフ」状に作り出されている。刃部形状などからおそらく削摺器的機能を有したものであろう。

f 類は貝殻状剥片を素材とした類で、裏面に大きく打撃面を残す粗製品が多く、片面加工によって半円弧状の刃部を作り出されている。

#### 磨製石斧

広義的に切削器的機能が想定されるものである。本遺跡検出のものは全て定角式の範疇として捉えられるべきもので、この種特有の面取りが観察される。基部の形状などから a タイプ：やや大型で、基部が平坦に近く作り出され、鋭い始刃を有し、着柄の時の擦痕が両側辺に顕著に観察される。b タイプ：a タイプに比してやや小さく、基部が尖頭状に作り出されているタイプで、刃部に破碎痕が顕著に観察されるのが特徴である。

#### 打製石斧

その形状などから打割、掘削的機能が想定される石器である。三角柱状の半割した礫を素材とした大型品で、先端を尖頭状に作り出しがなされ、若干の破碎痕が観察されることからこの部位に機能を有させたものであろう。なお両側には着柄のものと推定される凹状の湾入部が作り出されている。

#### 石皿

広義の粉碎具として捉えられるべきもので、本遺跡では長大な両輝石安山岩を素材としたものが大半である。明らかな加工部（脚部など）をもたないが、機能部位は全体的に平坦で、中央部がやや凹状を呈しているのが特徴である。

#### 磨石

石皿同様、植物質などの粉碎・磨り潰しなどに用せられたものであろう。a 類：球状を呈し、

上下端に擦痕ある平坦面を有している。b類：a類同様の形状を呈するが、小形のもの、c類：卵形状を呈し、片面に平坦な機能部位を有する、d類：不整円形状扁平盤を素材とし、両面および一側面に機能磨面を有する4タイプに細類分されよう。

#### 凹石

通常凹石と称せられているもので、扁平な両輝石安山岩を素材としたものが大半を占めている。その形状などからa：両面に複数の凹状を呈する痘痕が観察されるもの、b：両面に一対のやや彫りの深い凹状を呈する痘痕が観察されるもの、c：両面への凹状の痘痕に加えて一侧に細い破碎痕の観察される機能磨面をもつものの3種に細分が可能である。

#### 特殊擦石

三角柱に近い形状を呈し、比較的幅の広い三側辺に機能磨面が観察される。機能的には対象物の粉碎・磨り潰し・磨滅などが想定されよう。

#### 石棒

本遺跡出土の石棒は、その断面形状等からa：入念な調整加工によって円筒形状に整形され、先端部位に円盤状の突出部を有するもの、b：不規五角形の断面形状を呈し、各面に調整時のものと推定される擦痕が、また先端部位には破碎痕が顕著に観察されるのが特徴的である。

#### 石刀

粘板岩を素材とし、一侧および先端部位にやや鋭い機能部が作り出されている。特に使用時のものと推定される細い破碎痕が先端部位に顕著に観察される。

#### <石器群の組成比について>

石器製作関連遺物（石核・加工痕の観察されない小剝片）信仰関連のものと推定される遺物（石棒・石刀）を除いた、より直接的な生産用具・生産補助具の比率は石鎌13%、石錐3.57%、石匙4.16%、石箒3.57%、湾入ある剝片石器8.92%、三日月状石器0.59%、梢円形状石器

4.16%、削撃器具類 36.3%、磨石 4.44%、凹石 3.57%、特殊擦石 1.19%、磨製石斧 2.38%、打製石斧 0.59%、石皿 3.57% となっている。このような本遺跡の石器組成のなかで石鎌、湾入ある剥片石器、削撃器具類の占める比率は決して小さいものではない。それはとりもなおさず使用頻度の高い、ひいては生産活動に直結する重要度の高い石器であることの反映とも考えられる。また小河川に隣接して立地しているにもかかわらず石鍬などの漁捞具類が欠落している点は、若干奇異の感をいだかせるが、今後、晚期を主体とした分村（本遺跡のような小河川を望む山間の小集落あるいは短期間のキャンプサイト的な遺跡で、大規模集落的な母村に対する意味合いを含む）的な他遺跡の類例との比較検討を加えなければならないと考える。

#### <石器の材質について>

器種別の石材組成については個別に示したが、ここでは石材と器種との関係を統括的に概観してみる。

- (1)泥岩類－石鎌・石錐などの広義の刺突具および穿孔具類にほぼ限定されよう。
- (2)粘板岩類－石刀、刺突具、撃器類に利用され、若干選択の自由が観察される。
- (3)硬砂岩類－刺突具、削撃器と斧に利用されている。
- (4)凝灰岩類－最も変種に富み、刺突具、削撃器具に素材選択されている。なお赤色凝灰岩は削撃器類に、緑色凝灰岩は磨製石斧に限定されている。
- (5)チャーレン－石鎌などの刺突具、橢円形状撃器具類に利用されている。
- (6)流紋岩類－石棒、特殊擦石に限定利用されている。
- (7)安山岩類－石皿、磨石、凹石などの粉碎具に素材選択されている。

## 参考文献

- 瀬川 司男 1961 『大迫町埋蔵文化財調査表』
- 芹沢 長介 1972 『石器時代の日本』篠塚書館
- 淹口 宏 1977 『西広貝塚 上総国分寺台遺跡調査報告Ⅱ』上総国分寺台遺跡調査団編早稲田
- 田村 誠一 1968 『大平野Ⅰ号遺跡』『岩木山』岩木山刊行会  
『大平野Ⅱ号遺跡』 "  
『薬師Ⅱ号遺跡』 "
- 中村 良幸 1978 『立石遺跡発掘調査概報』大迫町教育委員会
- 林 謙作 1965 『縄文文化の発展と地域性 2・東北『日本の考古学Ⅱ』河出書房新社  
1976 『亀ヶ岡文化論』『東北考古学の諸問題』東出版
- 保坂 三郎 1972 『是川遺跡出土遺物報告書』
- 馬目 順一 1968 網取貝塚第四地点発見の掘之内Ⅰ式期土器の考察『小名浜』
- 三田史学会 1959 『亀ヶ岡遺跡』(清水潤三)
- 村越 淳 1968 潟ノ沢遺跡『岩木山』
- 山内 清男 1930 所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄文式土器の終末 考古学1-3
- 山内 清男 1937 縄文土器型式の細別と大別 先史考古学1-1
- 山内 清男 1939 『日本遠古之文化』
- 山内 清男 1964 『日本原始美術Ⅰ』
- 吉崎 昌一 1969 縄文文化の発展と地域性-北海道 日本の考古学Ⅱ
- 安孫子昭二 1969 『東北地方における縄文後期後半の土器様式について』『石器時代9号』
- 伊藤 玄三 1978 『東北 亀ヶ岡文化』『新版考古学講座3、先史文化』
- 岩手県 1956 『岩手県地質説明書Ⅱ』  
1961 『上古篇』『岩手県史第1巻』
- 今井富士雄 1968 『小森山東部遺跡』『岩木山』岩木山刊行会
- 江坂 輝弥 1968 『土偶』校倉書房
- 小田野哲憲 1969 『岩手県勝前台遺跡出土の晩期縄文式土器について』『道光器2号』
- 北上市教育委員会 1968 『北上市史第1巻』
- 草間俊一・吉田義昭 1953 『岩手を中心とする考古学提要』岩手県学校生活協同組合
- 角田 文衛 1939 『陸奥福井遺跡の研究』考古学論叢10
- 角田文衛・三森定男 1941 『先史時代の東部日本-東北地方』人類学、先史学講座6
- 名取武光・峰山巖 1958 入江貝塚『北方文化研究報告』第13輯
- 中村孝三郎 1965 『先史時代と長岡の遺跡』

- 中谷地宇二郎 1929 『東北地方石器時代調査予報』人類学雑誌 44 - 3
- 中村孝三郎・小片 保 1963 『室谷洞窟』(単)
- 林 雄作 1962 『東北地方早期縄文式文化の展歴』考古学研究 9 - 2  
1964 『事実誤認と見解の相違』同上 11 - 2
- 1963 『石巻市渡波梨木塙の発掘』東北考古学会公論会レジュメ
- 1965 『東北地方無文土器文化の研究』東北考古学 4
- 松本七郎 1929 『陸前国氣仙郡蛇王洞窟の石器時代遺跡』人類学雑誌 42 - 4
- 鈴木 克彦 1973 a 『中字田遺跡(浜名 A 遺跡改め)今別バイパス関係発掘調査報告書』
- 鈴木 克彦 1973 b 『中平遺跡発掘調査報告書』
- 鈴木 克彦 1974 『亀ヶ岡遺跡発掘調査報告書』
- 鈴木 公雄 1964 『土器型式の認定方法としてのセットの意義』考古学手帖 21
- 鈴木 公雄 1969 『安行系粗製土器における文様施文の順位と工程数』信濃 21 - 4
- 江坂輝弥・笛津健洋・西村正術 1958 『青森県三戸郡大館村蟹沢遺跡調査報告』石器時代
- 岡本勇・戸沢充則 1965 『縄文文化の発展と地域性—関東』日本の考古学 II
- 萬西 効 1970 『堀合 1号遺跡』『青森県平賀町堀合 1号遺跡発掘調査報告書』
- 萬西 効 1972 『青森県平賀町堀合 2号遺跡発掘調査報告書』
- 北林八洲晴 1973 『原原農場遺跡 むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報』昭和 47 年度
- 北林八洲晴 1974 『宮ノ沢遺跡(1)むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概要』昭和 48 年度
- 清野 謙次 1969 『日本の貝塚の研究』
- 草間俊一編 1974 『焼山弁天遺跡』
- 草間俊一・金子浩昌編 1971 『貝島貝塚』

黒内XIII遺跡写真図版



写真図版 1 黒内 XIII 造跡完掘状況空撮



調査区遠景(西方向より)



調査区近景(南西方向より)

写真図版 2 調査区遠景、近景



写真図版 3 調査区雑物除去風景(南西方向より)



JII 穹穴住居跡 1号



KIII 穹穴住居跡 1号

写真図版 4 JII 穹穴住居跡 1号・KIII 穹穴住居跡 1号



KIV竪穴住居跡1号



KIV竪穴住居跡



住居内出土土器

写真図版5 KIV竪穴住居跡1号



KIV堅穴住居跡 2号



LIV堅穴住居跡 1号

写真図版 6 KIV住居跡 2号・LIV住居跡 1号



MIII竪穴住居跡 1号・2号



MIII竪穴住居 1号炉跡



MIII竪穴住居 2号炉跡

写真図版 7 MIII住居跡 1号・2号



N III 突穴住居跡 1号



N III 突穴住居跡



炉跡附近出土土器

写真図版 8 N III 突穴住居跡 1号



P II 整穴住居跡 1号



P II 整穴住居跡炉跡(1)



P II 整穴住居跡炉跡(2)

写真図版 9 P II 整穴住居跡 1号(1)



P II型穴住居跡1号半剖



P II型穴住居跡1号

写真図版10 P II型穴住居跡1号(2)



P III 突穴住居跡 1号



P III 突穴住居跡  
写真図版11 P III 突穴住居跡 1号



写真図版12 QIV竪穴住居跡1号



R II 壁穴住居跡 1号



R II 壁穴住居跡 炉跡



住居跡内土版検出状況



住居跡内小型土器検出状況

写真図版13 R II 壁穴住居跡 1号



R III竪穴住居跡 1号



S IV竪穴住居跡 1号

写真図版14 R III竪穴住居跡 1号・S IV竪穴住居跡 1号



S IV 突穴住居跡 1号 壺形土器出土状況



S IV 突穴住居跡 1号 土偶出土状況



S IV 突穴住居跡 1号 ボタン状土製品出土状況

写真図版15 S IV 突穴住居跡 1号 遺物出土状況



VIV竪穴状遺構1号



JIV竪穴状遺構1号

写真図版16 VIV竪穴状遺構1号・JIV竪穴状遺構1号



L III 穹穴状遺構 1号



N III 穹穴住居跡 2号

写真図版17 L III 穹穴状遺構 1号・N III 穹穴住居跡 2号



UIV堅穴状遺構 1号



調査区中央堅穴住居跡群(北東方向より)

写真図版18 UIV堅穴状遺構 1号、調査区中央住居跡群



調査区南東住居跡群(北西方向より)



調査区東寄り斜面堅穴住居跡群

写真図版19 調査区南東、東寄り住居跡群



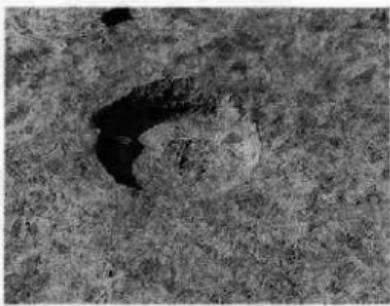
L III 土坑 1号



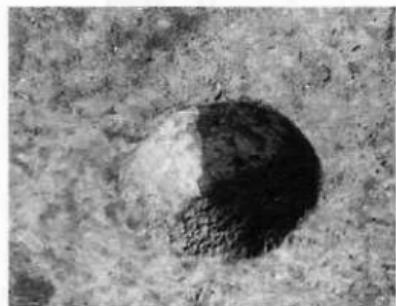
P III 土坑 1号



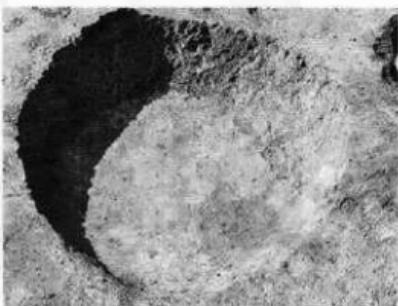
P III 土坑 2号



P III 土坑 3号

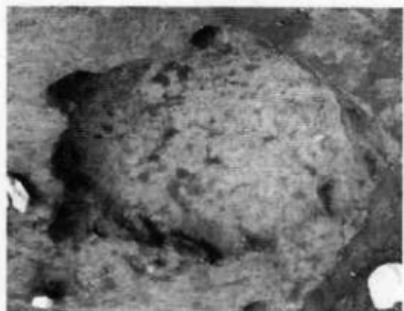


Q IV 土坑 1号

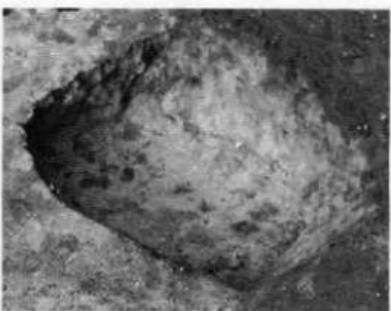


Q IV 土坑 2号

写真図版20 L III 土坑 1号、P III 土坑 1号・2号・3号、Q IV 土坑 1号・2号



S IV土坑1号



S IV土坑2号



M II埋設土器造構

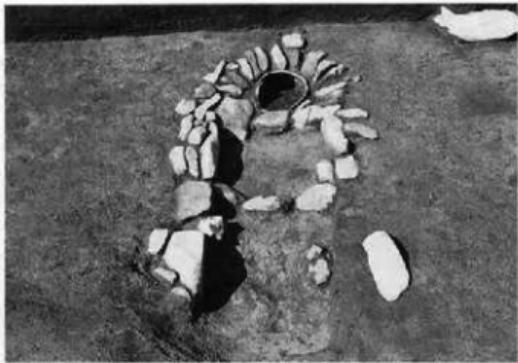


M II埋設土器半剖(1)



M II埋設土器半剖(2)

写真図版21 S IV土坑1号・2号・M II埋設土器造構



P II 竪穴住居跡 1号炉跡



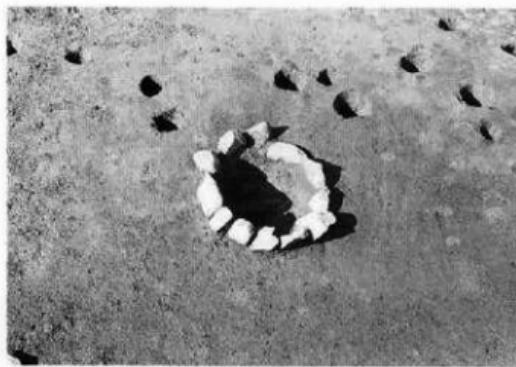
Q IV 竪穴住居跡 1号炉跡



J II 竪穴住居跡 1号炉跡

石圓炉

写真図版22 P II, Q IV, J II 竪穴住居炉跡



石圓炉(格円形状)

K田竪穴住居跡 1号炉跡



二重配石の石圓炉

KIV竪穴住居跡 1号炉跡



土器埋設石圓炉

R II 竪穴住居跡 1号炉跡

写真図版23 K III・K IV・R II 1号竪穴住居炉跡



1

J II 壁穴住居跡 1号



2



3

J III 壁穴住居跡 1号

写真図版24 J II, J III 壁穴住居跡 1号出土遺物 土器

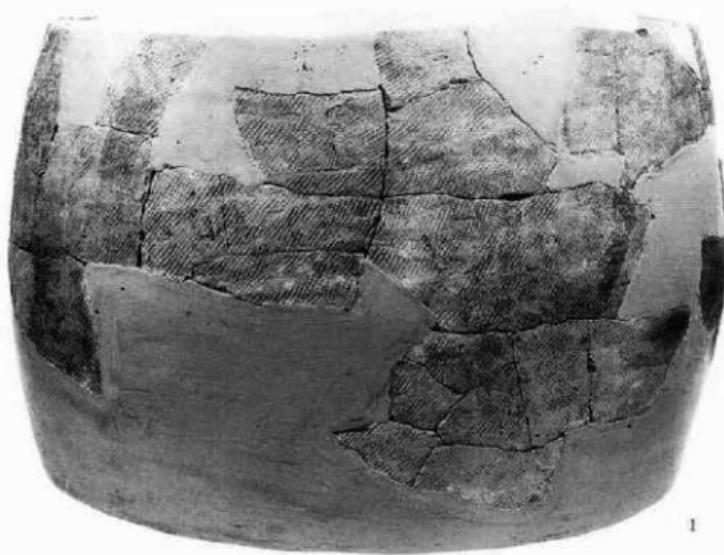


1



2

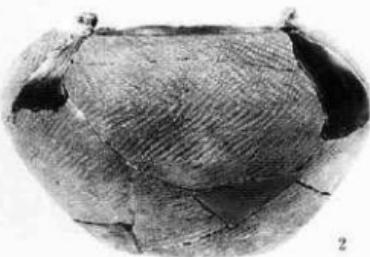
写真図版25 K III 竪穴住居跡 1号 出土遺物 土器



写真図版25 KIV竪穴住居跡1号 出土遺物 土器(1)



1



2



3



4

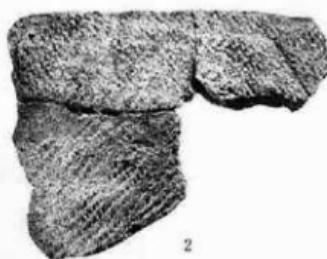
写真図版27 KIV堅穴住居跡1号 出土遺物 土器(2)



写真図版28 KIV竪穴住居跡1号 出土遺物 土器(3)



1



2



3



4



5



6



7

写真図版29 KIV竪穴住居跡1号 出土遺物 土器(4)



1

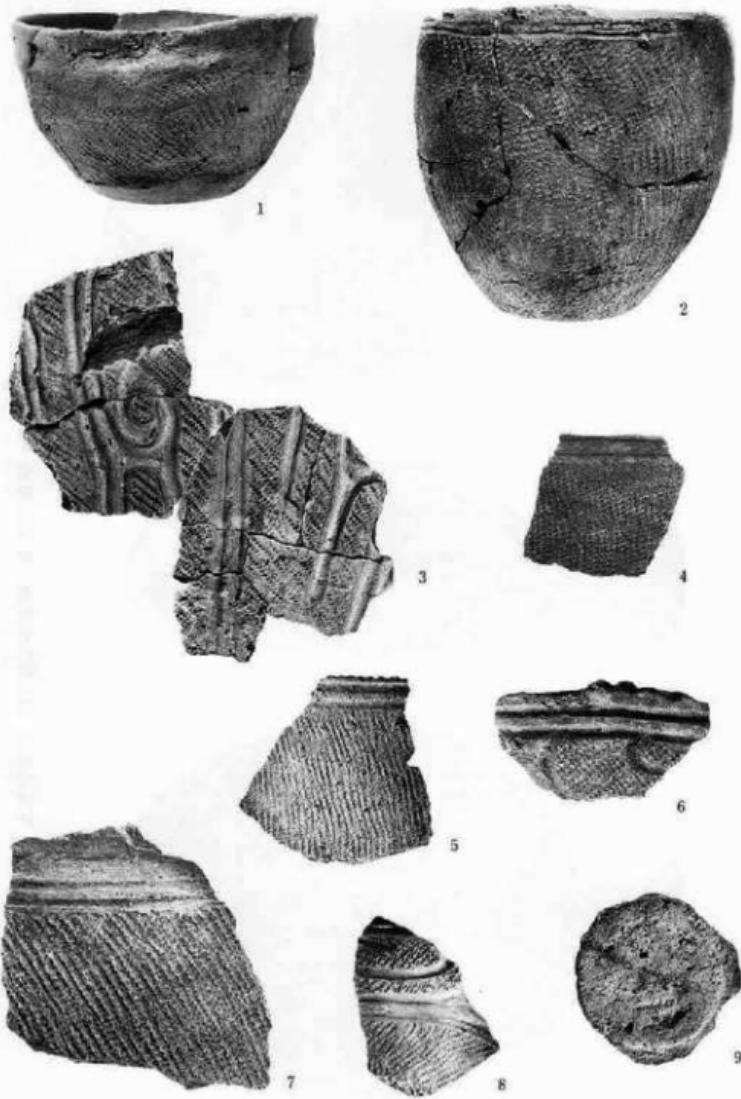


2

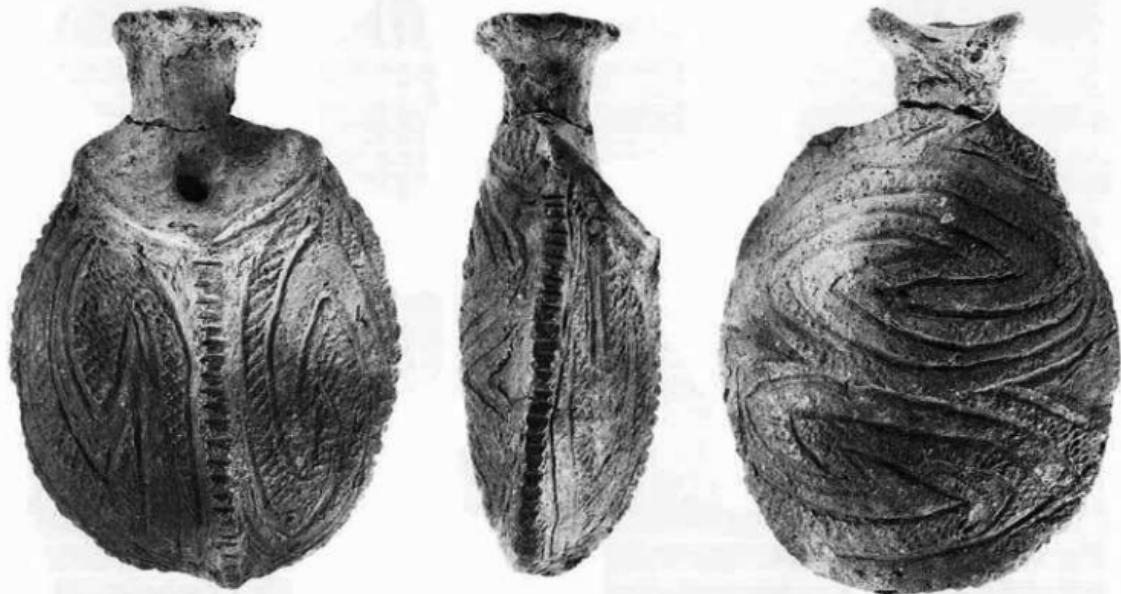


3

写真図版30 L.IV竪穴住居跡1号 出土遺物 土器



写真図版31 MIII竪穴住居跡1号 出土遺物 土器



写真図版32 M III 窪穴住居跡 1号 出土遺物 甲虫状土製品



1



2



3



4

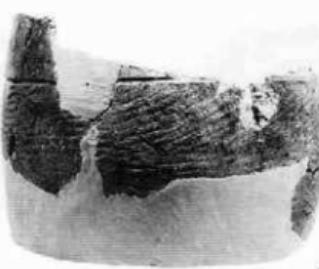
写真図版33 MIII竪穴住居跡 2号 出土遺物 土器(1)



写真図版34 MIII竪穴住居跡 2号 出土遺物 土器(2)



1



2



3



4

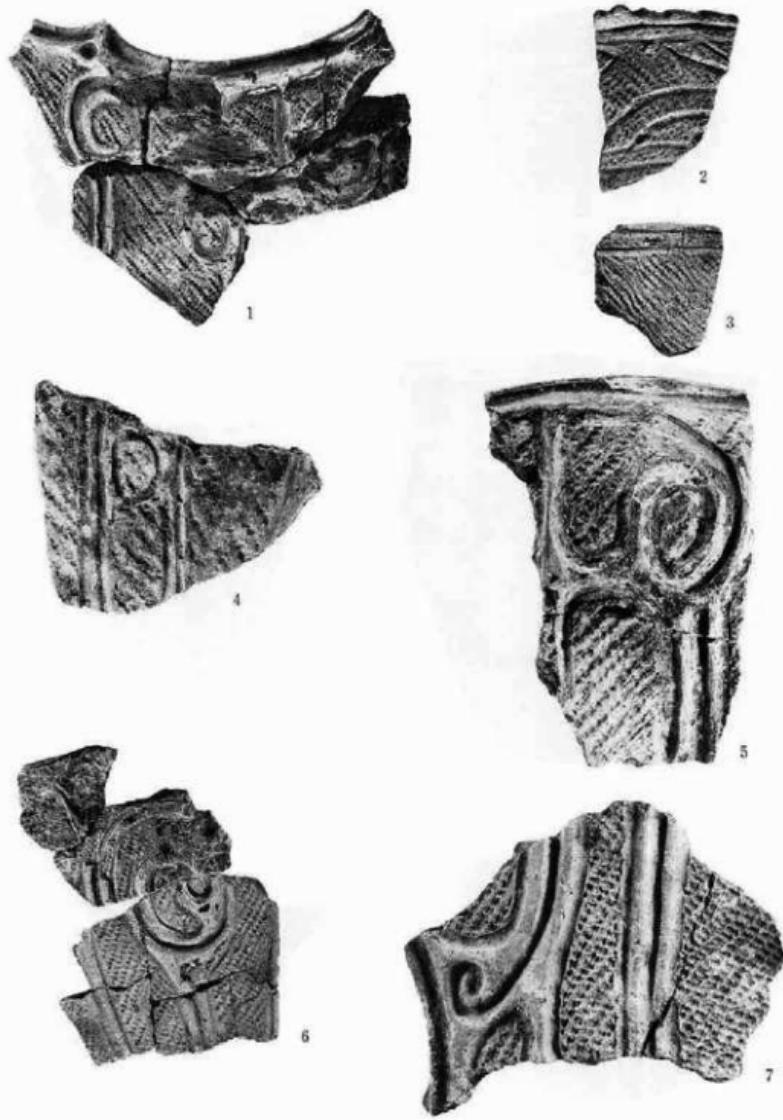


5



6

写真図版35 N川竪穴住居跡1号 出土遺物 土器(1)



写真図版36 N III 竪穴住居跡 1号 出土遺物 土器(2)



1



2

写真図版37 P II 竪穴住居跡 1号 出土遺物 土器

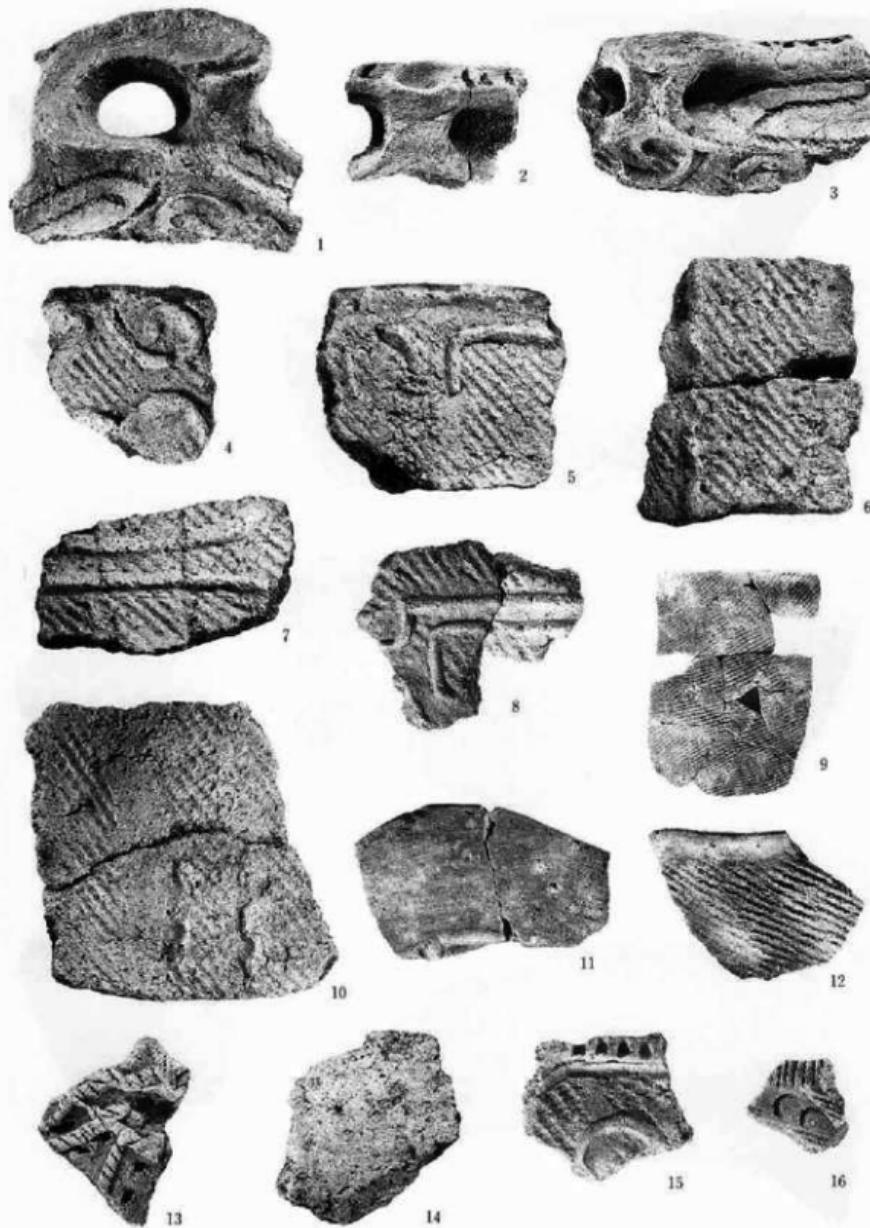


1

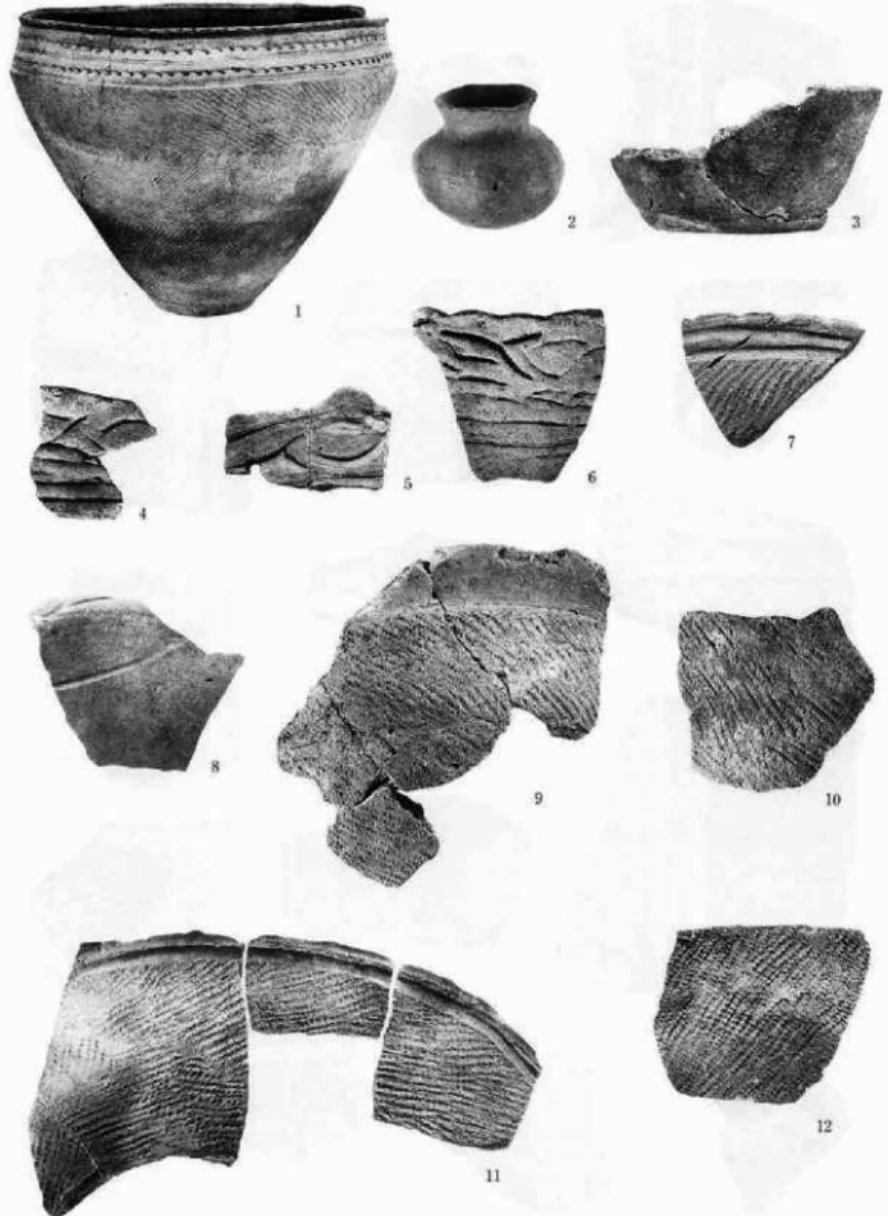


2

写真図版38 Q IV 積穴住居跡 1号 出土遺物 土器(1)



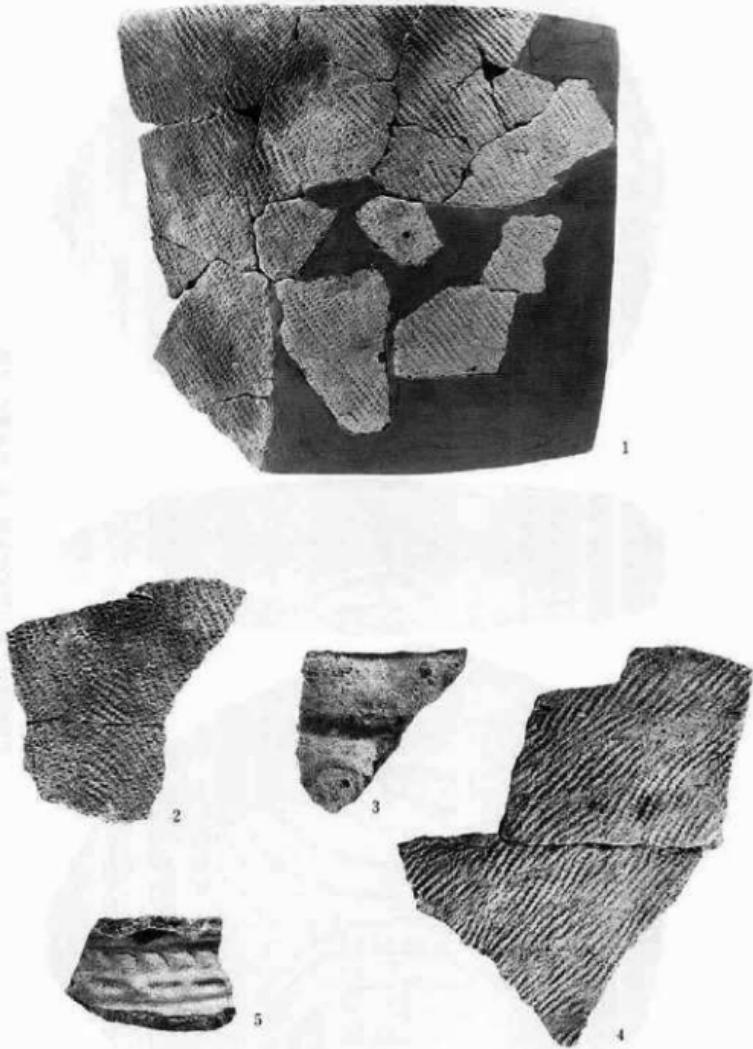
写真図版39 Q IV 竪穴住居跡 1号 出土遺物 土器(2)



写真図版40 R II 竪穴住居跡 1号 出土遺物 土器



写真図版41 R II 竪穴住居跡 1号 出土遺物 土版



写真図版42 R III 竪穴住居跡 1号 出土遺物 土器



1



2

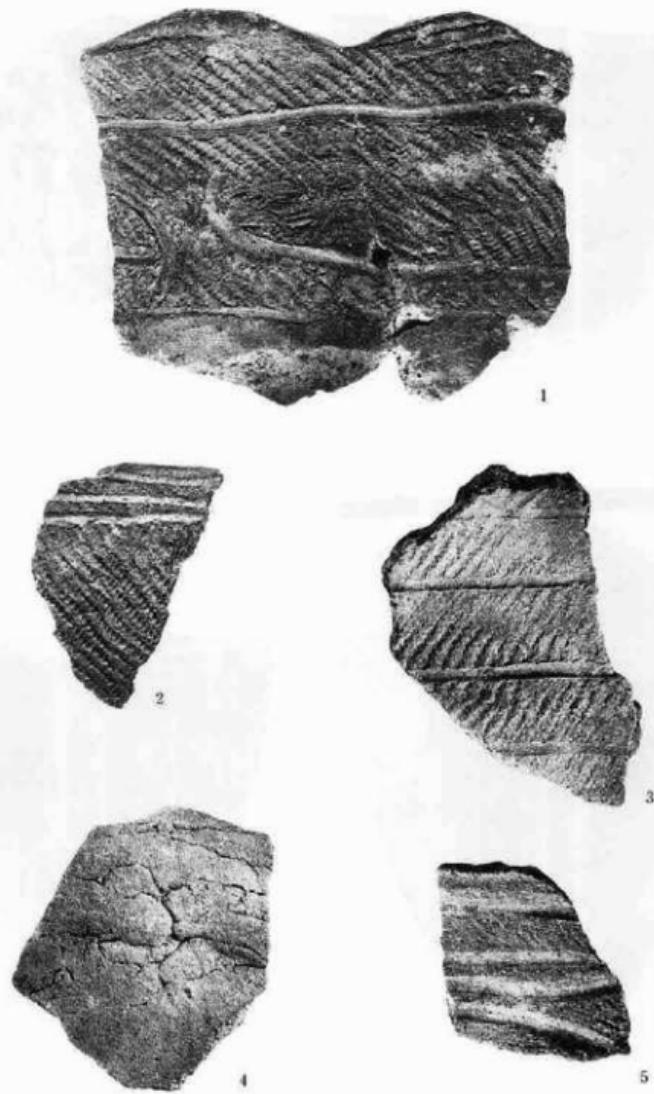


3

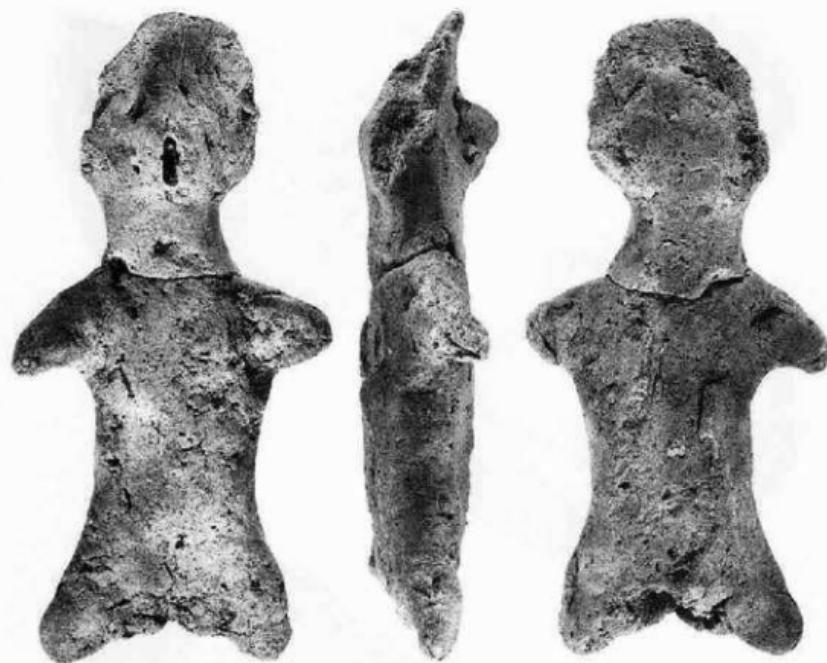


4

写真図版43 SIV竪穴住居跡1号 出土遺物 土器(1)



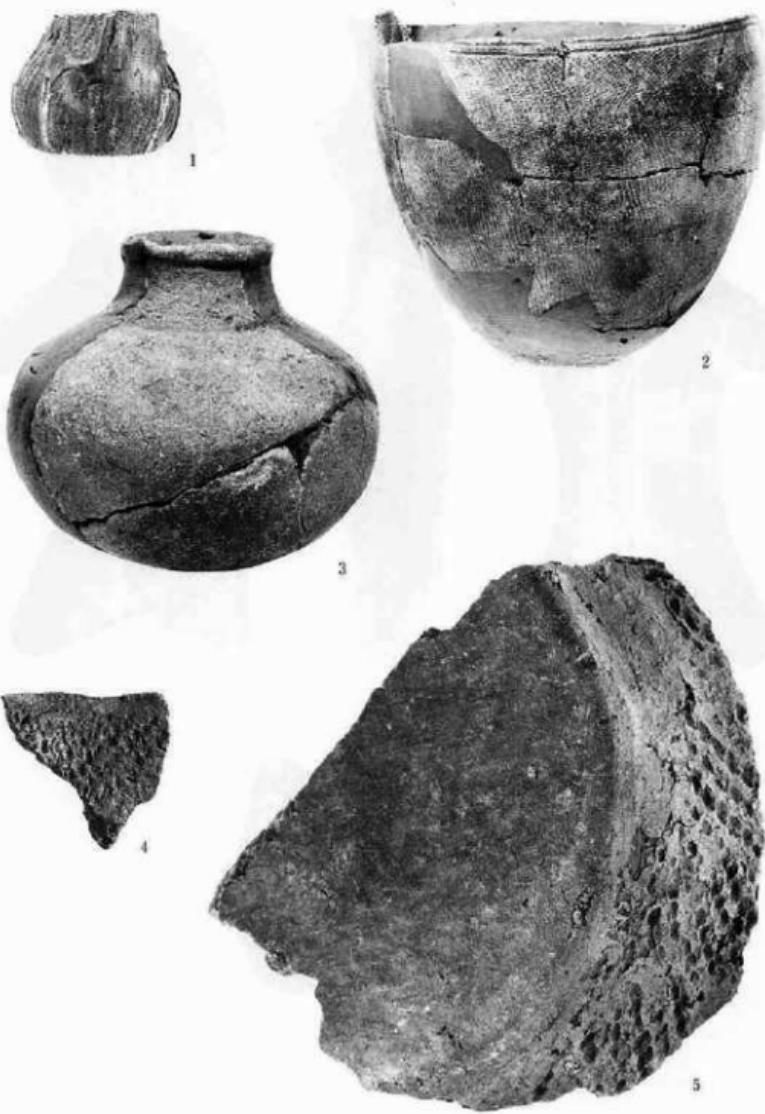
写真図版44 SIV竪穴住居跡1号 出土遺物 土器(2)



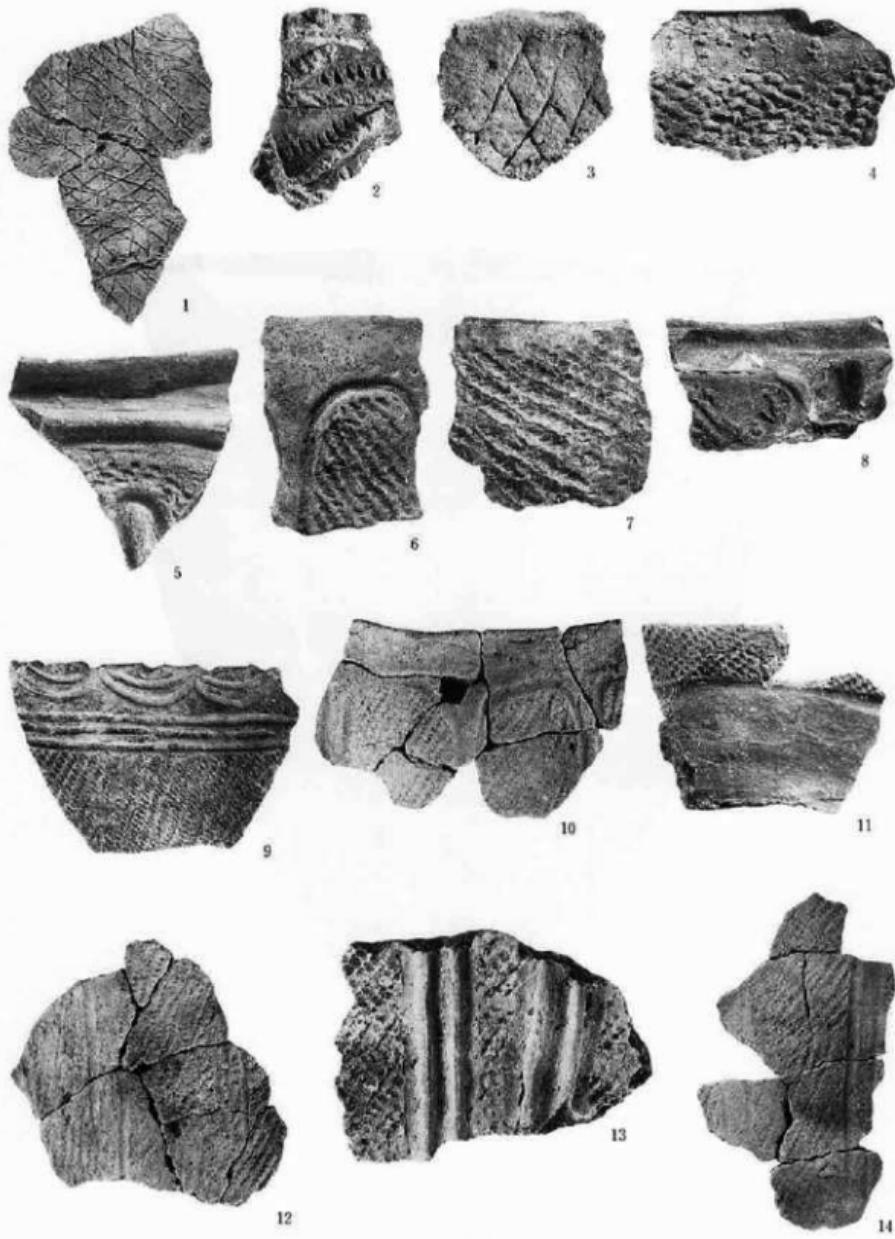
1

2

写真図版45 S IV堅穴住居跡1号 出土造物 土製品



写真図版48 JIV 竪穴状造構1号出土遺物 土器



写真図版47 UIV型穴状造構1号出土遺物 土器



1

写真図版48 M II埋設土器



1



2



4

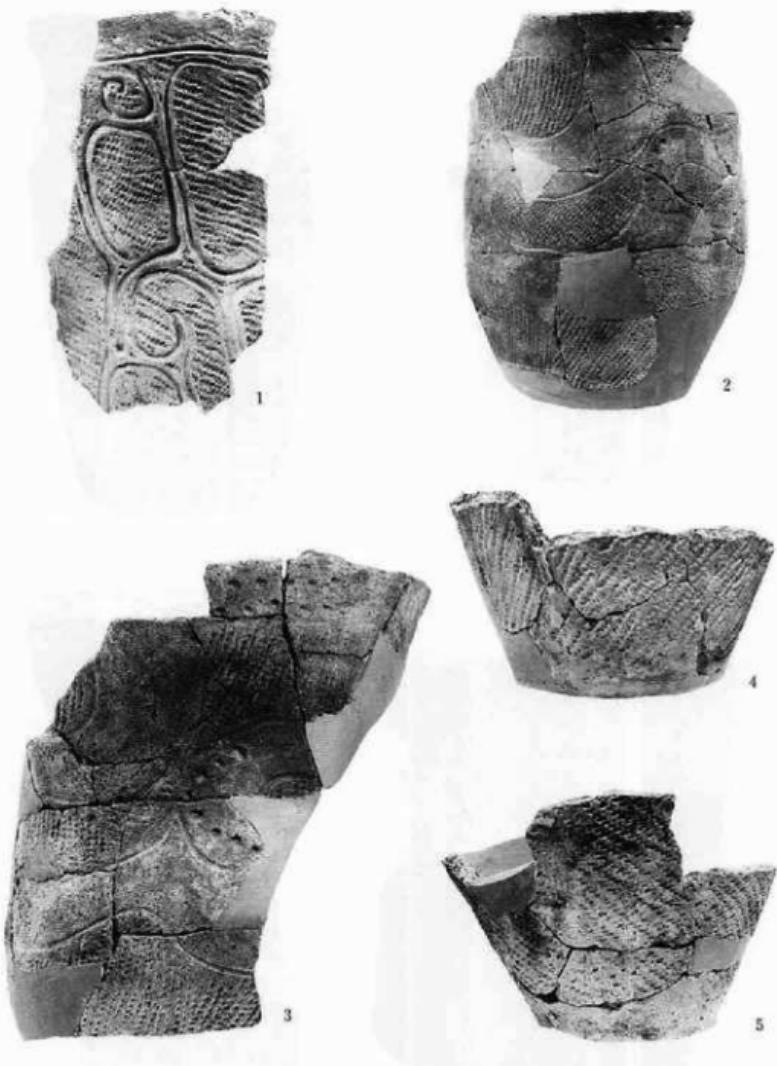


3



5

写真図版49 造構外 出土遺物 土器(1)



写真図版50 造構外 出土遺物 土器(2)



1



2



3

写真図版51 造構外遺物 土器(3)



1



2

写真図版52 造構外 出土遺物 土器(4)

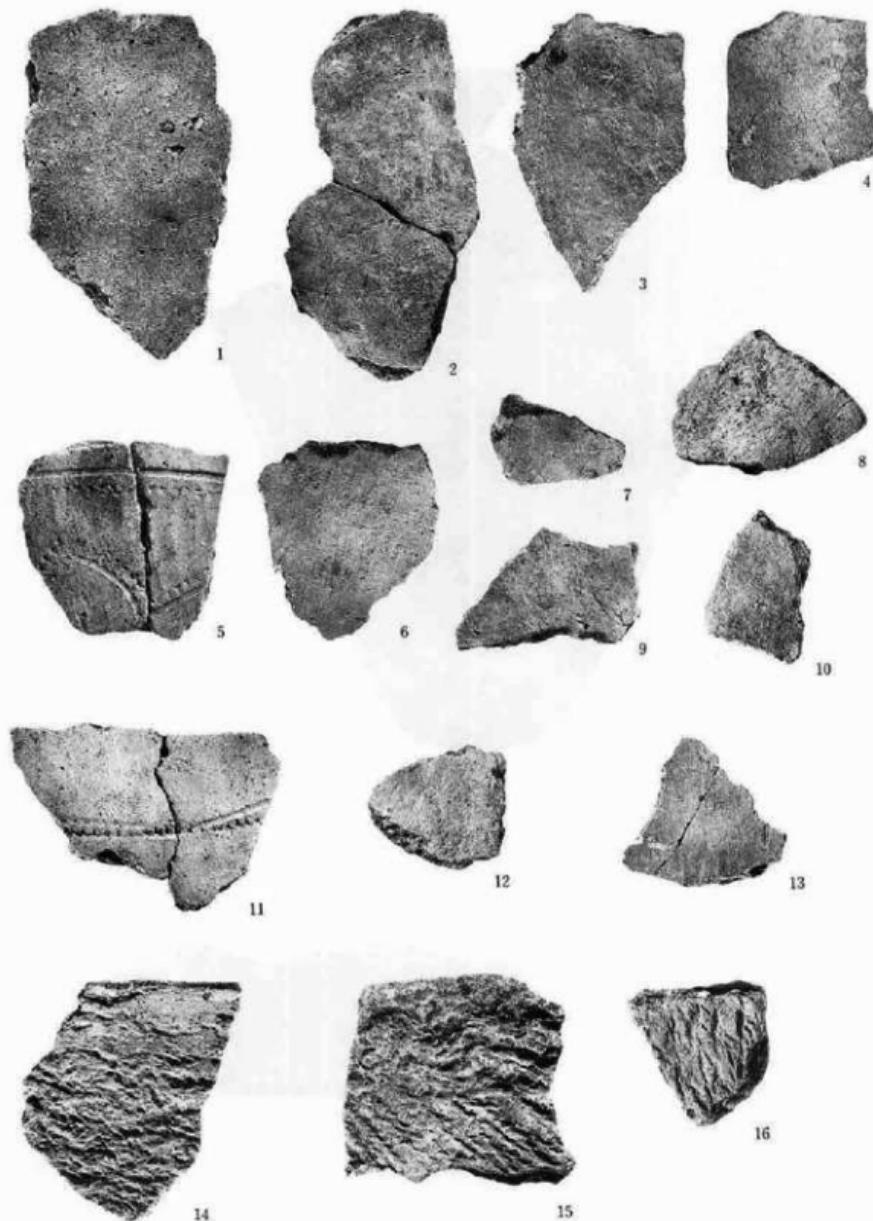


1

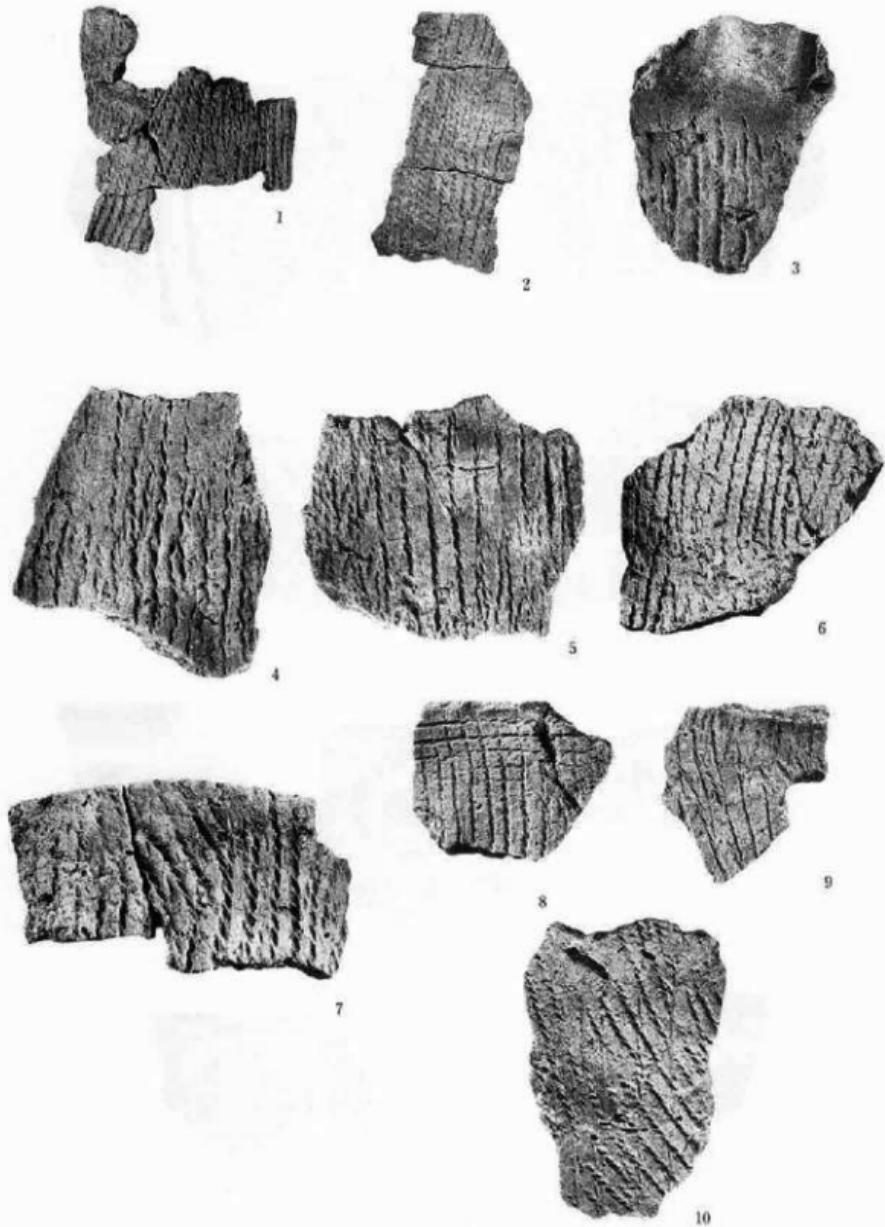


2

写真図版53 造構外 出土遺物 土器(5)



写真図版54 造構外 出土遺物 土器(8)



写真図版55 造構外 出土遺物 土器(7)



1



2



3



4



5



6



7

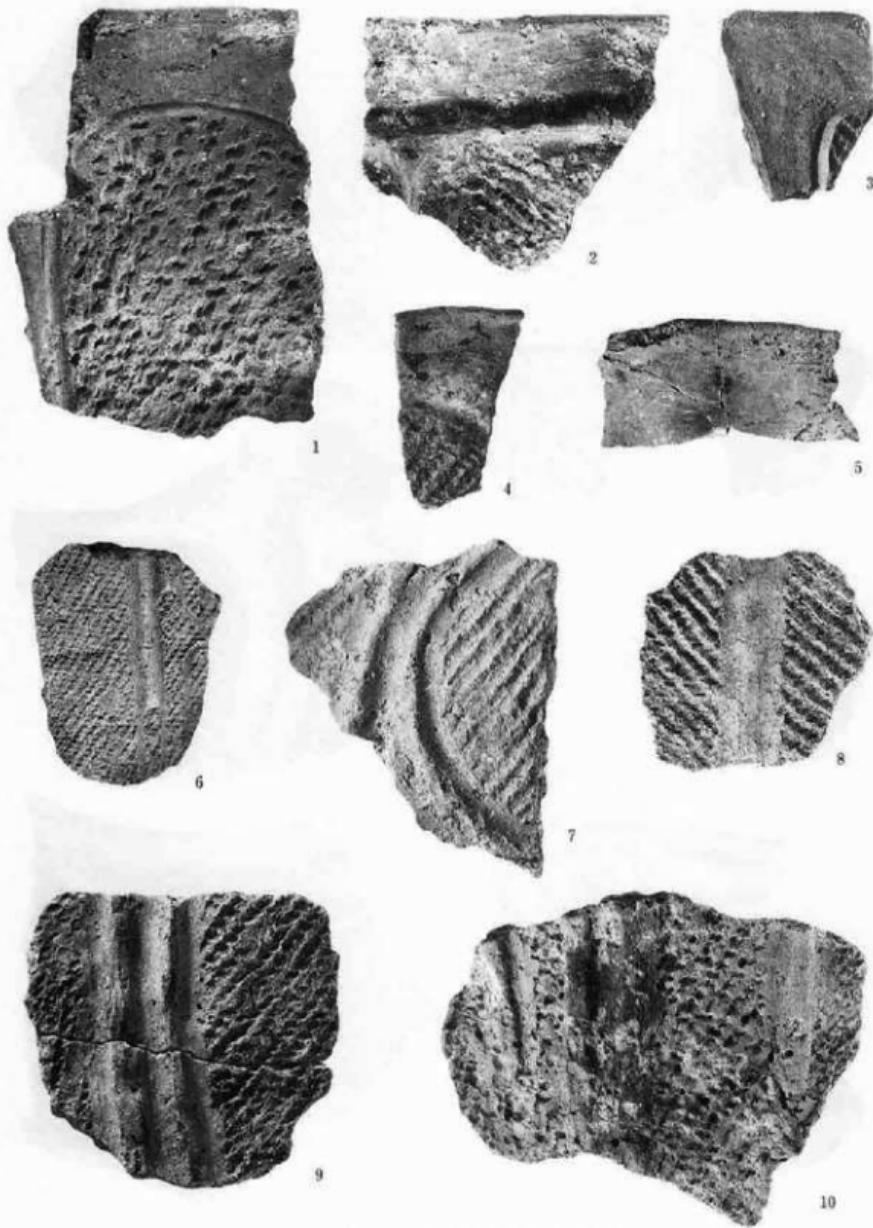


8

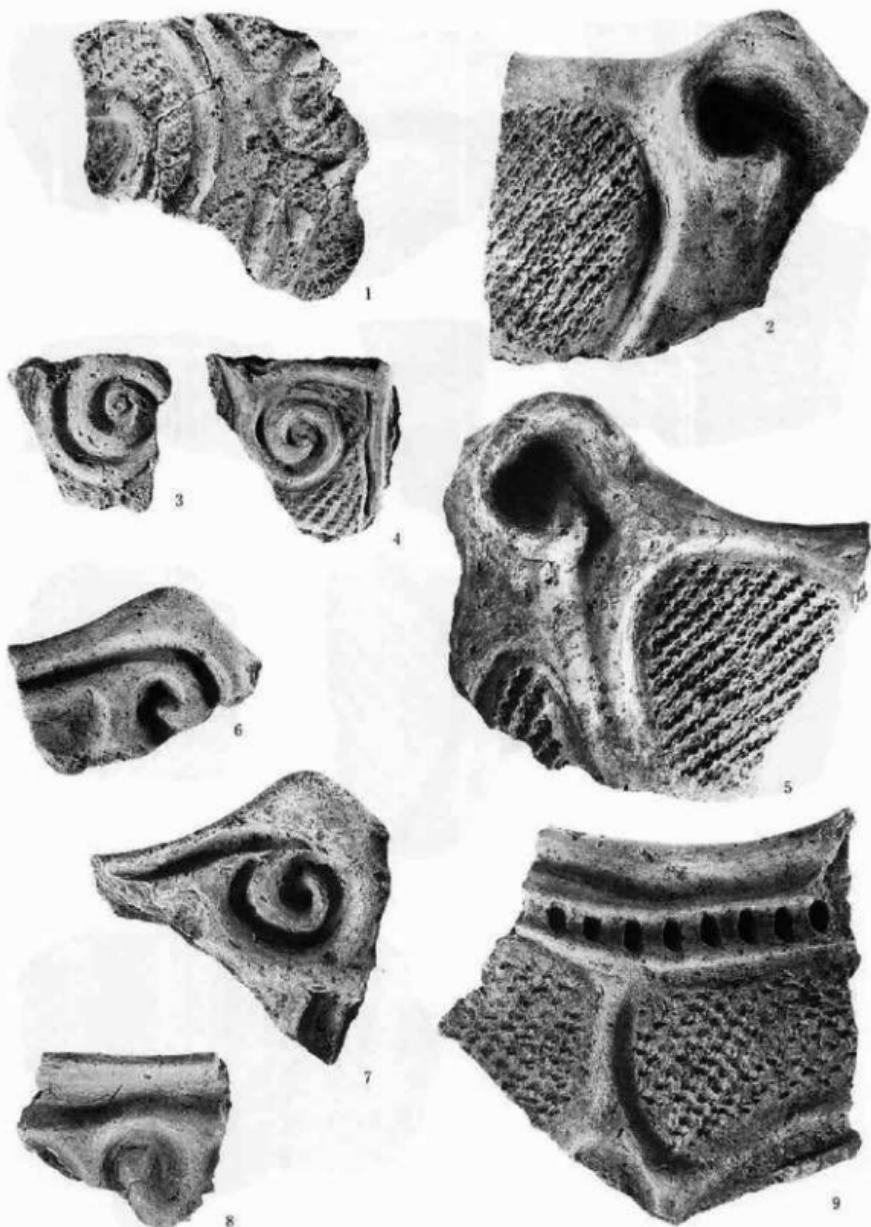


9

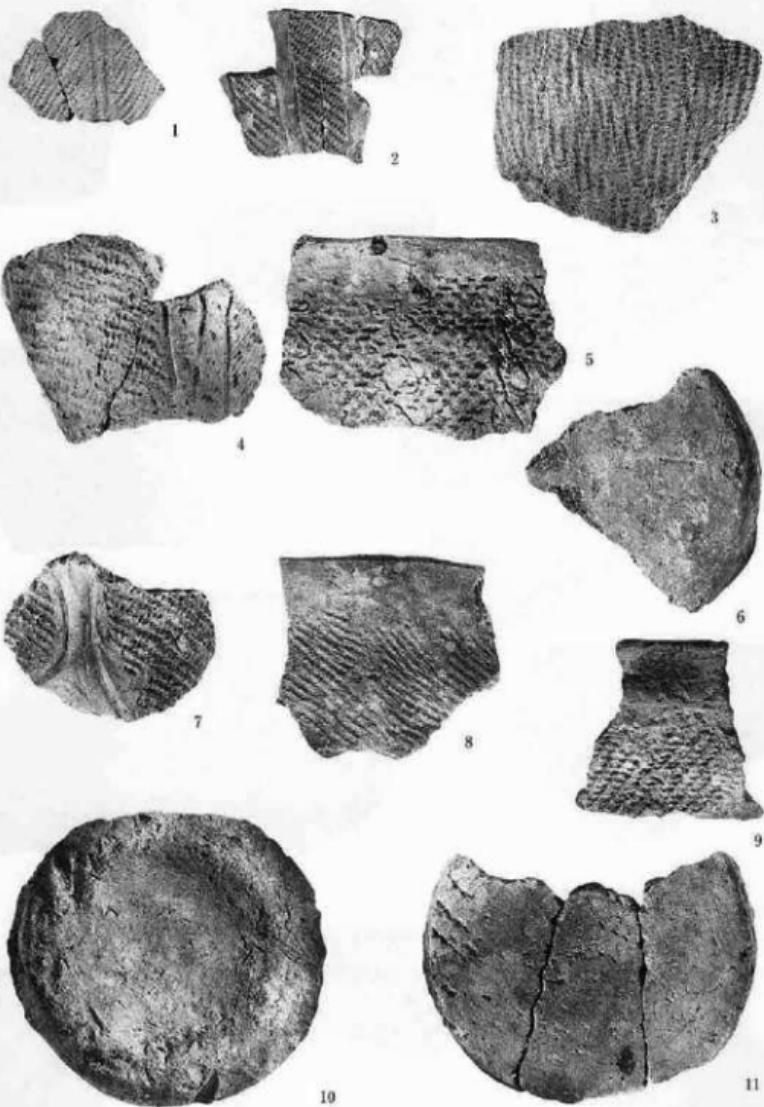
写真図版56 造構外 出土遺物 土器(8)



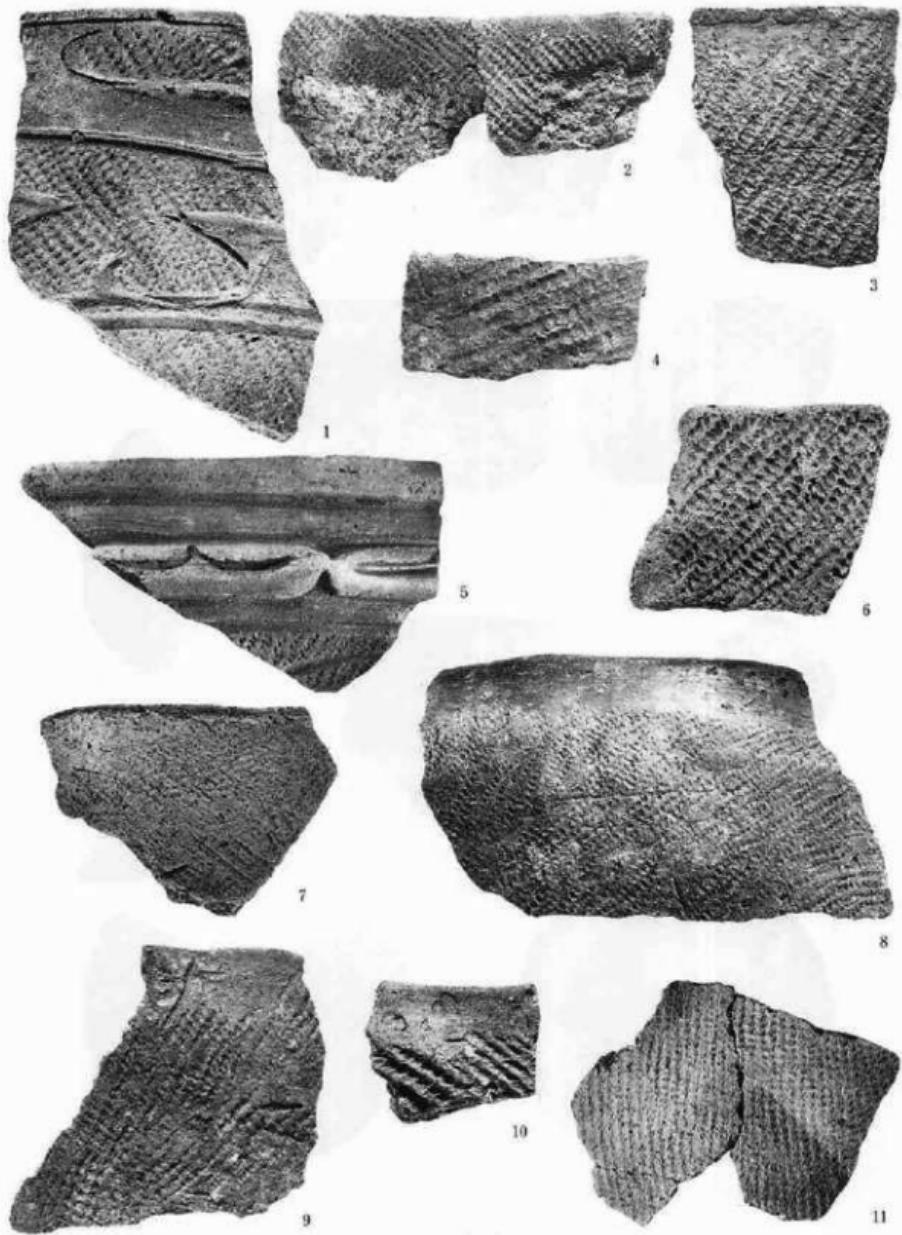
写真図版57 遺構外 出土遺物 土器(9)



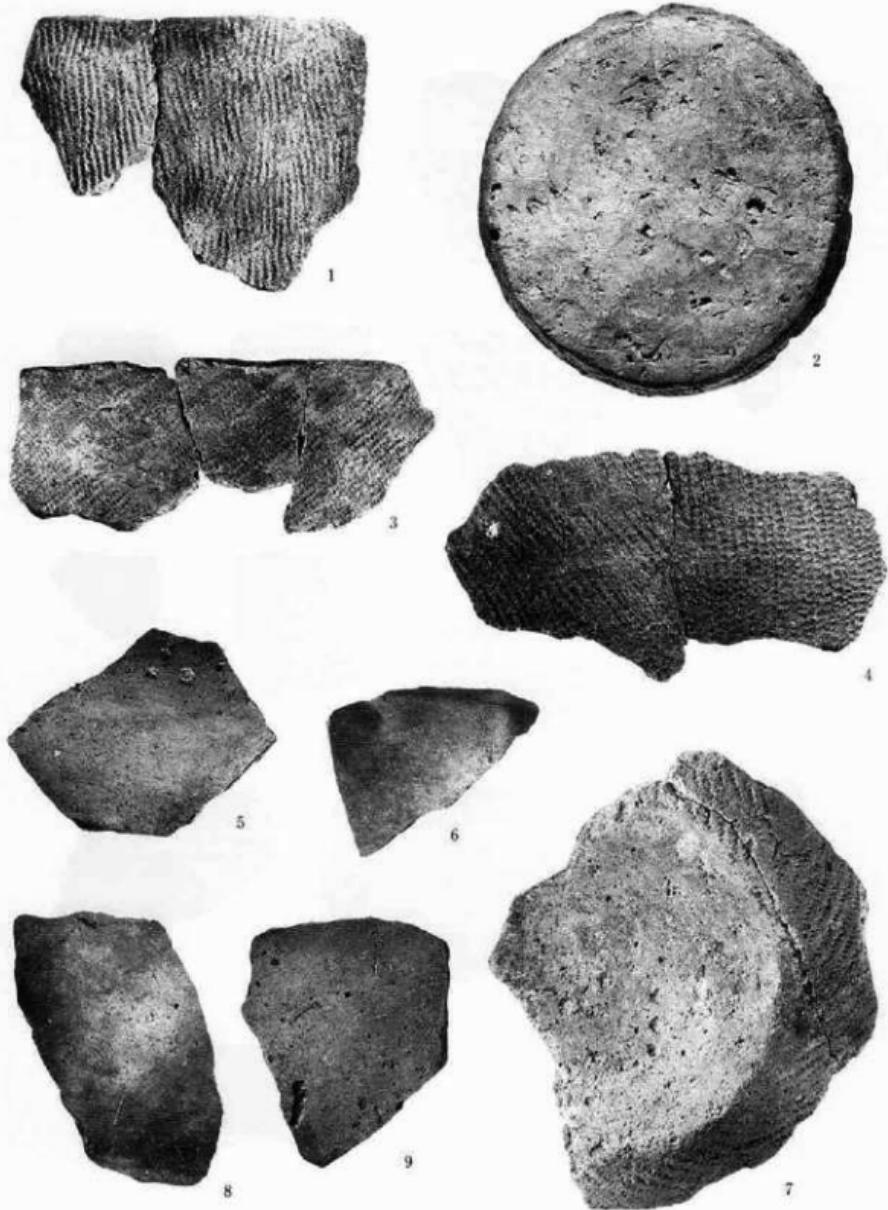
写真図版58 造構外 出土遺物 土器(10)



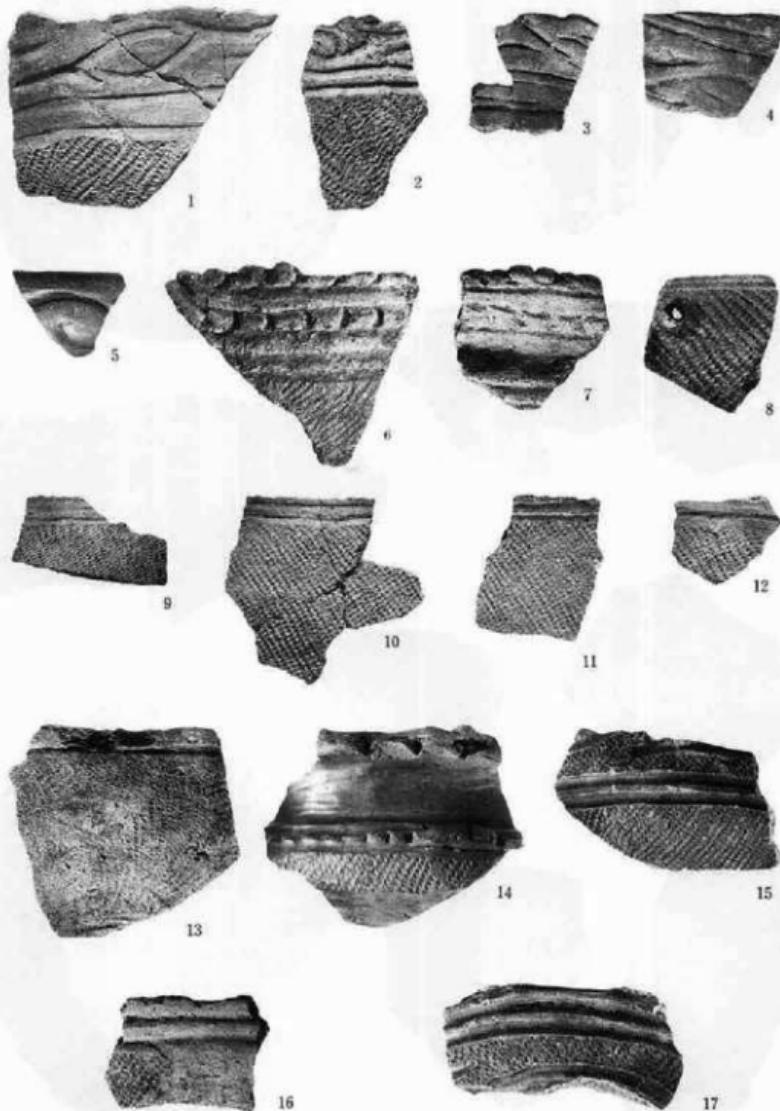
写真図版59 造構外 出土遺物 土器(11)



写真図版60 造構外 出土遺物 土器(12)



写真図版61 造構外 出土遺物 土器(13)



写真図版62 造構外 出土遺物 土器(14)



写真図版63 造構外 出土遺物 土器(15)



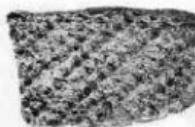
1



2



3



4



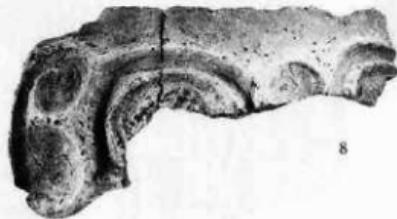
5



6



7

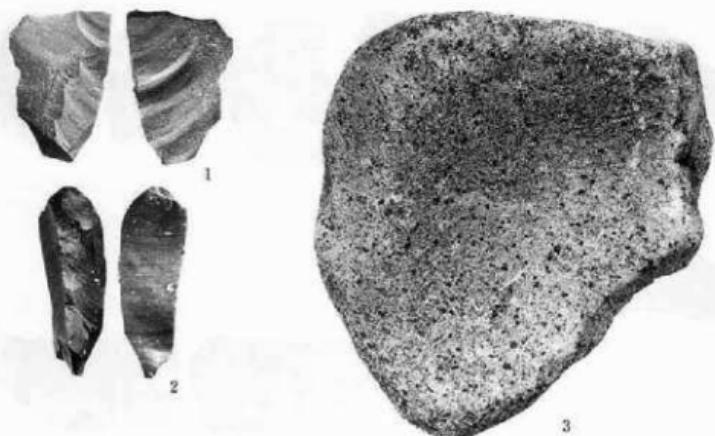


8

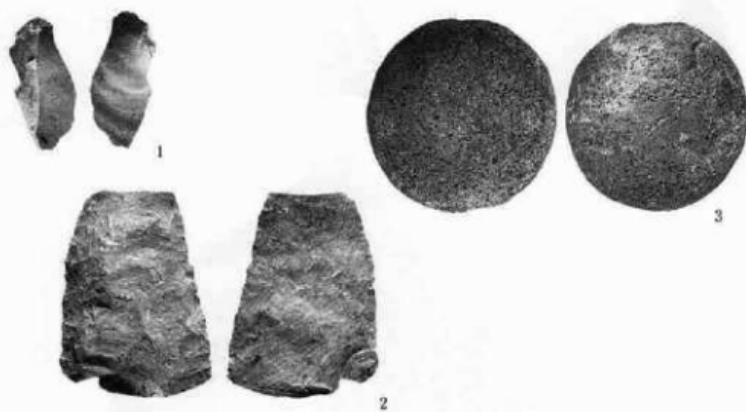


9

写真図版64 造構外 出土遺物 土器(16)

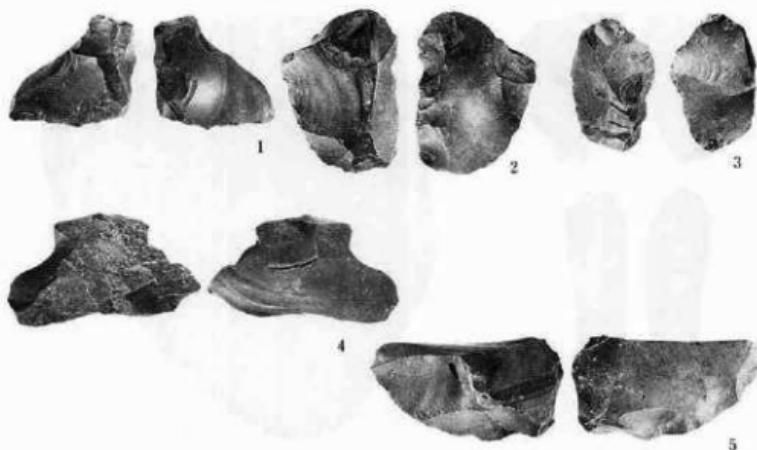


J II 壁穴住居跡1号



J III 壁穴住居跡1号

写真図版65 J II, J III 壁穴住居跡1号 出土遺物 石器

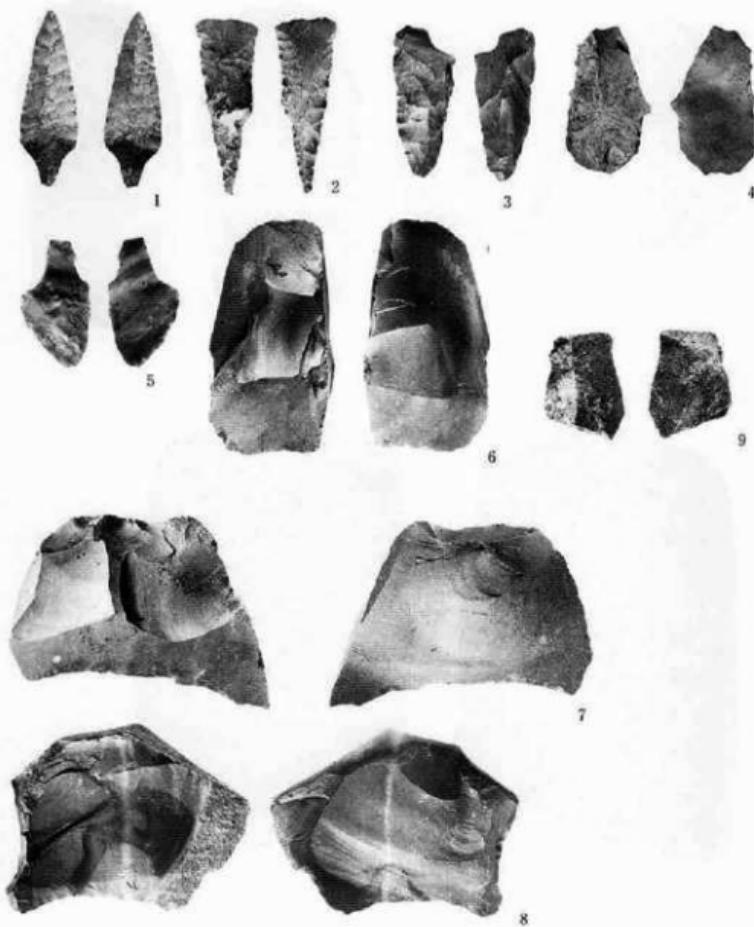


J IV 竖穴状造構1号



K III 竖穴住居跡1号

写真図版66 J IV 竖穴状造構1号, K III 竖穴住居跡1号 出土遺物 石器



写真図版87 KIV竪穴住居跡1号 出土造物 石器(1)



10

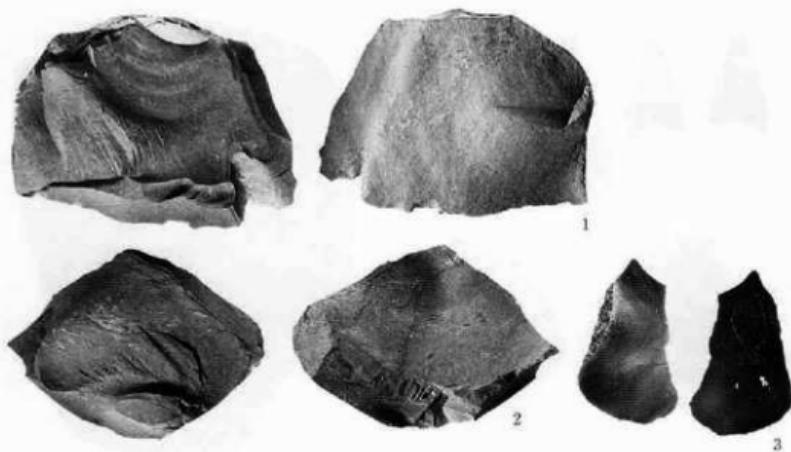


11

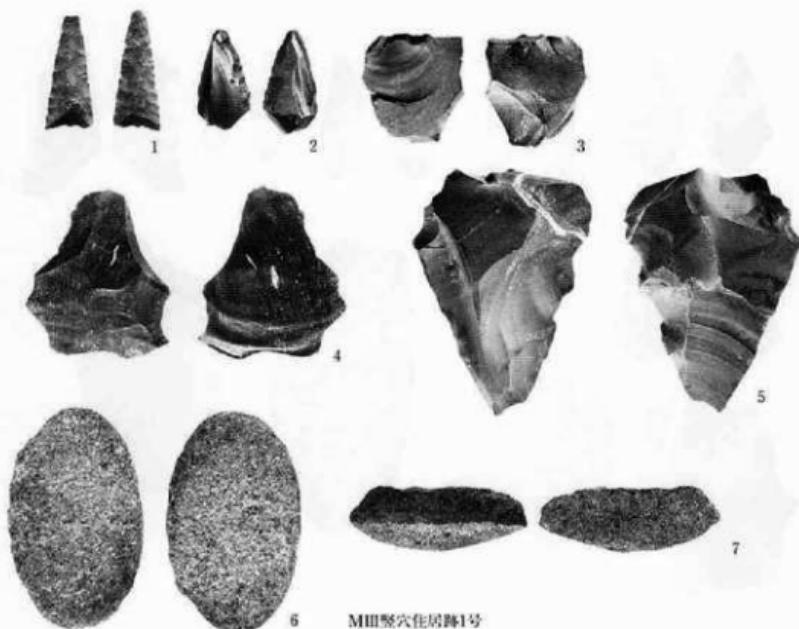


12

写真図版68 KIV竪穴住居跡1号 出土遺物 石器(2)



LIV.1号



MIII.1号

写真図版69 LIV.MIII.1号 出土遺物 石器

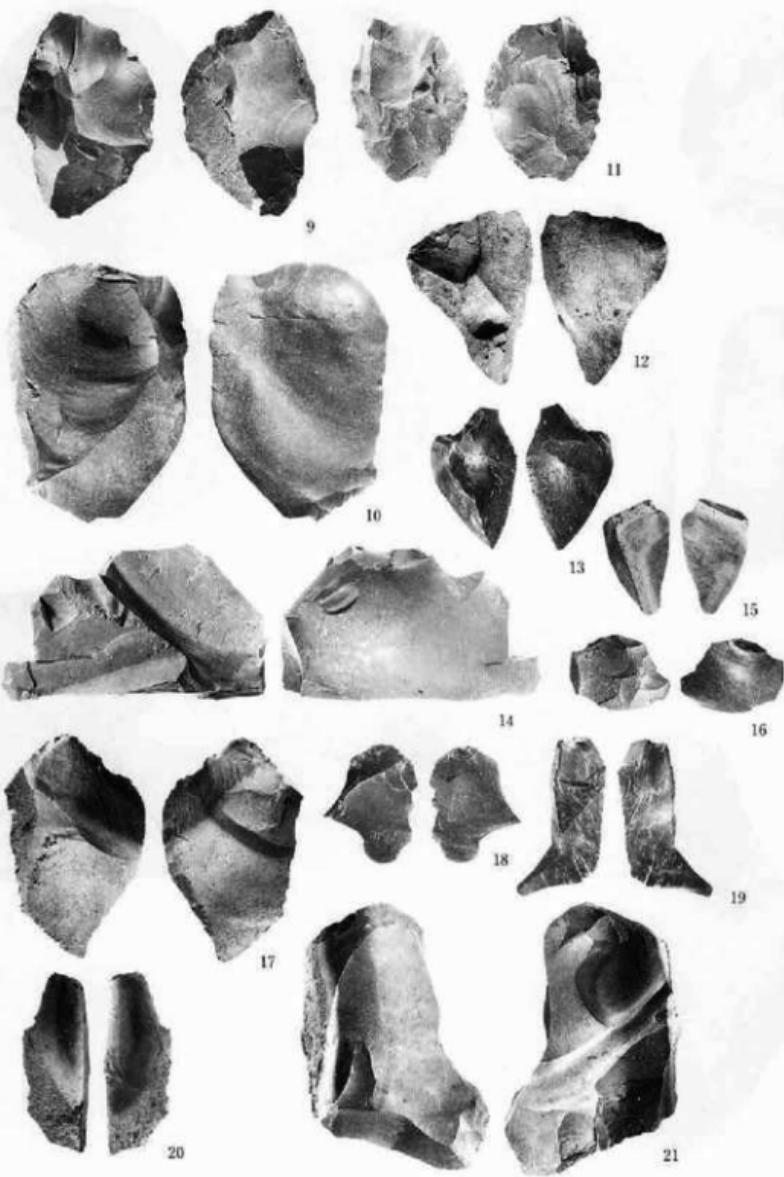


M III 竪穴住居跡2号



N III 竪穴住居跡1号(1)

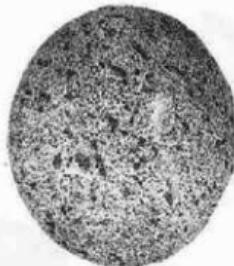
写真図版70 M III 竪穴住居跡2号, N III 竪穴住居跡1号 出土遺物 石器(1)



写真図版71 NIII竪穴住居跡1号 出土遺物 石器(2)



21



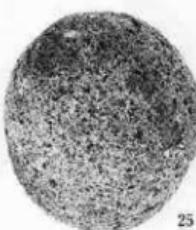
22



23



24



25

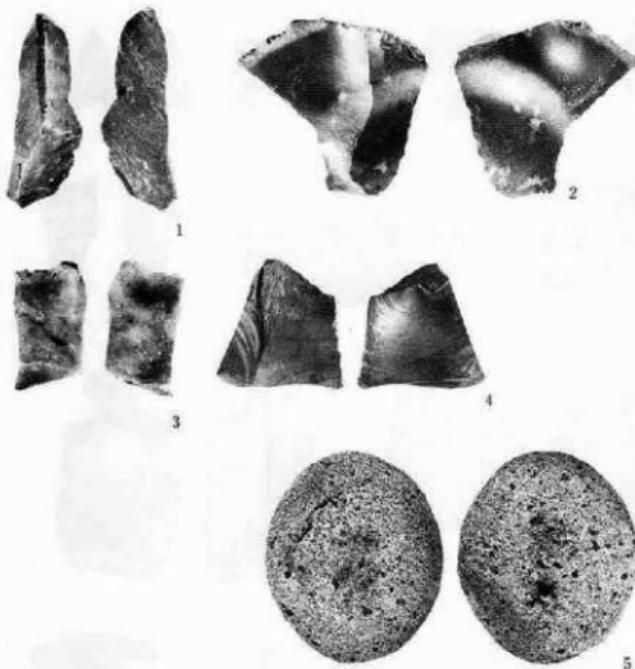


26

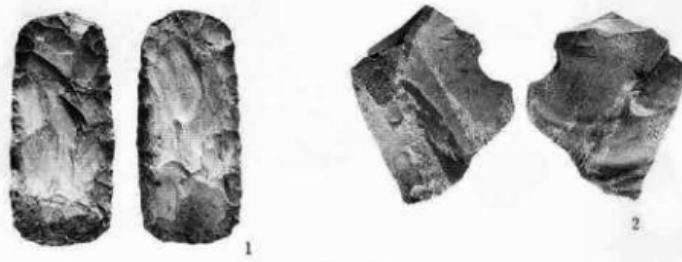


27

写真図版72 N III 穴穴住居跡1号 出土遺物 石器(3)

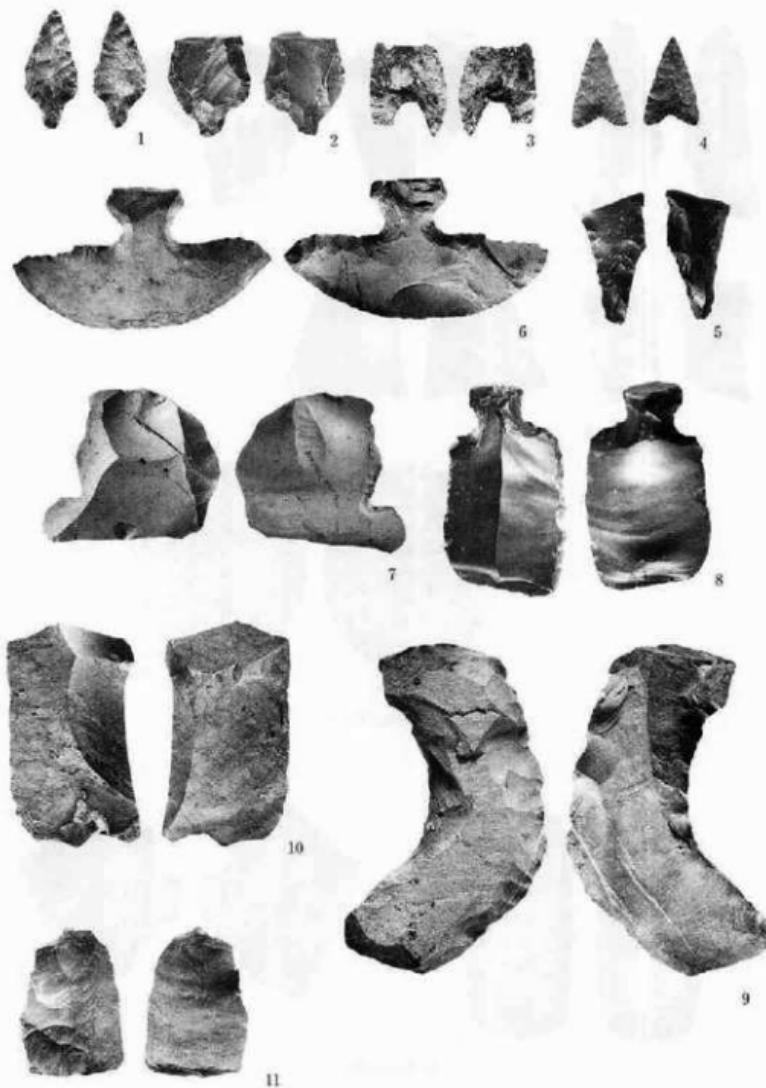


P II 竪穴住居跡1号

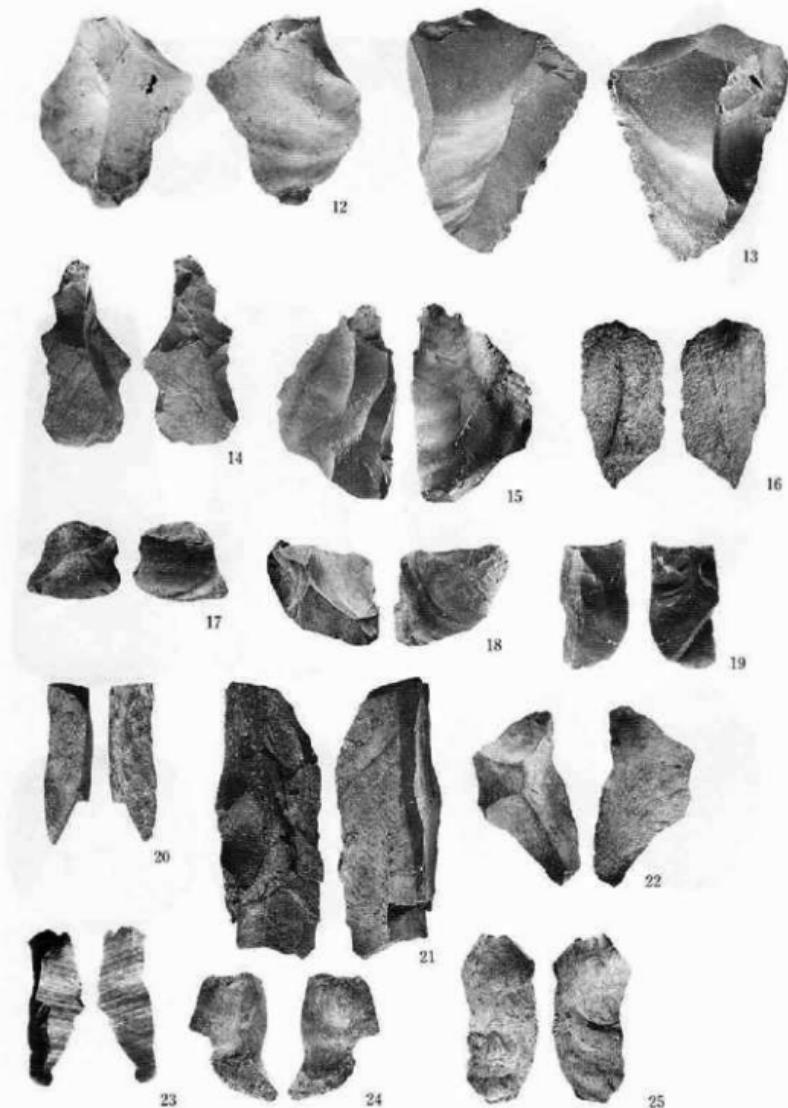


P III 竪穴住居跡1号

写真図版73 P II, P III 竪穴住居跡1号 出土遺物 石器



写真図版74 QIV 竪穴住居跡1号 出土遺物 石器(1)



写真図版75 QIV竪穴住居跡1号 出土遺物 石器(2)



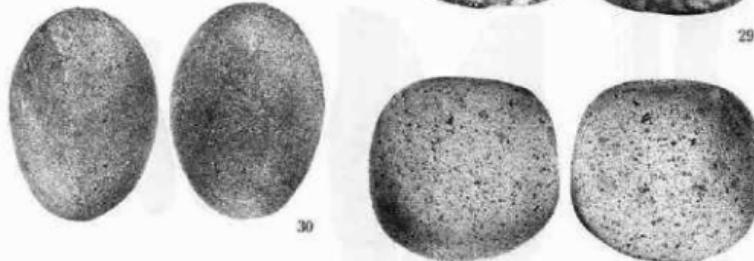
27

26



28

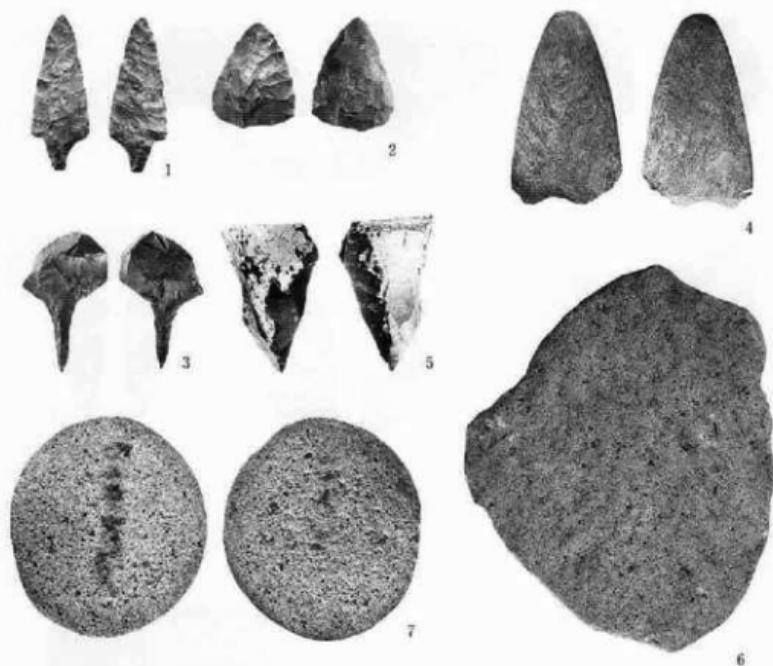
29



30

31

写真図版76 QIV竪穴住居跡1号 出土遺物 石器(3)

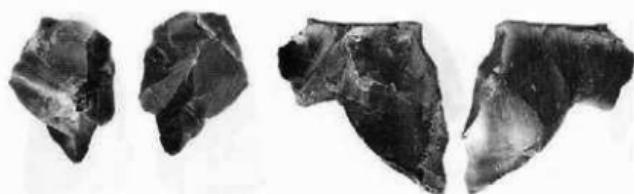


R II 壁穴住居跡1号



R III 壁穴住居跡1号(1)

写真図版77 R II, R III 壁穴住居跡1号 出土遺物 石器



R III 垂穴住居跡1号(2)



1

2

3

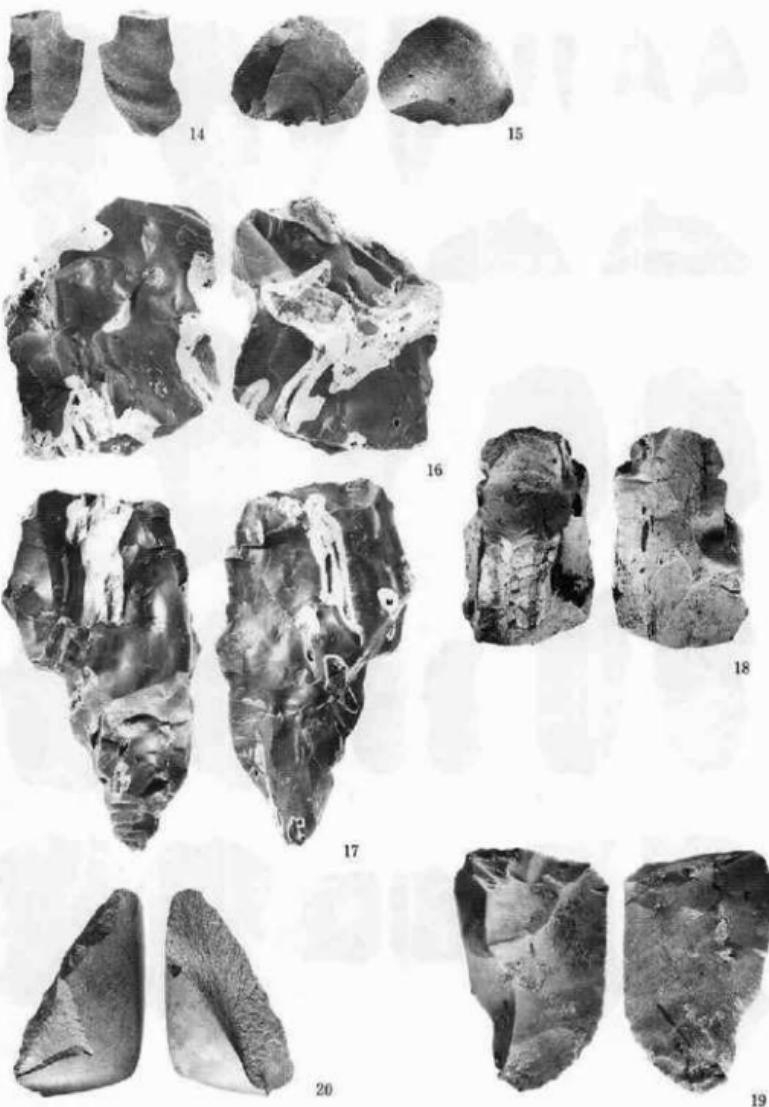


S IV 垂穴住居跡1号

写真図版78 R III. S IV 垂穴住居跡1号 出土遺物 石器



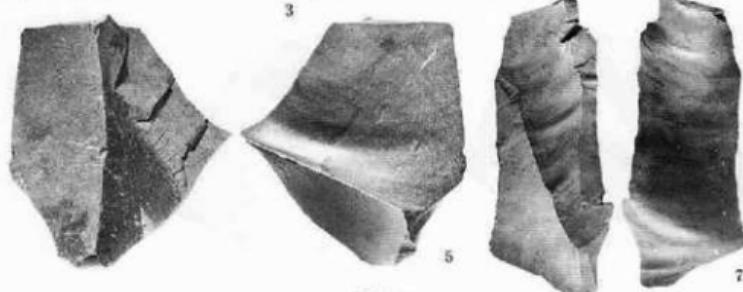
写真図版79 UIV竖穴状造構1号 出土遺物 石器(1)



写真図版80 UIV堅穴状遺構1号 出土遺物 石器(2)

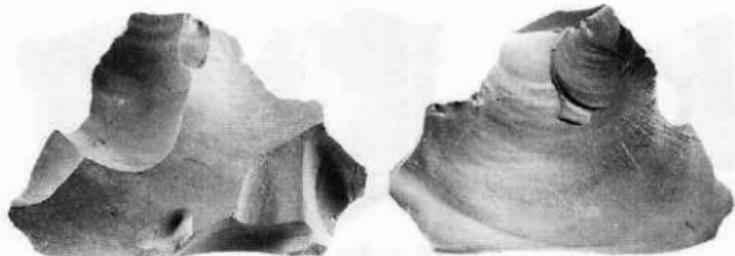


VIV堅穴状造構1号

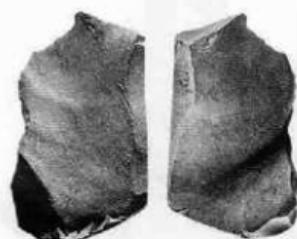


造構外(1)

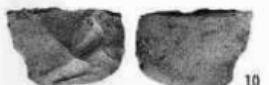
写真図版81 VIV堅穴状造構1号・造構外出土遺物 石器(1)



8



9



10



11



13



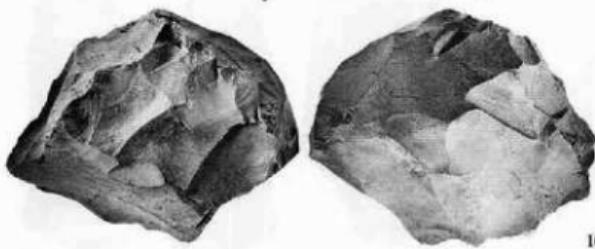
12



14



15



16

写真図版82 造構外 出土遺物 石器(2)

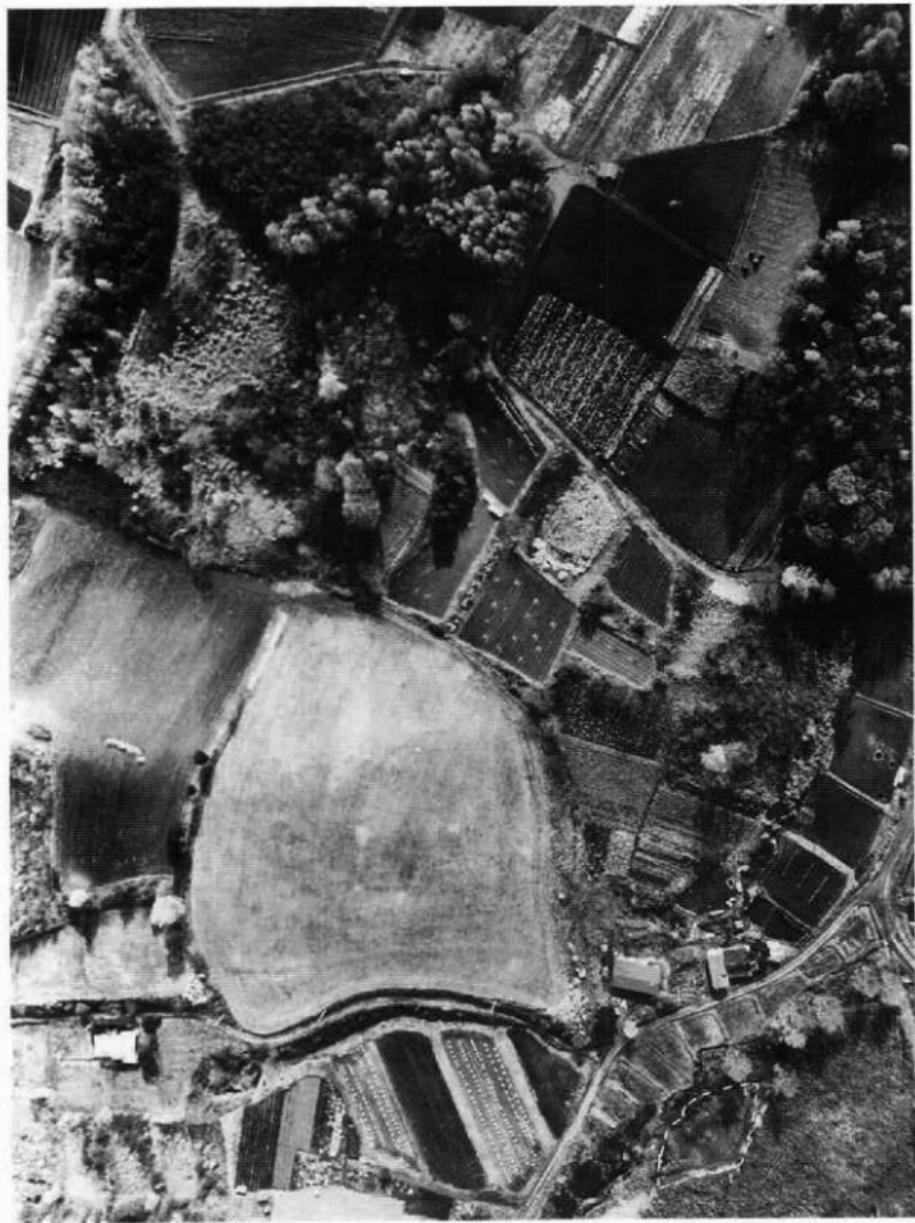


17

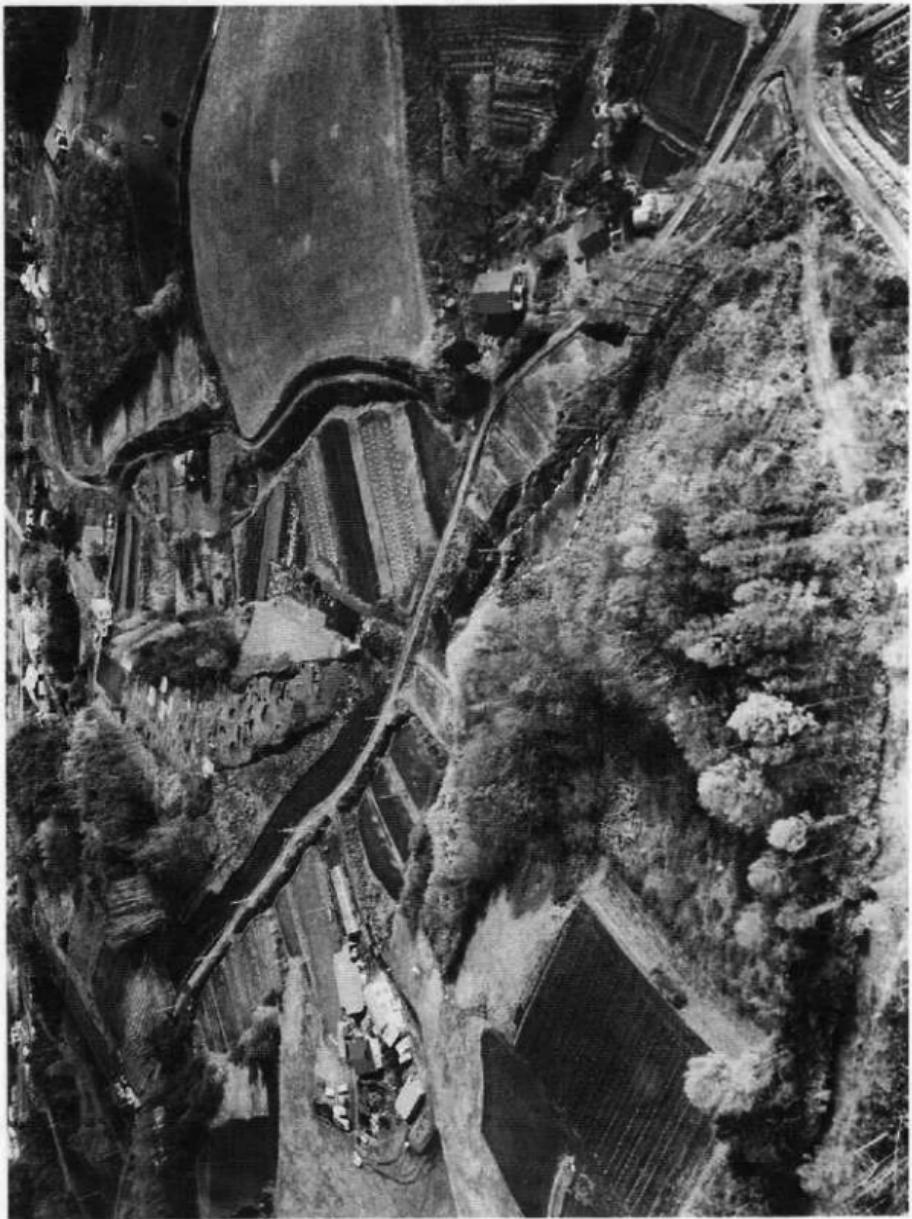


18

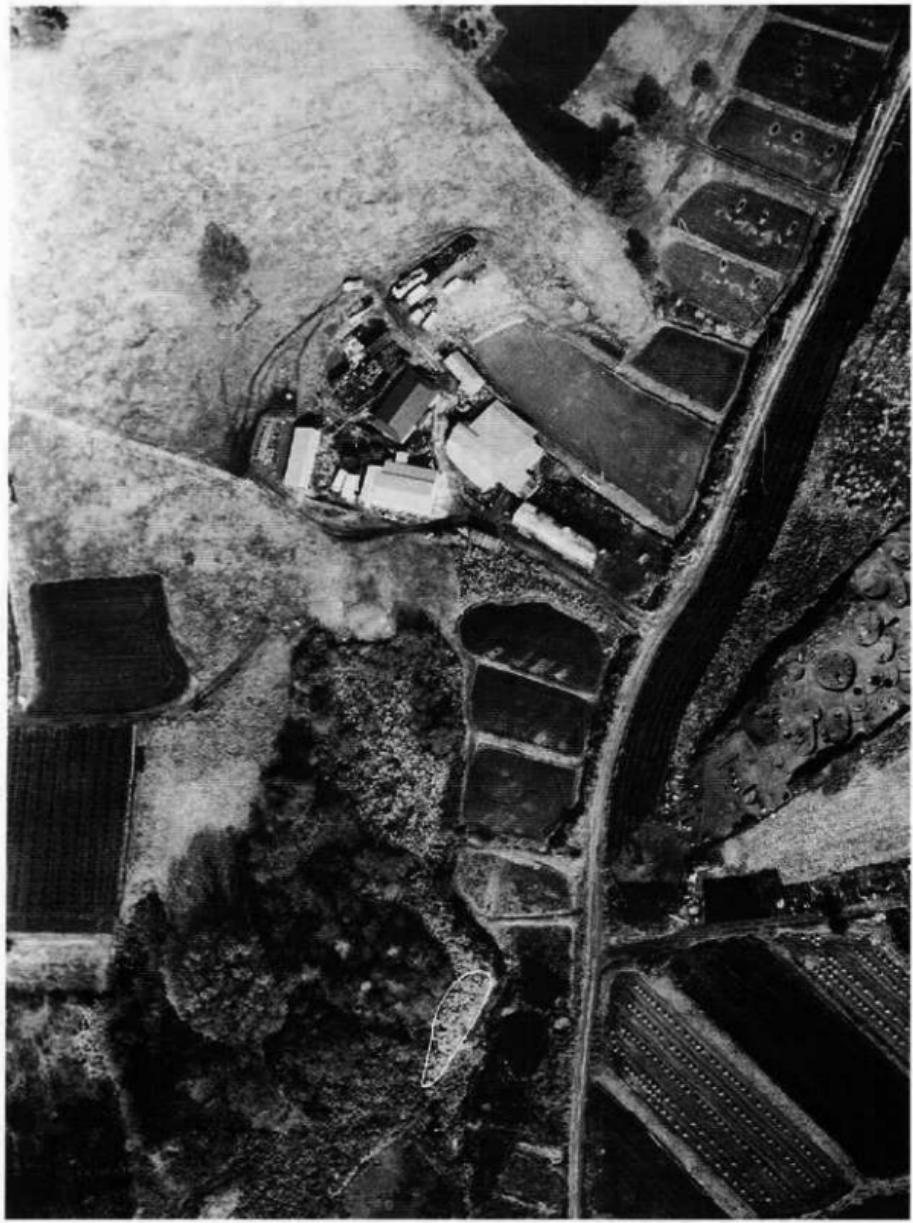
写真図版83 造構外 出土遺物 石器(3)



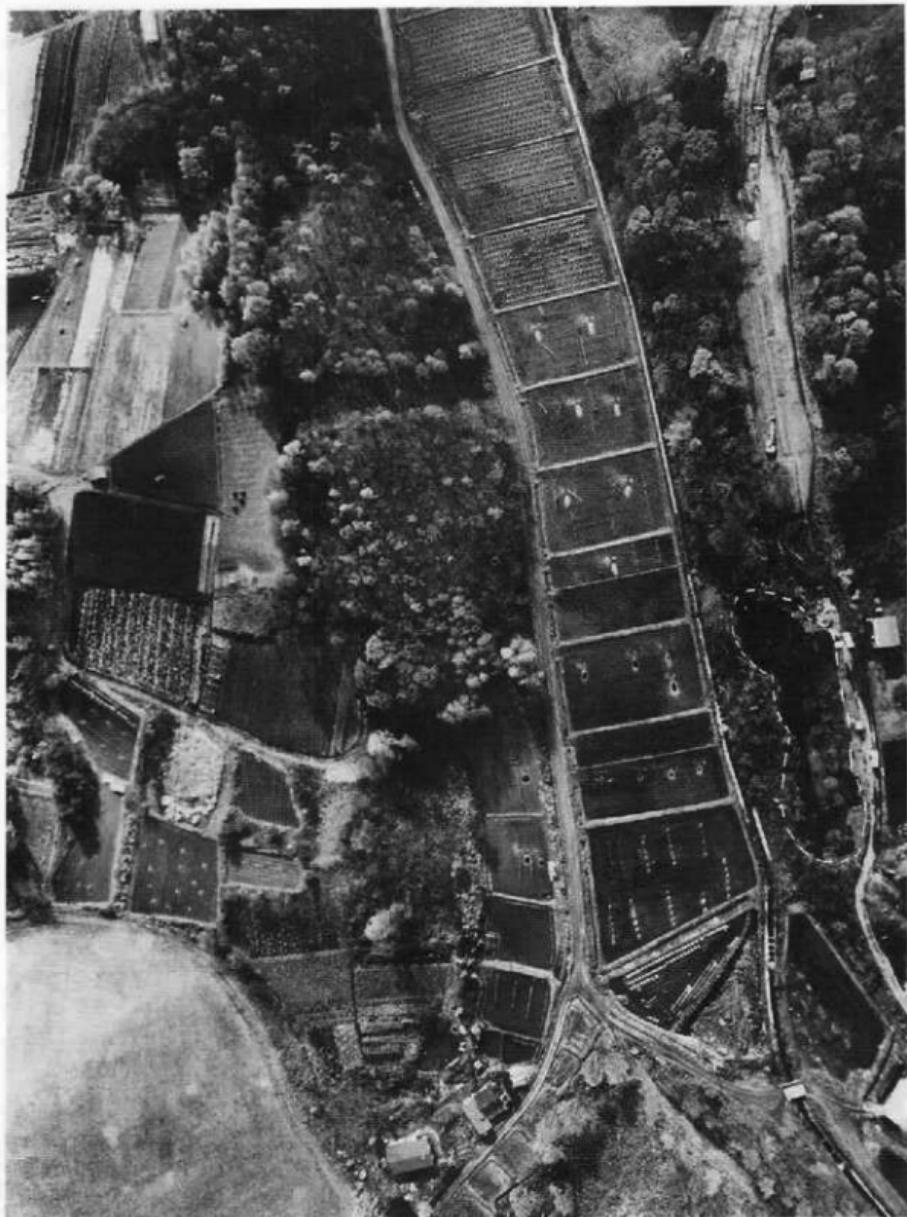
写真図版84 黒内VIII遺跡周辺地形(南東方向より空撮)



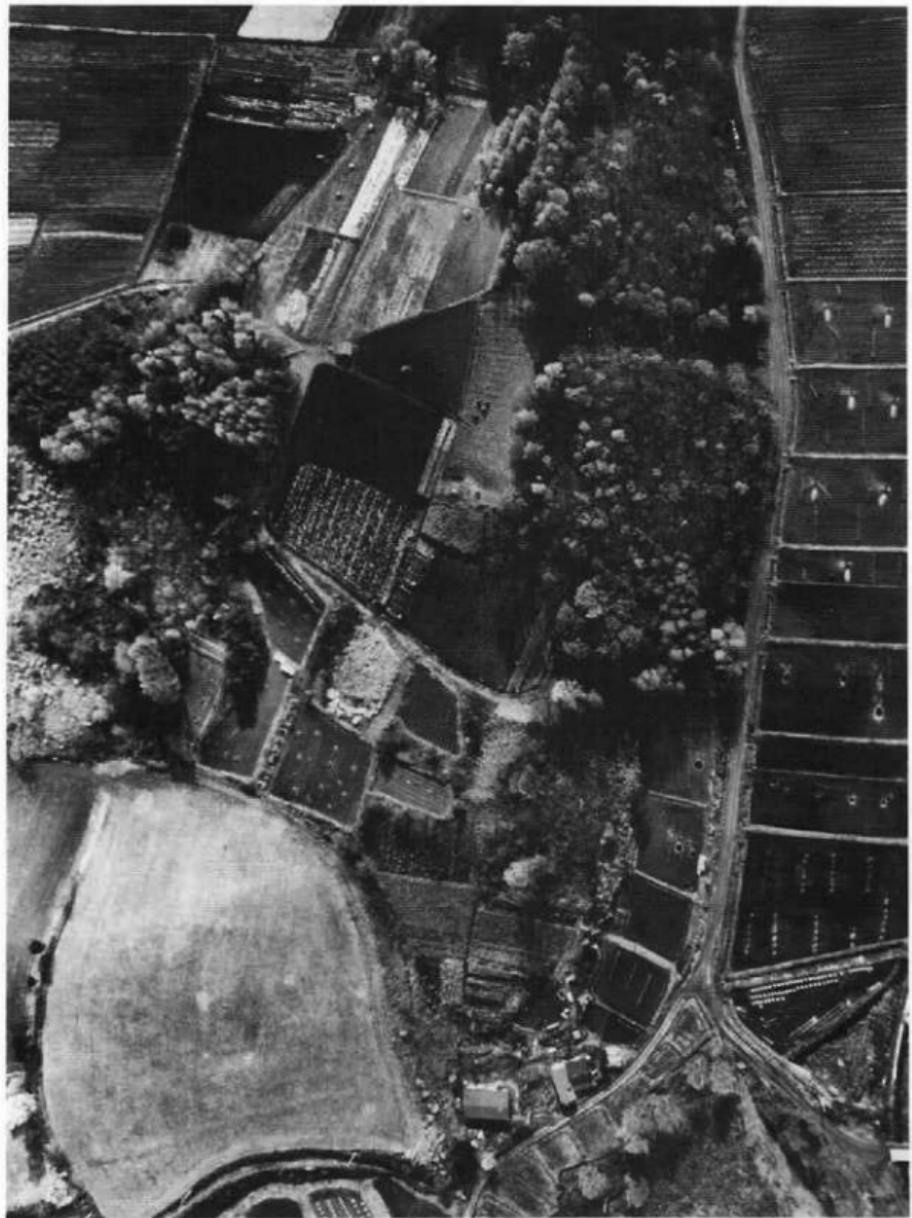
写真図版85 倍田遺跡を含む黒内VIII遺跡周辺の地形(北西方向より空撮)



写真図版86 黒内 VIII遺跡周辺地形(倍田遺跡方向より空撮)



写真図版87 黒内 III遺跡周辺の地形(南東方向より空撮)



写真図版88 木谷内川周辺の地形(南東方向より)



写真図版89 黒内 VIII遺跡を含む木谷内川流域の地形(南西方向より)

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所長 高橋重実

副所長 高橋敬明

[管理課]

管理課長 澤田寛理

主事 佐藤理恵

" 久保田幸恵

嘱託 吉田十他

" 吉野崎他

" 次夫

[調査課]

調査課長 鈴木恵治

課長補佐 三浦謙一

" 高橋與右衛門

主任文化財専門調査員 菊地強一

" 渡辺洋一

" 高橋正之

" 工藤利幸

" 中川重紀

" 佐々木清文

" 高橋義竜

文化財専門調査員 斎藤實雄

" 千葉孝均

" 村貞行

" 鈴木格充

" 伊東雄雄

" 吉田明浩

" 斎藤邦敏

" 神高敏一

" 高橋一眞

" 小原良宗

" 酒井勉

" 錄田透

" 小山内

文化財専門調査員 松本建

" 平坂克

" 花政

" 佐々木昭

" 金瀬勝

" 濱雅

" 阿星直

" 中村精

" 織柳田

" 千葉浩

" 高橋英

" 潤佐

" 喜藤

" 垣修

" 田雅

" 沢博

" 佐のり子

" 佐平

" 坂昭太郎

" 座澤祐子

" 田八重

" 沢平

" 坂祐子

[資料課]

資料課長 村松義夫

主任文化財専門調査員 村駒嶺高

---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第208集

## 黒内VII・黒内XII遺跡発掘調査報告書

岩手地区広域農道整備関連遺跡発掘調査

印刷 平成6年3月25日

発行 平成6年3月30日

発行 御岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 岩手県盛岡市下巣岡 11-185

TEL (0196) 38-9001

印刷 川口印刷工業株式会社

〒020 岩手県盛岡市本町通 2-13-8

TEL (0196) 23-3351